

*The
Long
Goodbye*

長いお別れ

レイモンド・チャンドラー
山形浩生訳

長いお別れ

The Long Goodbye

レイモンド・チャンドラー

Raymond Chandler

山形浩生訳¹

翻訳期間：2025年5月5日-5月31日

¹ hiyori13@alum.mit.edu 原著著作権は期限切れ。翻訳は、[Creative Commons 表示 - 継承 4.0 国際, CC BY-SA 4.0](#) で公開。出所を明らかにすれば商業利用を含め自由に使用可

目次

[1].....	5
[2].....	10
[3].....	17
[4].....	22
[5].....	25
[6].....	34
[7].....	40
[8].....	46
[9].....	52
[10].....	59
[11].....	63
[12].....	72
[13].....	75
[14].....	86
[15].....	93
[16].....	99
[17].....	106
[18].....	110
[19].....	113
[20].....	121
[21].....	127
[22].....	133
[23].....	142
[24].....	148
[25].....	157
[26].....	162
[27].....	166
[28].....	169
[29].....	173
[30].....	179
[31].....	185
[32].....	190
[33].....	199
[34].....	203
[35].....	209
[36].....	213
[37].....	218
[38].....	223
[39].....	229
[40].....	236
[41].....	242
[42].....	247
[43].....	262
[44].....	267
[45].....	275
[46].....	281
[47].....	284

[48].....	289
[49].....	299
[50].....	305
[51].....	308
[52].....	313
[53].....	317
訳者あとがき.....	322

[1]

初めて見かけたとき、テリー・レノックスは「ザ・ダンサーズ」のテラス外に停めたロールス・ロイス・シルバーレイスで泥酔していた。その車を出してきた駐車場の係員は、まだドアを閉めずに押さえていたがそれは、テリー・レノックスの左足がまだ外にぶらぶらしていたからだ。まるでそれがあることを忘れてしまったかのように。顔は若々しかったが髪は真っ白だった。



目を見れば、完全にできあがっているのは明らかだったが、それ以外はどこにでもいる、ディナージャケット姿の優男に見えた。あまりに金を使いすぎたようだが、この場所はまさにそのためにある店で、他に何の目的もないのだ。

となりには女がいた。髪は美しい濃い色合いの赤で、唇には薄ら笑いを浮かべ、肩にかけた青いミンクの前では、そのロールス・ロイスもほとんど普通の自動車にしか見えなくなるほどだった。完全に、ではない。何をもってしてもそれは無理だ。

駐車係は、ありがちなタフぶったヤツで、レストランの名前が赤で胸に刺繍された白い上着を着ていた。いい加減うんざりしてきたようで、トゲのある声でこう言った。

「ねえ旦那さん、ドアをこう、閉めたいんで脚を車に入れていただけると助かるんですが。それともドアをもっと開けてさしあげましょうか？ そしたら転がり落ちていただけますが？²」

女はそいつをキツとにらみ、その視線が背中から最低でも十センチ突き出しそうな感じだったが、そいつはびびるほどには気に留めなかった³。ダンサーズで雇うのは、ゴルフ用のお小遣いが品格の足しになると思ってる連中をがっかりさせるような連中なのだ。

車高の低い外国製オープンカーが駐車場に滑り込んできて、男が下りてダッシュボードのシガーライターで長いタバコに火をつけた。プルオーバーのチェックのシャツと、黄色いスラックス、乗馬ブーツをはいている。香りの雲を後になびかせて歩み去り、ロールス・ロイスのほうなど見ようともしない。ダサいと思ったんだろう。テラスに上がる階段の下に来ると、立ち止まって片目にモノクルをはめた。

2 ここ既訳3つとも、開けたままにしておいて、いずれ男が落ちるという訳にしているけど、そうじゃない。係はドアを閉めかけていて、足が邪魔で完全には閉められない状態。係の言ってるのは、閉めかけの状態を全開にしましょうか、ということ。そうしたら、今すぐ男が転がり落ちるということ。

3 清水訳はここまちがい。清水訳は、純粋なまちがいよりも、意味的にはあってるがあちこち端折っているのが圧倒的に多く、いちいち説明するのが面倒なのでこの先あまり指摘しない。意味をとりちがえた部分は比較的少ない。

女は魅力をすてきなほど全開にした。「すっごいこと思いついちゃったの、ダーリン。あなたのところにささっとタクシーで行って、コンバーチブルを取ってきましょうよ。モンテシートまで湾岸を走らせるには絶好の夜じゃない？ あそこでプールサイドでダンスを開いてる人たちを知ってるの」

白髪の若者は礼儀正しく答えた。「まったくもって申し訳ないんだが、もうあれは持っていないんだ売り払うしかなくなっちゃったものでね」。その声と言ひ回しだけを聞いたら、そいつがオレンジジュースよりも強いドリンクを飲んだなどとは思ひもよらなかっただろう。

「売ったって、ダーリン。それどういうこと？」彼女はシートで身体をすべらせて若者から離れたがその声は身体よりはるかに遠くまで距離を置いたものになっていた。

「売らざるを得なかったってこと。食費のために」

「あらそう」彼女にはスプモーネの一さじを乗せても溶けそうにない。

駐車係にとって白髪の若者はいまやもろに手の届く存在となった——低所得者層ということだ。「おい兄ちゃん、車を片づけなきゃならないんだよ。別のときにまた会おうぜ——会えたらな⁴」

そしてドアを開くに任せた。酔っ払いはすぐにシートから滑り落ちて、アスファルトの上にズボンで尻もちをついた。そこで近寄って割り込んだ。酔っ払いに手を貸すのはいつだってまちがいなんだろう。相手が知り合いで気に入られていても、いきなり身構えてこっちを殴りかねない。両脇の下を抱え上げて立たせた。

「誠にありがとうございます」と若者は礼儀正しく言った。

女はハンドルの前まで身体をすべらせた。「へべれけだと、その人はホントにどうしようもなくイギリス人しちゃうのよ」という声はステンレスだった。「その人支えてくれてありがと」

「車の後部に乗せますから」とおれは言った。

「あらホントにごめんなさい。約束に遅れそうなの」彼女がクラッチをつなぐとロールスが滑り出し始めた。そしてクールな微笑を浮かべてこう言う。「その人、ただの迷子犬だから。あなたが家を見つけてあげてよ。トイレの訓練はできてるから——おおむねはね」

そしてロールスは進入路を抜けてサンセット大通りに出ると、右折して消えた。その後を目で追っているところへ駐車係が戻ってきた。おれは相変わらず男を支え起こしていたが、そいつはいまや完全に寝落ちしていた。

「やれやれ、ああくるかね」とおれは白服に言った。彼は嫌みっちらしく答えた。

「そりゃまあね。飲んだくれにあれはもったいない。あの体つきといいなんといい」

「この人、知ってる？」

4 この駐車場係の口調は面倒なところ。最初の「足をひっこめろ」は、一応高級クラブでお客を相手にしているので、まがりなりにも敬語。でもここで、相手が貧乏人だと思ったら態度/口調を変えねばならない。そしてマーロウも一応お客だし、そこそこチップをくれたので敬語だが、テリー・レノックスよりは身近な軽い口調。清水訳は1970年代で完全に役割語に頼り「あっし」「でさ」の八っあん語りがベース。2007年の村上訳がそれに近い「でさ/ですぜ」口調なのは驚き。田口訳はその不自然さはないが、マーロウ相手にすごいため口なのが違和感。

「あのご婦人はテリーって呼んでましたけどね。それ以外は牛のケツほども知りませんって。でもまだここにきて二週間なもので」

「いいからおれの車を頼むよ」と彼に駐車券を渡した。

そいつがおれのオールズモービルを回してくるまでに、支えている若者はまるで鉛の袋のような重さになっていた。白服に手伝ってもらって彼を助手席に押し込んだ。そのお客さんは片目をあけて礼を述べると、また眠りに落ちた。



「こんな礼儀正しい酔っ払いにはお目にかかったことがない」とおれは白服に言った。

「サイズも形も態度もいろいろですよねえ。でもみんなろくでなしだ。どうやらこいつは、前に整形手術したようですね」

「そうだな」とドル渡すとお礼を言われた⁵。確かに整形手術はその通りだった。我が新しい友人の顔の右側は硬直して白っぽく、細い細かい傷が走っていた。肌はその傷に沿ってつやつやしている。整形手術としてもかなり大規模だ。

「そいつ、どうすんですか？」

「家に連れてって、住所がわかるくらい酔いをさましてもらう」

白服はニヤリとおれを見た。「お好きにどうぞ、いいツラの皮ですねえ。おれならどっかのドブに投げ込んで走り去りますがね。こういう大酒くらいは、面倒ばっかで何もいいことがない。この手の話だと、おれにも哲学があってですね。最近の競争ってのは、男はここぞってとき⁶に身を守るために力を節約しとかないと」

「それでずいぶんと成功なさったようだな」

駐車係はぼかんとしてから、腹をたてはじめたが、その頃には車に乗ってすでに走り始めていた。

もちろん、そいつの言うことにも一理あった。テリー・レノックスはやたらに面倒を起こしてくれた。だがそれを言うなら、それがおれの仕事ではある。

* * * * *

その年はローレル・キャニオン地区ユッカ通りの家に住んでいた。袋小路の小さな斜面住宅で、正面玄関まで長いセコイア材階段と、向かいにはユーカリの茂みがある。家具付き住宅で、しばらく未亡人となった娘と暮らすためにアイダホ州に出かけた女性の持ち物だった。家賃が低かったのは、一

5 1953年ドルなので、2025年に換算すると2000円弱くらいの感覚。

6 村上春樹と田口俊樹はどちらもこの clinches をボクシングのクリンチと解釈して、「ボクシングの」という説明を追加しているが、ニュアンス的にちがうはず。決着をつける、ここぞというとき、という意味の clinch でないと。クリンチのために力を温存するというのは意味不明なもの。田口訳はそれを気にして修飾節のかかりかたをかなり苦しい解釈で変えているが、うーむ。清水俊二訳の解釈が正しい。

部は所有者がその気になればすぐに戻りたいと思ったからで、一部はこの階段のせいだ。彼女は帰宅のたびにその階段に直面するには歳を食い過ぎていた。

なんとかその酔っ払いに階段を登らせた。向こうも手伝う気はあったが、脚がぐにやぐにやで、お詫びめいた文章を語る途中での寝落ちが何度も続いた。ドアの鍵を開けて中に引きずり込むと、長ソファに大の字にさせて、毛布をかけてやり、寝るに任せた。そいつは一時間にわたりゴンドウイルカみたいなびきをかいた。それから突然目を覚ましてトイレに行きたがった。戻ってくると、食い入るようにこっちを見つめ、目をほそめ、いったいどこにいるのか知りたがった。話した。テリー・レノックスだと名乗り、ウェストウッドのアパートに暮らしていて、だれも家で待つ人はいないと言う。その声は明瞭でろれつはしっかり回っている。

ブラック・コーヒーなら飲めそうだということで、持ってきてやると、受け皿をカップの下にしっかり保ちながら、慎重にすすった。

「ぼく、なぜこんなところに？」と見回しながら尋ねる。

「ダンサーズでロールスに乗って酔い潰れたんだ。それでガールフレンドに見捨てられた」

「まさに。彼女がそうするのは当然なほどだったんでしょう」

「あんた、イギリス人？」

「住んだことはあります。生まれ場所じゃない。タクシーを呼んでよければ、自分で帰ります」

「ここに一台いるよ」

下りは自力で階段を下りた。ウェストウッドまでの道中は寡黙で、ただずいぶんご親切にとか、ご迷惑をおかけしてすみませんとか。たぶんそれをかなりしょっちゅう口にしていて、多くの人はそれがただの決まり文句にしか思えなかっただろう。

そいつのアパートは、小さくむさ苦しく生活感がなかった。その午後に引っ越してきたようにさえ見えた。ベッドにもなる硬い緑のソファ前にはコーヒーテーブルがあり、半分空のスコッチボトルと溶けた氷入りのボウル、ソーダ水の空き瓶三本、グラス二つと、口紅のついたものについていないのが混じった吸い殻でいっぱい、灰皿。写真も私物らしいものもそこにはまったくない。会合やお別れ会用、ちょっと一杯やっておしゃべり用、ヤリ部屋用に借りたホテルの一室も同然だ。だれかが暮らしている場所には見えなかった。

一杯どうぞという。おれは断った。すわりもしなかった。去るときさらにお礼を言われたが、別到大恩を受けたという感じでもない一方で、決して形ばかりでもない感じだ。ちょっと混乱してちょっと引っ込み思案ながら、死ぬほど礼儀正しい。エレベーターが上がってきておれが乗るまで、開けっぱなしの戸口に立って見送ってくれた。何はなくとも、礼儀だけは心得ていた。

あの女のことは二度と口にしなかった。また自分が無職で将来見通しもなく、手持ちの最後の一ドルがダンサーズの支払いに使い果たされ、それで得たのは、わずかなハイソの虚飾だけ、それも見回

りパトカー警官に捕まって留置所にぶちこまれないほどではないし、悪質なタクシーの運ちゃんにかまってぼったくられ、どこかの空き地に放り出されずにすむほど長続きするものでもない。

エレベーターの下りで、上に戻ってあいつからスコッチのボトルを採りあげたいという衝動にかられた。だがこっちの知ったことではないし、どのみち大して役に立ちもしない。酒飲みはいつだってどうしても必要なら酒を手に入れる方法を編み出す。

帰りの車では唇を噛みしめたままだった。自分ではタフなつもりが、あの男の何かにやられてしまった。何なのかはわからない。あの白髪と傷のある顔と、明瞭な声と礼儀正しさ、だろうか。それだけで十分だったのかも。二度と会うはずもなかった。あいつはただの迷子犬だったんだ、あの女が言った通りに。

[2]

次にそいつを見たのは11月末の感謝祭一週間後のことだった。ハリウッド大通り沿いの店舗はすでに、バカ高いクリスマスのガラクタだらけになっていて、日刊紙ははやめにクリスマスの買い物をすませないと酷いことになるかと叫び出していた。どのみち酷いことにはなるのだ。必ずそうなる。

オフィスの建物から三街区ほど離れたところで、パトカーが二重駐車してその中のオマワリ二人がショーウィンドウ前の歩道上にある何かを見つめていた。その何かはテリー・レノックス—あるいはその残骸—で、その残り物はあまり魅力的とは言えなかった。

そいつは店頭に寄りかかっていた。何かに寄りかからざるを得ないのだ。シャツは汚く襟元はだらしなく開き、裾は半分上着からはみ出し半分は収まっている。四、五日はヒゲを剃っていない。鼻にシワが寄っている。肌は蒼白で、あの長く細い傷がほとんど見えないくらいだ。そして目は、雪の土手に開けた穴だ。パトカーのオマワリどもがそいつをパクろうとしているのはほぼ確実だったから、おれはすばやく駆け寄ってその腕を捕まえた。

「しゃんと歩けよ」といかにも荒っぽいそぶりで言うと、脇で片目をつぶってみせた。「しっかりしろって。酔っ払ってんのか？」

彼はぼんやりとおれを見てから、いつものちょっとした片側だけの笑みを浮かべた。「前は酔ってた」と呼吸する。「いまは単にちょっとばかり一空っぽらしいよ」

「わかった、でも何とか立つくらいはしろよ。すでにトラ箱に半分脚突っ込んでるんだからな」

彼もがんばって、助けを借りつつ何とか歩道の浮浪者どもの間をぬけて路肩まで歩いた。そこにはタクシー乗り場があったので、助手席のドアを引っ張り開けた。

「あっちの車が先ですよ」と運ちゃんは先のタクシーを親指でぐいっと示した。そして首をまわしてテリーを見た。「乗せてくれるかはわからないけど」と付け加える。

「緊急事態なんだ。友だちが病気なんだよ」

運ちゃんは答えた。「そうかい。どっかよそで病気になってくださいよ」

「五ドル出す⁷。いい顔してくれよ」

「仕方ないっすねえ」と彼は、火星人が表紙についた雑誌をミラーの裏に突っ込んだ。おれは中に手を伸ばしてリアシートのドアを開けた。テリー・レノックスを中に入れたところで、反対側のドアの

⁷ 現在の価値にすると1万円ほどになる。それだけくれるならかなりの無理でもききましょう、という水準。

窓をパトカーの影が遮った。ごま塩頭の警官が下りてやってきた。おれはタクシーの向こうに回ってそれを迎えた。

「ちょいまち、旦那。おやおやこれは何だい？ この汚い洗濯物の紳士はあんたの大親友ってわけか？」

「友人が必要だとわかる程度には親しいですよ。こいつは飲んだくれてはいない」

「金がないだけだろう、まちがいなく」と警官は言った。そして手を伸ばしたので、おれは自分のライセンスをそこに置いた。警官はそれを見て返してよこした。「そういうことかい。私立探偵が客を拾ってるってことか」。そこで彼の声が変わって強面になった。「これであなたのことは多少わかりましたよ、マーロウさん。でもこの人は？」

「名前はテリー・レノックス。映画業界で働いてる」

「そりゃ結構」と彼はタクシーの中に首を突っ込んで、後部シートの隅にいるテリーを眺めた。「どうも最近はあるまい働いていないようだな。どうも最近はあるまい屋内で寝てないようだな。それどころか、こいつは浮浪者だから連行したほうがいいのかもかもしれないな」

「そこまで逮捕実績がいるわけでもないでしょう。ハリウッドなんだから」

警官はまだテリーを見ていた。「おい兄ちゃん、あんたの友人の名前はなんだい？」

テリーはゆっくり言った。「フィリップ・マーロウ。ローレル・キャニオンのユッカ通りに住んでいる」

警官は開いた窓から頭を引っ張り出した。そしてこちらを向くと、手で身ぶりをした。「いま入れ知恵することもできたでしょう」

「できたが、してませんよ」

警官は数秒、おれを見つめた。「そういうことにしておこう。でもこいつをそこらにうろつかせるんじゃないぞ」そう言ってパトカーに乗り込み、走り去った。

タクシーに乗り込むと、三街区かそこら走っておれの車のある駐車場にきて、おれの車に乗り換えた。運ちゃんに5ドル差し出した。すると厳しい目つきで首を振った。

「メーター通りでいいよ、旦那。お気持ちっていうなら一ドルでも。おれも落ちぶれてたときがあったんだ。フリスコで。そしてタクシーで拾ってくれるやつもいなかった。まったく冷たい町だよ」

「サンフランシスコ」とおれは機械的に言った。

「おれはフリスコと呼ぶ。ことば使いにケチつけるお高くとまった連中⁸なんかクソくらえ。これはどうも」と彼は一ドル受け取って走り去った。

8 ここは minority で村上は「少数民族」としているが、ちょっと変。田口は、地元民の一部（特にハイソなエリート層）がこの略称を嫌う、という正しい解釈。20世紀初頭にそういう論争があった。村上は解説で、なぜ自分の解釈が正しいかを弁解しているが、まったく筋が通らない。マイノリティたちはサンフランシスコという呼び名にこだわったりしていない。なぜそれにクソ食らえと言わなきゃいけないの？ 清水訳は潔く無視。

おれたちはドライブインにでかけた。そこは犬も食わないような代物よりマシな味のハンバーガーを出すのだ。テリー・レノックスに二つほど喰わせてビールを一びん飲ませ、車で家に戻った。階段はまだキツそうだったが、ニヤリと笑ってハアハア言いつつなんとか登り切った。1時間後、彼はヒゲをそってシャワーを浴び、また人間らしい形になった。すわって二人できわめて弱いドリンクを何杯か飲んだ。

「おれの名前を覚えていたのは幸運だったな」

「それは忘れないようにしたんだ。それにあなたのことを調べたんだ。そのくらいはしないとね」

「じゃあ電話でもよこせばいいのに。こっちはずっとここにいるんだ。オフィスだってある」

「お邪魔だろうに」

「結局こうして邪魔するはめになってるだろう。あまりご友人がいないようだな」

「いや友人ならいるよ。ある種のね」と彼はテーブルの上でグラスを回した。「手助けを求めるのは気が進まないんだ——特にそれがすべて自分のせいだと」と、疲れた微笑を浮かべて見上げる。「いずれ酒をやめられるかもね。なーんて、みんな口ではそう言うんだろ？」

「三年ほどかかる」

「三年？」彼はショックを受けたようだった。

「たいがいはね。ちがう世界になる。もっと淡い色合いの世界になるし、音もすべて静かになる。再発の可能性もある。かつてよく知っていた相手がみんな、ちょっとばかり奇妙に思えてくる。そのほとんどはもうお気に召さなくなるだろうし、その相手もあんたのことをあまり気に入ってくれなくなるだろう」

「大した変化でもなさそうだな」と彼はふり返って時計を見た。「ハリウッドバスターミナルに、二百ドルのスーツケースを預けてあるんだ。そいつを請け出せたらもっと安いのを買って、いま預けてあるやつは質に入れて、バスでラスベガスに行くくらいの金が入る。そこで仕事に就ける」

おれは何も言わなかった。ただドリンクを手にならずいてすわったままだった。

「それをもっと早く思いついていればよかったと思ってるんだろう？」と彼は静かに言った。

「思ってるのは、このすべてには何か裏があるけれど、それはおれの知ったことじゃないということだよ。仕事があるのは確実なのか、それとも単なる希望か？」

「確実。軍隊での親友がでかいクラブを経営してるんだ。セラピン・クラブ。半ば恐喝屋だよ、もちろん。あの連中はみんなそうなんだ——でも残り半分はいいやつなんだ」

「バス代と当座の金なら出せる。だができればすぐに返品されるようなものに金を出さずにすむほうがいい。まずそいつと電話で話したらどうだ」

「ありがとう。でも必要ない。ランディ・スターは期待を裏切るヤツじゃない。過去一度も裏切らなかった。そしてスーツケースは質入れすれば50ドルになる。すでに経験済みなんだ」

「なあ、必要なものは出してやろう。こっちだってでっかい甘ちゃんのバカじゃないんだ。だからそっちも提供されたものは受け取っていい子にしてくれ。君に煩わされたくないんだよ、君はなにか感じるものがあるからな」

「そうなの？」と彼はグラスをのぞきこんだ。ドリンクはわずかにすすっているだけだ。「二回会っただけで、毎回えらく親切にしてくれたね。何を感じるの？」⁹

「今度会うときには、おれが引っ張り出せないほどひどいもめ事にはまってるという感じだ。なんでそんなことを感じるのかよくわからないんだが、でも感じるのは確かなんだ」

彼は二本の指先で顔の右側にそっと触れた。「これのせいかもしれないね。おかげで確かにちょっと邪悪な印象にはなるんだろう。でもこれは名誉の負傷なんだ——少なくとも、その負傷の結果ではある」

「そんなんじゃない。それはまったく気にならない。おれは私立探偵だ。君は問題だがおれに解決する義理はない。だが問題があるのは確かだ。直感ってヤツだ。すごく礼儀正しく言うなら、人を見る目とでも呼んでくれ。ダンサーズであの女性に置き去りにされたのは、君が酔っ払っていたせいだけじゃないのかもしれないぞ。彼女も何か感じていたのかも」

彼はかすかに笑った。「一度は結婚した相手なんだ。名前はシルヴィア・レノックス。彼女の金目当ての結婚だった」

おれは立ち上がり顔をしめめた。「炒り卵でも作ってやろう。何か喰わないと」

「ちょっと待った。マーロウ、ぼくが落ちぶれていてシルヴィアが大金持ちなら、少しねだればいいのにとってるんだろう。プライドって知ってる？」

「すっかりお見通しだな、レノックス」

「そうかい？ ぼくのプライドは種類がちがうんだ。他に何も無い男のプライドなんだ。うんざりさせたらごめん」

おれは台所へと向かい、カナダベーコンと炒り卵とコーヒーとトーストを用意した。二人でそれを朝食用の小テーブルで食べた。家に、必ずそういうのがついていた時代のものであったのだ。

9 ここを村上春樹は「僕のどこがそんなに気にかかるんだろう？」と訳している。まちがいでない。だがこれは相手に対する質問ではなく、ただの自問なのに注意。原文では普通に相手に尋ねている。村上春樹の世界ではこのように、登場人物の多くは自閉した自分だけの世界にいて、相手にきちんと向き合わない。この場面のマーロウも、村上訳では漠然と自分語りをしているだけで、それがたまたま並行するだけ。それが村上春樹特有のふわふわした肥大した自我の世界観を創り出しているが、ストレートさと簡潔さを旨とするチャンドラーの文体とはマッチしていない。田口訳もここで無用なパディングを増やしていてストレートさから遠ざかっているのは、村上訳を無用に意識したようにも思える。

オフィスに行く、帰りにスーツケースを請け出してくると告げた。彼は引き換え票をよこした。顔に少し血の気が戻り、目も掘り出してこないと出てこないほど落ちくぼんだ状態よりは少しましになっていた。

出かける前に、長椅子前のテーブルにウィスキーボトルを置いた。「そのプライドとやらでこれに耐えて見ろ。それと、おれへのお情けってことでいいから、ラスベガスに電話してくれ」

彼はにっこりして肩をすくめただけだった。階段を下りつつもむかつきは消えなかった。なぜかはわからない。男が服を質に入れるよりも、飢えて街を徘徊する方を選ぶ理由がわからないのと同様だ何やらルールがあつて、それに従っているのだろう。

そのスーツケースはとんでもない代物だった。さらしたブタ革製で、新しかったときには淡いクリーム入りだったものだ。金具は黄金だ。イギリス製で、ここアメリカで買えるにしても、二百ドルどころか八百ドルくらいにはなりそうだ。

それを彼の前にドスンと置いた。カクテルテーブルのボトルを見た。手を触れていない。おれと同様にしらふだ。タバコを吸っていたが、あまりお気に召さないようだ。

「ランディに電話したよ。いままで電話しなかったので怒ってた」

「見知らぬ相手でもなきゃ君を助けられんよ。シルヴィアからのプレゼントか？」とスーツケースを指さした。

彼は窓から外を見た。「いいや。イギリスでもらったんだ、彼女に会うずっと前に。本当にえらく前のことだな、実際。これをあなたのところに残して、かわりに古いのを貸してもらえないかな」

おれは二十ドル札を五枚財布から出して、彼の前に落とした。「担保はいらんよ」

「いやそういうことじゃないんだよ。あなたは質屋なんかじゃない。ただこいつをラスベガスに持っていきたくないんだ。それにこんなにお金はいらない」

「わかった。その金は取っておいてくれ。スーツケースは預かろう。だがこの家は泥棒に入られやすいぞ」

「かまわないよ」彼はどうでもいいようだった。「全然かまわない」

彼が着替えて、二人で五時半頃にムツソの店で夕食を食べた。酒はなし。カウエンガで彼はバスをつかまえ、おれはあれこれ思案しつつ車で家に帰った。空のスーツケースが、彼が荷ほどきをしておれの軽量かばんに詰め替えたベッドの上に乗っていた。金の鍵がついていて、片方の鍵穴に刺さっている。その空のスーツケースに鍵をかけて、その鍵を持ち手にゆわえ、衣装だんすの高い棚にのせたなんだか完全に空ではない感じがしたが、その中身はおれの知ったことじゃない。

静かな夜で、家はいつになく虚ろな感じがした。チェスの駒を並べて、かつてのチェス王者スタイニッツを相手にフレンチ・ディフェンスをプレイした。四十四手目でやられたが、こっちも何度か相手に冷や汗をかかせた。

九時半に電話が鳴って、相手の声は聞きおぼえがあった。

「もしもし、フィリップ・マーロウさんでしょうか？」

「ああ、マーロウですが」

「マーロウさん、わたくしシルヴィア・レノックスと申します。先月の夜にダンサーズの前で少しお目にかかりました。後でうかがったんですけど、ご親切にテリーが家に帰れるよう見届けてくださったとか」

「そうしました」

「あたしたちがもう結婚していないのはご存じかと思いますが、でもちょっとあの人のことも気に掛けてましたの。ウェストウッドのアパートは引き払ったようで、いまの居場所をだれも知らないみたいなもので」

「お目にかかった晩のご心配ぶりは、しかと拝見いたしましたよ」

「ちょっとマーロウさん、あたしはあの人と結婚してたんですよ。ただ飲んだくれにはあまり同情できないたちなんです。ちょっと冷たかったかもしれないし、いささか重要な用事があったのかも。あなたは私立探偵だから、お望みならお仕事ベースでやっていただいてもいいんですけど」

「何ベースもなくていいでしょう、レノックスさん。あの人はラスベガス行きのバスに乗ってます。仕事をくれる友人がいるとか」

彼女は本当にいきなり明るくなった。「あら—ラスベガスですって？　なんてセンチメンタルな人。あたしたちが結婚した場所なんです」

「忘れたんでしょうね。そうでなければどこか他所に行ったでしょうから」

彼女は電話を切るどころか、笑った。かわいらしい笑い声だった。「いつも依頼人に今みたいに無礼なんですか？」

「あなたは依頼人じゃありませんよ、レノックスさん」

「いつかなるかもしれない。わかるもんですか。じゃあ、ご婦人のお友だち相手でもそんななの？」

「同じ答えですよ。あいつは落ちぶれて、飢え、どろどろで、文無しだった。その気があれば探し出せたでしょうに。そのときにもあいつはあなたから一切何も求めたようとしなかったし、いまもおそらく何もほしくはないでしょうよ」

彼女は冷ややかに言った。「それはあなたが絶対に何一つわかりようがない話ね。おやすみなさい」そして電話を切った。

もちろん死ぬほど正しいのは彼女で、おれは死ぬほどまちがっていた。だがまちがっている気はしなかった。単にむかついただけだ。三十分早く彼女が電話をよこしていたら、むかつきすぎてスティッツをボコボコにできたかもしれない——とはいえヤツはもう 50 年前に死んでいたし、チェスの対局は本で見たものだったのだけれど。

[3]

クリスマス三日前に、ラスベガスの銀行が振り出した百ドル小切手が届いた。ホテル便せんに書いたメモつきだ。お礼とメリークリスマスと各種ご多幸の祈りに加え、またそのうち会おうとのこと。のけぞったのが追伸部分。「シルビアとぼくは第二のハネムーンを始めました。やりなおしたいと思っても怒らないでくださいね、とのこと」

話の残りは、新聞の社交欄にあるクサイコラムで知った。めったに読まないところで、他に嫌うものがなくなったときにしか目を通さない部分だ。

「テリーとシルヴィア・レノックスがラスヴェガスでヨリを戻したという報せにこの記者は欣喜雀躍もちろんあのサンフランシスコとペブルビーチの超大金持ちハーラン・ポッターの末娘。シルヴィアはマルセル&ジーン・デュホーに、エンシーノの大邸宅を地下室から屋根に到るまで、もう 壮絶なほどの最新ファッションで改装させるとのこと。愛しの読者諸賢もご記憶でしょうが、このちょっとした全十八室の小屋を結婚のお祝いとして彼女に送ったのは、シルヴィアの一つ前のご亭主カート・ウェスターハイムでした。してそのカートやいかに、ですって？ いやすでにご存じかも？ その答はサントロベにあり、しかも永遠にとの話ですぞ。さらに、とあるとんでもなく すごい根っからの貴族階級のフランス女爵が、完璧なまでに見事な子供二人付きで関わっているとのこと。そしてハーラン・ポッターはこの再婚をどう思っているのか、と思われる方も？ それは神のみぞ知る。ポッター氏は、決してインタビューに答えない珍しいお方です。独占もちよっと度が過ぎますわね、皆様？」

その新聞を部屋の隅に投げ出して、テレビをつけた。社交欄の犬のヘドの後では、プロレスラーですらマシに見える。だが事実関係はたぶん正しいのだろう。そこは社交欄で外せないところだ。

ポッター家の数百万ドル改装を受ける全十八室の小屋がどんなものか想像はついたし、デュオー夫妻の最新チン根象徴様式の装飾も見当がつく。だがテリー・レノックスがバミューダショーツ姿でプールのどれかのまわりをうろつき、トランシーバーで執事に連絡してシャンパンを冷やせだのライチョウを焼けだの指示している様子は、まるで思い描けなかった。思い描く義理もない。あいつが誰かのクマちゃん人形になりたいくても、おれの知ったことか。もう二度と会いたくないというだけだ。だが会うのはわかっていた—あのろくでもない金メッキブタ革スーツケースがある以上。

それが濡れた三月の夕方五時に、おれのみすばらしい頭脳の雑貨屋に入ってきた。様子が変わっていた。歳を取り、まったくしらふ、シャープで見事に平静。耐え方を学んだようだ。オイスター・ホワイトのレインコートと手袋姿で、帽子はなく、白髪が鳥の胸毛のように滑らかだ。

「静かなバーにでもいって一杯やろう。暇があればの話だけど」まるで到着してもう十分たったような口ぶりだ。

握手はしなかった。一度も。イギリス人はアメリカ人のようにやたらに握手はしないし、あいつはイギリス人ではないがその態度をある程度身につけていた。

「おれの家へ寄って、あの派手なスーツケースを取ってこよう。なんか気忙しいから」

彼はかぶりを振った。「持っていてもらえるとありがたいんだが」

「なぜ？」

「ただそう思うんだ。いやかな。あれは役立たずのごく潰しでなかった時代との絆とでも言うか」

「くだらんね。だがそれは君の問題だ」

「盗品かもしれないのが気になるんなら—」

「それも君の問題だ。飲みに行こう」

ヴィクターズに行った。乗せられた車はさび色のジュピター・ジョウエット、貧相なキャンバスのレイントップつきでその下にはおれたち二人しか乗る余地がない。淡いレザー張りの内装と、金具はどうやら銀らしい。車にはさほどのさくはないたちではあるが、このすごい代物にはいささかヨダレが出た。時速 100 キロまで一秒で加速できるそうだ。シフトレバーは寸詰まりの小さなもので、やっとひざまで届くくらいだ。



「四速なんだ。こんな仕掛けで使えるオートマシフトはまだ発明できていない。別にいらないんだけどね。三速でも坂道発進できるし、どのみち公道ではそれがいちばん高いギヤなんだから」

「結婚祝い？」

「いや、『ウィンドウでこのがらくたをたまたま見かけてふらりと』みたいなプレゼント。ぼくはすごく甘やかされてるんだぜ」

「いいね、その代償がないなら」

彼はすばやくおれを一瞥してから、濡れた路面に目を戻した。ダブルのワイパーが小さなフロントガラスをシュツシュツと優しく拭った。「代償？ 代償なんかあるに決まってるだろうに、この野郎。ひょっとしてぼくが幸せじゃないとでも思ってるの？」

「すまん、言い過ぎた」

「ぼくは金持ちなんだぜ、幸せになんかなりたいわけないだろう？」その声には、おれには目新しい辛辣さがあった。

「酒のほうはどうだい？」

「まったくもってエレガントだよ、おっさん。なぜだか知らないけれど、どうも酒は扱いきれてるよ
うなんだ。が、どうなるかはわからないよね、え？」

「もともと本当のアル中じゃなかったのかもな」

二人でヴィクターズのカウンターの端にすわり、ギムレットを飲んだ。「ここじゃみんな、ギム
レットの作り方を知らないよね。ここでギムレットと称する代物は、ライムかレモンジュースにジン
を入れて、ちょっと砂糖にビターを添えただけ。本物のギムレットは、半分ローズのライムジュース
で他は何もなし。マティーニなんか足下にも及ばない」

「ドリンクでうるさいことは言わないたちでね。ランディ・スターとはうまくやれてるのか？ おれの
業界では、あいつはかなりヤバいやツだって話だが」

彼は身を引いて、思慮深げにしてみせた。「そうなんだろうね。たぶんみんなそうなんだろう。で
もそういうそぶりは見せない。ハリウッドで同じインチキ稼業をしていて、外見まですっかりなり
きってる連中も何人か挙げられる。ランディはそんなことはしない。ラスベガスではまともなビジネ
スマンなんだ。こんどベガスに行ったら探して見るといいよ。いい相棒になってくれる」

「遠慮したいねえ。ごろつきは嫌いなんだ」

「そんなのただのレッテルだろ、マーロウ。いまはそういう世界なんだ。二度の大戦でそれが生まれ
て、それが今後も続くんだ。ランディとぼくともう一人は、かつて同じ部隊にいたんだ。それでなん
か絆ができた」

「じゃあ困ったときになぜ頼らなかったんだ？」

彼はドリンクを飲み干してウェイターに合図した。「向こうが断れないから」

ウェイターが新しいドリンクを持ってきた。「中身のある台詞には聞こえないね。もしひよっとし
て相手が君に借りがあるなら、相手の立場も考えろよ。何かしらお返しの機会がほしいだろうに」

彼はゆっくり首を振った。「それはわかってる。もちろん仕事の口を頼みはしたよ。でもその仕事
があるうちはきっちり働いたからね。頼み事や施しなら、お断りだ」

「だが見知らぬ相手からの施しは受けたらう」

彼はおれの目を見据えた。「知らない相手は黙殺して何も聞かなかったことにもできる」¹⁰

二人でギムレット三杯飲んだ。ダブルではない。彼は少しも酔った様子がなかった。本物のアル中
なら、それだけ飲めば止まらなくなる。だからそっちはもう直ったのかもしれない。

それからオフィスまで車で送ってくれた。

10 ここは既訳三人とも（清水俊二ははっきりしないが）まちがい。みんな「聞かないふりをしてくれる」といった訳
をしていて、彼が何か都合の悪いことを言っても大丈夫なのだ、というようなニュアンスで理解している。でも前
の部分で分かる通り、テリー・レノックスは相手が義理で断れない状況がいやなのだ。赤の他人は、頼まれても無
視して聞き流せるし、助ける義理がない。選択の余地がある。それが彼にとっては重要なのだ。

「8時15分からディナーなんだ。億万長者にしか手が届かない。最近では億万長者の召使いでないと、我慢してくれないだよ。美しい連中がたくさんやってくる」

* * * * *

その後、五時頃に立ち寄るのが何やら彼の習慣となった。いつも同じバーに行くわけではないが、他のどこよりもヴィクトアーズに行くことが多かった。おれの知らない何か思い出があったのかもしれない。決して暴飲はせず、それには自分でも驚いていた。

「三日熱マラリアみたいなものだったのかもね。やられたらひどいことになる。直れば、まるでなかったも同然」

「解せないのは、君ほどの特権を持つ人間が、なんで私立探偵なんかと飲みたがるかってことだ」

「おやご謙遜ですか」

「ちがう。単に不思議なだけだよ。おれは普通に親しみやすいタイプだが、君とは住む世界がちがう。いつもどこらにいるのかさえ知らないんだぜ、エンシーノにあること以外は。たぶん家庭生活は問題ないんだろうね」

「家庭生活なんかない」

また二人でギムレットを飲んでいた。バーはほとんど無人だった。いつもながらバーカウンターに飲まずにはいられない連中がポツポツ散在してスツールでグラスを重ねていた。最初のグラスにはとても慎重に手を伸ばし、何もひっくり返さないよう自分の手を見張るような連中だ。

「わからんな。わかるべきなのか？」

「大作だが、ストーリーなし、というのが映画業界での表現だな。シルヴィアは十分に幸せなんだろう。別に必ずしもぼくというせいでもないけど。ぼくの界限では、そんなのはさして重要じゃない。働かずにすんで、費用を考える必要がないなら、いつも何かしらやることはある。本当の楽しみじゃないんだが、金持ちはそんなことは知らない。連中は本当の楽しみなんか味わったことがない。何も本気で求めたりはしないんだよ、まあだれか他人の奥さんを本気で欲しがるといいたい。それでも、配管工の奥さんが居間の新しいカーテンを欲しがるといいたい。それに比べれば、ずいぶんとぬるい」

こちらは何も言わなかった。向こうに続けさせた。

「おおむねぼくは暇つぶしをするだけだ。なかなか潰れてくれないけど。テニス少々、ゴルフ少々、水泳少々に乗馬少々、そしてシルヴィアのご友人たちが、二日酔いの迎え酒開始をなんとか昼食までは我慢しようとするのを見物するという、素晴らしい楽しみもある」

「君がベガスに行った晩には、酔っ払いは嫌いだと彼女は言ってたぜ」

彼は顔を歪ませてニヤリとした。彼の傷顔にすっかり慣れてしまい、表情の変化で片側の硬直ぶりが強調されない限りそれに気がつかなくなっていた。

「それは文無しの酔っ払いってことだよ。金があればただの飲んだくれ。ラナイでゲロ吐いても、それは執事がどうにかする」

「そんな状態に耐える必要もなかっただろうに」

彼は一気にドリンクを飲み干すと立ち上がった。「マーロウ、もう行かないと。それに退屈させるようだし、正直言って自分でも自分に飽きてきた」

「退屈はしてないがな。人の話を聞く訓練は受けてるんだ。遅かれ早かれ、君がなぜ子飼いのプードルでいたがるのかもわかるかもしれん」

彼は指先でそっと傷に触れた。そしてかすかに微笑した。「むしろ彼女がなぜぼくを侍らせたがるのか不思議に思うべきだよ。ぼくがそこにいて、サテンのクッションでなでなでしてもらうのを辛抱強く待ったりする理由は考えなくていい」

おれも立ち上がり、いっしょに店を出ようとした。「君はサテンのクッションが好きなんだろう。シルクのシーツ、ベルを鳴らして、執事がうやうやしく微笑して出てくるのが好きなんだ」

「かもね。ソルトレークシティの孤児院育ちだからね」

二人で疲れた晩の中に出ると、散歩したいと言う。ここにはおれの車できたし、今日は珍しく勘定はおれが何とか奪い取った。彼が見えなくなるまで見送った。淡い霧の中に消えうせるとき、店のウィンドウからの明かりが彼の白髪的光辉を一瞬捕らえた。

あいつが飲んだくれてどん底で、飢えてボロボロで誇り高かったときのほうが好きだった。いやそうかな。単に見下すのが好きだったのかも。あいつの行動原理はわかりにくかった。おれの稼業では質問すべきときと、相手が沸騰するまで煮立たせておくべきときがある。まともなオマワリならみんな知ってることだ。チェスやボクシングにかなり似ている。こっちから責めて休む暇を与えないほうがいい相手もいる。相手をしているうちに勝手に自滅する相手もいる。

聞けば身の上話をしてくれたらう。だが顔を潰された経緯すら尋ねはしなかった。尋ねてあいつが話してくれたら、二人ほど命が助かった可能性もあったのに。無きにしも非ずという程度の可能性ではあっても。

[4]

最後にバーで飲んだのは五月、いつもより時間は早くて、四時ちょっとすぎだった。疲れてやせた様子だったが、うれしそうにゆっくり微笑して店を見回した。

「晩に向けて開店直後のバーが好きなんだ。店内の空気がまだひんやりきれいで、すべてピカピカで、バーテンも鏡で最後に自分をチェックして、ネクタイがまっすぐで髪が乱れてないか見てる。カウンター奥にきれいに並んだボトルと、美事に輝くグラスと期待感が好きだ。バーテンがその晩最初のドリンクを作り、それを洗い立てのマットにおいて、小さく畳んだナプキンを隣に置くのを見るのが好きだ。それをゆっくり味わうのが好きだ。静かなバーでその晩初の静かなドリンク—すばらしいじゃないか」

おれも同意した。

「アルコールは、愛みたいなものだね。最初のキスは魔法、二回目は親密、三度目は定型作業。その後は女の服を脱がせる」

「どこがいけない？」とおれは尋ねた。

「高次の興奮ではあるけれど、不純な感情だ—美的な意味での不純ってことだよ。セックスをバカにする気はないよ。必要だし、醜くなる必要もない。だがいつもきちんとお膳立てがいる。セックスを華々しいものにするのは一大産業になってるが、それは一ドル残らず必要な費用なんだ」

彼は見回してあくびをした。「最近よく眠れないんだ。ここはすてきだ。でもしばらくすると、酔っ払いだらけになって、そいつらがでかい声でしゃべって笑って、ろくでもない女どもが、手を振ったり顔をぬりたくったり、ろくでもないプレスレットをガチャガチャ言わせたりして、出来合の魅力振りまきで誘いをかけて、それが夜も遅くなると、かすかにまちがいなく焦って汗くさくなる」

「そう興奮するなって。そりゃ人間だから、汗もかく、汚くもなる、便所へも行く。何を期待してるんだよ—バラ色の霧の中を舞う黄金のチョウチョでもほしいのか？」

彼はグラスを空けて、それを逆さにして、ふちにゆっくりと水滴がたまり、震えて落ちる様子を眺めた。そしてゆっくりと口を開いた。

「かわいそうな女ではあるんだ。本当にどうしようもないクソ女なんだよ。ひよっとするとぼくもあいつを遠巻きながらあいつが気に入ってるのかも。いつの日か、あいつはぼくを必要とするように

なる。そのときには彼女の懐目当てじゃない男なんてぼくだけになってるんだ。たぶんその頃にはぼくもお払い箱だろうがね」

おれはただ彼を見た。そして一瞬後に言った。「自分の売り込みが実に上手だな」

「うん、わかってる。ぼくは弱い人間で、根性も野心もない。手にしたのは真ちゅうの指輪で、それが黄金じゃないと知ってショックを受けてる。ぼくみたいなヤツは、人生で一回だけ晴れ舞台がある空中ブランコで完璧な演技が一回。その後は、歩道からドブに落ちずに乗り切ろうとして余生を送るんだ」

「何の話やら」おれはパイプを出してタバコを詰め始めた。

「彼女、怯えてるんだ。震え上がってる」

「何に？」

「わからない。もうあまり話もしない。おやじさんかも。ハーラン・ポッターは冷血なろくでなしだ。外面はすべてヴィクトリア朝式の尊厳。内面はゲシュタポの暴漢なみの無慈悲さ。シルヴィアは身持ちの悪い女だ。ハーランはそれを知ってて、不快に思ってるが、手が出せない。でも手ぐすね引いて待っていて、シルヴィアがどうしようもないスキャンダルにはまったら、彼女を二つ折りにしてその半身ずつを何千キロも距離を置いて埋める気でいやがる」

「君が夫だろう」

あいつは空のグラスを手にして、テーブルの端に激しく叩きつけた。鋭い音をたてて砕けた。バーテンはじっと見たが、何も言わなかった。

「こんな具合だよ、おっさん、こんな具合。はいはい夫でござい。書類上はそうなってる。白い階段三段、でっかい緑の玄関と真ちゅうのノッカーで、一回長く、二度短く鳴らすと女中に百ドル売春宿に入れてもらえる夫だよ¹¹」

おれは立ち上がり、テーブルにいくらか置いた。「まったく口が減らんね。しかも自分のことばかり。またな」

ショックを受けて蒼白ですわったままのあいつを残してそこを出た。といっても、酒場の照明で見分けられる限りそう見えたということだが。何か背後から言ってきたが、おれはそのまま歩き続けた。十分後に後悔した。だが十分後には他所にいた。もうあいつはオフィスに来なくなった。まったく一度も。あいつの痛いところを突いてしまったのだ。

一ヶ月にわたり、あいつを見かけなかった。見かけたときには、朝の五時であたりがやっと明るくなってきた頃だった。呼び鈴がしつこく鳴ってベッドから引っ張り出されたのだ。廊下を下り今を横

11 ここの既訳三人ともずいぶん変な解釈、売春宿だの女中だのノッカーだのがこのテリー・レノックスなのだという解釈になっているが、そんなバカな。夫といっても自分はそういう出来合の書き割りの中で子飼いになってる存在でしかないぞ、という意味なので、そう訳せばいいと思う。

切ってドアを開けた。あいつが一週間も寝ていない風情で立っていた。襟を立てた軽いトップコート姿で、どうも震えている。暗いフェルト帽を目深に被っていた。

手には銃。

[5]

銃はおれに向けられてはいなかった。単に手に持っていただけだ。中口径のオートマチック、外国製でまちがいなくコルトやサヴェッジではなかった。白い疲れた顔と傷と、立てた襟と目深な帽子と銃のその姿は、古くさい暴力もののギャング映画からそのまま出てきたようだった。

「ティファナまで車でぼくを連れて行くんだ、10時15分の飛行機に乗るから。パスポートと査証はあるし、輸送手段以外は全部揃ってる。わけあって、ロスから列車やバスや飛行機は使えない。タクシー運賃として500ドルは妥当かな？」

おれは戸口に立ちほだかり、脇によってそいつを中に入れようとはしなかった。「五百ドルにそのブツか？」

彼はいささか放心状態でそれを見下ろした。そしてポケットに落とした。

「護身用になるかと。あなた用の。ぼくのじゃない」

「なら入れよ」と脇によると、疲れた足取りで入ってきて、ドシンと椅子にすわった。

居間は暗かった。家の所有者が茂みを派手に生えるに任せたために窓が覆われていたからだ。ランプをつけてタバコを一本頂戴した。火をつけた。あいつを見下ろした。すでにくしゃくしゃの髪をさらにかき乱した。顔に、古い疲れた微笑を浮かべた。

「こんな美しい朝を眠って過ごすなんてのが、そもそもおれのまちがいだよな。10時15分だって？ うん、時間はたっぷりある。台所にいこうぜ、コーヒー淹れるから」

「ひどく面倒なことになってるんだ、探偵さん」。おれを探偵さんと呼ぶのは前代未聞だった。だが登場の仕方、服装、銃などとはなんとなくマッチしていた。

「ピッカピカの日になるぜ。そよ風。通り向かいの古いタフなユーカリの木が、お互いに囁きあっているのが聞こえるじゃないか。ワラビーが枝の下を跳ね回り、コアラがお互いにおんぶし合っていたオーストラリアの昔の日々を語り合ってるんだ。うん、君がなにやら面倒なことになっているのは、なんとなく察したよ。その話はコーヒー何杯か飲んでからしようじゃないか。おれは起き抜けにはいつも、ちょっと頭がふわついてるんだ。ハギンズ氏とヤング氏と相談といこうじゃないか」

「ねえマーロウ、今はそれどころじゃー」

「案ずるなかれ、お兄さん。ハギンズ氏とヤング氏は最高の二人なんだぜ。ハギンズ＝ヤング・コーヒーを作ってるんだ。それがライフワークで、誇りと歓びの源。いつの日か、この二人が当然受けるべき認知を得るようにしてやるんだ。いまのところ、この二人は金儲けしかしてないが、それで二人が満足しているとは思えないからな」

そんな明るいおしゃべりで彼を後にして、裏の台所に入った。お湯の蛇口を流して¹²、棚からコーヒーメーカーを下ろした。ロッドを濡らしてコーヒーを計って上部に入れたが、その頃には蛇口のお湯が熱くなっていた。そのブツの下半分をそのお湯で満たして火に掛けた。そして上部をそのてっぺんに起き、ひねって上と下をねじあわせた。

その頃には、彼が後から入ってきた。戸口からしばしのぞき込むようにしてから、ジワジワと朝食用コーナーににじり寄り、席にすべりこんだ。まだ震えている。棚からオールド・グランドダッドのボトルを取って、大きなグラスに1ショット注いだ。大きなグラスがいるのはわかっていた。それですら、口元に運ぶのに両手が必要だった。飲み込み、グラスをドスンと落として、派手な音で背もたれに身体を叩きつけた。

「気絶するところだったよ。まるで一週間も寝ていない気分だ。昨日は一睡もしなかった」

コーヒーメーカーは沸騰しかけていた。火を弱めてお湯が上がるのを眺めた。ガラス管の底に少し水が残った。そいつがギリギリ上がるくらい火を強めてから、すばやく弱めなおした。コーヒーをかきまぜ、蓋をする。タイマーを三分にあわせる。マーロウは几帳面な男なのだ。そのコーヒー技法は何物にも邪魔されてはならない。絶望した人物の手に握られた銃さえも。

おれはもう一杯注いでやった。「すわってろ。何も言うな。すわれ」

二杯目を彼は片手で扱った。おれは洗面所ですばやく顔を洗い、ちょうど戻ってきたところでタイマーが鳴った。火を切って、コーヒーメーカーをテーブルの麦わらマットの上に置いた。なぜこんな細かい話をしてるのか¹³？ 張り詰めた雰囲気であらゆるちょっとしたことが、芝居がかって突出して感じられたからだ。浮き彫りになるきわめて重要な動きに思えるのだ。自分の考えなしの動きが、どれほど昔から確立したものでも、どれほど習慣的なものでも、個別の意図的活動となる、あの敏感きわまる瞬間の一つだったのだ。ポリオの後で歩く練習をしている人と同じだ。当たり前のことなど何もない、まったく何一つとして。

コーヒーは全部落ちきって、空気がいつもながらブツブツ言いつつ入り込み、コーヒーがシュウと泡立ってそして静かになった。メーカーのトップをはずし、水切り板の上においたふたのへこんだ部分にのせた¹⁴。

12 I turned the hot water on. 既訳はどれも、お湯をわかしとか火にかけたとかになっているが、混合水栓でお湯のほうを出して、熱くなるまでそれを流しっぱなしにしたということ。火にかけるとなれば、最初から直接コーヒーメーカーに水を入れて火にかければすむじゃん。

13 既訳はいずれも、なぜ彼がわざわざ麦わらマットを敷くという細かい行動を行ったのか、という意味でこれを解釈している。でも麦わらマット自体は、彼が定型動作として反射的に用意しただけで、わざわざ行った作業ではない。これはすべてが終わった後の回想物語だ。ここは、なぜ彼がその回想の中でこんなチマチマした細部をいちいちまここで語っているのか、という意味。習慣にすぎない行動が回想の中で意識されたというのがポイント。

14 in the socket of the cover というのを、既訳はすべて端折っている。コーヒーメーカーのふたがあり、そのふたにトップ部分を置けるようなくぼみがついていて、水切り板にのせたそのふたのくぼみ部分に乗せた、という意味。

おれは二杯注ぎ、彼のカップにはウィスキーを足した。「君はブラックだな、テリー」そして自分のには角砂糖二つとクリームを加えた。その頃にはおれも頭がはっきりしてきた。その前に冷蔵庫を開けてクリームカートンを出したときのことは覚えていないのだ。

向かいにすわった。彼は身動きしていない。朝食コーナーの隅にもぐりこみ、硬直している。そしていきなり予告なしに頭がテーブルに突っ伏して、泣き始めた。

テーブル越しに手を伸ばしてポケットから銃を掘り出しても無反応だった。モーゼル 7.65、美しい。匂いを嗅いでみた。マガジンを外してみた。満タン。薬室は空っぽ。

彼は顔を上げてコーヒーを見ると、ゆっくり少し飲んだが、こっちは見なかった。「だれも撃つてないよ」

「うん—まあ最近はないな。撃ったら銃の掃除がいる。こいつで君がだれかを撃ったことがあるとはとても思えない」

「その話をしようか」

「ちょっと待った」と熱さに我慢できる範囲で急いでコーヒーを飲み干した。そして追加した。「つまりだな、何を話すかとにかく気をつけてくれ。本当にティファナまで乗せてほしいなら、おれに話しちゃいけないことが二つある。一つは—聞いてんのか？」

あいつは本当にかすかにうなずいた。呆然とおれの頭上の壁を見ている。この朝、傷がえらく生々しい。肌はほとんど死人の白さだが、それでも傷だけはそこから輝き出るようだった。

おれはゆっくり繰り返した。「一つ。犯罪か、法的に犯罪とされるものをやったんなら—深刻な犯罪ということだぞ—その話はされちゃ困る。二つ、そうした犯罪が行われたという重要情報を持っているなら、その話もされちゃ困る。ティファナまで運転してってほしいならな。わかったか？」

あいつはおれの目を見つめた。その目は集中していたが生気がなかった。コーヒーは効いていた。血の気はなかったが、しっかりしていた。コーヒーをつぎ足してやり、同じくウィスキーを足した。

「面倒なことになってると言っただろう」

「聞いたよ。どんな面倒かは知りたくない。生計をたてなきゃだし、ライセンスも守らないと」

「銃を突きつけてやらされたと言えればいい」

おれはニヤリとして銃をテーブル越しに押しやった。あいつはそれを見下ろしたが、触らなかった。

「ティファナまでずっとは突きつけられないよ、テリー。国境を越えるときは無理だし、飛行機のタラップを上がるときも無理だ。おれはときどき銃を相手にする商売の人間だぜ。銃のことは忘れようおれが怯えきって、とにかく君の言いなりになってましたなんて言ったら、警察には大受けだ。もちろんこれは、警察に話すようなことがあればの話で、それはおれの知らないこと」

「ねえ、だれかがドアをノックするのは、昼かヘタするともっと後だ。使用人は、遅くまで寝てるのを邪魔するほどバカじゃない。でも正午あたりに彼女の女中がノックして部屋に入る。でも彼女はいない」

おれはコーヒーをすすって何も言わなかった。

「女中は、ベッドに寝た跡がないのに気がつく。そして、他にどこを探せばいいか思いつく。母屋からかなり奥まったところに、でかいゲストハウスがある。独立した車の進入路やらガレージやらもある。シルヴィアはそこで一夜を過ごしたんだ。いずれ女中がそこで彼女を見つける」

おれは顔をしかめた。「おれも質問に非常に気をつけないとな、テリー。家以外で一夜を過ごしたとは考えられないのか？」

「服が部屋中に投げ散らかされてる。何もハンガーにかけたりしない女なんだ。女中は、彼女がパジャマの上にローブを羽織って、そっちに向かったとわかる。だからゲストハウスに行くしかない」

「そうとも限らないだろう」とおれ。

「ゲストハウスなんだよ。まったく、連中がゲストハウスで起こることを知らないとも思ってるの？ 召使いはいつも知ってるんだ」

「飛ばせ」とおれ。

あいつは傷のないほうの頬に強く指を走らせたので赤い筋が残った。そしてゆっくり続けた。「そしてそのゲストハウスで女中が見つけるのは――」

「シルヴィアが泥酔し、身動きもできず、あられもない格好で人事不省になってるのを」とおれはきつい口調で言った。

「えーと」あいつは考え込んだ。そして付け加えた。「もちろんそうだ。そうあるべきだ。シルヴィアは大酒飲みじゃない。一線を越えるとかかなりすごいことになる」

おれは言った。「話はそこまでだ。いやほとんど。ちょっと即興させてくれ。最後に一緒に飲んだとき、ちょっとキツイ態度を取っただろう、置き去りにしたのを覚えてるか。君には死ぬほどイライラさせられた。後からふり返ると、自嘲することで災厄の予感から逃れようとしてたんだな。パスポートと査証はあると言った。メキシコ査証を手に入れるのは少し時間がある。だれでも歓迎ってわけじゃないからな。つまりしばらく前から逃げだそうと計画してたわけだ。いつまでここに残るつもりなのか不思議に思ってたところだったよ」

「まあ、何かここらに居残る漠然とした義務みたいなのを感じてたんだと思う。彼女がおやじさんにあまり嗅ぎ回らせないための隠れ蓑以上のことで、ぼくを必要とするかもしれないとかね。ちなみに夜中に電話しようとしたんだぜ」

「おれは眠りが深い。聞こえなかった」

「それからトルコ式の風呂屋にいった。何時間かいて、蒸気風呂を浴び、浴槽に飛び込み、ニードルシャワー、マッサージを受けて、そこから何本か電話したんだ。車は、ラ・ブレアとファウンテンの交差点に置いてきた。そこからは歩いた。あなたの通りにぼくが曲がるのはだれにも見られていない」

「その電話はおれに関係あるのか？」

「一本はハーラン・ポッター宛てだ。じいさんは昨日パサデナに飛行機でやってきたんだ。なんか仕事だと。家には行っていない。つかまえるのに苦労したよ。でもやっと話をした。残念だけど去ると告げたんだ」。これを言う時あいつはちょっと目をそらしていた。流しの上にある窓と、その網戸を撫でるタチノウゼンの茂みを見ていたのだ。

「向こうの反応は？」

「残念だって。幸運を祈ってくれたよ。金はあるか、だと」テリーは辛辣な調子で笑った。「金か。MONEY ってのがヤツのアルファベット最初の五文字だからな。たっぷりあると言ってやったよ。それからシルヴィアの姉に電話した。そっちもほぼ同じ話。それだけ」

「聞きたかったんだが、彼女がそのゲストハウスで男という現場をおさえたことはあるのか？」

あいつは首を振った。「やろうとしたこともない。やればむずかしくはなかっただろうけど。毎度のことだし」

「コーヒーが冷めるぞ」

「もういない」

「男出入りは多かったのか。それでも戻って彼女と再婚したじゃないか。かなりの上玉なのはわかるが、それでも――」

「ぼくじゃダメだったんだって言っただろう。まったく、なんでぼくが最初のときに彼女のところを去ったと思ってるんだよ。なんで彼女に金を無心するよりドブ漬けになってたと思うんだよ。ぼく以外でも五人と結婚してるんだぜ。その全員が、ちょっと合図があれば元鞘におさまりはたがはずだ。それも、単に大金目当てじゃなくて」

「かなりの上玉だからな」おれは腕時計を見た。「なんでティファナ発 10 時 15 分便じゃなきゃいけないんだ？」

「その便は必ず空席があるんだ。ロスからなら、ロッキード・コンステレーションに乗ればメキシコシティまで 7 時間だから、だれも山越えの DC3 なんかに乗りたがらない。それにコンステレーションはぼくの行きたいところには止まらないんだ」

おれは立ち上がって流しに寄りかかった。「では口裏をあわせようか。割り込まないでくれ。君は今朝、えらく舞い上がった状態でおれのところに来て、早い便を捕まえたいからティファナまで車を

出せと言った。ポケットには銃を持っていたが、おれはそんなものは見なくていい。君の話だと、これまで散々我慢してきたけれど、昨晚ついにブチ切れた。奥さんが泥酔して男がいっしょだったんだ。君は家を出てトルコ風呂に行き朝まで時間を潰し、奥さんの最も近い親類二人に電話をして、腹づもりを話した。どこへ行くかはおれの知ったことじゃなかった。君はメキシコに入る必要書類を持っていた。その行き方もおれの知ったことじゃない。おれたちは友だちだから、頼まれたらこっちは深く考えずに何でもやる。そりゃそうだろう。金はもらったりしていない。君は車はあったが、感情が高ぶりすぎて自分で運転したくなかった。それもおれの知ったことじゃない。君は感情的な人間だし戦争でひどい傷も負ってる。たぶん君の車を拾って、保管用にどこかの車庫に突っ込んでいたほうがいいな」

あいつは服を探して、革製キーホルダーをテーブル越しによこした。

「話としてはもっともらしいかな？」

「聞き手による。まだ終わっちゃいない。いま着てる服と、義理の父親からの少しのお金以外は何も持ち出さなかった。ラ・ブレアとファウンテンの交差点に停めた見事なマシンも含め、彼女にももらったものはすべて置いてきた。立ち去るならできる限り身ぎれいにして、きれいさっぱり立ち去りたかった。よおし。もっともらしいな。じゃあヒゲを剃って着替えてくる」

「なぜここまでしてくれるんだい、マーロウ？」

「ヒゲ剃ってる間に一杯やってろ」

コーナーの隅で背中を丸めてすわっているあいつを残して出た。まだ帽子とライトトップコートを着たままだ。だがずっと生気が戻ってきた。

洗面所でヒゲを剃った。ベッドルームに戻ってネクタイを締めていると、あいつがやってきて戸口に立った。「万が一のためにカップは洗っておいたよ。でも考えて見たんだ。あなたが警察を呼んだほうがいいんじゃないかって」

「自分で呼べよ。おれは警察に話すことなんかない」

「呼んでほしいの？」

おれはキッとふり返ってにらみつけた。そしてほとんど怒鳴りつけた。「まったくこの野郎が。頼むから話を蒸し返さないでくれよ！」

「ごめん」

「ごめんが聞いてあきれろ。君みたいな連中はいつだって後悔ばかりで、いつも手遅れなんだ」

彼は身を翻して廊下沿いに居間に戻った。

着替えを終えて家の裏の戸締まりをした。居間にいくとあいつは椅子の中で寝落ちして、頭を片側に片づけ、顔色を失い、全身が疲れて脱力していた。衰れっぽかった。肩に触れるとゆっくり目をさまし、まるで自分のいるところからおれのところまで、ずいぶん距離があるかのようにだった。

こっちに注目してもらったところでおれは言った。「スーツケースはどうする？ まだあの白いブタ革の代物がたんすのてっぺんの棚にあるが」

彼は興味なさげに言った。「空っぽだよ。それに目立ちすぎる」

「荷物が無いともっと目立つ」

ベッドルームに戻って、衣装だんすの段の上に立ち、高い棚から白いブタ革の代物を引っ張り下ろした。頭のすぐ上に、天井の四角い点検口があったので、それを押し開けて思いっきり腕を突っ込みあいつの革製キーホルダーを、ほこりっぽいつなぎ梁だかなんだかの向こうに落とした。

スーツケースを持って下りるとほこりを払い、いくつかそこに詰め込んだ。着たことのないパジャマ、歯磨き粉、追加の歯ブラシ、安手のタオル何枚か、手ぬぐい、綿のハンカチのパック、15セントのひげそりクリーム、カミソリの替え刃セットにおまけでついてくるカミソリ。使用済みのものはなく、あいつ自身のもののほうが高級だろうという以外は目立つものもない。まだ包装紙にくるまれたバーボン1パイントも加えた。スーツケースに鍵をかけ、鍵穴の一つに鍵をさし玄関まで運んだ。あいつはまた寝落ちしていた。それを起こさずドアを開け、スーツケースをガレージまで運んで、コンバーチブルの前部シートの裏に入れた。車を出し、ガレージに鍵をかけて階段を上がり、あいつを起こした。施錠を終えると出発した。

スピードは出したが、つかまるほどは飛ばさなかった。南下する道中はほとんど口をきかなかった食事に停まったりもしなかった。そこまでの時間はなかった。

国境の係員たちは何も言わなかった。ティファナ空港のある風の強いメーサの上で、おれはオフィス近くに車を止め、テリーが切符を買う間にただすわっていた。DC-3のプロペラはすでにゆっくり回転を始めていた。単なる暖機のためだ。背の高いハンサムなパイロットが灰色の制服で、四人集団とおしゃべりをしていた。隣にはスラックス姿の若い女、小柄な中年男、彼がチビに見えるほど背の高い灰色の髪の女性だ。明らかにメキシコ人とわかる三、四人もぱらぱらと立っていた。乗客はそれで全部らしい。タラップはすでにかけていたが、だれも急いで乗ろうとはしていない。そこへメキシコ人の乗務員がタラップを降りてきて、みんなを待って立っていた。拡声器装置はないようだ。メキシコ人たちは搭乗したが、パイロットはまだアメリカ人たちとしゃべっている。

となりにでかいパッカーが停まっていた。車を降りて、そいつの所定場所におかれた自動車登録証¹⁵を一瞥した。余計なことに首を突っ込むのは悪いクセだ。首を車の窓から引っ張り出すと、さっきの背の高い女がこっちのほうを見つめていた。

15 弾十六様に、免許証ではなく自動車登録証だにご指摘いただきました。ありがとうございます！

そこへテリーがほこりっぽい砂利を横切ってやってきた。

「準備万端。ここでお別れだ」

あいつは手を差し伸べた。おれはそれと握手した。もうかなり元気なようで、単に疲れただけ、ひたすら疲れ切って死にそうに見えるだけだった。

オールズモービルからブタ革スーツケースを持ち上げて、砂利の上に置いた。あいつは怒ったようにそれを見つめた。

「いらないって言っただろう」と決めつけるように言う。

「言い酒が1パイント入ってるぜ、テリー。それにパジャマとかいろいろ。それもすべて名無しだ。入らなければ質に入れろ。あるいは捨てろよ」

「わけがあるんだ」とあいつは頑固に言った。

「それはおれも同じだ」

あいつはいきなりにつこりした。スーツケースを手にとると、残りの手でおれの腕を握りしめた。「わかったよ、相棒。あんたが大将。それと忘れないでくれ、事態が面倒なことになってきたら、いくらでも支援するから。ぼくに何の借りもない。何杯かいっしょに飲んで仲良くなって、ぼくが自分語りしすぎたんだ。コーヒー缶の中に百ドル札五枚おいてきた。怒らないでくれよ」

「また余計なことを」

「こっちは手持ちの金の半分も使い切れないんだから」

「グッドラック、テリー」

アメリカ人二人がタラップを上がり飛行機に搭乗しかけていた。ずん胴で幅の広い色黒の顔がオフィス棟のドアからのぞき、手招きして指さした。

「搭乗だぜ。君が彼女を殺さなかったのはわかってる。だからこここに來たんだ」

あいつは身構えた。全身が硬直した。ゆっくりと背を向けて、そしてふり返った。

「ごめん。でもそこはあなたがまちがってる。飛行機まではゆっくり歩くから、いくらでもぼくを止める時間はある」

あいつは歩いた。おれはそれを見守った。オフィスの戸口の男は待っていたが、別にさほど苛立ってはいない。メキシコ人はめったに苛立たない。手を下ろしてブタ革スーツケースを叩き、テリーにニヤリとした。そして脇にどいて、テリーがドアをくぐった。しばらくしてテリーは反対側のドアから出てきた。到着時に税関職員のいるところだ。まだゆっくりと、砂利を横切ってタラップまで歩いた。そこで立ち止まり、こっちを見た。合図も手を振ったりもしない。おれもしなかった。そして飛行機に乗り込み、タラップが引っ込められた。

おれはオールズモービルに乗り込み、エンジンをかけてバックさせると向きを変え、駐車スペース半ばまで横切った。背の高い女と小柄な男がまだ滑走路脇にいる。女性はハンカチを取りだして振った。飛行機は滑走路の反対側まで進み、大量のほこりを巻き上げた。そして向こう端で向きを変えると、エンジンが轟音となって回転数を上げた。前進しつつ、ゆっくりと加速する。

その背後でほこりが雲となり巻き上がる。そして離陸した。それが風の強い空中にゆっくり浮かび何もない青空の中へ南東に向かうのを眺めた。

そして去った。国境ゲートではだれもこっちを見もしなかった。おれの顔が時計の針ほどの意味もないとでも言うように。

[6]

ティファナからの戻りは長い道のりだし、州の中でも最も退屈な車旅の一つだ。ティファナは何もない。金がほしいだけ。車ににじりよってきて、でっかいせつない目つきで「十セントください、旦那さん」と言うガキが、その次の文で妹を売りつけようとしてくる。ティファナはメキシコじゃないあらゆる国境町は、国境町以外の何物でもない。ウォーターフロントがウォーターフロント以外の何物でもないのと同じだ。サンディエゴ？ 世界で最も美しい港の一つなのに、そこには海軍と漁船何隻かしかない。夜にはおとぎの国だ。波は聖歌を歌う老婆のように優しい。だがマーロウは家に帰って調べ物があるんだ¹⁶。

北への道は水夫の舟歌並に単調だ。町を抜け、丘を下り、海岸を走り、町を抜け、丘を下り、海岸を走る。

戻ると二時で、そいつらがおれを待っていた黒いセダンは警察の紋章もなく、赤色灯もなく、アンテナ二本だけで、そんなのは警察車両だけがつけているわけじゃない。階段を半分上がったところでそいつらが出てきて怒鳴った。ありがちなスーツ姿のありがちな二人組で、ありがちなこわばっただるそうな動きで、世界が固唾をのんで二人からの指示待ちしてるとでも言わんばかり。

「マーロウはあんたか？ 話がある」

バッジをちらりと見せた。こっちに見えた限りでは害虫駆除業者でもわからない。灰色ブロンドでむっつりしている。そのパートナーは背の高いハンサムでさっぱりした男で、緻密な意地悪さを漂わせている。学のある暴漢だ。虎視眈々とした目、辛抱強く慎重な目、冷たく見下す目、オマワリの目をしている。警察学校の卒業パレードで獲得する目だ。

「グリーン巡査部長、本署殺人課。こちらはデイトン巡査」

おれは階段を上がってドアの鍵を開けた。大都市の警察とは握手しない。そこまで近づくと近すぎる。

二人は居間にすわった。おれが窓を開けるとそよ風がささやく。話すのはグリーンだった。

「テリー・レノックスという男。知ってますよね」

「ときどきいっしょに飲みますよ。エンシーノに住んでいて、大金持ちと結婚してる。住まいには行ったことがない」

「ときどき。どのくらいときどき？」とグリーン。

¹⁶ Count the spoons. 村上と田口は「スプーンを数える」と直訳しているが、これは調べ物をする、という意味。テリーが妻殺しを告白したんだから下手すりゃ共犯だ。調べないとヤバイじゃん。田口は「テリーに盗まれなかったか」と余計な説明まで加えているが、スプーン盗むほど金に困ってないでしょ。清水は例によって潔く無視。

「漠然とした表現ですよ。そういうつもりで言ってます。週に一度から2ヶ月に一度くらい」

「奥さんには会った？」

「一度だけ、ほんの一瞬、二人の結婚前に」

「最後に会ったのはいつどこで？」

おれはエンドテーブルからパイプを取るとタバコを詰めた。グリーンは身を乗り出して近寄った。背の高いヤツはもっと遠くにすわり、ボールペンを赤い縁のメモ帳に構えている。

「ここでこっちは『何があったんですか』と尋ねて、そちらは『質問するのはこっちです』というわけですか」

「なら答えてくださいよ、え？」

おれはパイプに火をつけた。タバコがちょっと湿りすぎている。きちんと火をつけるまでに、しばらくの時間とマッチ三本がかかった。

グリーンが言う。「時間はあるが、すでに待ち時間でかなり取られてるんだ。だからさっさとしてくれよ、旦那。こっちはあんたがだれか知っている。そしてあんたも、我々が腹をすかせたくてここに来てるわけじゃないのは承知してるはずだ」

「考えてただけですよ。ヴィクターズには結構よく出かけたなあ。グリーン・ランタンと、ブル・アンド・ベアにはそれほどでもなかった—これはストリップの端にあってイギリス風のインっぽく店用としてるところで—」

「はぐらかすな」

「死んだのはだれ？」

デイトン巡査が口を開いた。厳しい成熟した、おれをなめるな風の声をしていた。「だまって質問に答えろ、マーロウ。型通りの捜査をしてるんだ。それだけわかればいい」

疲れて苛立っていたのかもしれない。少し後ろめたかったのかもしれない。お知り合いになるまでもなく、こいつは虫が好かなかった。カフェテリアの反対側からこいつを見ただけでもひどいめにあわせなくなるくらいだ。

「引っ込んでろ兄ちゃん。そんなたわごとは少年課でやってろ。未成年相手だってそんな物笑いの種だ」

グリーンはクスクス笑った。デイトンの顔は何一つこれと言って変わらなかったのに、いきなり十歳も歳を喰い、二十歳分も険悪になったように見えた。鼻の吐息がかすかに風切り音をたてた。

「司法試験に受かってるんだ。デイトンになめた真似をしないほうがいいぞ」とグリーン。

おれはゆっくり立ち上がり、本棚に向かった。カリフォルニア州刑法の製本版を抜き出した。そしてデイトンに差し出した。

「お手数ですが、おれが質問に答えなきゃいけないと書かれた条文をご指摘いただけませんかね」

デイトンは徹底して自分を抑えていた。おれを殴るつもりで、それはお互いわかっていて、だが機会をうかがっていた。つまり出過ぎたことをしてもグリーンがかばってくれるとは信じていないということだ。

デイトンは言った。「すべての市民は警察に協力しなくてはならない。あらゆるやり方で、物理的な行動でさえ協力すべきで、特に警察が尋ねる必要があると判断し、罪科を及ぼすものでない性質のあらゆる質問に答えることで協力すべきである」。これを言う彼の声は硬く、明瞭で滑らかだった。

「そういう結果になるのは、主に直接間接の恫喝プロセスを通じてのことだ。法律的にはそんな義務は存在しない。だれであれ、いつでも、どこでも、何も警察に話す必要はないんだ」

グリーンは苛立った。「ええい、だまれ。はぐらかしてるだけなのは自分でもわかってるんだろうに。すわれ。レノックスの妻が殺された。エンシーノの自宅のゲストハウスでだ。レノックスは高飛びした。とにかく見つけれない。だから殺人事件の容疑者を探してる。さあ気が済んだか？」

おれは本を椅子に投げ出して、グリーンからテーブルの向かいにある長椅子に戻った。「それでなぜおれのところに？ その家には近づいたこともない。それは言った通りだ」

グリーンは自分の太ももを上から下へ、上から下へと叩いた。こっちに向かって静かに笑った。デイトンは椅子で不動だ。その目はおれを食い尽くす。

「過去24時間以内に、あんたの電話番号が彼の部屋のメモ帳に書かれたからだよ。日付メモで昨日のは破り取られていたが、今日のページで書いた跡が読み取れたんだ。あんたにいつ電話したのかはわからない。ヤツがどこに行ったのか、なぜ、いつ行ったのかわからない。だが質問しなきゃならんだ、モチな」

「なんでゲストハウスで？」答えてもらえるとは思わなかったが、答がきた。

グリーンはちょっと赤面した。「どうもご婦人はかなりそこによく出かけたらしいんだ。夜に。お客を迎えて。使用人は木々の間から光の示すものが見えたんだ。車も往き来し、時には夜遅く、ものすごく遅くに出入りした。もうたくさんってなるだろ、え？ とぼけても無駄だ。レノックスが下手人だよ。あいつはそっちのほうに夜一時くらいにでかけた。執事がたまたま見ていたんだ。二十分かそこらして、一人で戻ってきた。その後は何も。明かりは点けっぱなし。今朝はレノックスがいない。執事がゲストハウスに立ち寄る。ご婦人はベッドで人魚まがいに素っ裸、そしてそれがだれだか、執事は顔で判断したんじゃない。実質的に顔はないも同然。サルのブロンズ像でたたき潰されてた」

「テリー・レノックスはそんなような真似はしないだろう。確かに女は浮気した。今さらねえ。昔からやってたことだ。二人は離婚して再婚している。それであいつが喜んだわけじゃなかろうが、でもいまになってカッカするはずがあるか？」

グリーンは辛抱強く言った。「その答はだれも知らん。しょっちゅう起こることだ。男も女も。散々我慢に我慢を重ねてくる。そしてキレる。たぶん自分でも理由はわからないだろう、なぜその特定の場面に自分が発狂したのか。でも発狂して、だれかが死んだ。だからこっちは仕事ができる。だからあんたに簡単な質問を一つしてるんだ。だからふざけるのはやめろ。さもないと連行する」

デイトンが苦々しげに言った。「巡査部長、こいつは話しませんよ。あの法律書を読んで。法律書を読む連中と同じで、こいつも法が本の中だけにあると思ってるんだ」

グリーンは行った。「お前はメモだけ取ってりゃいいんだ。頭なんか使おうとするな。いい子にしてりゃ警察のタバコパーティーで『マクレー母さん』でも歌わしてやる」

「巡査部長、あんたなんかクソ食らえだ、その階級に見合った敬意を込めて言ってよろしければ」

「あんたとこいつとでやりあったらどうだ。こいつが倒れたら支えてやるから」とおれはグリーンに言った。

デイトンはメモとボールペンをととても慎重に脇に置いた。目にぎらつきをたたえて立ち上がった。歩いてきておれの前に立った。

「立てよ、お利口さんが。おれが大卒だからって、おまえみたいうすらぼけになめられてたまるか」

立ち上がりかけ、まだバランスが取れていないときに殴られた。きれいな左フックでクロスの右が入った。ベルが鳴ったが、夕食のベルではない。おれはドスンと座り頭を振った。デイトンはまだそこにいた。にっこりしている。

「もう一度やろう。さっきはまだ準備ができてなかったろう。フェアとは言えない」

おれはグリーンの方を見た。ささくれでも観察しているかのように自分の親指を見ている。おれは動きもしゃべりもせず、グリーンが顔を上げるのを待った。また立ち上がれば、またデイトンに殴られる。そうしなくても殴られるかもしれない。だがおれが立ってあいつが殴ったら、こっちはヤツをぶちのめすだろう。いまのパンチで、彼が純粹にボクサーでしかないのが証明されたからだ。正しい場所にパンチを入れたが、おれを参らせるにはあれが何発も必要だ。

グリーンはほとんど放心したように言った。「なんとも賢明だな、坊主。こいつにまさに求めていた通りのものを与えてやったんだから。生ぬるい一発だ」

そして顔をあげて穏やかに言った。「もう一度、記録のために聞くぞ、マーロウ。テリー・レノックスを最後に見たのは、いつ、どんなふうに、何が話され、たったいまどこから戻ってきたか。言うか一言わないか？」

デイトンはしなやかに立って、きれいにバランスを取っていた。その目には柔らかく甘い輝きがあった。

「別の男のほうはどうなんだ？」と彼を無視して訪ねた。

「どの別の男の話だ？」

「情人、ゲストハウスの。素っ裸。彼女がそこにでかけたのはソリテアをするためじゃなかったんだろ」

「それは後の話だ――夫を捕まえてからだ」

「結構。すでに罪をかぶせる相手がいるのに、お手数なことだ」

「しゃべらないと連行するぞ、マーロウ」

「重要参考人として？」

「重要が聞いて呆れる。容疑者だよ。殺人の事後従犯容疑。容疑者逃亡幫助。おれの見立てでは、あんたあいつをどこかに運んだな。そしてこの時点では、おれの見立てだけで十分だ。最近の殺人課課長はきつくなってるぜ。ルールブックは知ってるが、よそ見をすることもある。するとお前も惨めなことになるかもな。何とかしておまえから供述書を取るからな。そしてそれを取るのがむずかしいならそれだけ真面目に必要なものってことだ」

「そんなの、こいつにはただのご託ですよ。こいつは本を読んでる」とデイトン。

グリーンは平然と言った。「だれにとってもご託だよ。それでも効く。なあ頼むぜマーロウ。正式に拘束するぞ」

「わかった。やれよ。テリー・レノックスは友だちだった。かなりの感傷をあいつには注ぎこんでるオマワリが吐けと言ったくらいで潰したくないくらいに。あんたらはあいつの容疑を確定させたし、いま聞いた話よりずっと強い容疑かもしれない。動機、機会、逃亡の事実。動機は今さらもので、とっくにどうでもよくなり、ほとんど再婚条件の一部だ。そんな取引は感心したもんじゃないが、でもあいつはそういうヤツなんだ――ちょっと弱くてえらく優しい。その残りは、何の意味もない。単にあいつが、妻が死んだら自分がお手軽な標的にされると知っていたというだけだ。陪審裁判が開かれて証人喚問されたら、質問には答えざるをえない。あんたの質問に答える義理はない。グリーン、あんたがいいやつなのはわかる。同時にあんたのパートナーは、ありがちなバッジをちらつかせた権力亡者なのもわかる。おれを本当の面倒に叩き込みたいなら、あいつにもう一度殴らせろ。あいつのクソ鉛筆をへし折ってやる」

グリーンは立ち上がり、悲しげにおれを見た。デイトンは動かなかった。一発屋のタフガイなのだタイムアウトを取って背中を撫でてもらう必要がある。

「電話を借りるぞ。答はわかってるがな。お前なんざ小者だよ、マーロウ。とんでもなく小者だ。おいそこをどけて」。最後のところはデイトン向けだった。デイトンは背を向けて戻りメモ帳を手にとった。

グリーンは電話へと部屋を横切り、受話器をゆっくりと持ち上げ、その平板な顔にくどくどしい報われない叱責でシワが刻まれた。これが警察の困ったところだ。連中の根性を嫌ってやろうと身構えていると、こっちを人間扱いする一人に出会うのだ。

警部は有無を言わず連行しろ、とのこと。

手錠をかけられた。家捜しはなかった。これは警察にしてはうかつに思えた。もしかすると、おれが経験豊かすぎるので、身を危険に曝すようなものを家に置くはずはないと思ったのかもしれない。もしそうならお門違いだ。それにもし家捜しに多少なりとも真面目に取り組んだら、テリー・レノックスの車のキーを見つけたはずだ。そしてあの車が見つかれば（遅かれ早かれ見つかるのだ）、あの鍵をあわせて、あいつがおれといっしょだったのがバレる。

実のところ、結果的に、それはまったく無意味だった。車はどこの警察にも見つかることがなかった。夜間のどこかで盗まれ、おそらくはエルパソに運ばれ、新しいキーと偽造書類をつけられ、やがてメキシコシティの市場で売りに出された。この手順は決まり切ったものだ。おおむねその金はヘロインという形で戻ってくる。ゴロツキ連中にいわせれば、よき隣人政策の一環だ。

[7]

その年の殺人捜査部長はグレゴリウス警部で、最近は希少ながら決して絶滅したわけじゃない種類のオマワリ、犯罪解決にまぶしい電球尋問、しなる棍棒、腎臓蹴り、股間膝うち、みぞおちパンチ、尾てい骨棍棒を使う種類のヤツだ。6ヶ月後にこいつは大陪審での偽証罪で有罪となり、裁判なしでクビ、ワイオミングの自分の農場で、でっかい牡馬に蹴り殺されることになる。

いまはおれがこいつの獲物だった。自分のデスクの向こうにすわり、上着は脱いで袖はほとんど肩までまくり上げていた。レンガ並のつるっばげで、中年の筋肉質男の常として腹に肉がつき始めていた。目は魚のような灰色。でかい鼻に切れた毛細血管が網の目となっている。コーヒーをすごい音ですすっている。重たい強い手の甲には剛毛が密生している。耳からは灰色になった毛の束が突き出している。机の上の何かを手にとるとグリーンを見た。

グリーン曰く「そいつの罪状といえば我々に何も話さないってことだけです、警部。電話番号のせいでこいつを調べることになりました。どこかへ車で出かけてたのに、行き場所を言いません。レノックスとかなりの知り合いで、最後にいつ会ったか言いません」

グレゴリウスはどうでもよさそうに言った。「タフなつもりか。それは変えてやろう」まるでどの道気にもしていないとでもいう口調だった。たぶん本当に気にしていないのだろう。彼にとってタフな相手などいない。「重要なのは地区検察官がこいつはえらいニュースになると思ってることだ。無理もないよな、あの女のおやじがアレだからな。検察さんのためにこいつの鼻をほじってやるか」

タバコの吸い殻や空の椅子を見るような目でおれを見た。何か視線の先にあるもので、まったく興味のない代物。

デイトンはうやうやしく言った。「こいつの態度はすべて、何も言わずにすむような状況を作りだすよう考案されているのはかなり明らかです。法律を引用してみせて、私を挑発して殴るよう仕向けました。度が過ぎた真似をしてしまいました、警部」

グレゴリウスは冷たくそいつを見た。「こんなちんぴらに刺激されるようじゃ甘いな¹⁷。だれが手錠を外した？」

グリーンは自分だと言った。グレゴリウスは言った。「掛け直せ。きつく。活を入れてやらんな」

¹⁷ つまらん挑発にすぐ乗ったおまえはバカ、という主旨なんだが、田口訳だけは「おまえもそんな芸当ができないとな」となっている。挑発する (needle) が能動態なので愚直に訳したんだろうが受動態を文法通り使ったりしない雑なしゃべり方なだけだと思う。挑発にのったまぬけな部下に「おまえも挑発できるようになれ」と言うって、意味がわからん。

グリーンは手錠をかけなおそうとした。「背中だ」とグレゴリウスが吠えた。グリーンは後ろ手に手錠をかけた。すわっている椅子は硬かった。

「もっときつく。食い込ませろ」とグレゴリウス。

グリーンはきつくした。手の感覚が麻痺してきた。

グレゴリウスはやっとおれを見た。「さあ話せ。手早くな」

おれは答えなかった。やつは後ろにもたれてニヤリとした。手がゆっくりとコーヒーカップに伸ばされ、それを握った。ちよつと身を乗り出す。カップがサツと動いたが、おれは椅子から横倒しになってかわした。肩から強く着地して、転がるとゆっくり立ち上がった。手はもう完全に感覚がなくなっていた。もう何も感じない。手錠の上の腕が痛み始めていた。

グリーンの手伝いで椅子に戻った。その背とシートに濡れたコーヒーの染みがついていたが、ほとんどは床の上だった。

「コーヒーはお嫌い、と。敏捷、動きは速い。反射はいい」とグレゴリウス。

みんな無言だった。グレゴリウスは魚の目でおれをねめつけた。

「旦那、ここじゃな、探偵免許なんざ名刺と同じだ。さあ供述しろ、最初は口頭だ。後で書き取る。何も抜かすなよ。おまえの動きすべてを、そうだな、昨日の夜十時から説明してもらおうか。すべてだぞ。この課は殺人捜査をしていて、第一容疑者が姿を消してる。おまえはそいつとつながりがある男が女房の浮気を見つけて、頭を生肉と骨と血まみれの髪にするほどぶちのめす。おなじみのブロンズの小像だ。独創性はないが話は通る¹⁸。それについてどっかのクソ私立探偵が法律談義なんかするつもりならだな、旦那、ずいぶんときつい目にあうことになるぜ。この国で法律書で仕事がこなせる警察なんざ、いやしないんだよ。お前は情報を持ってる。こっちはそれがほしい。何も知らないと言ってもよかったし、こっちはそんなの信じないとも言えた。だがおまえは知らないとさえ言わなかったおれ相手にとぼけられると思うなよ、あんちゃん。そんなの一文の価値もない。さあ吐け」

「この手錠を外してくれるか、警部。つまりおれが供述したら？」

「かもな。さっさとしろ」

「過去24時間はレノックスを見かけていないし、話してもいないし、いまの居場所も見当つかないといったら—それで満足してくれるか、警部」

「かもな—おれは信じないが」

「あいつを見たといって、時と場所も話すが、あいつが誰かを殺したとかそもそも犯罪があったことさえまるで知らなかったし、さらにいまあいつがどこにいるかも見当つかないといっても、あんたはちっとも満足しないだろう、え？」

¹⁸ Not original but it works という原文、既訳はすべてその前の凶器としてのブロンズ像の話だと解釈しているが、次の「それについて探偵なんかに口をはさませない」という発言から見て、むしろ彼らの組み立てた事件のストーリーすべてを指すと見るべき。

「もっと細かい話があれば聞いてやるかもな。どこで、いつ、どんな様子で、どんな話をして、どこへ向かっていたとか。そこから何か出てくるかもしれん」

「あんたのやり方だと、たぶんそこから出てくるのは、おれが事後従犯にされることだろう」

警部のあごの筋肉が硬直した。

「どうだろうなあ。法的なアドバイスがいる。協力したいのはやまやまなんだ。地方検察局からだれかを同席させるってのはどうだろうか？」

彼は短く耳触りな笑い声をたてた。すぐに終わった。ゆっくり立ち上がりデスクを回ってきた。わたしの近くに身を屈め、片手はデスクの木に乗せてにつこりした。そして表情を変えることなく、鉄の塊のようなげんこつで首の横をぶん殴った。

そのげんこつが動いたのは 20 センチか 25 センチほどにすぎない。頭がもげそうだった。口に胆汁が染み出てきた。そこに血の味が混じっていた。頭の中はひたすら轟音が響いていた。ヤツは相変わらずにつこりしてかがみ込み、左手は相変わらずデスクの上だ。その声はずいぶん遠くからのように聞こえた。

「昔はタフだったが、おれも歳だ。あんたもこたえただろうが、おれからは今のだけだ。市の拘置所には、家畜置き場で働いたほうがいいような連中もいるんだ。そんな連中がここになくてよかったな。そいつらはこのデイトンみたいな、おきれいなへなちょこパンチ屋じゃない。グリーンみたいに子供四人とバラのお庭もない。そいつらのお楽しみは種類がちがう。世の中いろんなやつがいて、こっちもえり好みはできんのよ。自分が何を言うかもしれないとか、ふざけた考えはまだあるのか、そんなのを言うつもりなら¹⁹」

「この手錠では無理だ、警部」それを言うだけでも痛かった。

やつはさらにこちらに身をかがめ、その汗と腐敗ガスの匂いがした。そして身を起こすとデスクをまわり、硬い尻を椅子に沈めた。三角スケール²⁰を手にとってその一辺がナイフであるかのように指を走らせた。グリーンを見る。



「何をグズグズしてる、巡査部長？」

「ご指示を」グリーンは自分の声が大嫌いだとでも言うように歯ぎしりしつつそう言った。

「言われなきゃわからんのか。記録を見るとご大層な経験を積んでるくせに。過去 24 時間のこいつの動きについて詳細な供述を取れ。もっと長いほうがいいかもしれないが、まずはそこからだ。一分刻み

19 この章は、特に警察のせりふを村上春樹訳はいろいろ原文にはない説明や言い回しを追加して、おそらくなんかテレビドラマとか風のいかにもな表現に仕立てている。田口訳も、程度は劣るがその傾向はある。好みもあるだろうが、妙に芝居がかかってしまっているように思うし、水増し感はある。原文通りでも十分に行ける。

20 既訳はどれも three cornered ruler を三角定規と訳しているけれど、三スケのことね。写真参照。製図とかしないと知らないよね。いろんな縮尺の地図ですぐに距離を測るためにあるんでしょう。

でこいつが何をしたか知りたい。署名、立ち会い人、チェックつきだ。二時間で揃えろ。そしたらここに連れ戻せ。清潔、身ぎれい、傷もなしだ。それと部長、もう一つ」

やつは間をおいて、焼きたてジャガイモでも凍り付きそうな目つきでグリーンをにらんだ。

「—こんどおれが容疑者に紳士的な質問をするときには、そこに突っ立って変な目つきしてんじゃねえぞ。こいつの耳をひきちぎったわけじゃねえんだ」

「ははっ」そしてグリーンはおれのほうに向いた。「行くぞ」としゃがれ声で言う。

グレゴリウスはこっちに歯をむき出した。磨いたほうがいい—ひどい汚れ方だ。「じゃあ最後の捨て台詞でも聞こうか、タコが」

おれは礼儀正しく言った。「かしこまりました。おそらくその気はなかっただろうが、あんたのおかげで助かった。デイトン巡査のアシストもあったし。おれがやるまでもなく問題を解決してくれたんだよ。友人を売りたいがる奴はいないが、あんたらの手には敵だって売り渡さない。あんたはただの筋肉バカじゃない、無能だ。簡単な取り調べのやり方も知らない。おれはどっちつかずで、やり方次第でどっちにも転ぶところだった。それをあんたは侮辱し、コーヒーを顔にぶっかけ、絶対逃げられないところにいるおれを殴った。今後は、あんたの壁にかかった時計の時間ですら教えてやらん」

どういうわけか、やつはそこにまったく身動きもせずすわったまま、おれに最後まで言わせておいた。そしてニヤリとした。「あんたはただの、ちょっとしたオマワリ嫌いなんだよ、ご同輩。それだけだ、探偵さん。ただのつまらん警官嫌い」

「警官が嫌われていない場所だってあるんだ、警部。だがそういう場所では、あんたは警官にはならない」

やつはそれも聞き流した。たぶんそれだけ余裕があるんだろう。何度ももっとひどいことを言われてきたはずだ。そのときやつのデスクの電話が鳴った。やつはそれを見てあごをしゃくった。デイトンがササッとデスクをまわって受話器を取った。

「グレゴリウス警部の事務所です。こちらはデイトン巡査」

聞くうちに、かすかに顔をしかめてハンサムな眉根を寄せた。そして穏やかに言った。「少々お待ちください、サー」

そして受話器をグレゴリウスに差し出した。「オルブライト長官です、サー」

グレゴリウスは嫌な顔をした。「なんだと、あのはなたれクソ野郎が、何の用だ？」そして受話器を受け取り、それをしばし手にしたまま顔を整えた。「グレゴリウスですが、長官」

向こうの話を聞いた。「ええ、いまこの事務所にいますよ、長官。いくつか質問してたところで。協力的じゃありません。実に非協力的で……え、何ですって？」突然の凶暴な不快感がやつの顔を幾重にも暗くしかめさせた。額の血が黒ずんでいる。だが声の調子はこれっぽっちも変わらない。「長

官、直接命令なら、署長経由でいただくべきかと……ええ、確認取れるまでそれに沿って動きます。
ええ……いえまさか。だれも指一本触れてませんよ……ははっ、ただちに」

ヤツは受話器をもとのところに置いた。手が少し震えているようだった。目をあげ、おれの顔を横
に通り過ぎてグリーンを見た。「手錠をはずしてやれ」と力なく言った。

グリーンが手錠の鍵を外した。おれは手をこすりあわせ、血が循環してチクチクした感覚が出てく
るのを待った。

「郡の留置所に入れとけ。殺人容疑。地区検察局がこの事件を丸ごとかつさらいやがった。まったく
すてきな仕組みになってやがる」

だれも身動きしなかった。グリーンはおれの近くで、荒い息をついている。グレゴリウスはデイト
ンを見上げた。

「おい、グズグズすんなよ、うらなりが。アイスクリームでもほしいのか？」

デイトンは息を詰まらせそうになった。「ご指示をいただけませんでしたので、捜査部長」

「おれはサーと呼ぶんだ、この野郎。捜査部長と呼んでいいのは巡査部長以上だ。おまえみたいな小
僧はだめだ。わかったな。行け」

「イエッサー」とデイトンはすばやくドアに向かい退出した。グレゴリウスはため息とともに立ち上
がると窓辺に移り、部屋に背を向けた。

「こい、行くぞ」とグリーンがおれの耳元でささやいた。

「おれがそのツラをぶちのめす前に連れ出せ²¹」とグレゴリウスは窓に向かって言った。

グリーンは戸口へ行ってドアを開けた。おれがそこを通ろうとすると、いきなりグレゴリウスが怒
鳴った。「待て！ そのドアを閉めろ！」

グリーンはドアを閉めてそこにもたれかかった。

「おまえ、こっちにこい！」とグレゴリウスはおれに吠えた。

おれは動かなかった。立ってやつを見つめた。グリーンも動かなかった。陰気な間があった。そし
てグレゴリウスが、とてもゆっくりと部屋を横切り、おれの真正面に立った。そのでかい硬い手をポ
ケットに突っ込む。そしてかかとで身体をゆらした。

「指一本ふれてません、か」と歯をくいしばりながら、自分に言い聞かせるように行っただ。目は遠く
を見て無表情だ。口がなにやらけいれんするようだった。

そしておれの顔に唾を吐きかけた。

そして一歩下がった。「よろしい。それだけだ」

21 Kick ~in the teeth は、文字通り歯を蹴飛ばすという意味ではなくて、ひどいめにあわせる、めちゃくちゃにすると
いう意味。清水はまあ正解、村上は意識、田口はそのまま蹴りを入れている。蹴りでも、大きく外している
わけではないけど……

ふり返ると窓辺に戻った。グリーンがまたドアを開けた。

おれはハンカチを探しながらそれを通り抜けた。

[8]

刑事犯罪収監室の第三房には、寝台列車式の二段式寝台があるが、この収監室はさほど満員でもなく、その房は独占できた。刑事犯罪収監室の扱いはかなりよかった。毛布二枚は、清潔でもないが汚れてもおらず、暑さ5センチのボコボコのマットレスが格子状の金属薄板の上に乗っている。水洗トイレ、洗面台、ペーパータオルとヌルヌルの灰色い石けんがある。房室は清潔で殺虫剤の匂いはしない。模範囚が仕事をしてくれる。模範囚のなり手はいつもたっぷりいる。

看守たちが見張ってはいるが賢明な見立てをする。酔っ払いかキチガイかそれっぽく振るまいでなければ、自分のマッチやタバコは取り上げられない。予審までは自分の服を着る。その後はデニムの囚人服を着る。ネクタイなし、ベルトなし、靴ひもなし。寝台にすわって待つ。他にやることはない。

トラ箱ではそんなによくない。寝台も、椅子も、毛布も、何もない。コンクリートの床にねる。トイレにすわり自分の膝にゲロを吐く。惨めさのどん底。この目で見た。

白昼ながら天井の明かりは点けっぱなしだった。この棟の鋼鉄ドアの内側には、ハーフミラーののぞき穴のまわりに鉄格子がはまっていた。照明は鋼鉄ドアの外側から制御されている。夜九時に消灯だれもそのドアから入ってこないし、何も言わない。新聞や雑誌の文の途中かもしれない。カチリという音も予告もない——いきなり暗闇。そしてそこに夏の夜明けまでいて、何もすることがない。寝られるものなら寝て、タバコがあればタバコを吸い、何も考えないよりも気分がマシになるネタがあれば考えるだけ。

拘置所ではだれも人格はない。ちょっとした廃棄問題、報告書の数行だ。そいつをだれが好きか嫌いか、どんな外見か、人生をどうするつもりかなんて、だれも気にしない。もめ事を起こさない限りだれもそいつに反応しない。だれにも虐待されない。求められるのは、静かに正しい房に行って、そこに着いても静かにしていることだけ。戦う相手などないし、怒る対象もない。囚人たちは静かな連中で、敵意もサディズムもない。囚人が怒鳴ったり悲鳴をあげたり、鉄格子を叩いたり、スプーンでそれをカタカタ言わせたり、看守が棍棒を持って入ってきたりという話をいろいろ読んだだろう——そんなのはすべて刑務所の話だ。いい拘置所は世界で最も静かな場所の一つだ。普通の房棟を夜中に歩いて鉄格子から覗いても、見えるのは茶色い毛布の塊や、頭の毛、何も見ていない二つの目だ。いびきが聞こえるかもしれない。ごくたまに、悪夢にうなされるのが聞こえることもある。拘置所では人生が宙づりになり、目的も意味もない。別の房には、眠れない人や、眠ろうとすることさえできない人がいるかもしれない。寝台の縁にすわって、何もしていない。こっちを見るかも知れず、見ないか

もしれない。こっちから見る。向こうは何も言わず、こっちも何も言わない。何も伝えることがないのだ。

房棟の片隅には、第二の鋼鉄ドアがあって面通し室に通じている。その壁の片方には黒く塗られた網戸がある。その奥の壁には身長を示すための寸法入りの線がある。頭上には投光器。一般には朝に夜警担当のシフトが終わる直前にそこに行く。身長を示す線を背に立ち、光がガラガラと照りつけ、網戸の向こうは真っ暗だ。だがそこにはたくさんの人がいる。オマワリ、探偵、強盗されたり襲われたり詐欺にあったり銃をつきつけられて車から追い出されたり一生の蓄えを詐欺で奪われたりした市民など。そいつらは見えないし聞こえない。夜警看守の声は聞こえる。その声は大きくはっきり聞こえる。こっちが芸をする犬であるかのように、あれこれ動作をさせる。彼は疲れシニカルで有能だ。歴史上最長の上演期間を持つ芝居の舞台監督なのに、もう興味が持てないのだ。

「よおし、気をつけ。腹を引っ込めろ、アゴ引いて。肩張って。頭まっすぐ。照明見て。左向け。右向け。また正面向いて、両手を前に出して。手のひら上。手のひら下。袖まくって。目に見える傷なし。髪は濃い茶色、白髪交じり。目は茶色。身長 184 センチ体重およそ 90 キロ。名前、フィリップ・マーロウ。職業私立探偵。はいおつかれさん、マーロウ。終わり。次」

どういたしまして、主任。お手間をかけました。口を開けさせるのを忘れましたね。すてきな詰め物と、きわめて高級な陶製の歯冠も一つあるんだけど。87 ドルもした陶製の歯冠だ。鼻の中も見忘れしましたな、主任。大量の傷痕があるんですぜ。鼻中隔壁手術のせいで、医者がヤブでね！ 当時二時間もかかった。いまや二十分ですむとか。フットボールの試合で受けた怪我なんだよ、主任。パントをブロックしようとして、ちょっと計算ミスったんだ。ブロックしたのがそいつの足だった—ボールを蹴り終えた後のね。15 ヤードのペナルティで、手術の後で 1 センチずつ鼻から引っ張り出した血まみれのテープも、全長がそのくらいだった。自慢してるんじゃないや、主任。単にそうだったというだけ。その手の細部が重要なんですよ。

三日目に所員が朝の真っ最中にやってきて房の鍵を開けた。

「弁護士がきたぞ。タバコは消せ—床でなく」

そいつを便所に流した。彼につれられて会議室に入った。背の高い色白で黒髪の男が、立って窓の外を眺めていた。机の上にはふくれた茶色いブリーフケースがあった。彼は振り向いた。ドアが閉まるのを待った。そして、ノアの箱船から出てきた傷だらけの檜の木製テーブルの奥、ブリーフケース近くにすわった。そのノアもこいつを中古で買ったのだろう。弁護士は打ち出し細工の銀のタバコケースを開いて、自分の前に置き、こちらを眺め回した。

「すわって、マーロウ。タバコはいかがですか？ 私はエンディコット。シューエル・エンディコット²²。です。あなたの弁護を担当するように指示を受けています。費用や経費はあなたには一切かかりません。おそらくここを出たいんじゃないですか？²³」

おれはすわってタバコを一本取った。彼はライターを差し出した。

「またお目にかかれて光栄です、エンディコットさん。前にお目にかかりましたね——あなたが検察局にいた頃に」

彼はうなずいた。「記憶にはありませんが、十分あり得ることです」とかすかに微笑した。「あの役職はいささか性に合いませんでした。どうやらそれほどの荒っぽさがないようで」

「だれの指図です？」

「それは明かさないことになっています。弁護士として受け入れてくれたら、費用の面倒は見てもらえます」

「ということは、あいつが捕まったってことですね」

彼は無表情に私を見据えた。おれはタバコをふかした。フィルター付きのタバコだ。高地の霧を脱脂綿で濾したような味がした。

「レノックスのことなら——いやもちろんそうですね。いいえ——捕まっていません」

「なぜ謎めかすんですか、エンディコットさん。だれがあなたをよこしたのかについて」

「依頼人が匿名を希望しておられるのですよ。これは依頼人の特権です。私を受け入れますか？」

「さあねえ。テリーを捕まえていないなら、なぜおれが拘留されてるんですか。だれも何も質問しにこない。だれも近づいてさえこない」

彼は顔をしかめて、己の長く繊細な指を見下ろした。「スプリンガー地方検察長官が、この事件を自ら担当することにしたんです。まだあなたを尋問するには忙しすぎたのかもしれない。でも罪状認否と予備審問を受ける権利があなたにはある。人身保護手続きで保釈もできますよ。たぶん法律の仕組みはご存じでしょう」

「おれは殺人容疑で拘禁されているんですよ」

彼はいらだたしげに肩をすくめた。「そんなの口実ですよ。ピッツバーグに行く途中で拘束とか、罪状はいくらでもある。たぶん連中が言いたいのは、事後従犯でしょう。レノックスをどこかに連れて行ったんでしょう？」

22 Sewell という名前を既訳は Se-well と切るものと判断してスーウェルとしているが、AI くんによると Sew-ell と切るのが普通だとのこと。スーエルかシューエル、になる。W がリエゾンするのでどっちの表記でも原音とそんなにちがわず、まあどうでもいいんだが。

23 既訳はどれも、この弁護士がいきなり上から目線のため口をたたくんだが、一応礼儀を知ってるはずの弁護士だし、基本は敬語じゃないかと思う。後の方でマーロウの青臭さにうんざりして慇懃無礼にはなるけれど。これに対し、マーロウはピントはずれの憶測で見切ってるつもりなので、ハナからえらくぞんざいな口調。

おれは答えなかった。味気ないタバコを床に落として踏みつけた。エンディコットはまた肩をすくめて顔をしかめた。

「じゃあそうしたことにしておきましょう、単に議論上の仮定として。従犯にするには、意図を証明しなきゃいけない。この場合、犯罪が行われたと知っていて、レノックスが逃亡しているを知っている、ということです。それでも保釈はできます。もちろんあなたは本当は重要参考人です。しかしこの州では法廷命令がなければ重要参考人として収監はできない。裁判官が宣言しない限り重要参考人にはならない。でも法執行の連中は、いつもやりたいようにやる方法を見つけるんです」

「そうなんすよね。デイトンという刑事に殴られた。グレゴリウスっていう殺人課の課長がコーヒーを投げつけ、静脈が破裂しそうなほど派手に首を殴った—まだ腫れてるのが見えるっしょ。そしてオルブライト警察長官からの電話で、おれをボコボコ係に引き渡せなくなると、顔に唾を吐きやがったいやおっしやるとおりっすね、エンディコットさん。当局の連中はいつだって好き勝手できるんだ」

彼はいささかキツとして腕時計を見た。「保釈で出たいのか、出たくないのか」

「ありがとう、出たくないっすよ。保釈を受けたら世間の目には半分有罪だ。後で無罪になれば、賢い弁護士がついたってことで」

「ばかばかしい」と彼は苛立たしげに言った。

「はいはい、ばかばかしいですね。おれはばかなもんで。そうでなければこんなところにはいませんよ。レノックスと接触してるなら、おれにちょっかい出すなと言っといってくださいよ。あいつのためにここにいるんじゃない。自分のためにいるんだ。文句はない。おれの稼業の一部なんだ。おれの仕事では、みんなトラブルを抱えてやってくる。でかいの、小さいの、でも常に警察には持っていきたくないトラブルですよ。警察バッジを持ったゴロツキに小突きまわされたくらいで洗いざらい吐くようなやつなら、客はすぐに途絶える」

彼はゆっくりと言った。「おっしやりたいことはわかりますよ。が、一つ訂正させてください。私はレノックスとは接触しておりません。ほとんど会ったこともない。私はあらゆる弁護士の常として法廷の所属です。レノックスの居場所を知っているなら、地区検察局からその情報を隠すわけにはいかない。せいぜいできるのは、彼と面会した後で、指定の場所と時間に彼を引き渡すよう同意することくらいです」

「おれを助けるためにあんたを寄越すようなヤツなんて、他にはいない」

「私をウソつきだとおっしやる？」彼は手を下ろしてタバコの吸い殻をテーブルの下でもみ消した。

「確かヴァージニア州の方でしたよねえ、エンディコットさん。この国ではなにやら歴史的にヴァージニア出身者に歴史的な思い入れがございましてね。南部の義侠心と榮譽重視の精華とだれもが思っておりますって²⁴」

彼は微笑んだ。「すてきな表現ですな。本当にそうならいいのにとおっしゃいますよ。だがお互い時間の無駄ですな。あなたに常識のかけらでもあったら、警察にはもう一週間もレノックスには会っていないと言ったでしょうに。別に本当でなくていい。裁判で宣誓したら本当の話をすればいいだけのこと。警察に嘘をいっても犯罪にはならない。向こうもウソを期待しているんです。彼らとしてもウソをついてくれるほうが、だんまりを決め込まれるよりずっと嬉しい。だんまりは向こうの権威を露骨に踏みにじるに等しいですからね。そんなことをして何の得があるんですか？」

答えなかった。実は自分でも答えを持ち合わせていなかった。彼は立ち上がって帽子に手を伸ばしタバコケースをパチンと閉じてポケットに入れた。そして冷ややかに言った。

「そんなに大立ち回りを演じたかったんですか²⁵。権利をふりかざし、法律がどうのこうの。なんともおめでたい。もっとうまいかけひきもできる方でしょうに。法は正義じゃない。きわめて不完全な仕組みでしかない。ドンピシャの手順をきっちり踏んで、さらにツキがあれば、答の中に正義が出てくるともあるという程度のものです。法はそういう仕組みを意図したものでしかない。どうやら助けてほしい気分じゃないようですね。では失礼しますよ。気が変わったら連絡してください」

「あと1日2日ほどがんばりますよ。テリーをつかまえたら、どうやって逃げたかなんてだれも気にしない。裁判をどんなサーカスに仕立てられるかしか考えない。ハーラン・ポッター氏令嬢の殺害は全国ニュースだ。スプリンガーみたいな人気取り野郎は、このお芝居に便乗して検察長官にも上り詰められるし、そこから知事の椅子も目指せるし、そこから――」おれは口を閉じてあとは空中に漂わせた。

エンディコットはゆっくりと見下すような微笑を浮かべた。「どうもハーラン・ポッター氏のことがあまりわかりではないようですな」

「そしてレノックスがつかまらなければ、どうやって逃げたかなんてそもそも知りたがらないでしょう、エンディコットさん。すべてをさっさと忘れてしまいたいだけだ」

「なんともご慧眼ですなあ、マーロウ」

24 既訳すべて直訳だが、これはマーロウとして精一杯の皮肉のつもり。「あーらヴァージニア出身の聖人君子のあなたが、ウソついてるなんて思いもよりませんわ」というわけで、実質的に「そうだウソつき野郎」と言うに等しく、だからこのあと弁護士も急に口調が冷たくなる。その皮肉らしさを訳文でも出したほうがいいのでは。既訳だと皮肉が伝わりにくいと思う。それは読者が自分で読み取れ、という立場もあるけど……

25 このあたりから、弁護士はずっとマーロウの無意味な虚勢に対する冷静な嫌味を続けていて、村上春樹訳はおおむねそれを表現できているが、田口訳はなぜか全体に妙な直訳調と「機略縦横」とかむずかしげな表現で通しているのは不思議。ちなみにこれは誤訳。その「機略縦横」にあたる原文 *ingenuous* は、そういう巧妙とか創意工夫に富んだという意味ではない。*ingenuity* が創意工夫の意味なのでついまちがいがちだが、これは率直な、無邪気な、という意味（最近では英語圏の人でもまちがえるので気持はわかるが）。弁護士はマーロウをはっきりバカにしているのだ。村上「たいしたものじゃないか」という、どうにでも取れる訳になっている。

「時間ならたっぷりありましたからね。おれがハーラン・ポッター氏について知っていることといえば、一億ドルもの資産を持ってるはずで、新聞も九紙か十紙持ってるってことだけだ。報道宣伝のほうはどんな具合なんです？」

「報道宣伝？」それを言う彼の声は氷の冷たさだった。

「そうとも。マスコミからだれもインタビューに来てないんだ。おれはこの一件で新聞で大騒ぎするつもりだったんですよ。そうすれば仕事もいっぱい入ってくる。友だちを裏切るより牢屋行きを選んだ私立探偵ってね²⁶」

彼はドアに向かってドアノブに手をかけたところで振り向いた。「おもしろい方ですなあ、マーロウ。だがいささか子供っぽい。確かに、一億ドルあれば大量に報道宣伝は買えますとも。さりながらご友人よ、そのお金を賢明に活用すれば、大量の沈黙も買えるのですよ²⁷」

そしてドアを開けて出ていった。所員が入ってきて刑事犯罪収監室の第三房に連れ戻した。

「エンディコットがついたなら、ここもそう長くはないね」と鍵を閉めつつ、彼は親しげに言った。そうだといいね、とおれは答えた。

26 ここ、村上訳と田口訳は、新聞にとってのかっこうのネタだ、という訳文になっている。Get lots of business.だから、自分の商売が繁盛するって意味なのは明らか。そんなむずかしい部分じゃないと思うんだけどなあ。マーロウがここだけ妙に商売っ気を出しているのが、違和感があつたのかもしれないけれど。清水訳は正しい。

27 この部分で弁護士は、すべてわかったつもりで饒舌なマーロウが実は何もわかっていないので、ずっとバカにしている。そしてこの最後のところで、マーロウの主張の大前提、つまりこの事件が大きく報道されるという考えをひっくり返し、本人にも読者にもそのバカさ加減がわかる。だからここは徹底的に慇懃無礼な嫌味にすべきで、原文は「my friend」と入れてそれを出している。邦訳はいずれも、まちがってはいないが嫌味を捕らえ切れていない。

[9]

夜の早番所員はでっかいブロンド男で、肩はむきむきで親しげな微笑を持っている。中年で哀れみや怒りの時期ははるか昔に捨てている。つつがなく八時間シフトをこなしたいだけで、自分の房列ではすべてがつつがないとでも言う様子だった。そいつがおれの戸の鍵を開けた。

「お客さんだ。地区検察局から。眠れてないのか」

「ちょっとおれには早すぎる。いま何時？」

「10時14分」彼は戸口に立って房を見渡した。下の寝台に毛布が一枚広げられ、一枚は畳んで枕代わりになっていた。ゴミ箱には使用済みのペーパータオルが何枚もあり、洗面台の縁にトイレットペーパーの小さなロールがあった²⁸。彼は承服してうなずいた。「何か私物はあるか？」

「この身一つだけ」

彼は房の戸を閉めなかった。いっしょに静かな廊下をエレベーターまで歩き、囚人受け入れデスクのところまで下りた。グレーのスーツを着た太っちょが、デスクの横に立ってトウモロコシパイプを吸っていた。爪が汚くて臭い男だ。

そいつがタフな声で告げた。「地区検察局のスプラנקリンだ。上の階でグレンツさんが会いたいと」手を腰の後ろにまわして対になったブレスレットを取り出した。「こいつのサイズあわせといくか」

所員と受け入れ係は大喜びでそいつに笑いかけた。「どうしちゃったの、スプラנק。エレベーターでこいつに襲われるのが恐いか？」

彼はうなった。「面倒は避けたい。前に逃げられた。死ぬほど絞られたんだ。行こうぜ、坊や」

囚人受け入れ係が書類を押しやると、彼は華々しくサインした。「おれは決して無用な危険は冒さない。この町じゃ、何を相手にしてるかわかったもんじゃない」

パトカーが、耳を血まみれにした酔っ払いをしょっ引いてきた。おれたちはエレベーターに向かった。中でスプラנקリンに言われた。「おまえ、ヤバいぜ。とんでもなくまずい」そう言うことで何やら満足感を得ているようだ。「この町じゃいろいろまずいことにはまっちまいかねない」

エレベーター係はこっちをふり返ってウィンクした。おれはニヤリとした。

28 田口訳も村上訳もここを「トイレットペーパーを丸めて栓代わりにしたもの」とか訳してるが、トイレットペーパーを丸めて栓にできると思う？ しかもそれを流しの脇に置いて再利用する？ ないでしょ。原文はa small wad of toilet paper. wad はかたまり、束、ロールといった意味があるトイレットペーパーのロールが置いてあっただけでしょ。だから清水は「トイレットペーパーを巻いたの」としている。それでいいのでは？

「変な考えは起こすなよ、坊や」とスプラנקリンはきつく告げた。「撃つからな。一回やった。逃げようとしたんだ。死ぬほど絞られた」

「逃げられても止めても、結局はくろうのか」

彼は少し考えた。「そういうこと。どっちにしても死ぬほど絞られる。きつい町だ。敬意ってもんがない」

エレベーターを出て、地区検察局の二重ドアを通った。交換台は止められ、回線も時間外で切られている。面会待ちの椅子にはだれもいない。いくつかの事務所に灯りが点いていた。スプラנקリンは小さい照明付きの部屋のドアを開けたが、そこには机とファイルケース、硬い椅子がいくつか、そして硬いアゴとまぬけな目つきのごつい男がいた。赤ら顔で、ちょうどデスクの引き出しに何かを押し込んでいるところだった。

「ノックしたらどうだ」とスプラנקリンに怒鳴った。

スプラנקリンはしどろもどろになった。「すみませんグレンツさん。囚人に気を取られてまして」

彼はおれを事務室に押し込んだ。「手錠ははずしますか、グレンツさん」

「そもそもなんで手錠なんかかけたのかわからんよ」とグレンツが軽蔑するように言った。そしてスプラנקリンがおれの手首の手錠の鍵をはずすのを見守った。スプラנקリンはグレープフルーツほどもある鍵束を持っていて、手錠の鍵を見つけるのに苦労した。

「よし、失せろ。外で待ってろ。連れ戻すときのために」とグレンツ。

「私、勤務時間はもう終わってるようなんですが、グレンツさん」

「俺が言うまで終わってない」

スプラנקリンは紅潮して、でかいケツをドアから押し出した。グレンツは獰猛な目つきでそれを見らみ、ドアが閉まると同じ目つきをこっちに向けた。おれは椅子を引き寄せてすわった。

「だれがすわれと言った」とグレンツは吠えた。

おれは裸でポケットに入っていたタバコを取り出してくわえた。「それにタバコを吸っていいとも言っていない」グレンツは怒鳴った。

「房棟では喫煙が認められましたよ。なぜここじゃダメなんです？²⁹」

「おれの事務室だからだ。ここではおれが法律だ」。デスク越しにウイスキーの強い匂いが漂ってきた。

「もう一杯さっと飲んでくださいよ。気が落ち着きますよ。おれたちが入ってきてお邪魔をしてしまったようだし」

29 既訳はどれも、マーロウがいきなり相手にため口を利き始める。クールでタフなマーロウというイメージのせいだろう。でも一応権力関係ってものもあるし、マーロウも現実的な人間だし、まずは敬語からだと思う。

彼はどすんと椅子の背にもたれた。顔がどす黒い赤になった。おれはマッチを擦ってタバコに火をつけた。

ながい間をおいてから、グレンツは静かに言った。「ふん、ツツパリやがって。いい気なもんだ。教えてやろうか？ ここに入ってくる連中はみんな、でかいのゴツいのいろいろだが、出ていくときにはみんな同じ——小さくなってるんだ。そしてみんな同じ態度。卑屈だ」

「おれは何の用件で呼び出されたんですか、グレンツさん。そしてあのボトルをあおりたいなら、こちらのことはお構いなく。おれだって、疲れて不安で過労のときには一杯やるようなヤツですから」

「自分の置かれたヤバい状況がよくわかってないようだな」

「別にヤバい状況になんかない」

「それはどうかな。それはさておき、こっちが欲しいのはおまえからの徹底的な全面供述書だ」と机脇のスタンドに置かれた録音装置を指さした。「いま供述してもらって、明日書き起こさせる。所長がその供述に満足したら、街を出ないという条件つきで釈放してくれるかもしれん。始めようか」と録音機のスイッチを入れた。その声は冷たく、有無を言わせず、やつに可能な限りの陰悪さがこもっていた。だがその右手は絶えず、引き出しのほうににじり寄っていた。鼻に切れた血管ができるほどの歳ではなかつた。だがすでに切れた血管が見えていて、目の白い部分も濁っていた。

「いい加減うんざりだ」

「何がうんざりなんだ？」彼はピシヤリと言った。

「セコいケチな事務所でセコいケチな連中が、セコいケチなことしゃべって、それが何の意味もないことですよ。刑事犯拘置所でもう 56 時間。でもだれにも小突き回されないし、だれもタフぶって見せたりしなかった。そんな必要はなかった。あつちは必要に備えて力を温存してたんだ。そもそもなぜぶち込まれた？ たんなる嫌疑だ。どっかの警官が質問に答えてもらえないだけで、刑事犯の拘置所にぶちこまれるって、そんな法制度があるかよ。何の証拠があつた？ メモ帳の電話番号だ。そしておれをぶちこんで何が分かる？ 何一つ。単に自分の力を誇示したいだけだ。そしていま、あんたも同じ手口だ——事務所と称するこの葉巻箱みたいところで、自分が大量の力を持つてるのをおれに感じさせたいんでしょ。この怯えた子守役を夜遅くに寄越してここに連れてきましたよね。56 時間もひとりぼっちですわってたら、おれの脳みそがぐちゃぐちゃになるとでも？ でっかい牢屋でひとりぼっちだと言って、あんたのヒザで泣いておつむナデナデしてちょうだいとお願いするとでも？ 頼みますよ、グレンツ。一杯やって人間らしく行きましょうよ。こっちだって、これがあんたの本性じゃなくて、仕事でやってるだけだと思ってあげますから。でもまずはその恫喝はやめてくださいよ。力量があるならそんなのいらないし、それがいるようなら、おれを小突き回すだけの力量がないってことだ」

やつはそこにすわってそれを聞き、おれを見た。そして苦笑いをした。「言いたいことはそれだけか。気がすんだんなら、供述といこうじゃないか。いちいち質問して答えるのがいいか、それとも自分なりに通して話すのがいいか？」

「小鳥さんに話してただけですよ。そよ風が聞きたかったもんでね。供述なんかしないよ。あんたも弁護士なら、おれにそんな義務がないのはご存じでしょう」

彼は冷ややかに言った。「その通り。法律なら知っている。警察の手口も知っている。潔白になるチャンスを与えようってだけなんだ。それが要らないなら、上等だ。明日十時に正式に法廷に召喚して予備審問の用意をしよう。保釈はつくかもしれん。おれは反対するがな。でも保釈がついてもかなりきついものになる。保釈金はかなりの額になる。そういうやり方もある」

彼は机の上の紙を見下ろしてそれを読み、伏せてまた机に置いた。

「罪状は？」

「第 32 条。事後従犯。刑事犯罪。クウェンティン刑務所で最長五年」

「まずはレノックスを捕まえないとね」おれは慎重に言った。グレンツは何か隠し球があつて、それが態度に出ていた。どれだけつかんでいるかはわからないが、何か知っているのはまちがいない。

彼は椅子の背にもたれてペンを手に取り、それを両手ではさんで手のひらの間でゆっくり回した。そしてにっこりした。楽しんでいるのだ。

「レノックスは身を隠しにくい男でね。ほとんどの人なら写真がいるし、かなりはっきりした写真でないとダメだ。顔の片側が傷だらけの男なら必要ない。おまけに白髪で、それが 35 歳にもなってない。目撃者が四人いるんだ。もつというかもしれない」

「何の目撃者？」口の中に苦い味が広がった。グレゴリウス警部に殴られた後の胆汁のような味。それで自分の首がまだ痛んで腫れているのを思い出した。それをゆっくり揉んだ。

「クサイ芝居だな、マーロウ。サンディエゴ高裁判事夫妻が、たまたまあの飛行機に乗った息子と義理の娘を見送っていたんだ。四人ともレノックスを見ているし、判事の奥さんはあいつが乗ってきた車も、その同伴者も見ている。お祈りする余地もない」

「そりゃ結構なことで。どうやってその方たちに連絡がついたんです？」

「ラジオとテレビの特別放送。人相書きだけですんだ。その判事が電話してきたんだ」

おれは分別くさく言った。「なかなか結構ですな。でもそれよりもう少し要るでしょう、グレンツ そいつを捕まえて、殺人をやったと証明しないと。それからおれがそれを知ってたことも証明しないと」

彼は録音機の裏がわに向けてパチンと指を鳴らした³⁰。「やっぱ一杯やるとするか。夜勤が多すぎるもんでね」と引き出しを開けて、ボトルとショットグラスを机に載せた。縁まで目一杯注ぐと、一気にぐいっと飲み干した。「よくなった。ずっとよくなったよ。悪いがあんたに奨めるわけにはいかないんだ、拘束中だからな」ボトルのコルクを閉めて遠くに押しやったが、手の届かないほど遠くではない。「ああそうそう、なんか証明しなきゃいかんとか言ったよな。ひょっとしてこっちはすでに自白を持っていたりするかもよ、小僧。残念だったな」

小さいながらとても冷たい指が背筋を上から下まで走った。氷めいた昆虫がそこを這ったようだ。

「ならなんでおれの供述がいる？」

やつはニヤリとした。「きれいな記録がほしいんだ。レノックスは連れ戻されて裁判になる。できるだけのものを用意しておきたい。別にお前から何かがほしいというより、どの程度でおまえを見逃してやろうかって話なんだよ——協力さえするなら」

おれはヤツを見つめた。向こうはちょっと書類をいじった。椅子でもじもじしてボトルを眺め、それを手に取るまいとかなりの努力をしていた。「手の内全部見たいか」といきなり、柄に似合わない流し目を寄越した。「お利口さんよ、おれがふざけてんじゃないのがわかるように、教えてやろう」

おれは机の上に身を乗り出し、ヤツはおれがボトルを狙っているんだと思った。それをつかみ取って引き出しに戻した。こっちは吸い殻を灰皿に入れたいだけだった。再び身を戻してもう一本火をつけた。ヤツは早口で喋り出した。

「レノックスはマサトランで飛行機を降りた。乗り継ぎ用の街で人口3万五千ほど。二、三時間姿を消した。そして黒髪で肌が黒く、大量のナイフ傷らしきもののある背の高い男が、シルバーノ・ロドリゲスという名前でトレオンまで便を予約した。スペイン語はうまかったが、メキシコ人を通るほどじゃない。そんな肌の黒いメキシコ人にしては背も高すぎた。機長は通報した。トレオンでは警察の動きが遅すぎた。メキシコのおまわりは機敏じゃない。得意技はやたらと射殺することだけ。やっと動いたころには、そいつは飛行機をチャーターしてオタト克蘭という小さな山岳町に出かけた。湖つきのちょっとした夏のリゾートだ。チャーター機の機長はテキサスで戦闘機乗りの訓練を受けていた。英語はうまかった。レノックスは彼の言うことがわからないふりをした」

「それが本当にレノックスなら」とおれは口をはさんだ。

「慌てんな、小僧。まちがいなくレノックスだ。それで、オタト克蘭で下りてホテルに投宿。今回の名前はマリオ・デ・セルバだ。拳銃を持っていて、モーゼル7.65だが、もちろんメキシコじゃそれがどうしたって感じだ。だがチャーター機の機長はそいつがどうも怪しいと思って地元警察と話をした。警察はレノックスを監視下に置いた。メキシコシティに確認を取ってから、踏み込んだんだ」

30 telegramを既訳はすべて「電報」と訳しているが、後にも先にも電報なんてまったく登場しないし、電報を手にしたところも描写されていない。あまり一般的な用法ではないが、これはおそらくさっきから何度か登場している録音装置のことと考えるのが自然だと思うぜ。

グレンツは物差しを手にとってそれを端から端まで眺めた。無意味な動作だがそれでおれを見ないですむ。

「はいはい、気の利くチャーター機長で、お客にも親切。ちょっとあり得んでしょう」

ヤツはいきなり顔をあげてこっちを見た。そして無味乾燥に言った。「ほしいのはすばやい裁判、その場の激情にかられた第2級殺人の申し立てだ。それをこっちは受け入れる。こっちが深入りしたくない側面もあるんだ。なんといってもかなり有力な一家だから」

「つまりハーラン・ポッター」

やつはちよっとうなずいた。「おれはもうこの話すべてが眉ツバだと思ってる。スプリンガーがいくらでも利用できる事件だ。すべて揃ってる。セックス、スキャンダル、金、不貞の美人妻、負傷した戦争英雄の夫—傷はたぶんそのときのなんだろう—くそっ、何週間も一面を飾り続けられるネタだ。全国のあらゆる新聞が食いつく。それをみすみす、手っ取り早く片づけるなんて」と肩をすくめる。

「ま、親分の望みとあらば、それは親分の選択だ。さあ供述してもらえるかな？」と、この間ずっと前面にランプをつけたまま軽くうなり続けていた録音機に向き直った。

「切ってくれ」とおれ。

彼は椅子の向きを変えて凶暴な目つきをくれた。「牢屋がいいのか？」

「そんなに悪くもない。最高の連中に会えるわけじゃないが、そんなのだれが望むね？ 考えて見てくださいよ、グレンツ。おれをタレコミ屋に仕立てようとでも？ おれは頑固かもしれん、おセンチですらある。でも実務的でもある。あんたが私立探偵を雇うことになったら—はいはい、考えるだけでいやなのはわかりますよ—でも仮の話として、それ以外に手がまったくない状況になったとしたら？ 友人を密告したヤツに頼みますか？」

そいつは憎悪をこめておれを睨んだ。

「それと別の点を。いまのレノックスが司直の目をかいくぐる手口、あまりに見え見えすぎると思いませんか？ 捕まりたいんなら、そんな手間をかけることはない。捕まりたくないんなら、メキシコでメキシコ人のふりなんかしないくらいの頭はあるヤツだ」

「何が言いたい？」グレンツはいまやこっちに歯を剥いていた。

「つまり、あんたがでっちあげのホラ話を並べ立てただけかもってことですよ³¹。髪を染めたロドリゲスなんかいない、オタクランにマリオ・デ・セルバなんかいないし、レノックスの居場所なんて海賊黒髭のお宝隠し場所と同様にあんたにはまるでわかっていないかも」

31 田口訳はこれを、追加で以下のようなホラを言う、という訳にしているが、まちがいがい。すでに言われたことが実はホラだろう、と言ってるだけ。つまり、おまえのハッターはお見通しだ、と言ってるわけだ。清水と村上は正しく訳せている。なぜ田口がそんな解釈のまちがいをしてるか不明。

そいつは再びボトルを取り出した。半ショット注いで、以前と同様にすばやく飲み干した。そしてゆっくりと緊張を解いた。椅子にすわり直して、録音機のスイッチを切った。歯噛みするようにこう言った。

「おまえを裁判にかけられたらよかったのに。おまえみたいな小利口なやつを絞り上げるのが好きなたちでな。この一件はこの先当分お前につきまとうことになるぜ、かわいこちゃん。歩くときも、食べるときも、寝るときもつきまとう。そして次におまえがヘマをしでかしたら、叩き潰してやる³²。いまは、腸が煮えくり返るようなことをしなきゃならん」

机の上に手を広げて、伏せた紙を引き寄せ、裏返して署名した。人が自分の名前を書いているのはすぐわかる。独特の動作があるのだ。そして立ち上がり、机のまわりをぐるっと迂回して、靴箱みたいな狭い事務所のドアをボタンと開け、怒鳴ってスプラנקリンを呼んだ。

太っちょは体臭と共に入ってきた。グレンツが書類を渡した。

「いまおまえの釈放命令に署名した。おれは公僕だから、いやな仕事もある。なんでおれが署名したか知りたいか？」

おれは立ち上がった。「話したいならどうぞ」

「レノックス事件は解決なんだよ、旦那。もうレノックス事件は消えた。今日の午後にホテルの部屋で完全な自白書を書いて、拳銃自殺した。オタト克蘭でね、おれが言った通り」

おれは呆然と立ち尽くした。視界の片隅で、グレンツがゆっくりと後ずさるのが見えた。まるでこっちに殴られるとでも思ったかのようなだった。たぶん一瞬、かなり凶暴な顔をしていたのだろう。そして机の向こうに戻り、スプラנקリンがおれの腕をつかんだ。そしてちょっと哀れっぽい声で言った。

「さあ、動けよ。たまには夜に家に帰りたいんだ」

おれはいっしょに外に出てドアを閉じた。まるでだれかがいま死んだばかりの部屋のように静かに閉ざした³³。

32 村上沢では「骨が見えるまで肉をむしりにとってやるからな」になっているが、特にうまい表現でもないし、なぜそんな改変をするのか不明。

33 ここまでの数章は、警察や検察が非協力的なマーロウに苛立っている一方で、マーロウのマヌケぶりもしっかり書かれているのがミソ。ここでも、ピントはずれな推理を得意げに披露していきがっていて、おそらくこの検事はむかつきつつも内心嘲笑っている。だから最後に種明かしをしてマーロウに吠え面かかせる。一方で、この数章でのマーロウの非協力ぶりはかなり無理がある。協力したら客がなくなるっていうけど、レノックスと口裏合わせのストーリーまで作ったんだから、それで行けばすんだ話では？

[10]

所持品預かり票のカーボン控えをポケットから掘り出して、それを手渡し、オリジナルに受け取りサインをした。所持品をポケットに戻した。囚人受け入れデスクの向こう端に身を屈めている男がいて、おれが向きを変えたところで身を起こして話しかけてきた。身長 190 センチほどでガリガリにやせていた。

「戻りの車は要りませんか？」

薄明かりの中でそいつは年齢不詳、疲れてシニカルに見えたが、詐欺師には見えなかった。「いくら？」

「無料で。『ジャーナル』のロニー・モーガンです。帰るところなんです」

「ああ、警察詰めの記者か」

「今週だけです。いつもは市役所詰めなんです」

おれたちは建物を出て、駐車場のそいつの車を見つけた。空を見上げた。星は出ていたが明かりがまぶしすぎる。涼しい爽やかな夜だった。それを深呼吸する。そしてそいつの車に乗り、そこを離れた。

「住まいはるかローレルキャニオンなんだ。適当なところで下ろしてくれればいい」

「連行は車なのに、帰りの面倒は見てくれない。この事件には興味を惹かれるんですよ、気に食わないという意味で」

「事件なんかないらしいね。テリー・レノックスは今日の午後に拳銃自殺した。連中の話ではな。連中の話では」

「あまりにできすぎ」とロニー・モーガンはフロントガラス越しに先を見ていた。車は静かな通りを静かに進んだ。「やつらが壁を作るのには好都合」

「壁って？」

「だれかがレノックス事件のまわりに壁を作ってますねえ、マーロウ。あなたは賢いからそのくらいわかるでしょ？ 本来なら受けるべき騒ぎを受けていない。検察長官は今夜ワシントンに出発した。何やら会議だとか。ここ数年で最もオイシイ自己宣伝の機会を自ら捨てたわけだ。どうして？」

「おれに訊かれてもね。お勤めしてたんだぜ」

「だれかがそれだけの見返りを提供したから。それが理由っすね。それも札束とかいった粗野な代物じゃない。だれかが長官にとって重要なものを約束したんですよ。そしてこの事件の関係者の中で、そんなことができる立場の人間は一人しかいない。女の父親」

おれは車のすみに頭をもたせかけた。「なんか怪しげな話だな。マスコミはどうなんだ？ ハーラン・ポッターも何紙かは持っているけれど、競合紙もあるだろう？」

彼はちょっと面白がるようにおれを一瞥してから、また運転に専念した。「ブン屋稼業の経験は？」

「ない」

「新聞は金持ちが所有し発行する。金持ちはみんな同じクラブに所属してるんですよ。ええ、そりゃ競争はある一部数、記者の縄張り、特ダネをめぐる厳しく激しい競争とか。ただしそれが所有者たちの名誉、特権、地位を傷つけなければです。傷つけるものは、臭いものに蓋。その蓋がですな、レノックス事件にドンと被さってますよ。レノックス事件はですねえ、きっちり組み立てれば、ものすごく部数が出たでしょうよ。すべて揃ってますからね。その裁判は全国から特集記事のライターが集まったはず。ところが、裁判なんか開かれない。話が進む前にレノックスがおさらばしちゃったからね。さっき言ったとおり—あまりにできすぎ—ハーラン・ポッターとその一家にとってはね」

おれは身を起こしてそいつをまじまじと見つめた。

「つまりすべて仕組まれてると？」

そいつはあざ笑うように口をひねった。「レノックスは自殺で手助けしてもらったのかもしれませんがねえ。ちょっと逮捕に抵抗したりとか。メキシコのおまわりは、すぐにぶっ放したがる。ちょっと賭をしたいなら、だれも弾の跡を数えたりしてないほうの勝率がかなり高いかと」

「そりゃちがうだろう。テリー・レノックスのことはかなりよく知っていた。とっくに人生を投げ出していたよ。いま生き返らせても、みんなのなすがままだったはずだ。故殺の申し立ても受け入れただろう」

ロニー・モーガンは首を振った。何と言うかは見当がついたが、その通りのことを言った。「ありえんでしょう。妻を射殺とか頭をがち割ったとかいうなら、なくもない。ですがね、残虐すぎますよ顔がぐしゃぐしゃに殴り潰されてる。どんなに軽くても二級殺人、それですら世間は黙らないでしょう」

「そうかもねえ」

そいつは再びおれを見た。「彼をよく知っていたと言いましたねえ。自殺説は買います？」

「疲れてるんだ。今夜は考える気分じゃない」

長い間があった。そしてロニー・モーガンは静かに言った。「おれがインチキなブン屋なんかじゃない、本当に賢いやつなら、そもそも彼女を殺したのがテリーじゃなかったのではと思ったりもするかもなあ」

「それも一考」

そいつはタバコをくわえ、ダッシュボードでマッチを擦って火をつけた。細面をしかめつつ、静かにそれを吸った。ローレルキャニオンにさしかかり、大通りからどこで曲がり、どこでうちの通りに入るかを告げた。車は丘の上までガタガタと上がり、うちのセコイア材の階段の下に停まった。

車を降りた。「乗せてくれてありがとう、モーガン。一杯やってくか？」

「今度にしよう。たぶん一人になりたいでしょ」

「一人になる時間はいくらでもある。多すぎるくらい」

「さよならを言うべきご友人がいるでしょう。その人のために牢屋にぶちこまれるくらいなら、友人だったはずですよ」

「おれがそんなことをしたと誰が言った？」

かれはかすかに微笑した。「紙面に出せないからって知らないわけじゃないんだよ、旦那³⁴。じゃあな。またいづれ」

おれが車のドアを閉めると、彼は方向転換して丘を下っていった。テールライトが角を曲がって消えると、おれは階段を登り、数日分の新聞を拾い上げ、無人の家に入っていった。家中のランプをつけて窓をすべて開けた。空気が淀んでいた。

コーヒーを淹れて飲み、コーヒー缶から百ドル札五枚を取り出した。きつく巻かれて缶の縁にそってコーヒーの中に押し込まれていた。コーヒーを片手にうろうろし、テレビをつけ、消し、すわり、立ち上がり、またすわった。レノックス事件はでかでかと始まったが、その日の朝にはすでに二面扱いとなっていた。シルヴィアの写真はあったが、テリーの写真はない。自分でもあると知らなかったおれのスナップ写真が出ていた。「ロスの私立探偵が尋問のために拘束」。エンシーノのレノックス邸の大きな写真があった。いんちきイギリス風で、とがった屋根があちこちにあり、窓を全部洗うだけで百ドルかかりそうだ。1ヘクタール近い丘の上の敷地に立っている。ロサンゼルス地域としてはかなりの広さだ。ゲストハウスの写真があって、母屋のミニチュア版だった。樹木で覆い隠されているどちらの写真も、かなり遠くから撮影されて、拡大トリミングされていた。新聞が「死亡室」と読んだものの写真はない。

すべて拘置所で見たものだったが、もう一度ちがった目で読んで眺めてみた。金持ち美女が殺害され、マスコミが徹底的に排除されたという以外何も読み取れない。だから影響力はかなり初期から行

34 村上訳は「活字にできないからといって、僕が知識を持たないということにはならない」。あまりに受験英文和訳っぽいと思う。

使されていたわけだ。犯罪記事担当の記者たちは歯噛みしただろうし、するだけ無駄だったはずだ。無理もない。彼女が殺されたまさにその晩に義理の父親と話をしていたら、警察が通報すら受ける前に、警備員が1 ダースも地所を囲んでいただろう。

だが一つ、無理のある話があった—彼女がボコボコに殴り殺されたという点だ。テリーがそんなことをするとは、どうしても信じられなかった。

明かりを消して開いた窓の横にすわった。外ではツグミ³⁵がいくつかトリルを復習し、自分でうっとりしてからその夜はおしまいにした。首がチクチクしたので、ヒゲを剃ってシャワーを浴び、ベッドに入って横になったまま耳を傾けた。まるで闇の遠くから何か声が聞こえないかとも言うように。落ち着いた辛抱強い声がすべてをはっきりさせてくれるかのように。そんなものは聞こえず、自分でも聞こえないのは分かっていた。だれもレノックス事件を説明してはくれない。説明などいらない。殺人者が自白して死んだ。検屍さえ行われまい。

『ジャーナル』のロニー・モーガンが言ったように—あまりにできすぎ。テリー・レノックスが妻を殺したなら、それで結構。裁判にかけて不愉快な細部をいろいろ明るみに出す必要なんかない。殺してないなら、それまた結構。死人は罪をなすりつけるには最高の存在だ。口ごたえしないから。

35 動植物の名前は翻訳の悩みの種。モッキングバードは正式にはモノマネドリとかマネシツグミとかだが、ほとんどの人はそこまで解像度を持って鳥を区別できないし、モッキングバードはそこらにいるごく一般的な鳥。そういう世間的な粗雑な解像度を前提にすると、ツグミでいいんじゃないかと思う。

[11]

朝に改めてヒゲを剃り、着替えていつものようにダウンタウンに車で出かけ、いつもの場所に駐車おれが重要な公人であるわけもないので駐車場係もそんなそぶりは一切見せなかった。上階に上がり廊下を歩いて鍵を取り出しドアを開けようとした。色黒の精悍な男がおれを見つめた。

「あんたマーロウ？」

「何か？」

「逃げるなよ。おまえに会いたがってる人がいる」背を壁からひきはがして、物憂げに立ち去った。

事務室に入り手紙を拾い上げた。夜間清掃の女性が拾って、机の上にまとめておいてくれた、他の手紙もあった。窓を開けてから封筒を次々に開け、いらないものを捨てた。つまりは実質ほとんどすべてということだ。他のドアのブザーのスイッチを入れて、パイプを詰め、そこにひたすらすわって誰かが助けを求める叫びをたてるのを待った。

いささかぼんやりした形でテリー・レノックスのことを考えた。彼はすでに彼方に遠ざかった存在になりつつあった。白髪と傷のある顔と弱々しい魅力と、独特な種類のプライド。彼について決めつけたり、分析したりはしなかった。傷を負った状況やなぜシルヴィアのような人間と結婚するようなことになったのかを尋ねなかったのと同様だ。彼は船の上で出くわして、非常に親しくなりつつも、実は何も知らない相手みたいなものだった。そういうやつが、棧橋でさよならを言い、また連絡するからな、旦那とか言いつつ、自分がそんなことはしないし向こうもしないのを知っているし、おそらく二度と会うことはない。そういう相手と同じように彼も消えたのだ。実際に連絡したら、そいつはまったくちがう人間になっているだろう。よくあるロータリークラブ会員がクラブの車に乗っているだけになる。儲かりまっか、ぼちぼちでんな。お元気そうで。そちらもですよ。最近太り気味でしていやみんなそうですよ。フランコニア号 (とかなんとかいう船) での旅がありましたねえ。ええそうですねえ。すごい旅でしたよねえ。

何がすごい旅なもんか。死ぬほど退屈してたんだ。そいつに話しかけたのも、他におもしろそうなやつがいなかったからというだけ。テリー・レノックスとおれもそうだったのかもしれない。いや、それだけじゃないな。かなり深入りしたものな。あいつには金と時間を投資したし、ブタ箱に3日間、さらにはアゴへの一撃と首へのパンチで、いまだに飲み込むときには毎回それを感じる。それがいまや死んで、五百ドルを返すこともできない。それがおれを苛立たせた。いつも腹が立つのは細かいことなのだ。

ドアのブザーと電話が同時に鳴った。まず電話に出た。ブザーはだれかがおれのセコい待合室に入ってきたというだけだからだ。

「マーロウさんでしょうか？ エンディコットさんからの電話です。少々お待ちください」

彼が電話口に来た。「シューエル・エンディコットです」と、まるで自分のクソ秘書がおれに名前を告げていないとでも言うように改めて名乗った。

「おはようございます、エンディコットさん」

「釈放されたそうで何よりですな。わざわざ抵抗しないという正解にたどりつかれたのかと」

「正解とかじゃないですよ。ただの強情でしたんで」

「この件でこれ以上何かあるとは思いません。でも万一何かあって助けが必要ならご一報ください」

「何ですか？ 男は死んだ。あいつがおれに少しでも近づいたと証明するだけで、向こうは一苦勞でしょう。さらにおれがあいつの罪状を知っていたと証明しなきゃいけない。そしてあいつが犯罪を犯したか逃亡中だったと証明しなきゃいけない」

向こうは咳払いをして、慎重な言い方をした。「ひよっとすると、彼が全面的な自白を残したことは聞いておられないのですか？」

「聞きましたよ、エンディコットさん。こうして弁護士相手にお話してるんだ。自白だって証明が必要で、それが本物でその内容が正しいことが示されなきゃいけないはずだ、と申しあげるのは差し出がましいですかねえ」

彼はきつい口調になった。「法律談義をしてる暇はないんです。メキシコに飛んで、いささか憂鬱な仕事をこなさなくてはなりません。それが何かはおそらく見当がつくでしょう？」

「はは一ん。あなたの依頼人次第ですねえ。ほら、教えてくれなかったでしょう」

「はい、よく覚えています。では、さようならマーロウ。助けるという申し出は生きていますから。でもついでにちょっとした助言を。自分が完全にこの一件から逃れられたかどうか、少し用心なされたほうがよろしいですよ。あなた、かなり危うい立場にいらっしゃるんですよ」

彼は電話を切った。おれは慎重に受話器を置いた。そのまま受話器に手をかけてしばらくすわったまま、顔をしかめた。それからしかめっ面を拭い去って立ち上がり、待合室への連絡扉を開けた。

窓ぎわに男がすわって雑誌をめくっていた。青っぽいグレーのスーツを着て、そこにほとんど見えないほどの淡い青のチェックが入っている。組んだ足には黒いモカシン型のひも靴を履いている。靴ひもの穴は二つで、ベビーカー並に快適で1街区歩いたくらいで靴下に穴が開かないヤツだ。白いハンカチは四角に畳まれその向こうにサングラスの端が見えている。濃い黒い波打つ髪をしている。真っ黒に日焼けしている。鳥の明るい目で見上げ、細線状の口ひげの下で口をにっこりさせた。ボウタイは暗い紫で、それがまばゆいほど白いシャツの上にキリッと結ばれている。

彼は雑誌を投げ出した。「この手のクズ雑誌はどうしようもないな。コステロについての記事を読んでんだ。いやあ、コステロについちゃ何でもご存じ。おれがトロイのヘレンについて何でも知ってるのと同じだ」

「どういったご用件でしょうか？」

男は慌てる様子もなくおれを値踏みした。「でかい赤いスクーターに乗ったターザン」

「え？」

「おまえだ。マーロウ。でかい赤いスクーターに乗ったターザン。かなり痛めつけられたのか？」

「あちこち。あんたにや関係ないだろう」

「オルブライトがグレゴリウスと話をした後は？」

「いや。その後はない」

男は軽くなずいた。「オルブライトに頼んであのグズに一発食らわせるとは、いいツラの皮だな」

「あんたには関係ないだろうと言ったな。ちなみにおれはオルブライト長官なんか知り合いじゃないし、何をしてくれとも頼んでない。あいつがおれに何かしてくれるわけないだろう」

男はおれを不機嫌にねめつけた。ヒョウのような優雅さでゆっくり立ち上がった。部屋を横切りおれの事務所をのぞく。アゴでおれに合図して事務所に入っていった。どこにしようともその場を仕切りたがるやつだ。おれはその後を追ってドアを閉めた。男は机の横に立って、おもしろそうにあたりを見回した。

「小者だな、おまえ。すげえ小者」

おれはデスクの向こうに行って待った。

「月の稼ぎはいくらだ、マーロウ」

おれは聞き流してパイプに火をつけた。

「せいぜい750だろう」

おれはマッチの燃えさしを灰皿に落として煙草の煙を吐き出した。

「ケチな野郎だよ、マーロウ。小銭漁りだ。小者すぎて虫眼鏡がないと見えない」

おれは何も言わなかった。

「感情も安っぽい。全身安っぽい。野郎と仲間ヅラして、何度か飲み食いし、少しギャグでもかまして、困ってるときに小銭を融通してやって、それですっかり入れ込んでしまう。『フランク・メリウェル』とか読んだ小学生みたいに。根性もない、頭もない、コネもない、知恵もない、だからインチキな態度をひけらかして、みんなの涙を誘おうとする。でかい赤いスクーターのターザン」と男はちょっと疲れた微笑を浮かべた。「おれから見れば、おまえなんか一銭の価値もない」

彼は机越しに身を乗り出して、手の甲でおれの横っ面をはたいた。軽く軽蔑をこめた動きで、怪我をさせる気はない動作だし、軽い微笑も顔から消えなかった。そしてそれでもおれが動かないと、ゆっくりと腰をおろして机に肘をつき、その茶色い手で茶色いアゴをつかんだ。鳥の明るい目がおれを見つめ、そこには明るさ以外の何もなかった。

「おれを知ってるか、チンピラ」

「名前はメネンデス。世間ではメンディと呼ばれる。大通りが縄張り」

「ほう。おれはどうやってこんなにビッグになった？」

「さあねえ。メキシコの売春宿でポン引きから始めたんだろう」

彼はポケットから金の煙草ケースを取り出し、茶色いタバコに金のライターで火をつけた。目に染みる煙を吐いてうなずいた。金の煙草ケースを机に置いて、それを指先で弄んだ。

「おれは悪漢の大物なんだぜ、マーロウ。大金をかせぐ。大金を稼ぐために買収しなきゃいけない連中を買収するために大金を稼いで、買収しなきゃいけない連中を買収するために大金を稼がなきゃいけない。九万ドルする場所をベルエアに持ってて、すでにその改修にそれ以上の金をかけてる。プラチナブロンドの美女を妻にして、子供二人は東部のプライベートスクールに入れてる。妻は宝石15万ドル、毛皮と服でさらに七万五千だ。執事、女中二人、調理人、運転手がいて、さらにおれにくっついてくる用心棒がいる。どこへ行っても下へも置かない扱いだ。なんでも最高のもの、最高の食べ物、最高の飲み物、最高のホテルスイート。フロリダに別荘があつて外洋に出られるヨットに五人の船員を抱えてる。ベントレー一台、キャデラック二台、クライスラーのステーションワゴン、息子にはMG。数年したら娘にも一台だ。おまえは何持ってる？」

「大したことはない。今年は住む家がある——一人きりで住めるんだ」

「女なし？」

「一人。さらにここに見えてるものと、銀行に1200ドル、国債数千ドル。これで答えになるか？」

「一回の仕事で最高いくら稼いだ？」

「850」

「おっと、そこまでセコいのかよ」

「下手な芝居はやめろ。何がほしい」

彼は吸いかけで煙草をもみ消し、すぐに次のを点けた。椅子にもたれた。

「おれたちは塹壕で三人して喰ってた。死ぬほど寒くてあたり雪まみれ。缶から喰うんだ。冷たい食い物。ちょっと爆撃、さらに迫撃砲火。おれたちは寒くて青くなって、それは本当に青かったんだぜ、ランディ・スターとおれと、このテリー・レノックス。迫撃弾がドカンとおれたちの真ん前に降ってきて、なぜか爆発しない。ドイツ人どもはいろいろ小技を使うんだ。洒落にならないことをし

やがる。不発弾だと思ったら三秒後に実は不発じゃなかったり。テリーはそいつをつかみ、ランディとおれがまだ凍り付いているうちに塹壕から飛びだした。すげえ素早さ。優れたバスケット選手みたい。突っ伏してそいつを遠くに投げたら空中で爆発した。ほとんどはやつの頭上を通過したが、破片が一つあいつの顔の横に当たった。まさにそのときドイツ軍が一斉攻撃をしかけ、気がついたらおれたちは逃げ出してた」

メネンデスは話を止めて、黒い目で明るくじっとにらみつけた。

「ご教示感謝する」

「コケにされてもめげないやつだな、マーロウ。気に入ったよ。ランディとおれは話し合って、テリー・レノックスみたいな目にあつたらだれでも頭がおかしくなると結論した。長いことあいつが死んだと思ってたが、生きてた。ドイツ人どもにつかまってたんだ。一年半にわたりいじくりまわしやがった。治療は悪くなかったがあまりに痛い目にあわせたらしい。突き止めるのには金がかかったしあいつを見つけるのにも金がかかった。だが戦後の闇市場で大儲けしてた。だからまかなえた。おれたちの命を救ってテリーが得たものは、新品の顔半分、白髪、ひでえ神経症だ。東部に戻ったら酒浸り、あちこちで捕まって、なんかもうボロボロ。何か腹に抱えてるが、何なのかはまるでわからないハッと気がつく、あの金持ちご婦人と結婚してご立派になっちまう。結婚解消、またどん底、再婚して、相手が死んだ。ランディとおれは何一つしてやれない。あのベガスでのちょっとした仕事以外手助けさせてくれないんだ。そしてホントにヤバいことになったら、おれたちのところに来ないで、お前みたいなチンピラを頼る。オマワリにいいようにされちまうヤツだ。それでこんどはあいつが死んじまって、さよならも言わず、借りを返す機会もくれないままだ。おれならイカサマ師がトランプに詐欺を仕込むよりすばやく国外に逃がしてやれたのに。でもあいつはお前に泣きつく。頭にくるぜチンピラ、オマワリにいいようにされるようなヤツに」

「オマワリはだれだっていいようにできる。おれにどうしろってんだ」

「いいから余計な真似はすんなよ」メネンデスは厳しい口調で言った。

「余計な真似って？」

「レノックス事件で稼ごうとか、名を売ろうとか。終わりだ。片付いたんだ。テリーは死んだし、これ以上は騒がれたくない。あいつはもう十分苦しんだ」

「心優しきごろつきか。泣けるね」

「口に気をつけろよ、どチンピラが。メンディ・メネンデスは議論なんかしない。みんな黙って聞くもうけ口は他に見つけろ。わかったか？」

そいつは立ち上がった。面談終了。彼は手袋を手にした。純白の豚革だ。一度もはめたことがあるようには見えない。おしゃれなヤツだ、このメネンデス殿。だがその背後ではタフきわまりない。

「名声なんか求めてない。それにだれも金なんか申し出てない。なんで金なんか出す、何のために？」

「おれの目はごまかせないぜ。ブタ箱で三日過ごしたのは、お前が甘ちゃんだからってだけのはずはない。金をもらったな。だれにもらったかは言わないが、見当はつく。そしておれが思ってるやつは金ならいくらでもある。レノックス事件はおしまいで、二度と蒸し返されない³⁶。たとえ——」彼はそこでピタリと止まり、机の端を手袋ではたいた。

「たとえテリーが彼女を殺してなくても？」

そいつが見せた驚きは本当に形ばかりで、週末の結婚指輪の金メッキ並に薄っぺらかった。「そう信じたいところだがな、チンピラ。だがまるで筋が通らない。だが通ったとしても——そしてテリーは今の話で行きたかったんだから——今の話で納めるんだ」

おれは何も言わなかった。しばらくして相手はゆっくりと顔をほころばせた。そしてしつこく繰り返した。「でかい赤いスクーターに乗ったターザン。強がりやがって。おれが入ってきてなめた真似をしても何もできない。小銭で雇われてだれにでもいいようにされちまう。金もない、家族もない、将来もない、何もない。じゃあな、チンピラ」

おれは口を閉じたままじっと座り、机の端の黄金煙草ケースの輝きを見つめていた。歳を取り疲れた気がした。ゆっくり立ち上がりそのケースに手を伸ばした。

「忘れ物だ」と机をまわった。

「そんなの半ダースも持ってる」と男はせせら笑った。

十分近くにくるとそれを差し出した。そいつの手が何の気なしに伸ばされた。「こいつを半ダースはどうだ？」と尋ね、そいつのみぞおちに思い切りパンチを入れた。

うめき声を挙げて身体を二つ折りにした。煙草ケースが床に落ちた。後ずさりして壁にもたれかかり、手が痙攣するように前後によじれた。あえぐが肺に空気が入ってこない。汗が浮かんでいる。とてもゆっくり、かなり努力して身を起こし、おれと再びにらみ合った。おれは手を伸ばし、そいつのあごに沿って指を走らせた。彼は身動きしなかった。やっとその茶色い顔に何とか微笑を浮かべた。

「そんな度胸があるとはな」

「次は銃を持ってこいよ——そうでなけりゃチンピラ呼ばわりするな」

「銃は手下に持たせてる」

「そいつを連れてこい。要るから」

「おまえ、怒らせるのも一苦労だな、マーロウ」

36 村上訳：「レノックス事件にはもう封印が貼られたんだ。そしてその封がこの先はがれることはない」。うーん。まちがってはいないけど、ヤクザの親分がとっさに言うせりふにしてはずいぶん持って回ってると思う。The Lennox case is closed and it stays closed が原文。case closed は本当に一般的ないまわしだからここで出てくるのは自然。他の訳はもっと普通になっている。

足で黄金煙草ケースを片方に動かし、かがんでそれを拾い渡した。男はそれを受取り、ポケットに入れた。

「まるで読めなかった。なんであんたがわざわざこんなところまで来て、おれを愚弄しなきゃならないのか。それから単調になってきた。タフな連中はみんな単調なんだ。エースしかないトランプをするみたいなものだ。あんたらは何でも持っていて、何も持っていない。すわって自分の姿を見ているだけだ。テリーがあんたに助けを求めなかったのも当然だな。売春婦に金を借りるようなもんだからな」

彼は腹を二本指でそっと押さえた。「今のは言わないほうがよかったぜ、チンピラ。減らず口が過ぎるってこともあるんだからな」

彼はドアに向かいそれを開けた。外ではボディガードが反対の壁から直立してこちらを向いた。メネンデスがアゴで合図した。ボディガードは事務室に入ってきて、無表情におれを眺め回した。

「こいつをよく見とけ、チック。万が一のために、しっかり覚えとくんだ。いつの日か、おまえら二人で何かあるかもしれんからな」

「もう見ましたよ、親分」その口元を引き結んだ精悍な色黒の男は、その手の連中につきものの口元を引き結んだ声で言った。「手間のかかるようなヤツじゃありません」

メネンデスは苦々しい微笑を浮かべた。「腹のパンチに気をつけろよ。右フックは半端じゃない」

ボディガードはおれに顔をしかめてみせたただけだった。「そこまで近寄らせませんよ」

「ま、じゃあなチンピラ」とメネンデスは出ていった。

「じゃあな」とボディガードは冷たく言った。「名前はチック・アゴスティーノ。見ればわかるだろうがな」

おれは答えた。「汚ねえ新聞紙みたいな。顔を踏み潰さないよう一言言ってくれ」

彼は歯をくいしばった。そしていきなり向きを変えて親分の後に続いた。

ドアは空圧式のしかけでゆっくり閉じた。耳をすませたが、廊下を下る二人の足音は聞こえなかった。ネコのような静かな歩き方だ。一応確認のため、一分たったあとでドアを開けて外を見た。だが廊下はまったく無人だった。

おれは机に戻り、なんでメネンデスみたいな地元のそこそこ大物のやくざが、わざわざおれの事務所に自らやってきて、余計なことをするかと警告したりするんだろうかとしばらく思案した。しかも表現こそちがえ、シューエル・エンディコットから似たような警告を受けた直後ののだ。

考えるだけ無駄だったので、どうせならさらに無駄を重ねようかと思った。受話器を取って、ラスベガスのセラピン・クラブに電話をかけ、フィリップ・マーロウからランディ・スター氏に直接話したいと告げた。無駄だ。スター氏は出張中ですので、どなたか他の方とお話になりますか？ いや結

構。スターとだってそんなに話したかったわけじゃない。一時の気まぐれだ。スターはおれを殴るには遠すぎる。

その後、三日にわたり何も起きなかった。だれにも殴られず、撃たれず、電話で余計な真似をするなど脅されたりもしない。家出娘を探せとか、浮気妻、失われた真珠の指輪、消えた遺言状を見つけろという依頼もない。すわって壁を見つめていただけ。レノックス事件は、いきなり起きていきなり消えた。手短な検屍審問はあったがおれは呼ばれなかった。変な時間に開かれ、予告もなく陪審員もいない。検屍員が自分で評決を出した。シルヴィア・ポッター・ウェスターハイム・ディ・ジョルジオ・レノックスの死は、その夫テレンス・ウィリアム・レノックスにより殺害の意図を持って引き起こされたものであり、その夫はその後検屍事務所の管轄外で死亡した、という。おそらく自白書が読み上げられて記録に残されたのだろう。おそらくそれは検死官が納得するくらいの検証は受けていたんだろう。

死体は埋葬のため遺族に渡された。北に空輸されて家族の納骨所におさめられた。マスコミ拒否。だれも取材に応えなかったし、中でももともと取材に応じないハーラン・ポッター氏はなおさらだ。彼と面会するのはダライ・ラマに会うよりむずかしい。億万長者の暮らしは奇妙なものだ。召使い、護衛、秘書、弁護士、従順な重役どもが隠れ蓑になる。おそらく、食べ、眠り、髪を切り、服を着るのだろう。だが本当のところはわからない。そいつらについて見聞きするものはすべて、広報担当者の群れが加工済みなのだ。そいつらは高額をもらって、使える人格を作りだして維持する。単純明快でビシッとしたもの、消毒済の注射針のようなものだ。別に本当でなくてもいい。既知の事実と整合しているだけでいい。そして既知の事実なんて両手の指で数えられるほどしかない。

三日目の午後遅くに電話が鳴って、ハワード・スペンサーを名乗る男と話した。ニューヨークの出版社の代表でカリフォルニアに出張できており、相談したい問題があるので明朝 11 時にリッツ・ビバリーホテルのバーで会えないかという。

どんな問題か尋ねた。

「いささか繊細な話なんですが、まったくやましいところはありませんから。話がまとまらなければ取らせたとお時間の分は払いますよ、もちろん」

「ありがとうございます、スペンサーさん。でもそれには及びません。だれか私の知人から推薦でもありましたか？」

「あなたを知っている人ですよ—最近の警察とのもめごとも含めてね、マーロウさん。言っておくと、そこが私の関心を惹いたところなんです。しかし私の仕事は、あの悲劇的な出来事とは無関係です。ただ—いや、この話は電話より、一杯飲みながらでもしましょう」

「ブタ箱にいたような男と本気で関わり合いになりたいんですか？」

向こうは笑った。その笑いと声はどちらも快かった。ブルックリン訛りにみんなが染まってしまう前のニュー Yorker の話し方だ。

「私の観点からすると、それはむしろプラスのポイントなんです。それは、付け加えますと、あなたが、いまおっしゃったように、ブタ箱にいた、という事実ではなく、あなたが、なんといいますが、圧力をかけられても、きわめて寡黙だったようだ、という事実のほうが、ですよ」

やたらに読点の多いしゃべり方をする人だった。分厚い小説みたいだ。少なくとも電話ではそうだ。

「わかりましたよ、スペンサーさん。朝に伺います」

彼は礼を言って電話を切った。だれが推薦してくれたのかと不思議に思った。シューエル・エンディコットかとも思い、調べようと電話をかけた。だが今週ずっと出張中で、まだ戻っていないという。別にどうでもよかった。こんな稼業でもたまには満足してくれるお客はいるもんだ。それに仕事をしないと。金が要るからだ——少なくともそう思っていた。だがそれもその夜に家に帰り、マディソンの肖像画が入った手紙を見つけるまでのことだった。

[12]

その手紙は我が家の階段のふもとにある、赤と白の鳥の家型郵便受けに入っていた。スイングアームについた、郵便受けてっぺんのキツツキが上がっていたが、それでもおれは中を見ようとはしなかったかもしれない。家に郵便がくることなんかなかったからだ。だがそのキツツキはごく最近、クチバシの先端をなくしており、木材の折れ口が真新しかった³⁷。どっかの生意気なガキが原子銃を撃ったのだ。

その手紙は航空便というスペイン語 Correo Aéreo が書かれ、大量のメキシコ切手と書き付けがあったが、最近メキシコがかなりしつこく頭に浮かんでいなければ、それを認識できたかどうかもわからない。消印は読めなかった。手でスタンプが押されていたが、インク台のインキはほぼなくなりかけていたらしい。分厚い手紙だった。おれは階段をのぼって居間にすわり、それを読み始めた。いつになく静かに思える晩だった。死人からの手紙は独自の沈黙をもたらすのかもしれない。

日付も時候の挨拶もなしに始まっていた。

二階の窓辺、部屋の中、あまりきれいでもないホテルで、オタトラカンという町にいる。湖のある山岳町だ。窓のすぐ下に郵便箱があって、ボーイが注文したコーヒーを持ってきたらこの郵便を郵送してくれて、投函する前にそれをぼくが見えるように掲げてくれることになっている。それをやったらそいつは百ペソ紙幣がもらえるんだ。その子にとってはすごい大金だ。

なぜそんな手間を？ ドアの外に、とんがり靴と汚いシャツの日焼けした御仁がいて見張ってるんだ。何かを待ってるらしい。何を待ってるかはわからないが、外に出してくれない。この手紙さえ投函できればどうでもいいんだが。君にこのお金を渡したいんだ。ぼくは要らないしどうせ地元の官憲が懐に入れるだけなのはまちがいないから。それで何かしてくれというんじゃない。こんな面倒をかけたお詫びと、ずいぶんまっとうなヤツへの敬意の印と思ってくれ。いつもながらやれる限りのヘマをやらかしたが、銃はまだ持っている。これは勘だけれど、たぶんあるポイントについて君はすでに判断を下したはずだ。ぼくは彼女を殺したかもしれず、たぶん殺したのかも、でももう一つのことは絶対にやったはずはないんだ。あの手の残虐行為はぼくの主義じゃない。だから何かずいぶん変なところがある。だがどうでもいい。まったく。いま大事なことは無用で無益な醜聞を避けることだ。彼女の父親も姉も、ぼくに何かひどいことは一度もしていない。向こうは向こうの

37 村上諷だけ、「折れ口が生々しい」ときちんとその場面に沿った訳ができています。

暮らしがあるし、ぼくは自分の暮らしにムカついて死にそうなほどだ。シルヴィアがぼくをダメにしたんじゃない。もともとダメだったんだ。なぜ彼女がぼくと結婚したのか、はっきりしたことは何も教えてあげられない。ただの気まぐれだったんだろう。少なくとも若く美しいままで死んだわけだ。情欲は男を老いさせるが女の若さは保つと言われる。いろんなバカげたことが言われてるもんだ。金持ちはいつも自衛できるとか、金持ちの世界は常にピカピカとか。いっしょに暮らしてみたが、みんな退屈して寂しいだけなのに。

自白書を書いたよ。ちょっとひどい気分であつたらず恐い。こういう状況の話は本に書いてあつたりするが、本当のことなんか書いてない。自分に起こると、残されたものがポケットの拳銃だけだつたりすると、見知らぬ国の汚い小ホテルに缶詰にされると、逃げ道が一つしかない——疑うなかれ、ご同輩、高揚したりドラマチックだつたりすることなんか何もない。とにかくいやらしくてみすばらしく、灰色で陰気なだけだ。

だからこれもぼくも忘れてくれ。だがまずヴィクターズでギムレットをぼくのために飲んでくれ。そして次にコーヒーを淹れるときには、少しバーボンを入れてぼくのタバコに火をつけて、コップの隣に置いてくれ。そしてその後はすべて忘れてくれ。テリー・レノックス送信完了。それじゃさよなら。

ドアにノックが聞こえる。たぶんコーヒーを持ってきたボーイだろうね。そうでないなら、これから銃声が聞こえるはず。ぼくは基本的にはメキシコ人が好きだが、連中の牢屋は嫌いだ。それじゃ。

テリー

それだけ。手紙をたたみ直して封筒に戻した。本当にコーヒーのボーイだったんだな。そうでなければこの手紙が届いたはずもない。マディソンの肖像画が入っているのはね。マディソンの肖像がついているのは五千ドル札だ。

緑でパリッとしてテーブルの上に乗っている。これまで見たこともなかった。銀行で働く人でもあまり見た人はいない。ランディ・スターやメネンデスみたいな人物はこれを見せ金として持ち歩いているかもしれない。銀行に言って頼んでもこんな札は置いていないはずだ。連邦準備銀行から取り寄せてもらうことになる。数日かかりだ。アメリカ全体でも流通しているのは千枚かそこらだ。おれのは後光が差している。小さな独自の日差しをそれだけで作りだしている。

すわったまま、それを長いこと眺めていた。やっとレターケースにしまい、台所に行って言われたコーヒーを淹れた。感傷的だろうと何だろうと、頼まれた通りにやった。二杯コーヒーを注ぎ、あいつの分にバーボンを注いで、テーブルで飛行機へと連れだした朝にあいつがすわっていた側に置いたあいつのためにタバコに火をつけて、カップの脇の灰皿に置いた。コーヒーから湯気が立ち上るのを

眺め、タバコから細い煙の糸が上がるのも眺めた。外のタチノウゼンの茂みでは鳥がガサガサして、小さい鳴き声で独り言をいいつつ、ときどきちょっと羽ばたいていた。

そしてコーヒーの湯気が消え、煙草の煙もなくなり、灰皿の縁にあるただの火の消えた吸い殻になった。それを流しの下のごみ箱に落とした。コーヒーは流してコップを洗い、しまった。

それでおしまい。五千ドルにはとても足りないように思えた。

しばらくして、深夜映画に出かけた。何の意味もない。ほとんど何も見ていなかった。音とでかい顔だけ。家に戻るとえらくつまらないルイ・ロペス戦法をチェス盤でやってみたが、それも何の意味もなかった。だからベッドに入った。

だが寝るためではない。朝三時に床をうろつきながらハチャトリアンがトラクター工場での仕事に精を出しているのに耳を傾けた。彼はそれをバイオリン協奏曲と呼んでいた。おれに言わせればゆるんだファンベルトで、まったくクソ食らえだ。

眠れない夜なんて、おれには太った郵便配達人並に珍しい。リッツ・ビバリーにいるハワード・スペンサー氏がいなければ、ボトルを開けて酔い潰れたところだ。そしてこんど、ロールス・ロイス・シルヴァーレイスで泥酔した礼儀正しい人物を見かけたら、一目散に逃げ出すだろう。自分で自分に仕掛ける罠ほど恐ろしいものはない。

[13]

11 時に、食堂アネックスから入ったところの右手にある 3 つ目のブースにすわっていた。背中を壁につけて、出入りする人々はすべて見えた。澄んだ朝で、スモッグもなく、高い霧さえもなく、日差しが水泳プールの表面をきらめかせている。そのプールは、バーの板ガラス製の壁のすぐ外から始まって、食堂の向こう端まで続いているのだ。白いシャークスキンの水着とそそる姿態の若い女が、高飛び込みボードへと続くはしごを上っていた。その日焼けした太ももと水着との間の、白い帯をおれは見つめていた。それもいやらしい目で。そこで彼女が見えなくなった。屋根の深いひさしで遮られたのだ。一瞬後、一回転半の飛び込みをしつつ彼女がさっと下りてきた。水しぶきが太陽に届くほど上がり、できた虹はその娘に迫る美しさだった。そしてプールのはしごを上がってきて、白いヘルメットのひもをほどき、頭を振って脱色した髪を垂らした。尻をゆすりながら小さな白いテーブルに向かい、むきむきの男の隣にすわったが、その男は白いドリルパンツにサングラスで、全身があまりに均一に日焼けしているので、プール周りの雇われ男としか思えない³⁸。そいつは手を伸ばして彼女の太ももを叩いた。彼女は火事バケツのような口を開いて笑った。それで彼女への興味は失せた。笑い声は聞こえなかったが、歯を開いたときに顔の真ん中にできた穴だけでたくさんだった。

バーは空っぽだった。三つ先のブースでは、やり手二人がお互いに二十世紀フォックスの企画をぶつけ合っていて、金の代わりに両腕の身ぶりを使っている³⁹。テーブル上の電話をはさんでいて、二、三分ごとにだれにホットなアイデアをダリル・ザナックに電話で伝えるかという競争を繰り広げていた。若く、日焼けして、熱心で元気いっぱいだ。電話での会話に、おれならでぶを階段四階分抱え上げるくらいの筋肉運動を費やしている⁴⁰。バーのスツールでは、哀れなヤツがバーテンに話しかけていた。バーテンのほうは、グラスを磨きつつ、わざとらしい微笑を浮かべて話を聞いているが、それは叫び出したいのをこらえるときに人が浮かべる微笑だった。その客は中年で、身なりは立派で、飲んだくれていた。話がしたいだけで、本当は話したくなかったとしても口を閉じられないヤツだ。礼儀正しく人当たりはいいし、聞こえた範囲では親しみやすいし、ろれつも回っているが、起きてすぐにボトルを手にして、夜に寝るときまで手放さないのは見ればわかる。どうしてそんなことになったの

38 村上と田口訳は、これをプールの監視員としているけれど、監視員がお客とちちくりあっていいとも思えないので、ちがうんじゃないか。が、the hired man となっているので、雇われ男ならなんでもいいわけでもなさそう。はっきりにしない。1950 年代リゾート型ホテルがホストっぽい男を雇って女性客に奉仕させた可能性はある。また女子も含め 2 人ともプールサイドのモデル役として雇われている可能性はある。が、憶測だし直訳が無難。

39 村上訳は double-arm gesture を「承諾の身ぶり」としているが、なんでそんな訳になるのか不明。

40 ここに改行が入るのか不明。村上訳は入らない。手持ちの原書も入っていないが、清水と田口は改行してる。

かは決してわからない。本人が話してくれても、それは事実ではないだろう。せいぜいが、彼の覚えている範囲の、真実の歪んだ記憶だ。世界中の静かな酒場には、どこでもそういう悲しい男がいる。

腕時計を見ると、この有力出版人はすでに二十分の遅刻だった。三十分待ったら立ち去ろう。客の好き放題させてもいいことはない。自分がいいようにできる探偵なら、他の人にもいいようにされるだろうと思うだろうし、そんなことのために探偵を雇うわけじゃないのだ。それに今は、はるか東海岸の頭でっかちに馬丁がわりに使われるほど仕事がほしい気分じゃなかった。どっかの重役かなんかで、85階のパネル張りオフィスに大量の押しボタンとインターコムと、ハッティ・カーネギーOLスペシャルファッションに身を包んで、あのでかい誤解させるような目をした秘書がいるんだろう。この種の御仁は、九時きっかりに来いと言っておきながら、ギブソン二杯飲んで二時間遅れでふらりとやってきたときに、こっちがにこにこ物欲しげに静かにすわってないと、怒りの重役能力発作を起こしちゃって、アカプルコで五週間過ごさないと元気はつらつ剛速球には戻れない⁴¹。

年配のバーのウェイター⁴²がふらりと通りかかり、おれの薄くなったスコッチと水のほうをさりげなく目くばせしてみせた。首をふると向こうは白髪頭でうなずき、そしてまさにそのとき、夢が入ってきた。一瞬、バーの音がすべて消えてしまい、やり手どもがやるのをやめ、スツールの酔っ払いがダベリをやめたように思え、まるで指揮者が指揮台をタクトで叩いて両腕をあげて止めた瞬間のようだった。

スリムでかなり背が高く、白リネンの特注服を着て、首に白い水玉模様のスカーフを巻いている。髪はおとぎ話のお姫さまじみ淡い金色。その上にかぶった小さな帽子の中に淡い金髪が巣の鳥のようにおさまっている。目はヤグルマギクの青、珍しい色で、まつ毛は長くてあまりに淡い色。通路向こうのテーブルにやってくると、手首から大きく広がる白い手袋を脱いでいるところへあの年配ウェイターがやってきて、おれなんかじゃ決してやってもらえないやり方でテーブルを引いてあげた。彼女はすわり、手袋をハンドバッグのストラップの下にすべりこませて、ウェイターに感謝したがその微笑があまりに優しく、あまりにふるいつきたいほど純粹だったので、相手はほとんど硬直しかけた

41 he would have a paroxysm of outraged executive ability which would necessitate five weeks at Acapulco before he got back the hop on his high hard one. 面倒な文。特に最後の部分は原文でも勢いだけが野球への言及。清水訳はあっさり無視。村上訳はやたらに文章を切って「烈火のごとく怒り出す。そんな偉そうなことをやっていればさすがに神経がおかしくなり、アカプルコで五週間ばかり羽をのばす必要が生じる。そうやって活力を取り戻し、また目一杯肩肘を張った生活に復帰するのだ」としているが、「神経がおかしくなり」など余計なものが多い。

田口訳は「……発作を起こす。怒りまくったお偉方にしか真似のできない発作だ。こいつはそういうタイプだ。アカプルコで五週間の休暇を取って生気を取り戻し、帰ってきては人に不快な思いをさせるタイプ」と、自分の(決して厳密ではない)解釈に引きつけるために、「こいつはそういうタイプだ」「不快な思いをさせるタイプだ」とさらに余計なことばを追加している。

この前後も含め、少し酒も入ってマロウの思考がだんだんさまよって荒唐無稽になり最後は意味不明な感じになるのがポイントなので、ダラダラした感じを出すためあまり文は切らないほうがいいことばは足さないほうがいいと思う。読みやすくするとトレードオフになるし、趣味ではあるが。

42 村上訳はここをなぜか「バーテン」と訳しているので、女性のテーブルを引くのと同人物なのがわかりにくい。

何かすごく小さな声で言われた。ウェイターは前屈みに急ぎ足でそこを離れた。彼にとっては人生の一大使命だ。

おれは見惚れた。見惚れているのに気づかれた。彼女は視線を一センチほど上にそらし、するともうおれの存在なんかそこから消えた。だがどこにいるにせよ、おれは息をのんでいた。

ブロンドなんかいくらでもいて、いまやネタでしかない言葉になってる。どのブロンドも見所はある、ただし例外は脱色する前はズルー族の黒んぼみたいな髪だったメタリックなやつで、そいつらは性格も歩道なみにガチガチ。ぺちやくちゃさえずる小柄でかわいいブロンドもいれば、氷の青い眼差しではねつけてくるでかい彫像みたいなブロンドもいる。上目遣いをしてすばらしい匂いでキラキラでこっちの腕にぶら下がるけど家に戻ったらいつもやたらに疲れたといってそれ以上進ませてくれないブロンドもいる。弱々しい身ぶりをしてクソ頭痛がすると言ってぶん殴ってやりたいところだがあまり時間や金や期待を注ぎこむ前に頭痛戦法がわかっただけでよしとしようか。いつだって肝心なときに頭痛を起こすたちの女で、この武器は古びることはなく、刺客の短剣やルクレチアの毒薬なみに命取りだ。

ふんわりした尻の軽いアル中ブロンドもいて、こいつらは服装なんか気にしないがミンクでないとダメで、どこへ行くのも気にしないがスターライト・ルーフでないと行かないしシャンパンが山ほどないといや、と言う。小柄で元気なブロンドは小さな相棒みたいで、いつも割り勘で健康と常識をたっぷりもちあわせて柔道もしっかり身につけてトラックの運ちゃんでも投げ飛ばしながら、『サタデー・レビュー』の社説を一行も飛ばさずに読める。やたらに青白いブロンドもいて、何やら命に関わらないが治療不能の貧血症だったり。えらく物憂げではかなく、どこからともなく軟らかい声を出して、指一本たりとも手出しできないのは、まずこちらとしても遠慮したいからだし、もう一つは『荒地』だの原書のダンテだのカフカやキルケゴールだのを読んでいたりプロヴァンス語を勉強したりしてるからだ。音楽が大好きでニューヨーク・フィルハーモニックがヒンデミットを演奏するときも、六台のコントラバスのどれが四分の一拍遅れて入ってきたか聞き分けられる。トスカニーニもそれができたとか。すごいね⁴³。

そして最後に、ゴージャスな見世物ブロンドもいるな。ギャング大ボス三人より長生きしてその後に億万長者何人かと一人百万ずつで結婚し、最後はアンティープ岬の淡いバラ色別荘にアルファロメオの豪華セダンをもらってしっかり操縦士に副操縦士までつけ、貢がせた落ちぶれ貴族どもを厩舎に大量に抱えて、そいつらみんな、老公爵が執事におやすみを言うときの、愛情こめた放心ぶりで扱われるのだ。

43 That makes two of them を村上は「そんな人間が世間に二人もいるわけだ」、田口は「つまりトスカニーニと仲よしのブロンドということだ」としている。これは直訳の意味的には村上訳の通りだが、一般に口語で言うときは「その娘はトスカニーニ並の天才なんだねー」ということで、つまり「すごいね」というだけの意味。田口訳は完全にピントはずれ。清水訳は……言うまでもない。

通路向かいの夢の女はそのどれでもない。その種の世界にすらいない。分類不能で、山水のように遠く清涼で、その水の色のようにとらえどころがない。まだそれに見惚れているところへ、肘の近くで声がした。

「とんでもなくお待たせしてしまいましたな。お詫びします。こいつのせいなんでお許しを。ハワード・スペンサーと申します。あなたはもちろん、マーロウですね」

頭をめぐらせてそいつを見た。中年、いささかでぶ、服装は実に無頓着だがひげはしっかり剃られ薄い髪は耳の間に広がる頭の上に慎重になでつけられている。派手なダブルのチョッキを着込んでいた。カリフォルニアでは、訪問中のボストン人でもない限りほとんど見かけない代物だ。メガネは縁なしで、貧相な老犬めいたブリーフケースを叩いていたが、どうやらそれが「こいつ」らしい。

「まっさらの本一冊分の原稿が三つです。小説。断る前にこいつをなくすことになったら面目ないですからね」と彼は、夢の女の前に背の高いグリーンのドリンクを置いて引き下がったばかりの、あの年配ウェイターに合図した。「ジンとオレンジに目がなくて。バカげたドリンクではあるんですがねつきあいますか？ いいですね」

おれがうなずくと年配ウェイターはスツと向こうに行った。

ブリーフケースを指さしながらおれは行った。「断るってなぜわかるんですか？」

「多少なりともマシなら、著者自らホテルに持ってきたりはしないでしょう。どこかニューヨークのエージェントが扱ってます」

「じゃあ最初から受け取らなければ？」

「一つは気持を傷つけないから。もう一つは、あらゆる出版人が夢見る千に一つの可能性があるから。しかしほとんどの場合、カクテルパーティーにいて、いろんな人に紹介されて、中には長編小説を書きながら、こっちはできあがっていて優しい気分と人類愛にあふれていて、そこで是非拝見したいですなあとか言うんです。するとまあ、電光石火でそれがホテルに届けられ、おかげで読むふりくらいはしなきゃならない。が、出版人とその問題なんかにはご興味ありませんよね」

ウェイターがドリンクを持ってきた。スペンサーは自分のを奪い取って、健康に大きくあおった。通路をはさんだ黄金の女には気がついていない。おれ一人に注目している。優秀な仲介人だ。

「仕事のためなら、たまには本も読みますよ」

彼はさりげなく言った。「うちの最重要作家の一人がここに住んでるんです。お読みになったかな、ロジャー・ウェイドです」

「ああ、あれね」

彼は悲しげに微笑んだ。「おっしゃりたいことはわかります。歴史ロマンスはご趣味じゃないでしょう。でもすさまじく売れるんです」

「何もおっしゃるつもりなんかないですよ、スペンサーさん。前に一度見たことはあります。つまりないと思いました。そう言ってはいませんか？」

彼はにやりとした。「いえいえ。そう思う人はたくさんいます。しかし重要なのは、いまは彼が自動ベストセラーだってことです。そしてどんな出版社もそういうのを何人かかかえてないと。費用があがる一方ですから」

おれは黄金の女のほうを見た。ライムエード⁴⁴かなんかを飲み終えて、顕微鏡が要る小さな腕時計を見ていた。バーは少し人が増えていたが、まだ騒々しくはない。やり手ども二人はまだ手をふりまわし、バースツールの単独飲酒屋は数が増えていた。おれはハワード・スペンサーに目を戻した。

「あなたの問題となんか関係が？ このウェイドってことですが」

彼はうなずいた。おれを慎重に値踏みしている。「ご自分についてもう少しお話いただけませんかマーロウさん。もしこんなお願いがおいやでなければですが」

「どんなことを？ 私立探偵として免許を持っていて、かなり前からこの稼業です。一匹オオカミ、未婚、中年になりかかりで、あまり金持ちじゃない。一度ならず牢屋に入ったし、離婚がらみの身辺調査はしない。好きなものは、酒と女とチェスとその他いくつか。警察にはあまり好かれてませんが、そこそこつきあいのある警官はいる。地元出身、サンタローザ生まれ、両親ともに他界、兄弟姉妹なし、いつか暗い裏道で殺されたら、もしそんなことがあれば、これはこの稼業ならだれにでも起こることで、最近ではどんな稼業のやつでも稼業のないやつでも体験してることだが、そうなっても人生の底が抜けたように感じてくれるやつはいませんよ」

「なるほど。しかしそれはどれも、私の知りたいことをずばり教えてくれるものじゃない」

おれはジン&オレンジを飲み終えた。気に入らなかった。相手にニヤリとした。「スペンサーさん一つ抜かしたことがありました。ポケットにマディソンの肖像を持ってます」

「マディソンの肖像？ すみませんが何のことか——」

「五千ドル札です。いつも持ち歩いてる。幸運のお守りです」

彼は声を落とした。「いやはや。ずいぶん危険じゃありませんか？」

「ある水準を超えたら危険なんてどれも同じ、とかだれか言ってませんでしたっけ？」

「ウォルター・バジヨットじゃなかったでしたっけ。確か尖塔修理人の話で出てきたような」そこで彼はニヤリとした。「すみません、私も一応は出版人だったりするわけですし。なかなかいいヤツじゃないですか、マーロウ。あなたで試して見ましょうか。そうしなかったらあなたは、地獄に落ちろとおっしゃるはず、ですよ？」

おれはニヤリと仕返した。彼はウェイターを呼んでドリンク二杯おかわりを頼んだ。

⁴⁴ 田口訳はライムネード。そういう言い方もあるのかな。あとこのあたり、村上訳は全般にえらくごちない説明口調になっている。なんか下訳使ってあまりチェックせずに流したような印象。

彼は慎重に口を開いた。「こういうことなんです。ロジャー・ウェイドでかなり苦労してまして。本を書き終えられないんですよ。正気を失いかけてるんですが、何か裏がある。なんだかボロボロになりつつあるんです。すさまじい飲酒と癲癲の発作が何度もある。ときには何日も姿を消してしまうしばらく前には妻を階段から投げ落として、あばら五本折る大けがで入院させました。普通の意味で二人の間にトラブルはないんですよ。まったくね。ただ飲むと手がつけられない」とスペンサーは後ろにもたれ、陰気におれを見た「どうしても本を仕上げてもらわないと困るんです。どうしても要る相当部分まで、私の仕事がかかってるんです。でもそれだけじゃない。これまでのどの作品よりずっと優れたものが書ける、とても有能な作家を救いたいです。何かひどくおかしい。今回の出張では私に会ってもくれない。確かにこれは、精神分析医の仕事みたいですよ。ウェイド夫人はそうは思わないんです。夫は完全に正気だけれど、何か死ぬほど怯えさせているんだと言うんです。何か脅しを受けているとかです。ウェイド夫妻は結婚五年です。彼の過去の何かが蘇ってきたのかも。ひょっとすると——たんなる当てずっぽうですが——ひき逃げでだれかを殺してしまい、そのネタをだれかに捕まれているとかね。それが何かはわからない。それを知りたい。そしてその問題を解決するためならお金は喜んで出します。結局それが医療問題なら——まあそれは仕方ない。そうでないなら、何か答があるはずだ。そして同時にウェイド夫人も守らないと。次回は殺されかねない。万が一の話ですが」

二巡目のドリンクがやってきた。自分のには手をつけず、向こうが一息で半分飲み干すのを眺めたタバコに火をつけて、だまって相手を見つめた。

「それは探偵の仕事じゃない。魔法使いの仕事だ。いったいどうしろって言うんですか？ たまたまちょうどいいときに現場にいわせて、向こうが扱い切れないほど暴れなければ、ぶん殴って眠らせることはできるかもしれない。でも、いあわせないと。百対一であり得ない。それはおわかりでしょうに」

「体格はあなたと互角だが、健康状態は段違いだ。それにずっとついていけばいいでしょう」

「無理ですよ。アル中はずる賢いし。騒ぎを起こすときには、おれがいないときを確実に選んでくる看護師になるつもりはないのでね」

「看護師では役に立たない。ロジャー・ウェイドは看護師を受け入れるような男じゃないんです。すごく才能があるのに自制心のたががはずれてるんだ。まぬけどものためにクズを書いて儲けすぎた。だが作家にとって唯一の救いは書くことです。何かいい部分が残っているなら、それは必ず出てくるはずですよ」

おれはうんざりして言った。「はいはい、すごいお方ですねえ。それにずいぶん危険そうだ。後ろ暗い秘密を抱えていて、それを酒で溺れさせようとしている。おれ向きの問題じゃないですねえ、スペンサーさん」

「わかりました」と彼は腕時計を見て、不安そうなしめつ面をした。顔がしわくちやになり、もっと高齢で小さく見えるようになった。「まあやるだけやったってことで」

彼はふくれたブリーフケースに手をのばした。おれは通路越しに黄金の女を見た。彼女も立ち去るところだ。白髪のウェイターがそこに勘定書きを持って飛んでいった。金と美しい微笑を与えると、ウェイターはまるで神と握手したような様相となった。女は口紅を直し、広がった白手袋をはめるとウェイターは彼女が出られるように、テーブルを部屋の半ばまで大きく引いた。

スペンサーを見るとテーブル縁の空のグラスを見下ろしている。ブリーフケースは膝の上だ。

「わかりましたよ。その男に会いに行って、しゃんとするように言ってはみますよ。奥さんにも話しはしますよ。でもたぶん、家から放り出されると思うんですがねえ」

スペンサーのではない声と言った。「いいえ、マーロウさん。そんなことはされないと思いますよむしろ気に入られるかもしれないと思いますけど」

目をあげると紫色の目が二つあった。彼女はテーブルの端に立っている。おれは立ち上がりかけ、いささかみっともない形でブースの背とテーブルにはさまってしまった。すべり出てきちんと立てないと、そうになってしまうのだ。

「あら、どうかそのまま」という彼女の声は、夏の雲を彩るのに使う代物のようだった。「お詫びしないといけませんね。お目にかかる前に、あなたを観察させていただくのが重要に思えたものですから。アイリーン・ウェイドです」

スペンサーはむっつりと言った。「ご興味ないそうですよ、アイリーン」

彼女は優しく微笑んだ。「そうかしら」

おれは取りつくろった。そこに不安定な形で立ち、口をぽかんと開けて、初心な新卒娘みたいにハアハア息をしていた。本当に大した女だった。間近で見るとしびれそうだ。

「関心ないとはもうしませんでしたよ、ウェイドさん。言ったのは、いや言いたかったのはですね、お役にたてるとは思わないし、試すだけでも大まちがいかもしれないってことなんです。害を引き起こしかねない」

いまや彼女はとても真剣だった。微笑が消えた。「結論を急ぎすぎです。行動で人を判断なんかできません。判断するのであれば、その人の本質を見ないと」

おれはぼんやりうなずいた。というのもそれはテリー・レノックスについて思っていたことそのものだったからだ。事実だけ見ればとても手を出す相手じゃない。唯一、あの塹壕でのちょっとした栄光の輝きがあるだけだ—それもメネンデスが本当のことを言っていたのなら—が、事実だけで話がすべてわかるわけでは決してない。彼はどうしても憎めない男だった。そんな人間に、一生で何人お目にかかれるだろうか？

「そのためには、その人を知らないといけませんね」と彼女は優しく付け加えた。「さようなら、マーロウさん。気が変わったら―」とハンドバッグをすばやく開けて、名刺をくれた―「それとご足労いただきありがとうございました」

彼女はスペンサーに会釈して立ち去った。それがバーを出て、ガラス壁のアネックスを通して食堂に行くのを見送った。見事な足取りだった。ロビーにつながるアーチの下で向きを変えるのを見た。角を曲がるとき、白リネンスカートが最後にちらりと翻るのを見た。それから、ブースにゆっくり腰を下ろすと、ジン&オレンジをつかんだ。

スペンサーが見ていた。目つきになにか厳しいものがある。

「やりますね。でもたまには彼女のほうを見た方がよかった。あんな夢の女が部屋で向かいにすわったのに、二十分ずっと気づきもしないなんてあり得ないでしょう」

「こりゃ一本取られた」と言って微笑しようとしたが、無理をしているのがわかった。おれが彼女を見る目つきが気に入らなかったのだ。「みんな私立探偵というと実に妙な考えを持ってるもので。それを自分の家に入れるとなると―」

「この私立探偵は、そちらの家に入る気遣いはありませんよ。そもそも、まずもっとマシな話をでっちあげてくださいよ。飲んだくれだろうとしらふだろうと、あのすげえ女を階段から突き落としてあばら五本折るなんてヤツがいるわけない」

彼は紅潮した。ブリーフケースの手が握りしめられる。「私がウソつきだと？」

「どうでもいいでしょう。仕掛けてきたのはあなただ。ひょっとしてあなたもちよっと彼女に気がある？」

彼はいきなり立ち上がった。「なんだその言い方は。きみもなんだか気に入らない。この話はなかったことにしてくれ。今日の手間賃はこれで足りるか」

と20ドル札をテーブルに投げ出し、さらにウェイター用に1ドル札を何枚か追加した。しばらく立ったままおれを見下ろした。その目は輝き、顔はまだ赤い。「結婚して子供も四人いるんだ」と唐突に言った。

「そりゃおめでとうございます」

何かのどですばやく音を立てると、きびすを返して立ち去った。かなりすばやい足取り。しばらく見送って、そしてすぐ目をそらした。ドリンクの残りを飲み干し、タバコを取り出すと一本取ってくわえ、火をつけた。年配ウェイターがきて金を見た。

「何かお持ちしましょうか？」

「いや。その金は全部きみのだ」

彼はそれをゆっくり手に取った。「20ドル札ですが。何かおまちがえではないでしょうか⁴⁵」

「おまちがえじゃないよ。全部取ってくれ」

「まことに恐縮でございます。もしまさか本当にこんな――」

「そのまさかだ」

彼は一礼して立ち去ったが、まだ不安げだった。バーは混み始めていた。スタイルのいい処女もどき二人が楽しげに手を振って通り過ぎた。先のブースにいるやり手二人の知り合いだ。あたりの空気にいちやつきや深紅のマニキュアが飛び散るようだった。

タバコを半分吸い終えて、何ともなしに顔をしかめ、立ち去ろうと立ち上がった。向きを変えてタバコを取ろうとしたところで、何かが背後からドシンとぶつかってきた。まったく踏んだり蹴ったりだ⁴⁶。ぱっと振り向くと、だぶだぶのオックスフォード・フランネル・シャツを着た大柄でえらく陽気なやつが横顔が目の前にあった。人気者風に腕一杯にひろげ、やり手セールスマンの巨大な笑顔を浮かべている。

おれはそいつの伸ばした腕をつかみ、こっちを向かせた。「どうしたよ兄ちゃん。通路が狭すぎてあんたみたいな御大尽ははみ出るのか？」

そいつは腕をふりほどき、タフぶって見せた。「口に気をつけろよ、おい。貴様のアゴをガタガタにしてやってもいいんだぜ」

「ハッハッハ。それならヤンキーズでセンターやってくれてもいいし、棒パンでホームラン打ってくれてもいいぜ。できるもんなら⁴⁷」

そいつは肉付きのいいげんこつを握りしめた。

「ダーリン、マニキュアがダメになっちゃうわよ」と言ってやった。

そいつは感情を抑えてせせら笑ってみせた。「うぜえよ、利口ぶりやがって。こんどもっと暇なときに相手してやるよ」

「これ以上暇になれるのかよ」

「ほれ、さっさと消えろ。これ以上小賢しいこと言うと、入れ歯を作り直すはめになるぜ」

おれはニヤリとしてやった。「連絡待ってるぜ。でも脚本はもっとマシなのになしてくれ」

45 The gentleman made a mistake. いずれの訳もこの gentleman を、立ち去ったスペンサーのことだと解釈しているけれど、これは相手を直接名指ししないで第三者的に言及する、目上の人間への礼儀正しいお作法で、マーロウを指している。不安ならここでやったように主語を明記せずあいまいにしておくのも手。

46 Just what I needed. 既訳はどれも「まさに必要としていたものだった」等となっているが、ちがうと思う。口語でいうときはしばしば、悪いことに悪いことが重なる泣きつ面に蜂のような状況でこう言う。仕事が流れたうえに変な陽キャにぶつかられてむかつく、と言っているのだ。

47 既訳はどれも、ここでなぜ野球の話が出てくるのかわかりにくい訳になっている。前の部分でアゴをガタガタにしてやる、というのをこいつは原文では「ガタガタにしてやってもいい」と仮定法で言ってる。それに対し、そういう仮定の可能性を言うだけなら他にもいろいろあるぜ、実際には何もできやしないだろ、と言いたいわけだ。

すると相手の表情が変わった。そして笑った。「なんだ、あんたも映画業界かよ」

「郵便局の指名手配写真に出てるだけだよ」

「出演応募者ファイルで会おうぜ⁴⁸」と相変わらずニヤニヤしてそいつは遠ざかった。

なんともバカげたやりとりだが、それで気分が解消された。おれはアネックスを抜け、ホテルのロビーを横切って正面入り口に来た。外に出る前にサングラスをかけた。車にたどりついてようやく、アイリーン・ウェイドのくれた名刺を見る気になった。浮き彫り印刷の名刺だが住所と電話番号が入っているので、フォーマルな社交用のものではない。ミセス・ロジャー・スターンズ・ウェイド、アイドルヴァレー通り 1247、電話アイドルヴァレー 5-6324。

アイドルヴァレーならよく知っているし、それが門番小屋つきの入り口と私営警察を備え、湖畔にカジノがあつて、50ドルのお楽しみ娘たちがいた頃からずいぶん変わったのも知っている。カジノが閉鎖されてから、静かな資金がその一帯を占領した。静かな資金はそこを、分譲住宅屋の夢の土地に仕立てた。湖と湖畔はクラブ所有で、クラブに入れないヤツは湖で遊ばせてもらえない。会員専用というわけで、これは単に高価という以外にその言葉に残された唯一の意味での専用なのだ。

おれはアイドルヴァレーなんて、バナナパフェに乗せた小タマネギ並に縁の無い存在だ。

午後遅くなってハワード・スペンサーが電話をよこした。怒りがおさまり、謝りたいとのこと。あの場をうまく仕切れず申し訳ないとのことで、例の件を考え直してくれないかという。

「当人から依頼があれば会いにいきましょう。そうでなければダメです」

「なるほど。かなりのボーナスも出す用意が――」

おれは苛立った。「ねえスペンサーさん。運命は雇ったりできないんですよ。ウェイド夫人が夫を怖れてるなら、家から出ればいい。それは彼女の問題だ。自分の夫から24時間彼女を保護できる人なんかいない。そこまでの保護なんてどうやっても無理だ。しかもあなたの求めているのはそれだけじゃない。いつ、どこで、どうしてそいつのタガが外れたかをつきとめ、それを修理して二度とやらないようにする――少なくとも本を仕上げるまでは。それはそのご当人次第でしょう。その本を十分に書きたいと思ったら、酒はやめて書くでしょうに。注文が多すぎますよ」

「みんな根は同じだ。すべて一つの問題なんだよ。しかし、言いたいことはわかる。君のようなやり口には、あまりに繊細すぎて扱い切れないってことだな。仕方ない。さようなら。今夜ニューヨークに戻りますよ」

「お氣をつけて」

48 Mug book. 既訳はどれも、指名手配写真の一覧書と訳している。が、断言はできないが、ここでこいつは相手が映画業界人だと思って急に態度を変えるし、その後の指名手配写真のネタも伝わっていないようで、その後も上機嫌が続いているので、これも普通の指名手配人の一覧書ではなく、映画でオーディションに応募してきた人の経歴書を集めた本のつもりで言っている可能性が高い。お互いに役者志望仲間だと思って、どっかのオーディションで会おうぜ、ということ。

彼は礼を言って電話を切った。二十ドルはウェイターにやったと言うのを忘れた。かけなおして告げてやろうかと思ったが、そんなことをしても相手の惨めさに拍車をかけるだけだ。

事務所を閉めて、テリーが手紙で頼んだようにギムレットを飲もうとヴィクターズのほうに向かい始めた。だが気が変わった。そこまでおセンチな気分ではなかった。かわりにロウリーズにでかけてマティーニとプライムリブと、ヨークシャー・プディングを食べた。

家に戻ってテレビをつけてボクシングを見た。全然ダメで、アーサー・マレー・ダンススクールで働いていたほうがマシな、ダンサーまがいばかり。ジャブを出してびよんぴよん跳ね、お互いフェイントをかけてバランスを崩そうとするだけだ。うつらうつらのお祖母ちゃんを起こせる程度のパンチですら出せないやつら。観衆はブーイングして、レフリーはもっと積極的にファイトしろと手を叩き続けるが、そいつらは性懲りもなくスウェーしてじらし、長い左のジャブを出すだけ。チャンネルを変えて犯罪ドラマを見た。舞台は衣装ダンスなみの狭い場所で、役者の顔は疲れていてあまりの常連ばかりで美しくなかった。脚本は三流モノグラム映画でも使わない代物。探偵には道化役として黒人ボーイがついていた。必要ないのに。当人一人で十分コミカルだ。そしてコマーシャルときたら、鉄条網と割れたビール瓶で育ったヤギですら吐き気を催す代物。

テレビを切って、長くクールできつく巻いたタバコを吸った。のどにやさしかった。上質な煙草でできていた。ブランドを見ておくのは忘れた。まさにベッドに入ろうというところで、殺人課のグリーン刑事部長が電話をよこした。

「数日前に、あんたの友だちのレノックスを、死に場所のメキシコ町で埋葬したんで、報せようと思ってな。一家の代理で弁護士がそこまでかけて出席したよ。おまえ、今回はかなりツイてたぜ。今度仲間の国外脱出を助けようかなんて思ったら、やめとけ」

「銃弾の穴はいくつあった？」

「何だと？」と彼は怒鳴った。それからしばらく沈黙した。そして、妙に慎重すぎる口調でこう言った。「たぶん一つだ。頭を吹っ飛ばすなら、通常はそれで十分だからな。弁護士は指紋とポケットの中のものをすべて持って帰ってくるところだ。他に知りたいことは？」

「あるけど、あんたじゃわからん。レノックスの妻を殺したのはだれか知りたい」

「やれやれ、完全自白を残したってグレンツから聞いてないのか？ とにかく新聞にはそう書いてあったぜ。もう新聞も読まないのか？」

「電話をありがとう、部長。本当に感謝するよ」

彼はしゃがれ声で言った。「おいマーロウ、この事件についてなんか変な考えがあるにしても、それを口に出すといろいろ面倒なことになるぜ。この事件は解決で、おしまい、防虫剤入りでしまいこまれたんだ。おまえにとってはそれでえらく幸運だったんだぜ。事後従犯はこの州では五年以下の懲役なんだ。それともう一つ教えてやろう。ずいぶん長いことオマワリをやってて、はっきりわかつ

たことがある。ブタ箱送りになるのは、必ずしも実際にやったことじゃねえぞ。裁判になったときに何をやったように見せかけられるかってことなんだ。じゃあな」

彼はいきなり切った。おれは受話器を戻して、やましいところがある正直な警官はいつもタフにふるまうものだと思った。不正直な警官も。その他だれでも。おれも含め。

[14]

翌朝、片方の耳たぶからベビーパウダーを拭っていると、呼び鈴が鳴った。玄関に行って開くと、目の前に紫がかった青い目があった。今回は茶色いリネンを着ていて、スカーフは明るい赤、イヤリングや帽子はない。ちょっと青ざめていたが、だれかに階下に突き落とされた様子はない。ためらうようにちょっと微笑した。

「マーロウさん、こんなところへお邪魔してはいけないのはわかっているんです。たぶん朝ご飯もまだでしょう。でもあなたの事務所に行くのはどうかと思ったし、個人的な話で電話をかけるのも嫌いなものですから」

「いやいや。お入りください、ウェイドさん。コーヒーでもいかがですか？」

彼女は居間に入り、何も見ずにソファにすわった。膝にハンドバッグを乗せて、脚をピタリとあわせてすわった。妙に取り澄ましているようだった。おれは窓をあけてブラインドを開き、目の前のカクテルテーブルから汚い灰皿を持ち上げた。

「ありがとうございます。ブラックコーヒーお願いします。砂糖なしで」

おれは台所に行き、緑の金属トレーに紙ナプキンを敷いた。セルロイドのカラーなみに安っぽい。それを丸めて、小さな三角ナプキンとセットになっている、縁のついた代物を取り出した。うちのほとんどの家具同様に家についてきたものだ。デザートローズのコーヒーカップを用意して、そこにコーヒーを注ぎトレーを運んでいった。

彼女はそれをすすった。「おいしい。コーヒーを淹れるのがお上手ですね」

「最後にだれかとコーヒーを飲んだのは、牢屋に行く直前でした。おれがブタ箱にいたのはご存じだと思いますが、ウェイドさん」

彼女はうなずいた。「もちろん。逃亡を手伝った嫌疑をかけられたんでしょう？」

「そうは言われませんでした。そいつの部屋のメモ帳におれの電話番号があったんです。いろいろ質問されましたが答えなかった――主にあいつらの訊き方のせいです。でもそんな話にご興味はないでしょう」

彼女は慎重にカップを置き、後ろにもたれておれににっこり笑いかけた。おれはタバコをすすめた。「ありがとうございます、でも吸いませんの。もちろん興味はありますとも。ご近所の方がレノックス夫妻の知り合いでした。気でも狂ったんでしょう。話ではあんな人間のようにはまるで思えませんから」

おれはブルドッグパイプに煙草を詰めて火をつけた。「そうですね。そうだったんでしょう。戦争でひどい怪我をしたとか。でも彼は死んでその話はおしまいです。それに、そんな話をしにいらしたんじゃないでしょう」

彼女はゆっくり首を振った。「あなたのお友だちだったんでしょう、マーロウさん。かなり強い見解をお持ちのはずよ。そしてあなたはかなり意志の硬い方だと思うし」

おれはパイプの煙草を詰めてまた火をつけた。たっぷり時間をかけて、その間ずっとパイプのボウル越しに彼女を見つめていた。そしてとうとう言った。

「ねえウェイドさん、おれの意見なんかどうでもいいんだ。毎日あることです。最もあり得なさそうな人が、最もあり得なさそうな犯罪を犯す。すてきなお祖母ちゃんが一家を丸ごと毒殺。しっかりした子供が何度も拳銃強盗や殺害をやる。二十年にわたり完全無欠な銀行の支店長が、昔から横領をしていたのがわかる。そして成功して人気があり幸福なはずの小説家が、飲んだくれて奥さんを病院送りにする。親友ですら何がツボかなんて、我々にはほとんどわからんのです」

これで彼女が激怒するだろうと思ったが、唇をキッと結んで目つきが鋭くなっただけだった。

「ハワード・スペンサーが余計な話を。あれはわたしが悪かったんです。近寄らないだけの分別がなかった。その後は、飲み過ぎの男を止めるのは絶対無理だと学習しました。たぶんそれは、あなたのほうがずっとよくご存じでしょう」

「確かに口では止められません。運がよくて、もしひょっとしてそれだけの力があれば、ときにはそいつが自分を傷つけたり、他人を傷つけたりするのは防げる。それですら運がないと」

彼女は静かにコーヒーカップとソーサーに手を伸ばした。手も他の部分と同じく美しい。爪は見事な形で、磨き上げられ、彩色はきわめてかすかだった。

「ハワードは、今回夫に会えなかった話はしましたか？」

「ああ」

彼女はコーヒーを飲み終えて、カップを慎重にトレイに戻した。そして数秒ほどスプーンを弄んだ。そして目をあげずにしゃべりだした。

「なぜかは言わなかったでしょう。あの人は知りませんから。ハワードは気に入ってはいますが、管理職タイプで、なんでも仕切りたがる。とっても実行力があるつもりなんです」

おれは何も言わずに待った。またも沈黙。彼女はちらりとおれを見てから、また目をそらした。そしてとてもゆっくり言った。「夫は三日間失踪しています。どこにいるかわからないんです。ここに参りましたのは、夫を見つけて連れ帰ってくださるようお願いするためです。ええ、前にもあったことではあります。あるときははるかポートランドまで車を飛ばして、ホテルで気分が悪くなり、しらふに戻るのに医者と呼ばねばなりませんでした。事故を起こさずそこまで行き着いただけでも不思議です。別のときにはロングビーチのトルコ風呂にいました。直腸洗浄をやる、あの手のスウェーデン

風の場所です。そして最後のときには、どこか私立で、おそらくかなりいかわしいサナトリウムにいました。そのときから三週間もたっていません。そのサナトリウムの名前も場所も教えてくれないんです。単に治療を受けていて大丈夫だと言うだけ。でも死ぬほど真っ青で弱々しかったんです。家に連れてきた男をちらりと見ました。背の高い若者で、なんだか舞台や天然色のミュージカル映画でしか見かけないような、わざとらしいカウボーイ衣装を着ていました。ロジャーを進入路で下ろすとバックして即座に走り去ったんです」

「観光牧場ですかね。そういう大人しいカウボーイもどきは、稼ぎをはたいてそういう派手な衣装を作らせるんです。女たちがキャアキャア言うから。そのために雇われてるんです」

彼女はハンドバッグを開けて折った紙を撮りだした。「500ドルの小切手をお持ちしました、マーロウさん。依頼金として受け取っていただけますか？」

彼女は折った小切手をテーブルに置いた。おれはそれを見たが、手は触れなかった。「なぜです？三日姿を消しているんですよね。人がしらふに戻って何かを腹に入れるには三、四日かかる。前と同じように戻ってくるんじゃないですか？それとも今回は何かちがうところでも？」

「もうそろそろ身体が保たないんです、マーロウさん。死んでしまいます。間隔がどんどん短くなっています。すごく心配なんです。心配どころじゃない、怖いんです。変なんです。結婚して五年になります。ロジャーは昔から飲みはしましたが、キチガイじみた酒飲みじゃありません。何かまるつきりおかしいんです。夫を見つけてほしい。昨晚は一時間も寝ていないんです」

「~~なぜ~~飲むのか、見当はつきますか？」

紫の目がじっとおれを見ていた。今朝は少し弱々しい感じだったが、決して無力ではない。下唇を噛んで、首を振った。そしてとうとう、ほとんど囁くように言った「わたしのせいじゃないければ、ですが。男は妻にうんざりするものですから」

「おれは心理学者としては素人でしかない。おれの稼業のやつは、多少はそういう能力が要るんですウェイドさん。そのおれから見ると、自分が書いているような代物にうんざりしただけじゃないかと」

彼女は静かに言った。「それも十分あり得ます。どんな作家もそういうスランプがあるんでしょう執筆中の本が仕上げられないようだというのは確かです。でも、別に家賃を払うのに書き上げなきゃならないわけじゃない。それでは理由として不十分に思えるんです」

「しらふのときはどんな人です？」

彼女はにっこりした。「独断と偏見ですけど、わたしから見れば、本当にすてきな人なんですよ」

「そして酔っ払うと？」

「最悪です。聡明でキツくて残酷になります。気の利いたことを言ってるつもりで意地悪なだけなんです」

「暴力的というのを抜かしましたね」

「あの一度だけなんです、マーロウさん。その一回があまりに大騒ぎされすぎなんです。わたしはハワード・スペンサーになんか絶対話さなかった。ロジャーが自分で話したんです」

おれは立ち上がり部屋の中をうろついた。暑い一日になりそうだ。すでに暑かった。窓の一つのブラインドを外に向けて日差しを閉め出した。それから彼女にはっきり言った。

「昨日、人名録で旦那さんのことを調べましたよ。四十二歳、初婚、子供なし。ニューイングランド出身、アンドーヴァー校からプリンストンに進学。従軍経験もあり名誉除隊。あの分厚いセックスと剣戟歴史小説を十二冊書いて、そいつが一つ残らずベストセラー入りだ。金は大量に入ってきたでしょう。奥さんにうんざりしたなら、はっきりそう言って離婚するタイプに思えます。他の女と乳繰り合っていたなら、あなたにもわかるはずだし、後ろめたさを証明するためだけに飲んだくれる必要はそもそもない。結婚五年なら、三十七歳での結婚だ。その歳なら女性について知るべきことはおおむね知ってたはずですよ。おおむねといったのは、すべてを知るヤツなんか一人もいないからです」

口を止めて彼女をうかがうと、彼女はにっこりした。気を悪くしたりはしなかったようだ。続けた。

「ハワード・スペンサーは——何の根拠があつてかはまったくわかりませんが——ロジャー・ウェイドの問題は、お二人が結婚されるずっと前に起こったことで、それがいまになってつきまといてきて、それが手に負えないほどの打撃をもたらしてるんじゃないか、と示唆していました。スペンサーは、脅迫かもと言っていました。何か見当は？」

彼女はゆっくり首を振った。「ロジャーがだれかに大金を支払ったりしていたらわかるか、という意味なら——いいえ、わかるはずありません。会計のほうには口出ししてませんから。大金をばらまいてもわたしは知りようがない」

「わかりました。ウェイド氏を存じ上げないもので、強請られてどんな態度に出るかは見当もつきません。カッとなって暴れるたちなら、だれかの首をへし折るかもしれない。その秘密が何であれ、旦那さんの社会的、職業的な立場を危うくするとか、あるいは極端な話、法執行当局が出没するような話なら、金を払うかもしれない——少なくともしばらくは。だがこんな話をしてもどうにもならない。旦那さんを見つけてほしい、心配だ、心配どころじゃない。で、どうやって見つければいいのかあなたのお金はいいですね、ウェイドさん。少なくとも今は」

彼女はまたハンドバッグに手を入れて、黄色い紙を二枚取り出した。カーボン複写の複写紙のようで、折りたたまれ、片方は丸められたようだった。彼女はそれをのばしてこちらに渡した。

「片方は夫の机の上で見つけたんです。かなり遅い時間というかむしろ早朝でした。夫が飲んでいたのは知っていたし、上にあがってきていないのも知っていました。二時頃に下りていって大丈夫かか

—といってもあくまで比較的、ですけど—確認しました。床か長椅子かなんかで卒倒してるんじゃないかと思って。姿が見えませんでした。もう一枚の紙はゴミ箱の中にあった、というかその縁にひっかかっている中に落ちなかったんです」

最初の紙切れを見た。丸められていないほうだ。タイプライターで打った短い一節があって、それだけ。こうある。「自分と恋に落ちるなんて御免だし、もはや他に愛すべき人間はもはやいない。署名：ロジャー (F・スコット・フィッツジェラルド) ウェイド。追伸 それだから『ラスト・タイクーン』を読み通せたためしがない⁴⁹」

「これで何か思い当たることは、ウェイドさん」

「ただのカッコつけです。昔から F・スコット・フィッツジェラルドの大崇拝者なものですから。フィッツジェラルドは、コールリッジ以来最高の酔っ払い作家だと言うんですよ。コールリッジは阿片でしたが。このタイプを見て下さい、マーロウさん。明瞭、均等、誤字一切なし」

「それは気がつきました。ほとんどの人は酔っ払うと自分の名前さえまともに書けません」そしておれは丸めた紙のほうを開いた。もっとタイプで、こちらも誤字や不均等はない。こちらにはこうあった。「あなたは嫌いだ、ドクター V。だがいま現在は、あなたが必要なのだ」

「ドクター V というのがだれか、まるでわかりません。そんな頭文字のお医者さんはだれも知りませんし。ロジャーが最後にいた場所の所有者なんじゃないかと思うんですけど」

「カウボーイ野郎が旦那さんを連れ帰ったときのですか？　旦那さんは何も名前を挙げなかったんですね—地名すら？」

彼女は首を振った。「何も。電話帳を見てみました。名前に V のつくお医者さんは、あれやこれやで何十人もいます。それに、それがその人の姓かもわからない」

「全然正規の医者じゃない可能性も高い。これで手持ち現金の問題が出てくる。正規の商売なら小切手を受け取りますが、イカサマ師は受け取らない。証拠になりかねませんから。そしてその手のヤツは安くはない。そいつの家で部屋と食事だと高くつく。針は言うまでもなく」

彼女は怪訝な顔をした。「針？」

「いかがわしい連中はみんな客に麻薬を射ちます。いちばん手っ取り早い扱い方です。十時間か 12 時間はぶっ倒れてるし、目がさめたらいい子に戻ってる。でも免許なしで麻薬を使うと、アンクルサムの用意する部屋と食事にぶちこまれる。その分、きわめて高い金を取られますよ」

49 既訳はすべて「『ラスト・タイクーン』を**仕上げられなかった**」といった訳になっていて、ウェイドが『ラスト・タイクーン』を書いているかのような訳になっているけれど、最後まで読み通せない、と解釈するのが普通じゃないの？ フィッツジェラルドになりきって自分が『ラスト・タイクーン』書いてるんだ、とか言い出してるなら、かなりヤバくてこんな呑気な事態ではすまないのでは？ いま書きかけの作品を『ラスト・タイクーン』に見立てているという解釈はあり得るけど苦しいと思う。

「そういうことですか。ロジャーはおそらく、数百ドル持っているでしょう。いつもそのくらいは机に入れてます。なぜなんだか。たぶんただの気まぐれでしょう。いまはそのお金がありません」

「わかりました。ドクターVを探してみましょう。どこから手をつけるのかはまだわかりませんが、精々手を尽くします。小切手は持って帰ってください、ウェイドさん」

「でもどうして？ 依頼料は当然の権利として――」

「それはまた後で。ありがとうございます。それにそれはウェイド氏から受け取りたい。いずれにせよ、おれがこれからすることをあまり気に入ってはくれないと思いますから」

「でも病気で寄る辺ないなら――」

「そしたらかかりつけの医者と呼ぶか、あなたにそれを頼んだでしょう。つまり旦那さんはそうしたくなかったんです」

彼女はハンドバッグに小切手をしまって立ち上がった。とても絶望しているようだった。「かかりつけのお医者さんには治療を断られたんです」と苦々しげに言う。

「医者なんて何百人もいるんですよ、ウェイドさん。その中のだれでも一回くらいは面倒をみてくれます。ほとんどの人は、しばらくはつきあってくれるでしょう。医療は最近じゃかなり競争が激しい仕事ですから」

「なるほど。もちろんそうなのでしょう」と彼女はゆっくり玄関に向かい、おれはそれに同伴した。そしてドアを開けた。

「言われなくてもあなたがご自分で医者と呼ぶこともできた。なぜそうしなかったんです？」

彼女はおれと正対した。目が輝いている。かすかに涙も浮かんでいたかもしれません。掛け値なしに美しい目だ。

「夫を愛しているからです、マーロウさん。夫を助けるためならどんなことでもします。でもあの人がどういう人間かも知っています。飲み過ぎるたびに医者呼んだら、すぐに離婚されてしまうはずです。大人を、喉が痛む子供みたいに扱うわけにはいきません」

「いきますよ、相手が酔っ払いなら。他に手がないこともしばしばです」

彼女はおれにそばに立っていた。香水の匂いがした。あるいはそう思っただけかも。スプレーガンで吹き付けた香水ではなかった。単に夏の日香りかも。

「夫の過去に本当に何かやましいところがあっても」と彼女は一言一言、まるでそのそれぞれが苦い味だともいうように引き伸ばした。「何か犯罪がらみのことでも。わたしはまったくかまわないんです。でもそれを明るみに出すのにわたしが関与するつもりはないんです」

「でもハワード・スペンサーがおれをやとって見つけさせるのは構わない？」

彼女はきわめてゆっくりと微笑した。「あなたならハワードに、あれ以外の返事をするとは思ってませんでしたよ—友だちを裏切るよりも牢屋行きを選んだ人なら」

「お褒めはありがたいが、ブタ箱送りはそのせいじゃないんです」

彼女はうなずき、しばし黙してからさよならと言って、アカシアの階段を下り始めた。彼女が車に乗り混むのを見た。スリムなグレーのジャガーで、最新型に見えた。通りの端までそのまま走り、突き当たりのロータリーで方向転換した。丘を下って通り過ぎるときに手袋がこちらに振られた。その小さな車は角をサッと曲がって消えた。

家の前の壁の一部に、赤いキョウチクトウの茂みがあった。そこに羽ばたきが聞こえ、赤ちゃんツグミが心配そうにパイパイ鳴き始めた。そいつが高枝の一つからぶら下がり、バランスを取るのに苦労しているかのように羽ばたいているのが見つかった。壁の端の杉の木から、一言きつい警告の鳴き声が響いた。パイパイ声は即座に止まり、チビの太った鳥は黙った。

おれは家に入って飛行レッスンを続けさせた。鳥だって学習が必要だ。

[15]

どれほど賢いつもりでも、どこか出発点が必要だ。名前、住所、地区、出自、雰囲気、何らかの参照点。手元にあるのはくしゃくしゃの黄色い紙にタイプされた「あなたは嫌いだ、V 先生。だがいま現在、あなたが必要なのだ」。こんな情報なら、太平洋⁵⁰の場所を突き止めるのが精一杯で、一ヶ月かけて半ダースもの全国医師協会の一覧をかきわけて過ごし、結局その成果はでっかいゼロってことになりかねない。この町ですら、インチキ医者にはモルモット並に次々に生まれている。ロス市庁から半径二百キロ以内には八つの郡があって、どの郡のあらゆる町にも一つ残らず医者がいて、正式な医療従事者もいれば、通信教育でウオノメ取りや背骨上の飛び跳ねの免許を取っただけのペテン師もいる。本物の医者の中にも、稼いでいるのも貧乏なのもいるし、倫理観を持ったやつもいればそれじゃ儲からないと思うやつもいる。ビタミンや抗生物質商売で遅れをとった老いぼれ医者どもなら、譫妄症初期の金持ち患者はまたとない金づるだ。だが手がかりなしじゃ手のつけようがない。おれは手がかりを持ってないし、アイリーン・ウェイドもないか、持っているのに気がついていない。そしてそれらしくてイニシャルも合ってる人物が見つかったとしても、ロジャー・ウェイドについてはただの思いこみということになりかねない。あの一節は、酒をくらっているときにたまたま頭に浮かんだだけの代物かもしれない。同様にスコット・フィッツジェラルドへの言及だって、単に気取ってさよならと言ってるだけかもしれない⁵¹。

こんな状況の小者は、大者のお知恵拝借となる。そこでカルネ団の知り合いに電話した。これはバリーヒルズの派手な興信所で、上流階級の保護が専門だ—保護というのは、片足だけでも合法範囲におさまることならほぼ何でも、ということだ。その知り合いの名はジョージ・ピーターズで、いますぐなら 10 分くらいは相手をしてやるとのこと⁵²。

この組織は、よくあるキャンディーピンクの四階建て建物の二階の半分を占めていた。エレベーターのドアが電気目で勝手に開くし、廊下は涼しく静かで、駐車場は区画毎に使用者名がふられ、正面ロビーの脇にある薬局の薬剤師は、睡眠薬のボトルを詰めるのにいそがしくて手首を痛めてる。

50 Pacific. 凡ミスながら田口訳は大西洋になってる。他の訳は意識して海洋名は使っていない。

51 Just as the Scott Fitzgerald allusion might be merely an off-beat way of saying goodbye. 田口訳だけ「自分の名前の中にスコット・フィッツジェラルドを嵌め込んで ” さよなら ” を告げたがるような男のすることだ」となっているが、何これ。いささか独自解釈が過ぎるし、別にそれで何か改善されるわけでもない。

52 (...) if I made it fast を田口/村上は「手短に話せる内容なら/長い話は無理だが」としているが、10 分と時間を切られているので手短だろうと長い話だろうと関係ないはず。ここは明らかに「さっさとここに来れば」という意味。アポを取るなら、いかなる時でも 10 分時間をくれるなんてあり得ないでしょ。

ドアの外側はフレンチグレーで、金属浮き彫りのレタリングが、新しいナイフのようにピカピカでシャープについている。カルネ団 (有) 社長ジェラルド・C・カルネ。その下に小さく「入り口」。投資信託でも通る。

その内部には小さく醜い受付室があったが、その醜さは意図的で高価なものだった。家具は深紅と深緑、壁は平板なブルンズウィック・グリーンで、壁にかかった何枚かの絵の額縁はそれより三段ほど暗い緑色だった。その絵はでっかい馬に乗った赤コートの男たちで、障害なら何でも乗り越えて見せたくてたまらないという感じ⁵³。額に入っていない鏡が二つあり、かすかに、だが吐き気のしそうなローズピンクがかっている。磨いたノウゼンカズラ材のテーブル上にある雑誌はどれも最新号で、それぞれ透明ビニールカバーがかかっている。この部屋の内装を担当したやつは、色にひるむようなやつじゃなかった。たぶん真っ赤なシャツ、マルベリーのスラックス、ゼブラ模様の靴に、ヴァーミリオンのズボン下という装いで、そこにすてきなみかん色のイニシャルがついているんだろう。

こんなのはすべてお飾りだ。カルネ団の顧客は、日当だけで最低百ドル請求されるし、そっちが自宅にくるのが当然と思っている。待合室にきてすわってるような連中はお呼びでない。カルネは憲兵隊の元大佐で、でっかい赤ら顔の男で謹厳そのもの。一度働かないかと言われたことがあるが、こっちもそこまで落ちぶれたことはなかった。いけ好かなさも多種多様で、締めて 190 通りのやり方があるが、カルネはそのすべてに精通していた。

曇りガラスの仕切りがすべて開き、受付係が顔を出してこっちを見た。鉄の微笑と、腰のポケットの財布にはいった金を数えられる目をしている。

「おはようございます。ご用件は？」

「ジョージ・ピーターズをお願いします。マーロウと申します」

彼女は緑の革張りノートを開き、縁に出した。「お約束はいただいておりますでしょうか、マーロウ様。アポイント一覧にお名前が見あたりませんが」

「私用なんです。さっき電話で話したばかりなんです」

「さようでございますか。お名前はどうぞ綴りますか、マーロウ様。それとファーストネームもお願いします」

53 The pictures were guys in red coats on big horses that were just crazy to jump over high fences. 最後の just crazy to jump over high fences. はえらく解釈しづらい。それが guys にかかるのか horses にかかるのか不明、またその絵 (写真かも) に柵をジャンプする光景が描かれているのか難しいことをやるという比喩なのか、さらに crazy がしたくてたまらないという意味なのか、そんなことをするのがキチガイ沙汰だという意味なのかもわからない。既訳はすべて、実際にジャンプしている光景を描いたものとして、crazy は形相を変えて/気持ちがよいようになって (村上/清水)とか、所業は狂気の沙汰としか思えない (田口) としている。どれも字面から見ればまちがいはない。ただ、絵は複数ある。そのすべてが同じジャンプ風景とは思えないし、ジャンプは比喩だと思う。こんなマルボロマンみたいな絵で、男が正面向いて、やる気満々な感じのやつが何枚かポーズを変えてかかっていたのでは？ が、憶測。



おれは告げた。彼女はそれを細長い紙切れに書き留め、そしてその下部をタイムカードの機械にすべりこませた。

「ずいぶん大げさですねえ」

彼女は冷ややかに言った。「ここでは細かいところをきわめて重視いたしますの。カルネ大佐は、そういうつまらない事実が決定的な意味を持つこともあると申しております」

「その逆もありますね」と言ったが相手には通じなかった。書類作業が終わると彼女は顔を上げた。

「ピーターズにお取り次ぎいたします」

そいつは感謝感激ですよ、と彼女に伝えた。一分後にパネリングのドアが開いて、ピーターズが戦艦グレーの狭い廊下におれを招き入れた。そこには独房のように見える小さな事務室が並んでいる。彼の事務室は、天井が防音構造になっていて、グレーのスチールデスクとそれに合った椅子が二脚、グレーのスタンドにグレーの口述筆記装置、壁と床と同じ色の電話とペンセットがあった。壁に額入り写真が二つあった。一つは軍服姿で憲兵ヘルメットをかぶったカルネで、もう一枚は文民姿のカルネが机に向かって非の打ち所のないかっこうをしている。もう一つ、額入りで壁にかかっているのはグレーの背景にスチール文字で描かれた小さい啓発的なスローガンだった。こうある。

カルネ団の調査員はあらゆる時と場所で紳士らしく装い、話し、ふるまうべし。例外なし。

ピーターズは大股二歩で部屋を横切り、写真の片方を脇に押しやった。その背後のグレーの壁に仕込まれていたのは、グレーのマイクピックアップだった。彼はそれを引っ張り出して電線を一本外し元に戻した。写真もその前に戻す。

「これですぐにでもクビになりかねない。だがあのろくでなしは、どっかの俳優の飲酒運転容疑の面倒を見て外出中なんだ。マイクのスイッチは全部親分の事務室にある。会社全体に盗聴器がついてるんだ。こないだの朝、受付室のマジックミラーの背後に、赤外線照明つきマイクロフィルムカメラを仕掛けたらって提案したんだがね。あまりお気に召さなかったようだ。すでにだれかがやってるからかもな」

彼は硬いグレー椅子の片方に腰掛けた。おれはそれを見つめた。ぎくしゃくした脚のひよろ長い男で、顔は骨張り生え際が後退している。その肌はいつもいろんな天気の外にいる人物の年季の入った感じを見せている。目は落ちくぼみ、上唇が鼻くらの幅だ。笑うと顔の下半分が、鼻孔から幅広い口の端まで広がる巨大な二本のほうれい線の中に埋もれる。

「なんでこんなのに我慢してるんだか」とおれは尋ねた。

「まあすわれ。深呼吸して声を下げて、そしておまえみたいな安っぽい探偵にとってのカルネ調査員は、曲芸サルから見たトスカニーニ級の存在なんだってことは忘れるなよ」と彼は口を止めてニヤリ

とした。「我慢するのは、別にどうでもいいからだよ。稼ぎはいいし、カルネがこっちを戦時中にイギリスで運営していたっていうあの凶悪犯罪者向け刑務所の囚人みたいな扱いするようになったら、おれはすぐに退職小切手もらっておさらばだ。で、どんな面倒だい？ なんかしばらく前に、えらい目にあったって聞いたぞ」

「それについてはグチもない。監禁部屋所有者ファイル⁵⁴を拝見したいんだよ。そういうのがあるのは知ってるんだ。ここを辞めてからエディ・ダウストが教えてくれた」

彼はうなずいた。「エディはほんのちよいとばかりカルネ団には繊細すぎたんだ。おまえの言ったファイルは極秘だ。いかなる状況においてもいかなる機密情報も部外者に開示してはならない。すぐに取りつこう」

彼はそこを出て、おれはグレーのゴミ箱とグレーのリノリウムと卓上吸い取り紙のグレーの革の隅を見つめた。ピーターズは手にグレーの厚紙ファイルを持って戻ってきた。それを置いて開いた。

「まったく、ここはグレーのものしかないのかよ」

「学校標準カラーってやつですよ、お若いの。この団の精神。そうだ灰色じゃないものもあった」

机の引き出しを開けて、長さ 20 センチほどの葉巻を取り出した。

「アップマン・サーティーなんだ。イギリス出身でカリフォルニアに 40 年いて、いまだにラジオを『無線放送』という老紳士からもらった。しらふのときには気取り屋ジジイでわざとらしい魅力満載特にケチをつける気もないよ、ほとんどの人はわざとらしいのもそうでないのも、魅力なんかまるつきり持ち合わせてないんだから。特にカルネはな。カルネなんて、製鉄所工員のパンツほどの魅力もねえや。この爺さん、しらふじゃないと、全然知らない銀行からの小切手を切るという変な習慣があるんだ。いつもきちんと弁済はするし⁵⁵、おれが気に入って助け船を出してやってるので、いまのところブタ箱行きは逃れてる。そいつがくれたんだよ。おれたちで一緒に吸いましょうかね、虐殺を計画するインディアン酋長二人みたいに」

「葉巻は吸えないんだ」

ピーターズはその巨大な葉巻を悲しげに見た。「同じく。カルネにやろうかとも思ったんだ。でも一人で吸う葉巻じゃないからなあ、その一人がカルネだったにしても」そこで顔をしかめた。「待て待て。カルネの話ばっかだな、おれ。苛立ってるんだろう」と葉巻を引き出しに投げ込み、開いたファイルを見た。「ここから具体的に何がほしい？」

54 barred-window boys. 「鉄格子つき窓の連中」で、これだけだといかようにも解釈できる。清水訳「もぐりの医者」のファイルは、この後正規の耳鼻科医も出てくるのでちがう。16 章で鉄格子つきの窓の話だというのがわかる。村上訳は『かごの鳥ファイル』で、意味不明だがなぜか意味がわかってこれに押し通してる。田口訳は「監禁部屋所有者医」で、これがだいたい正解。

55 Makes good. 清水、田口は「金を稼いでいる」といった訳。村上は「金の穴埋めをする」。インチキ小切手切ったらそれをしっかり買い戻して弁済しないとヤバいのでそういう意味。村上訳が正しい。

「探してるのは金持ちアル中で高価な趣味を持ち、それをまかなえるだけの金がある男だ。いまのところ不渡り小切手を出したりはしてない。少なくともこっちは聞かされてない。暴力傾向があって奥さんが心配してる。どっかの酒抜き施設に隠れてると奥さんは思ってるが確信はない。唯一の手がかりは、ドクターVと描かれたメモ。イニシャルだけ。そいつはもう三日姿を消してる」

ピーターズは思慮深げにこっちを見た。「大した期間じゃないな。何を心配してる？」

「先に見つければおれに金が入る」

彼はさらにおれを見つめて首を振った。「ピンとこないが、まあいい。どうなるやら」とファイルのページをめくり始めた。「面倒だなあ。この連中は出入りが激しい。一文字じゃ大した手がかりにならん」そしてフォルダから一枚引っ張りだし、さらにページをめくり、もう一枚取り出して、最後にもう一枚を抜き出した。「三人いる。エイモス・ヴァーリー先生。整骨屋。アルタデナにでかい整骨院を持ってる。五十ドルで往診もする。いまはどうか知らん。登録看護婦二人。数年前に州麻薬取締の連中ともめて、処方箋記録を提出してる。あんまりきちんと更新されてないな、この情報」

おれは名前とアルタデナの住所を書き留めた。

「お次はレスター・ヴカニッチ先生。耳鼻咽喉科、ストックウエルビル、ハリウッド大通りにある。こいつはご立派だね。ほとんど医院診療で、慢性鼻炎がなんか専門らしい。でかけて鼻炎性の頭痛を訴えれば、鼻孔洗浄をしてくれる。もちろんまずノヴォカインで麻酔がいる。だが気に入られたらノヴォカインでなくてもいい。わかる？」

「ああ。書き留めておこう」

ピーターズはさらに続けてもっと読み上げた。「こいつはいいぞ。どうやらこいつの悩みはクスリの供給だ。だから我々がヴカニッチ先生は、エンセナーダ沖でやたらに釣りをして、自家用機でそこに飛ぶんだとさ」

「自分でヤクを運ぶようなら長続きしないはずだが」

ピーターズはしばらく考えて首を振った。「そうは思わないね。欲を出しすぎなければいつまでも続けられる。唯一、本当の危険は不満を抱いた顧客——じゃなくて患者——だが、おそらくそういうものの扱いは心得てるんだろう。同じ診療所で15年続けてる」

「どっからそんなネタを仕入れてくるんだよ」とおれは尋ねた。

「うちは組織なのよ、坊や。おまえみたいな一匹オオカミじゃない。顧客自身から得るものもあれば内部から得るものもある。カルネは金は惜しまない。必要なら愛想よくもふるまえる」

「この会話もおおいに楽しんでくれるだろうな」

「死ぬ。さて今日最後の演し物は、ヴェリンジャーなる御仁だ。こいつのファイルをまとめた調査員はとっくに辞めてる。どうも女性詩人があるとき、セプルヴェダキャニオンにあるヴェリンジャーの

牧場で自殺したらしい。こいつは何やら、世間と離れた愛想の良い雰囲気を求める作家とか向けのアートコロニーを運営している。料金はほどほど。まともそうではある。ドクターを名乗ってはいるが医者じゃない。博士号のドクターかもな。正直、なぜこいつがここに入ってるのかわからん。その自殺が怪しかったとかでない限り」と白い台紙に貼られた新聞の切り抜きを手にとった。「うん。モルヒネの過剰摂取。ヴェリンジャーが何か知っていたような気配はないね」

「ヴェリンジャーはいいね。たいへん気に入った」

ピーターズはファイルを閉じて叩いた。「これは見てないってことで」と立ち上がって部屋を出て行った。戻ってきたときには、おれは帰ろうとして立ち上がったところだった。お礼を言おうとすると、一蹴された。

「なあ、お目当ての御仁が隠れられるところなんて、何百とあるはずだぜ」

それはわかっていると答えた。

「ちなみに、ご関心があればだが、お友だちのレノックスについてちょっと耳にしたんけどね。うちの調査員が五、六年前にニューヨークで、その人相書きにぴったり一致する御仁と出くわしたんだとだが名前はレノックスじゃなかった。マーストンと名乗ったそうだよ。もちろん勘違いかもしれないけどね。そいつはずっと飲んだくれてたから、本当のところはわからない」

「同一人物なのかねえ。なんで名前を変える？ 戦争の従軍記録があるから確認できるのに」

「おやそうかい。そのうちの社員はいまシアトルなんだ。なんなら、戻ったら話してみるか？ アシュターフェルトってやつだ」

「いろいろありがとう、ジョージ。ずいぶん長い10分間になっちまった」

「いつかお前の手助けが要らないとも限らんからな」

「カルネ団は、決してだれからも助けなど必要としない」

やつは親指で無礼な仕草をしてみせた。おれは彼を金属製のグレー独房に残し、待合室を通過して出た。待合室もいまは気にならなかった。派手な色合いも、あの独房の後ならうなずける。

[16]

セプルヴェダキャニオンの底を走る高速道路から戻ったところには、四角い黄色の門柱が二本立っていた。鉄格子が五本はまった門が、その片方に取り付けられて片開きとなっている。その入り口の上には針金でぶら下がった看板が出ていた。「私道：立入禁止」。空気は暖かく、ユーカリの木の雄ネコ臭に満ちていた。

おれはそこに入って、丘の肩をめぐる砂利道をたどり、ゆるやかな斜面をのぼっててっぺんを越え反対側をおりて浅い谷間に入った。谷間は暑く、高速道路より 5-7 度⁵⁶気温が高かった。そこからだと砂利道が、石灰で洗った石で縁取りされた草地を取り巻くロータリーで終わっているのがわかる。左には空っぽのプールがあって、空のプールほど空っぽに見えるものはない。その三面の脇には、芝生の名残が見え、そこにひどく色あせたクッションつきの、レッドウッドのラウンジチェアがあった。そのクッションはかつては多彩だった。青、緑、黄色、オレンジ、錆びの赤。その縁の縫い目がところどころほどけて、ボタンが取れ、それが起こったところでクッションがはじけそう。四面目のところにはテニスコートの高い金網フェンスがある。空のプールの上にある飛び込み板は曲がって疲れた感じだ。そのマットカバーがちぎれてぶら下がり、金属部品もサビでボロボロだ。

ロータリーまでくると、こけら葺きの屋根に広いフロントポーチを持ったアカシア材の建物の前に停まった。入り口には二重の網戸がある。巨大な黒いハエがその網戸でうつらうつらしている。道が常緑で常にほこりっぽいカリフォルニア桜の間に向かい、その桜の間には素朴なキャビンが丘の斜面にまばらに散在していて、中には完全に隠れているものもある。目に見えるものは荒廃したオフシーズンの感じがした。ドアは閉ざされ、窓は坊さんの衣装だかその手のものでできたカーテンで閉ざされている。その敷居に積もった分厚いほこりがほとんど感じられそうなほどだ。

エンジンを切ってハンドルに手を置いたまま聞き耳を立てた。何の音もしない。この場所はファラオのように死んでいるようだった。ただし二重網戸の向こうのドアが開いていて、その向こうの暗い部屋の中で何かが動いていた。すると軽く正確な口笛が聞こえ、男の姿が網戸に現れ、それを押し開けて階段をゆっくり下りてきた。大した見ものだった。

潰れた黒いガウチョ帽をかぶり、編んだひもがアゴの下にきてる。染み一つないきれいな白いシルクのシャツの襟ボタンを外し、手首にはきつい腕輪、その上のそではゆるくふくらんでいる。首のまわりには縁の黒いスカーフで、それが不均衡に結ばれ、片端はとても短く、反対の端はほとんど腰まで下がっている。幅の広い腰帯と黒のズボン、腰回りはピチピチで、漆黒、脇のところが金糸で縫わ

56 華氏なので摂氏に換算しました。およそ 2 で割ればいいだけなんですけど。

れ、それが切れ目が入ってベル状に広がり、その切れ目の両側に金ボタンが並んでいる。足には華奢なエナメルダンス用パンプスを履いている。

階段の下で止まると、まだ口笛を吹きながらこっちを見た。鞭のようにしなやか。これまで見たこともないほど大きくて虚ろな、煙色の目をしており、その上のまつげは長く細い。顔立ちは繊細で完璧だが弱々しさはない。鼻はまっすぐで、薄いが薄すぎるほどではなく、口はハンサムに突き出されている。頬にえくぼがあり、小さな耳は頭に優雅に貼り付いている。肌は直射日光に触れたこともない青白さだ。

彼は左手を腰にあてて挑戦的なポーズを取り、右手で空中に優雅なカーブを描いて見せた。

「ごきげんよう。良い天気だね」

「おれにはかなり暑いねえ」

「暑くて上等」その発言は平板で有無を言わせず議論はそれでおしまい。おれが何が好きかなど気にするつもりもない。彼は階段にすわり、どこかから長いヤスリを取り出して爪を磨きはじめた。「銀行の人？」と目も上げずに尋ねた。

「ヴェリンジャー先生を探してるんだけど」

そいつはやすりの作業を止めて、暑い彼方へ目をやった。「だれ？」と興味のかけらも見せずに訪ねた。

「ここの所有者だよ。ずいぶん寡黙だねえ。知らないとは言わせないよ」

彼は爪をやすりで削る作業に戻った。「ガセを聞かされたな、あんちゃん。ここを所有してるのは銀行だ。差し押さえたんだか第三者預託だかなんだか。細かい話は忘れた」

おれを見上げたそいつの顔は、細かい話なんかどうでもよさげだった。おれはオールズモービルから出て熱いドアにもたれたが、そこから離れて多少は空気のあるところに移った。

「どの銀行になるかな」

「知らないなら、そっから来たんじゃない。そっから来たんじゃなければ、ここには何の用もない。さっさと帰れよ、あんちゃん。失せろ、でも早くしろ」

「どうしてもヴェリンジャー先生を見つけないといけないんだけどな」

「ここは営業してないんだよ、あんちゃん。看板にあったとおり、ここは私道だ。どっかのまぬけが門の鍵をかけ忘れたんだ」

「あんた、管理人？」

「そんなものだ。質問はおしまいだ、あんちゃん。おれ、キレやすいんだぜ」

「キレてどうなる—アナグマとタンゴでも踊るのか」

彼はいきなり優雅に立ち上がった。しばらくにっこりした。空っぽな微笑。「あの小さなおんぼろコンバーチブルに投げ込んでやらなきゃいけないみたいだな」

「後にしてくれ。いまヴェリンジャー先生はどこにいる？」

彼はヤスリをシャツにしまい、かわりに何かを右手にはめた。軽い動きで手には光るメリケンサックがはまっていた。頬骨の上の皮膚が張り詰め、その大きく煙る目の奥深くに炎が燃えていた。

彼はおれのほうにふらりと近づいた。おれは一步下がって間合いを確保した。口笛は続いていたが甲高くかすれていた。

おれは告げた。「何もケンカしなくてもいいだろう。ケンカすることなんか何もないんだから。それにそのカワイイ半ズボンちゃんが破れちゃうかもしれないよ」

彼は閃光のようにすばやかだった。敏捷なジャンプで迫り、左手を迅速に繰り出す。ジャブかと思つて頭を十分にそらせたが、向こうの狙いはこっちの右手首で、それを捕まれた。しかもすごい握力。おれのバランスを崩し、メリケンサックの手で弧を描くアッパーカットを出した。あれで後頭部にヒビでも入れられたら立ち直れない。身を引けば横顔をやられるか、肩のしたの上腕部にくらう。腕が潰れるか顔が潰れるかのどちらかだ。そんなときにやるべきことはただ一つ。

そいつに引っ張られるに任せた。ついでに後ろから左脚をブロックし、シャツをつかむと、それが破れる音が聞こえた。何かが首の後ろを打ったが、金属じゃない。左に転がると向こうも横倒しになったが、ネコのように着地してこっちがまったくバランスを回復しないうちに立ち上がった。口元に笑みを浮かべている。このすべてに大喜び。なんとも仕事を楽しんでやがる⁵⁷。そしてすばやく襲いかかってきた。

強く野太い声がどこかから怒鳴った。「アール！ 今すぐやめろ！ いますぐだ、聞こえたか？」

ガウチョ少年は止まった。その顔にはある種の病んだニヤニヤ笑いが浮かんでいた。すばやい動きでメリケンサックはズボンのてっぺんに巻かれた広い腰帯の下に隠れた。

振り向くと、がっしりした大柄な男がハワイアンシャツを着て、腕を振り回しながら小径の一つを急ぎ向かってくるところだった。そしてちょっと荒い息をしてたどりついた。

「気でもちがったか、アール？」

「先生、それは決して言っちゃいけないよ」とアールは穏やかに言った。そしてニッコリすると、向きを変え、家の階段に腰を下ろした。てっぺんの平らな帽子を脱ぎ、櫛を取り出し、無表情に濃い黒髪をとかしはじめた。ものの数秒で軽く口笛を吹き始めた。

派手なシャツのごつい男が立っておれを見た。おれは立ってそいつを見た。

彼はうなった。「何事だ？ あなたはどなたですか？」

57 He loved his work. 清水、田口訳はだいたい文の通りで山形訳と似たようなもの。村上訳だけ「闘うという行為を満喫し、堪能している」。原文離れてここまで理屈っぽくする理由がわからないし、原文は短いフレーズをつなぐことでケンカの臨場感を出しているのに、悠長な訳文でそれが死んでると思う。

「名前はマーロウ。ヴェリンジャー先生を探していたんですが。あなたがアールと呼んだ青年が遊びたがったんですよ。暑すぎるんでしょう」

「ヴェリンジャーは私です」と彼は重々しく言った。そして頭を回した。「アール、家に入るんだ」

アールはゆっくり立ち上がった。ヴェリンジャー先生に思慮深く観察するような視線を向けたが、その大きな煙のような目には何の表情もない。そして階段を登り、網戸を引っ張って開いた。ハエの群れが怒ったようにぶんぶん飛んで、そしてドアが閉まると網戸にまた落ち着いた。

ヴェリンジャー先生はこちらにまた関心を戻した。「マーロウ？ で、ご用件は何でしょう、マーロウさん？」

「アールくんによればここは廃業だとか」

「その通り。いまは引っ越す前にいくつか法的な手続きを待っているところです。ここはアールと私の二人だけです」

おれは残念そうな顔をした。「それは残念。ウェイドって人がここにいるかと思ったんですが」

彼は両眉毛を吊り上げた。身だしなみ用品のフラブラシ社が注目しそうなほど立派な眉毛だ。「ウェイド？ そんな名前の知り合いもいるかもしれない—ありがちな名前ですから。でもなぜその人がここにいると？」

「治療で」

彼は顔をしかめた。これほどの眉毛をお持ちだとしかめ面も見事だ。「私は医師ですが診療はもうしておりません。どんな治療のお話でしょうか？」

「アル中なんですよ。ときどき頭のたがが外れて失踪する。ときには自力で帰宅するし、ときにはこっちが探さなきゃいけないんです」と名刺を取り出して渡した。

彼は仏頂ゾラでそれと呼んだ。

「アールくんはどうしちゃったんです？ バレンチノにでもなったつもりですか？」

またあの眉毛の仕草。つい目が奪われる。その一部が独立して4センチ近くも曲線を描いて下がるのだ。彼は肉付きのよい肩をすくめた。

「アールはまったく無害なんです、アール。ときには—ちょっと夢見がちです。お遊びの世界に生きていると言いましょうか」

「お遊びってね、こっちにしちゃ、ずいぶん乱暴に思えましたよ」

「これこれ、マーロウさん。それは誇張というものでしょう。アールはいろんな衣装を着てみるのが好きなんです。その意味では子供っぽい」

「つまりイカレてるってことでしょう。ここはなんかサナトリウムなんでしょう？ 元かな？」

「全然ちがいます。営業していたときには、アーティストコロニーでした。食事、宿舎、運動と娯楽設備、そして何より世間との隔絶を提供したんです。それもあまり高くなく。アーティストというのは、おそらくご存じでしょうが、決して金持ちではない人ばかりです。アーティストという中には、もちろん作家、ミュージシャンなども含まれます。私にとってはやりがいのある仕事でした——それもおしまいですが」

そういう彼は悲しそうだった。眉毛の外がわの縁が下がって口と同じ形になった。もう少し眉毛がのびたら、口の中に入ってしまいそうだ。

「知ってますよ。ファイルにありました。それとしばらく前にここで自殺があったとか。麻薬がらみじゃなかったでしたっけ？」

彼はうなだれるのを止めて気色ばんだ。「何のファイル？」ときつく尋ねる。

「いわゆる、鉄格子窓の人たちのファイルがあるんですよ、先生。譫妄症を起こしたときに飛び降りたりできないような場所です。アル中やヤク中、軽い精神症を扱う小さな私営サナトリウムとかその手のものですよ」

「そんな場所は法的な免許が必要だ」ヴェリンジャー先生はきつい口調で言った。

「ええ、まあ理屈のうえでは。でもときにはそういうのを忘れる人もいまして」

彼はこわばって身を起こした。この御仁、何はなくとも何やら威厳はある。「ずいぶんと失敬なことをほのめかしてくれますな、マーロウさん。私の名前がいまおっしゃったようなリストに載るべき理由などまるで思いつきませんな。お帰りください」

「話をウェイドに戻しましょうよ。変名でここにいたりしませんかねえ？」

「ここにはアールと私しかいない。他にだれも。それじゃ失礼——」

「ちょっとあたりを見せてもらってもいいですかねえ」

ときには相手を怒らせて何か意外なことを言わせることもできる。だがヴェリンジャー先生はそうはいかない。重々しいままだ。そのまつげもずっと重々しい。おれは家のほうを見た。中から何か音楽が聞こえる。ダンス音楽だ。そしてとてもかすかに指を鳴らす音。

「あそこで踊ってるんでしょう。あれはタンゴだ。あの中で一人きりで踊ってるのはまちがいない。大したガキだ」

「帰っていただけますかな、マーロウさん。それともアールを呼んで、うちの敷地から排除するのを手伝わせましょうか？」

「わかりましたよ、帰りますよ。悪く思わないでください。Vのつく名前は三つしか出てなくて、あなたがいちばん有望そうに思えたもので。手がかりはそれしかないんです——V先生という。失踪する前にそれを紙切れになぐり書いたんですよ。V先生って」

「何十人もいるでしょう」ヴェリンジャー先生は落ち着いて言った。

「ええそうでしょう。でも鉄格子窓のある人のファイルには何十人もいませんでしたよ。お手間を取らせましてどうも。アールくんはちょっと気になりますね」

おれは向きを変えて車に向かい、乗りこんだ。ドアを閉めたときには、ヴェリンジャー先生が横にきていた。そして快い表情を浮かべて身を屈めた。

「言い争う必要はありませんよ、マーロウさん。あなたのお仕事では、無遠慮な真似も必要なのはわかります。アールのどこが気になるんですか？」

「あいつは見るからにおかしいじゃないですか⁵⁸。一つおかしいところが見つければ、他にもおかしいところがあると思うのは人情でしょう。あいつ、躁鬱症なんでしょう？ いまは躁状態で」

彼はだまっておれを見つめた。重々しく礼儀正しい様子だった。「マーロウさん、ここにはいろいろ興味深く才能ある人々が滞在しました。その全員があなたほど常識人だったわけではないんです。才能ある人々はしばしば神経質ですから。しかし私は精神異常者やアル中の世話をするような施設は持っていませんし、そういう仕事をやる気もない。アール以外に職員もいませんし、あいつは病人の世話をするようなやつとはとても言えない」

「じゃあどういようなやつなんですか、先生。あのバブルダンスとかはさておき？」

彼は車のドアによりかかった。その声が下がり、秘密をうちあけるときの声になった。「アールの両親は大切な友人たちだったんですよ、マーロウさん。だれかがアールの面倒を見なきゃならないんですが、その両親はすでに他界。アールは静かな生活を送り、都会の喧噪や誘惑から遠ざけておかなければいけないんです。不安定だが基本的には無害な子でして。私の言うことなら素直にきくのはご覧になった通りです」

「気骨がおありですね」

彼はため息をついた。眉毛がゆっくり波打ち、まるで何かを怪しむ昆虫の触角のようだ。「犠牲は払いましたよ。かなり重い犠牲を。アールがここでの仕事を手伝ってくれると思ったんですよ。テニスは見事、水泳もダイビングもチャンピオン級、夜通し踊れるんです。ほぼ常に気だての良さの権化なんですよ。でもときどき——いろいろありまして」と、痛々しい記憶を奥に押しやろうとするように大きな手を振った。「最終的に、アールを諦めるか私のここの場所を諦めるかの選択になったんです」

彼は手のひらを上に両手を挙げ、横に広げると、裏返してぱたりと両脇に落とした。目はうるんでいたが涙は流さなかった。

58 He's a phony. 文字通りだと「インチキなやつだ」だが文脈的に変なので解釈が面倒。何か変だというニュアンスで清水訳は「どこかおかしい」でわかる。田口訳は「別世界にいる」で、まあなんとかわからなくもない。が、村上は「明らかに何かになりきっている」で、次の躁鬱症だという話と全然つながらない。

「ここを売りました。この静かな谷間は不動産開発されます。歩道や街頭や、スクーターと騒々しいラジオを持った子どもたちがくるでしょう。果ては」――彼は絶望的なため息を吐いた――「テレビさえ」と片手を、あたり一面を指すように振った。「木は残してくれるといいんですが、まあ無理でしょうね。尾根沿いには、かわりにテレビアンテナが並ぶでしょう。でもアールと私はどこか遠くに行くはずです」

「さようなら、先生。ご心痛お察しします」

彼は手を差し出した。湿っていたがきわめてしっかりしていた。「同情とご理解感謝します、マールウさん。それとスレイドさん捜索にお役にたてず残念です」

「ウェイド」

「失礼、ウェイド。もちろんです。さようなら、ご幸運を」

おれは車を出して、来た通り砂利道を戻った。がっかりはしたが、ヴェリンジャー先生がおれに感じてほしいほどではなかった。

門を出ると、高速道路のカーブを十分遠くまで回り、入り口から見えない所に車を停めた。下りて舗装路の橋を歩き、鉄条網の境界柵からギリギリ門が見えるところまできた。ユーカリの木の下に立って待った。

五分間かそこら経った。すると私道から砂利を巻き上げながら車がやってきた。おれからは見えないうところで停まった。おれはさらに後ずさり茂みの奥深くに入った。きしむ音が聞こえ、重たいラッチがカチリという音、鎖のじゃらじゃらいう音が聞こえた。車のエンジンがふかされ、車は私道を戻っていった。

そのエンジン音が消えると、おれはオールズモービルに戻ってUターンし、町へと戻った。ヴェリンジャー先生の私道入り口前を通り過ぎると、門が南京錠つきのチェーンで固定されているのが見えた。今日はもう訪問者なし、ということで。

[17]

30 キロほどの道を戻り昼飯を食べた。食べつつ、この話全体についてますますばかばかしいと思い始めた。こんなやり方で人なんか見つかるもんじゃない。アールやヴェリンジャー先生みたいなおもしろい人物には会うが、お目当ての人物には会えない。タイヤ、ガソリン、ことば、神経のエネルギーを無駄遣いして、そのゲームで何も見返りはない。ルーレットで賭け金限度額を四通りの賭け方で黒 28 に張るようなやり方ですらない⁵⁹。V のつく三つの名前では、狙いの人物にたどりつく確率なんて、大ギャンブラーのニックをサイコロゲームで負かす確率並の低さだ。

どのみち最初のはいつも外れ、行き詰まり、有望な手がかりだったものが目の前で爆発して、いいこと何もしない。だが先生は、ウェイドという代わりにスレイドと言ったのはヘマだった。賢い人でそう簡単に名前を忘れたりしないし、忘れるときはすべて忘れる。

そうかも、そうでないかも。先生とそう長く話していたわけじゃない。コーヒーを飲みながら、ヴカニッチ先生にヴァーリー先生のことを考えた。イエスかノーか？ 二人をまわると午後がほぼ潰れる。その頃には、アイドル・ヴァレーのウェイド邸に電話したら、大黒柱が家に戻ってすべてはとりあえずピカピカと言われることになりかねない。

ヴカニッチ先生は簡単だ。このまま 6 街区ほど先にいる。だがヴァーリー先生は地獄まで出かけていてアルタデナ丘陵にいる。長く暑いドライブになる。イエスかノーか？

最終的な答えはイエスだった。よい理由が三つあった。一つは、ヤバい筋とそこにいる連中については、集めるだけ情報を集めておいて損はないからだ。二つ目には、ピーターズが用意してくれたファイルに追加できることがあれば、その分だけ彼に謝意と善意を提供できる。3 つ目の理由は、どのみち他にやることもないということだ。

おれは勘定をすませ、車をそこに残して、通りの北側を歩いてストックウェル・ビルに向かった。古くさい建物で、入り口に葉巻カウンターがあり、エレベーターは手動で、それがガタガタ動き、水平になるのをいやがる。六階の廊下は狭く、ドアにはすりガラスの窓がついている。おれの事務所のビルよりも古くてずっと汚かった。あまり羽振りのよくない医者だの歯医者だのクリスチャン・サイ

59 You're not even betting table limit four ways on Black 28. 清水訳はもちろん完全無視 (あまりの潔さにだんだん小気味よくなってきた)。村上訳: 「出るあてもない目にせつせと金を張っているようなものだ」は意識としてありだが、チャンドラーの表現の具体性は犠牲にしている。田口訳「ルーレットでリスクを分散させてミニマムベットで黒の 28 に賭けるほどの興奮すらない」は、がんばって具体性を残そうとしたものだが、意味が少々ちがう。28 (黒の数字) に four ways で賭けるというのは、数字そのものに張るだけでなく、黒にいくらか、その列にいくらか、みたいに、その数字を含む様々な方法 4 通りで賭け金を張るということ。つまり狙ったものに当たるように様々なやり方で広く網を張っているという意味。リスク分散ではない。

エンスの伝道師、裁判で相手方についてほしいような弁護士たち、かつかつで食いつないでいるような医者や歯医者。腕もそこそこ、あまり清潔でもなく、やる気もなく、三ドルになります看護婦に払って下さい的な連中。疲れ、幻滅した連中で、自分の立ち位置も、やってくる患者も、そいつらからいくら絞り取れるかもすでにわかりきっている。ツケはだめです。診察中、休診中。カジンスキーさん、かなり奥歯がガタガタですねえ。さてこっちのアクリルの詰め物は、金の詰め物とまったく遜色ないんですが14ドルでやってさしあげますよ。麻酔薬使うなら追加で2ドルですよ、ご希望でしたら。診察中、休診中。締めて三ドルです。看護婦に支払って下さい。

こういうビルには、大儲けしているヤツが必ず二、三人いるんだが、パッと見にはわからない。しけた背景に溶け込んで、それが保護色になっている。副業で保釈金詐欺の片棒かつぎをしてる悪徳弁護士（没収されるべき保釈金のうち実際に回収されるのはたった2パーセントだ⁶⁰）。墮胎医たちは自分たちの設備についてもっともらしい説明がつくあらゆる商売に偽装してる。麻薬売人は、泌尿器科医皮膚科医など治療が頻繁で局部麻酔の常時使用があたりまえのあらゆる医者に偽装してる。

レスター・ヴカニッチ先生は、待合室が狭くて調度も貧相で、そこに一ダースもの人が待っていたがみんな居心地悪そうだ。みんな似たり寄ったり。何の特徴もない。どのみち、自制できているヤク中は菜食主義の会計士と見分けがつかない。45分も待たされた。患者たちは二つのドアから入っていった。元気な耳鼻咽喉科の先生は、場所さえあれば患者四人をまとめて扱える。

やっと順番がきた。おれは茶色い皮椅子にすわったが、隣の机には白いタオルが敷かれてそこに器具が並んでいる。滅菌装置が壁際でぶくぶく言っている。ヴカニッチ先生が白衣とおでこの丸鏡姿で元気に入ってきた。おれの正面のスツールにすわった。

「鼻炎性の頭痛だそうで。かなりひどいんですか？」と彼は看護婦が渡したフォルダを見た。

ひどいと言った。目もくらむほど。特に今朝起きたとき。彼は賢げにうなずいてみせた。

「典型的ですね」と言って、万年筆みたいなものの上にガラスのキャップをかぶせた。

それをおれの口に押し込んだ。「唇を閉じて、でも歯は噛まないでください」そう言いつつ彼は手を伸ばして照明を切った。窓はなかった。どこかで換気扇がうなっていた。

ヴカニッチ先生はガラス管を引っ込めて照明を元通り点けた。そして慎重におれを見た。

「充血はないですね⁶¹、マーロウさん。頭痛があるなら鼻炎のせいじゃないですよ。私の見たところ、あなた鼻炎なんて生涯一度もかかってないでしょう。鼻中隔の手術は以前やられているようですが」

「ええ先生。フットボールで蹴られたもので」

60 豆知識：裁判で被告になったら、保釈金を積む（＝法廷/当局に預ける）と拘置所から出してもらえる。裁判のときにちゃんと戻ってくれば、その保釈金は戻ってくる。戻ってこないで没収される。でも実際には、保釈金は現金で支払われるわけではなく、一部だけおさめてあとは保証人が「払いますよ、あたしが保証します」と言うだけ。その保証人が雲隠れするとかすれば、没収されるべき保証金の相当部分は回収できなくなる。

61 Congestion. 辞書引くと充血と出ていて、田口はそれを採用しているが、鼻のcongestionというとは一般用法では鼻づまりのことで、村上はそっちを採用している。どっちでもまちがいはない。

「ちょっとした骨の出っ張りがあって、その時に切除しとくべきでしたね。でも呼吸の障害になるようなものじゃぜんぜんない」

彼はスツールの上で身をそらせて膝をおさえた。「さて私に何をしてほしいんですかな？」彼は細面で特徴もなく青白かった。結核にかかった白いネズミのようだ。

「友人のことでお話したかったんスよ。ひどい状態でしてね。作家なんです。金はいくらでもあるんですが、神経が参ってる。助けがいる。一日中酒浸りでして。ちょっと余計なアレがいるんスよ。かかりつけの医者がもう協力してくれないもんで」

「協力とはズバリどういう意味？」

「ときどき落ち着くお注射が要るだけっスよ。なんかお互いうまい取り決めができると思うんですがねえ。払いは確実ですし」

「残念ながら、マーロウさん、私の扱うような問題じゃないな」と彼は立ち上がった。「しかしまあずいぶん乱暴なやり方だねえ。ご友人は、お望みなら直接相談に乗ってあげてもいいですよ。だが治療が必要などこか悪いところがないならそれもね。お代10ドルになります、マーロウさん」

「またまたとぼけちゃって、先生。リストに載ってるんですよ」

ヴカニッチ先生は壁にもたれてタバコに火をつけた。こっちをじらしている。煙を吹いてそれを眺めた。おれは代わりに見るものとして名刺を渡した。彼はそれを見た。

「何のリストですか」と問いただした。

「鉄格子窓を持った連中の。おれの友人をすでにご存じかとも思ましてねえ。ウェイドってんですけど。どこか小さな白い部屋にでも閉じ込めてあるんじゃないかなー、とか。失踪してるんですよ」

「このごくつぶしめが。私は四日コースのアル中治療なんていう安手の商売に手を出したりしないよどのみちあんなの、何も治りやしないんだし。小さな白い部屋なんかないし、おっしゃるご友人とやらも知らないね—その人が実在するにしても。さあ十ドル—現金だ—今すぐ払ってもらおう。それとも警察を呼んで、麻薬の打診をされたと苦情を入れてやろうか？」

「そいつあすてきだ。是非」

「出ていけ、このチンケなペテン師め」

おれは椅子から立ち上がった。「何かかんちがいをしていたようです、先生。前回こいつが保釈破りをしたときには、Vのつく医者のところ閉じこもったんですよ。まったくの隠密作戦だったんですよ。そいつを深夜に連れ出して、山を越えたら同じやり方で家に戻した。そいつが家に入るのを確認さえしないで消えちゃったんですよ。だからまたもやトンズラして、かなりの頃合いにわたり戻ってこない、当然こっちはファイルを調べて手がかりを漁るってわけです。Vで始まる医者は三人いますね」

彼は陰気な微笑を浮かべた。まだじらそうってわけだ。「おもしろい。その選出基準は？」

おれは彼を見つめた。その右手がそっと、左上腕の内側を上下にさすっている。その顔に軽い汗が浮かんでいた。

「すみませんね、先生。我々の活動は極秘でして」

「ちょっと失礼、別の患者がおりまして―」

彼は文の残りを宙づりにしたまま出ていった。医者がいらない間に看護婦が戸口から頭を突き出した。ちよっとおれを見てまた引っ込んだ。

するとヴカニッチ先生が楽しげに足取りも軽く戻ってきた。ニコニコしてくつろいでいる。目が輝いている。

「なんだ、まだいたのか？」彼はずいぶん驚いたように見えたが芝居かもしれない。「我らがちょっとした問診は終結したかと思ったがね」

「いま行くよ。待つて欲しいのかと思ってた」

彼は笑った。「教えてやろうか、マーロウくん。今は実にすごい時代でねえ。たった五百ドルで、私はきみを数力所骨折させて病院送りにできるんだよ。なんとも笑えるじゃないか」

「おもしろえよ。一発静脈注射してきたんだろ、センセ。いやあ、元気になるもんだね」

おれは出ていこうとした。彼は言った。「アスタ・ルエゴ（またな）、アミーゴ。十ドルの払いをお忘れなく。看護婦にな」

立ち去るときに、やつはインターコムのところにおいて何かそこに話していた。待合室ではさっきと同じ十二人か、そっくりの十二人が居心地悪くしていた。看護婦がすぐに仕事にかかった。

「十ドルいただきます、マーロウさん。当医院は即時の現金払いとなっております」

おれは混雑した足の群れを乗り越えながらドアに向かった。彼女は椅子から跳び上がり、机のまわりを回った。おれはドアを引っ張って開けた。

「払わなかったらどうなる？」

「思い知ることになりますよ」と彼女は怒ったように言った。

「そうだろうとも。君は自分の仕事をしているだけだ。おれも同様。置いてきた名刺を見たら、おれの仕事がわかる」

おれは外に出た。待っている患者たちは咎めるような目つきでおれを見た。お医者様にあんな真似をするなんて。

[18]

エイモス・ヴァーリー先生はまったくタチが違う御仁だった。でっかい古い庭の中の
でっかい古い家を持ち、古い檜の木が影を落としている。巨大なツーバイフォー構法⁶²の家
で、ポーチのひさしに沿って入念な唐草模様が彫られており、白いポーチの手すりはずべ
て古風なグランドピアノの脚のように旋盤加工をして溝を彫った支柱がついている。その
ポーチでは数人の弱々しい老人が長椅子にすわり、身体には毛布を巻いていた。



入り口ドアは観音開きでステンドグラスがはまっている。中の廊下は広くて涼しく、寄せ木細工の
床は磨かれてじゅうたんなど一枚もない。アルタデナは夏には暑くなる。丘のふもとに寄っているの
で、そよ風はその頭上をあっさりとび越えてしまうのだ。80年前の人々は、こういう気候にどうい
う家を建てるべきか知っていた。

パリッとした白衣の看護婦が名刺を受け取って、しばらくするとエイモス・ヴァーリー先生がおれ
に会いに降臨なさった。でっかいハゲ男で快活な笑顔だ。その長い白衣は染み一つなく、ゴム平底の
靴で音を立てずに歩いた

「どういったご用件ですか、マーロウさん」彼は豊かで柔らかい声を持っている、不安な心の痛み
をなだめて落ち着かせる声だ。先生がいらっしゃいました、もう何も心配いりませんよ、もう万事解
決です。あの臨床的な態度を心得ていて、それも甘くべったり何重にも身につけている。すばらしい
御仁だ—そして装甲板並に手強い。

「先生、ウェイドという名前の人物を探しているんです。金持ちのアル中で自宅から失踪しました。
過去の履歴を見ますと、それを扱えるだけの手腕を持った人目につかない施設に閉じ込もっているよ
うなのです。唯一の手がかりはV先生という名前です。あなたで三人目のV先生なんですが、そろそ
ろ徒労感が出てきてしましまして」

彼は慈愛あふれる微笑をした。「たった三人目とはね、マーロウさん。ロサンゼルスやその周辺で
Vのつく医師など、百人は優にいます」

「その通り、しかし鉄格子のはまった窓を持つ人は限られます。ここの二階の裏手にいくつかお持ち
ですね」

62 構法の話は、既存の訳は三つすべて無視。またその次のポーチの支柱の描写では全員が「turned」を「曲がった/そ
りかえった」と誤訳。円柱型に旋盤加工した、ということ。さらに田口訳は「溝を彫った」を無視。写真を参照。
旋盤で柱を丸く加工したうえ、さらに縦に溝を入れるのは手間がかかって高いので、この描写だけで「この施設、
金かかってんなー」と推測できるのだ。日本の文芸翻訳関係者の相当部分は文系でエンジニアリング的な細部には
非常に疎く (SF 関係を除けば)、ここでもそれがチャンドラーの細かい描写重視の方針を損なっている。

「老人ですよ」とヴァーリー先生は悲しそうに言ったが、その悲しみは実に豊かで重々しかった⁶³。

「孤独なご老人たち、気落ちして不幸なご老人方です、マーロウさん。ときには――」と彼は、表現力豊かな手振りをしてみせた。外へ向けた放物線、それが頂点でいったん止まり、そして優しい落下、まるで地面に舞い落ちる枯葉のような。「うちはアル中治療はいたしません」と手短に付け加えた。

「ではこれで失礼いたしまして――」

「すみませんでした、先生。たまたまうちのリストにあなたが出ていたものでして。数年前に麻薬捜査当局となにかもめられたとか」

「おやそうなんですか？」彼は不思議そうな顔をしてから、ぱっと顔が明るくなった。「ああそうそう、愚かにも雇ってしまった助手の話ですね。ごく短期です。私の信頼をひどく濫用してくれましたよ。いやまったく」

「聞いていた話とちがいますねえ。たぶんなんかのまちがいだったんでしょう」

「して、どんな話をお聞きになったのですかな、マーロウさん」彼はまだ、微笑と優しげな口調という措置をおれに向けて全開にしていた。

「あなたが麻薬類の処方書を提出しなければならなかったと」

これは効いた。顔はしかめなかったが、魅力が何層か剥げ落ちた。青い目に冷たい光が宿った。

「そしてこのとんでもない情報の出所は？」

「さるでかい探偵事務所で、この種のことにについてファイルをまとめる能力を持ったところです」

「どうせ安手の強請屋どもの寄せ集めでしょうよ」

「安手ではありませんよ、先生。基本料金は一日百ドルです。元憲兵大佐が経営しています。小銭稼ぎなんかじゃありませんよ。ずっとお値段は高い」

「そいつに一言言ってやるとしよう」とヴァーリー先生は冷たい軽蔑をこめて言った。「そいつの名前は？」ヴァーリー先生の態度は日が暮れたようだった。冷たい晩になりそうだ。

「極秘です、先生。しかしそうお気になさらないでくださいよ。こっちも仕事なもので。ウェイドという名前にはピンとこない、と」

「出口はわかるね、マーロウさん」

その背後で小さなエレベーターのドアが開いた。看護婦が車椅子を押し出した。その車椅子には呆然自失の老人の残骸があった。目は閉じられ、肌は青みがかっている。しっかりくるまれている。看護婦は彼の車椅子を、磨いた床の上で静かに押していき、脇の戸口から出て行った。ヴァーリー先生はそっと言った。

63 つまんないところだがなぜか既訳の一部は苦勞している模様。村上訳は「裕福で満ち足りた悲しみ」だが、裕福な悲しみというのは意味不明。田口訳は「満ち足りた者の悲しみをこめて」も同じく意味不明。なんだかえらく莊嚴でもったいぶった「悲しみ」で、つまりは芝居がかって嘘くさいということ。清水訳だけは「巧みにつくられたような感じ」ときっちりニュアンスを理解して訳しているが、そこまで説明してしまうとやりすぎかも。

「ご老人。病気のご老人、寂しいご老人。二度と来なさんな、マーロウさん。私のカンに障りそうだがカンに障ると私はいささか不愉快になったりする。いやきわめて不愉快になると言おうか」

「こっちは別にいいですよ、先生。お時間どうも。ここはすてきなくたばりホームですな」

「なんだと？」彼は一步こちらに踏み出して、残った優しげな覆いを脱ぎ捨てた。顔の柔らかい輪郭が固まって硬いしわと化した。

「おやどうかしましたか？探し人がここにいないのはわかりましたよ。ここでは弱りすぎて反撃できない人間以外は見つからないでしょう。病気のご老人。寂しいご老人。ご自分でおっしゃった通り。求められない老人、でも金と強欲な相続人はいる老人。ほとんどはおそらく裁判所から無能力者指定を受けているんでしょう」

「カンに障ってきたな」とヴァーリー先生。

「軽い食事、軽い鎮静剤、厳格な扱い。外で日に当ててベッドに戻す。多少の気合いが残っていたとすのために、窓には鉄格子。みんなあんたを愛してるよ、先生、一人残らずね。あんたの手を握り、あんたの目の悲しみを見ながら死んでいくんだ。その悲しみもウソじゃない」

「もちろんそうだ」と彼は低いのどにかかったうなり声で言った。その手はいまやげんこつに握られている。おれもいい加減にしたほうがいい。だがこいつにはだんだんむかついてきた。

「そうでしょうとも。みんないい金ヅル顧客を失うのはいやだからね。特に満足していただく必要のないお客ならなおさら」

「だれかがやらねばならんだ。だれかがこの悲しいご老人たちの面倒を見なければならないんだよマーロウさん」

「だれかが肥だめを掃除しなきゃいけないですからね。考えて見れば、そっちは公明正大で立派な仕事だな。じゃあな、ヴァーリー先生。この仕事で汚れた気分になったら、あんたのことを考えることにするよ。まちがいなしに元気が出るはずだ」

「この薄汚いシラミ野郎が」とヴァーリー先生は、その幅の広い白い歯を食いしばった。「背骨をへし折ってやる。うちはりっぱな職業の立派な一翼なんだ」

おれはうんざりして彼を見た。「そうだな。そうだとも。死臭がするだけで」

殴りかかってこなかったのも、離れて外に出た。広い観音開きのドアのところでふり返った。彼はじっとしていた。仕事があるのだ、甘ったるい仮面を幾重にもかぶりなおす仕事だ。

[19]

ハリウッドに車で戻ったが、嘔み締められ続けたひもの切れ端のような気分だった。食事にははやすぎるし、暑すぎたので、事務所の扇風機をつけた。それで空気はいささかも冷えない。単にもっと動くようになるだけだ。外の大通りでは車が果てしなく騒音をたてていた。頭の中ではいろいろな思いがはえ取り紙のはえのようにくっつき合ってしまう。

三発撃って、三発とも外れ。やったことといえば、やたらに医者に出ただけ。

ウェイド邸に電話した。メキシコっぽい訛りの声が出て、ウェイド夫人はお留守だと告げた。ウェイド氏を頼んだ。その声は、ウェイド氏もいないと言う。おれは自分の名前を残した。何の苦も無くそれを聞き取ったようだ。ハウスボーイだと言う。

カルネ団のジョージ・ピーターズに電話した。他に医者を知っているかもしれない。外出中だったインチキな名前と正しい電話番号を残しておいた。病んだゴキブリのように一時間が過ぎた。おれは忘却の砂漠の砂一粒、二丁拳銃のカウボーイで弾切れだった。三発撃って三発外れ。三つセットは大嫌いだ。Aさんを訪問。何もなし。Bさんを訪問。何もなし。Cさんを訪問。前に同じ。一週間後に、Dさんを当たればよかったとわかる。ただ、そのときはそいつの存在も知らず、それがわかったころには客が気を変えて捜査は打ち切り。

ヴカニッチ先生とヴァーリー先生は外していい。ヴァーリーは金持ちすぎて、アル中なんか扱わない。ヴカニッチはクズ野郎で、綱渡りの曲芸師で自分の病院で自分に静脈注射するヤツだ。職員は知っているはず。患者も少なくとも一部は知っている。だれかがカツとなって電話一本すればあいつはおしまいだ。ウェイドは、酔っ払っていようとしらふだろうと、あんなやつに近づこうなんて考えもしない。この世で最も賢いやつではないにしても——成功した連中の多くは精神の巨人にはほど遠い——ヴカニッチに手を出すほど馬鹿なはずはない。

唯一可能性があるのはヴェリンジャー先生だ。場所もあるし、隔絶されている。たぶんそれだけの辛抱強さもある。だがセプルヴェダキャニオンは、アイドルヴァレーからはずいぶん遠い。接触地点はどこで、どうやって知り合ったのか、そしてヴェリンジャーがああ物件を持っていて買い手がっているなら、かなりの金が懐に入りかけているはずだ。そこで思いついた。不動産登記会社の知り合いに電話して、あの物件の状態を調べてもらおうと思ったのだ⁶⁴。返事なし。登記会社は今日は営業終了だ。

64 村上、田口は「誰の名義になっているか/所有者は誰になっているか」としているが、厳密にはそういうことじゃない。所有者もさることながら、むしろ抵当権や借地権が設定されているか、つまり借金の担保になっているかが知りたいのだ。まあこれはぼくが不動産畑の出で無用に細かいだけで目くじらたてることでもないが。清水は余計な解釈を入れず「どういうことになっているか」とそのまま訳していて、結果的に三人の中で最も正確。

おれも今日は営業終了で、ラ・シエナガのルディーズ・バーBQに車で向かい、そこの仕切り屋に名前を告げると、バースツールにすわりウィスキーサワーを前にマレク・ウェーバーのワルツ音楽を聴きながら、大いなる瞬間を待った。しばらくしてビロードのロープから中に入り、ルディーズの「世界に名高き」ソールズベリー・ステーキを食べたが。その実態は焦げた木切れに載ったハンバーグで、その周りに焦げ目をつけたマッシュポテト、添え物としてオニオンリングのフライにあのぐちゃぐちゃのサラダ。男たちはレストランでならまったく何も言わずに食べるだろうが、家で女房がこいつを喰わせようとしたら怒鳴りだすような代物。

その後車で家に戻った。玄関を開けると電話が鳴り始めた。

「アイリーン・ウェイドです、マーロウさん。電話しろとのことでしたが」

「そっちで何か進展があったか知りたかったです。こっちは一日中医者巡りですが、だれとも仲良くなれませんでした」

「こちらです、すみません。夫はまだ姿を見せてません。つい心配になってしまいます。じゃあそちらも新しい話は何もないんですね」その声は低く意気消沈していた。

「この国はでかいし人も多いですから、ウェイドさん」

「今夜でもう丸四日なんですよ」

「ええ、でもまだそれほど長い間じゃないですから」

「わたしには十分長いんです」といって彼女はしばし沈黙した。「いろいろ考えてみたんです、なんとか思い出そうとして。何かあるはずなんです、なにかヒントか記憶が。ロジャーはいろんなことについてやたらにしゃべるので」

「ヴェリンジャーという名前で思い当たることはありますか、ウェイドさん」

「いいえ、残念ながら。何かあてがあるんでしょうか？」

「ウェイドさんがあるとき、カウボーイ衣装の背の高い若者に家に連れてこられたとっていましたね。その背の高い若者、見ればわかりますか、ウェイドさん？」

彼女はためらった。「たぶんわかるかも。もし状況が同じだったなら。でもほんの一瞬見ただけです。その人がヴェリンジャーというんですか？」

「いいえ、ウェイドさん。ヴェリンジャーというのはがっしりした中年男で、なにやらゲスト牧場をセプルヴェダキャニオンで運営している、というか運営していたんです。そこでアールという、着飾った若者が働いてます。そしてヴェリンジャーは医師を名乗ってるんです」

彼女は温かい声で言った。「それはすごいじゃないですか。いい線を攻めているとは思わないんですか？」

「迷子のネコちゃん並にぜんぜんお門違いの搜索かもしれない⁶⁵。わかったらお知らせします。ロジャーが家に戻ってないか、あなたが何か重要なことを思い出さなかったか確かめたかっただけです」

彼女は悲しげに言った。「あまりお役にはたてていないようですみません。いつでもお電話ください、どんなに遅くてもかまいませんから」

おれは承知して電話を切った。今回は銃と乾電池三つの懐中電灯を持っていった。銃は小型だが強力な銃身の短い32口径で弾はフラットポイント。ヴェリンジャー先生のとこのアールは、メリケンサック以外にもおもちゃをもっているかもしれない。あれば、あいつはそれでお遊びをするくらいには十分イカレてる。

またハイウェイに戻り、耐えられる限りスピードを出した。月のない夜で、ヴェリンジャー先生の地所入り口に到着した頃には暗くなり始めているだろう。暗闇が必要なのだ。

門はまだ鎖と南京錠がかかっていた。通り過ぎて、高速道路を十分離れたところに車を停めた。まだ木々の下に明かりが見えるが、長くは続くまい。門を越え、丘の斜面を上ってハイキング道を探した。はるか峡谷でうずらの声が聞こえたように思った。ナゲキバトが人生の悲慘に抗して鳴いた。ハイキング道などないか、見つからなかったの、道に戻って砂利の端に沿って歩いた。ユーカリの木が檜の木にかわり、尾根を越えると遠くに明かりがいくつか見える。プールやテニスコートの裏で、道の端の母屋を見下ろせる場所を確保するのに四十五分かかった。その母屋は照明がつき、音楽が聞こえてきた。そしてさらに遠く木の間で、もう一つ明かりのついたキャビンがあった。木々の間には小さな明かりのないキャビンがそこらじゅうに散在していた。いまや道に沿って歩いていると、いきなり母屋の後ろ側で投光器が点いた。おれはその場に凍り付いた。投光器は別に何かを探しているわけではなかった。まっすぐ下に向いて、裏のポーチとその先の地面に大きなスポットライトを作っていた。そしてドアがバタンと開き、アールが出てきた。それで自分の見込みが当たったのがわかった⁶⁶。

今夜のアールはカウボーイで、前回ロジャー・ウェイドを家に送り届けたのもカウボーイだった。アールはローブをくるくる回していた。白い縫い取りのある黒シャツを着ており、首には水玉模様のスカーフを緩くゆわえている。大量の銀飾りがついた幅広の革ベルトをしており、そこに装飾入りの革ホルスターが二つあって、象牙の握りをつけた銃が納められていた。エレガントな乗馬ズボンと、

65 I could be wetter than a drowned kitten. このワタクシですら聞いたことない表現で戸惑ったが、20世紀初頭には“all wet”というのが「まちがっている」という意味のスラングで流通していたんだって。ネコはそれに華を添えるためマーロウがくっつけた模様。つまり文としては「まちがってるかもしれない」の意味で、既訳もそういう意味を三者三様に表現している。ここでは猫の尾ひれも足してみました。

66 I was in the right place. 普通に読めば、その次の一文とあわせて、自分が見込み通りの場所、つまりウェイドのいる正しい場所にいることが確信できた、という意味になる。田口だけはなぜか「自分が特等席にいるのがわかった」と、その場所からアールがよく見えるという意味に訳している。別にマーロウはアール君の演技を見るのに興味なんかないので、それはまちがっていると思う。

白くクロスステッチの入ったピカピカの新品ブーツをはいている。頭の後ろには白のソンブレロがあり、シャツの前に編んだ銀色のひもに見えるものが垂れ下がって、結ばれてはいない。

彼はそこで、白いスポットライトの下に一人きりで立ち、自分のまわりでロープをまわしながら、その中に入ったり出たりしていた。観客のない役者、背の高い、痩せた、ハンサムなカウボーイ野郎が、自分一人のショーを上演し、完全にご満悦だ。二丁拳銃アール、コチーズ郡の恐るべき男。こいつは、あの手の馬づくしで電話交換手まで乗馬ブーツで仕事をするような観光牧場にいるべきだ。

突然彼は、何か音を聞いたか、聞いたふりをした。ロープを落とし、ホルスターから二丁拳銃をサッと抜き、水平になると同時に親指を撃鉄にかけていた。暗闇の中を覗く。おれは微動だにしないかった。あのクソ拳銃は弾が入っているかもしれないのだ。だがスポットライトで目がくらみ、彼は何も見えていなかった。ホルスターに銃を二つとも戻し、ロープを拾って雑に丸め、家の中に戻った照明が消え、おれも緊張を解いた。

おれは木の間を移動して、斜面の小さな照明のついたキャビンに近づいた。無音だ。おれは窓の網戸まできて中を覗いた。明かりはベッド隣のナイトテーブルにのったランプからのものだった。ベッドには男が仰向けに寝ていて、身体はリラックスしてパジャマの袖に包まれた両腕が掛け布団の外に出ており、目は大きく見開かれて天井を見つめている。でかい男らしい。顔は部分的に影になっていたが、蒼白でヒゲを剃っておらず、ちょうど計算があうくらいの伸び方だ。手の指が広げられて、動きもせずにベッドの外側に出ている。もう何時間も動いていないかのようだ。

キャビンの向こう側の小径をやってくる足音が聞こえた。網戸がきしんで開き、ヴェリンジャー先生のがっしりした姿が戸口に現れた。トマトジュースのでかいコップらしきものを持っている。そしてフロアランプのスイッチを入れた。ハワイアンシャツが黄色っぽく輝いた。ベッドの男はそっちを見もしなかった。

ヴェリンジャー先生はコップをナイトテーブルに置いて、椅子を近くに引いてすわった。片方の手首を取って脈を測った。「いまのご気分はいかがですか、ウェイドさん」というその声は、親切で気遣うようだった。

ベッドの男は返事もせず、ヴェリンジャーを見もしなかった。天井を見つめ続けた。

「ほらほらウェイドさん、機嫌を損ねないでくださいよ。脈拍は正常よりちょっとはやい程度だ。弱ってはいるがそれ以外は――」

ベッドの男がいきなり言った。「テジー、あの男に、私がどんな具合かわかってるのか訊いてくれあのクソ野郎は私に訊く手間すらかけやがらなかった」きれいで明瞭な声をしていたが、その口調は苦々しげだった。

「テジーってだれです？」とヴェリンジャー先生は辛抱強く言った。

「我が代弁者。あそこの角、上のほうにいる」

ヴェリンジャー先生は見上げた。「小さなクモがいる。芝居はやめてください、ウェイドさん。私が相手なら必要ないことだ」

「学名テゲナリア・ドメスティカ、どこにでもいるハエトリグモだよ、旦那。クモは好きでね。ハワイアンシャツなんかほぼ絶対に着ないし」

ヴェリンジャー先生は唇を濡らした。「お遊びの暇はないんだよ、ウェイドさん」

「テジーはお遊びの余裕なんかないぜ」とウェイドは頭がきわめて重たいかのようにゆっくりまわしヴェリンジャー先生を恨みがましくねめつけた。「テジーは死ぬほど真剣なんだ。忍び寄る。目をそらしたすきに、すばやく静かにジャンプする。しばらくすると、間合いに入ってくる。最後のジャンプだ。相手は干からびるまで吸い取られるんだぜ、先生。カラカラにね。テジーは相手を食べたりしない。体液を吸い尽くして、皮膚以外何も残らないようにするだけだ。先生、そのシャツをこの先も着続けるつもりなら、今すぐにでもあんたがそうなってほしいもんだ」

ヴェリンジャー先生は椅子の後ろにもたれた。平静にこう言う。「五千ドル要るんですよ。いつもらえますか？」

ウェイドは意地悪く言った。「六百五十ドル持ってたよな。小銭まで。この売春宿はいったい全体いくらかかるんだよ？」

ヴェリンジャー先生は言った。「そんなはした金ではね。値上げしたと言ったじゃないですか」

「ウィルソン山⁶⁷並の高さにまで上がったとは言わなかっただろう」

ヴェリンジャー先生はそっけなく言った。「ごまかさなくてくれ、ウェイド。ふざけてられる立場じゃないだろうに。それにあなたは私の信頼を裏切ったね」

「信頼なんかあったのかよ」

ヴェリンジャー先生は椅子の腕をゆっくりと叩いた。「真夜中に電話をかけてきましたよね。必死の状態でしたよ。私が行かなければ自殺すると言いましたよ。私はやりたくなかったし、その理由はあなたもご存じだ。この州では医師免許を持っていないんですからね。すべてを失う前にこの地所を処分したいんだ。アールの面倒を見なくてはならないし、あいつはいま悪い時期がやってくる頃合いなんですよ。ものすごくお金がかかると申しあげましたよ。それでも、どうしてもというから行ってあげたんです。五千ドルになります」

「おれは強い酒で見境がつかなくなっていたんだ。そんな取引を強要はできない状態だ。すでに大金を支払ってるだろうが」

ヴェリンジャー先生はゆっくり言った。「さらに、奥さんに私の名前を言いましたね。私があなただけを迎えにくると言った」

67 Mount Wilson. 既訳はすべてこれを「ウィルソン天文台」と訳しているが、天文台は関係ない。単に、すごく高いことの比喩なので、山そのものの話。ウィルソン山はこのあたりで、最高峰ではないそうだがとっても高い山として名高く、天文台のおかげで有名なので意識にのぼりやすい面はある。

ウェイドは驚いたようだった。「そんなことはしてないぞ。妻に会ってもいい。彼女は寝てんだ」

「じゃあほかのときにでも言ったんでしょう。私立探偵がここにきて、あなたのことを聞き回ってました。教えられたのでもない限り。ここを探そうなんて思いついたはずはない。ごまかしたが、戻ってくるかもしれない。家に帰って下さい、ウェイドさん。でもその前に約束の五千ドルを」

「先生、あんたずいぶん頭悪いねえ。妻がおれの居場所を知ってるなら、探偵なんていらなはずだろう。自分で来たはずだ—妻がそこまで気に掛けているとも思えないがね。ハウスボーイのキャンディを連れてきたかもしれない。キャンディなら、あんたのお稚児さん⁶⁸が今日はどの映画に主演しようか迷っている間に、あいつをズタズタに切り裂いちまえるぜ」

「ひどい言い様だな、ウェイド。考えることもひどいよ」

「それにひどい五千ドルも持ってるしな、先生。欲しけりゃ取ってみな」

ヴェリンジャー先生は頑として言い張った。「小切手は切ってもらいますよ。いま。すぐに。そして着替えて、アールに家まで送らせる」

ウェイドはほとんど笑いそうだった。「小切手だって? いいとも、小切手なら切ってやろう。でもどうやって現金化するつもり?」

ヴェリンジャー先生は静かに微笑んだ。「差し止めるつもりだね、ウェイドさん。でもそれはしない。絶対にできないはずだよ⁶⁹」

「この薄汚い悪党め!」ウェイドは怒鳴った。

ヴェリンジャー先生は首を振った。「そういう部分もありますよ、確かに。でもすべてじゃない。ほとんどの人はそうだが、私もいろいろあるんだ。アールが車で家まで送りますよ」

「ダメだ。あの野郎にはぞっとさせられる」

ヴェリンジャー先生はゆっくり立ち上がり、手を伸ばしたベッドの男の肩を叩いた。「私には、アールはまったく無害なんです。あいつを制御するすべをいろいろ心得てますから」

「一つでも挙げてみてよ」と新しい声が出て、アールがロイ・ロジャース装束で入ってきた。ヴェリンジャー先生はにっこりしてふり返った。

「あのキチガイを近づけないでくれ」とウェイドはどなったが、始めて恐怖の色を見せた。

アールは装飾つきベルトに両手を置いた。その顔はまったく無表情だ。歯の間から軽い口笛のような音が聞こえた。そしてゆっくり部屋に入ってきた。

68 Blue Boy. 頭文字が大文字なので、固有名詞、たぶんマザーグースの *Little Boy Blue* のことか、ときどき見かける青い服の少年の油絵のこと。油絵のほうだろうが、それを知らないといけないニュアンスはないし、注をつけるほどでもない小ネタ。村上は「お稚児さん」で、まあそういうニュアンスでしょう。田口は「ブルーボーイ」で、何のことかわからずちょっと不親切かも。清水は「ニューフェース」で、なんかちがう。

69 これ、差し止めすると何が都合悪いのかよくわからない。

「それは言っちゃいけない」とヴェリンジャー先生は急いで言うと、アールのほうに向き直った。
「よーし、アール。ウェイドさんは私が自分で対応する。着替えを手伝うから、おまえはここまで車を持ってきてくれ。できるだけキャビンに寄せてくれよ。ウェイドさんはかなり弱ってるから」

アールは、歯の間から絞り出すような声で言った。「そしていまからずっと弱っていただくか。どけよ、デブ」

「おいアール——」と手を伸ばしてハンサムな若者の腕をつかみ——「カムリーリョに戻るのはいやだろう、え？ 私が一言言えば——」

彼はそこまでしか言えなかった。アールは腕をふりほどき、その右手が金属のきらめきとともに上がってきた。その装甲つきのげんこつがヴェリンジャー先生のあごに激突した。先生は心臓を打たれたかのように倒れた。その衝撃でキャビンが揺れた。おれは駆け出した。

ドアのところにたどりつき、引っ張って開いた。アールは身を翻し、少し前傾して、こちらを睨んだが、だれだかはわからないようだ。唇の背後では泡を吹くような音がした。彼はすばやくこっちに突進した。

おれは銃をすばやく引き出し、それを見せた。無意味だった。そいつの銃は弾が入っていないか、それがあるのをすっかり忘れているかどっちかだ。メリケンサックだけで彼には十分だったのだ。突進し続けた。

おれはベッドの向こうの開いた窓めがけて銃を撃った。小さな部屋での銃声は、思いがけないほどの大音量となった。アールは凍り付いた。ゆっくりと頭がめぐり、窓の網戸の小さな穴を見つめた。またおれを見た。ゆっくりと顔に正規が戻って、彼はニヤリとした。

「なにごと？」と明るい声で尋ねた。

「メリケンサックを捨てろ」とおれはそいつの目を見ながら言った。

彼は驚いたように自分の手を見下ろした。その鈍器をするりと外し、部屋の隅に投げた。

「次にガンベルトだ。銃には触るなよ、バックルだけだ」

彼はニコニコして言った。「弾は入ってないよ。本物の銃ですらない。ただの舞台小道具なんだ」

「ベルトだ。早くしろ」

彼は銃身の短い32口径を見た。「それ本物？ 本物だよね。だって網戸が。うん、網戸」

ベッドの男は、もうベッドにはいなかった。アールの背後にまわっていた。すばやく手を伸ばし、きれいな銃の片方を抜き取った。アールはそれがお気に召さなかった。それが顔に出た。

「そいつに余計な手出しするな。元通りに戻せ」とおれは怒った声で言った。

ウェイドは言った。「こいつの言う通りだ。おもちゃの銃だ」そして後ずさりしてピカピカのピストルをテーブルに置いた。「やれやれ、折れた腕みたいに弱り切ってるよ、おれ」

「ベルトを外せ」とおれは改めて言った。三回目だ。アールみたいなやつを相手に何かを始めたら、やり通さないと。単純にして、途中で気を変えないことだ。

とうとう彼はそれに従い、それもあり友好的にやった。そして、ベルトを手にしたままテーブルのところにおいてもう片方の銃を取ると、ホルスターに入れて、すぐにベルトをまた締めた。おれはやらせておいた。やっとそのときになって、彼はヴェリンジャー先生が壁際の横に倒れているのに気がついた。彼は案じるような声をあげ、急いで部屋を横切り洗面所に入ると、ガラスの水差しを持ってきた。その中の水をヴェリンジャー先生の頭にぶちまけた。ヴェリンジャー先生は水を吹き出して横転した。そしてうめいた。そして片手をあごにあてた。そして立ち上がりかけた。アールがそれを手伝った。

「ごめんな、先生。だれだか見ないで手が動いちゃったみたいだ」

「かまわないよ、骨は折れてない」と言ってヴェリンジャーはアールを手で追いやった。「車をここまでつけてくれ。あと下の南京錠の鍵も忘れないで」

「車をつける、はい、今すぐ。南京錠の鍵。了解、すぐやるよ、先生」

そして口笛を吹きながら部屋を出て行った。

ウェイドはベッドの片隅にすわって、震え上がった様子だった。「あいつの言ってた探偵ってのはあんたのことかい？ どうやってここを見つけた？」

「この手のことを知ってる人に聞いて回っただけですよ。家に帰りたいなら、服を着たらどうです」

ヴェリンジャー先生は壁にもたれてあごをさすっていた。そしてダミ声で言った。「手伝おう。いつだって人の手伝いしかしてないのに、向こうはいつもこっちをぶちのめすばかり」

「その気持、よくわかるよ」とおれ。

そこを出て、二人に作業を任せた。

[20]

二人が出てきたとき、車は近くにあったがアールはいなかった。車を停めてヘッドライトを消し、おれに何も言わずに母屋のほうに歩いて戻ったのだ。まだ口笛を吹いていて、うろ覚えの曲をなんとか思い出そうと苦闘していた。

ウェイドは慎重に後部座席に乗り込み、おれはその隣にすわった。ヴェリンジャー先生が運転したあごがひどく痛み、頭痛もしたはずだが、そんな気配は見せず口にも出さなかった。尾根を越えると砂利道の端まで下りていった。アールはすでにそこに来ていて、鍵を外して門を開いていた。おれはヴェリンジャーに自分の車の場所を告げ、近くに停めてもらった。ウェイドがそれに乗り込み、だまってすわったが目は何も見ていない。ヴェリンジャーが自分の車から出て、ウェイドの向こう側にまわりこみ、その隣に立った。そしてウェイドに静かに語りかけた。

「私の五千ドルはどうなる、ウェイドさん。約束の小切手だ」

ウェイドはシートで身体をずらし、シートの奥に頭を休めた。「考えとくよ」

「約束しただろう。必要なんだ」

「脅迫、というやつだよ、ヴェリンジャー。危害を加えるという脅し。いまは保護が得られてる」

ヴェリンジャーは退かなかった。「喰わせたし、身体を洗ってやっただろう。夜にそっちに行ってやったじゃないか。保護して、治療してやった—少なくとも一時的には」

ウェイドはせせら笑った。「五千ドルの価値はないね。おれのポケットからたっぷり持っていっただろう」

ヴェリンジャーは諦めなかった。「キューバにコネの約束があるんだよ⁷⁰、ウェイドさん。あなたはお金持ちだ。困っている人は助けるべきだ。私はアールの面倒を見なくてはならない。この機会を利用するためにそのお金がいるんだ。全額耳を揃えて返す」

おれは居心地が悪くなってきた。タバコが吸いたかったが、ウェイドの気分が悪くなるのではと懸念した。

ウェイドがうんざりしたように言った。「あんたが返すわけないだろうに。そこまで長生きできるもんか。いずれこのお稚児さんに、寝てる間に殺されるよ」

70 I have a promise of a connection in Cuba これだけなのでまったく意味はわからない。その通りに訳しておくのが最も無難。田口は「キューバの医療関係者にコネがある」としているが、そう解釈すべき理由はない。何か儲け話でもあるのかもしれない。医療関係でないとも言えないし、まあ大きな問題ではない。ちなみに、まだ当時のキューバは革命前なのでカストロやゲバラの顔を思い浮かべてはいけない。

ヴェリンジャーは後ずさった。表情は見えなかったが声がこわばった。「もっと不快な死に方だつてある。あなたもそういう死を迎えるだろうよ」

彼は自分の車に歩いて戻ると乗りこんだ。自分の門をくぐり、姿を消した。おれはバックして方向転換すると町に向かった。二キロほどいったところでウェイドがつぶやいた。「なんであんなろくでなしのデブに、おれが五千ドルやらなきやいけないんだ」

「何の理由もない」

「じゃあ、なぜやらなかった自分がろくでなしに思えるんだろう」

「何の理由もない」

彼はギリギリおれが見える程度に頭をめぐらせた。「おれを赤ん坊みたいに扱ったんだ。アールがきておれをぶちのめすんじゃないかと怖れて、ほとんど一人にしてくれなかった。ポケットの金を一文残らず取っていったんだ」

「たぶんあなた自身がそうしろと言ったんだろう」

「あいつの肩を持つのか？」

「くだらん。おれにはただの仕事ですよ」

また数キロの沈黙。ロス周辺の郊外のふちをかすめた。ウェイドがまた口を開いた。

「やったほうがいいかもな。あいつは破産してる。あの地所は差し押さえられてるんだ。あいつの手元には一銭も残らない。全部あのキチガイのせいだ。なんでそんなことをするのかね？」

「さあねえ」

「おれは作家なんだ。人々の動かすものを理解しているはずなんだ。なのにだれについても、何一つわかりやしない」

峠を越えて、斜面を登ると、谷間の明かりが目の前に果てしなく広がった。ヴェンチャーラに向かう北西への高速へと降下した。しばらくするとエンシーノを抜けた。信号で止まり、でっかい邸宅の並ぶ丘の高いところの明かりを見上げた。そのどれかにレノックス家が住んでいる。進み続けた。

「高速の出口がかなり近い。それとも、もう知ってるのか？」

「知ってる」

「ちなみに、名前を聞いてなかった」

「フィリップ・マーロウ」

「いい名前だ」声が急に鋭くなった。「ちょっと待った、あのレノックスと何やらあったヤツか？」

「そう」

彼は暗い車の中でおれを見つめていた。エンシーノの大通りの最後の建物を通り過ぎた。

「彼女は知ってたんだ。少しね。夫のほうは見たことがない。奇妙な事件だったな、あれは。警察の連中になんか絞られたんだろ？」

答えなかった。

「話したくないのか」

「そうかも。なぜそんなことに興味を？」

「だって作家だもん。すごい話だろうね」

「今日は休んでくださいよ。たぶんかなり弱ってるはずだし」

「わかったよ、マーロウ、わかった。おれが嫌いなんだ。わかるよ」

出口にやってきて、ターンして車をそっちに向かわせ、低い丘を目指した。その間にあるすき間がアイドル・ヴァレーだ。

「好きでも嫌いでもありませんよ。あなたを知りませんから。奥さんに、あなたを見つけて連れ戻せと頼まれました。家まで送り届けたら、おしまいです。なぜおれが選ばれたかは、おれにはわからない。さっきも言ったように、ただの仕事ですよ」

丘のふもとで曲がり、もっと広くて舗装のしっかりした道に出た。家はあと 1.5 キロほど先の右手だという。地番を教えてくれたが、もう知っていた。ボロボロのはずなのに、えらくよくしゃべる男だった。

「妻はあんたにいくら払ってるんだ？」

「その話はしてません」

「いくら出しても足りないくらいだ。大いに感謝しないと。見事な仕事ぶりだぜ、兄ちゃん。おれのためにここまでしてもらって、もったいないほどだ」

「そう思うのは今夜だけです」

彼は笑った。「おいマーロウ、なんかあんたのことが気に入りそうだよ。ちょっとクズ野郎なところがある—私と同じで」

家にたどりついた。二階建ての、前面こけら仕上げの家で、小さな支柱つきポーチと、入り口から白い柵の内側にある幅の広い茂みまで長い芝生が広がっている。ポーチには明かりがついていた。おれは進入路に入り、ガレージ近くに車を停めた。

「自力で家まで行けますか？」

「もちろん」と彼は車からおりた。「中にきて何か飲んだりはしないのか？」

「今夜はやめときます、どうも。あなたが家に入るまでここで待ちます」

彼は荒い息をついてそこに立っていた。「わかった」と短く言った。

彼は向きを変えて、平石敷きの小径を玄関まで慎重に歩いて言った。しばらく白い柱に捕まって立ってから、ドアを開けようとした。それが開いて、彼は中に入った。ドアは開いたままで、明かりが緑の芝生にあふれた。いきなりたくさん声が響き渡った。おれはバックライトに従って進入路で車をバックさせた。だれかがおれを呼んだ。

見るとアイリーン・ウェイドが開いた戸口に立っていた。そのまま走り続けると、彼女が駆けだした。車を停めるしかなかった。ヘッドライトを切り、車から出た。彼女が追いつくと、おれは言った。

「電話すべきでしたが、旦那さんを一人に残すのはこわかったもので」

「もちろん。いろいろ面倒があったんでしょう？⁷¹」

「まあ—呼び鈴を鳴らすよりはちょっと手間がかかりましたよ」

「中に入って全部話して下さい」

「旦那さんはベッドに入るべきだ。明日になればピンピンしてるでしょう」

「キャンディが寝かしつけます。今夜は飲まないでしょう、それを案じてらっしゃるなら」

「思いもよりませんでした。おやすみなさい、ウェイドさん」

「お疲れでしょう。あなただって一杯いらないんですか？⁷²」

おれはタバコを点けた。数週間ぶりに味わうタバコのように思えた。その煙を飲み込んだ。

「一服だけさせてもらえますか？」

彼女が近づいてきたので、タバコを渡した。吸い込んでむせた。そして笑いながら返してくれた。

「タバコはまったく素人なんです、ご覧の通り」

「で、シルヴィア・レノックスをご存じだったんですね。だからおれを雇おうとしたんですか？」

「だれをご存じですって？」彼女はいぶかるような声を出した。

「シルヴィア・レノックスです」私はタバコを受け取っていた。それをすごい勢いで吸っていた。

彼女はたじろいだ。「ああ。あの—殺された女性。いいえ、個人的には存知ませんでした。だれかは知っていました。その話、しませんでしたっけ？」

「すみませんね、いもうかがった話もすっかり忘れちゃいましたよ」

彼女はまだそこに静かに、おれの近くに立っていた。ほっそりして背が高く、何やら白いドレスだ開いたドアからの明かりが縁に触れて、髪がやわらかく輝いていた。

71 田口訳は、ここからアイリーンとマーロウが完全にため口で異様。マーロウは一応お客のアイリーンを「きみ」呼ばわり。アイリーンも、慎みも何もまったくない口ぶり。

72 Don't you want a drink yourself? そういうあなたも一杯ほしくないのか、ということ。清水俊二は正確に訳せている。村上は「あなただけでも一杯お飲みになっていけば」で、日本語で言うならそういう表現もありだが「あなただけ」はちょっと意味がずれている。が、田口はそれをさらに歪めて「あなただけ一杯やるというのはいかが」で、もとの意味から完全にずれてしまっている。「by yourself」ならいざ知らず、この yourself でそういう訳にはならないでしょう。なぜこんな、村上訳をもとにそれをさらにまちがったほうに歪めるような翻訳になっているんだ？

「なぜそれで、あなたの表現では、わたしがあなたを雇いたくなるのと何か関係があるのかなんてお尋ねになるんですか？」おれがすぐに答えないと、彼女は付け加えた。「ロジャーが彼女を知っていたと話したんですか？」

「名前を言ったら、あの事件について旦那さんがおっしゃったんですよ。すぐにおれが関係者とは気づかなかったようですが、しばらくして気づきました。いろいろやたらにしゃべる人で、何を言われたか半分も覚えてませんよ」

「そうですか。家に戻りますね、マーロウさん。夫の様子を見てこないと。そしてもし中にいらっしやらないなら—」

「これを残していきましょう」

そう言っておれは、彼女をつかまえて自分のほうに引き寄せ、頭を上に向けさせた。唇に強くキスした。彼女は抵抗せず、キスに応えもしなかった。静かに身を引き離し、立っておれを見据えた。

「あんなこと、いけません。まちがってるわ。あなたはもっといい人でしょう、そんなことをする人じゃない⁷³」

おれは同意した。「その通り。まったくいけないことです。でも一日ずっと、実にすてきで忠実で羨ましいいい猟犬としてふるまってきたし、だれかの魅力で⁷⁴これまで取り組んだ中でも最も馬鹿げた茶番につきあわされてきましたからねえ、そしてその結果が、だれかの書いた台本かなんか通りでないなら、そのほうが驚きだ⁷⁵。それを言うならですねえ、あなた最初っから、旦那さんがどこにいるかずっとわかってたんじゃありませんか—少なくともヴェリンジャー先生の名前くらいは知ってたでしょう。あなた、おれが旦那さんのことに首を突っ込んで、ややこしいことにならせて、旦那さんの面倒を見なきゃいけないような気分にしたただけなんだ。そう思うのは、おれがどうかしてますか？」

73 You're too nice a person. Nice とか good は意味がいろいろありすぎて非常に訳が面倒。しかもこれは "to do such a thing" といったものが省略されている。そのため山形は、その省略部分を補って別の文で付け足したが、そのおかげでその後「nice person」が繰り返されるのをすべて「いい人」で処理できている。さらに nice person は、しばしば、日本語でいう「いい人、それはどうでもいい人」の、哀れな都合のいいやつ、という意味にもなる。だから「いい人」にしとくほうが、その後の「むしろワルになりたい」「テリーにいい人ぶる」のニュアンスがわかりやすいと思う。

既訳を見ると、村上は「心やさしい人」だが心優しいのとキスしないのとはイマイチ関係ないし、また最後のテリー・レノックスとの関係のところは「ナイスガイ」となってしまう、なぜ心やさしい人と言われたくないのか不明になってる。田口訳は「むしろまともすぎる人のはずよ」だが、その後のいい人↔悪役の対比が、まともな人↔悪役で理解しづらく、テリー・レノックスに対してまともな人だったら、というのも意味がよくわからない。清水は「いい人間」で山形と似たやり方。

74 Charmed. 魔法をかけられて、バカされて、という意味がメインだが、マーロウはかなりアイリーンに心惹かれて動いているので、その魅力で、という意味も匂わされている。そっちを表に出してもいいと思う。既訳では、田口だけが少しこの単語の意味を入れようと「魅入られたように引き込まれた」としている。

75 Damned if it wasn't XXX. XXX でなければ呪われよ、つまり XXX でないほうがビックリとの意味。田口だけが正しく訳せている。村上、清水は「...だったのでばかげたこと/でたらめをしたくなる」つまりキスをしたくなる、という訳にしているが、かなり原文を歪めた説明追加ではある。

彼女は冷ややかに言った。「もちろんどうかしてるわ。これまで聞かされた中で最も突拍子もないナンセンスよ」と戻り始めた。

「ちょっと待った。あのキスは後腐れはないから⁷⁶。あなたがあると思ってるだけだ。そしておれが正しい人だなんて言わないでください。悪役になるほうがマシだ」

彼女はふり返った。「どうして？」

「おれがテリー・レノックスにいい人ぶってなければ、まだあいつは生きていたかもしれないんだ」

彼女は静かにいった。「あらそう？ ずいぶん思いこみが激しいようね⁷⁷。おやすみなさい、マーロウさん。それと、ほとんどすべてについて本当にありがとうございました」

彼女は草の端に沿って戻っていった。彼女が家に入るまで見送った。ドアがしまった。ポーチの明かりが消えた。おれは何に振るわけでもなく手を振って車を出した。

76 That kiss won't leave a scar. You just think it will. そんな深い意味のキスじゃないよ、そう深刻に考えなくてくれ、くらいの軽い意味。既訳はすべて、傷が残るとか痕が残るといったほぼ直訳。それが無難だとは思うが、ちょっとわかりにくいかも。「傷」という言葉が重くて意味深に思えてしまうんだよね。前半だけなら「あなたを傷つけるつもりはなかった」とかやるとキザでいいかもしれないが、やっぱり重たくなってニュアンスが変わってくるなあ(それとその次が「あんたが勝手に傷ついただけ」になるから台無しだし)。

77 How can you be so sure? 意味深な発言。もちろん反語。おまえがいい人だろうとテリーの死には関係ないから思い上がるな、というニュアンスにも読めるし、後から考えればテリーの死そのものについての発言にも読める(つまり彼女はテリーが生きているのを知ってるんじゃないか)。既訳はだいたいほぼそのままの訳。山形は反語のニュアンスを強く出してみた。もっと思わせぶりにできるといいが、短いので限界はあります。

[21]

翌朝は、前の夜に稼いだ大きな見返りのおかげで寝坊した⁷⁸。コーヒーをいつもより余計に一杯飲んで、追加でタバコを一本吸い、カナディアンバーコンも一枚余計に食べ、そして絶対に電気カミソリは使わないと三百回目の誓いをたてた。これで普通の日になった。事務所には十時頃につき、いろいろたまった郵便を拾い上げ、封筒を開けて中身を机に転がしておいた。窓を大きく開けて、夜の間にたまって淀んだ空気の中や、部屋の隅や、ブラインドの板に漂うホコリとむさ苦しさを追い出した死んだ蛾が机の片隅に仰向けに転がっていた。窓枠には羽の破れたハチが材木の上を這いずり、疲れた投げやりな感じでぶんぶん言って、まるでその羽がもう使い物にならず、自分はもうおしまい、あまりに多くの任務で飛んだしもう巣には二度と戻れないと知っているかのようなようだった。

ありがちなイカレた一日になるのが感じられた。だれにでもある。やってくるのが、頭のねじがゆるんだ連中、ガムといっしょに脳みそまで吐き捨てたらしきイカレぼんち、木の実の隠し場所を思い出せないリスども、なぜかいつもギヤが一つ余ってしまうメカニックばかりの一日だ。

皮切りはクイッセネンとかなんとか、その手のフィンランドちっくな名前をした、でっかいブロンドの粗野な男だった。そのでっかいケツを顧客用の椅子に押し込んで、節くれ立った幅広い手を二つ机に置いて、自分はパワーシャベルの運転手だと言い、カルヴァーシティに住んでいて、隣に住むクソ女が自分の犬を毒殺しようとしているのだとのこと。毎朝、犬を裏庭に出して運動させる前に、隣からジャガイモ畑越しに投げ込まれたミートボールがないか、柵の端から端まで探さないといけないそうだ。いまのところ9個見つけていて、それが緑の粉まみれで、絶対にヒ素入りの除草剤なのだという。

「張り込みしてあいつを現行犯で捕まえるにはいくらだ？」そいつはおれを、水槽の魚みたいにまばたきもせずに見つめた。

「ご自分でやられては？」

「旦那、おれは仕事があるんだよ。ここに問い合わせにくるだけでも一時間4ドル25セントの損失だ」

「警察に行かれては？」

「やったよ。来年くらいには手がまわるかも、だよ。いまは、MGMにへつらうので忙しいとさ」

78 Big feeとはもちろん、アイリーン・ウェイドにキスしたこと。清水、村上は直訳しただけなので正しい意味が読み取れるようになっているが、田口だけは「多額の報酬が手に入ることになり」とピントはずれ。マーロウはこれまでロジャー・ウェイド探しでまともに金をとろうとしておらず、報酬の話もしていないし、前渡し金も断っている。突然「うえーい、大儲け」とはならないでしょう。実際、この先も金は受け取らないし、この章の末で、もう報酬はもらった＝あのキスが報酬だったと述べている。

「動物愛護協会は？ 犬猫友愛協会は？」

「なんだそりゃ」

犬猫友愛協会のことを話してやった。まるで興味ないらしい。動物愛護協会は知っていた。動物愛護協会なんかクソ食らえ、馬より小さいものなんか興味ない連中だ、とのこと。

彼は凶暴な顔つきで言った。「ドアの表札には調査やるって書いてあるだろう。だったらさっさと調査してこいよ。捕まえたら 50 ドルだ」

「すみませんねえ、いまは仕事が詰まってるもんで。それにおたくの裏庭で何週間もモグラの穴にこもってるなんて、そもそもおれのやる仕事じゃないんですよ—50 ドルもらえても」

彼はこっちをにらみつけて立ち上がった。「なんだ偉そうに。お金なんかいりませんってか？ ちっちゃんワンちゃんの命を助ける手間もかけられないのかよ。ふざけんなこの野郎」

「こっちもいろいろ大変でしてねえ、クイツセネンさん」

「おれがつかまえたら、あのばばあの首をへし折ってやる」と彼は言い、おれも彼にそれが十分できたのはまちがいないと思った。ゾウの後ろ足でもむしり取れただろう。「だからこそ、ほかのだれかに頼みたいんだ。家の前を車が通ってうちのチビが吠えるからって。あの意地悪ばあめが」

彼はドアに向かった。その背中に尋ねてやった。「お隣さんが毒殺しようとしてるのは、ホントにおたくの犬のほうなんですかねえ？」

「そうだと。絶対に」そして半ばまで部屋を横切ったところで、意味がわかった。するとすばやくこちらに向き直った。「もう一度言ってみろ、この野郎」

おれは首を振るだけ。こいつとケンカはしたくない。おれの机を持ち上げてこっちの頭を殴りかねない相手だ。彼はすごい鼻息をたてて出ていき、ドアを引きちぎって持っていくような勢いだった。

お次に出て参りましたお菓子は女で、歳寄りでもなく、若くもなく、清潔でもなく、薄汚くもなく明らかに貧乏で、貧相で、きむずかしく、バカだった。相部屋の女の子—彼女の見方では外で働く女はすべて女の子だ—が、自分の財布から金を抜いているのだという。一ドル、50 セントとかいう金だが、塵も積もればなんとやら。計算では 20 ドル近くになるそう。彼女には見過ごせない額だ。だが引越す金もない。探偵を雇う金もない。その相部屋の女におれが電話して、名前とかは一切出したりとかせず、怖がらせたりとかしてくれたりとかしてちょうだいよ、とのこと。

それだけのことを言うのに、二十分かかった。その話の間ずっとしつこくハンドバッグをこねくりまわしていた。

「お知り合いならだれでもできることでしょうに」

「そうだけど、あんた探偵とかそういうんでしょ」

「まったく見知らぬ人を脅かす免許は持ってないんですよ」

「あんたに会いに来たってあの女に言ってやるんだ。あの女がやったとか言わなくていい。あんたが調査してるって」

「やめといたほうがいいなあ。おれの名前を出したら、電話してくるかもしれない。そうなったらこっちは本当のことを言いますよ」

彼女は立ち上がり、そのシケたハンドバッグを腹に叩きつけた。「あんたのどこが紳士よ」と甲高い声で言う。

「紳士だなんてどこに書いてありました？」

彼女はブツブツ言いながら出ていった。

昼飯後にきたのはシンプソン・W・エーデルワイスさんだった。それを証明する名刺もあった。ミシン販売店の管理職だ。小柄で疲れたような男で、年の頃 48 から 50、小さな手足、着ている茶色のスーツは袖が長すぎ、硬い白いカラーのシャツに、黒いダイヤ柄のついた紫のネクタイを締めているもじもじすることもなく椅子の端にすわり、悲しい黒い目でこっちを見た。髪も黒くて薄くもなおらず、見る限り白髪も混じっていない。赤みがかった口ひげをきれいに切りそろえている。手の甲を見なければ、35 歳と言っても通用しただろう。

「シンプと呼んでください、人呼んでまぬけのシンプ⁷⁹。身から出た錆だ。ユダヤ人でキリスト教女と結婚したんです。24 歳の美人。前にも何度か逃げてるんです」

彼女の写真を取り出して見せてくれた。この人から見れば美人なのかもしれない。おれにはでっかいだらしない感じの、口元の弱い牛みたいな女に見えた。

「それでどうなさいましたか、エーデルワイスさん？ うちの離婚話は扱わないんですよ」といって写真を返そうとした。だが彼は手を振ってそれを押し戻した。「おれはお客さんにそんな失礼な呼び方はしませんよ⁸⁰。相手が山ほど嘘八百を並べはじめたら別ですがね」

彼はにっこりした。「ウソなんかついてもしかたない。離婚話じゃないんです。ただメイベルに戻ってきて欲しいだけです。でもこっちが見つかるまで戻ってこないんですよ。あいつにとってはゲームみたいなものなんですかね」

79 Call me Simp. シンプソンを略したシンプと、まぬけの意味の俗語シンプをかけている。こういうかけことばのダジャレは翻訳で悩むところ。無理にこじつけて日本語のダジャレを作ると苦しく不自然になりがち。注はぎこちないのでホントは避けたいけど、重要なら入れるしかない。ここはまず、悲しい自虐ネタでこの人の性格が表現されてると、その次のせりふで、マーロウがその裏の意味に気がつかないふりをしてあげる優しさを示すポイントなので、うーんどうしようか。清水と村上は完全に無視、田口は注を入れている。あるいは山形がやってみたように、ちょっと裏の意味を説明的に加えるやり方もある。これはもう趣味次第。

80 The client is always mister to me. もちろん前の自虐ネタを受けて、客はちゃんとミスターをつける、尊重して敬称をつけますよ、という意味だが、その敬称をどうしようかが悩むところ。清水訳「ぼくはお客を呼び捨てにしない」、村上訳「依頼人の名前には常にミスタをつけます」、田口訳「常に依頼人には敬意を払います」。村上は他の部分でもミスターはすべて「ミスタ」で訳しているのでこの処理ができるがちょっと不自然。清水や田口の対応が無難。

そして妻について、辛抱強く、恨みがましいところもなく説明してくれた。酒飲みで、浮気性で、自分から見れば決していい妻ではないが、そう思ってしまうのは自分の育ちが厳しすぎるせいかもしれないという。なんでも彼女は実に広い心の持ち主で、自分は彼女を愛しているとのこと。自分が夢の男なんかじゃないのは十分承知していて、単に真面目に働いて給料を家に入れるだけの存在だという。共同銀行口座を持っていた。それがすっかり引き出されていたが、それは覚悟していた。だれとトンズラしたかは見当がついていて、それが正しければその男は彼女の有り金すべてむしり取って放り出すという。

「ケリガンってやつです。モンロー・ケリガン。別にカソリックをけなすつもりはないんです。ユダヤ人だって悪党はいくらでもいる。このケリガンは、働いているときには床屋です。床屋をけなすつもりもないんです。でもその多くは流れ者で競馬好きだ。あまり安定した連中じゃない」

「有り金持って行かれたら連絡がくるのでは？」

「ものすごく恥じ入るたちなんです。自殺だってやりかねない」

「失踪者の搜索願でいいんじゃないですか、エーデルワイスさん？ 警察署に行って届けを出しなさいよ」

「いいえ、警察をけなすつもりはないんですが、そのやり方はいやです。メイベルが恥をかく」

この世はエーデルワイスさんがけなしたくない人々だらけらしい。彼は金を机に置いた。

「二百ドル。頭金。自分なりのやり方でやりたい」

「また繰り返すだけですよ」

「もちろん」と彼は肩をすくめて両手を優しく広げた。「でも向こうは 24 でこっちは 50 近い。そりゃ無理もないでしょう。しばらくすればあいつも落ち着きますよ。困ったことに、子なしでして。子どもができないんです、あいつは。ユダヤ人は家族を持ちたがる。メイベルはそれを知っている。それで恥じ入ってるんです」

「寛容な方ですね、エーデルワイスさん」

「まあ、私はキリスト教徒じゃないですけどね。いやキリスト教徒をけなすつもりはないんですよ、いいですか。でも私にとってそれは本物なんです。口先だけじゃない。やるんです。ああそうそう、いちばん大事なところを忘れかけてました」

彼は絵はがきの写真を取りだして、金の中から机越しに押しやった。「ホノルルから妻が送ってきました。ホノルルでは金がすぐ消えます。叔父の一人があすこで宝石ビジネスやってたもんで。いまは引退してます。シアトル暮らしで」

おれはまた写真を手に取った。「これは外注しないと。それとこいつも複製しないと」

「まさにそうおっしゃると思ってましたよ、マーロウさん。ここに来る前にね。だから準備万端」と彼は封筒を取り出した。そこにはその写真の焼き増しが追加で五枚入っていた。「ケリガンもありますが、スナップ写真だけです」と別のポケットに手を入れて、別の封筒をよこした。ケリガンを見た爽やかで不正直そうな顔つき、意外なところは何もない。ケリガンの焼き増し三枚。

シンプソン・W・エーデルワイスさんは、名前、住所、電話番号付きの別の名刺をくれた。あまり高くつかないでほしいが、もっと資金が必要ならすぐに対応するので、連絡をくれという。

「まだ奥さんがホノルルにいるなら、200ドルでほぼまちがいなく足りるでしょう。必要なのは、二人の身体的な特徴の詳細な説明です。電報を打つのでね。身長、体重、年齢、肌の色、目に見える傷など特徴的な印、どんな服を着ていて持って行ったのか、全額引き出したという口座にはいくら入っていたのか。以前にもやったそうですから、必要なものはわかりますよね、エーデルワイスさん」

「このケリガンというやつは、なんか気にかかるんですよ。不穏な感じで」

さらに30分ほど彼をしぼりあげていろいろ書き留めた。そして彼は静かに立ち上がり、静かに握手して、静かに事務所を後にした。

「メイベルには、何も心配するなと伝えてください」と去り際に彼は言った。

やってみるとお定まりの仕事だった。ホノルルの探偵事務所に電報を打ち、さらに写真と電報に含めなかった各種の情報を書いた航空便を後送した。すると豪華ホテルで掃除係のヘルパーとして働いているのが見つかった。浴槽や便所の床なんかを掃除する仕事だ。ケリガンはエーデルワイスさんの思った通り、寝ている間に彼女の身ぐるみ剥いでトズラし、ホテルの請求書も残していった。手荒い真似なしにはケリガンが持ち出せなかった指輪を質に入れ、ホテル代を精算するだけの金は得たが帰りの旅費には足りなかった。そこでエーデルワイスは飛行機に飛び乗って後を追った。

あんな女にはもったいない男だった。おれは二十ドルと長距離電報費用の請求書を送った。二百ドルはホノルルの探偵事務所が持っていった。事務所の金庫にマディソンの肖像を持っている身としては、割に合わない仕事でもかまわない。

そんな具合に私立探偵の一日が過ぎた。典型的な一日とはいいがたいが、まったく例のない一日ってわけでもない。なんでこんな稼業にしがみつくなのはだれもわからない。儲かるわけでもない、大して面白くもないことがほとんどだ。ときには殴られたり撃たれたり牢屋に放り込まれたり。下手をすると死ぬ事だってある。一月おきくらいに、もうやめちまおう、まだ頭をぐらぐらさせずに歩けるうちに、まともな仕事に就こうと決める。そのときドアのブザーがなり、待合室に続く仕切りのドアを開けると、新しい問題を抱えた新顔が立っていて、新しい悲しみを山ほどと、ちょっとばかりの金を抱えているんだ。

「お入りください、何ちゃらさん⁸¹。どういったご相談でしょうか？」

まったくどういう理^{わけ}由なのやら。

三日後の午後早い時間にアイリーン・ウェイドから電話があつて、次の晩にうちに来て一杯やってくれとのこと。友人たちを招いてカクテルパーティーなのだそう。ロジャーがお目にかかってきちんとお礼を言いたがっております。それと、請求書を送って下さる？

「請求するものなんかありませんよ、ウェイドさん。残っていた請求分はもう支払ってもらいましたし」

「あんなことでお高くとまった態度をとって、バカみたいだったでしょう。キスなんて近頃は大した意味もないようですものね。来ていただけますよね？」

「そうしましょうかね。やめとくべきだという気もするんですがね」

「ロジャーはすっかりよくなりました。仕事をしてますよ」

「結構」

「今日はずいぶんとしかつめらしいんですね。人生にひどく真剣に取り組んでらっしゃるのかしら」

「ときどきは。どうしてです？」

彼女はとても密やかに笑い、さようならと言って電話を切った。おれはそこにしばらくすわったまま、人生に真剣に取り組んだ。それから何か笑えることを考えて、大笑いしてみようとした。どっちも成功しなかったのも、テリー・レノックスのお別れの手紙を金庫から取りだして読み返した。それで、自分のために飲んでくれとあいつが言っていたギムレットを飲みに、ヴィクターズに出かけていないのを思い出した。酒場にいつて静かに過ごすにはちょうどいい時間だった。もしここにいていっしょに行けたなら、あいつもそんな感じがよかったはずだ。あいつのことを、漠然とした悲しさと、さらに顔をしかめるような苦々しさをもって回想した。ヴィクターズまでやってきたときには、ほとんどそのまま通り過ぎようかと思ったほどだ。ほとんど、で思いとどまったが。あいつの金を受け取りすぎていた。おれをコケにはしてくれたが、その特権のために十分な支払いをしていたのだ。

81 Mr. Thingummy. 既訳はすべて「シンガミーさん」と訳しているが、Thingummy は英語で特にはっきりしない、思い出せないようなものを指すもので、本当の名前じゃない。だから「なんとかさん」「だれそれさん」になる。

[22]

ヴィクターズはえらく静かで、ドアから入ったときに温度が下がる音が聞こえそうなほどだった。バースツールには、黒い注文仕立てのドレスを着た女がすわっていた。一年のこの時期にその服ということは、オーロンのような合成繊維以外ではありえない⁸²。それが一人きりで、淡い緑っぽい色のドリンクを前に、長い翡翠のホルダーに入れたタバコを吸っていた。ありがちな繊細で引きつったような顔つき、ときに神経質、ときにセックスに飢えているようで、ときには単に無理なダイエットの結果のようなあの顔つきをしていた。

二つ離れたスツールにすわると⁸³、バーテンが会釈したが笑いかけはこなかった。

「ギムレット・ビターなしで」

彼は小さなナプキンをおれの前に置き、ずっとおれを見続けた。そして嬉しそうな声で言った「実はですね⁸⁴、こないだの晩にあなたとお友だちがしゃべっているのを聞いて、ローズ・ライムジュースを仕入れたんですよ。そしたらもうお見えにならず、今夜初めてそれを開けたところだったんです」

「友人はもうこの町にはいないんだ。よかったらダブルでもらおう。それと手間をかけてくれてありがとうな」

彼は向こうにいった。黒服の女がおれをチラリと見て、自分のグラスを見下ろした。「このあたりだと飲む人はほとんどいないわね」と実に静かに言ったので、最初はおれに話しかけているのだとは気がつかなかった。すると彼女はまたおれのほうを見た。とても大きな黒い目だ。見たこともないほど真っ赤な爪。だがナンパされたがっている様子でもなく、その声に誘うようなところもなかった。

「ギムレットのことですけど」

「ある男に味を教わったんですよ」

「イギリス人でしょう」

82 豆知識：現代は化繊の服という安っぽい印象があるが、当時はナイロンが出たばかりだし、最新、ハイテク、ファッショナブルというニュアンス。つまりこれはハイソな感じを表現したもの。

ただ翻訳でそのニュアンスを出そうとして「高級な」とか「ファッショナブルな」と補うと現代の印象と衝突して齟齬が出てしまうし、そこまで重要ではないので(彼女のハイソぶりはその後宝石その他で十分はつきりするし)放置しかないねー。あまり化繊を意識させないように何もつけず流したほうがよさそう。

83 超細かい話だが、two stools away. 清水は「彼女から二つ目」、村上是「二つ離れた」。ところが田口は「二つあけてすわった」。二つ目だから、一つあけてすわったのだ。田口はまちがい。

84 You know something. 話の皮切りに使うただの常套句。「実は」とか「あのね」くらいの感じ。田口だけ「一つ教えましょうか」と何やら上から目線に直訳してしまっている。さらにこの後も、「今夜初めて開けた」というだけの原文を「たまたま今夜そのライムジュースの封を開けたらあなたがやってきた」と、蛇足めいた説明を付け加えて、台詞の雰囲気を変えてしまっている。

「どうして？」

「ライムジュース。これほどイギリス的なものもないもので、あの煮魚に、シェフの血でも混じってるのかと思うくらい最悪のアンチョビーソースかけたやつに負けないくらい。だからライミーって言われるのよ。イギリス人がってことね—魚じゃなくて」

「むしろ熱帯のドリンク、暑い気候のドリンクだと思ってましたよ。マレーとかそのあたりの」

「そうかもしれないわね」彼女はまた向こうを向いた。

バーテンがおれの前にドリンクを置いた。ライムジュース入りだと、なんだか淡い緑っぽい黄色っぽい霧がかかった色合いだ。飲んでみた。甘くも刺すような感じ。黒服の女がおれを見て、自分のグラスをこちらに掲げてみせた。二人とも飲んだ。そのとき、彼女のドリンクも同じものだと気がついた。

次の動きはあまりに型通りだから、やらなかった。自分のところにすわったままだ。しばらくしておれは言った。「イギリス人じゃなかった。たぶん戦時中はそこにいたんでしょう。ときどきここにいつしよに来たんですよ、いまみたいな早い時間に。混んで騒々しくなる前に」

「気持ちのいい時間ですよ。酒場ではほぼ唯一の気持ちのいい時間」と彼女はグラスを空けた。「あなたのお友だち、知り合いだったかもしれない。その人のお名前は？」

すぐには答えなかった。タバコに火をつけて、彼女が自分の吸い殻を翡翠のホルダーからはたき落とし、別のタバコを差し込むのを見守った。そしてライターを差し出した。「レノックスです」

彼女はライターの札を言って、ちょっと探るような視線をこちらに向けた。そしてうなずいた。

「ええ、知っていました。知りすぎるくらいに」

バーテンがスッとやってきてグラスに目をやった。「おかわり二杯。ブースへ」

スツールを下りて、立ったまま待った。はねつけられるかどうかはわからない。どっちでもよかった。このセックスばかり頭にある国でも、たまに男女が出会ってベッドルームを持ち込まずに話ができることはある。これはそういう機会かもしれないし、あるいはただのナンパと思われるかもしれない。その場合は、クソ食らえだ。

彼女はためらったが、長くは続かなかった。黒い手袋と金フレームに金の留め金をつけた黒いスエードのハンドバッグを持つと、店を横切って角のブースに行き、無言で腰を下ろした。これも小さなテーブル越しにすわった。

「マーロウと言います」

彼女は穏やかに言った。「リンダ・ロリングです。ちょっと感傷的なんですね、マーロウさん」

「ここにギムレットを飲みに来たから？ あなたこそどうなんです？」

「単に好きなだけかもしれないでしょ」

「こちらこそそうかもしれない。が、それだと偶然にしてもできすぎかな」

彼女はうっすらと笑みを投げかけた。エメラルドのイヤリングにエメラルドの襟ピン。カットを見ると本物らしい——平らで縁はベベルカット。そして酒場の薄暗い明かりの中ですら、内側からの輝きを放っている。

「じゃああなたが例の人なのね」

ウェ이터がドリンクを持ってきてテーブルに置いた。彼が立ち去るとおれは言った。「おれは単に、テリー・レノックスを知っていて、気に入って、たまに飲んだだけの男ですよ。それも深いつきあいじゃなくて、なりゆきの友情とでも言うか。家に呼ばれたこともないし奥さんにも会ってない。一度駐車場で見かけたけど」

「もうちょっといろいろあったように聞いてますけど？」

彼女はグラスに手を伸ばした。ダイヤモンド縁の、エメラルドの指輪をしている。その隣に細いプラチナのリングがあって、既婚者だと告げていた。三十台後半とみたが、後半でも早い方だ。

「そうかも。あいつは面倒かけられた。いまだにそうだ。そっちはどうです？」

彼女は片ひじをついておれを見上げたが、特に何の表情もない「知りすぎるくらいだったって言いましたよね。知りすぎてあの人に起きたことをどうこう思う気もないんです。豪華な品を何でも与えてくれる金持ち奥さんがいました。その奥さんがかわりに求めたのは、口出しされないことだけ」

「筋の通った要求ですなあ」

「皮肉はやめてください、マーロウさん。そういう女もいるんです。自分ではどうしようもないんです。彼のほうだってもともとそれは承知のうえでしょう。それじゃプライドが許さないなら、いつでも離婚できた。何も殺すことはなかった」

「おれもそう思います」

彼女は身を起こし、おれをにらみつけた。その唇が歪んだ。「それであの人は逃亡し、もし聞いた話の通りなら、あなたがそれを手助けした。さぞご自慢なんでしょうね」

「いやいや、こっちは金目当てでやっただけでして」

「何か笑い事のおつもり、マーロウさん？ 正直、なぜ差し向かいであなたと飲んだりしてるんだか」

「いやならすぐにでも改められますよ⁸⁵」とおれはグラスに手を伸ばし、中身をのどに流し込んだ。

「テリーについて、おれの知らないことを教えてもらえるんじゃないかと思ったんですが。なぜテリー・レノックスが奥さんの顔をぐちゃぐちゃのスポンジになるまでぶちのめしたかを憶測するのは興味ないんですよ」

「あまりにひどい言い様ね」と彼女は怒ったように言った。

85 That's easily changed すぐに変えられる。その前のせりふを受けて、いやなら自分がすぐにでも立ち去りますよ、と言っている。清水、田口はそういう訳にしているが、村上春樹だけ「それは私の言いたいことかもしれませんよ」と誤訳。おれだってあんたなんかと飲みたくないぜってこと？ そんな意味もニュアンスもない。

「言い回しがお気に召さない？ こっちも同じですよ。そしてあいつが本当にそんなことをやったと思ってるなら、ここでギムレットなんか飲んでませんよ」

彼女は見つめた。しばらくして、ゆっくりとこう言った。「自殺して、全面的な自白書を残したんですよ。それ以上の何が要ると？」

「あいつは銃を持ってた。メキシコでなら、それだけでせっかちなオマワリに鉛弾をぶちこまれかねない。アメリカだって、同じように殺しをやった警官はたくさんいる——ドアが自分のお気に召すほど早く開かなかったからってだけで。自白書となると、おれは実物を見ていない」

「メキシコの警察が偽造したに決まってますわよね」と彼女は嫌味っぽく言った。

「偽造のやり方も知らないでしょう、オタクランみたいな田舎じゃ。いや、自白書自体は本物なんでしょう、でもそれで彼が奥さんを殺した証拠にはならない。少なくともおれから見ればね。それで証明されるのは、あいつが逃げ道がないと思ったというだけです。そんな立場に置かれたら、ある種の男——そう言うほうがお気に召すなら、弱虫とか軟弱とかおセンチとか言ってもいいですが——は、どこかのだれかさんたちを、きわめてつらい世間の好奇の目から救おうと決めるかもしれない」

「ばかばかしい⁸⁶。多少のスキャンダルを防ぐために自殺したり、意図的に殺されたりする人なんていません。シルヴィアはもう死んでました。その姉や父親はと言えば——二人とも、いとも簡単に自分の身くらい守れます。十分にお金がある人はね、マーロウさん、いつも自分を守るの」

「わかったわかった。動機についてはおれのまちがい。他も全部まちがってるのかもしれない。一分前は、おれのことずいぶんお腹立ちでしたよねえ。そしていまは立ち去れって言うんですか——そういうあなただって、テリーの思い出にギムレットを飲んでるくせに？⁸⁷」

いきなり彼女は微笑んだ。「ごめんなさい。ひょっとしてあなた、本気でおっしゃってるのね⁸⁸。最初は、あなたがテリーなんかよりずっと、ご自身について弁解してるのかと思ったんです。でもなんだか、そうじゃないみたいね」

「ええ。おれは馬鹿げたことをやらかして、そのために痛い目を見た。少なくともある程度はね。あいつの自白状のおかげで、ずっとひどい目にあわずにすんだことは否定しませんよ。もしあいつが連

86 Fantastic は現在の用法だとすばらしいという意味が多くなっているが、本来はありえない、空想的な、ばかばかしいという悪い意味。田口だけ「夢みたいな話をするのね」という訳で、否定的な意味合いがわからない。

87 So that you can drink **your** gimlet? you はイタリクスで強調されている。二人とも、テリーを偲んでギムレットを飲んでいる。それなのに、テリーをかばうからって何やらキツイこと言われる義理はないでしょう、あんただってギムレットで彼の思い出に浸ってるよね、ということ。既訳はどれも、you の強調による示唆を表現しておらず、単に一人で飲んでろ、というニュアンスにとどまる。唯一村上春樹だけが「あなたの」を傍点で強調しているが、単に原文を実直に反映しただけかもしれない。それだけで「あんただってテリー好きだろ」を読み取れというのはつらいし、それがわからないとなぜそれでリンダが態度を軟化させたかわからないので、敢えて説明入れた。

88 I'm beginning to think you are sincere. 清水訳「真剣なのがわかりました」村上訳「誠意をもって話をしていってやるんだとわかりかけてきました」田口俊樹訳「あなたが誠実な人だってことがだんだんわかりかけてきました」。この sincere は、テリーが犯人じゃないということをマーロウが本気で主張しているのだとわかってきた、という「本気」の意味。人格じゃなくて話の中身のこと。清水訳は合格、村上訳と田口訳は×。

れ戻されて裁判にかけられたら、たぶんおれも共犯に仕立てられたはずだと思う。そうになったら最低でも、おれがまかなえるよりはるかに大金がかかったはず」

「もちろん探偵ライセンスも」と彼女は冷淡に言った。

「まああり得なくはないですが。昔は、そこらの二日酔いのオマワリでもおれを失職させられた。いまはちょっとちがう。州の免許発行局委員会の前で公聴会がある。この委員会は市警察のことがさほど好きってわけでもないの」

彼女はドリンクに口をつけ、ゆっくり言った。「全体として見れば、最善の結果に終わったとは思いませんか？ 裁判なし、扇情的な見出しもなし。真実やフェアプレーや無辜の人々の気持ちなんかまるで考えない、新聞を売るためだけの泥の投げ合いもなし」

「だからそう言ったじゃないですか。そしたらばかばかしいとおっしゃった」

彼女は後ろにもたれ、ブース背中クッションのてっぺんにある曲線に頭をもたせかけた。「ばかばかしいといったのは、レノックスがそれを実現するためだけに自殺したってこと。裁判がないほうが関係者すべてにとってマシだったというのは、ばかばかしくなんかない」

「もう一杯やらないと」とおれはウェイターに手を振った。「ゾットするなあ。なんだか首の後ろから凍りつくような息が吹きかけられたみたいだ。ロリングさん、あなたひょっとして、ポッター家のご親戚かなんかですか？」

「シルヴィア・レノックスは妹です。ご存じかと思ってました」と彼女はあっさり言った。

ウェイターがやってきたので、おれは即座にドリンクを持ってくるように言った。ロリング夫人は首を振り、もういないと言う。ウェイターが消えとおれは言った。

「ポッター爺さん——失敬、ハーラン・ポッターさんですね——彼がこの事件にかけた箝口令のおかげで、テリーの奥さんに姉がいたことさえほとんど知らなかったくらいですよ」

「またまた大げさなことを。うちの父はとてもそんな力はありませんよ、マーロウさん——そして絶対にそんな無慈悲な人でもない。個人のプライバシーについてきわめて古風な考えの持ち主だってことは認めます。写真なし、演説もしない、移動も車か自家用機で職員も自前。それでも、とても人間らしいんです。テリーのことは気に入ってました。テリーは一日 24 時間紳士だ、お客が来て最初のカクテルを飲むまでの 15 分だけ紳士のふりをしてる連中とはちがう、と言ってたんですよ」

「最後はちょっとしくじりましたね。テリーが、ということです」

ウェイターはおれの三杯目のギムレットを持ってやってきた。おれは少し味見して、グラスの丸い台座部分の縁に指をかけたまま、じっとすわっていた。

「テリーの死は父にとってもかなりの打撃だったんですよ、マーロウさん。それとまた皮肉がかってきましたね。お願いだからやめてください。人から見れば、あまりにできすぎに思えるのは父もわ

かっていました。父としては、テリーがあっさり失踪してくれたほうがずっとよかった。テリーが助けを求めていたら、たぶん助けたと思いますよ」

「そんな、ひどいじゃございませんの、ロリング様。殺されたのはお父様の実の娘さんだつてのに⁸⁹」

彼女は苛立ったような仕草をして、冷たい目でおれを見た。

「これから言うことはずいぶん冷酷に聞こえるでしょうね。父はとっくの昔に妹を見限ってたんです顔をあわせてもほとんど口もききませんでした。もし父が本心を述べたなら—そんなことは過去も未来もあり得ませんけど—まちがいなくテリーについて、あなたと同じくらい疑念を抱いているとあたしは確信しているんです。でもテリーが死んだ今となつては、それに何の意味があるんですか？ 飛行機墜落や火事や高速道路の事故で死ぬことだってあり得たでしょう。どうせ死ぬなら、妹にとっては絶好の死に時だったんです。あと十年もすれば、ハリウッドのパーティーでよく見かける、あるいは数年前には見かけた、あのおぞましい女たちみたいなセックスきちがいのばばあになっていたでしょうから。国際社交界のくずみたいな連中に」

いきなり、これという理由もなしに腹が立った。立ち上がり、ブースの仕切り越しに見た。となりのブースはまだ空いていたが、一つ向こうでは男が一人で静かに新聞を読んでいた。おれはどすんとすわり、グラスを押しやってテーブルに身を乗り出した。声を抑えるだけの分別はあった。

「頭にくるなあ、ロリングさん。おれに何を吹き込もうってんですか。ハーラン・ポッターがホントに優しい人格者で、政治的な検察局への影響力を使って、殺人捜査にふたをしてまともな捜査が行われないようにしようなんて夢にも思わないとでも？ テリーが有罪か疑問視していたのに、本当の犯人捜しには指一本動かさなかったって？ ご自分の新聞や銀行口座や、ご当人もしらないうちにその願望を付度しようとわらわらす九百人の連中の持つ政治力なんか使わなかったって？ テリーが自分の頭に銃弾を撃ち込んだのであって、そこらの血気にはやるインディオが単なるお遊びで殺したんじゃないと確認するため、メキシコまででかけたのが子飼いの弁護士だけで、検察局も市警察もだれもいかないよう手配しなかったとでも？ あんたのおやじさんは時価一億ドルの人間なんですから、ロリングさん。どうやってそんなに稼いだか、おれには知るよしもありますがね、身のまわりはかなり遠大な組織を築かなけりゃ、そんなことは無理だつてのは十分にわかりますとも。甘ちゃんじゃない、厳しいおっかない人なんだ。そうでなきゃ、今日日それだけの金は稼げない。そしていかがわしい連中とも商売がいる。直接会ったり握手したりはしなくても、そいつらが周縁にいて取引してるんだ」

「たわごとね。もうたくさん」と彼女は怒ったように言った。

「さようですか。そっちの聞きたい音楽をおれが奏でないと。言っときますがね、テリーはシルヴィアが死んだ夜に、あんたのおやじさんに電話してるんだ。何について？ おやじさんはあいつに何を

89 Oh no, Mrs. Loring. この Oh no で、マーロウがこのせりふをものすごい芝居がかった最大級の嫌味口調で言っているのがわかる。そしてこの oh no は、表面的には「まあ、なんてことおっしゃいますの」というニュアンス。清水訳は無視、村上田口訳は「それはどうかな」だが、単なるストレートな疑問視だと、その後でリンダが苛立って厳しい口調になるのが唐突すぎる。

言ったんですかね。『いいからメキシコに逃げて自殺しとくれ、坊主。家族の中でケリをつけようじゃないか。娘が淫売なのは知つとるよ。そのお相手の飲んだくれのろくでなし一ダースの中で、だれがトサカにきてあのカワイイ顔をぶちのめしたかはわからん。どいつもやった可能性はある。だがそれはもうどうでもいい話なんじゃ、坊主。そいつは酔いが覚めたら後悔してくれるじゃろうしな。おまえはこれまでいい目を見てきたんだから、いまこそツケを払ってもらおう。こっちとしては、ポッターという立派な家名をライラックのごとくおきれいに保ちたいだけなんじゃよ。バカ娘があんたと結婚したのは、隠れ蓑がほしかったからじゃ。死んだ今となつては、それがなおさら必要なんじゃ。そしてあんたがその隠れ蓑なんじゃ。姿を消して、消したままでいられるなら、それで結構。じゃが見つかったなら、この世とおさらばしてくれ。じゃあ死体置き場で会おう』とか⁹⁰」

黒服の女はドライアイス混じりの声で言った。「父がそんな話し方をすると本気で思ってるのかしら」

おれは後ろにもたれて不愉快な笑い声をたてた。「おや、もうちょっと台詞まわしは磨いてさしあげてもよろしゅうございますよ、そのほうがよろしければ」

彼女は身の周りのものをまとめて、シートから滑り出た。そしてゆっくりと、とても慎重に言った「一つ警告してさしあげますけど。とても簡単な警告よ。もし父がそんな種類の人間だとお考えで、いまおっしゃったような思いつきを吹聴してまわったら、いまのお仕事でもその他どんな仕事でも、あなたのキャリアはきわめて短いものとなり、きわめて即座に打ち切られることとなるでしょう」

「すばらしいよ、ロリング夫人。完璧だ。司直にも言われ、ゴロツキどもからも言われ、金持ち階級からも言われたことだよ。言い回しはちがっても、同じ意味合いのことをね。手を引け、と。ここに来たのは、ある男にギムレットを飲んでくれと頼まれたからだ。それが見てくれ。いまや墓穴に片足をつっこんでも同然だ」

おれは多すぎるほどの金額をテーブルに置き、彼女の隣に立ち上がった。「そういうあなたは一杯半だ、ロリングさん。どうしてそんなにたくさん？ あなたもだれかに頼まれて飲んだのか、それともすべてあなた自身の思いつき？ いささか舌をすべらせたんじゃないですか？」

「どうですかね、マーロウさん。どうなんでしょうね。本当のことなんてだれがわかるもんですか。あそこのカウンターでこっちを見てる男がいるけど、お知り合いかしら？」

彼女がそれに気がついたことに驚いて、おれはふり返った。やせた色黒の人物が、ドアにいちばん近い端っこのスツールにすわっていた。

「チック・アゴスティーノってやつですよ。メネンデスっていうギャンブル屋の銃かつぎ。いっしょにあいつを張り倒してボコボコにしてやりましょうよ」

90 テリー・レノックスは、当人によればお姉さん、つまりはリンダにもほぼ同じ内容を電話してるんだよねー。だから彼女は何が言われたかだいたい知っていて、このマーロウの大口舌はくだらない邪推でしかない。

「まちがいなく酔っ払ってますね」と言い放って彼女は歩き始めた。その後を追った。スツールの男が身体を回転させ、カウンターのほうを見た。その近くにきたとき、そいつの背後にいつすばやく両脇の下を探った。確かに酔っ払っていたかもしれない。

彼は怒ったように回転してスツールからすべり降りた。「何すんだ、小僧」と歯をむき出す。目の片隅で、彼女がドアのすぐ内側で立ち止まりこっちを見たのがわかった。

「拳銃なしなの、アゴスティーノちゃん？ あぶないことするのねえ。もうお外は暗くなりかけてるわよ。おっかない小人さんに見つかったらこわいでしょう？」

「失せろ！」と彼はおっかなそうに言った。

「あーら『ニューヨーカー』仕込みの台詞かしら、インテリさんだね」

そいつは何か言おうとしたが身動きしなかった。そいつを後に残してロリング夫人を追い、ドアを抜けて日よけの下に出た。白髪交じりの黒人運転手がそこに立って、駐車場係と話をしていた。彼は帽子に触れると、そこを離れてしゃれたキャデラックのリムジンを持ってきた。ドアを開けて、ロリング夫人がその中に乗りこんだ。運転手がドアを閉める手つきは、宝石箱のふたを閉めるかのようだった。そしてぐるりと回って運転席に乗った。

彼女は窓を開けておれのほうを見た。半笑いを浮かべている。

「おやすみなさい、マーロウさん。楽しかったわ—いやどうかしら？」

「かなりケンカしちゃいましたね」

「あなたはね—しかもほとんどはあなた自身と」

「いつものことです。おやすみなさい、ロリングさん。お住まいはここらじゃないですよね」

「それほどでも。アイドルヴァレー住まいです。湖の向こう端。夫は医者なんです」

「ウェイドって人たちをご存じじゃないですか？」

彼女は顔をしかめた。「ええ、ウェイド夫妻なら知ってますけど。どうして？」

「なぜ尋ねるかって？ アイドルヴァレーで知っている唯一の人々だからですよ」

「なるほど。ま、改めておやすみなさい、マーロウさん」

彼女はシートにもたれ、キャデラックは上品なエンジン音とともに、大通りの交通の中へと滑り去っていった。

振り返りざまに、チック・アゴスティーノにほとんどぶつかりそうになった。

「あのべっぴんはだれだ？」と彼は歯をむき出した。「それとこんど減らず口をたたいたら消えてもらうぞ」

「おまえがお知り合いになりたいような相手じゃねえよ」

「気取りやがって。ナンバープレートは控えたからな。メンディはそういう細かいことを知りたがる」

車のドアがぱたんと開き、身長二メートル十センチ、身体の幅一メートル二十の男が飛び出すと、アゴスティーノを一目見て、大股で一步出ると片手でのどを捕まえて吠えた。

「何度も言っただろう、おまえらチンピラども、おれの食事場所のあたりをうろつくじゃねえ」

アゴスティーノを揺さぶり、歩道越しに壁際に放り出した。チックは咳き込みながらへたりこんだ。

巨漢は怒鳴った。「こんど見かけたらまちがいなくぶちこんでやるぞ、そして逮捕のときには、お前が銃を手にしてたってことに仕立ててやるからな」

チックは首を振って何も言わなかった。大男は値踏みするような目をおれに向けてニヤリとした。

「いい夜ですな」と言って、ヴィクターズの中へ悠然と入っていった。

おれはチックが身を整えて、なんとか平静を取り戻すのを眺めた。「あのお友だちはだれ？」と尋ねた。彼はダミ声で答えた。

「ビッグ・ウィリー・マグーン。風紀課のぬけ作野郎。タフなつもりでいやがる」

「え、つもりだけのやつにやられたんですか？⁹¹」おれは礼儀正しく尋ねた。

彼はうつろな目でおれを見て歩き去った。おれは駐車場から車を出して家に帰った。ハリウッドは何でもありだ。ありとあらゆる何でも。⁹²

91 もちろん、その「つもり」だけのやつに苦も無くやられたおまえは何、という嫌味。清水と田口はそれが理解できておらず、実は強いんじゃないですか、という意味の訳にしている。村上はまだあわかっていそう。二人もわからないようだと理解しづらいんだろうから、補いました。

92 この章、リンダと初めて会って、最初は同じドリンクをきっかけにお互い惹かれて少し打ち解けたところで、マーロウが妹の敵を逃がしたヤツだと知ってリンダの態度が硬化し、でも実はテリーが犯人じゃないかもといわれて少し共感して緩和、でも父親の関与をあれこれ邪推されて怒り、一方のマーロウは、最初は「いい女～」と思い、ところが関係者だと知ってテリーをめぐる対立、相手が被害者の姉と知ってたじろぎ、その父親の役割をめぐる最終的にけんか別れしつつ、お互いに腑に落ちないものを残す、という両者の関係が短時間できわめて大きく変わるところ。そのたびに、お互いの口調は探り入れ、うちとけ、硬直、思案と軟化、対立、怒りと変化する。

ところが既訳はどれも、リンダもマーロウも最初から最後まで口調が変わらず、おかげで場面ごとに妙になれなれしかったり、変に硬直していたりと不自然なところが出る。清水、村上は全部ですます調でしゃべらせているのでまだそれが目立たないが、「だ」調のため口を貫く田口訳はかなりつらい。山形訳は、敬語の使い方などで多少なりともそれを反映させてみた。できはさておき、そういう努力はやったほうがいいと思う。それと全般に、既訳は皮肉や嫌味をそれらしく訳す努力が薄く、読者に無用の努力を要求している。キャラは、せりふ自体よりその皮肉に反応していることがきわめて多いので、それはもっと明確にする努力が必要。

ちなみにリンダは常に符丁と匂わせでしゃべり、マーロウも嫌味と反語で応じるので、彼女の登場する章では既訳の大きなまちがいが俄然増える。この章も短いのに大物が多数登場している。

[23]

車高の低いジャガーがおれの前で丘をめぐり、アイドルヴァレー入り口まで舗装を怠った1キロ近い道で、こっちに花崗岩のホコリを浴びせないように速度を落とした。スーパーハイウェイでいい気になった日曜ドライバーたちを除けるために、わざと未舗装にしておきたかったようだ。明るいスカーフと日よけ入りゴーグルがチラリと見えた。ご近所同士という感じで手がさりげなく振られた。するとその車がたてるほこりは道を横切り、すでに茂みや太陽に焼かれた草の上に大量につもった白いほこりの膜に加わった。すると岩の露頭を曲がったところで、まともな舗装路が始まり、すべてが滑らかで手入れの行き届いた様子となった。生きた樫の木が道に張り出して固まり、だれが通り過ぎるのか知りたがっているかのようだし、赤い頭のスズメがヒョコヒョコと、スズメでもなければつくく価値があるとは思わないものをつついていく。

そしてハコヤナギが何本か現れたがユーカリはない。それからカロライナポプラの濃い林の向こうに白い家が見えた。そして路肩に沿って馬を歩かせている少女。ジーンズと派手なシャツを着て、小枝をかじっている。馬は暑そうだが汗はかいておらず、少女は優しく歌いかけてやっていた。自然石の壁の向こうでは庭師が動力式芝刈り機を押して巨大な波打つ芝生を刈っており、その芝生の果てにウィリアムスバーグ式コロニアル邸宅の巨大デラックスサイズのポーチがあった。どこかでだれかがグランドピアノで左手の練習をしている。

するとこのすべてが車の後ろに流れ去って、湖のきらめきが暑くまばゆく見えてきたので、門柱の番号に注意しはじめた。ウェイド邸は一度しか見たことがなく、それも暗かった。夜に見たときほど大きくは見えなかった。車寄せは車だらけなので、おれは路肩に車を停めて歩いて入った。白いお仕着せのメキシコ人執事がドアを開けてくれた。細身で身ぎれい、ハンサムなメキシコ人で、上着がエレガントにフィットしていて、週に五十ドルもらって死ぬほどきつい労働しなくてすんでいるメキシコ人に見えた。

「*Buenas tardes* (こんにちは)、セニョール」と彼は下心ありげな笑顔を作った。「*Su nombre de Usted, por favor?* (お名前をうかがってもよろしゅうございますか?)」

「マーロウだ。何をそんなにかしこまってるんだよ。電話で話したろう、忘れたか？」

彼はにやりと笑い、おれは中に入った。相も変わらぬカクテルパーティー、みんな大声でしゃべりすぎ、だれも聞いておらず、みんな酒のマグに必死でしがみつки、目をキラキラさせ、頬はアルコール摂取量とその人の強さに応じて紅潮か青白く汗ばんでる。そこへアイリーン・ウェイドが隣に忽然

と姿をあらわし、淡い青の何かを着ているが、眼福至極。手にはグラスを持っているが、どうも小道具以上のものではなさそうだ。

彼女は重々しく言った。「来て下さって本当にありがとうございます。ロジャーが書斎でお目にかかりたいそうです。あの人、カクテルパーティーは大嫌いなんです。仕事してます」

「この騒々しい中でですか？」

「あの人はいつも気にしないですよ。キャンディがドリンクを用意します—それともバーに行かれますか？」

「そうしましょう。こないだの晩はすいませんでした」

彼女は微笑んだ。「確かもう謝っていただきましたよね。あんなの何でもありませんから」

「何でもなかったってことはないでしょうに」

彼女はうなずく間だけ微笑を維持すると、向きを変えて立ち去った。何かとてもでかいフランス式出窓の角にバーがあるのが見えた。手押し車式のバーだ。だれにもぶつからないように、部屋を半ばまで横切ったところで、声が聞こえた。「あらマーロウさん」

振り向くとロリング夫人が長椅子にいて、隣に気取ったような男が縁なし黒めがねをかけ、あごにはなにやら山羊ひげじみた染みをつけていた。彼女はドリンクを手に退屈していた。男は腕組みして顔をしかめている。

そっちに赴いた。彼女はにっこりして手を差し出した。「こちら夫のロリング医師ですの。フィリップ・マーロウさんよ、エドワード」

山羊ヒゲ男は短くおれを見て、さらに短くうなずいてみせた。それ以外は身動きもしない。エネルギーをもっとましなことのために温存しているらしい。

「エドワードはとても疲れてるの。いつだってとても疲れてるのよ」とリンダ・ロリング。

「医者にはありがちです。ロリングさん、何か飲み物をお持ちしましょうか？ 先生もいかがですか？」

男は、どちらも見もせずと言った。「彼女はもう飲み過ぎてる。私は飲まない。飲む人を見れば見るほど、自分は飲めなくてよかったと思うね」

「愛しのシバよ帰ってきて—⁹³」とロリング夫人が夢見るように言った。

彼はキッと横を見てすごい形相になった。おれはそこを離れバーにたどりついた。夫といっしょだとリンダ・ロリングは別人のようだった。声にはトゲがあり、表現には嘲笑がこめられ、それはおれ相手だと怒っているときですら使われなかったものだ。

バーにはキャンディがついていた。何を飲むかと尋ねられた。

「ありがとう。いまは何も。ウェイド氏がおれに会いたいそうだ」

93 ……というアル中テーマの戯曲/映画がちょうど流行っていたんだって。

「*Es muy ocupado* (すごくお忙しいのです)、セニョール。とても忙しい」

キャンディは好きになれそうになかった。だまって見つめると、彼は付け加えた。「でも見てきます。 *De pronto* (今すぐ)、セニョール」

群集の間を繊細に通り抜けて、すぐに戻ってきた。「オッケー旦那。行こうぜ」と快活に言う。

彼の後について、家の長手方向の奥へと向かった。彼がドアを開けて、おれが入り、彼は背後でそれを閉め、するとかなり騒音が消えた。角部屋で、大きく涼しく静かで、フランス窓と外にはバラ、片側の窓にはエアコンセットがついていた。湖が見えて、ウェイドが長いブロンドの革長椅子にだらりと寝ているのが見えた。でかい漂白した木製の机にタイプライターがのっかり、そのタイプライターの横に黄色い紙の山があった。

彼はだらしない感じで言った。「よく来てくれたなあ、マーロウ。すわってくれや。一、二杯もうやったのか？」

「まだです」おれはすわって彼を見た。まだ青白くてやつれた様子だ。「仕事はどうです？」

「いいんだけどね、すぐ疲れちゃうんだよ。四日飲み続けた後だと立ち直りもきつくてね。おれはそういうときに最高傑作が書けることも多いんだが。おれの稼業だと、つい真面目になってやたら硬直してガチガチになる。そうなるとうるくな作品にならない。いい作品はするっと書ける。そうじゃないという話を讀んだり聞いたりしたら、それはデタラメもいいとこだな」

「作家にもよるんじゃないですかねえ。フローベールは書くのに苦労したけど、いいもの書いてますよ」

ウェイドは身を起こした。「フローベールを讀んでますってか、だからインテリで批評家で文芸界の天才児ってわけかよ」と彼はおでこを揉んだ。「おれはこの稼業にいて、これが大嫌いなんだよ。手にドリンク持ったやつはみんな大嫌いだ。いまからあそこに出てって、あの気色悪い連中に愛想振りまかなきゃいけないんだ。そのクソ一人のこらずおれがアル中なの知ってる。だから、おれが何かから逃避してるのかを不思議がる。どっかのフロイト派のろくでなしが、それを常識にしちまいやがった。いまや十歳児までみんなこれを知ってやがる。おれに十歳児がいたら——いや絶対いらんがね——その小僧はこう尋ねるだろう。『パパ、飲んだくれるときのパパは何から逃避してるの?』」

「聞いた話だと、こういうのはごく最近のことだとか」

「ひどくはなったがね、おれはもともと酒びん片手の陰険野郎だったんだよ。若くてつらい状況だと大量の罰でも受けきれんのだがね。四十近くなると、昔通りには立ち向かえんのよ」

おれは後ろにもたれてタバコに火をつけた。「会いたいというのはどんな用件なんです？」

「あんたは、おれが何かから逃げてると思うんだい、マーロウ？」

「さあねえ。情報が足りなすぎますよ。それに、だれだって何かから逃げているんだ」

「だれもが飲んだくれたりしないだろう。そういうあんたは何から逃げてるんだい？ 自分の若さか罪悪感か、自分がケチな稼業の中でもケチな小者だってことか？」

「はいはい、だれか罵倒する相手がほしいんですか。まあどんどんやっちゃってくださいよ。痛いところを突かれたらお知らせしますよ」

彼はにやりとして、濃い巻き毛をくしゃくしゃにした。そして人差し指で自分の胸を突いた。「あんたが見てるのがまさに、ケチな稼業の中のケチな小者なんだよ、マーロウ。作家なんてみんなクズで、おれは中でもクズのきわみ。ベストセラー十二冊書いて、その机のうえの反古紙の束をいつか完成させることがあれば、それがたぶん十三冊になるだろうよ。その一冊として、それを地獄にふっとばす火薬の価値すらない代物ばっか。住まいはおきれいなおうちで、それがきわめて限られたある億万長者が所有している、きわめて限られた人しか住めないご近所にある⁹⁴。おきれいな妻がいて愛してくれるし、おきれいな出版者がいてこいつも愛してくれてるし、おれ自身が何より自分を愛してやがる。おれはエゴイストのろくでなし、文芸売春婦かヒモか——好きな表現を選んでくれ——そしてどっちを向いても悪役だ⁹⁵。それであんたがおれに何をしてくれるってんだ？」

「ええ、何してほしいんです？」

「いい加減怒れよ」

「怒るようなことが何もありません。ただあなたの自虐を聞かされてるだけで。退屈だけど、こっちは別に傷つきやしませんから」

彼はガハハと笑った。「気に入った。一杯やろうぜ」

「ここじゃ御免ですよ、旦那。あなたと二人きりじゃね。あなたが最初の一杯やるのを見るのは遠慮したいんだ。だれも止められることじゃないし、止めようとしませんでしようよ。でもおれが加担する必要もない」

彼は立ち上がった。「ここで飲まなくてもいい。外にだって、あの手の連中が暮らすあたりに住むだけのあぶく銭を稼いだときにお知り合いになれる、あの手の連中の精選版を拝見といこうか」

「ねえ、いい加減にしたらどうですか。やめなさいって。あの人たちだって、他のみんなと大差ないんですから」

彼はきつい口調で言った。「そうだな。でも大差あるべきだろう。そうでないなら、あいつら何の役にも立ちやしない。この郡の上流階級と称して、安ウィスキーまみれのトラック運ちゃんどもと大差ないんだ。いやむしろ劣るくらい」

94 え一、みなさん大金持ちなのに、みんな借地住まいなんですかあ？

95 村上諷「お手軽な便利屋」。そういう意味はないし、それで文脈が通るわけでもない。

おれは繰り返した。「だからやめろって。酔っ払いたければ酔えばいい⁹⁶。でも、酔ったからっていちいちヴェリンジャー先生にすり寄ったり、頭おかしくなって奥さんを階段から突き落としたりしない連中に八つ当たりするのはよしなさいって」

「そうだな」と言って彼は、いきなり落ち着いて思慮深くなった。「試験合格だな、旦那。しばらくここで暮らすってのはどうだい？ あんたならいるだけで、おれにはずいぶんありがたい」

「なんでありがたいのやわからんのですが」

「おれがわかればいいんだよ。いるだけでいい。月千ドルでどうだい？ おれは酔っ払うと危険になるんだ。危険になりたくないし、酔っ払いたくもないんだよ」

「止めるわけにもいかない」

「ものは試しで三ヶ月。あのクソ本も仕上がるから、そしたらしばらく遠くにいくよ。スイス山中のどっかにこもって、酒を抜くんだ」

「本ですか。どうしてもその金があるんですか？」

「いや。ただ手をつけたものは最後まで仕上げないといけないだけだ。そうでないと、おれはおしまいだ。友人として頼む。レノックスのためにはそれ以上のことをやったんだろう？」

おれは立ち上がり、彼に近づいてじっと見つめた。「おれのせいでレノックスは死んだんですよ。おれのせいで死んだんだ」

「くだらん。甘っちよろいこと言うんじゃないよ、マーロウ」と彼は手のふちを喉に当てた。「ヤワな甘ちゃんどもには、ここまで吐き気がたまるくらいうんざりしきってるんだ⁹⁷」

「甘ちゃん？ それとも親切なだけ？」

彼は一歩後ずさり、長椅子のふちにぶつかったが、バランスは崩さなかった。そして滑らかに言った。

「ふん、この野郎が。交渉決裂か。もちろんあんたのせいじゃないがな。おれには知りたいことがあるんだ。どうしても知りたいことが。あんたはそれが何だか知らないし、おれ自身もはっきりわかってるのか自信がないことなんだよ。ただわかっているのは、そこに何かがあって、どうしても知りたいってことだけなんだ」

「だれについて？ 奥さん？」

彼は唇の片方でもう片方を覆った。「おれ自身のことだと思うんだよ。じゃあドリンクをもらいに行こうか」

96 Get boiled. 村上だけ「腹を立てる」としているが、別にカクテルパーティーに来ている人たちは怒っておらず、単に酔っ払っているだけなので、これは明らかにまちがい。清水、田口はあっている。

97 I'm up to here. 既訳は「ここまで甘ちゃんに浸っている」という訳だが、単に多いという意味ではなく、それ以上になったらのどから上に来て吐いちゃう、つまりうんざりしてゲロ吐きそうだぜ、という意味。

彼はドアまで歩くとそれを開き、おれたちはいっしょに出ていった。

もしおれに居心地の悪い思いをさせるのが狙いだったなら、見事な仕事ぶりだった。

[24]

彼がドアをあけると居間の喧噪がこちらの顔面に爆発した。以前よりも騒々しく聞こえた——そんなことが可能ならの話だが。ドリンク二杯分くらい騒々しさが増している。ウェイドはあちこちでこんにちはと言い、みんな彼に会えて喜んでいるようだった。だがその時点では、殺し屋のピッツバーグ・フィルがご自慢の凶器のカスタムメイドのアイスピックを持ってそこにいても、みんなそれに会えて喜んだことだろう。人生なんて一つのでかいボードビルショーにすぎないのだ。

バーに向かう途中でロリング先生とその妻に鉢合わせした。先生は立ち上がって一步踏み出し、ウェイドと対峙した。その顔に浮かんだ表情は憎悪で青ざめかけていた。

ウェイドは愛想良く言った。「やあお久しぶり、先生。リンダ、こんにちは。最近どこに隠れてたの？ ごめん、ばかな質問だったねえ。私——」

ロリングが発した声はかすかに震えていた。「ウェイドさん。言っておきたいことがある。とても簡単なことで、これ一回ですませたいことだ。妻に近寄るな」

ウェイドはおもしろそうに彼を見た。「先生、お疲れのようですね。それとドリンクもない。何か取ってきましょう」

「私は酒は飲まないんだ、ウェイドさん。それはよくご存じでしょう。今日伺った目的はたった一つで、その目的はいま言い終えた」

ウェイドはまだ愛想よかった。「ええ、おっしゃりたいことはなんかわかりましたよ。そしてあなたはうちのお客なので、いささか見当違いではとだけ申しあげておきますよ」

まわりの会話は止まっていた。男女ともにひたすら聞き耳をたてている。これは見ものだ。ロリング先生はポケットから手袋を取り出して、それをのぼすと、一つの指側をつかんで、ウェイドの顔を激しくひっぱたいた。

ウェイドはまばたき一つしなかった。「夜明けに拳銃とコーヒーってことですか？」と静かに尋ねた。

おれはリンダ・ロリングを見た。彼女は怒りで紅潮していた。そしてゆっくり立ち上がり、先生と対面した。

「まったくもう、大根すぎるわよダーリン。お願いだからバカみたいな真似はよしてちょうだい、ダーリン。それともこのままだれかがあなたの顔をはたくまで居すわるつもり？」

ロリングはパツと向きを変えて手袋を振り上げた。ウェイドがその前に割り込んだ。「落ち着きなさいよ、先生。ここらじゃ奥さんをぶつときは人目を避けるんですよ」

ロリングはせせら笑った。「ご自分のことを言ってるなら、その話は十分承知しているよ。それに君に礼儀作法の講義なんかしていただかないで結構」

「私も見込みある生徒しか取らないもんでね。いやこんなに早くお帰りとは残念至極ですよ」そしてウェイドは声を張り上げた。「キャンディ！ *Que el Doctor Loring salga de aquí en el acto!*」そしてロリングのほうに向き直った。「スペイン語がおわかりにならないかもしれませんが、いまのはお引き取りください、という意味ですよ」と指さした。

ロリングは身動きもせずに相手を見つめ、冷ややかに言った。「警告はしましたよ、ウェイドさんみんなも聞いていた。次は警告なしだぞ」

ウェイドは投げやりな口調で言った。「うん、なしにしてくれ。だがもしやるなら中立地帯でやってくれよな。ここじゃこっちは立場上、身動き取れないんだから。すまんね、リンダ。でもこの人と結婚を決めたのはきみだからね」そして手袋の重い側が当たった頬をそっと撫でた。リンダ・ロリングは苦々しい笑いを浮かべていた。そして肩をすくめた。

「失礼する。リンダ、おいで」とロリング。

彼女はすわりなおしてグラスに手を伸ばした。夫にチラリと静かな軽蔑の目を向けた。「あなただけでしょ。ほら、確かいくつか往診があるんじゃないじゃなかった？⁹⁸」

「いっしょに帰るんだ」彼は憤然と言った。

彼女はそれに背を向けた。いきなり彼は手を伸ばしてリンダの腕をつかんだ。ウェイドがその肩をつかんで自分のほうを向かせた。

「落ち着けよ、先生。なんでも思い通りにはいかないよ」

「その手を放せ！」

「いいとも、まあ落ち着けて。ああそうそう、いい考えがあるよ、先生。いいお医者さんにかかったらどうだい？」

だれかが大笑いした。ロリングは飛びかかろうとする動物のように身をこわばらせた。ウェイドはそれを感じて、鮮やかに背を向けて歩み去った。おかげで後はロリング先生次第となった⁹⁹。ウェイドを追ったら、さらにマヌケに見えてしまう。立ち去るしかなかったので、彼はそうした。キャンディがドアを開けているほうをまっすぐ見て脇目もふらずに部屋をすばやく横断した。そして出ていったキャンディは無表情にドアを閉め、バーに戻った。おれはそこに行ってスコッチを頼んだ。ウェイド

98 Number of calls to make. 往診という意味の call だが、田口だけは「あちこち電話をかけなくちゃならない」という訳で、文脈的におそらくちがうが、絶対にあり得ないわけではない。が、やっぱ変。

99 他でも指摘されているが、村上はこの holding the bag を直訳して「鞆を抱えたまま」とつけている。通常はここで訳したように、どうするか選択がその人に任されたという話。田口も「鞆を持ったまま」と直訳しているのは驚き。もちろん、カクテルパーティの席にまで鞆を抱えてきていた可能性はゼロではないが普通はないでしょ。清水は「機先を制されて、取り残された」とまあまあの訳。

がどこへ行ったかは見なかった。あっさり姿を消したのだ。アイリーンも見なかった。おれは部屋に背を向けて、連中がガヤガヤするに任せてスコッチを飲んだ。

泥色の髪でおでこにバンドを巻いた少女がとなりにあらわれて、グラスをバーに置いて何か要領を得ない声で言った。キャンディはうなずき、ドリンクのおかわりを作った。

その少女はこっちを向いた。「共産主義に関心あるかしら？」と尋ねる。目はうつろで、小さな赤い舌を唇に走らせて、チョコレートのかけらでも探しているようだ。彼女は続けた。「みんなが関心持つべきだと思うんだけど、でもこの男どもにきいても、みんなあたしにちょっかい出そうとするだけなのよ」

おれはうなずいてグラス越しにその反った鼻と日焼けにくたびれた肌を見た。

「上手にやってくれるなら、それも悪くはないんだけど」と言って彼女は新しいドリンクに手を伸ばした。その半分を飲み込むときに臼歯まで見えた。

「おれはあてにしないでくださいよ」

「名前なに？」

「マーロウ」

「最後にeはつくの、つかないの？」

「つく」

「ああ、そのマーロウね」と彼女は詠唱した。「なんて悲しくも美しい名前なのかしら」そしてグラスをほとんど空にしてから下において、目を閉じ、頭を後ろにもたせて腕を投げ出したので、ほとんどおれの目に当たるところだった。声を情感で脈打たせながらこう言った。

「これぞ千の船を放ち

イリウムの天蓋なき塔を燃やした顔か？

愛しきヘレネーよ、接吻をもって我を不死にしたまえ」

彼女は目を開けてグラスをつかみ、おれにウィンクした。「あの詩はなかなかだったじゃない、お兄さん。最近の詩は書いてないの？」

「あんまり」

「したいならキスしてくれていいのよ」とはにかんだように言う。

シャンタン地の上着と開襟シャツの男が彼女の背後にやってきて、頭ごしにおれに笑いかけた。短い赤毛と、潰れた肺のような顔をしていた。見たこともないほど醜い男だ。彼は少女の頭のとっぺんを撫でた。

「さあ子ネコちゃん、おうちに帰る時間だよ」

彼女はそいつに喰ってかかった。「つまりあんたがあのもない球根ベゴニアに水やりしなきゃなんないってこと？」と彼女は怒鳴った。

「おい聞いてくれよ、子ネコちゃん―」

「手を放しなさいよ、このクソツタレの強姦魔」と彼女は叫んで、ドリンクの残りをそいつの顔にぶちまけた。その残りというのは、小さじ一杯ほどと氷のかたまり二つだった。

「何言ってるんだベイビー。こっちはおまえの旦那だろうが」と彼は怒鳴り返し、ハンカチをひつつかんで顔を拭いた。「わかる？ だ・ん・な」

彼女は大泣きして彼の腕に飛び込んだ。おれは二人の脇をぬけてそこを失礼した。カクテルパーティーなんて皆一緒、このやりとりまで。

家からはそろそろ客が晩の空気の中に漏れ出しはじめていた。声がだんだん薄れ、車が発車し、さよならがあちこちスーパーボールのようにはねまわっていた。おれはフランス窓のところにいて旗のたったテラスに出た。地面は湖のほうに下り、湖は眠るネコのようにまったく動きがない。そこに短い木造の栈橋があって、手こぎボートが白いもやい綱で停めてあった。向こう岸はそんなに距離がなかったが、そこでは黒いオオバンがスケーターのように怠惰な曲線を描いていた。そいつらは、さざ波すら引き起こさないらしい。

クッションつきのアルミ製長椅子を広げて、パイプに火をつけ、静かにそれを吸って、いったい自分はここで何をしているのかと思案した。ロジャー・ウェイドはその気になれば、十分に自制できるようだった。ロリング相手に立派に対応した。立派以上の対応だ。ロリングのとがった小さいあごを一発ぶん殴っていても、さほど驚かなかっただろう。ここらの基準では一線を越えたふるまいではあったろうが、ロリングのほうはずっと派手に越えていたんだから。

ここらの基準がまだ少しでも意味を持つなら、男を脅して手袋で横っ面を張るとき、部屋一杯に人がいる場所を選んじゃいけない。しかも自分の妻がすぐ隣にいて、彼女を火遊びで糾弾しているに等しい状況は避けたい。まだ深酒でガタガタの男にしては、ウェイドはうまくこなした。もちろん、酔っ払った彼は見たことがなかった。酔っ払ったらどうなるかは知らない。彼がアル中かどうか知らない。この二つは大きくちがう。ときどき飲み過ぎる男は、まだしらふのときと同じ男だ。アル中それも本当のアル中は、まったくの別人になる。これまで見たこともない人物になるという以外、そいつについては何も予測がつかない。

背後で軽やかな足取りが聞こえ、アイリーン・ウェイドがテラス越しにやってきて、長椅子の端のおれの隣にすわった。

「で、どうでしたか」彼女は静かに尋ねた。

「早撃ち手袋の某紳士のことですか？」

「あらちがうわよ」と彼女は顔をしかめた。そして笑った。「ああいう大騒動を演じてみせる人はちょっとねえ¹⁰⁰。立派な先生ではあるんですよ。でもヴァレーの男性半分を相手にあの騒ぎをやらかしてるんです。リンダ・ロリングは尻軽なんかじゃありません。そんなふうに見えないし、そんな話し方もしないし、そんなふるまいもしない。どうしてロリング先生は彼女のことをそんなふうと思うんだか」

「アル中から立ち直ったのかもしれませんがねえ。そういう人はえらく純潔主義になりがちだから」

「あるある」と言ってから、彼女は湖のほうを見た。「ここはとても静かな場所なんです。ここなら作家も幸福でいられると思うでしょう——作家なんてどこへ行っても不幸なのかもしれないけれど」とふり返ってこっちを見た。「それで、ロジャーの頼みには説得されなかったようですね」

「意味ないですからねえ、ウェイドさん。おれにはどうしようもないですよ。それは前にも言ったことです。ここぞというときに、現場に居合わせられるとは限らない。四六時中つきまといとて無理だ。そんなの無理です、おれにだって他に用事はあるんだし。たとえばあの人が暴れ始めたら、それは一瞬で起こるんでしょう？ そして暴れそうな様子はこれまでまるで見せていない。かなりしっかりしているように見えますけど」

彼女は自分の手を見下ろした。「いまの本を仕上げられたら、たぶんずっとよくなると思うんです」

「おれでは助けになりませんよ」

彼女は顔をあげて、両手を隣の長椅子の縁においた。そして少し身を乗り出した。「あの人が助けになると思えば、助けになるんです。そこが肝心なところでしょうに。うちのお客になって、それで支払いを受けるのがご趣味にあわない、そういう話ですか？」

「あの人に必要なのは精神科医ですよ、ウェイドさん。もしインチキでないやつをご存じなら」

彼女は驚いたようだった。「精神科医ですか？ どうして？」

おれはパイプから灰を捨て、それを手に、しまう前に火皿が冷えるのを待った。

「素人意見をお求めなら、こうです。あの人は、心の中に秘密を隠していて、それを思い出せないと思っている。自分自身についての後ろめたい秘密かもしれないし、他人のことかもしれない。そのせいで自分が飲むんだと思ってます、そいつが思い出せないからだ。おそらく何が起きたにせよ、それは泥酔しているときに起きて、それを思い出すには飲んだくれが行くところがどこであれ、そこに行くしかないと思っているんだと思います——あの人がなるみたいな、本当にひどい泥酔状態になるしか。そういうのは精神医の仕事です。ここまではいいでしょう。いまのがまちがっているなら、飲ん

100 英語 (特に米語) の特徴として love とか hate をやたらに気軽に投げ散らかす。恋人や家族を愛するのは当然だが、犬も花もフライドポテトもベルトもマウスも本当に気軽に love/hate してくれるので、そのまま愛するとか憎むとか訳すのはもとより、大好きとか大嫌いとか訳すのさえ、日本語だと強くなりすぎる。少なくともぼくはそう思うので、状況次第でこうやって弱めます。

だくれるのはあの人がそうしたい、そうせずにはいられないからで、秘密がどうかというのはただの口実ということになります。本が書けない、あるいは仕上げられない。それは飲んだくれるからだ。つまり、本が仕上げられないのは飲んでぶっ倒れるからだ、というのが前提となっている¹⁰¹。でも実はその逆かもしれない」

「それはないわ。絶対。ロジャーは才能は豊かなんです。最高傑作を書くのはこれからだとわたしは確信してるんです」

「素人意見だと言いましたよ。こないだの朝に、彼がもう妻への愛が冷めたかもと言いましたね。これもまた逆かもしれない」

彼女は家のほうを見て、その家に背を向けるように向きを変えた。おれも同じ方向を見た。ウェイドがドアの内側に立ってこちらを見ていた。おれが見ていると彼はバーの所にいってボトルに手を伸ばした。

彼女はすばやく言った。「口をはさんでも無駄です。わたしは絶対やりません。絶対に、あなたの言う通りなんでしょうね、マーロウさん。ほうっておいてあの人が自分で心の底から掘り起こすのを待つしかないんでしょう」

もうパイプが冷えたのでしまった。「せっかく引き出しの奥を漁っていることだし、もう一つの逆の話はどうです？」

彼女はあっさり言った。「夫は愛しています。若い娘のような愛じゃないかもしれませんがね。でも愛しています。女が若い娘なのは一度きりです。その頃のわたしが愛した男は死にました。戦死です。その人の名前は、不思議なことですが、あなたとイニシャルが同じだったんですよ。もうどうでもいいことです—ただときどき、あの人が死んだとはまだ信じられないんです。死体はついに見つかりませんでした。でもそういう人はたくさんいましたから」

彼女はじっと探るようにおれを見つめた。「ときどき—もちろんそんなしょっちゅうではないんですが—静かなカクテルラウンジに行ったり、だれもないときにいいホテルのロビーに行ったりすると、あるいは早朝や深夜にライナー船の甲板に出ると、どこか影になった隅っこでわたしを待っているあの人が見えるような気がするんですよ」彼女は間を置いて目を落とした。「ほんとに馬鹿げてますよね。自分でも恥ずかしいんです。すごく愛し合っていました—生涯一度しか訪れない、荒々しくも謎めいたあり得ない種類の愛です」

彼女は口を停め、半分トランス状態で湖のほうを見つめていた。おれはまた家のほうをふり返った。ウェイドがグラス片手に、開いたフランス窓のすぐ内側に立っていた。おれはアイリーンに視線を戻した。彼女にとっておれはもうそこになくなっていた。おれは立ち上がり家に入った。ウェイドがドリンクを持ってそこに立っていたが、かなりきついドリンクに見えた。そして目つきが怪しかった。

101 The assumption seems to be ... みんなが一般的に持っている想定は以下の通り、ということ。マーロウが考えているのはこの次の部分。ところが村上訳はここに「それが私の仮説です」とくわえて正反対に訳している。

「おれの女房とどこまで進んだね、マーロウ？」口元をひねった言い方だった。

「コナかけたりしてませんよ、そういう意味なら」

「まさにそういう意味だとも、こないだの夜にはキスまでこぎつけただろう。たぶん手の早い男のつもりなんだろうが、時間の無駄だよ、兄ちゃん。あんたがもっととともに洗練された男であつても」

おれは彼を迂回しようとしたが、がっしりした肩に遮られた。「そんなに急いでどこへ行く、おっさん。ここらにいてもらおうと心強いんだよ。家には私立探偵があまりに少なくてねえ」

「おれ一人でも多すぎる」

彼はグラスをサッと手に取って飲んだ。それを下ろして、いやらしい目つきでこちらを見た。

「そんなに慌てて飲まないで抵抗力をつけないと。言うだけ無駄ですか」

「よおしコーチ。大した人格形成の先生らしいな、あんたは。酔っ払いを教育するなんて馬鹿なまねはしちゃいけないよ。酔っ払いは教育なんかされないんだぜ、ご友人。連中はバラバラになるんだ。その過程の一部はえらくおもしろいんだぜ」彼はグラスからまた飲んで、ほとんど空にした。「そして一部はまったくひどいもんだ。だが善良なるロリング先生、小さな黒かばんを持ったろくでもないろくでなしのヒリヒリするような台詞を拝借するなら、妻に手出しするなよ、マーロウ。そりゃグツとくるよな。みんなそうだ。寝たいだろう。みんなそうだ。彼女と夢を共にして思い出のバラを嗅ぎたいだろう。おれだってそうかもな。だが共にするものなんかありやしねえんだよ、旦那——何も、何も、これっぽっちも。闇の中一人きりで取り残されるだけ」

彼はドリンクを飲み干すと、グラスを逆さにひっくり返した。

「こんなふう空っぽなんだよ、マーロウ。中には何も入っちゃいない。おれはもう思い知らされてるんだ」

彼はグラスをバーの縁において、ぎくしゃくと階段のふもとまで歩いていった。十二段くらい手すりにつかまりながら上がったところで、止まって手すりによりかかった。渋い微笑を浮かべておれを見下ろした。

「陳腐な皮肉を言って悪かった、マーロウ。あんたはいいやつだよ。あんたにもしものことがあつてほしくないからな」

「もしものことって、たとえば？」

「ひょっとすると、妻はまだあの忘れられない魔法の初恋の話をするところまでいってないのかもなノルウェーで失踪した野郎の話なんだよ。あんたは失踪したくないよな、旦那。わが特別な私立探偵さんだもん。セプルヴェダキャニオンの、荒涼とした風景の中で迷子になってたときも見つけてくれたもん」と手のひらを、磨いた木の手すりの上で回転運動させた。「そのあんたまでが失踪したら、おれにとってはひどい痛手だよ。イギリス兵どもといっしょにでかけたやつみたいにな。あいつ

はもう失踪しすぎていて、そもそも実在したのかも疑問に思えるくらいだ。遊ぶおもちゃがほしくて妻が自分ででっちあげた人間じゃないかとさえ思うほど」

「そんなのおれにわかるわけないでしょう」

彼はおれを見下ろした。いまやその両目の間に深いしわがきざまれ、口は苦々しきで歪んでいた。

「だれにもわかるわけないんだよな。妻自身だってわからないのかも。ベイベーちゃん疲れしました。ベイベーちゃんは壊れたおもちゃで遊びすぎました。ベイベーちゃんバイバイしたいです」

そして階段を上がっていった。

そこに立ち尽くしていると、キャンディが入ってきてバーまわりを片づけ始めた。グラスとお盆にのせ、ボトルを調べて何が残っているか確かめ、おれには目もくれない。というか、そう思った。すると彼が言った。「セニョール。たっぷり一杯分残ってる。無駄にしたくない」とボトルを掲げる。

「きみが飲めよ」

「グラシアス、セニョール、*no me gusta* (好きじゃない). *Un vaso de Cerveza, no más.* ビール一杯が限界です」

「賢明だね」

「酔っ払いは家に一人でたくさん」と彼はおれを見つめながら言った。「おれの英語、うまいか？」

「ああ、立派なもんだ」

「でもスペイン語で考えるね。ときどきナイフで考える。ボスは大事な人だよ。手助けなんか要らないんだ、オンブレ。おれが面倒見るんだ、ね」

「大した仕事ぶりだな、この野郎」

「*Hijo de la flauta*」と彼は白い歯の間から言った。満載のお盆を持ち上げると、肩の端と手の平でひょいを持ち上げた。給仕スタイルだ。

おれは戸口に向かって外に出て、なぜ「フルートの息子」という意味の表現がスペイン語では罵倒語になったのだろうと思案した。思案は長続きしなかった。他にも思案すべきことがあまりに多すぎた。ウェイド家はアルコール以上の問題を何か抱えている。アルコールは、それを偽装するための反応でしかない。

その夜遅く、九時半から十時の間に、ウェイドの番号にかけた。八回鳴った後で電話を切ったが、受話器から手を放したとたんに、それが鳴り出した。アイリーン・ウェイドだった。

「いまだれかがここに電話してきて、あなたじゃないかって何となく思ったんです。ちょうどシャワーを浴びようとしてるところで」

「おれでしたが、大したことじゃないですよ、ウェイドさん。なんかおれが帰ったときには頭がぼんやりしてたみたいで――ロジャーがってことです。そろそろ何かちょっとばかりロジャーについて責任を感じるようになってきたんですかね」

「夫はもう大丈夫です。ベッドですやすや寝ています。たぶんロリング先生に言われたことで、表には出さなくてもずいぶん頭にきたんでしょう。あなたにもいろいろ筋の通らないことをいろいろ言っただしょう」

「疲れてもう寝たいと言いましたよ。かなり筋は通ってると思いましたがね」

「それだけしか言わなかったなら、そうですね。では、おやすみなさい。お電話ありがとうございました、マーロウさん」

「それだけとは言いませんでした。それは言ったということです」

しばし間があり、それから「だれでもたまにはとんでもない考えを抱いたりするでしょう。ロジャーをあまり本気で受け取らないでください、マーロウさん。あの人の想像力はかなり発達してるんです。作家なら当然ですね。前回からこんなすぐに飲んだりすべきじゃなかった。できればすべて忘れてください。失礼なこともいろいろ申しあげたと思いますが」

「失礼ではありませんでしたよ。あなたの旦那さんは、自分をじっとしっかり見つめて、そこに何かあるかを見る能力のある人間です。なかなかない才能ですよ。ほとんどの人は人生において、エネルギーの半分を、もともとありもしない尊厳を守るために無駄遣いするんですから。おやすみなさい、ウェイドさん」

彼女は電話を切り、おれはチェス盤を取りだした。パイプを詰め、コマを並べてそいつらに何か見苦しいところやダメになった部分がないかを検分した。そしてゴルチャコフとメニンキンの間のチャンピオントーナメントを戦わせた。ドローまで七十二手、無敵の勢力の精鋭たちが不動の物体と対決する、甲冑なしの戦闘、血のない戦争。そして広告代理店でもなければ見つからないような、意図的な人間知力の入念な無駄遣い。

[25]

その後一週間は何事もなく、おれはただ自分の仕事を続けていた、とはいえたまたまそのときは大して仕事が入ってなかったのだが¹⁰²。ある朝、カルネ団のジョージ・ピーターズが電話をよこし、セプルヴェダキャニオンを通りがかったので、単なる好奇心でヴェリンジャー先生のところをのぞいてみたとのこと。だがヴェリンジャー先生はもういなかった。半ダースもの測量士チームがその地図をつくり、分譲宅地用の敷地割の準備をしていた。話をしてみたが、だれもヴェリンジャー先生なんて聞いたこともなかったとのこと。

「哀れなやつだよ、融資の担保信託証書をたてに差し押さえくらったんだ。調べたら、債権者は手間暇を省くために千ドルで権利放棄させて、これでだれかが地所を住宅地として切り売りして 100 万ドル儲けるんだ。犯罪とビジネスのちがいだよな。ビジネスには資本がないと。ときには、それ以外に何のちがいもないんじゃないかとさえ思うよ」

「なんともシニカルながら正しい発言。だが大手犯罪だって資本はいるぜ」

「して、その資本はどっから出てくるんだ、兄ちゃん？ 酒屋強盗をやるような連中からじゃないぜ。それじゃ、またな」

ウェイドから電話があったのは、木曜夜の 11 時 10 分前だった。声はしゃがれ、うがいでもしているようだが、なぜかウェイドだとわかった。そして電話に向かい、荒く短い息づかいが聞こえてきた。

「おれ最悪なんだよ、マーロウ。すごくひどい状態。正気を失いそう。急いできてくれないか？」

「ええ—でもちょっと奥さんと一言」

返事はなかった。がしやんという音がして、まったくの静寂、そして何やらまわりでぶつかるような音。おれは電話に向かって何かどなったが返事はなかった。時間がそのまますぎた。最後に受話器が戻されるカチッという軽い音と、切れた電話線のうなり音。

五分でおれは向かっていて。三十分強でたどりついたが、いまだに自分でもどうやったのかわからない。立体交差を羽が生えたように通過して、ヴェンチャー大通りに信号無視で入り、なんとか左折してトラックの間をすりぬけ、全般にまったくバカみたいな運転をした。エンシーノは時速百キロ近くで通り抜け、駐車車両の外側にスポットライトを当てて、いきなりドアを開けようなんて思っていたやつらが凍りつくようにした。どうでもいいと思っているときにだけ得られるようなツキがあっ

¹⁰² I went about my business which just then didn't happen to be very much business. 本来の探偵稼業してたけれど、そのときは仕事が大して入ってなかったという普通の文。だが村上と田口は「ひとつ仕事にとりかかったのだが、途中で立ち消えになってしまった」「一つ仕事をしたのだが、結局、仕事ともいえない結果に終わってしまった一件があっただけだった」。清水もそれに類するもの。なんで全員がこんな変な訳になるんだ？

た。お巡りもない、サイレンもない、赤色灯もない。ウェイド邸で起こっていきそうなことの幻影だけで、あまり快い幻影ではなかった。彼女が飲んだくれのキチガイと二人きりで家にいる幻影、彼女が階段の下で首の骨を折って転がってる幻影、彼女が鍵のかかったドアの後ろにいて、だれかがその外でわめいて入り込もうとしてる幻影、彼女が裸足で月明かりの夜を走っていて、その後からでっかい黒人が肉切り包丁持って追いかけている幻影。

全然そんなのじゃなかった。オールズモービルを進入路に飛び込ませると、家中の明かりがついていて、彼女は開いた戸口に立ってタバコをくわえていた。車をおりて板石を歩いてそっちに向かったスラックスと開襟シャツ姿。おれを落ち着き払って見た。そこらにあった興奮は、おれが自分で持ってきたものだった。

まっさきに言ったことは、おれのその後の行動と同じくらいイカレていた。「あなた、タバコ吸わないんじゃないんですか？」

「え？ いえ、いつもは吸わないわよ」と彼女はタバコを口から取って見つめ、落として踏みつけた。

「本当にたまに吸うだけ。あの人、ヴェリンジャー先生に電話したわ」

冷淡で平静な声、夜に水面ごしに聞こえてくる声だ。完全にリラックスしている。

「それは無理だ。ヴェリンジャー先生はもうあそこにはいない。おれに電話したんです」

「あらそうなの？ 電話してるのが聞こえて、だれかに急いで来てくれと言ってたから。ヴェリンジャー先生にちがいないと思ったんです」

「いまどこに？」

「倒れたの。たぶん椅子をうしろにもたれすぎたんでしょう。前にもありました。頭を何かで切ったんです。ちょっと血は出てますけど、大したことない」

「そりゃ結構。大した血だったら困りますからね。いまどこに、と聞いたんですが」

彼女は重々しくおれを見た。そして指さした。「どっかそこらへんです。道端か柵沿いの茂みの中か」

おれは身を乗り出して彼女をのぞきこんだ。「信じられん、探さなかったんですか？」このあたりで、彼女がショック状態なんだろうと判断した。そして芝生のほうをふり返った。何も見えなかったが、柵の近くに重たい影があった。

「いいえ。探してません」彼女はまったく平然と言った。「あなたが探してください。わたしはもう我慢の限界です。あなたが探して」

彼女はきびすを返して家の中に戻り、ドアを開けっぱなしにした。さほど遠くまで行かなかった。中に入って一メートルほどで、床にへなへなとくずおれてそのまま倒れたのだ。おれは彼女をすくいあげて、長いブロンドのカクテルテーブルをはさんで向き合ったソファの片方に寝かせた。脈を調べ

た。さほど弱くも不安定でもないようだった。目は閉じられ、まぶたは青かった。彼女をそこに残してまた外に戻った。

確かにそこにいた。彼女の言ったとおりだ。ハイビスカスの影の中、横向きに寝ていた。脈拍は激しく鋭く、呼吸が不自然だ。頭の後ろで何かがべたついている。話しかけてちょっとゆすった。顔を何度かひっぱたいた。何かぶつぶつ言ったが意識は取り戻さなかった。彼を引っ張って身体を起こし片腕を自分の肩にかけて、背中で彼を持ち上げ、脚をつかまえようとした。ダメだ。セメントのかたまり並みに重い。二人とも草の上にすわり、おれはちょっと一息入れてからまた試した。やっと消防士が人間を担ぐような形で抱え上げると、開いた玄関の方向めざして芝生を横切った。シャムまでの往復と同じくらいの距離に感じられた。ポーチに上がる階段二段は高さ三メートル。よろよろと長椅子のところまで行き、ひざをついて彼をごろりと下ろした。もう一度身体を伸ばすと、少なくとも三ヶ所で背骨にひびが入ったように感じられた。

アイリーン・ウェイドはもうそこにはいなかった。部屋にはおれだけだった。そのときはくたくたすぎて、みんながどこにいるか気にもしなかった。すわってウェイドを眺め、息が戻るのを待った。それから彼の頭を見た。血がこびりついている。髪が血でベトベトだ。そんなにひどそうでもなかったが、頭の傷を甘く見てはいけない。

するとアイリーン・ウェイドが隣に立っていた。夫を見下ろしているが、さっきと同じ心ここに在らずといった表情だ。

「気絶してすみません。どうしたのかしら、わたし」

「医者呼んだほうがいいでしょうね」

「ロリング先生に電話しました。うちのお医者様ですから。でも来たがりませんでした」

「じゃあ他のだれかを」

「いや来るには来るんです。気が進まないだけで。でもできるだけすぐに来ます」

「キャンディは？」

「休みの日なんです。木曜日。コックとキャンディは木曜休みです。ここではいつものことです。夫をベッドまで運べますか？」

「手助けがないと無理。毛布かなんかをお願いします。温かい夜ですが、こんな場合は簡単に肺炎になる」

毛布を取ってくるという。まったくなんて親切なんだと思った。だがまともに頭が働かなかった。ロジャーを運ぶのでくたただった。

ひざ掛け毛布をかぶせて、十五分でロリング先生がやってきた。糊のきいたカラーと縁なしサングラスに、犬がゲロを吐いたのを始末しろと言われた男の表情までしっかり揃えて。

彼はウェイドの頭を調べた。「軽い切り傷とあざだ。脳震とうの心配はない。息を嗅いだら、この人の状態はまあ自明なまでに示されると申しあげようか」

彼は帽子に手をのばした。かばんを手を取った。

「温かくしておくように。頭の傷はそっと洗って血を除いてもいい。寝てれば治る」

「おれ一人じゃこの人を二階まで運べませんよ、先生」

「じゃあそこに放っておきたまえ」おれを見たがまったく興味ないようだ。「おやすみなさい、ウェイドさん。ご存じの通りアル中治療はしないのですよ。したとしても、旦那さんを患者に加える気はありませんがね。それはご理解いただけるかと」

「治療してくれなんて言ってない。ただベッドルームまで運んで、着替えさせられるように手伝ってくれとお願いしてるだけだ¹⁰³」

「そういう君はだれだね」ロリング先生は凍りつく声で言った。

「マーロウといいます。先週ここにいました。奥さんにご紹介いただきました」

「興味深いな。妻とはどういう関係で知り合ったんだね？」

「そんなのどうでもいいでしょう。お願いしたいのは単に――」

彼は割り込んだ。「君のお願いなど興味ない」そしてアイリーンに向き直り、軽くうなずくと帰り始めた。おれは彼とドアの間に割り込んで、ドアに背中を押しつけた。

「ちょっとまった、先生。ヒポクラテスの誓いというちょっとした散文をごらんになってから、ずいぶん長いことたってるようですね。この人はおれを電話で呼んで、おれはずいぶん遠くに住んでるんだ。ひどい様子だったから、この州のあらゆる交通ルールを破ってここまで飛んできたんですよ。するとこの人が地面に転がっていたから、ここまで運んだけど、羽のかたまりとはとてもいかないのはわかるでしょうに。ハウスボーイは留守で、ウェイドを二階まで運んでくれる人はここにはだれもない。それを見て何か感じないんですか？」

彼は歯をくいしばって言った。「そこをどきたまえ。保安官の詰め所に電話して、署員をここに寄越してもらおうぞ。専門家として言うが――」

「専門家としてあんたは、ノミのウンコの固まりみたいなヤツだよ」と言っておれは道を開けた。

彼は顔を赤くした――ゆっくり、だがはっきりと。怒りでのどを詰まらせている。そしてドアを開けると出ていった。それをしっかり閉めた。それを引っ張って閉じるとき、中におれを見た。これまで受けたこともない不愉快な表情で、それを浮かべた顔も見たこともないほど不愉快な代物。

ドアから向き直るとアイリーンが笑っていた。

「何が可笑しいんです？」おれは歯を剥いた。

¹⁰³ 自宅なんだしわざわざ二階まで運ばなくても、長椅子で十分じゃん。ロリング先生の言うことが正しいじゃん、と思うんだけど……

「あなたが。齒に衣着せないのね、あなたという人は。ロリング先生がどなたか知らないの？」

「知ってますよ—そしてどんなヤツかも」

彼女は腕時計をちらりと見た。「もうキャンディが帰っているはずです。見てきますね。ガレージの裏に部屋があるんです」

アーチになった門をくぐって彼女は出ていき、おれはすわってウェイドを見ていた。この大いなる作家男はいびきをかき続けた。その顔は汗まみれだったが、毛布はそのままにしておいた。一、二分でアイリーンが戻ってきて、キャンディもいっしょだった。

[26]

メキシコ人は白黒格子のスポーツシャツに、プリーツの多い黒のスラックスとベルト、ツートーンの白黒の仔牛革の靴をはき、それが染み一つなくピカピカだった。濃い黒髪はストレートのバックになで付けられ、何かヘアオイルかクリームで輝いている。

「セニョール」と彼は言い、ちょっと嫌味ったらしいお辞儀をしてみせた。

「マーロウさんが夫を二階に運ぶのを手伝って。転んでちょっと怪我をしたのよ。手間をかけてごめんなさいね」

「*De nada* (何でもないことです)、セニョーラ」キャンディは微笑みながら言った。

「わたしはもう休みますね。くたくたです。何かいるならキャンディが用意しますから」

彼女はゆっくり階段を上がっていった。キャンディとおれはそれを見つめた。

「いかす女だねえ」と彼は打ち明け話のように言った。「泊まってくるの？」

「まさか」

「*Es lástima.* (そりゃ残念) 独り寝は寂しいだろうにねえ、あの方」

「その変な目つきはやめるんだ、小僧。こいつをベッドに運ぼう」

彼は長椅子でいびきをかくウェイドを悲しそうに見下ろした「*Pobrecito* (かわいそうに)」とつぶやいたのは、まるで本当にそう思っているかのようだった。「*Borracho como una cuba* (すっかり酔い潰れて)」

「ブタみたいに酔い潰れちゃいるが、決して小さくはないぞ。足を持ってくれ」

彼を運んだが二人がかりでも鉛の棺桶並に重かった。階段のてっぺんでオープンバルコニー沿いに進んで閉じたドアの前を通った。キャンディはあごでそれを示し、囁いた。

「セニョーラだよ。そっとノックしたら入れてくれるんじゃないね」

こいつの力が必要だったから何も言わなかった。屍体を抱えて進み、別のドアで曲がって入ると、ベッドに投げ出した。そしてキャンディの腕の肩近くをつかんだ。そこに指を食い込ませると痛むのだ。おれはその痛みを思い知らせた。彼はちょっと顔をしかめ、そして強面になった。

「名前はなんだ、メキシコ野郎」

彼は囁みついた。「放せ。それとメキシコ野郎なんかじゃない。そこらの密入国屋といっしょにするな。名前はフアン・ガルシア・デ・ソト・ヨ・ソトマヨール。チリ人だ」

「オッケー、ドン・フアン。出過ぎた真似はするんじゃない。雇い主の話をするときには、詮索するなよ、口にも気をつけるんだ」

彼は実をふりほどいて一歩下がった。黒い目が怒りに燃えている。手がシャツの中にすべりこみ、長く細いナイフが出てきた。それを刃先で手の付け根の上に、ほとんど見もせず立ててみせた。そしてその手を落として柄を空中でつかんだ。とてもすばやく、まったく苦もなくやっていた。その手が肩まで上がり、一閃するとナイフは宙を舞い、窓枠の木に刺さって震えた。

「*Cuidado* (気をつけろよ)、セニョール」と鋭く歯を剥いて言った。「それとおれに手を出すんじゃない。なめんなよ」

彼は身軽に部屋を横切り、ナイフを木から引っこ抜き、宙に放り投げて、つま先でくると回って背後でナイフを受け止めた。手首一閃でそれがシャツの中に消えた。

「お見事。だがちょっと見世物じみてるな」

彼はバカにしたように笑いながらおれに近づいた

「それに肘が折れるかもしれない。こんなふうに」

相手の右手首を捕まえ、バランスを崩させて片方に回って少し後ろに回り込むと、曲げた上腕をその肘関節の裏に持ってきた。上腕をてこにして、その肘に力を加えた。

「これで一発力を入れたら、肘関節にひびが入る。ひびだけで十分。数ヶ月はナイフ投げの芸当はできないぞ。もうちょっとキツく力を入れたら、一生だめになる。ウェイドさんの靴を脱がしてやれ」

放してやるとニヤリとした。「いい小技だね。覚えとくよ」

彼はウェイドのほうを見て靴の片方に手をのばして止まった。枕に血の染みができていた。

「ボスを切ったのはだれだ」

「おれじゃないから、兄ちゃん。倒れて何かで頭を切ったんだ。ただの浅い傷だよ。お医者さんもきたんだ」

キャンディはゆっくりと息を吐いた。「倒れるところ見たのか？」

「おれがここに来る前だよ。おまえ、この人が気に入ってるんだろ、え？」

彼は答えず、靴をぬがせた。ウェイドの服を少しずつ脱がせ、キャンディは緑と銀のパジャマを持ってきた。それをウェイドに着せて、ベッドに入れてしっかり毛布をかけた。まだ汗ばんで、まだいびきをかいている。キャンディは悲しそうにそれを見下ろし、精悍な頭をゆっくり左右に振った。

「だれかがこの人の世話しないと。おれ、着替えてくる」

「もう寝ろ。面倒はおれが見るから。必要ならいつでも呼ぶ」

彼はおれに直面して静かな声で言った。「しっかり面倒みろよ。さもないと承知しないぞ」

彼は部屋を出た。おれは洗面所に入り、ぬれタオルとバスタオルを持ってきた。ウェイドの身体を少し横にしてタオルを枕に広げ、出血が再開しないようにゆっくりと頭から血を洗った。すると、長さ五センチほどの鋭く浅い傷が見えた。なんでもない傷だ。その点はロリング先生の言うとおりだった。縫ってくれてもよかったはずだが¹⁰⁴、そこまでする必要もない。はさみを見つけて髪を十分に切り、絆創膏が貼れるようにした。それからまた背中で寝かして顔を洗った。それがいけなかったのだろう。

彼は目を上げた。最初は朦朧として焦点があっていなかったが、それがはっきりして、おれがベッド脇に立っているのを見た。手が動いて頭に上がり、絆創膏が貼ってあるのを感じた。唇が何かぶつぶつ言って、やがて声もはっきりした。

「だれが殴った？ あんたか？」

「だれも殴ってない。転んだんですよ」

「転んだ？ いつ？ どこで？」

「どこだか知らないけど電話したところで。おれに電話しましたよね。倒れるのが聞こえた。電話越しに」

「電話したって？」彼はゆっくりニヤリとした。「二十四時間対応ってわけか、え？ いま何時？」

「午前一時過ぎ」

「アイリーンはどこだ？」

「寝た。たいへんな思いをしたんだ」

彼はそれを静かに反芻した。目に苦痛が満ちた。「おれ、もしかして――」と口を止め悲痛な顔をした。

「おれの知る限り、奥さんには手を触れてないから。そう言いたいのであればね。ただ外へふらふら出て柵の近くで失神したんですよ。しゃべるのはやめて、寝なさい」

「寝る」と静かにゆっくりと、習ったことを繰り返す子どものように言った。「どういう意味だっけ」

「睡眠薬を飲んだほうがいいかも。ありますか？」

「引き出し。ナイトテーブル」

開くと、赤いカプセルが入ったプラスチックのびんがあった。セコナール、1 1/2 グレイン。ローリング医師処方。あのすてきなローリング先生。ロジャー・ウェイド夫人への処方薬。

¹⁰⁴ It wouldn't have hurt to stitch it. その切り傷を縫ってくれてもよかった、縫ってくれてもバチは当たらないといった意味。村上、田口は「縫っても痛くない」と変な訳。痛いに決まってるじゃん。清水俊二だけ正しい。

ゆすって二つ取り出し、びんを戻してナイトテーブルの魔法瓶から水をグラスに注いだ。カプセル一つで十分と言った。それを水と飲んで横になり、天井をまた見つめた。時間が過ぎた。おれは椅子にすわって彼を見た。眠くならないようだ。するとゆっくりと口を開いた。

「思い出したことがある。頼み事をきいてくれ、マーロウ。イカレた代物を書いてしまって、アイリーンに見られたくないんだ。タイプライターのカバーの下のてっぺんにある。破り捨ててくれ」

「わかった。覚えてるの、それだけ？」

「アイリーンは大丈夫なのか？ 絶対？」

「うん。疲れてるだけだ。あんたも頑張るのは止めなさいよ、ウェイド。考えないで。質問なんかすべきじゃなかった」

「考えないで、だとよ」という彼の声はいまや少し眠たげになってきた。まるで自分自身に語りかけるようだ。「考えないで、夢を見ないで、愛さないで、憎まないで。おやすみなさい、王子さま。残りの錠剤をもらおうか」

それを水といっしょに渡した。彼はまた横になり、こんどは頭をまわしておれを見られるようにした。「なあマーロウ、いろいろ書いちゃってアイリーンに見られたく――」

「もう聞いた。あなたが寝たら対処するから」

「あ、そう。ありがとう。いてくれて助かる。本当に」

また長々しい間。まぶたが重くなっている。

「人を殺したことはあるのか、マーロウ」

「ある」

「いやな気分だよな」

「それが好きな奴もいる」

彼の目は完全に閉じた。そしてまた開いたが、焦点があっていない。「なぜ好きになれるのかな？」

おれは答えなかった。またまぶたが閉じた。とてもゆっくりと、劇場のゆっくりした緞帳のようにいびきをかきはじめた。もう少し待った。そして部屋の明かりを暗くすると出ていった。

[27]

アイリーンのドアの外で立ち止まって聞き耳をたてた。中では音も動く気配もしなかったのも、ノックはしなかった。ロジャーの様子を知りたいければ、自分で見ればいい。一階の居間は明るく空疎に見えた。少し明かりを消した。玄関近くのところから、おれはバルコニーを見上げた。居間の真ん中の部分が家壁のてっぺんの高さまで上がっていて、そこにむき出しの梁が交差してバルコニーも支えている。バルコニーは広く、両側にしっかりした手すりがあって、その高さは一メートル強に見える。そのてっぺんと支柱は四角にカットされて交差梁にマッチしている。ダイニングへは四角いアーチをって行くが、そこは観音開きのルーバーつきドアで閉ざされていた。その上には、たぶん召使いの居住区があると見た。二階のその部分は壁で仕切られていて、家の台所から別階段で行くようになっている。ウェイドの部屋は書斎の上の角だった。開けばなしのドアからの光が高い天井に反射しているのが見えて、戸口のてっぺん 30 センチが見える。

おれはスタンドランプ一つを残し明かりを全部消して、書斎へと横切った。ドアは閉まっていたがランプが二つ灯されていた。革長椅子の端のスタンドランプが一つ、カウル付きのデスクランプが一つ。タイプライターはその隣の重いスタンドに載っていて、隣の机の上にはぐちゃぐちゃの黄色い紙の束があった。おれはクッション付きの椅子にすわって、配置を検討した。知りたいのは、どうやって彼が頭を切ったかということだった。彼の机の椅子にすわった。電話は左手だ。椅子のスプリングはとても弱く設定されていた。後ろに身体を傾けてひっくり返ったのなら、頭が机の端に当たったのかもしれない。ハンカチを濡らし、木材をこすった。血はない。そこには何もなし。机の上にはいろんなものがあった。ブロンズのゾウの間に並んだ本、古風な四角いガラス製のインク壺。それも試したが成果なし。どのみちあまり意味はなかった。だれか他の人が彼を殴ったのなら、その武器が部屋の中にあるとは限らない。そして、そんなことをする他の人はいなかった。おれは立ち上がり、コーニスの照明のスイッチを入れた。それが影になっていた隅にも光を投げて、もちろん答はわかってみれば簡単きわるものだった。四角い金属のゴミ箱が横倒しになって壁際に転がり、中の紙がこぼれ出ていたのだ。ひとりでにそこまで歩いて言ったはずはないから、投げられたか蹴飛ばされたんだ。その鋭い角を濡らしたハンカチで調べた。こんどは赤茶色の血の染みがついた。不思議なことは何もない。ウェイドは倒れてゴミ箱の鋭い角で頭をぶつけたんだ—おそらくはかすめるような形で当たったんだろう—そして起き上がりそのろくでもない代物を、部屋越しに蹴飛ばしたんだ。楽勝。

それからあいつはまたサッと一杯やっただろう。飲んでいた酒はソファ前のカクテルテーブルに載っていた。空のボトルが一本、四分の三残っているのがもう一本、魔法瓶入りの水、銀のボウルに水が入っていてそれはもともと氷だったものだ。グラスは一つだけで、大きなエコノミーサイズだ。

酒が入って少し気分がよくなったのだろう。朦朧とした状態で電話がフックから外れているのに気がつき、おそらくは自分がそれで何をしていたのか、もう思い出せなかったのだろう。そこで部屋を横切ってそこまで行くと、受話器をフックに掛け直したのだ。時間的にもちょうどあう。電話には何か人に強制するものがある。現代のガジェットまみれの人々は、それが大好きで、大嫌いで、こわがっている。だが、常にそれを敬意をもって扱うのだ。飲んだくれていたときですら。電話は人間にとっての呪物なのだ。

普通の人ならだれでも、電話を切る前に念のため受話器にもしもしと言ったはずだ。だが飲んで意識朦朧で転んだばかりの男はそうはいかない。どうでもいいことではある。奥さんが受話器を戻したのかもしれない。彼女は転倒と、ゴミ箱が壁にあたったときのドシンという音を聞いて、書斎にやってきたかもしれない。ちょうどその頃、最後の一杯が効いてきて、彼は家からよろよろと出て前の芝生を横切り、おれが見つけた場所で卒倒した。だれかが彼を助けにくる。その頃には、それがだれだかロジャーにはわからなかっただろう。善良なるヴェリンジャー先生かも。

そこまではいい。そこで奥さんはどうする？ 夫を扱うことも、説得することもできず、そんなことを試すのも恐いかもしれない。そこでだれかに電話して、来て助けてもらう。召使いたちは出かけているので、電話しかない。うん、確かに誰かに電話してはいた。あのすてきなロリング先生に。おれは自分が着いてから電話したものと思い込んでいた。彼女はそうだったとは言っていない。

ここから先はどうもつじつまがあわない。奥さんなら、夫を探して、怪我をしていないか確かめるはずだろうに。温かい夏の夜には、しばらく地面に寝ていても害はない。彼女では夫は動かせない。それにはこのおれでも全力が必要だった。だが、開いた戸口に立ってタバコなんかふかしてるとは普通思わないだろうし、夫がどこにいるのか本当に漠然としか知らないとも思わないだろう。それとも思ふべきなのか？ 彼女と夫との間にどんな経緯があったのか、あの状態のロジャーがどれほど危険なのか、夫に近づくのを彼女がどれほど怖がっているのかは、知るよしもない。おれが着いたとき、彼女はこう言った。「わたしはもう我慢の限界です。あなたが探して」。そして中に入って気絶のお芝居をしてみせた。

まだ気にはなったが、それ以上はどうしようもない。彼女がこれまでこういう状況に何度となく出くわし、放置する以外どうしようもないと学んで、だからそうしていたんだろうと考えるしかない。それだけ。放置。夫を扱い切れる身体能力を持っただれかがやってくるまで、地面に転がしておけ。

それでもまだ気になった。キャンディとおれがロジャーを二階まで運んでベッドに入れているのに彼女がさっさとその場を離れて自室に入ったというのも気になる。あいつを愛していると言っていた

のに。夫なんだし、5年も結婚していて、しらふのときにはとってもすてきな人——彼女自身がそう言ったんだ。飲んだくれたら別人となり、危険だから近づかないほうがいい。わかったよ。忘れようだがなぜだか、相変わらず気になった。本当に怯えていたなら、開いた戸口でタバコなんかふかして立ってないだろう。単にむかつ腹が立って思案にふけりうんざりしていたのなら、失神なんかしないはずだ。

何か別のものがある。他の女かも。それなら、アイリーンはそれを知ったばかりのはずだ。リンダ・ロリングか？ そうかも。ロリング先生はそう思っていて、それをきわめて公然と口にした。

考えるのはやめてタイプライターのカバーを開けた。ブツはそこにあった。何枚かのタイプされた黄色い紙がばらけている。アイリーンが見ないようにそれを破壊しろとのこと。おれはそれを長椅子に持っていき、この中身だと飲まなきゃとても読めないと判断した。書斎のはずれに、小さな洗面台があった。そこで背の高いグラスをゆすぎ、御神酒を注いでそれを手に、すわると読み始めた。そして読んだものは本当にむちゃくちゃだった。こんな具合。

[28]

月は満月から四日たち、壁に月光が四角い痕を示し、でかい乳色の盲目の目のようにおれを見ている。壁の目。つまらん。ろくでもないばかげた直喩。作家どもときたら。すべてが何か他のものみたいでないと気が済まない。頭がホイップクリームみたいにふわふわしているがあんなに甘くない。またも直喩。あのくだらん詐欺のことを考えるだけで吐きそう。そうでなくても吐く。たぶん。追い込まないでくれ。時間をくれ。みぞおちのムシがひたすら這い回り続ける。ベッドに入ったほうがいいかもだがベッドの下に黒い動物がいて、その黒い動物がベッドの裏がわで這い回りゴソゴソドカドカドンドンと、そしておれは叫び声を上げるとそいつも叫ぶがその声はおれ以外のだれにも聞こえない。夢の叫び、悪夢の中の叫び。こわがることなんか何もないしこわくないぞ、こわがるものなんかないが、それでもあるときそんなふうにならば横になってたら黒い動物がそれを仕掛けてきて、己をベッドの裏がわにぶつけて、おれは射精した。自分がやった他のどんなことよりもそれが気持ち悪かった。

おれは汚れてる。ヒゲ剃らないと。手が震える。汗をかいてる。自分でも臭い。脇の下のシャツが濡れて胸も背中も。袖も肘の内側のシワが濡れてる。テーブル上のグラスが空だ。いまは酒を注ぐのに両手がいる。ボトルから1個出して気合いを入れようか。あのブツの味は胸が悪くなる。そしてそれで何ができるわけでもない。結局はそれでも寝られず苛まれた神経の恐怖で全世界がうめく。いい文だな、ウェイド。もっと。

最初の二、三日はいいがそのあとダメになる。苦しんで一杯飲んでしばらく改善するが値段がどんどん上がり続けてそこから得られるものがどんどん減って、そしてもう吐き気以外何も得られなくなるところにやってくる。そしたらヴェリンジャーに電話する。よおしヴェリンジャー、これから行くぞ。もうヴェリンジャーはいない。キューバに行ったか死んだか。おかま野郎に殺された。かわいそうなヴェリンジャー、おかまとベッドで死ぬなんてなんたる宿命——それもあの手のおかまと。しっかりしろ、ウェイド。起き上がってあちこち行こうぜ。行ったことのない場所、いったん行ったら二度と戻らない場所。こ

の文章、意味が通るか？ いいや。まあいい、別にそれで金を取ろうってんじゃない。さてここでスポンサーからの長いお知らせ¹⁰⁵。

おおやったぜ。起き上がった。大した男だ。長椅子まで歩いて、いまや長椅子の前にひざまずいて両手をのせて両手で顔を覆って泣いている。そして祈り祈った自分を軽蔑する。第三度の酔っ払いが自分を軽蔑。何に祈ってるんだよ、このバカ。健康人が祈ったら、それは信仰。病人が祈ったら、それは怯えてるだけ。祈りなんてクズだ。これはおまえが作った世界で自分一人ですべて作って外からはまるで何の助けもない——いやそれも自分で作ったんだ。祈るのやめろ、このクソが。立ち上がってあの一杯を飲め。もう他のものにはすべて遅すぎだ。

よし、手に持った。両手で。グラスにも注いだ。ほとんど一滴もこぼさなかった。さて吐かずに持ってられたら。水を足そうか。さあゆっくり持ち上げて。静かに、そんなに慌てず。温かくなる。暑くなる。汗が止まらないかな。グラスは空だ。またテーブルに戻ってる。

月光に霞がかかっているがそれでもおれはグラスを置いた。慎重に、背の高い花瓶のバラの束みたいに。バラは露で頭を垂れる。おれはバラなのかも。旅路のためにショートのレストランで一杯やるか？ いらない？ オッケー、好きにしろ。着いたら二階に持ってってくれ。着いたらって、楽しみだね。二階に着けたらご褒美をもらう資格がある。おれからおれへの感謝のしるし。おれって自分に実に美しい愛情を抱いてるんだ——そしてすばらしいのが——ライバルなんかいないこと。

ダブルスペース。二階にいったり下りてきた。二階は気に入らなかった。高度で心臓がドキドキする。だがおれはタイプライターのキーを叩き続ける。無意識ってのはなんという魔術師であることか。それが営業時間中に動いてさえくれたら。二階にも月光があった。たぶん同じ月。月は変わり映えしない。牛乳配達みたいにしては去り、月のミルクはいつも同じ。ミルクの月はいつも——ちょっとまった、旦那。足がもつれてる。月の病歴に入り込む暇なんかない。おまえはこのヴァレーまるごとの面倒を見るくらい十分な病歴があるんだから。

彼女は音も立てずに横向きに寝ていた。膝を丸めていた。静かすぎると思った。寝るときはいつも何か音をたてる。寝てないのかも、寝ようとしてるだけか。近くによればわかるはず。でも転ぶかも。彼女の片目が開いた——いや開いたか？ おれを見たか、どうだろ

105 A short pause here for a long commercial. この一句はもちろん、テレビや特にラジオ番組またはその台本でコマーシャルをはさむときの言葉。文脈的にも、ここでウェイドは書くのを中断して立ち上がり、お酒を取りに行くのだ。だからそこで間があきますよ、ということ。清水俊二だけがこれを正しく理解している。他の二人はこの文章すべてについての説明だと思っている。全体に意味不明な文ではあるが、それでも部分ごとのまとまりはあるし連想の論理的なつながりがあるので、それはきちんと出したい。

う？ いや起きてたら起き上がって言っただろう。病気のダーリン？ ああ病気だよダーリン。でもくよくよしないでダーリン、この病気はおれの病気で君のじゃなくて、きみを静かで美しく眠らせて何一つ記憶せずおれから何も変なものではなくて陰気で灰色で醜いものはきみに一切近づかない。

ウェイド、おまえはしらみ野郎だ。五文字の修飾語、このクズ作家が。まったくそんな字数を使っても意識の流れもできないのかこのしらみ野郎。手すりにつかまってまた階下に下りた。一段ごとに腹が蠢き、それを酒の約束で何とか抑え込んだ。一回にたどりつき、書斎にたどりつき長椅子にたどりつき心臓が落ち着くのを待った。ボトルが手ごろな場所に。ウェイドの配置で一つ言えるのはボトルがいつも手ごろな場所にあることだ。だれも隠さず、だれも鍵をかけず、もう飲み過ぎだと思わないのダーリンなんてだれも言わない。気持ち悪くなるわよダーリン。だれもそんなことは言わない。ただバラみたいに横向きに柔らかに眠るだけ。

キャンディに金をやりすぎた。まちがい。ピーナツの袋から初めてだんだんバナナくらいにまで増やすべきだった。それから本物の小銭を、ゆっくり着実に、いつも向こうを物欲しげにしとく。最初から大金をやってすぐにいっぱしの稼ぎになりやがった。ここで一日分の費用で、メキシコでなら一ヶ月豪勢きわまる暮らしができる。だからその稼ぎを手にして、あいつは何をする？ もっと稼げると思ってるやつにとって十分な金なんてあるのか？ まあいいのかも、あのお目々キラキラのクソ野郎を殺そうか。前に善良な男がおれのために死んだんだし、白いお仕着せのゴキブリが死んだっていいだろ？

キャンディは忘れろ。針を鈍らせる方法はいくらでもある。もう一つのほうは絶対に忘れない。それはおれの肝臓に緑の炎として刻まれている。

電話しなきゃ。抑えが効かない。やつらが跳ねる、跳ねる、跳ねるのが聞こえる。ピンクのものが顔を這いずる前にだれかに急いで電話しないと。電話しないと、しないと、しないと。スー・シティ・スーに電話。もしもし交換手、長距離を頼む。もしもし長距離でスー・シティ・スーにつないで。電話番号？ 番号ないね、名前だけだ、交換手さん。十番街を歩いているよ、日陰の側を、背の高いトウモロコシの木の下、実を広げて下……わかったわかった、交換手さん。この話全部なかったことにして聞かせてやろう、じゃなくて聞かせてもらおう。あんたがおれの長距離電話を取り消すなら、ギフォードがロンドンで開きまくってるあの派手なパーティー、だれがお金払うの？ そうとも、あんたは自分の仕事が安泰と思ってるよな。思ってるよ。うんギフォードと直接話したほうがいいな。あいつにつないでくれ。あいつの執事がちょうどお茶を運んできたところ。あいつが話せないってんなら、話せる奴をこっちから寄越すまで。

おやなんでこんなものを書いたんだか。おれは何を考えないようにしてたんだっけ？ すごく悪くなってきた、すごく、すごく……¹⁰⁶

これだけ。おれはその紙を小さくたたんで胸の内ポケットの、ノートケースの裏に押し込んだ。フランス窓のところにいてそれを大きく開き、テラスに出た。月光はちょっとダメな感じだった。だがアイドルヴァレーでは夏で、夏が完全にダメになることはない。おれはそこに立ち、動きも色もない湖を眺めて思案していた。そこで銃声が聞こえた。

¹⁰⁶ この手の意味不明の断片集みたいな文章の翻訳で、ウィリアム・バロウズ仕込みのワタクシに勝てる者はいないが、既訳を見ると清水俊二がかなり健闘していて驚く。村上春樹はこの手の文への感性は特にないが、愚直に訳していてまあまあ。田口俊樹は、あちこちで説明のつもりで余計なものを加えているが、それが特に効果を挙げているとは思えない。

[29]

バルコニーではいまや明かりのついたドアが二つ開いていた——アイリーンのドアと彼のドアと。彼女の部屋は無人だった。彼の部屋から争う音が聞こえ、おれが飛び込むと、彼女がベッドにかがみ込んでロジャーと格闘していた。銃の黒い輝きが空中に飛びだし、二つの手、大きな男の手と女性の小さな手がどちらもそれを握っているが、どちらも握りは持っていない。ロジャーはベッドに起き上がり、前傾して押している。彼女は淡い青のローブを着て、あのキルト地のやつで、髪が顔一面にかぶさって、いまや両手を銃にかけて、すばやく引っ張ってそれをもぎ取った。ロジャーが朦朧としているとはいえ、彼女がそれだけの強さを持っていることに驚かされた。彼は後ろにもたれてあえぎ、彼女は後退しておれにぶつかった。

彼女はそのままおれによりかかって立ち、両手で銃を身体にしっかり押しつけている。荒い息とすすり泣きでボロボロだった。おれは彼女の身体に手をまわして銃に手を置いた。

彼女は身を翻した。そうされるまでおれがいるのに気がつかなかったかのようだ。目が見開かれ、身体がもたれかかってくる。彼女は銃を放した。鈍重な武器、ウェブリーのダブルアクション・ハンマーレスだ。銃身はまだ暖かかった。おれは片腕で彼女を支え、銃をポケットに入れて、彼女の頭越しにロジャーを見た。だれも何も言わなかった。

すると彼は目を開け、あの不承不承の微笑が唇に浮かんだ。「だれも怪我してない。天井に盲撃ちしただけだ」

彼女の体がこわばるのが感じられた。そして彼女は離れた。その目はしっかりして明瞭だ。おれは彼女を放した。

「ロジャー」という彼女の声は、病気のささやきと大差なかった。「ああするしかなかったの？」

彼はフクロウのように目を見開き、唇を舐め、無言だった。彼女はそこを離れて鏡台にもたれた。その手が機械的に動いて、顔から髪を後ろに押しやった。一度、頭からつま先まで身震いし、頭を左右に振った。そしてまた囁いた。「ロジャー。かわいそうなロジャー。かわいそうで惨めなロジャー」

彼はいまや天井をまっすぐ見上げていた。そしてゆっくり言った。「悪夢を見た。ナイフを持ったヤツがベッドの上にかがみこんでいた。だれだかわからない。ちょっとキャンディみたいだった。キャンディのはずはない」

「もちろんよ、ダーリン」と彼女は柔らかに言った。鏡台を離れてベッドの脇にすわった。手をのばして、彼のおでこをなで始めた。「キャンディはとっくに寝ているわ。それにキャンディがナイフを持ってるはずがないでしょ」

ロジャーは、同じ心ここにあらずといった機械的な声で言った。「あいつはメキシコ人だ。みんなナイフを持ってるんだ。ナイフ好きなんだ。そしておれのことを嫌いなんだ」

「だれだってあなたのことは嫌いだよ」おれは残酷に言った。

彼女はすばやく頭を巡らした。「お願い——お願いだからそんな言い方しないで。この人はわからなかったのよ。夢を見て——」

「銃はどこにありました？」おれはうなり、彼女を見て、ロジャーには注意を払わなかった。

「ナイトテーブル。引き出しの中」彼は首をめぐらしておれがにらんでいるのに出会った。引き出しの中に銃なんかなかったし、おれがそれを知っているのを彼も承知していた。睡眠薬はそこにあり、その他細々したものはあったが、銃なんかなかった。

「それとも枕の下だったか」と付け加えた。「記憶がぼんやりしている。一発だけ——」と重たい手を持ち上げて指さした——「あそこを撃った」

おれは見上げた。確かに天井のしっくいに穴が開いているようだ。それを見上げられるところに行った。確かに。銃弾が作りそうな穴だ。あの銃からだと、そのまま貫通して屋根裏に抜けただろう。おれはベッド近くに帰り、立って彼を見下ろして恐い目つきで睨んだ。

「くだらん。あなた自殺しようとしたでしょう。悪夢なんかなかった。自己憐憫に浸りきっていた。銃は引き出しだの枕の下にあったんじゃないでしょう。起き上がって銃を持ってきて、ベッドに戻って、自分というめちゃくちゃな代物をすべて一掃する準備万端だった。でもどうせそれだけの勇気がなかったんでしょう。何を撃つ気もなく一発撃った。そしたら奥さんが駆け込んできた——それがあなたの求めていたものでしょうに。哀れみと同情が目当てだよな、ご同輩。それだけだ。さっきのもみ合いだって、ほとんどがお芝居だ。あなたが本気でがんばれば、彼女が銃をもぎ取ったりできるわけがない」

「おれは病気なんだ。でもあんたの言う通りかも。それがどうかしたか？」

「どうかしますよ。こんな具合。精神病棟に入れられるんです。そして言っておくと、ああいう場所を運営する人たちは、ジョージア州の作業囚人看守並の同情心しか持ち合わせちゃいない」

アイリーンがいきなり立ち上がった。そして鋭くいった。「もうたくさん。この人は本当に病気なんです。あなたもわかってるはずよ」

「この人は病気になりたいんだ。おれはそれがどんな代償をもたらすか、改めて教えているだけです」

「いまそれを言わなくてもいいでしょう」

「部屋に戻って」

彼女の青い目がぎらついた。「よくもまあ—」

「部屋に戻って。さもないと警察を呼ぶ。こういうのは通報すべきものなんだ」

彼はほとんどニヤリとした。「そうそう、警察呼んで。あんたがテリー・レノックスのときに呼んだのと同じだ」

それは一切無視した。まだ彼女を見ていた。いまや消耗しきって弱々しく、そしてすごく美しかった。激しい怒りの一瞬は過ぎた。手を伸ばして彼女の腕に触れた。「大丈夫。この人、もうやりません。ベッドに戻って」

彼女は長いこと夫を見つめてから、部屋を出た。開いたドアから彼女が消えると、おれは彼女がすわっていたベッド脇に腰を下ろした。

「薬もっと？」

「もういい。寝なくてもかまわない。ずっと気分がよくなった」

「あの一発の話は的を射ていましたか？ 全部イカレたお芝居だった？」

「おおむねそんなところ」と彼は顔を背けた。「ちょっとどうかしてた」

「本気でやるならだれも自殺は止められない。おれはわかってるし、あなたもわかってる」

「そうだな」彼はまだ顔を背けていた。「頼んだことはやってくれたか—タイプライターの代物だけ」

「うん。覚えているとは驚きだ。かなりイカレた書き物だった。不思議なことに、タイプの字は乱れてない」

「そんなことはいつもできる。酔っていてもしらふでも—少なくともある程度まではね」

「キャンディのことは心配しないで。あいつがあなたを嫌っているというのはまちがいだ。それと、だれもあなたなんか好きじゃないと言ったのは悪かった。アイリーンを苛立たせ、怒らせようとしてただけなんだ」

「なぜ？」

「今夜すでに一回気絶してるんだ」

彼は軽く首を振った。「アイリーンは気絶なんかしない」

「じゃああれは演技だったんだ」

それも彼のお気に召さなかった。

「あれはどういう意味だったんです—善良な男がおれのために死んだ、というのは？」

彼はそれを考えて見たが顔をしかめた。「ただのゴミクズ。夢を見たと言っただろ—」

「あなたがタイプで打ったあのたわごとの話ですよ」

彼はおれを見て、枕の上で頭をまわし、まるでそれがすさまじく重いとでも言うようだった。「別の夢」

「もう一度聞こう。キャンディに何を捕まれてる？」

「うるせえよ」と彼は目を閉じた。

おれは立ち上がってドアを閉じた。「いつまでも逃げ続けるわけにはいかないよ、ウェイド。キャンディは強請屋に十分なれる。楽なもんだ。そして親切そうにそれをやれる—あなたを好きでありながら金を同時にむしり取る。ネタは何—女？」

「あのロリングのバカを真に受けるとはな」と彼は目を閉じて言った。

「必ずしもそうじゃない。その妹はどうです—死んだほうは？」

ある意味で当てずっぽうだったが、たまたまそれが大当たりだった。彼の目がぼっちり見開かれた唇にツバの泡が見えた。

「それだから—あんたはここに來たのか？」とゆっくり囁く声で尋ねた。

「わかってるくせに。呼ばれたんだよ。あなたが呼んだんだ」

彼の頭が枕の上で前後に転がった。セコナールを飲んだのに、彼は自分の神経に苛まれていた。顔は汗まみれだ。

「妻を愛しながら浮気をした夫はおれが初めてなんかじゃない。ほっといてくれ、このやろう。ほっといてくれ」

おれは洗面所にいって、フェイスタオルを持ってくると彼の顔を拭った。嘲笑するようにニヤリとして見せた。おれは悪役の中の悪役。相手が倒れるのを待って、そいつを蹴飛ばし、さらに蹴飛ばすこいつは弱い。抵抗もできず蹴り返すこともない。

「まあその話はいずれ、いっしょに詰めましょうかね¹⁰⁷」とおれ。

「おれは狂ってなんかない」

「狂ってないと思いたいだけだろ」

「ずっと地獄の中にいたんだ、おれは」

「そりゃそうだ。見りゃわかるよ。興味深いのはその理由なんだ。ほれ—飲みな」おれはセコナールをもう一錠と水をもう一杯ナイトテーブルに出しておいた。彼は片ひじで身を起こしてコップをつかもうとしたが、丸十センチも目測を誤った。だから手に握らせてやった。なんとかそれを飲んで錠剤

107 この下りは思わせぶりだが、何を具体的に言っているのかはよくわからない。自分はヒールだと言うので、ロジャーの浮気のコアを突いたからそこをビンバシ責める、と言いたいのかな、と思うと「はいはい、それはこんどね」と流し、「狂ってない＝ホントだぞ」と言われたら「いやそう思いたいだけだろ」という。おれはヒールだぜ、と言いつつヒールになりきれず、相手をさっさと寝かすのを優先する、根の優しい様子を見せたい、ということなのかね。そのまま訳すしかない。既訳もだれも「そうか!」という解釈は出せず、そのまま訳してる。

を飲み込んだ。ほとんど死人のようだ。今夜はだれも階段から突き落としたりしない。おそらく、いつの夜にもそんなことをしたことはないだろう。

彼のまぶたが重くなると部屋を出た。ウェブリーの重みが腰にずしりときて、ポケットを引っ張り下ろしている。おれはまた階下に戻ろうとした。アイリーンのドアが開いていた。その部屋は暗かったが、月光が十分あって、彼女が額に入ったようにドアのすぐ内側に立っているのが見えた。何か名前らしきものを呼びかけたが、おれの名前じゃなかった。おれは彼女に近寄った。

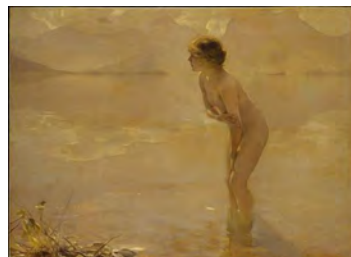
「声を下げて。やっと眠りに戻ったんです」

彼女は柔らかく言った。「あなたが戻ってくるのはわかってたわ。十年たっても」

おれは彼女を見つめた。おれたちのどっちかがイカレてる。

彼女は同じ愛撫するような声で続けた。「ドアを閉じて。これまでずっと、あなたのために他のだれにも触らせなかったの」

おれはふり返ってドアを閉じた。そのときにはいい考えに思えたのだ。彼女のほうをむくと、すでにおれのほうに倒れ込むところだった。だから抱きとめた。そうするしかなかった。彼女は身体をきつく押しつけてきて、髪がおれの顔を撫でた。口が上を向いてキスを求める。震えていた。唇が開き、歯が開き、舌がつきだされた。そして手が下がり何かを引っ張ると、着ていたローブが開いて、その下の彼女は『九月の朝』のように素っ裸だが¹⁰⁸、絵のような恥じらう様子はまるでない。



「ベッドに連れてって」と彼女はささやいた。

そうした。彼女にまわした腕がむき出しの肌に触れた、柔肌、柔らかくまとわりつく肉体だ。彼女を抱え上げ、ベッドまで数歩運び、下ろした。彼女はおれの首に腕をまわしたままだ。のどでかすれるような荒い息をたてている。そして悶えてうめいた。拷問に等しい。おれは牡馬並に興奮していたもう抑えがきかなくなっていた。こんな女からこんな誘いをうけるなんて、どこでもそうそうあることじゃない。

キャンディに救われた。かすかなきしみ音が聞こえ、はっとふり返るとドアノブが動いていた。おれは身を振りほどいてドアに飛びついた。それを開いて飛び出すと、メキシコ野郎が廊下を疾走して階段を下りるところだった。途中で止まってふり返り、おれに下卑た目を向けた。そして姿を消した。

おれはドアに戻ってそれを閉じた—今度は外から。ベッドの女から何やら異様な音が聞こえたが、いまやもうそれだけだ。異様な音。魔法が解けた。

108 芸術作品を比喻に出すとは高尚な、と思ったら、wikipedia によれば 1912 年にわいせつ物として訴えられて、エロ作品としてやたらに話題になって一世を風靡したそうな。だから当時の感じでは高尚さよりエッチな言及で、マローの教養を示すものというわけでもないらしい。

おれはすばやく階段を下りて、書斎に入り、スコッチのボトルをひつつかむとそれを煽った。もう飲み込めなくなると、壁にもたれてぜいぜいと息をつき、そいつが体内で燃えて、その煙が脳に達するに任せた。

夕食からはずいぶんたっていた。多少なりともまともなことからずいぶんたっていた。ウィスキーがガツンとすばやく効いてきて、おれはそのままがぶ飲みし続けて、やがて部屋がぼんやりして、家具がすべて変な場所となり、ランプの明かりが野火か夏の雷のように見えてきた。そしておれは革の長椅子のうえにつぶれて、胸の上でボトルのバランスを取ろうとした。空っぽらしい。転がって床にどすんと落ちた。

まともに意識したのはそれが最後のできごとだった。

[30]

日光の束がおれの踵の片方をくすぐった。目を開くと、霞のかかった青空に、木のとっぺんが動いているのが見えた。寝返りをうつと革が頬に触れた。斧に頭をかち割られた。起き上がった。身体に毛布がかかっている。それをはねのけて、床の上に立ち上がった。目をこらして時計を見た。時計は六時半の一分前を示していた。

立ち上がったが、全力が必要だった。意志力が必要だった。かなり消耗したし、もともと昔ほどの体力はない。つらく重い年月でもうボロボロだ。

なんとか部屋を横切って洗面所まで行き、ネクタイとシャツを脱ぎ捨てて、両手で顔に冷水を浴びせ、頭にも浴びせた。びしょびしょに濡れると、タオルで荒っぽく拭いた。シャツとネクタイを身につけなおし、上着に手を伸ばすと、ポケットの銃が壁にぶつかった。それを取り出し、シリンダーをフレームから振って外し、それを傾けて弾を手の中に落とした¹⁰⁹。全部で五個、一つは黒くなった薬莢だけ。そこで考えた。何の役にたつもなか、弾は必ずもっとあるんだ。そこでそれを元通りに戻し銃を書斎に持って行って机の引き出しの一つにしまった。

顔をあげるとキャンディが戸口にたって、白いお仕着せでピカピカで、髪は後ろになで付けて輝く黒で目つきは厳しい。

「コーヒーいるか？」

「ありがとう」

「おれ、ランプ消した。ボスはだいじょうぶ。寝てる。おれ、ドア閉めた。なんで飲んだくれた？」

「そうするしかなかった」

彼はおれをせせら笑った。「モノにできなかった、え？ 蹴り出されたんだな、探偵さん」

「そう思いたければ」

「今朝はタフじゃないな、探偵さん。全然タフじゃない」

「いいからコーヒー持ってこいよ」おれは怒鳴った。

「*Hijo de la puta!* (この売女の息子が!)」

109 ここの田口は、銃の構造がまちがっているということで原文を変えている。シリンダーを外して、というのがダメで、銃身を折るというふうに変更している。写真のようになるということですな。そういう原文改ざんにはぼくは反対だが、絶対ダメではない。



一飛びでおれはやつの腕を捕まえた。彼は身動きしなかった。軽蔑したようにおれを見るだけだった。おれは笑って腕を放した。

「君の言う通りだ、キャンディ。全然タフじゃないな、おれは」

彼は身を翻して出ていった。すぐに銀のお盆と小さな銀のポットに入ったコーヒーと、砂糖にクリーム、きちんとした三角ナプキンを持って戻ってきた。それをカクテルテーブルに置き、空のボトルだの各種酒関連のものを取りのぞいた。別のボトルを床から拾った。

「新鮮。できたて」と言って出ていった。

二杯をブラックで飲んだ。そしてタバコを試した。大丈夫だ。まだ人間のままだ。するとキャンディが部屋に戻ってきた。

「朝飯いる？」とむつつり尋ねた。

「いや結構」

「よし、出てけ。おれたちはあんたなんかいてほしくない」

「おれ『たち』ってだれ？」

彼は箱のふたを持ち上げて自分でタバコをくわえた。火をつけて、不遜な様子でおれに煙を吹きかけた。

「ボスの面倒はおれが見る」

「それで稼いでるのか？」

彼は顔をしかめ、そしてうなずいた。「そうとも。いい金」

「その副業でいくらだ—知ってることを黙ってるので？」

彼はスペイン語に戻った。「*No entendido* (理解できない)」

「わかってるくせに。いくら強請り取ってる？ ニヤードくらいだろうな」

「どういうこと？ ニヤードって」

「二百ドル」

「あんたニヤードくれよ、探偵さん。ボスに昨日彼女の部屋から出てきたの黙っててやる」

「そんだけあればおまえ見たいな密入国者がバス一杯買えるよ」

彼は肩をすくめてやりすごした。「ボスは怒るとかなり乱暴だぜ。大人しく払えよ、探偵さん」

「チンピラのやることだな」とおれは軽蔑するように言った。「ケチな小銭しか扱えない。酔うとハメを外す男は多いんだ。それに彼女は全部知ってる。おまえ、何も売り物がないぞ」

目がぎらついていて。「とにかく、もう来るなよ、はったり野郎が」

「もう行くよ」

おれは立ち上がってテーブルをまわった。彼はこっちに向き合うだけ動いた。彼の手に注意したがどうやら今朝はナイフを持っていないようだ。十分近づいたところで、顔にビンタを食らわした。

「おれは使用人なんかには売女の息子呼ばわりなんかされないんだよ、貧乏メキシコ人めが。ここに用があるし、好きなときにくるからな。これから口に気をつけろ。ピストルでぶん殴られたいか。お前のそのカワイイ顔も二度と見られたもんじゃなくなるぜ」

彼はまったく反応しなかった。ビンタにも。ビンタと貧乏メキシコ人呼ばわりは、彼にとってとんでもない侮辱のはずだ。だが今回は無表情に立ち尽くし、身動きもしなかった。そして無言でコーヒーのお盆を手にして運び出した。

「コーヒーありがとさん」おれはその背中に言った。

彼は歩き続けた。その姿が消えると、おれはアゴの無精髭に触れ、身震いして、帰ることにした。ウェイド一家はもうおなかいっぱいだ。

居間を横切るとアイリーンが白のスラックスとつま先の開いたサンダル、そして淡い青シャツ姿で階段を下りてくるところだった。彼女はまったく意表をつかれたというようにおれを見た。「いらっしゃるとは知りませんでした、マーロウさん」と、まるでおれを丸一週間も見ておらず、その一週間前もちょっとお茶に來ただけ、とでもいうようだった。

「銃は机に入れておきました」

「銃？」そしてハッと気がついたらしい。「ああ、昨夜はかなりゴタゴタしましたね。でももうお帰りになったと思っていました」

おれは彼女の近くに歩み寄った。細い金のチェーンを首に巻き、白エナメルに金と青のついた華やかなペンダントをつけていた。青エナメル部分は翼のように見えたが、広がってはいない。それを背景にして、幅の広いエナメルと黄金の短刀があり、それが巻物を突き刺している。そこに書かれたことは読めなかった。何やら軍の記章だ。

「飲んできました。意図的に、みっともなく。ちょっと寂しかったもので」

「無理しなくてもよかったのよ」と言う彼女の目は水のように澄み切っていた。実にあからさま¹¹⁰。

「見解の相違ですな。もう帰ります。戻るかどうかはわからない。銃の話は聞いてましたよね？」

「夫の机に入れたんでしょう。どこか他のところにしまうほうがいいのかも。でも本気で自殺するつもりじゃなかったんですよね、夫は」

「さあどうだか。でも次はやるかもしれない」

¹¹⁰ アイリーンは昨日のことをはっきり覚えている。あれはおそらく意図的ですからあり、そしていまもあきらめずに誘惑を続ける気満々。だんだん距離を測りつつも言葉遣いが次第にため口になり、思わせぶりになってくる。マーロウはそれにのらないように頑張って距離を保つようにしている。

彼女は首を振った。「そうは思いません。本当に。昨日は本当に助かりました、マーロウさん。どうお礼をすればよいやら」

「昨晚はかなり頑張ってくださいましたが」

彼女は赤面した。そして笑い、おれの肩越しに目をそらしながらゆっくり言った。「夜半に、とても奇妙な夢を見たんです。昔知っていた人がこの家の中にいたんです。もう十年も前に死んだ人が」その指が上がって金とエナメルペンダントに触れた。「だから今日はこれをつけてるんです。彼がくれたものなんです」

「こっちも奇妙な夢を見ましたよ。でもそれは話しますまい。ロジャーがどんな具合か教えてください。他に何かお役にたてることがあるかも」

彼女は視線を下げておれを目を合わせた。「戻ってこないとおっしゃったのに」

「戻るかわからない、と言ったんです。戻らざるを得ないかもしれない。そうならないことを祈りますよ。この家には何かすごく変なところがある。そして酒のせいなのはそのごく一部だ」

彼女はおれを見つめて顔をしかめた。「どういうこと？」

「それはご自分でもおわかりなんじゃありませんか」

彼女はそれを慎重に考えた。指はまだそっとペンダントに触れている。そしてゆっくり耐えるようなため息をつき、静かに語った。「他に女がいるなんて珍しくもない。しょっちゅう起こることよ。でもそんなの致命的ってわけでもないでしょうに。お互い、話の方向がずれてるんじゃないかしら？ そもそも同じことについて話してるのかどうか¹¹¹」

「そうかも」とおれ。彼女はまだ階段に立っていた。下から三段目だ。まだペンダントに指で触れている。まだ黄金の夢みたいな姿だ。「特にその他の女がリンダ・ロリングだと思ってるなら」

彼女はペンダントから手を下ろし、もう一段階段を下りてきた。そしてどうでもよさそうに言った。

「ロリング先生はわたしと同意見のようでしたけど。彼は何か情報をつかんでるはずでしょう」

「先生はヴァレーの男の半分とあれを演じて見せてると言ったじゃないですか」

「そうでしたっけ？ それは—ああいうときの常套句だったからよ」彼女はまた一段下りてきた。

111 この部分が『長い別れ』の杉江松恋解説で比較されていた (p.591) のを見て、こんな翻訳をやる気になった。

やりとりの意味合いとして、マーロウは、ロジャーの惨状は酒のせいじゃない、おまえ何か知ってるな、とアイリーンに言っている。アイリーンは、それがわからないふりをして、ロジャーとリンダが浮気してる話でしょう、とはぐらかして誘導しようとしているが、マーロウがそれにのりそうもないのも感じている。それが話のずれということ。杉作の指摘通り、ここの訳は三者三様。でも本当は、特に意味は三様であってはいけなはず。

村上の訳は「ものごとの陰には常に女あり (...) ちらちらとほの見える、というところかしら。それはべつに宿命的な相手である必要はありません」と、まったく原文をの意味を変えてしまいニュアンスすら無視してひとりよがりな独白で悦に入っている醜悪な代物。fatal を普通に致命的と訳さず「宿命的」としたのも同様。田口は「「別な女とはいつもいるものよ。まあ、いつもというわけじゃなくても。必ずしも宿命的なものでないけれど」とさらに何を言っているのかわからない。清水「いつでも、ほかに女がいたんですの (...)」でも深刻に考えるほどの問題とは思えませんわ」はまだ意味がきちんとしていてる。

だから清水はニュアンスがわかったが、村上はそれがわからず勝手に創作、田口もわからず村上訳をにらみつつ直訳を苦し紛れにひねった、という感じ。もうちょっとわかって訳そう。

「まだヒゲを剃ってないんですけど」とおれ。

それで彼女はひるんだ。そして笑い出した。「え、別に愛を交わしてほしいと期待してたわけじゃないのよ」

「そもそもおれに何を期待してたんですか、ウェイドさん——最初に、おれをロジャー探しに行くよう説得したときのことです。なぜおれだったんですか——おれに何があったというんですか？」

「信念を捨てませんでしたよ。決して楽ではなかったときにも」と彼女は静かに言った。

「感謝感激。でもそんな理由じゃなかったと思いますよ」

彼女は最後の階段を下りて、おれを見上げていた。「じゃあどんな理由？」

「あるいはそれが理由だったなら——そんなのえらくダメな理由ですよ。下手すりゃ世界最悪の理由」

彼女はちょっとばかりしかめっ面を浮かべた。「なぜ？」

「だっておれのやったこと——その信念を捨てないとかいうの——それはどんなバカでも二度とやらないことだからですよ」

彼女は軽い口調で言った。「まあまあ、なんだかずいぶんと謎めいた会話になってきたわね」

「あなたがずいぶん謎めいた人だから、ウェイドさん。ごきげんよう、ご幸運を祈ります。そして本気でロジャーのことを少しでも気に掛けてるなら、まともな医者を見つけたほうがいいですよ——それも急いで」

彼女はまた笑った。「あら、昨晚の発作なんて軽いものよ。ひどい発作はあんなのじゃすまないわ今日はもう午後には起きて仕事を始めるでしょう」

「そうでしょうとも」

「いえ本当です、絶対。あの人のことは十分にわかってますから」

おれは彼女に、最後の痛烈な一撃をくらわせたが、かなり意地悪な台詞になった。

「あなた、本気で彼を救いたいなんて思っていないでしょう。救おうというポーズをしたいだけで」

「今のは」と彼女は強く言葉を切った。「わたしに対してあんまりな言い様でしょう」

彼女はおれの横を通り過ぎて、食堂のドアを通り抜け、すると大きな部屋が空っぽになり、おれは玄関までそれを横切って外に出た。このまばゆく隔絶されたヴァレーの完璧な夏の朝だった。街からは離れすぎていてスモッグはこないし、低い山で海の湿気とも切り離されている。これから暑くはなるが、それもすてきで洗練された、またとない形の暑さで、砂漠の暑さのような壮絶なものではなく街の暑さのようなベタベタした臭い暑さでもない。アイドルヴァレーは暮らすには完璧な場所だ。完璧。すてきな人々にすてきなうち、すてきな車、すてきな馬、すてきな犬、へたをするとすてきな子どもたちすら。

だがマーロウという名の男は、そこから逃げ出したいだけだった。しかも急いで。

[31]

家に帰りシャワーを浴びて、ヒゲを剃り着替えて、やっとさっぱりしてきた。朝食を調理して食皿を洗い、台所とサービスポーチを掃除して、パイプを詰めて電話応答サービスに電話した。着信ゼロ。事務所なんか行くまでもない。またも蛾の死骸と新たなほこりの層があるだけだ。金庫にはマディソンの肖像がある。出かけてあれで遊んでもいいな、それとまだコーヒーの香りがする、手の切れそうな百ドルの新札五枚。そうしてもいいが、したくなかった。おれの中で何かが不機嫌になっていた。あれはどれも本当におれのものとは言えない。あの金でおれから何を買おうってんだよ。どこまで死人に忠義立てしなきゃいけない？ やれやれ。二日酔いの霧越しに見た人生か。

永遠に続くように思える種類の朝だった。おれはぐったり疲れてぼーっとして一分過ぎるごとにそれが空虚へと落ち込み、まるで燃料の尽きたロケットのように柔らかい回るような音を立てるのだ。鳥たちが茂みでさえずり、車が果てしなくローレルキャニオン大通りを往き来する。いつもならそんなものは耳に入りさえしない。だがおれは陰気で苛立っていて陰悪で過剰に敏感だった。おれは二日酔いをつぶすことにした。

普通、おれは朝には飲まない。南カリフォルニアの気候は朝飲みには軟弱すぎるのだ。代謝の速度が追いつかない。だが今回はトールグラスに冷たいのを混ぜて、シャツを開けて安楽椅子にすわり、雑誌を拾い読みして、二重の生活を送り精神科医二人（一人は人間で一人は何やら巣にいる昆虫みたいなもの）にかかっていたという男のイカレた話を読んでいた。そいつはその二人の間を言ったり来たりしていて、話全体がわけわからんほどヘンテコだが、何やら調子っぱずれなおかしさを持っていた。おれはドリンクを慎重に、少しずつすすりながら扱って自分の様子に気をつけていた。

昼頃に電話がなっそう言った。「リンダ・ロリングです。事務所にお電話したら電話サービスに自宅にかけろと言われたもので。ちょっとお目にかかりたいんですが」

「なんで？」

「それを面と向かって説明したいんです。たまには事務所に来たりするんでしょうね」

「ええ、たまにはね。なんか金になる話っすか？」

「そんなふうに考えたことはなかったけれど、でも支払ってほしいなら反対はしません。一時間ほどでそちらの事務所に行けます」

「最高っす」

「ちょっとどうしちゃったんですか」彼女は語気鋭く尋ねた¹¹²。

「二日酔いでして。でも動けないほどじゃない。行きますよ。それともこっちに来ます？」

「事務所のほうがありがたいですわ」

「ここは静かですてきな場所なんですよ。道はどん詰まりで近くにはご近所もない」

「そういうのには魅力を感じませんわ—何をほのめかしているのかわかりませんけど」

「だれもおれをわかっちゃくれないっすよ、ロリングさん。おれは謎めいてるんだ。わかりましたよ頑張っって檻まで行きます」

「そうしていただけると助かります。では」と彼女は電話を切った。

そこにたどりつくには時間がかかった。途中で道草してサンドイッチを買ったからだ。事務所の空気を入れ換えてブザーのスイッチを入れ、仕切りドアから頭を突き出すと、彼女はすでにそこにいてメンディ・メネンデスがすわっていたのと同じ椅子にすわり、見ている雑誌もひょっとして彼と同じだったかもしれない。今日は褐色のギャバのスーツを着ていて、かなりエレガントに見えた。雑誌を脇におき、真剣な目つきでおれを見てこう言った。

「おたくのボストンしだ、水をやったらどうですか。鉢も植え替えないとだめじゃないの。気根が出過ぎてる¹¹³」

おれは彼女のためにドアを開けて押さえた。ボストンしだなんかどうでもいい。彼女が中に入るとドアがひとりでに閉まるに任せ、お客用の椅子を出した。彼女はオフィスに、ありがちな検分を行った。おれは机の自分側に回った。

「どう見ても、決して豪勢とは言いがたい場所ですわね。秘書もおりませんか？」

「ケチな人生ですが、慣れてるもんで」

「そしてさほど儲かっているとは見えませんわね」

「それはどうかな。場合による。マディソンの肖像、ご覧になりますか？」

「何、ですって？」

「五千ドル札。依頼金。金庫にしまってある」おれは立ち上がりそっちに向かった。つまみを回転させて開き、中の引き出しの鍵をはずして封筒を開き、それを彼女の前に落とした。彼女はそれを、何やら驚愕したように見つめていた。

112 二日酔いでヘロヘロなんで、マーロウはすごく粗雑な口ぶり。だからリンダはもとから怒っているけれど、ここでさらにふざけんなどと思ってる、マーロウのぞんざいな口ぶりは、既訳はどれも表現できておらず、ここもリンダが普通に質問するだけになっている。

113 いきなり前置きもあいさつもなしにこの話が出てくるので、リンダはすでに平常ではほとんどため口状態。問い詰めで口調がフォーマルになると敬語、特に嫌味を混ぜると慇懃無礼の敬語だが、怒りが前面に出るとそれもため口に戻る。マーロウもほとんどそれに近づいているけれど、まだ仕事の枠内で話をしているので、おおむね敬語だが、相手の感情的な発言に答える場合はため口まじりの感じ。そういう認識で山形は訳している。既訳はすべて平板すぎると思う。

「この事務所に惑わされちゃいけませんぜ。以前、二千万ドルほど現金抱えた爺さんの仕事をしたことがあるんです。あんたのご老体だってそいつにはあいさつするでしょう。その人の事務所もここに負けず劣らずでしたがね、ただちょっと耳が遠くて、天井にあの防音のやつがあったんです。床には茶色いリノリウム、じゅうたんなし」

彼女はマディソンの肖像を手にとって、それを指の間で引っ張り裏返した。そしてまた置いた。

「テリーにもらったんでしょう、ちがう？」

「いやあ、なんでもお見通しですねえ、え、ロリングさん」

彼女はお札を遠くに押しやり、顔をしかめた。「あの人は一枚持ってたわ。シルヴィアと二度目の結婚以来ずっと持ち歩いてたのよ。キチガイ資金って呼んでたわ。それが死体にはなかった」

「それは他にも理由が考えられる」

「もちろん。でも五千ドル札を持ち歩く人がどれだけいるの？ そんな大金をあなたにあげられる人で、こんな形でくれる人が何人いるの？」

答えるまでもなかった。おれはうなずいただけ。彼女は憤然と続けた。

「そしてその報酬のためにあなたは何をすることになってるの、マーロウさん？ それも話せないの？ あのティファナまでの最後のドライブで、テリーはいくらでも話す時間はあったはず。こないだの晩には、彼の自白書を信じていないと断言なさったわね。あの人、殺人者をこの中から見つけろといって、自分の妻の愛人リストでもくれたのかしら？」

おれはまたも返事をしなかったが、こんどは別の理由のせいだった。

「そしてそのリストに、ひょっとしてロジャー・ウェイドという名前があったんじゃないの？」と彼女は激しい口調で尋ねた。「テリーが奥さんを殺さなかったんなら、殺人者は何やら暴力的で無責任な男、キチガイかひどい飲んだくれとしか考えられないわ。そんな種類の男でなければ、あなたの忌まわしい表現を借りれば、彼女の顔を血みどろのスポンジになるまでぶちのめしたりはできないはずよ。あなたがウェイド家にえらくお役にたってあげているのはそのせいかしら——いつもいるママのお手伝いさん、呼び出しがあればいつでもきて、飲んだくれているときには介抱してあげて、迷子の子は見つけてあげて、寄る辺ないときはおうちに連れて帰ってあげたりして」

「いくつかの点を訂正させていただきませんか、ロリングさん。テリーがあの美しい版画をくれたかどうかはさておき、リストなんかくれてないし、名前も挙げてない。唯一頼まれたのは、どうもあなたがおれがやったと絶対に思ってるらしきこと、つまりあいつをティファナまで車で送るというだけです。ウェイド家と絡んだのは、ニューヨークの出版人のせいで、そいつはロジャー・ウェイドに本を仕上げさせようと必死だったんだ。そのためにはロジャーをそこそしらふに保つ必要があつてそしてそれはさらに、ロジャーを泥酔させるような特別なトラブルがないか探す仕事も含まれる。そ

んなトラブルがあって、それが解明できるなら、次の一步はその除去を試みるわけですね。試みると言ったのは、それが無理かもしれないからです。でもやるだけやってみてもいいから」

彼女は軽蔑をこめて言った。「あの人が泥酔する理由は、簡単な一文で教えてあげられる。結婚相手の、あの貧血ブロンドの見世物女よ」

「さあどうですかねえ。貧血とはいえないと思いますが」

「あらそう？ それはそれは」彼女の目がぎらついた。

おれはマディソンの肖像を手にとった。「そこんどこ、変にこだわらないでくださいよ。おれはあのご婦人と寝たりはしてません。ご期待に添えず申し訳ない」

おれは金庫のところにいて、金を鍵付きの引き出しにしまった。金庫を閉じてダイヤルを回した「考えてみれば、あの女と寝ている人なんているとはとても思えない」

おれは戻って机の角にすわった。「なんかトゲトゲしいですね、ロリングさん。どうしてです？ あの我がアール中の友人にいまだにお熱とか？」

彼女は噛みつくように言った。「そういう物言いは大嫌い。本当に。うちの夫が演じるあの馬鹿げたドタバタで、何やらわたしを侮辱する権利があるとでも思ってるんでしょうね。いいえ、ロジャー・ウェイドにお熱なんかじゃありません。そんなことは一度もない——彼がしらふできちんとしていたときですら。あんなになった今となってはなおさらです」

おれは自分の椅子にひよいとすわり、マッチ箱に手をのぼし彼女を見つめた。彼女は腕時計を見た。「あんたら大金持ちってのはすげえっすよね。自分の言いたいことは、それがどんなに意地悪でも、まったく無問題。ウェイド夫妻を愚弄するようなことをほとんど知りもしない相手に言っておきながら、ちょっとばかりやり返してあげたら、それは侮辱。わかりましたよ。下品にいきましようか。飲んだくれはいずれ、尻の軽い女といっしょになります。ウェイドは飲んだくれですが、あなたは尻軽女じゃない。あんなのは、あなたの育ちのよい旦那さんがカクテルパーティーの座興に持ち出した、何の気なしの戯れ言だ。本気じゃないし、ただの受け狙い。そういうことであなたは除外、尻軽女を他に探しましょう。さてどこまで探さないといけませんかね——あなたと関わりがかなり深く、あなたにここまで足を運ばせ、おれと嫌味合戦させるほどの人を見つけるには？ かなり特別な人のはずですよ、そうでしょう——だってそうでなければ、あなたが気にするはずもない」

彼女はまったく音も立てずにすわり、じっと見るばかりだった。口の端が白くなり、その手はスーツとマッチしたギャバジンのハンドバッグの上で硬直していた。

とうとう彼女は口を開いた。「それにしても、ずいぶんとタイミングがよすぎますねえ¹¹⁴。その出版人さんがあなたを雇おうと思いつくなんて、さすがに都合がよすぎるでしょう。テリーは何も名前を

114 "You haven't exactly wasted your time, have you?" 既訳はすべて、マーロウが時間を無駄にせずに行動した、という訳になっているが、そうではない。いろいろな出来事の流れにより、マーロウが怪しいほど時間を無駄にせずんですよね、つまりいろいろタイミングよすぎるぞ、の意味。

出さなかったんですか、へえー。たった一つも。でもそんなことはまるで無問題ってわけですか、マーロウさん。あなたの直感が正確無比だったんですもんね。それで次はどうするおつもり？ お聞かせいただけないかしら」

「何も」

「んまあ、なんという才能の無駄遣いですこと！ マディソンの肖像に対する責務と相容れないんじゃないでしょうか？ 何かしらできることくらい、あるんじゃないでしょうか？」¹¹⁵

「ここだけの話ですがねえ、あなたえらく感情的になってますよ。ウェイドが妹さんを知ってたって？ ご教示いただき感謝感激ですよ、えらくもってまわったやり方とはいえ。それはもう見当ついてましたがね。で、それが何か？ ロジャーなんて、おそらくかなり豪勢な愛人コレクションの一人ではなかったんでしょうに。この話はそれでおしまい。で、なぜおれに会いたがったのか、その話に行きましょうよ。騒ぎにまぎれて、そっちがお留守になってませんか？」

彼女は立ち上がった。また腕時計を見た。「下に車を待たせてありますの。もしよろしければ車で拙宅までお越し頂きまして、お茶でも一杯ご相伴頂けないかと愚考する次第でございますのよ¹¹⁶」

「お続けくださいよ。お茶ですか、ほーう」

「そんなに怪しかったかしら？ あなたと知己を得たいお客様がいらしてるのよ」

「ご老体？」

「その言い方はやめて」彼女は平静に言った。

おれは立ち上がり、机にもたれて身を乗り出した。「ハニー、きみってときどき、すごくかわいくなるよね。いやホント。銃を持っていったいいですか？」

「まさか老人が恐かったりしないわよね」彼女は唇をへの字に曲げてみせた。

「怖いでしょうに。あなただってそうなんじゃないの——それもものすごく」

彼女はため息をついた。「ええ、恐いわよ。昔からずっと。ときどきえらくおっかなくなるから」

「じゃああなたの分も入れて二丁持ってったほうがいいかな」そう言って、すぐ後悔した。

115 ここらへん、リンダは超絶ぶりぶり嫌味口調でなんでも大げさなので、翻訳でもその大仰な嫌味ぶりを出してほしいんだよね。既訳はどれもストレートすぎ。清水はまるでリンダがマーロウを本気で誉めているような訳、村上訳はここのやりとりがほとんど直訳棒読みもいいところで少し大げさなところが出ている程度、田口がまあまあその感じを出している。

116 Could I prevail upon you to... このワタクシですら、実際に口にされる場面に一度たりとも遭遇したことのない、すさまじいお上流階級のわざとらしいもってまわりスーパー謙譲語表現。普通の敬語なんかじゃぜんぜん足りない。三人ともまったくダメで、特に各人の口調が一切変わらない田口は、ここをほぼため口にしていて論外。

[32]

それは見たこともないほどとんでもない家だった¹¹⁷。三階建ての四角い灰色の箱で四方がそれぞれ二重傾斜になったマンサード屋根、その傾斜はかなりきつくて、そこに二重張り出し窓が二、三十個も着いていて、しかもそのまわりと間にやたらにウェディングケーキまがいの装飾がある。入り口は両側に二重の石柱が立っていて、きわめつきは石の手すりがついた屋外螺旋階段、そのてっぺんには塔屋があつてそこからは湖の全貌が見渡せたはずだ。

車置き場は石敷だった。この場所が本当に必要と思われるのは、800メートルのポプラ並木つき自動車路と鹿のいる公園と野生庭園と各階ごとのテラスと図書室窓の外にバラ数百個とあらゆる窓から長い緑の視界でそれが森林と沈黙と静けさの空疎へとつながるべきだ。実際にそこにあつたのは、鉄平石を詰んだ塀に囲まれた40-60ヘクタールくらい優にある敷地だ。我らが混み合った小国にしてはかなりの不動産だ。進入路の並木は丸く刈り込んだ杉の茂みだ、いろんな装飾用の木があちこちに固まって生えているが、カリフォルニアの木には見えない。輸入品だ。ここを建てたのがだれだか知らないが、大西洋の海岸線をロッキー山脈越しに引きずってこようとしていた。がんばってはいたが、成功はしていない。

中年の黒人運転手エイモスは、キャデラックを静かに門柱つき入り口の前に停めて、とびおりと車をまわりロリング夫人のために開いたドアを押さえた。おれは先に下りて、押さえるのを手伝ったそして彼女が下りるのを手助けした。うちの建物の前で車に乗ったときから、ほとんど口をきいてくれない。疲れて不安そうだった。このバカみたいな建築の固まりで気が滅入ったのかも。こんな建物ならワライカワセミですら気が滅入り、葬式のハトまがいの陰気な鳴き声になるはずだ。

「ここを建てたのはだれ？ いったい何をこんなに怒ってたんです？」とおれは尋ねた。

彼女はやっとなにつこりした。「初めて見たの？」

「ヴァレーのこんな奥まできたのは初めてですよ」

彼女は進入路の反対側までおれを連れて行き、上を指さした。「これを建てた男は、あの塔屋から飛び降りて、いまあなたが立っているあたりに着地したのよ。ラ・トゥレルというフランスの伯爵でほとんどのフランス伯爵とちがって大金持ちだったのよ。妻はラモーナ・デスポローで、その人も決して文無しってわけじゃなかったわね。サイレント映画の時代に週に三万ドル稼いでいたのよ。ラ・

117 damndest-looking house I ever saw. 清水訳：「ふしぎな家」、村上訳「おぞましい外観の家」、田口訳「最低最悪、くそおぞましい外観の家」。damndest という一言に、田口は言葉を重ねすぎていると思う。それに必ずしも「醜悪」という意味かははっきりしない。単なる間投詞的な用法にも見える。単純に「とんでもない」としておいて、醜いとかははっきり言わないほうがいいと思う。この後の描写を見ればお世辞にも美しくない悪趣味な建物なのはわかるが、それは読者がその後の描写を見ることで自分で思い描けばいいこと。

トゥレルはここを自宅として建てたの。シャトー・ド・プロワのミニチュアのつもりだったそうよ。もちろんそんなことはご存じよね¹¹⁸」

「そりやもう微に入り細を穿って。そうだ、そういえば思い出した。昔、日曜版の特集記事の一つだった。その奥さんに去られて自殺したんだ。なにやらヘンテコな遺書もあったんじゃないかなったっけ？」

彼女はうなずいた。「元妻には数百万ドルをお小遣いとして遺し、あとは全部信託勘定にして動かさなくしたのね。家屋敷は元のままで残せて。何一つ変えてはならず、食事テーブルは毎晩きちんと整えられ、召使いと弁護士以外は地所に立入禁止。もちろんそんな遺言は無視されたわ、やがて地所はある程度は切り売りされて、わたしがロリング先生と結婚したとき、父がそれを結婚祝いにくれたの。人がまた暮らせるようにするだけでも一財産かかったはずよ。大っ嫌い。昔から」

「別にここに住まなくてもいいんでしょう？」

彼女は疲れたような感じで肩をすくめた。「少なくともたまには住まないと。娘の片方でも、多少なりとも安定した様子を父に見せてあげないとね。ロリング先生はここが気に入ってるのよ」

「あの人ならね。あんなウェイド邸でのやつみたいな騒ぎを演じられる人は、パジャマにも礼装のスパッツ¹¹⁹をあわせたがるような人だろうからなあ」



彼女は眉を逆立てた。「あらまあ、そこまでご関心をお持ちいただきまして感謝に堪えませんわあ、マーロウさん。でもそのネタはそろそろ使いすぎでしょう。入りません？ 父は待たされるのが嫌いで」

おれたちはまた進入路を横切り、石段を上がった。すると大きな観音開きの扉の片方が音もなく開き、その脇にきわめて高価そうで横柄な御仁が立ち、おれたちを中に入れた。玄関ホールはおれが暮らす家の全居住スペースよりも広かった。モザイクの床で、奥にスタンドグラスの窓があるらしく、そこから少しでも光が入ってきたなら、そこに他に何があるかも見えたかもしれない。廊下からはさらに観音開きの彫りもの入り扉を通して、奥行き 20 メートルは優にある薄暗い部屋に入った。男がそこにすわって待っていた。無言だ。おれたちを冷たく見た。

ロリング夫人は慌てたように言った。「お待たせしたかしら、お父様。こちらフィリップ・マーロウさん。こちらはハーラン・ポッター氏です」

118 You know that, of course. もちろんこれは嫌味。そんなこと、つまりこの伯爵とその奥さんとこの物件の話も知らないのか、という意味。村上訳と田口訳は、that をこのシャトー・ド・プロワというお城のことと解釈してことばを補っている。その解釈が絶対にあり得ないとは言わないがこの一連の話からお城だけ取り出す必然性がなく、苦しい解釈。その次のマーロウの返事も、詳細に知っているとは大げさに言って、知るわけないだろうと反語で言っているの、多少なりともそれを出すため大げさに訳したいところ。

119 いまスパッツというとレギンスみたいな運動着を連想してしまい、パジャマとあわせてもいいじゃないと思ったが、ここで言ってるのは写真みたいな足首から靴を覆うやつ。写真参照。20 世紀初頭ダッパーフアッションで流行ったんだって。

男はだまってこちらを見て、アゴを一センチほど下に動かした。

「紅茶を持ってこさせるように。すわりなさい、マーロウくん」

おれはすわって彼を見た。彼はカナブンを見る昆虫学者のようにおれを見た。どちらも無言だった。完全な沈黙が続いているところへ紅茶がきた。巨大な銀のお盆にのって、シナ風のテーブルに置かれた。リンダはテーブルについて紅茶を注いだ。

「カップは二つ。おまえは別の部屋で飲みなさい、リンダ」

「はい、お父様。マーロウさん、紅茶の飲み方は？」

「お任せしますよ」とおれ。その声は遠くにこだまして、小さく寂しくなるようだった。

彼女のご老体に一杯、おれに一杯をよこした。そして静かに立ち上がり部屋を出た。おれは立ち去る彼女を見た。紅茶をすすると、タバコを取りだした。

「喫煙はやめてくれ。私は喘息持ちなんだ」

おれはタバコを箱に戻した。彼を見つめた。時価一億ドルというのがどういう気分かは知らないがまるで楽しそうには見えなかった。巨大な男で身長二メートルはあり、体格もそれに見合ったものだった。グレーのツイードスーツを着ていたが、パディングは入っていない。そんなものは不要な肩だった。白シャツに黒のネクタイで、胸の見世物ハンカチはなし。外の胸ポケットからはメガネケースが覗いていた。黒で靴とおそろいだ。髪も黒く白髪はまったくない。頭のとっぺんにマッカーサー式に真横になで付けられていた。その下にはむき出しの頭蓋骨しかないんじゃないかとにらんだ。眉毛は濃く黒かった。声ははるか遠くから発せられるようだった。紅茶を飲むやり方は、まるでそれが大嫌いだとでもいうようだった。

「マーロウくん、こちらの言いたいことをはっきり言う方が時間の節約になる。君はこっちの話に首を突っ込んでいるようだな。それが正しいなら、それをやめていただこう」

「首を突っ込むほどあなたの話というのを存じ上げませんよ、ポッターさん」

「そうかな」

彼はさらに紅茶を飲んでカップを横に置いた。すわっている大きな部屋で身をそらせ、その厳しい灰色の目でおれを解剖するように見据えた。

「君がだれかは当然知ってるよ。そして生計の立て方も——立っているにしてもだが——そしてテリー・レノックスとのなれそめも。報告によれば、テリーの国外逃亡を手助けし、彼がやったか疑問に思っており、その後死んだ娘と知り合いの男と接触したとか。その目的については説明がなかった。説明したまえ」

「その男に名前があるなら、はっきり言ってください」

彼はきわめてかすかに微笑したが、おれに納得したような感じではなかった。「ウェイド。ロジャー・ウェイド。何やら作家だったかな。なんでも、いささかわいせつな本で、私が読みたいなどとは思わない本を書いているとか。さらにこの人物は危険なアル中だとのこと。そのせいで君が奇妙な考えを抱くようになったのかもしれない」

「おれにもおれなりの考えを持たせてもらえませんか、ポッターさん。もちろん吹けば飛ぶような考えとはいえ、おれにあるのはそれだけなんですから。第一に、おれはテリーが妻をお殺したとは思っていません。その殺し方のせいもあるし、あいつがそんなヤツだとは思わないから。第二に、ウェイドにはこっちから接触したんじゃない。同居して執筆作業を終えるまでしらふでいるよう手を尽くせと言われたんです。第三に、あの御仁が危険なアル中だという話ですが、おれはそんな兆候をまったく見ていない。第四に、おれが最初にウェイド家に接触したのはニューヨークの出版者の要請によるもので、その時点ではロジャー・ウェイドがお嬢さんの知人かどうかさえ知らなかったんです。第五に、おれはその雇用の申し出を断って、するとウェイド夫人がどこかに失踪して治療を受けている夫を見つけてくれと頼んだんです。それで見つけて家に連れ帰ったんです」

「なんとも手際のよい」と彼は冷淡に言った。

「手際はまだ終わっちゃいませんよ、ポッターさん。第六には—あなたかその指示を受けただれかが、シューエル・エンディコットという弁護士を遣わしておれを牢屋から出そうとした。だれの差し金かは言いませんでしたが、この話ではあなた以外にだれもいない。第七におれが牢屋から出るとメンディ・メネンデスというゴロツキがおれを小突き回して、首をつっこむなど言い、テリーが自分やラスベガスのランディ・スターというギャンブル屋の命を助けたというお涙頂戴の話をしてくれました。かなりもったもらしい話に聞こえましたがね。メネンデスは、メキシコ逃亡を自分に頼まず、おれみたいなチンピラに頼んだことで腹をたててるふりをしましたよ。そいつ、つまりメネンデスなら、指一本あげるだけでそんなことは簡単に手配できたし、しかもずっと上手にやれたというわけです」

ハーラン・ポッターはぞっとするような微笑を浮かべた。「君はまさか、メネンデス氏やスター氏¹²⁰などが私の知り合いに含まれているなどと考えているわけではありますまいな」

「おれには知るよしもありませんよ、ポッターさん。あなたのような金額を稼ぐには、おれの理解できるような方法じゃ無理だ。次におれをまともな裁判話から遠ざけようと警告したのは、あなたのお嬢さんのロリング夫人です。たまたま酒場で出くわして、どちらもギムレットを飲んでいたので話することになったんです。これはテリーのお気に入りのドリンクですが、ここらではあまり飲む人がいません。ご自分で語ってくれるまで、彼女が何者か知りませんでした。テリーについてどう思っているかちょっと尋ねたら、あなたを怒らせたらおれのキャリアは短く不幸なものになると匂わせてくれましたよ。ポッターさん、怒っておいでですか？」

120 田口訳はスター氏をエンディコット氏にまちがえている。

彼は冷たくいった。「怒っていたら、尋ねるまでもない。疑問の余地はないだろう」

「おれもそう思いました。愚連隊に襲われるのをずっと予期していたんですが、いまのところ姿をみせていません。警察にもちょっかいを受けていません。その可能性もあった。きつい目にあう可能性もあったんです。あなたが求めていたのは、波風たてないことだけなんだと思います。でも何かそれをじゃまするようなことをしましたか？」

彼はニヤリとした。渋い笑みではあったが、笑いにはちがいない。長い黄色い指をあわせて膝に脚を交差させ、快適な形で後ろにもたれた。

「なかなかの売り込みだ、マーロウくん。そして黙って聞いてあげた。こんどはそっちが聞く番だ。私の求めるのが波風立たないことだけというのは、まさにその通りだ。ウェイド家と君とのつながりが、たまたまの、偶然の、意図せざるものだったというのは十分あり得る。そういうことにしておこう。私は家族人間だが現代においてはそんなことに何の意味もない。娘の一人はボストンの気取り屋と結婚し、もう一人は愚かな結婚を繰り返し、その最後のやつは従順な乞食で、娘が無価値で不道德な生活続けるのを黙認したが、いきなり何の理由もなく自制心を失って娘を殺した。その殺し方の残虐性のためにそれは認められないというのかね。それはまちがいだ。あいつは娘をモーゼル自動拳銃で撃ったのだよ、まさにあいつがメキシコに持っていった銃だ。そして娘を撃ってから、銃弾の痕を隠すためにあんなことをやったのだ。残虐な行いだというのは認める。だがあの男は戦争にいつてひどく怪我をしたし、大いに苦しみ、他の人々が苦しむのを見てきた。殺すつもりはなかったのかもしれない。何やらもみあいになったのかもしれない。あの銃は娘のものだからな。小さいが強力な銃 7.65 mm 口径の P.P.K というモデルだ。銃弾は頭を貫通してインド更紗のカーテン後ろの壁に当たった。すぐには見つからなかったし、この事実はまったく公表されなかった。さてこの状況を考えてみよう」彼は口を止めておれを見つめた。「そんなにひどくタバコが要るのかね？」

「すみません、ポッターさん。無意識に取りだしていました。ただの習慣です」おれは改めてタバコをしまった。

「テリーは妻を殺したばかりだ。いささか偏狭な警察の観点からすれば、動機はたつぷりある。だが説得力ある弁護もできた—彼女が持っていた彼女の銃であり、取り上げようとして失敗し、彼女が自分で自分を撃ったのだ、とね。よい裁判弁護士ならこのストーリーをかなり強く主張できただろう。たぶん無罪になったはずだ。その時点で電話をくれていたら、助けてやっただろう。だが銃弾痕を隠すために殺人を残酷なものに仕立てたことで、それは不可能になってしまった。そのうえ逃亡などして、それですら下手くそなやり方でしかできなかった」

「確かにそうです、ポッターさん。しかしその前にパサデナのあなたに電話したんでしょう？ 当人がそう言ってましたよ」

大男はうなずいた。「身を隠せ、できることはすると答えた。どこにいるかは知りたくなかった。それはきわめて重要なことだ。犯罪者を匿うことはできん」

「それは結構なことです、ポッターさん」

「何やら皮肉の気配がしたかな？ まあいい。詳細を知ったときにはもう何もできなかった。あの種の殺しがもたらすような裁判は容認できない。正直言って、あの男がメキシコで自分を撃ち告白書を残したときいて、大いにホッとしたものだ」

「わかりますとも、ポッターさん」

彼は眉毛をこちらに突き出した。「気をつけたほうがいいぞ、お若い。皮肉は嫌いでね。だれであれ、そんな形であれ、これ以上の調査は容認できないというのはこれでおわかりいただけたかな。そして、影響力のすべてを使い、捜査が行われてもそれをできる限り短くして、報道も最小限に抑えた理由もおわかりかな？」

「ええ—お嬢さんを殺したのがあいつだと確信しているなら」

「もちろん娘を殺したのはあいつだ。何のためにとなると、また話が別だ。それはもうどうでもいい私は公人ではないしそうなるつもりもない。私はあらゆる種類の世間の目を避けるよう、昔から大いに腐心してきた。私には影響力はあるがそれを濫用はしない。ロサンゼルス郡の地区検察長官は野心的な人物で、一瞬の悪名のためにキャリアを台無しにするほど愚かではない。目をぎらつかせたな、マーロウ。やめておけ。我々は民主主義と称するものの中にいる。多数派の支配だ。立派な理想だよまともに機能させられればな。選ぶのは人々だが、候補を立てるのは政党という仕掛けだ。そして政党という機械は、大量の金をつかわないと有効に機能しないのだよ。だれかがそれをくれてやらねばならず、そのだれかは、個人だろうと金融集団だろうと、労働組合だろうとなんだらうと、お返しに何かしらの配慮を求める。私や私のような人々が期待するのは、まっとうなプライバシーをもって生活を送れるようにすることなのだ。私は新聞をいくつか所有しているが、好きではない。多少なりとも残されたプライバシーに対する、絶え間ない災厄だと思っておる。やつらは絶え間なく報道の自由についてべちゃべちゃがなりたてるが、数少ない名誉ある例外を除けば、それは醜聞、犯罪、セックス、扇情主義、憎悪、あてこすり、プロパガンダの政治金融的な利用を売り歩く自由にすぎんのだ。新聞は広告収入で儲ける稼業だ。そのためには販売部数が必要で、販売部数が何に左右されるかはご存じだろう」

おれは立ち上がり椅子のまわりをうろうろした。彼は冷たい関心でおれを見た。おれはまたすわった。ちょっとツキが必要だ。いやちょっとじゃすまない、トラックに山ほどいる。

「はいそれでポッターさん、これからどうします？」

聞いてない。自分の考えに顔をしかめている。そして続けた。「お金ってやつには奇妙なところがあるのだよ。大量になると一人歩きしはじめる。独自の意識さえ持つようになる。お金の力は制御し

づらくなってしまふのだ。人は昔から墮落しやすい動物だ。人口増加、戦争のすさまじい費用、収奪的な課税のしつこい圧力—こうしたものすべてが人をますます墮落させる。平均的な人間は疲れて怯えており、疲れて怯えた人間は理想など気にする余裕はない。家族のために食料を買わねばならないのだからな。現代においては、公共も個人もモラルが衝撃的なまでに衰退しておる。質の欠如に曝された人々に、質を期待するわけにもいかん。量産で質などあり得ない。長持ちしすぎるからそんなものは欲しくないのだ。そこでかわりにファッションを持ち込んできた。人工的な陳腐化を引き起こすための商業的な詐術だな。量産では、今年売ったものが一年後に流行遅れに見えるようにしないと、作った財を売れない。アメリカは世界で最も真っ白な台所と、最もピカピカの洗面所を持つておる。だがその美しい白い台所で、平均的なアメリカ主婦はまともに食える食事も作れんのだ。そして美しいピカピカの洗面所は、デオドラント、浣腸薬、睡眠薬など、あの化粧品産業と呼ばれる人の自信喪失を煽るインチキ産業の製品置き場と化しておる。アメリカは世界一のパッケージを作るのだよ、マーロウくん。その中にある代物はほとんどがゴミだ」

彼は大きな白ハンカチを取りだして、それでこめかみに触れた。おれはすわったままあんぐりと口を開けていて、何が彼をこんなに刺激したのか不思議に思った。この旦那、あらゆるものを毛嫌いしている。

「この地域は私にはちょっと暑すぎる。私はもっと涼しい気候に慣れ親しんでいるのだ。なんだか、何を言おうとしていたのか忘れてしまった新聞の社説のような口ぶりになってきたな」

「いやおっしゃりたいことはよくわかりましたよ、ポッターさん。あなたは世界の方向性がお気に召さないので、お持ちの力を使ってご自分の記憶しているような、大量生産時代以前の五十年前の暮らしを維持するために、私的な一角を閉鎖して区切ろうとしてるんでしょう。一億ドルお持ちなのにそれで変えたのは面倒ばかりというわけですね」

彼はハンカチを対角線を持ってピンと引っ張り、それを丸めてポケットに詰め込んだ。

「それで？」

「それではありません。それだけです。あなたはお嬢さんの殺し屋なんてどうでもいいんだ、ポッターさん。とっくの昔に彼女はダメな品物として損切りしたんでしょう。テリー・レノックスが殺したんじゃなくて、本物の殺し屋が大手を振ってうろついていても、あなたはどうでもいいんだ。そいつが捕まらないほうがいいんだ、捕まったら醜聞が再燃して、どうしても裁判になって、その弁護であなたのプライバシーがエンパイア・ステートビル並の高さにまで吹っ飛ぶからね。もちろんそいつが、裁判なんかの前に自殺してくれるほど聞き分けがよければ別ですがね。できればタヒチやグアテマラやサハラ砂漠の真ん中でやってくれるとありがたいですよ。実際に起きたことを確認するのに郡が費用を出したがるようなところならどこでもいい」

彼は突然笑った。でかい無骨な笑みで、そこそこ親しさもこめられている。

「私から何をご所望かな、マーロウ」

「金額の話なら、何も。自分からあなたに会いに来たわけでもありませんし。連れてこられたんだ。ロジャー・ウェイドとの出会いについては正直に言いました。でも、彼は実際にお嬢さんを知っていたし、暴力の前歴があった。とはいえ、おれはその兆候を一切見ていませんが。昨晚、あいつは拳銃自殺を図った。何かに憑かれている。すさまじい罪悪感を感じている。いい容疑者を捜しているなら有力候補ではある。他にも容疑者はたくさんいるのはわかっていますが、たまたまこれまで会えたのがあの御仁だけなんです」

彼は立ち上がったが、立った彼は本当に巨漢だった。しかもたくましい。こちらにやってきておれの前に立った。

「マーロウくん、電話一本で君のライセンスなど没収だ。小賢しい物言いはよせ。私の堪忍袋の緒が切れる」

「電話二本で気がつくどブの底にキスしてるってわけですか―後頭部をふっとばされて」

彼はきつい笑い声をたてた。「私はそんなやり方はしない。君の風変わりな稼業では、そう思ってしまうのも当然なのかもしれんがね。君に時間を与えすぎたようだ。執事を呼んで出口に案内させよう」

「それには及びません」とおれは自分で立ち上がった。「ここにきて、お説教をいただきました、とお時間ありがとうございました」

彼は手を差し伸べた。「お越しいただきありがとうございます。君はずいぶん正直な種類の人物らしいな。英雄ぶったりはしないことだ。勝ち目はないからな」

彼と握手した。パイプレンチのような握力。いまや鷹揚な笑顔をこちらに向けた。彼はミスター・ビッグ、勝者、すべて思い通り。

「いずれ、そっちに何か仕事をまわしてあげられるかもしれない。それと、私が政治家や法執行関係者を買取するとかは思いなさるなよ。そんなことをするまでもないのだからね。さようなら、マーロウくん。それと改めて、おいでいただきありがとうございます」

彼はそこに立って、おれが部屋から出るのを見つめた。玄関に手をかけたところで、リンダ・ロリングがどこかの影から飛びだしてきて、静かに尋ねた。

「で？ 父とはうまくいった？」

「上々。文明の何たるかを説明してくれました。というか、それがご自身にはどう見えてるかをね。もうしばらくこのまま様子見とのこと。でも文明は、あの人の私生活を邪魔しないようにくれぐれも気をつけたほうがいい。文明がそんな真似をしたら、あの人は神様に電話一本で注文をキャンセルしかねない」

「あなた、どうしようもない人ね」

「おれが？ どうしようもないって？ お嬢さん、あんたのご老体をごらんなさいよ。あの人と比べたらおれなんか、真新しいガラガラをもらった青い目の赤ちゃんみたいなもんでしょうに」

おれが外に出ると、エイモスがキャデラックをそこに待たせていた。ハリウッドまで送ってくれた一ドルチップに差し出したが受け取ろうとしない。T・S・エリオット詩集を買ってやろうかと申し出た。すでに持っているとのことだった。

[33]

一週間たったがウェイド家からは何も連絡がなかった。天気は暑くべたつきスモッグの酸の刺激がはるかビバリーヒルズまで漂ってきた。マルホランド・ドライブのてっぺんからは、そのスモッグが地面の霧のように街全体に一面に広がっているのが見えた。その中に入れば、スモッグが味わえるし嗅げるし目がひりひりする。みんなそれについてグチる。ビバリーヒルズが映画連中のために彼らから見ればダメになってしまったあとで金持ち連中がこもったパサデナでは、市の長老たちが怒りでわめきたてた。すべてはスモッグのせいだった。カナリアが歌わないのはスモッグのせい。ミルク配達が遅れても、ペキニーズ犬にノミがいても、糊の効いたシャツ姿老いぼれとんまが教会への道すがらに心臓発作になっても、それはスモッグのせい。おれの家は、普通は早朝にはきれいだが、夜はほぼ常にひどい。たまに一日中きれいなこともあるが、だれもその理由はろくにわからない。

そういうある日——たまたま木曜日——にロジャー・ウェイドから電話があった。「元気か？ ウェイドだ」。元気そうだった。

「元気ですよ。そちらは？」

「しらふだ、残念ながら。せっせと金稼ぎ。ちょっと相談したいな。それにあんたに借りがあるはず」

「ない」

「今日の昼飯とかどうだ？ ここに一時頃にこられるか？」

「たぶん。キャンディはどうです？」

「キャンディ？」 ずいぶん不思議そうな声だった。あの夜は完全におだぶつだったんだろう。「あああんたがおれをベッドに入れるのを手伝ったのか」

「そうそう。役に立ついいやつだよ——むらはあるが。そしてウェイド夫人はいかが？」

「同じく元気だ。今日は街でショッピングなんだ」

電話を切って、おれは回転椅子にすわって身をゆすった。本の進捗のことを尋ねるべきだった。作家にはいつも本の進捗を尋ねるべきなのかもしれない。でも一方で、それを訊かれるのにうんざりしているかもしれない。

しばらくして別の電話がかかってきた。知らない声。

「ロイ・アシュターフェルトと言います。ジョージ・ピーターズにそちらに電話しろと言われたんですが、マーロウさん」

「ああそうそう、ありがとうございます。あなたニューヨークで、テリー・レノックスに会った方ですよねえ。当時はマーストンを名乗っていたとか」

「その通り。まあひどく泥酔してたけど。でもまちがいなく同じヤツですよ。あれはまちがえようと思ってもまちがえられない。こっちでは、チェイセンズで奥さんといっているのを見かけましたよ。私はクライアントといっしょだったんです。そのクライアントの名前は明かせませんが」

「わかります。それはいまはあまり重要じゃないでしょう。彼のファーストネームは？」

「えーとなんだっけ、思い出してみますから。ああそうそう、ポールだ。ポール・マーストン。それとあともう一つ、もしご興味あれば。その人、イギリス軍の記章をつけてたんですよ。イギリス版の第二次大戦従軍記章」

「なるほど。彼に何があったんです？」

「さあねえ、私は西部に引っ越しました。次に見たときには彼もここにきてて——ハーラン・ポッターの、いささかじゃじゃ馬な娘と結婚してて。そこらへんはご存じでしょう」

「二人とも死んでます。でも教えてくれてありがとう」

「いやいやどういたしまして。お役にたてましたか？」

「いや特にないなあ」おれは大嘘つきだ。「あいつに自分の話を尋ねたことがなかったもので。一度孤児院育ちだと言っていました。あなたの話、絶対勘違いじゃないですよ？」

「あの白髪と傷のついた顔でですか、ご同輩。絶対ない。一度見た顔は忘れないとは言いませんが。あの顔は忘れませんよ」

「向こうはあなたに気づいたんですか？」

「気づいたにしても、そのそぶりは見せませんでした。あの状況では、それも当然でしょう。そもそも私を覚えているかどうか怪しい。言った通り、ニューヨークにいた頃はいつもかなり飲んだくれてましたから」

おれはさらに礼を言い、向こうは何のこれしきと言い、お互い電話を切った。

それについてしばらく考えた。建物の外の大通りの騒音が、おれの思考に音楽性のない副旋律を加えていた。うるさすぎた。夏の暑い天気だとすべてがうるさすぎる。おれは立ち上がり、窓の下半分を占めて殺人課のグリーン巡査部長に電話した。在席してくれている程度には親切だった。

あいさつを交わしてからおれは言った。「ねえ、テリー・レノックスについて耳に入ったことがあって不思議なんですよ。ニューヨークで別の名前を使っていたと言うんです。戦績を調べてもらえませんか？」

グリーンは厳しい声で言った。「おまえら、懲りない連中だな。余計なことにクチバシはさまな
いってのがまるでわからないんだからな。あの問題は終結、鍵がかかって、鉛の重石つきで海に放り
込まれたの。わかる？」

「先週、ある午後の一部をハーラン・ポッターと、アイドルヴァレーのご令嬢のお宅で過ごしたんで
すよ。それも調べます？」

彼は渋い口調で尋ねた。「何をしてたんだ？ そんな話をそもそも信じるにしても」

「いろいろとね。招待を受けたんですよ。気に入られたんですよ。ちなみに、あの女はモーゼル P.P.K.
7.65 m/m で射殺されたと聞きましたよ。ご存じでした？」

「続けろ」

「彼女自身の銃ですぜ、旦那。それがどうしたってことになるかも。でも誤解しないでくださいよ。
別に怪しい話を調べようってんじゃない。これは個人的な問題なんです。あいつはどこで顔の傷を受
けたのか？」

グリーンは無言だった。背後でドアが閉まる音が聞こえた。そして彼は静かに言った。「メキシコ
かどこかでナイフけんかだろう」

「まったく頼みますよ、グリーン。あいつの指紋は持ってたでしょう。いつものようにワシントンに
照会しましたよね。報告書が戻ってきたでしょう——いつも通り。知りたいのは、軍の記録の部分だけ
ですって」

「そんなものがあるってだれが言ってた」

「そうですねえ、まずメンディ・メネンデスとか。レノックスはあるとき彼の命を救い、それで怪我
をしたらしいですよ。ドイツ軍につかまって、それでいまみたいな顔になったとか」

「メネンデスかよ。あのろくでなしを信じるのか？ 頭に穴でも開いてんのかよ。レノックスには戦歴
なんかない。どんな名前でもそんな記録もなかったんだ。満足か？」

「そうおっしゃるならねえ。でもなぜメネンデスがわざわざここまできて、レノックスが自分とヴェ
ガスのランディ・スターの戦友だったから首をつっこむな、なんていうでっちあげをして、だれにも
変なまねされたくないと警告をくれるのかわからないんですよ。そもそもレノックスはその時点で死
んでたんだし」

グリーンは辛辣に言った。「あんなゴロツキが何を考えるのかなんて、だれにわかるもんかよ。そ
の理由だって。レノックスは、あの金の塊と結婚して堅気になる前に、あいつと何やら悪事を働いて
たのかも。しばらくはヴェガスのスターのところでフロアマネージャーをやってたんだ。そこであの
女に会ったんだよ。笑顔とおじぎとディナージャケット。顧客を喜ばせてフロアのプレーヤーたち
には目を光らせる。たぶんその仕事をこなせるくらいの品があったんだろうな」

「魅力はあったんでしょうねえ。警察仕事ではあまり使わないものだけど。感謝しますよ、巡査部長
最近グレゴリウス警部はどうです？」

「依願退職。新聞読まないのか？」

「犯罪ニュースは読まないっすよ。あさましすぎて」

さよならを言いかけたが割り込まれた。「お金野郎はおまえに何の用だったんだ？」

「いっしょにお茶を飲んだだけです。社交ってやつで。こっちに仕事を回してくれるかもと言って
ましたよ。それと、おれに意地悪な目を向けるおまわりは悲惨な将来を迎えると匂わせてましたよ——
匂わせただけではっきり言ったわけじゃないですけど」

「あいつが警察を仕切ってるんじゃないから」とグリーン。

「ご本人もそう言ってました。署長や検察長官ですら買収しないって。そいつら、だまっても膝で
丸まってくるとか」

「死ねよ」とグリーンはガチャンと電話を切った。

おまわりってのもむずかしい仕事だ。だれをいたぶってもいいのか、わかったものじゃないんだか
ら。

[34]

高速道路から丘のカーブまで続く舗装がボロボロの道路は、真昼の暑さでアスファルトがぐねぐねになり、その両側の焦土に点在する茂みはこの頃にはすでに花崗岩のほこりで小麦粉をかぶった白さとなっていた。雑草臭さで吐き気がしそうだ。かすかな熱いひりひりする微風が吹いていた。上着をぬいで袖まくりをしていたが、車のドアは熱すぎて腕をのせられない。縄につながれた馬がうんざりしたように、生きた樫の木の下でまどろんでいた。茶色いメキシコ人が地面にすわり、新聞紙に包んだ何かをかじっている。タンブルウィードが怠惰そうに道を横切り、花崗岩の露頭に当たって止まりそこに一瞬前にいたトカゲが、まったく動いた気配もなく姿を消した。

丘をまわって舗装路に入ると別世界だ。五分でウェイド宅の進入路に入り、駐車して平石敷きの通路を横切り呼び鈴を鳴らした。ウェイドが自らドアに出た。茶色と白のチェックがついた半袖シャツ、淡い青のデニムスラックス、家用スリッパという姿だ。日焼けして健康そうだった。手にはインクの染みがあり、鼻の片側にはタバコの灰のこすれた痕がついていた。

先に立って書斎に案内してくれた彼は、机の向こうに落ち着いた。そこには黄色いタイプ原稿の分厚い山があった。おれは上着を椅子にのせて長椅子にすわった。

「きてくれてありがとう、マーロウ。飲むか？」

おれは酔っ払いに飲むかと聞かれたときの、あの顔をした。自分でそれが感じられた、ロジャーはニヤリとして言った。

「おれはコーラを飲むよ」

「立ち直りがはやいな。おれはいますぐ酒が欲しい感じでもないし、コークをつきあおう」

彼が何かを足で押すと、しばらくしてキャンディがきた。不満そうだった。青いシャツとオレンジのスカーフを着て、白のお仕着せはなしだ。ツートーンの白黒の靴、エレガントでウェストのたかいギャバジンのズボン。

ウェイドはコークを頼んだ。キャンディはおれをきつく見つめてから出ていった。

「本？」とおれは紙の山を指さした。

「ああ。クズだ」

「信じないね。どこまで進んだ？」

「三分の二くらいだな—言うなれば。ということは全然進んでないってことだ。自分がスランプだと作家がどんなときに気づくか知ってるか？」

「作家のことなんか何も知らないよ」おれはパイプに煙草を詰めた。

「インスピレーションを求めて自分の古い作品を読み始めたときだよ。これはまちがいない。ここにタイプ原稿五百ページあって、一万語を優に超える。おれの本は長々しいんだ。世間は長い本が好きだ。くそバカな世間は、ページがたくさんあると大量の黄金があると思いやがる。おれは絶対読み返さない。そして何を書いたか半分も思い出せない。自分自身の作品を見るのがとにかく怖いんだ」

「そちらこそ元気そうじゃないか。こないだの晩から見ちがえるほどだ。自分で思ってるよりもガッツがあるんだよ、あなたは」

「いま必要なのはガッツだけじゃない。ときには願っても手には入らないものだ。自信だ。もう自信を失った甘ちゃん作家になっちゃったんだ。美しい家、美しい妻、美しい売り上げ記録はある。だが本当にやりたいのは、飲んで忘れることなんだ」

彼は両手をくぼませたところにアゴをもたせかけて、机越しにおれを見つめた。

「アイリーンはおれが拳銃自殺しようとしたと言うんだ。そこまでひどかったのか？」

「覚えてないのか？」

彼は首を振った。「転んで頭を切った以外は、何一つ覚えていない。そしてしばらくしたらベッドにいた。あんたもそこにいた。アイリーンが呼んだのか？」

「ああそうだ¹²¹。彼女、言わなかったのか？」

「ここ一週間ほどは、あまり口をきいてくれないんだ。たぶん愛想が尽きたんだろう。もうここまで不満がたまってるんだ」と片手の端をあごのすぐ下で首に当てた。「あのロリングがここでやった茶番もそれに拍車をかけた」

「ウェイド夫人は、あんなのなんでもないと言っていたが」

「そりゃまあ、そう口では言うだろうよ、そうだろう？ たまたま本当のことではあるんだけど、でも自分で言っていて信じてないと思うね、妻は。あの野郎はほんとに異常なほど嫉妬深い。奥さんと角で二、三杯やってさよならのキスをしたら、もうそれだけで彼女と寝てることにされちまう。その理由の一つは、あいつは寝てないからだがな」

「アイドルヴァレーで好きなのは、みんながただ快適で普通の生活を送っているところだよ」

彼は顔をしかめ、するとドアが開いて、キャンディがコーク 2 本とグラスを持ってきて、コークを注いだ。それをこっちを見もしないでこっちの前に置いた。

「昼飯を三十分後に。それと白の上着はどこへ行った？」

「今日はお休みの日です。それとおれ、コックじゃないです、ボス」キャンディはまったく表情を見せなかった。

121 え、ウェイドが自分で呼んだんじゃん。なぜマーロウはウソつくの？

「冷たいもののカットかサンドイッチとビールで十分だ。コックは今日は休みなんだ、キャンディ。友人を昼食に招いてるんだ」

キャンディはせせら笑った。「この人が友人だと思うんですか？ 奥さんにお尋ねになったら？」

ウェイドは椅子の背にもたれかかり、にっこり笑いかけた。「口に気をつけたほうがいいぞ、坊や。ここではかなり楽な思いをしてるんだ。おれはめったにお願いなんかしないだろう、え？」

キャンディは床を見下ろした。一瞬後に顔を上げてニヤリとした。「わかりました、ボス。白の上着を着ます。昼ご飯ももってきますかね」

静かに向きを変えて出ていった。ウェイドはドアが閉まるのを見守った。そして肩をすくめてこっちを見た。

「昔は召使いと呼んだもんだが、いまは家庭内補助員だ。もうしばらくすれば、連中の朝食をベッドまで運んで差し上げなきゃいけないんだ。あいつには金を払いすぎてる。甘やかしすぎだ」

「給料か——それとも副業方面の話？」

「何のことだ？」彼はきつい口調で尋ねた。

おれは立ち上がり、畳んだ黄色い紙の束を渡した。「読めよ。あなた明らかに、これをおれに破り捨てろと言ったのを覚えてないだろう。あなたのタイプライターの中、カバーの下にあった」

彼は黄色いページを開き、後ろにもたれて読み始めた。コーラのコップがその前の机上でシュワシュワと音をたてながら無視されていた。顔をしかめつつゆっくり読んだ。最後までくるとまたたき直して縁に指を走らせた。

「アイリーンはこれを見たのか？」彼は慎重に尋ねた。

「さあね。見たかも」

「壮絶だろう、え？」

「おれは気に入ったよ。特に善良な男がおれのために死んだっていう部分」

彼はまた紙を開き、それを猛然と細長い带状に引き裂いて、その帯をゴミ箱に叩き込んだ。そしてゆっくり言った。

「飲んだくれはどんなことでも書いたり言ったりやったりするんだろうな。何のことだかわからない。キャンディはおれを強請ったりしてない。おれのこと、気に入ってるんだ」

「また飲んだくれたらいいんじゃないの？ どういうつもりで書いたか思い出すかもよ。いろんなことを思い出さう。この話は前にもしてるんだ——あの銃が発砲された夜に。セコナールも意識喪失に一役買ったのかもな。そのときには十分しらふに聞こえたんだが。それがいまや、渡したものを自分が書いたのすら覚えていないふりをする。本が書けないわけだよ、ウェイド。まだ生きてるのが不思議なくらいだ」

彼は脇に手を伸ばして机の引き出しを開けた。ごそごそ手探りして、三枚複写式の小切手帳を取り出した。それを開いてペンに手を伸ばした。

「あんたに千ドル借りがある」と彼は静かに言った。小切手帳に書いた。そして控えのほうにも書き込んだ。小切手を切り取り、それを持って机を回ってくると、おれの前に落とした。「これでいいか？」

おれは後ろにもたれて彼を見上げ、小切手には触れず答えもしなかった。彼の顔は厳しく引きつっている。目は落ちくぼんで空っぽだ。彼はゆっくりと言った。

「おれが彼女を殺してレノックスに濡れ衣を着せたと思ってるんだろうな。確かに彼女は売女だったよ。だが売女だってだけで、女の頭を叩き潰したりしない。キャンディは、おれがあそこにとどき行ったのは知っているよ。だが不思議なことなんだが、あいつがしゃべるとは思わないんだ。まちがってるかもしれないが、そうは思わない」

「別にしゃべっても関係ない。ハーラン・ポッターのご友人は耳を貸さないよ。それに彼女はあのブロンズのもので殺されたんじゃない。自分自身の銃で頭を撃たれたんだ」

彼はほとんど夢見心地で言った。「彼女、銃は持っていたかもしれないなあ。でも撃たれたとは知らなかった。公表されてない」

「知らなかったのか、忘れてたのか？ うん、公表はされていない」

「おれをどうしようってんだよ、マーロウ」という彼の声はまだ夢見心地で、ほとんど優しくかった。

「どうしろってんだよ。妻に話せてるか？ 警察に話すのか？ そんなことをして何になる？」

「善良な男がおれのために死んだと言っただろう」

「それは単に、まともな捜査が行われていたら、おれも容疑者の一人——一人でしかないが——とされかねなかったって意味だよ。そんなことになったら、いろんな形でおれはおしまいだった」

「殺人罪で糾弾するためにきたわけじゃないんだ、ウェイド。あなたが苦しめるのは、自分自身でも確信できていないからだ。奥さんへの暴力の前歴がある。飲んだくれると意識をなくす。売女だからってだけで女の頭を叩き潰したりしないというのは、弁解にはならない。まさにだれかが本当にそれをやったんだ。そしてその手柄を引き受けさせられた男は、おれから見るとあんたよりもずっとそんなことをやりそうにないヤツなんだ」

彼は開いたフランス窓のほうに歩き、湖上にかかる熱のきらめきを立って見ていた。おれには答えなかった。そのまま動きも話しもせずに数分たったところでドアに軽いノックが聞こえ、キャンディがお茶のワゴンを押して入ってきた。洗い立ての白い布、銀のふたで覆われた皿がいくつか、コーヒーマットのポット、ビールのボトル二本が載っている。

「ビール、開けますか、ボス？」とウェイドの背中に尋ねた。

「ウィスキーのボトルを持ってこい」ウェイドは振り向かなかった。

「すみません、ボス。ウィスキーはだめです¹²²」

ウェイドはふり返って怒鳴りつけたがキャンディは譲らなかった。彼はカクテルテーブルに載った小切手を見下ろし、それを読みながら首をひねった。そしておれのほうを見上げ、歯の間から何かことばを吐いた。そしてウェイドを見た。

「私、もう行きます。今日はお休みの日です」

彼は背を向けて去った。ウェイドは笑った。

「じゃあ自分で取ってくるよ」と鋭い口調で言い、出ていった。

カバーの一つを持ち上げると、きれいに耳を落とした三角形のサンドイッチが見えた。一つ取ってビールを注ぐと、立ったままサンドイッチを食べた。ウェイドはボトルとグラスを持って戻ってきた長椅子にすわり、並々と注ぐとそれを飲み干した。家から離れる車の音が聞こえた。おそらくサービス路から出ていくキャンディだろう。おれはもう一つサンドイッチを手にとった。

「すわって楽にしてくれよ。丸々午後一杯つぶさなきゃならないんだから」。すでに酔いで顔が赤らんできた。声が生き活きして楽しそうだ。「あんた、おれが好きじゃないんだろ、マーロウ」

「その質問はすでに聞いて答えられている」

「大したもんだよな。あんたは本当に無慈悲なろくでなし野郎だ。ほしいものを得るのに手段を選ばない。おれが隣の部屋でどうしようもなく泥酔しているところで、妻と乳繰り合ってたんだから」

「あのナイフ投げの言うことは何でも鵜呑みか？」

「何でもじゃないな。うん。きれいな色合いのウィスキーだと思わないか？ 黄金の洪水に溺れ——そんなに悪くないじゃないか。『深夜に苦しみもなくこの世を去りたいと』。続きはどうなったっけ？¹²³ ああすまんね、あんたが知ってるわけないよな。文学的すぎる。あんたは探偵かなんかだったよな。何しにきたのか教えてくれよ」

彼はさらにウィスキーを飲んでおれにニヤリとした。そしてテーブルに載ったままの小切手を見た手を伸ばし、メガネ越しにそれを読んだ。

「マーロウとかいう人に振り出されてるみたいだぜ。なんでだろうな。何のためだろう。どうもおれがサインしたようだな。おれもバカだぜ。まったく騙されやすい野郎だ」

「サル芝居はよせ。奥さんはどこだ？」おれは荒っぽく言った。

彼は礼儀正しく顔を上げた。「妻はそのうち家にもどるよ。まちがいなくその頃までにおれは人事不省になり、妻は好きなように君をおもてなしできる。家すべてを君たちで使ってくれたまえ」

122 No whisky. 既訳はすべて「ウィスキーを切らしている/ない」と訳しているが、あるのはみんな知っているし、すぐにウェイドが自分でとってくるんだから、それではあまりに見え透いた嘘。ウェイドが言ってもウィスキー出すな、と命令されているので、「出すわけにはいきません」という意味。39章でも、ウィスキーは（あったけど）出すのを拒否した、とキャンディは証言している。

123 「おまえが異国にてその心を/かくも陶醉して注いでいる間に」です。

「銃はどこだ？」おれは突然尋ねた。

彼はポカンとした。おれは、机に入れておいたと言った。彼は答えた。「いまはないよ、まちがいない。探してみてもいいよ、気が済むんなら。ただ輪ゴムは盗まないでくれ」

おれは机のところにいつて搜索した。銃なし。これはちょっと大ごとだ。おそらくアイリーンが隠したんだろう。

「なあウェイド、奥さんはどこだと尋ねたよな。彼女はすぐに帰ってくるべきだと思う。おれのためじゃないぜ、我が友。あなたのためだ。だれかがあんたを見守らないといけないし、それは絶対におれなんかにはならないからな」

彼は漠然とこちらを見つめた。まだ小切手を持っている。グラスを置いて小切手を破り、さらに破り、もう一度、そしてそのかけらが地面に落ちるに任せた。

「どうやら金額が小さすぎたようだ。あんたのサービスはすごい高価格だ。千ドルに妻をつけても満足していただけない。残念だが、これ以上は出せない。こいつを飲めば別だが」とボトルを叩いた。

「帰る」とおれ。

「なんでだよ？ おれに思い出してほしいんだろうに。だから—このボトルの中におれの記憶があるんだ。もう少しいてくれよ。十分に酔ったら、これまで殺した女全員の話をしてやる」

「わかったよ、ウェイド。しばらくいるよ。だがこの中はお断りだ。用があれば椅子を壁に投げつけてくれ」

おれは外に出てドアを開けっぱなしにした。大きな居間を横切りパティオに出て、長椅子を一つ差しかけ屋根の下に引っ張り出して伸ばした。湖の向こうには丘の斜面に青い霧が見えた。海のそよ風が西の低い山の間を通り抜けて入ってきた。空気をきれいに拭いて、熱もちょうどいいくらい拭い去った。アイドルヴァレーの完璧な夏がやってきた。だれかがそういうふう to これを計画したんだ。パラダイス株式会社、嚴重立入制限つき。最もすてきな人たちだけ。中欧の連中なんか厳禁。上澄みだけ、てっぺんの引き出しの連中、それはそれは美しい連中。ロリング家やウェイド家みたいな。一面キラキラ¹²⁴。

124 Pure gold.これは、純金なのがこの上流階級の方々のことなのか、それともよく皮肉で言われる、「まったく結構毛だらけのおきれいなクズ話だぜ」という嫌味なのか、どっちとも取れる。既訳はすべて前者で理解しているが、マーロウの癖からすると後者がずっと強いとぼくは思う。でも決め打ちするほどではないのであいまいにしたい。

[35]

そこに30分ほど寝転がって、どうしようか腹を決めようとした。おれの一部は、あいつを徹底的に飲んだくれさせて、何か出てくるか見たいという気持があった。自宅の自分の書斎で大したことが起こると思わなかった。また転ぶかもしれないが、当分それはないだろう。あいつはうわばみだ。そしてなぜか、飲んだくれというやつはそんなにひどい怪我はしないのだ。罪悪感を取り戻すかもしれない。あるいは今度は、あっさり眠るかもしれない。

おれの別の一部は、ここから出て関わり合いにならないようにしたがっていた。だがその一部の言うことにおれが耳を傾けたことはなかった。だってもしそいつの言うことを聞いていたら、生まれた街にとどまって金物屋で働き、店主の娘と結婚して子ども五人作って新聞日曜版のユーモア欄を朗読してやり、ハメを外しすぎたら頭をひっぱたいて、お小遣いをいくらやるか、ラジオやテレビでどんな番組を見ていいかについて女房と口論することになっていただろうから。ひょっとして金持ちにさえなったかもしれない—小さな町の基準での金持ちで、8室の家、ガレージに車2台、日曜ごとにチキン丸焼き、居間のテーブルに『リーダーズ・ダイジェスト』、妻はガチガチ鉄壁のパーマヘアで、おれは脳みそがセメント袋並。そういうのはあんたに任せた。おれはでっかいケチな汚い下劣な都市をもらう。

起き上がって書斎に戻った。彼はそこにすわって何を見ているわけでもない。スコッチのボトルは半分以上空で、顔にはぼんやりしたしかめっ面と目には鈍いギラつき。おれを見たときには柵の向こうを見る馬のような目つきだった。

「何の用だ？」

「いや何でも。大丈夫か？」

「ほっといてくれ。肩に小人さんがのっかってお話をしてくれてるんだ」

おれは紅茶ワゴンからまたサンドイッチとビールをもう一杯もらった。彼の机によりかかりつつ、サンドイッチを頬張りビールを飲んだ。

彼がいきなり尋ね、その声がいきなりずっと明瞭に感じられた。「なあ知ってるか？ おれ、以前男の秘書がいたんだぜ。そいつに口述筆記させてた。首にしたんだ。そこにすわって、おれが何か創作するのを待ってるのにイライラさせられたんだ。まちがいだった。雇っておくべきだった。そうしたらおれがホモだって噂が出回っただろう。他に何も書けないから書評を書く、小利口な連中がそれを聞きつけて、だんだん評判を高めてくれただろう。仲間の面倒を見なきゃいけないからな、だろ。連

中みんなおかまなんだ、一人残らず、おかまが現代の芸術的仕切り屋ってわけなんだよ、旦那。いまや変態がトップ野郎」

「そうなのか？ 昔からずっとそこらにいたんだろ、ちがうの？」

彼はおれのことなんか見ていなかった。ただしゃべっているだけ。だがおれの言ったことは耳に入った。

「そうとも、何千年もね。そして特に優れた芸術の時代には。アテナイ、ローマ、ルネサンス、エリザベス朝、フランスのロマン主義運動—みんなそいつらばっか。そこら中おかまだらけ。『金枝篇』読んだことある？ いや、あんたにや長すぎるか。でも簡約版もある。読んでみろよ。オレたちの性的習慣なんてただの慣習でしかないことが証明されてるぜ—ディナージャケットには黒ネクタイ、みたいなものと同じだ。おれか。おれはポルノ作家だが、枝葉はつけるしストレートなんだ」

彼はおれを見上げてせせら笑った「知ってるか？ おれ、ウソつきなんだ。おれの英雄は身長二メートル半で、ヒロインはいつも膝あげて股を開いてベッドに横たわってるから、ケツにタコができてるんだ¹²⁵。レースにひだ飾り、剣と馬車、エレガンスと怠惰、決闘と華々しい死。全部ウソだ。石けんのかわりに香水を使い、歯磨きしないから歯はボロボロに腐り、爪は冷めた肉汁の匂い。フランスの貴族たちはヴェルサイユ宮殿の大理石の廊下で壁に立ちションして、美しい公爵夫人の何重もの下着をやっと脱がせたら、まっ先に気がつくのは風呂に入って欲しいってことだ。そんなふうに書くべきだよな、おれも」

「やれば？」

彼は笑った。「そうだな。そしたらコンプトンの五部屋の家に移らすことになるな—それもよほどツイてればの話だ」。彼は下に手を伸ばしてウィスキーのボトルを叩いた。「寂しいか、相棒。仲間がいるよな」

立ち上がり、かなりしっかりした足取りで部屋を出た。おれは何も考えずに待った。湖をモーターボートが大音響とともにやってきた。視野に入ると、それが船首を高く自ら出した形で走り、たくましい日焼けした青年をのせたサーフボードを引っ張っているのが見えた。フランス窓のところにいて、それが急ターンするのを眺めた。速すぎてモーターボートは横転しかけた。サーフボード乗りは片足立ちになってバランスを取ろうとしてから、水中に吹っ飛んだ。モーターボートはエンジンを切って止まり、水中の男が怠惰なクロールでそこに泳ぎ着いてから、引き綱にそって戻り、サーフボードの上に転がるように乗った。

125 my heroines have callouses on their bottoms from lying in bed with their knees up. 既訳三人とも立派で上品な大人なので、ここのニュアンスまちがえて、普通に「両膝を立てて寝る」と訳している。もっと高校生的下品な想像力を発揮して欲しい。これは正常位で男を迎えようと股開いてばかりいる、つまり濡れ場まみれってこと。ロジャー・ウェイドの作品は歴史ポルノですからね。

ウェイドがまたもウィスキーのボトルを持って戻ってきた。モーターボードはスピードを上げて遠くに走り去った。ウェイドは新しいボトルをもう一つの隣においた。すわってむっつりとしている。「まったく、それを全部飲む気じゃないだろうな」

彼はおれのほうに目を細めてみせた。「いっちまえよ、この野郎。家に帰って台所の床掃除でも何でもしてろよ。おまえ、目障りなんだよ」 その声はまたしゃがれてきた。いつもながら、台所で何杯か飲んできたのだ。

「用があつたら怒鳴ってくれ」

「おまえに用があるほど落ちぶれやしないよ」

「そうかい、ありがとさん。ウェイド夫人が戻ってくるまでここらにいるよ。ポール・マーストンってやつを知らないか？」

彼の頭がゆっくりともたげられた。目の焦点があつたが、かなり努力している。なんとか自分を抑えようと苦闘しているのがわかった。今回についてはその苦闘に勝利した。その顔が無表情になった。

「知らんなあ」と慎重に、とてもゆっくりと話した。「だれだ、それ？」

次に様子を見に行くと、寝ていた。口をぽかんと開け、シャツは汗で濡れ、スコッチの匂いをぶんぶんさせている。唇がむき出しの歯から離れてゆるいしかめっ面となり、舌が白くなり表面が乾燥しているようだ。

ウィスキーボトルの片方が空っぽだった。テーブル上のグラスには五センチほど入っていて、もう一つのびんは四分の三ほど残っている。空っぽのびんを紅茶ワゴンに乗せて、それを押して部屋の外に出し、戻ってフランス窓とブラインドのスラットを閉じるほうに回した。モーターボートが戻ってきたら目を覚ましてしまうかもしれない。書斎のドアも閉じた。

紅茶ワゴンを押して台所に入れた。そこは青と白で巨大でゆったりして空っぽだった。おれはまだ腹が減っていた。サンドイッチをもう一つ食べ、ビールの残りを飲み、コーヒーを一杯注いで飲んだ。ビールは気が抜けていたが、コーヒーはまだ熱かった。そしてパティオに戻った。かなりたってからモーターボートがまた湖を引き裂いてやってきた。そのはるかな轟音が高まって耳をつんざく爆音の叫びとなったときはほとんど四時だった。こんなのを禁止する法律があつてしかるべきだ。たぶんあるんだろうが、このモーターボートのやつが気にするはずもない。迷惑をかけるのが楽しいのだ。おれが最近会っている人々のように。おれは湖畔まで歩いた。

こんどは成功した。ボートの運転手はターンでちょうどいい速度に減速し、サーフボードの上の青年は遠心力に逆らって思いっきり外に身を乗り出した。サーフボードはほとんど自ら出たが、片方の縁は水中に残り、そこでモーターボートの進路が直進となり。サーフボードの乗り手は無事で、いっしょに北方向に戻り、それでおしまい。ボートが引き起こした波が、おれの足下の湖畔に突進してき

た。それが短い波止場の柱に激しく叩きつけられ、つながれたボートが激しく上下した。まだその波が静まらないうちにおれは家に戻った。

パティオに着いたところで、台所のほうでベルのチャイム音が鳴っているのが聞こえた。もう一度それが聞こえたので、チャイムなんかあるのは玄関だけだと判断した。そこへ出向いてドアを開けた。

アイリーン・ウェイドがよそ見をしてそこに立っていた。こちらを向きながらこう言った。「ごめんなさいね、鍵を忘れちゃって」そこでおれを見た。「あら――ロジャーかキャンディだと思った」

「キャンディはいません。木曜ですよ」

彼女は中に入り、おれはドアを閉めた。彼女はソファにはさまれたテーブルの上にハンドバッグを置いた。冷ややかで疎遠な感じがした。白いブタ革の手袋を引っ張って脱いだ。

「何か問題でもありました？」

「まあ、ちょっと飲酒が行われまして。大したものじゃないですが。書斎の長椅子で寝てます」

「あの人があなたを呼んだんですか？」

「ええ、でも酒のせいじゃない。昼飯を誘われたんです。どうも本人は何も口にしませんでしたが」

「あら」彼女はゆっくりとソファにすわった。「わたし、今日が木曜なのをすっかり忘れていたんです。コックも留守でしょう。バカだったわ」

「キャンディが留守にする前に昼飯を用意してくれました。じゃあおれはもう行きます。おれの車が邪魔じゃありませんでしたか？」

彼女はにっこりした。「いいえ、場所はいくらでもありましたから。お茶でもしません？ あたし自分が飲みたいので」

「わかりました」自分でもなぜそう言ったかわからない。紅茶なんかほしくなかった。でも思わずそう言った。

彼女はリネンの上着をするりと脱いだ。帽子はかぶっていない。「ちょっとロジャーが大丈夫かのぞいてきますね」

彼女が書斎のドアへと部屋を横切ってそれを開くのを見た。しばらくそこに立ち、ドアを閉じて戻ってきた。

「まだ寝てます。ぐっすりと。ちょっと二階に行ってきますね。すぐに戻ります」

彼女が上着と手袋とハンドバッグを手に取り、階段を上がって自室に入るのを眺めた。ドアが閉まった。おれは酒瓶を除去しようと思って書斎へと横切った。寝てるんならボトルはいるまい。

[36]

フランス窓を閉めたことで、部屋はむさ苦しくなり、ブランドを閉じたことで薄暗くなっていた。空中には刺すような匂いがあり、静けさがあまりに重すぎた。ドアから長椅子まで五メートルほどしかないが、その半ばまできただけで、その長椅子に横たわっているのが死人だとわかった。

彼は脇で横たわり、顔を長椅子の背もたれに向けていて、片腕が身体の下敷きになり、もう片方の前腕部がほとんど目を覆っていた。胸と長椅子の背の間には血だまりがあり、その血だまりの中に、あのウェブリー・ハンマーレスが転がっていた。横側は血まみれの仮面だった。

かがみ込んで、その見開かれた目の縁をのぞきこみ、むき出しのたくましい腕と、その曲がった部分の内側をのぞいた。黒ずんでふくれた頭の穴が見え、そこからはまだ血がにじみ出ている。

彼をそのままそこに残した。手首は温かかったが、まちがいなく完全に死んでいる。あたりを見回して、何か遺書か書き置きを探した。机の上の原稿の山以外は何もない。必ずしも遺書を遺すとは限らない。タイプライターはカバーをはずしてスタンドで立っていた。紙ははさまっていない。それ以外は、すべてかなり普通に見えた。自殺者はいろんな形で準備をする。酒を使う人もいるし、入念なシャンパンディナーを用意する人もいる。イブニングドレスを着る人もいれば、裸の人もいる。場所も、壁のてっぺん、ドブの中、風呂場、水中、水上など。酒場で首つりをしたり¹²⁶ガレージでガス自殺したり。これは単純に見えた。銃声は聞こえなかったが、たぶん湖畔でサーフボード乗りのターンを見ていたときに発砲されたのだろう。かなりの騒音だったから。なぜロジャー・ウェイドがそんなことを気にしたのかは知るよしもない。気にしなかったのかも。最後の衝動がたまたまモーターボートと同時だったただけなのかも。納得はいかなかったが、だれもおれの納得など気にしない。

引き裂かれた小切手のかけらはまだ床にあったがそのままにした。こないだの夜に彼が書いた代物を破った切れ端がゴミ箱にあった。これは放置しなかった。拾い出してすべてそろっているのを確認し、ポケットに押し込んだ。ゴミ箱はほぼ空っぽだったからこれは簡単だった。銃がどこにあったのかは考えるだけ無駄だ。隠せるような場所はあるすぎる。椅子の中や長椅子の中、クッションのどれかの下にあったのかも。床の上、本の裏、どこでも。

外に出てドアを閉じた。聞き耳を立てた。台所から音がする。アイリーンが青いエプロンをしており、やかんは沸騰してピーピー鳴り始めていた。彼女は火を止めてこちらに無関心な一瞥をくれた。

¹²⁶ 村上春樹は解説で、これが酒場 bar ではなく barn のまちがいだという説を紹介しており、だが酒場のほうが正しいのではとかなり紙幅を使って説明している。正直、barn と考えるべき積極的な理由もないと思うし、どちらでも問題になるような部分ではない。納屋にしたらまったくこの文脈の意味が変わり、理解が一変しますか？ 酒場で首くくるのは変だということらしいが、その前の、壁の上で自殺するのも意味不明だし、勢いだけの一文で現実的妥当性を云々するだけ無意味。

「紅茶の飲み方は、マーロウさん？」

「ポットから淹れてそのまま」

おれは壁にもたれてタバコを取り出したがそれは単に手持ち無沙汰だったからだ。それをひねり、潰し、半分に折ってその片方を床に投げた。彼女の目がそれを床まで追った。おれはかがんでそれを拾い上げた。そしてその半分ずつを小さな玉に丸めた。

彼女は紅茶を入れ、肩越しにこう言った。「わたしはいつも、クリームと砂糖を入れるんですよ。不思議ね。コーヒーはブラックなのに。紅茶を飲むのはイギリスで覚えたんですよ。向こうでは砂糖のかわりにサッカリンを使ってます。戦争になったらもちろんクリームはありませんでした」

「イギリスにいらしたんですか？」

「働いてたんです。空爆の間ずっとそこでした。そこである人に出会い——でもその話はしましたよね」

「ロジャーに会ったのは？」

「ニューヨークです」

「結婚もそこで？」

彼女はさっところちを向いた。顔をしかめている。「いいえ、結婚したのはニューヨークじゃありません。それが何か？」

「紅茶がはいるまでの世間話ですよ」

彼女は流しの上の窓から外を眺めた。そこからは湖まで見渡せる。水切り板の端にもたれて、指で置んだ台ふきんをもてあそんでいる。

「もうけりをつけないと。でもどうすればいかわからないんです。あの人を施設にでも入れなくてはいけないのかも。でもなぜか気が進まないんです。何かにサインしなきゃいけないんですよ？」

それを尋ねながら彼女はこちらを向いた。

「それはあの人自分が自分でもできることです。というか、今までならできたでしょう¹²⁷」

紅茶タイマーがチーンと鳴った。彼女は流しのほうを振り向いて、茶葉の入ったポットから給仕用のポットに紅茶を移した。そして新しいポットのほうをすでにティーカップをのせて整えたお盆にのせた。おれは歩み寄って、居間のソファ二つにはさまれたテーブルにそれを運んだ。彼女はおれの向

127 That is, he could have up to now. これまでならできた (が、もう死んじゃったから今はできない) ということ。だからこその後でアイリーンが「どういう意味？」といぶかしがる。村上訳「やろうと思えばできたでしょう」田口訳「その気があればとっくにそうしていたんじゃないかな」。どっちも単に、当人にその気は今も昔もない、というニュアンスで、今はもうできなくなっている、という意味合いがほぼない。だからアイリーンが何をいぶかしんだのかまったくわからない。「今まででもできた」というのではダメで、「今まで**なら**できた」という言い方にしないといけない。アイリーンは、もちろんマーロウがどういう意味で言ったかわかってて、あえてとぼけて見せているだけなのだ。一方清水訳は「もう入ることはできないが——」。意味はとらえつつも、これだとはっきりしすぎていて、アイリーンが間を置いてから誤解したふりをする余地がない。その場で即座に問い詰められてしまう。ただ清水訳は、もう少し表現工夫しましょうという程度でまちがいとまでは言えない。村上、田口は誤訳寸前。

かいにすわり、ティーカップ二つに注いだ。おれは自分のカップに手を伸ばして前に置き、冷めるのを待った。彼女が自分のカップに砂糖二つとクリームを入れるのを眺めた。彼女はそれを味見した。

唐突に彼女が尋ねた。「さっき最後におっしゃったのはどういう意味ですか？ 今までならできた、というのは—自分でどこかの施設に入れたとおっしゃりたいの？ そういうことですか？」

「ちょっと口がすべったってところです。あのときお話した銃は隠しましたか？ ほら、彼が二階で大立ち回りを演じた翌朝です」

「隠す？」と彼女は顔をしかめて繰り返した。「いいえ。そんなことは絶対しません。そんなことしても無駄だと思ってますから¹²⁸。なぜそんなことを？」

「そして今日は家の鍵を忘れた？」

「そうだとやったでしょう」

「でもガレージの鍵は持ってたんですよね？ 普通、この手の家だと外部への鍵はすべて共通になっているのですが」

彼女はぴしゃりと言った。「ガレージは鍵がいらないんです。スイッチで開くんです。玄関の内側にリレースイッチがあって、出るときにそれを押すんです。そしてガレージの後ろに別のスイッチがあって、それがガレージのドアを開閉します。それにガレージは開けっぱなしのことも多いし。あるいはキャンディが外にいつて閉めてくれるんです」

「なるほど」

彼女は声に辛辣さをこめた。「いささか奇妙なことをさっきからおっしゃってますね。こないだの朝もそうだった」

「この家ではいささか奇妙な経験をしてきたもので、夜中に発砲騒ぎ、飲んだくれが前の芝生に転がり、医者に来て何も何もしない。美しい女性が腕をおれに巻きつけて、何やらおれを別人だと思ったかのように話しかけるし、メキシコ人ハウスボーイがナイフを投げつける。あの銃は残念でした。でもあなた本当は旦那さんを愛してなんかいないでしょう、どうですか？ これは前にも言いましたが」

彼女はゆっくり立ち上がった。カスタードのように落ち着いていたが、その紫の目は以前と同じ色には見えなかったし、同じ柔らかさでもないように見えた。そして口元が震え始めた。

「何か—あそこの中で何かあったんですか？」とゆっくり尋ね、書斎のほうを見た。

おれがうなずく間もあらばこそ、彼女は駆け出した。一瞬でドアにたどりついた。激しく開けて突入した。激しい絶叫を予想していたが、あてが外れた。何も聞こえない。まったく役立たずな気分。彼女を部屋に入れず、残念なお知らせが、落ち着いてください、まずはすわって、いささか深刻なこ

128 ここ、いまイチ意味がわかりにくい。拳銃を隠すなんて自分は信じていないってどういうこと？ 清水訳「そんなことは聞いたことがない」でまったく意味を変えてしまっている。村上訳「なんのことだかよくわかりません」でこれも全然意味がちがう。田口訳は「そんなことをしても意味がないもの」。山形と解釈は同じで、これが正解だとは思うものの、断言はしきれない。

とがおきましてウダウダ、といったクサイ決まり文句からだんだん入るべきだった。その決まり文句を一通り終えたところで、実はだれにも何の助けにもなっていない。かえって事態を悪化させるほうがありがちだ。

おれは立ち上がって彼女の後から書斎に入った。彼女は長椅子の横にひざまずいて、彼の頭を胸にかき抱き、その血が自分の服に染みを作っていた。まったく何も音を立てていない。目は閉じられていた。膝まずいて可能な限り前後に身をゆすり、彼をしっかりと抱きしめていた。

戻って電話と電話帳を見つけた。最寄りらしい保安官の支署に電話した。どのみち無線で中継するから本当はどうでもいいのだが。それから台所に出て水を出し、ポケットの黄色い紙の帯を電動ゴミ挽き機に喰わせた¹²⁹。その後から、もう一つのティーポットから茶葉を捨てた。ものの数秒でそいつは消えた。

水を停めてモーターを切った。居間に戻り、玄関を開けて外に出た。

近くに署員が巡回していたらしい。六分ほどで到着した。書斎に連れて行くと、彼女はまだ長椅子の横にひざまずいていた。署員は即座に彼女のところに近寄った。

「すみません、お気持ちは重々お察ししますが、何も手を触れないでいただきたいんです」

彼女は頭を回し、そして慌てて立ち上がった。「夫なんです。撃たれたんです」

彼は帽子を取って机にのせた。そして電話に手を伸ばした。

「名前はロジャー・ウェイドです。有名な小説家です」その声は甲高く脆かった。

「ええ、どなたかは存じ上げています」と言って署員はダイヤルを回した。

彼女は自分のブラウスの前を見下ろした。「二階に行ってこれを着替えてもいいでしょうか？」

「ええ」と彼はうなずき、電話に話をする受話器を置いて彼女のほうを向いた。「撃たれたとおっしゃいましたね。つまりだれか他の人がこの方を撃ったと？」

「この人が殺したんだと思います」とおれのほうを見もしないで言うと、すばやく部屋を出た。

署員はおれを見た。メモ帳を取り出した。何かを書き込んだ。「お名前を聞いておきましょう。住所も。通報したのはあなた？」

「ええ」おれは名前と住所を告げた。

「オールズ警部補がくるまで落ち着いていてください」

「バーニー・オールズ？」

「ええ？ ご存じ？」

「ああ、腐れ縁でしてね。昔は地方検察局詰めだった」

129 いままで言うディスポーザーなんだけど、当時はそういう言葉がなかったのか、あるいはチャンドラーが敢えてその言葉を使わないで気取ったのか。おもしろいので原語直訳にしたが、まあこんなところで突っ張る必要はなく、ディスポーザーで無問題。村上、田口はそうしている。

「最近はちがいますよ。殺人課の課長補佐で LA 保安官事務所詰めです。マーロウさん、あなたは故人一家の友人ですか？」

「ウェイド夫人の言い方だと友人とは言えないようだがね」

彼は肩をすくめて薄笑いを浮かべた。「まあ落ち着いてくださいよ、マーロウさん。銃は持ってますか？」

「今日はない」

「確かめたほうがいいな」そして確かめた。そして長椅子のほうを見た。「こういう現場なら、奥さんがあまり冷静なことを言うとは期待できませんから。外で待ったほうがいい」

[37]

オールズは中背でがっしりしており、短く刈り込んだ薄いブロンドの髪と、色の薄い青い目をしていた。ゴワゴワの白い眉毛で、帽子をかぶるのをやめる以前だと、彼が帽子を脱いだときにいつも驚かされた――予想外に頭がでかいのだ。強面の老練なおまわりで、人生については陰気な見方を持っているが、その下ではきわめてまっとうな人間だ。もうとっくに警部に昇進してもおかしくない。試験には上位三位に入る成績でもう六回も合格しているのだ。だが保安官のお覚えがよろしくないし、彼のほうも保安官が嫌いだった。

アゴの横をさすりながら階段を下りてきた。書斎では長いことカメラのフラッシュが何度も焚かれている。人々が入り出した。おれはずっと私服警官と居間にすわって待っていた。

オールズは椅子の縁にすわって手をぶらぶらさせた。火をつけていないタバコをくわえて囁んでいる。おれを思案するように眺めた。

「昔はさあ、アイドルヴァレーには門番小屋があって、私設警察がいたよな、覚えてる？」

おれはうなずいた。「それにギャンブルも」

「もちろん。止めようがない。このヴァレーは全部、まだ私有地だ。かつてのアローヘッドみたいな、それとエメラルドベイもそうだな。記者がまわりをうろちよろしてない事件に関わったのは久しぶりだ。だれかがピーターセン保安官に何やら入れ知恵したな。テレタイプの記録も残ってない」

「それは大した心遣い。ウェイド夫人はどんな具合？」

「それがえらくゆったりしてるんだよ。クスリでも飲んだのかね。上には十種類以上ある――デメロールまで。あれはよくないシロモノだぞ。おまえの友人方は最近、あんましツイてねえな、え？ どんどん死ぬ」

何も言い返せなかった。

「拳銃自殺は昔から興味があるんだよ。実に偽装しやすい。奥さんはおまえが殺したと言ってる。なんでそんなことを言うんだろうな？」

「文字通りの意味じゃないだろ」

「他にはだれもいない。奥さんは、おまえが銃のありかを知っていたという。やっこさんが飲んだくれてたのも知っていて、こないだやっこさんが発砲して銃を奥さんがもみあって銃を取り上げなきゃいけなかったのも知ってるそうだな。そのときにもおまえさんはここにいた。おまえさんにはかなり分が悪いと思わないか？」

「今日の午後に机を探したんだ。銃はなかった。奥さんにはそれがどこにあるか教えて、隠してくれと言った。いまや彼女は、自分はそんなことをしても無駄だと思ったと言う」

「その『いま』っていつのこと？」とオールズは憮然として尋ねた。

「奥さんが帰ってきてから分署に電話するまでの間」

「机を搜索したんだな。なぜだ？」オールズは手を持ち上げてひざにのせた。おれを無関心そうに見ていて、何を言おうが気にしないという感じだ。

「彼が酔っ払い始めていたからだ。念のため銃をどこかに移すほうがいいと思ったんだ。でもこないだの夜には本当に自殺しようとはしてなかった。ただの演技だった」

オールズはうなずいた。噛みつぶしたタバコを口から取り出して、灰皿に落とし、新しいタバコを口にくわえた。

「禁煙したんだ。咳がひどくなってきたもんでね。でもこのロクでもないものにまだ囚われてるんだ一本くわえてないと、なんか気分が落ち着かない。おまえ、やっこさんが一人のときに見張る役だったの？」

「全然ちがう。うちにきて昼飯食おうと言われたんだ。二人でしゃべったが、執筆がうまくいっていないのでなんか落ち込んでた。そして酒に走ることにしたんだ。取り上げるべきだったと思うか？」

「まだ何も思っていない。構図を理解しようとしてるだけだ。おまえはどんだけ飲んだ？」

「ビール」

「マーロウ、こんなところにいあわせるなんて、ついてねえな、おまえも。あの小切手はなんだ？ やっこさんが書いてサインして破り捨てたやつ」

「連中みんなして、おれにここに来て住んで、あいつをちゃんとさせておけと言うんだよ。みんなするのは、ご当人とその奥さん、そして出版人、ハワード・スペンサーって男。ニューヨークにいるはず。確かめてみるといい。おれは断ったんだ。しばらくして奥さんがやってきて、旦那が失踪しちゃったもんで、探し出して連れ帰ってくれというんだ。だからそれをやってやった。次に気がつくと、あいつを芝生から抱え上げてベッドに寝かせることになった。やりたくてやったんじゃない。なりゆきでなんとなくそうなっちゃっただけなんだ」

「レノックス事件とは無関係なのか、え？」

「おいおい頼むぜ。レノックス事件なんか存在しない」

「ごもっとも」とオールズは素っ気なく言った。膝小僧を握りしめる。男が玄関から入ってきてもう一人の警官に話しをした。そしてオールズのところにやってきた。

「警部補、ロリング先生って人がきてますよ。呼ばれたとのことで。奥さんの主治医です」

「通せ」

警官は戻っていき、ロリング先生がそのきちんとした黒かばんを持って入ってきた。トロピカルなウーステッドのスーツで、涼しげでエレガントに見えた。おれを無視して横を通っていった。

「二階かね？」と彼はオールズに尋ねた。

「ああ—自室ですよ」オールズは立ち上がった。「先生、なんで彼女にデメロールなんか処方したんですか？」

ロリング先生はしかめ面をしてみせて、冷ややかにいった。「私は適切と思ったものを患者に処方する。それを他人に説明する義務はない。ウェイド夫人に私がデメロールを処方したなんてだれが言った？」

「私ですがね。びんが二階にあってあなたの名前がついてますよ。奥さんの洗面所はりっぱな薬屋だご存じないかもしれませんがね、ダウNTOWNでは小さな錠剤があれこれ一通り出回ってるんですよブルージェイ、レッドバード、イエロージャケット、グーフボールその他いろいろ。デメロールはその中でも最悪なんだ。ゲーリングがやってたブツだとどっかで聞いたな。捕まえたときには一日18錠やってたとか。軍医がそれをやめさせるまでに三ヶ月かかった」

「いまの各種単語の意味がわからないが」ロリング先生は冷淡に言った。

「ご存じない？ それは残念。ブルージェイはアモバルビタール、レッドバードはセコナール。イエロージャケットはネンブタール。グーフボールというのはバルビツール類にベンゼドリンをまぶしたものだ。デメロールは合成麻薬で習慣性が非常に強い。それをあっさり配っちゃうんですか？ あのご婦人はなんか深刻な病状でもあるんですか？」

「飲んだくれの夫は、実際問題として感受性豊かな女性にとって、きわめて深刻な苦情の元となるのです」とロリング先生。

「旦那さんのほうまでは手が回らなかったんですか、え？ そいつは残念。ウェイド夫人は二階ですよ。お手間を取らせましたね」

「ずいぶん失敬な。苦情を申し立てる」

「ええ、そうしてくださいよ。でも苦情の前に、別のことを頼みますよ。ご婦人の頭をはっきりさせといてください。お聞きしたいことがあるもんでね」

「私は彼女の状態から見て最善のことしかしない。そもそも私がだれだか知っているのかね、君は？ それとはっきりさせておくが、ウェイド氏は私の患者ではない。アル中治療はしないんだ」

オールズはうなった。「奥さんたちだけですか、え？ ええ、あんたがどなたかは存じ上げてますよ。苦情を申し立てられちゃうなんて、もう心臓ドキドキですわ。名前はオールズ。オールズ警部補です」

ロリング先生は階段を上がっていった。オールズはまたすわり、おれににやりとした。

「あの手の連中は丁重に扱ってやらんとな」と彼。

書斎から男が出てきてオールズのところにきた。やせた真面目そうな男で、めがねをかけ脳みそが詰まっていそうなおでこをしている。

「警部補」

「なんだ」

「傷は接射創で、典型的な自殺、ガス圧でかなりの膨張も見られます。同じ原因で目が眼球突出を示しています。銃の外側に指紋はないと思います。あまりに血が大量にふりかかっている」

「やっこさんが寝ていたか酔い潰れていたら他殺の線はあるか？」とオールズが尋ねた。

「もちろん可能ではありますが、その様子はありません。銃はウェブリー・ハンマーレスです。通常は撃鉄を起こすところまでかなり強い力で引き金をひかないといけませんが、実際の発砲はほんの軽く引けばすむ。銃のあった場所は反動で説明がつきます。いまのところ自殺でないというしるしは何もありません。たぶん血中アルコール濃度はかなり高いでしょう。それが十分に高ければ——」男はそこで口を止めて思わせぶりに肩をすくめた——「自殺かどうか疑う気になるかもしれませんが」

「ありがとう。検死官は呼んだか？」

男はうなずいて立ち去った。オールズはあくびをして腕時計を見た。そしておれを見た。

「おまえさん、帰りたい？」

「もちろん、お許しいただけるなら。おれ、容疑者じゃなかったのか」

「後でまたお呼び立てするかもしれん。見つけやすいところにいてくれ、それだけだ。前は警官だったんだし段取りはわかってるだろう。証拠が逃げ出す前にすばやく動かないといけない事件もある。こいつはその正反対だ。殺人なら、やっこさんに死んでほしいのはだれだ？ 奥さんか？ 彼女はここにいなかった。おまえか？ いいだろう、家にはおまえさんだけで銃のありかを知っていた。完全な舞台だ。すべてそろってるが動機だけがないし、おまえさんの経験も少し考慮すべきかもしれん。だれかを殺したいにしても、おまえさんならここまで露骨なやり方はしないと思うからな」

「ありがとう、バーニー。そうするよ」

「使用人はいなかった。留守だ。だからたまたま立ち寄った人物しかいない。その人物はウェイドの銃のありかを知り、やっこさんが飲んだくれて寝るか酔い潰れているかところに居合わせなきゃならない。そしてモーターボートが騒音をたてて銃声をかき消したときに引き金を引かないといけないしおまえさんが家に戻ってくる前に逃げ出さないとダメだ。それは今の手持ちのあらゆる知識に照らして絶対にあり得ない。それだけの手段と機会を持ち合わせていた唯一の人物は、それを使うはずのない唯一の人物なんだ——まさにそれだけの材料がそろっている人間が自分自身しかいないことを、そいつ自身が充分に承知しているからだ」

おれは立ち上がって帰ろうとした。「それじゃバーニー。おれは今晚ずっと家だから」

オールズは思案するような口ぶりで言った。「一つ気になる。このウェイドって人は有名作家だろ大金持ち、評判も高い。おれはあの手のクズは読まない。やっこさんの登場人物よりも、売春宿にいる連中のほうがずっとマシだ。それは趣味の問題で、おれの警察仕事とは何の関係もない。それだけの財産を持ち、全国でも有数の場所に美しい家を持っていた。美しい妻もいて、友人もたくさん、問題なんか何も抱えてない。おれが知りたいのは、何がそんなにつらくて引き金を自分で引こうなんて思ったのかということだ。まちがいなく何か原因があったはず。もしそれを知ってるなら、さっさと吐いちゃったほうがいいぜ。じゃあな」

おれは玄関に向かった。戸口で番をしていた男がオールズのほうをふりかえり、ゴーサインをもらっておれを出してくれた。おれは車に乗り、進入路を埋め尽くしてふさいでいる各種の役所の車を迂回するのに、ゆっくり芝生の上をとおらなければならなかった。門では別の署員がおれを検分したが何も言わなかった。おれは黒いサングラスをかけて、高速道路の本線のほうに向かった。道は空っぽで静かだった。午後の日差しがマニキュアされた芝生と、その背後の広々とした大きく高価な家に照りつけた。

決して無名ではない男がアイドルヴァレーの家の中で血まみれで死だ。だが怠惰な静けさは乱されていない。いまのところ新聞を見る限り、この殺人はチベットで起きたのかと思うほどだ。

道のカーブのところで、二つの邸宅の壁が背中あわせになっていて、濃い緑の保安官事務所の車が停まっていた。署員が出ていて手を挙げた。おれは停車した。彼は窓のところへやってきた。

「免許拝見」

おれは札入れを取り出して手渡した。

「免許だけお願いします。財布には触ってはいけないもので」

おれは免許を取り出して渡した。「何かありましたか？」

彼はおれの車の中をさっと見て免許を返した。

「いや特に。ただの定期的なチェックですよ。ご協力ありがとうございました」

彼は手で行っていいよと仕草すると、駐車したパトカーに戻った。いかにもおまわり。絶対に自分たちが何かする理由は教えない。そうすれば、当の警官たちも理由がわかっていないのを隠せる。

家に戻り、冷えたドリンクを何杯か買って、夕食にでかけ、戻ってきて、窓とシャツを開けて何かが起こるのを待った。長いこと待った。九時になったところで、バーニー・オールズが電話してきて署までこいという。そして途中で花を摘むとか余計な道草は食うな、とのこと。

[38]

キャンディが保安官事務所の控え室で、壁際の堅い椅子にすわらされていた。彼が憎悪の目を向ける中、おれはその横を通ってピーターセン保安官が法廷を開いているでかい正方形の部屋に入った。そこは二〇年にわたる彼の忠実な公共サービスに感謝する市民からの証言集のどまんなかだ。壁は馬の写真だらけで、ピーターセン保安官がどの写真にも自ら登場していた。その彫り物入りの机の角には馬の頭があった。そのインク壺は磨いた馬の蹄で、ペンはそれと対になった蹄に白い砂を満たしたものに突き立ててあった。そのそれぞれについた金のプレートは、何やら日付について書かれているシミ一つない机の真ん中にはビッグダラムの袋と茶色いタバコ巻紙の束があった。ピーターセンは自分で自分のタバコを巻くのだ。馬にまたがって片手で巻くこともできたし、実際それをよくやっていた。特に美しいメキシコ銀細工まみれのメキシコ風鞍をつけた。でっかい白馬に乗ってパレードを先導するときやるのだ。馬上では、てっぺんが平らのメキシコソンプレロをかぶる。見事な乗馬で、馬はいつもいつ静かにすべきか、いつ暴れて見せて、保安官がその平静で完全無欠な笑顔でそれを片手で鎮める様子を披露できるようにすべきか承知していた。保安官はなかなかの役者だった。ハンサムで鷹めいた横顔で、さすがにそろそろアゴの下がちょっとたるんできていたが、頭を高くかかげてそれをあまり目立たないようにするコツも心得ていた。自分の写真を撮らせるのにえらく力を入れていた。五十台半ばで、デンマーク人の父親は大金を遺していた。保安官はデンマーク人には見えなかった。黒髪で肌が茶色で、葉巻店の宣伝用インディアンみたいな超然とした態度を取っているし、脳みそも同程度だったからだ。だがだれも彼を悪者だとは言わない。彼の部下に悪者はいたし、世間の目も保安官の目もごまかしてはいたが、そいつらの邪悪さはピーターセン保安官にはいささかも影響しなかった。彼は大した努力もなしに再選され続け、パレードの先頭で白馬にまたがり、カメラの前で容疑者を尋問して見せる。キャプションにはそう書かれていた。実際には、彼はだれも尋問したりしていない。やり方すら知らない。机にすわっていかめしい様子で容疑者を見つめ、カメラに自分の横顔を見せるのだ。フラッシュが焚かれ、カメラマンは保安官に恭しく感謝を述べ、容疑者は口も開かずにそこから退去させられ、保安官はサン・ファーマディナンド・ヴァレーの牧場である自宅に帰るのだ。そこでなら、彼はいつでもつかまる。当人が捕まらなくても、その馬のどれかとしゃべればいい。¹³⁰

たまに選挙時になると、見当違いの政治家がピーターセン保安官の仕事を手に入れようとして、「横顔はめこみしか能のない男」とか「自分を煙に巻く大根役者」といったあだ名をつけようとするが、まったく効き目はない。ピーターセン保安官はあっさり再選され続ける。悪評がなく、写真写り

130 この段落、すさまじく長くて異様。なんでこんなに長いんだ？

のよい顔で、余計なことを言わなければ、まったく能力などなくても重要な公職に永遠にとどまり続けられるという生きた証拠だった。そのうえ馬の乗ったときにかっこよければ無敵だ。

オールズとおれが入ると、ピーターセン保安官は机のところに立っていて、カメラマンたちは別のドアから一列になって立ち去るところだった。保安官は白いステットソン帽をかぶっていた。タバコを巻いているところだった。帰宅準備をすっかり整えていた。そしておれをいかめしく見つめた。

「こいつはだれだ？」彼は豊かなバリトンで尋ねた。

「名前はフィリップ・マーロウ。ウェイドが自殺したときに家にいた唯一の人物です。写真を撮りますか？」

保安官はおれを検分した。「それには及ぶまい」と言うと、鉄状の白髪交じりの、でっかい疲れたような男に変身した。「なんか用があれば牧場にいるから、ヘルナンデス警部」

「了解です」

ピーターセンは台所用マッチでタバコに火をつけた。そのマッチを親指の爪で擦ってつけた。ピーターセン保安官にはライターなんか無用。彼はまったくの、自分のタバコは自分で巻いて片手で火をつけるような人間なのだ。

彼はおやすみをいって出ていった。まったく無表情で厳しい黒い目の人物がついていった。彼の個人ボディガードだ。ドアが閉まった。彼がいなくなるとヘルナンデス警部がその机に向かい、保安官の巨大な椅子にすわり、角にいた速記タイプのオペレーターはスタンドを壁から離して肘の動く余地を作った。オールズは机の端にすわりおもしろがっているようだった。

ヘルナンデスが厳しく言った。「よーし、マーロウ。話を聞こうか」

「なんでおれは写真を撮ってもらえなかったんですか？」

「保安官の話は聞いたよね」

「ええ、でも理由は？」おれは泣き言めいた口調で言った。

オールズは笑った。「わかってるくせに」

「おれが背が高くて、ダークで、ハンサムで、だれかの目を惹いちゃいそうだから？」

ヘルナンデスが冷たく言った。「そこまで。供述やろうよ。最初のところから始めて」

おれは最初から話をした。ハワード・スペンサーとの面談、アイリーン・ウェイドとの出会い、ロジャーを見つけてくれと言われたこと、見つけたこと、家に招かれたこと、ウェイドに何をしてくれと言われたか、ハイビスカスの茂み近くで人事不省のところを見つけた話、その他もろもろ。速記タイプのオペレーターがそれを書き取った。だれも割り込まなかった。すべて真実だった。真実、真実のみ。だがすべての真実では必ずしもなかった。話さなかったことは他人の知ったことじゃない。

終わりまでくるとヘルナンデスが言った。「いいね。でもそれで全部じゃないよね」。こいつはクールで有能で危険なやつだ、このヘルナンデスってやつは、保安官事務所には絶対こういうのがいる。「ウェイドが寝室で発砲した夜に、ウェイド夫人の寝室に入ってドアを閉めてしばらくそこにいたんだって？　そこで何してたの？」

「彼女に招かれて、旦那の具合をきかれたんです」

「なんでドア閉めたの？」

「ウェイドは眠りかけていて、騒音をたてたくなかった。それにハウスポーイがうろついて聞き耳をたててました。それにドアを閉めろと言ったのは彼女です。こんな大事になるとは思わなかった」

「どのくらいいたの？」

「さあねえ。3分ほどかな」

ヘルナンデスは冷ややかにいった。「そこに2時間ほどいたんでしょ。言ってる意味わかる？」

おれはオールズを見た。オールズは何も見えていなかった。いつもながら火のついていないタバコの端をかじっていた。

「それはまちがったことを聞かされてますよ、警部」

「どうかねえ。その部屋を離れたら下の書斎にいて、長椅子で夜を過ごしたんだろ。夜の残りを、と言うべきかな」

「自宅に呼び出されたときには十一時十分前だった。その夜に最後に書斎に入ったときには、二時をとっくにまわってた。呼びたければそれを夜の残りとも言ってくださいよ」

「ハウスポーイを呼んできてちょうだいな」とヘルナンデス。

オールズは外に出てキャンディを連れてきた。キャンディを椅子にすわらせた。ヘルナンデスは彼の身元その他を明確にするためいくつか質問をした。そしてこう言った。「よおしキャンディくん——便宜上そう呼ばせてもらうね——マーロウがロジャー・ウェイドをベッドに入れる手伝いをしてから、何があった？」

何がくるかはおおむね見えた。キャンディは、ほとんど訛りのない静かで獰猛な声で自分の話を語った。まるでメキシコ訛りを思い通りにつけたり消せたりするかのようだ。その話によれば、まだ用があるかもしれないのでそこにしばらくとどまって、しばらく台所で何か食べたりして、しばらくは居間にいたとのこと。居間にいて玄関近くの椅子にすわっていると、アイリーン・ウェイドが自室の戸口に立っているのが見え、そこで服を脱いだという。素っ裸の上にローブを着たのを見て、そしておれが彼女の部屋に入りドアを閉じるのも見て、そこに長いこととどまったという。2時間ほどだったそうだ。階段を上がって聞き耳をたてた。ベッドのスプリングがきしるのが聞こえた。ささやき声

が聞こえた。キャンディは自分の意味するところを実に露骨に示した。話し終わるとこっちが腐食しそうな視線を向け、その口元は憎悪にきつく引き絞られていた。

「外へ出してくれ」とヘルナンデス。

「ちょっと待った、尋問させてくれ」とおれ。

「ここでは尋問するのはおれなの」とヘルナンデスが厳しく言った。

「やり方がわからないでしょう、警部。現場を見てないんだから。こいつはウソをついているし、こいつ自身もおれもそれは承知してるんだ」

ヘルナンデスは椅子にもたれて保安官のペンを一本手に取った。そしてペンの柄を曲げた。長くとんがったペンで、堅くした馬毛でできたペンだったのだ。彼が先端を話すとそれはすぐ元通りになった。

「やってみてよ」とついにかれは言った。

おれはキャンディと対面した。「ウェイド夫人が服を脱いだのを見たとき、おまえはどこにいた？」

「玄関近くの椅子にすわっていた」彼は渋い口調で言った。

「玄関と向かい合わせのソファの間だな？」

「言ったとおりだ」

「ウェイド夫人はどこにいた？」

「自室のドアのすぐ内側。ドアは開いてた」

「居間についていた明かりは？」

「ランプが一つ。背の高いランプでブリッジランプというやつだ」

「バルコニーにはどんな明かりがついていた？」

「明かりはない。明かりは奥さんの寝室の中」

「寝室の中の明かりはどんなものだ？」

「あまりなかった。ナイトテーブルのランプかなんか」

「天井のライトじゃないのか？」

「ない」

「彼女が服を脱いでから——自室のドアのすぐ内側と言ったよな——ローブを着たな。どんなローブだ？」

「青いローブ。ハウスコートみたいに長いやつ。それをサッシュで縛るんだ」

「つまりおまえは、彼女が服を脱ぐところを実際に見ていないなら、ローブの下に何を着ていたかはわからないよな？」

キャンディは肩をすくめた。なんとなく不安そうだった。「Sí. その通り。でも奥さんが服を脱ぐのは見た」

「この嘘つきめ。居間のどこからだろうと、彼女が戸口のところにいて服を脱ぐのが見える場所なんかまったくないし、まして部屋の中なら絶対不可能だ。バルコニーの端まで出てこないが無理だ。でもそこまで出ていたら彼女はおまえを見ていたはずだ」

彼はおれをにらみつけるだけだった。おれはオールズのほうを見た。「おまえは家を見てるよな。ヘルナンデス刑事は見えていない——それとも見たの？」

オールズは軽く首を振った。ヘルナンデスは顔をしかめ無言だった。

「ヘルナンデス警部、もしウェイド夫人が戸口とかその内側という奥まった場所にいたなら、あの居間だとどこからでもウェイド夫人の頭のとっぺんすら見えるような場所はないんだ——立っていても。そしてキャンディは、自分はすわっていたと言ってる。おれはキャンディより 10 センチ背が高いし、家の玄関すぐ内側に立っていたら、開いたドアのとっぺん 30 センチしか見えない。あいつが見たと称するものを見るためには、彼女はバルコニーの縁までこなきゃならない。彼女がそんなことをするはずありますか？ そもそもなんで戸口で服を脱ぐんですか？ まるで筋が通らない」

ヘルナンデスはだまっておれを見た。そしてキャンディを見た。「時間の話はどうよ？」と静かにおれに向かって尋ねた。

「それは二人の水掛論になっちまう。おれは証明できることについて話してるんだ」

ヘルナンデスは、おれには理解できないほどの早口でキャンディにスペイン語を投げつけた。キャンディは不満そうに彼を見つめるだけだった。

「連れてっちゃって」とヘルナンデス。

オールズは親指をぐいっと示してドアを開けた。キャンディは出て行った。ヘルナンデスはタバコの箱を取り出し、一本口にくわえ、黄金のライターで火をつけた。

オールズが部屋に戻ってきた。ヘルナンデスは落ち着いて言った。「いまあの子に言ったのは、検屍審問があつていまの話を証言台でしたら、Q で一年から三年おつとめすることになるぞって話。大してびびった様子もなかったけどね。何であんなにカリカリしてるかは言わずもがな。昔ながらの横恋慕だ。あいつが現場にいて、殺人を疑うべき理由がちよっとでもあったら、かなりいい容疑者になるなあ——でもあいつはナイフを使うかな。これまで、あの子がウェイドの死をずいぶん苦にしてる印象を受けたねえ。何か聞いときたいことある、オールズちゃん？」

オールズは首を振った。ヘルナンデスはおれを見てこう言った。「朝にまたきて供述書にサインしてちょうだいよ。その頃までにはタイプさせとくからさあ。十時までには検屍報告も入るはず、速報版かもしれないけど。この取り決めで何かご不満なところは、マーロウちゃん」

「質問を別の言い方で言ってもらえませんかね。その質問だと、不満でないところが一つでもあるみたいじゃないですか」

彼はうんざりしたように言った。「そうか。帰った帰った。おれも帰る」

おれは立ち上がった。

「もちろんおれは、キャンディがこっちをはめようとしたヨタなんか元々信じてなかったんよ。単なる締め上げ材料として使わせてもらっただけね。悪く思わんどいてね、できるなら」

「思わない思わない、警部。何も思いませんって」

一同はおれが立ち去るのを眺め、おやすみも言わなかった。おれは長い廊下をあるいてヒル街の出口に向かい、車に乗って家に帰った。

何も思わないというのはまさにその通りだった。おれは星と星の間くらい虚ろで空っぽだった。家に帰り着くと、きついドリンクを作って居間の開いた窓際に立ち、それをすすってローレルキャニオンを行き交う車の地響きを聞きながら、その大通り用の切り通しを作った丘の肩口に垂れ下がるでかい怒った都市のぎらつきを眺めた。はるか彼方でバンシー絶叫のような警察や消防のセイレンが立ち上がっては消え¹³¹、決して長いこと完全には静まらない。一日 24 時間、だれかが逃げ、だれかがそれを追う。千もの犯罪の夜の中、人々は死に、けがをして、飛び散るガラスに切られ、ハンドルや重いタイヤに押しつぶされている。人々が殴られ、強盗され、首を絞められ、強姦され、殺害されている。飢え、病気、退屈、孤独や後悔で絶望し、怒り、残酷で熱にうかされ、すすり泣きで身をゆすっている。他のどの都市にも劣るとも勝らず、豊かで活力とプライドに満ちた都市、失われぶちのめされ空疎さまみれの都市。

すべてはその人の立場と個人の遺恨次第。おれにはそんなのはない。どうでもよかった。

おれはドリンクを飲み干して寝た。

131 ここ、警察のバンシーと消防署のサイレン＝セイレーンがさりげなく対比されていてなかなか凝っている。さりげなく誤植っぽく反映してみた。既訳はすべてバンシーは無視。この段落、原文は超かっこいいし、既訳も多少は努力してるがもう一段ほしい。また次の文の score、既訳は「成果」「点をかせいでいるか」としているが、この前の描写すべてが否定的な描写なので、山形は遺恨の意味だと解釈している。

[39]

検屍審問は不発だった。検屍官は医学的な証拠が揃う前に検屍官がそれを張り切って招集してしまったのだ。早くしないと世間の注目が自分に集まらなくなると怖れてのことだった。だが杞憂だった。作家の死は—有名作家ですら—いつまでもニュースにはならず、さらにその夏には競合が多すぎた。ある王様が退位し、別の王様が暗殺された。一週間で大型航空機が三機墜落。でかい報道機関の親玉がシカゴで自分の車の中で蜂の巣にされた。刑務所の火事で受刑者 24 人が焼死。ロサンゼルス郡の検屍官はツイてなかった。人生のいいことにありつけない人間なのだ。

おれが証言台を離れるとき、キャンディが目に入った。明るい悪意に満ちた笑みを浮かべている—なぜだろうね—そしていつもながらちょっとばかりめかしこみすぎていた。ココア色のギャバジンのスーツと白のナイロンシャツ、群青色の蝶ネクタイ姿だ。証言台では物静かでよい印象を与えた。はい、ボスは最近しょっちゅうかなり飲んでくれていました。はい、二階で銃が撃たれたときには、ボスをベッドに入れるのを手伝いました。はい、ボスはその日、キャンディがそこを離れる前にウィスキー寄越せといいましたが、拒絶しました。いいえ、ウェイド氏の文芸作業については何も知りませんが、ボスがやる気をなくしていたのは知っています。何度も投げ捨てては、それをゴミ箱から回収するのを繰り返していました。いいえ、ウェイド氏がだれかと口論するのを聞いたことはありません等々。検屍官は厳しく責め立てたが、何も出てこなかった。だれかがキャンディにしっかりコーチをしていたのだ。

アイリーン・ウェイドは黒と白の服装だった。青ざめて、低く明瞭な声で話し、それはアンプでも潰れない声だった。検屍官は彼女をビロードの手袋二枚重ねで扱った。彼女に語りかけるときには、声にすすり泣きをこめずにはいられないとでも言うようだった。彼女が証人台を離れるときには、立ち上がってお辞儀をして、彼女にかすかな一瞬の微笑を向けられると、ほとんど自分のツバでのどを詰まらせそうになっていた。

出がけのすれちがいざまに、彼女はほとんどこちらを見ようとしなかったが、最後の最後でほんの数センチほど頭を回し、本当に軽く会釈をした。まるでずっと前にどこかで会ったはずだが、だれだかどうも思い出せないとでも言うようだった。

すべてが終わって階段のところでオールズに出くわした。眼下の車の流れを見ていた、というか見ているふりをしていた。そしてそのままこちらを見ることもなく言った。

「うまくやったな。おめでとう」

「キャンディはうまく仕込んだな」

「おれじゃないよ。地方検察局が、色っぽい話は関係ないと決めたんだ」

「どの色っぽい話のこと？」

すると彼はこっちを見た。「ハッハッハ。別におまえのことじゃないよ」。そして遠くを見る顔つきになった。「ああいうのを長年見過ぎてきた。げんなりしてくる。なかでもこいつの出所は格別だ古い秘蔵の代物。上流階級限定。じゃあな、クソ野郎めが。20ドルのシャツを着るようになったら電話くれよ。はせ参じてお前の上着をお持ちしてさしあげますから」

人々はおれたちを波のように避けつつ階段を上り下りした。おれたちはそこに突っ立っていた。オールズはポケットからタバコを取りだし、それを眺めてからコンクリートの地面に落とし、踵で粉々に踏みにじった。

「もったいない」とおれ。

「たかがタバコだ。人命じゃない。ほとぼりが冷めたら、あの女と結婚か？」

「うるせえ」

彼は苦笑いした。「おれは話をする相手はいいのに、いつも質問をまちがえる¹³²」と苦々しく言った。「何か異論は？」

「異論なしだよ、警部補」とおれは言って階段を下りた。背後で何か言っていたがそのまま進んだ。

フラワー通りのコンビーフ屋に行った。気分にあっていた。入り口上の無礼な標識にはこうある。「男限定。犬と女は立入禁止」。中のサービスも同様に洗練されていた。ウェイターは料理を投げてよこすし、ヒゲも剃っておらず、釣り銭から勝手にチップを差し引きやがった。料理そのものは単純ながらとてもおいしく、スウェーデンの黒ビールもあって、マティーニなみにガツンと効く。

事務所に戻ると電話が鳴っていた。オールズが「そっちにこれから寄るから。言わなきゃならんことがある」と言う。

ハリウッド分署かそこらにいたんだろう。二十分も経たずに事務所までやってきたからだ。

客用の椅子にどっかりすわると、脚を組んでうなるように言った。

「さっきは言い過ぎた。すまん。忘れてくれ」

「忘れることはないだろう。傷をほじくろうぜ」

「いいだろう。だがここだけの話だぞ。人によっては、おまえがろくでもないヤツだと思ってる。おれは、知る限りではお前が極端に曲がったことをするやつとは思ってないんだよ¹³³」

132 これを聞いてマーロウが怒るが、この文の具体的な意味がよくわからない。マーロウがポッターと知り合いだというのがその筋に知れ渡り、じゃあお前も金持ち共の仲間入りか、とそれまでの発言は匂わせているが、ここの発言はつまり、ここでおまえにもっとへつらう発言をすればよかった、ということなのか？ 既訳はどれもそういう解釈にしている。それも有り得るが、絶対にそうだと断言できるほどではなく、後でマーロウに謝るほどのひどい発言には聞こえない。そのまま訳しておいた。

133 never knew you to do anything too crooked. 村上訳「しかし君が裏工作をするようなケチなやつだとは知らなかったね」、田口訳「おまえさんがこれほど汚いことをやるやつだとは知らなかった」。ポッターから一言あったこ

「あの20ドルのシャツとかいうのは何の話だったんだ？」

「ああそれね。ちょっとむかついてただけ。ポッター爺さんのこと考えてたんだよ。秘書に言ってそれが弁護士に言ってそれがスプリンガー検察長官に言ってそれがヘルナンデス警部に、おまえがあの爺さんの個人的な友人だと耳に入れさせたわけだ」

「そんな手間はかけないよ」

「会ったんだろう。それだけ時間を割いたんだろう」

「会った、それだけ。気に入らないやつではあったが、ただのやっかみかも。わざわざおれを呼びにやらせて、助言をしてくれたんだ。デッカいタフなやつで、他はわからん。悪い奴には見えない」

オールズは言った。「1億ドル儲けるのにきれいな方法なんてねえよ。てっぺんの人は自分が手を汚してないつもりだろうが、途中のどこかでいろんなヤツが壁に押し出されて、罪もない小企業が足場を失いスズメの涙で店を売るはめになり、まっとうな連中が職を失い、株価工作が行われ、委任状が古い黄金のかけらみたいに買い漁られ、みんなが求めているのに、利益が減るからといって金持ちが嫌う法律を阻止するのに、利権屋だのでっかい法律事務所だのが何十万もの手数料を掻き込む。大金は大権力で、大権力は歪んで使われるんだ。それが世の中の仕組みだろ。おれたちにはこの程度が精々なかもしれないが、それでもそんなおきれいなもんじゃねえや」

「アカかよ」おれは単に嫌がらせで言った。彼はバカにしたように答えた。

「わからんよ。まだ取り調べは受けてないんだ。おまえ、自殺の見立てが気に入ったんだろう？」

「他にあり得ないだろ？」

「あり得ないんだろうな」と言いつつ彼は、硬く無骨な手を机にのせて、その甲の大きな茶色い染みを眺めた。「おれはもう歳だ。ケラトシスというんだとき、この茶色の点は。五十歳過ぎるまではできないやつだ。おれは老いぼれ刑事で老いぼれ刑事は老いぼれろくでなしだ。このウェイドの死に方はいくつか気に入らない点がある」

「たとえば？」おれは後ろにもたれて彼の目のまわりの深い日焼けしたシワを眺めた。

「年の功ってやつで、変な現場は匂いでわかんよ、それについて何一つ手出しできなくてもな。そうになったら、こうやってすわって話すしかない。遺書がないのが気に食わん」

「泥酔してたんだぜ。単にいきなりのイカレた衝動だろ」

オールズはその青い目を上げて、机から手を落とした。「やっこさんの机を調べたよ。自分宛の手紙なんか書いてる。ひたすら書きまくってたヤツだ。飲んでてもしらふでもタイプライターを叩き続けたんだぜ。中にはわけの分からんのもあるし、中にはなんか笑えるものもあるし、中には悲しいも

と？ 全然ちがう。階段のところでは、一瞬そういう疑惑にかられたけれど、わざわざ謝りにきたんだから、いまはそんなことは思っていない。正反対の誤訳。文字通りに読もうよ、おまえが極度に汚いことをしたことを、おれはいままで知らないということ、つまり、お前が汚いことをした試しはない、極端に曲がったことはしないヤツだ、ということ。清水俊二は「おれはわざと意地わるくするほど君をよく知らないんだ」とまったくピントはずれの誤訳。

のもある。あいつは何か心に抱えてた。それを迂回してあれこれ書きまくっていたが、でもその本体には決して触れなかったんだ。あんなヤツなら、自殺するなら二ページの遺書くらい遺しただろう」

「泥酔してたんだよ」おれは繰り返した。オールズはうんざりしたように答えた。

「だからやつこさんはそんな関係なかったんだって。次に気に入らないのは、あの部屋でやらかして、発見者が妻になるようにしたってことだ。うん、泥酔してたのはわかる。それでも気に入らない次に気に食わないのは、モーターボートの騒音が銃声をかき消すちょうどそのタイミングで引き金を引いたってことだ。ご当人には関係ないことじゃないか。これまた偶然だったか？ さらに偶然といえば、まさに使用人の休みの日に、奥方が玄関の鍵を忘れて、家に入るのに呼び鈴を鳴らさなきゃいけなかったってことだ」

「裏口にまわることもできた」

「そりゃわかってる。おれが言ってるのはその状況なんだ。呼び鈴に出られるのはおまえしかいなかったし、彼女はおまえがいたのを知らなかったと言ってたよな。ウェイドは生きていて書斎で仕事をしていたなら呼び鈴は聞こえない。書斎のドアは防音だ。使用人はいない。木曜だったから。それを忘れていたと言うんだ。そして同じく鍵も忘れた」

「そういうあんたも一つ忘れてるぞ、バーニー。おれの車が進入路にあった。だから彼女は呼び鈴を鳴らす前に、おれがいるのを知っていた——少なくともだれかがいるのはわかってたんだ

彼はニヤリとした。「忘れてたか、そうだな。よし、するとこんな話になる。おまえは湖にいて、モーターボートがすごい騒音を立ててた——ちなみにたまたま訪問していたアローヘッド湖からの二人組だったとき、ボートはトレーラーに乗せてきたんだ。ウェイドは書斎で寝ているか酔い潰れてて、すでにだれかが銃を机から取り出していて、彼女はおまえが銃をそこに入れたのを知っていた。前回のときにおまえが話したからな。さて、仮に彼女が実は鍵を忘れておらず、家に入り、ぱっと見ておまえが水辺にいるのを見て、書斎を覗くとウェイドが寝ていて、銃のありかも知っていて、それを取ってきて、頃合いを見て、旦那を仕留めて、銃を発見場所に落として、家の外に出て、モーターボートがいなくなるまでしばらく待って、それから呼び鈴を鳴らしておまえが開けるのを待ったんだ異論は？」

「動機は？」

彼は渋い声で言った。「そうなんだよ。そこが問題なんだ。あの女が離婚したいなら実に簡単なんだ。もう完全に思い通り。男は飲酒癖があつて、彼女に暴力をふるった過去もある。慰謝料たんまりすてきな財産分与たつぷり。何の動機もない。どのみちタイミングがきれいすぎる。五分早ければ無理だった、おまえが共犯でない限り」

おれが何かを言いかけたが彼は手を挙げた。「あわてるなよ。別に共犯だろとか糾弾してるんじゃないから。ただ考えてるだけだ。五分後でも同じ答えになる。彼女はそれをやるのに十分間あった」

おれは苛立ったように言った。「十分間といっても、そんなの絶対に予想はつかないし、まして事前に計画もできない」

彼は椅子にもたれこんでため息をついた。「わかってる。おまえは答を全部知ってる。おれも答を全部知ってる。それでも腑に落ちないんだ。そもそもおまえは、あの連中と何をしてたんだ？ 男はお前に千ドルの小切手を書いて、それからそれを破り捨てる。おまえに腹を立てたんだと言ったな。どのみちそんな金はいらなかったし、受け取らなかったと言ったな。そうかもな。そいつ、お前が奥さんと寝てると思ってたのか？」

「いい加減にしろよ、バーニー」

「寝てたか聞いたんじゃない。男がそう思ってたか、と訊いたんだ」

「同じ答えだ」

「わかった。じゃあこれはどうだ。メキシコ野郎の強請のネタは？」

「おれの知る限り何もない」

「あいつは金がありすぎる。銀行に 1500 ドル以上、やたらに服もあり、シボレーの新車まで」

「ヤクでも売ってるのかも」

オールズは手をついて椅子から身体を押し上げると、おれを見下ろしてにらんだ。

「おまえ、ずいぶんツイてるんだぜ、マーロウ。二度もヤバい状況からギリギリ逃れたんだ。あまりいい気にならないほうがいいぞ。あの連中にずいぶんと尽くしてやって、しかも一銭も受け取っていない。おれの聞いたところ、レノックスってやつにもえらく親切だったそうじゃないか。そしてそっちからも一銭ももらってない。どうやって喰ってるんだ、おまえ。貯金たんまりで、もう働かなくていいのか？」

おれは立ち上がって机のまわりを周り、オールズと対面した。「おれはロマン主義者なんだよ、バーニー。夜に叫ぶ声を訊いたら、何があったか見に行く。そんなことをしても一文の得にもならない。頭があれば、窓を閉めてテレビの音量をもっと上げるんだ。あるいはアクセルを思いっきり踏んでそこを離れる。他人の面倒事には関わるな。せいぜいが白い目で見られるだけ。最後にテリー・レノックスに会ったとき、うちでおれが淹れたコーヒーをいっしょに飲んでタバコを吸った。だからあいつが死んだと訊いて、台所にいってコーヒーを淹れて、あいつのためにそれを注ぎ、タバコをあいつのために火をつけ、コーヒーが冷めてタバコが燃え尽きたらあいつにグッドナイトと言った。そんなことをしても一文にもならない。おまえはやらないだろう。だからおまえはいいおまわりだし、おれは私立探偵なんだ。アイリーン・ウェイドは夫のことが心配なので、おれはでかけて家に連れ帰った。別のときにはトラブルを起こしておれに電話してきて、おれはでかけて芝生にいたあいつを運んでベッドに入れて、一文ももらわない。何の得にもなりやしない。まったく何も、ただたまに小突き回されたり、牢屋に放り込まれたり、メンディ・メネンデスみたいなお手軽な稼ぎ屋に脅されたりす

る。でも金はない。一銭も。金庫に五千ドル札が入ってるが一文も使ってない。その金を得たやり方に変なところがあったからだ。最初はそれでちょっと遊んだし、たまには取りだして眺めはする。でもそれだけだ—使う金には一文もなっていない」

オールズは冷淡に言った。「偽金だろうよ。とはいえそんな額面のでかい偽札なんか作らないけどな。それでその長口舌で何が言いたいんだ？」

「何も。言った通り、おれはロマン主義者なんだ」

「聞いたよ。それで一文の得にもならない。それも聞いた」

「だがおまわりにクソ食らえとならいつでも言える。クソ食らえ、バーニー」

「おまえが裏の尋問室で明かりを当てられていたら、おれにクソ食らえとは言えないくせに、旦那」

「いずれどうだかわかるかもな」

彼はドアのところにいて引っぱり開けた。「一つ教えてやろうか。おまえは自分がお利口なつもりだろうが、ただのバカだよ。壁の影でしかない。警察はもう20年やってるが、だまされたことは一度もないんだ。相手がウソをついているときや、何か隠しているときは絶対わかる。お利口さんは自分以外のだれもだませていないんだぜ。聞くだけ聞いといたほうがいいぜ、旦那。おれは知ってるんだ」

彼は戸口から頭を引っ込めてドアが閉まるに任せた。その踵が廊下をドカドカと下っていった。まだそれが聞こえているうちに、机の電話が鳴り始めた。向こうで声が、あの明瞭なプロらしい口調でこう言った。

「ニューヨークから、フィリップ・マーロウ様にお電話です」

「フィリップ・マーロウはおれだけど」

「ありがとうございます。少々お待ちください、マーロウ様。先方におつなぎします」

次の声は知った声だった。「ハワード・スペンサーです、マーロウさん。ロジャー・ウェイドのことは聞きました。かなりきつい衝撃です。細かい話すべてが伝わってきたわけではありませんが、あなたの名前も登場しているようで」

「現場に居合わせたんです。飲んだくれて自分で自分を撃ちました。ウェイド夫人が直後に帰宅しました。召使いたちは留守でした—木曜は休みの日なので」

「二人きりだったのか？」

「いっしょじゃありませんでした。そこらにいて、奥さんが戻ってくるのを待ってたんです」

「なるほど。まあ検屍審問があるだろう」

「とっくに終わってますよ、スペンサーさん。自殺。しかも驚くほど広報宣伝なし」

「え、そうなの？ そりゃ奇妙だ」彼は必ずしもがっかりしたようには聞こえなかった——むしろいぶかしんで驚いているようだった。「あんな有名人なのに。私が思ったのは——まあ私が何を思おうとどうでもいいか。たぶんそっちへ行った方がいいな。でも来週終わりまでは無理だ。ウェイド夫人には電報を送ろう。何かしてあげられることがあるかもしれない——それと本のこともね。だって、ある程度まで書き進んでいたら、だれか他の人に仕上げてもらえるかもしれないからね。すると君は結局あの仕事を引き受けたのか」

「いいや。彼自身に頼まれはしたんですけどね。あなたが飲むのは止められないと率直に言いましたよ」

「どうも、やってみようとしなかったようだな」

「ちょっと待ってくださいよ、スペンサーさん。あなたこの状況について、何一つわかってないでしょう。結論に飛びつく前に、少し状況を理解したらどうですか。おれだって自分を多少責めないわけじゃないんですがね。こんなことが起きて、現場にいたら、どうしても罪の意識には襲われるのかもしれない」

「そりゃそうだ。あんなことを言ってすまない。まったく不適切だった。いまアイリーン・ウェイドは家にいるのかね——それとも君にはわからんかな？」

「わかりませんねえ、スペンサーさん。電話してみたらどうです？」

「まだだれとも話したい状態じゃないと思うんだがね」彼はゆっくり言った。

「なんです？ 検屍官には話してたし、まばたき一つしませんでしたよ」

彼は咳払いした。「なんだかあまり同情的じゃないようだね」

「ロジャー・ウェイドは死んだんですよ、スペンサー。ちょっとろくでもないヤツで、ちょっとは天才だったのかもしれない。それはおれにはわからん。自己中心的な飲んだくれで、しかも自分が大嫌いだった。おれにやたらに面倒をかけて、最後には大量に悲しませてくれたヤツ。なんでおれが同情的になんかならなきゃいけないんですか」

「ウェイド夫人のほうの話だったんだがね」彼はきっぱり言った。

「おれもそうですよ」

「着いたら電話するよ。では」と慌てたように彼は言った。

そして電話を切った。おれも切った。身動きせずに電話を二分ほど見つめた。そして電話帳を机の上に出して、ある番号を探した。

[40]

シューエル・エンディコットの事務所に電話した。だれかが、いまは出廷中で午後遅くまで戻らないと教えてくれた。おれのお名前うかがってもよろしいですか？ だめ。

ストリップにあるメンディ・メネンデスの番号にかけた。今年は「エル・タパード」という名前になっている場所で、なかなか悪くない名前。アメリカ系のスペイン語だと、これは埋もれたお宝という意味もあるのだ。これまでいろんな名前と呼ばれてきた場所で、かなりコロコロ名前が変わった。ある年には、ストリップで南に面した何もない高い壁に、青いネオンで番号が書いてあるだけだった丘を背にして車寄せが通りから見えないように片側に回り込んでいる。なんとも秘密主義。だれも詳しいことは知らない。知るのは風紀課のおまわりとギャングと、よいディナーに 30 ドルと上階の大きく静かなお部屋で過ごすのに最大 5 万ドルまで出せるような連中のみ¹³⁴。

何も知らない女が出た。そしてメキシコ訛りの給仕頭に代わった。

「メネンデスさんとお話になりたいそうですが、どちら様でしょうか？」

「名前なしで。私用だ」

「*Un momento, por favor.* (少々お待ちください)」

ちょっと長目の間が空いた。こんどは強面のやつが出た。まるで装甲車のスリット越しに話しているような声。おそらくは単に顔についたスリットだったのだろう。

「何の用だ、話したいってのはだれだ」

「マーロウという名前」

「マーロウってだれだ」

「チック・アゴスティーノか？」

「チックじゃねえよ。ほれ、合い言葉はなんだ」

「クソ食らえ」

笑い声がした。「ちょっと待ってろ」

やっと別の声。「よおチンピラ。どうかしたか」

「一人か？」

¹³⁴ and any amount up to fifty grand in the big quiet room upstairs. 村上は「賭け金を五万ドルまで」田口は「五万ドルを上限とするギャンブルに好きなだけ金をつぎ込める」。まあそういう解釈が普通だが、ここの記述だけならもっとムフフな場所である可能性もあるし、特に限定しなくてもいいのでは、とは思う。

「話しても大丈夫だ、チンピラ。フロアショーのリハーサルを見ていたんでな」

「あんたが喉を掻き切ってみせるショーはどうだい」

「それだとアンコールができないだろうが」

おれは笑った。向こうも笑った。「余計な真似はしてないだろうな？」

「聞いてないのかよ。別のやつとお友だちになったら、そいつも自殺しやがった。もう『死神小僧』と呼んでくれよな」

「おもしろいつもりかよ」

「いや、おもしろくない。それとこないだの午後にはハーラン・ポッターとお茶したぜ」

「そりゃ結構、おれは紅茶なんか飲まないが」

「あんたに、おれに優しくするように言ってくれとさ」

「会ったこともないし、その予定もない」

「ずいぶん手広くやってる御仁だぜ。今日はちょっと情報がほしいだけなんだよ、メンディ。たとえばポール・マーストンについてとか」

「知らんな」

「答が早すぎたな。ポール・マーストンは西部にくる前にテリー・レノックスがニューヨークで使ってた名前なんだ」

「それで？」

「FBIのファイルで指紋を調べた。記録なし。つまり米軍にいたことはないんだ」

「それで？」

「そこまで細かく説明がいるのか？ あんたの言ってた塹壕話がまったくのヨタか、それとも別の場所で起きたかってことだよ¹³⁵」

「起きた場所の話はしなかったぜ、チンピラ。悪いことは言わんから全部忘れろ。言われたらちゃんと聞いたほうがいいぞ」

「ああそうかよ。あんたのお気に召さないことをやったら、背中に路電しよわされてカタリナ島まで泳がされちまうもんな。脅したってダメだぞ、メンディ。その手の本職ともやりあってきたんだからな。あんた、イギリスにいたことは？」

「馬鹿な真似すんなよ、チンピラ。この街じゃいろいろあるぜ。ビッグ・ウィリー・マグーンみたいなでっかい強いヤツにだっていろいろ起こる。夕刊をしてみるんだな」

135 it happened somewhere else. 普通に読めば、別の戦場で起きたこと、という意味だし、そんなことわからなくても「どこか別の場所で起きた」とすればいいのに、田口だけ余計なものを付け加えて「戦場ではないどこか別の場所で起きたこと」としている。なんで？

「そう言うんなら見てみるよ。おれの写真だって載ってるかもな。マグーンがどうした？」

「さっきも言ったが——いろいろあるんだからな。新聞に出てる以上の詳しいことはおれも知らないがな。どうもマグーンは、ネヴァダ州のナンバープレートつけた車に乗った連中四人を脅そうとしたらしいんだな。家のすぐ隣に駐車してたんだ。ネヴァダのナンバープレートといっても数字がでかすぎるやつだ。なんかのギャグのつもりだったんだろう。ただマグーンは笑える気分じゃないぜ、両腕はギブスで、アゴは三ヶ所で針金で止めて、片脚が高く吊られてるんだからな。マグーンはもうタフじゃないんだ。お前にも起こるかもしれないなあ」

「そいつが何か気に障ることをしたのか。そいつがあんたのチック坊やをヴィクターズ前で壁に叩きつけるの、見たぜ。保安官事務所の知り合いに電話してその話をしようかなあ」

「やってみろ、このチンピラ」彼はきわめてゆっくり言った。「やってみろ」

「そしてそのとき、おれはちょうどハーラン・ポッターのお嬢さんと一杯やり終えたところだったというのも言っとこうかな。補強証拠だもんな、ある意味で。そう思わない？ 彼女もぶちのめすおつもり？」

「いいかよく聞けよチンピラ——」

「あんたイギリスにいたことはないのか、メンディ。あんたとランディ・スターとポール・マーストンとかテリー・レノックスとか名前はなんでもいいんだけど。ひょっとしてイギリス陸軍かなんかじゃないの？ ソーホーでちょっとめごとがあって、ほとぼり冷ますのに陸軍がおあつらえ向きと思ったりとか？」

「ちょっとこのまま待ってろ」

待った。何事も起こらず、待っていると腕が疲れただけだ。受話器を反対側に持ち替えた。やっと戻ってきた。

「おい、しっかり聞けよ、マーロウ。レノックス事件をひっかけ回したら命がないぞ。テリーは仲間で、おれにも心はある。おまえも心はあるようだな。だからここまではおまえの話に載ってやろう。特殊部隊だったんだ。イギリスだ。起きたのはノルウェー、沖合の島の一つだ。あそこには島がごまんとあるんだ。1942年11月。さあこれでおとなしくして、その疲れた脳みそを休めてくれ」

「ありがとう、メンディ。そうするよ。秘密は決してだれにも漏らしません。知り合い以外にはだれにも話しませんから」

「新聞買えよ、チンピラ。読んで忘れるなよ。ビッグでタフなウィリー・マグーン。自宅前でボコボコ。いやあ、エーテル麻酔からさめたらびっくらこいてやがったぜ！」

彼は電話を切った。おれは下におりて新聞を買ったがまさにメネンデスの言ったとおりだった。病院ベッドのビッグ・ウィリー・マグーンの写真が出ていた。顔の半分と片目は見えた。あとは包帯だ

け。ひどい怪我だが命に別状はない。野郎どもはその点は気をつけた。生きていてほしかったのだ。なんといってもおまわりだ。この街では、ギャングはおまわりを殺したりしない。そんなのは未成年どもに任せておく。それに死にそうな目にあわされた生きたおまわりのほうが、ずっと宣伝になる。いずれは回復して仕事に戻る。だがそれ以降は何か欠けている——いざというときのちがいを生む、あの最後の気合いがなくなってしまう。ギャングどもをあまりに追い詰めるのはまちがいだという、生きた証拠になるのだ——特に風紀課にいて、最高のレストランで飯を食い、キャデラックを運転しているようなヤツなら。

そこにすわって、しばらくそれについて思いをはせ、そしてカルネ団の番号をまわし、ジョージ・ピーターズを出してくれと言った。外出中。名前を残し、急ぎの用だと言った。五時半くらいに戻るとのこと。

ハリウッド公立図書館にでかけてレファレンス室で質問したが、欲しい物は得られなかった。そこでオールズモービルに戻ってダウンタウンに行き、中央図書館に出かけた。みつかった。小さな赤で製本された本で、イギリス刊だ。ほしいものをコピーして、家に戻った。またカルネ団にかけた。ピーターズはまだ外出だったから、交換台の子には自宅に折り返してくれるように言った。

チェス盤をコーヒーテーブルに載せて、スフィンクスという問題を解きにかかった。イギリスのチェス名人ブラックバーンのチェス本巻末に印刷されていたものだ。ブラックバーンはおそらく、これまでで最もダイナミックなチェスプレーヤーだが、最近の冷戦じみたチェスの中では一壘にも出塁できまい。スフィンクスは11手詰みという名前通りのものだ。詰めチェス問題は、四、五手以上はなかなかいかない。それを越えると、難易度がほぼ幾何級数的に高まる。十一手詰みはまったく掛け値なしの拷問だ。

本当に稀なことだが十分に陰険な気分になると、そいつを取りだして新しい詰み手を探そうという気になる。発狂するにはすてきで静かな方法だ。絶叫すらしないが、その寸前まではくる。

五時四十分にジョージ・ピーターズが電話を寄越した。お愛想とお悔やみをやりとり。

「また面倒に巻き込まれた、と。なるほどね。もっと静かな商売を試してみたらどうだい、死体防衛処置とか」

「身につけるまでに長くかかりすぎるよ。なあ、あんたの探偵事務所の客になりたいんだ、値段さえ手ごろなら」

「何をしてほしいかによるなあ、おっさん。それとカルネに話してもらわんと」

「いやだ」

「まあ、まずはおれが聞こうか」

「ロンドンはおれみたいなのが山ほどいるが、おれにはだれがだれやら皆目見当がつかない。私立調査エージェントと名乗ってる連中だ。おまえのところならコネがある。おれだと、めくらめっぽうに

名前を選ぶしかなくて、ぼったくられるのがオチだ。入手自体は十分に簡単な情報がほしいだけなんだが、急ぎなんだ。来週末までに絶対いる」

「なんだ」

「テリー・レノックスかポール・マーストン、あるいはどんな名前を使ったか知らんが、そいつの軍歴が知りたいんだ。あっちで特殊部隊にいた。1942年11月にどっかノルウェーの島の襲撃で負傷し捕まった。どの部隊からそこに配属になったのか、何が起きたのか知りたい。戦争事務所になら全部あるはずだ。機密情報じゃないはずだ。まあおれはそう思う。相続に関わる問題だともいおうか」

「そんなの私立探偵はいらないだろ。直接手に入れろよ。手紙書けばいいじゃん」

「うるせえジョージ。何カ月かかって返事があるかもわからん。五日で手に入れたい」

「それはもっともだな、相棒。他には？」

「あと一つ。連中はサマセットハウスってところに、重要な記録を全部保管してある。あいつがどんな関連であれ、そこに記録があるか知りたい——出生、結婚、帰化、なんでも」

「なぜ？」

「なぜってどういう意味だよ。金はこっち持ちだろ？」

「名前が出てこなかったら？」

「そしたらおれは手詰まりだ。何かあったら、出てきたものすべて公式印つきでコピーがほしい。これでおれからいくらむしり取る？」

「カルネにお伺いをたてないと。全部ダメと言われるかも。おまえさんが受けたみたいなマスコミ扱いはお断りなんだよ、うちは。おれが担当になって、あとおまえがうちのつながりを出さないのに合意すれば、まあ300ドルってところだなあ。あっちの連中はドル建てだと大した金は受け取らない。十ギニーとか言ってくるかな、30ドルにもならん。それ以外に経費があれこれ。締めて50ドルぼつきり、でもカルネは250以下の仕事は受けないから」

「同業者割引は」

「はっはっは、親分はそんなの聞いたことないよ」

「わかったら電話してくれ、ジョージ。飯でも食うか？」

「ロマノフスでいいか？」

おれはうなった。「わかったわかった。予約を受け付けてもらえたらな——無理だろうが」

「カルネのテーブルをいただこうぜ。たまたま今日は親分は私的な夕食に行ってるのがわかってるんだ。あいつはロマノフスの常連だからな。業界の上層部にいるとそれで元がとれる。カルネはこの街ではかなり大物だもん」

「ふん、そうかよ。おれなんてカルネくらい小指の爪でひねりつぶせる知り合いがいるんだぜ——しかも個人的な知り合いが」

「そいつは豪気だねえ、坊や。苦境でも頼りになるヤツだと思ってたぜ。じゃあロマノフスで七時頃な。給仕頭にはカルネ大佐と待ち合わせだっていえよ。テーブルまわりを空けてくれて、脚本家だのテレビ俳優だのみたいなゴロツキに肘でつつき回されないようにしてもらえっから」

「七時な」

電話を切って、おれはチェス盤に戻った。だがもうスフィンクスには興味が持てなかった。しばらくしてピーターズから電話があり、こっちの問題に向こうの事務所名が一切出ないようにするなら、カルネとして異論はないとのこと。ピーターズは、すぐに夜間電報を打つとのこと」

[41]

次の金曜朝に、ハワード・スペンサーから電話があった。リッツ・ビバリーにいて、バーでいっぱいやりこないかと言う。

「あなたの部屋のほうがいいな」

「よろしい、そのほうがよければ。828 号室だ。いまアイリーン・ウェイドと話をしたよ。かなり落ち着いた様子だった¹³⁶。ロジャーが残した原稿を読んで、簡単に仕上げられるはずだそう。他の本よりはかなり短くなるが、パブリシティ価値で埋め合わせがつく。たぶん私たち出版人は血も涙もないやつらだと思ってるんだろう。アイリーンは今日の午後はずっと在宅だ。当然、私に会いたいとのことで、私も会いたい」

「30 分でうかがいますよ、スペンサーさん」

彼はホテル西側の、すてきな広いスイートを取っていた。居間には、狭い鉄柵のはまったバルコニーに開く背の高い窓があった。家具はキャンデー・ストライプの生地が張られ、大量の花をあしらったデザインのじゅうたんとあわせて古風な雰囲気醸し出していた¹³⁷。ただしドリンクを置けるようなものはすべて板ガラスがてっぺんに載り、灰皿があたりに 19 個もある。ホテルの部屋は、宿泊客のマナーをかなり鋭く反映する。リッツ・ビバリーは、客にマナーなど一切期待していなかった。

握手をした。「すわってくれ。何を飲む？」

「何でもいいしなしでもいい。特に飲みたいわけじゃないので」

「アモンティリヤードでも一杯もらうかな。カリフォルニアは夏には飲むのにあまり向いていない。ニューヨークでは四倍飲んでも、二日酔いは半分ですむ」

「ライ・ウィスキー・サワーをもらいます」

彼は電話のところにいて注文した。そしてキャンデー・ストライプの椅子の一つにすわり、縁なしメガネをはずしてハンカチで磨いた。それをかけ直し、慎重に調整するとこちらを見た。

136 She seems quite resigned. 清水訳；すっかり諦めていた。村上春樹訳：あきらめの境地にあるようでした、田口俊樹訳：すべてを放棄してしまったような感じだった。確かに **resigned** を辞書で引くと諦めるという意味が出てくるが、ここは文脈的に、それまでの殺人だ自殺だで大騒ぎで興奮状態にあったのがだいぶおさまったよ、ということで、つまりは落ち着いたってこと。すべてを放棄した茫然自失の状態とか諦念状態とかいう感じじゃない。そんな状態だったら、これから会いに行きましょうなんて話にはならないでしょうに。そつとしといてあげようということになるでしょ。

137 清水訳は「古風な」以前の細かい描写をすべて削除。方針はわかるがかなり乱暴。

「腹に一物あるらしいな。だからバーじゃなくてこっちで会いたいと言ったんだろう」

「アイドル・ヴァレーまでおれが車を出します。おれもウェイド夫人に会いたいんです」

彼はちょっと困った顔をした。「彼女のほうは君に会いたがるかなあ」

「会いたがらないのはわかってます。でもあなたに便乗すれば会える」

「それだと私の立場がいささかまずくなるなあ。そうだろう？」

「なぜおれに会いたくないか言っていましたか？」

「きちんとは言わなかったよ、そんなに言葉は費やさなかった」と咳払いをした。「ロジャーの死を君のせいだと思っている印象を受けたな」

「ええ、それをはっきり言いましたよ——彼が死んだ午後にやってきた保安官署員に。たぶん、死亡の捜査を行った保安官事務所の殺人担当者にもそう言ったでしょう。でも検屍官には言いませんでした」

彼は後ろにもたれかかって、手のひらをゆっくりと一本指でひっかいた。ただの落書きじみた身ぶりだった。

「会って何の役にたつというんだね、マーロウ。彼女にとってはかなりひどい体験だったはずだ。たぶん彼女の全人生が、ここしばらくずっと凄絶だっただろう。なぜそれを彼女に改めて体験させるね？ 自分がまったくヘマをしていないと納得させようとでもいうのか？」

「彼女は保安官署員の人に、おれが旦那を殺したと言ったんですよ」

「まさか文字通りの意味で言ったはずはないだろう。そうでなければ——」

ドアのブザーが鳴った。彼は立ち上がってドアに向かい、開いた。ルームサービスのウェイターがドリンクを持って入ってきて、7コースのディナーでも給仕しているかのような気取った手つきでそれを机に置いた。スペンサーは伝票にサインしてチップを50セント渡した¹³⁸。ウェイターは去った。スペンサーはシェリー酒のグラスを手にとって、おれのドリンクをこちらに渡したくないとでも言いたげに向こうに歩いて言った。おれは触れなかった。

「そうでなければ何です？」

「そうでなければ、検屍官にも まちがいなく何か言ったはずだろう、ちがうか？¹³⁹」彼はこちらに顔をしかめた。「やくたいもない話をしてるな。私に会いたいというのは何の用なんだ？」

「会おうと言ったのはあなたでしょうに」

138 清水訳だけまちがい。four bits を25セント玉4つと解釈しているが、そういうことではない。細かい話だが。

139 ここは清水訳だけがまちがっている。「検屍官に何かいったはずはないでしょう」と正反対。

彼は冷たく言った。「それは単に、ニューヨークから話したときに、私が結論に飛びついていると君が言ったからだ。つまり、何か説明したいことがあるという主旨を匂わせたね。で、それは何だ？」

「それはウェイド夫人の前で説明したいんです」

「私にはどうでもいいことだ。自分で手配したほうがいいんじゃないか。私はアイリーン・ウェイドを大いに尊敬している。ビジネスマンとして、もし可能ならロジャーの作品を救い出したい。アイリーンが、君の示唆しているような印象を君に抱いているなら、彼女の家に入り込む口実になるのは御免だ。わきまえてくれ」

「仕方ない。いいですよ。彼女に会うのは何の苦勞もない。ただ証人としてだれかに同行してほしいかったです」

「何の証人だ？」ほとんど嘔みつくように彼は言った。

「彼女の前で聞か、そうでなければ一切話しません」

「では一切聞かないことにしよう」

おれは立ち上がった。「たぶんそのやり方が正解なんでしょう、スペンサー。あんたはあのウェイドの本がほしい—使い物になるなら。そしていいやつにもなりたい。どっちも立派な野心ですよ。おれはそのどっちも持ち合わせていないんだ。ご幸運を、そしてさようなら」

彼はいきなり立ち上がってこっちに突進してきた。「おいちょっと待った、マーロウ。何を考えるのか知らんが、えらく深刻そうだな。ロジャー・ウェイドの死について不審でもあるのか？」

「不審はありませんよ。ウェブリーハンマーレスのリボルバーで頭を撃ち抜かれた。検屍審問の報告は見たでしょう」

「もちろん」彼はいまやおれの近くに立ち、不穏そうだった。「東海岸の新聞にまで出たし、数日後にはずっと詳しい記事がロサンゼルス新聞に出た。ロジャーは家に一人だった、君も近くにはいたがね。召使いたち、キャンディとコックは休みを取っていて、アイリーンはアップタウンにショッピングで帰宅は事件直後だった。起きた瞬間に湖のえらく騒々しいモーターボートが銃声をかき消し、君にさえ聞こえなかった」

「その通り。そしてモーターボートは去って、おれは湖畔から家へと歩いて戻り、呼び鈴が鳴るのを聞いて、それを開けたら、アイリーン・ウェイドがそこにて、鍵を忘れたんだという。ロジャーはすでに死んでいた。彼女は戸口から書斎を覗いて、ロジャーが長椅子で寝ているんだと思って、自室に戻り、それから台所にいって紅茶を入れた。彼女がそうした直後に、おれも書斎を見て、呼吸音がないのに気づき、その理由を発見した。当然のこととしておれは警察を呼んだ」

スペンサーは静かに言ったが、声の厳しさはすべて消えていた。「ロジャー自身の銃だし、たった一週間前にそれを自室でぶっ放している。それをもぎ取ろうとアイリーンが格闘しているところを君が見つけたんだらう。彼の精神状態、行動、作品をめぐる落胆——そのすべてが露呈したんだ」

「彼女は遺作が悪くないと言ったんでしょう。なんで落胆するんです？」

「それは彼女の意見にすぎないからねえ。ひどい駄作かもしれない。あるいは、当人がそれを実際よりもダメだと思ったのかもしれない。続けてくれ。私もバカじゃない。続きがあるのはわかる」

「この事件を捜査した殺人課のおまわりとは旧知の仲なんです。しつこく獰猛で、賢い歳寄り警官だ。それがいくつか気に入らないところがあるんだと。なぜロジャーは遺書を遺さなかったのか——書き物の鬼だったのに？　なんで死体発見のショックを自分の妻に与えるような形で自分を撃ったのか？　どうしておれに銃声が聞こえない瞬間をわざわざ選んだのか？　なぜ彼女は家の鍵を忘れて、自宅から閉め出されたんだ？　どうしてお手伝いさんが休みの日に、彼女は夫を一人にしたのか？　彼女は、おれがそこにいるのは知らなかったと言ってましたよねえ。でも知っていたなら、最後の二つの疑問は解決だ」

スペンサーはうめくような声を出した。「なんということだ。君は、そのろくでもないおまわりがアイリーンを怪しんでると言うのか？」

「動機さえわかれば、そうなるでしょう」

「ばかばかしい。君のほうが怪しいだらう。時間は午後ずっとあった。アイリーンが手を下させた時間はほんの数分しかなかったはずだ——それに家の鍵も持っていなかった」

「おれに何の動機があるんですか」

彼は自分の後ろに手を伸ばして、おれのウィスキー・サワーをひつつかんで一気に飲み干した。グラスを慎重に戻し、ハンカチを取りだして、唇と冷たいグラスで湿った指をぬぐった。ハンカチを片づけた。おれを見つめた。

「捜査はまだ続いているのか？」

「なんとも言えない。一つ確実なこと。そろそろ、彼が人事不省になるくらい飲んでいたかは判明したはずだ¹⁴⁰。もしそうなら、まだ一悶着ある」

彼はゆっくり言った。「そして君は、証人のいるところで彼女と話がしたい」

「その通り」

「それが意味するところは二つに一つだぞ、マーロウ。君がひどく怯えているか、彼女が怯えるべきだと思っているかだ」

おれはうなずいた。

140 ここ、田口訳だけは文章を二つに切ったために、確実なのが「酒を飲んでいただろうか」になってしまっている。確実なのは、警察がその判定を終えているということ。

「どっちだ？」彼は陰気に尋ねた。

「おれは怯えてない」

彼は腕時計を見た。「君がイカレてることを神に祈るよ」

おれたちは黙って顔を見合わせた。

[42]

コールドウォーター・キャニオンを北上するにつれ暑くなった。坂を登り切ってサンファーマディナンド・ヴァレーに下り始めると、息もできないほどの灼熱だ。おれは横目でスペンサーを見た。チョッキを着ているが、暑さは気にならないらしい。他にずっと気になることがあるのだ。フロントガラス越しにまっすぐ前を見て、何も言わない。谷間には濃いスモッグの層が入り込んでいた。上から見ると地上の霧のようで、中に入るとスペンサーはたまらず口をきいた。

「まったく、南カリフォルニアは天気がいいと思っていたが。なんなんだこれは——古いトラックのタイヤでも燃やしてるのか？」

おれはなだめるように言った。「アイドルヴァレーに入ればよくなりますよ。あそこは海風があるから」

「酔っ払い以外のものがあるとはありがたいね。金持ち郊外地域で私が見たものからすると、ロジャーはこんなところに来て暮らそうなんて、悲劇的なまちがいをしたと思う。作家は刺激がいるんだ——それもピン詰めで売ってるような刺激じゃダメだ。ここらへんには、でっかい日焼けした二日酔い以外何もない。これはもちろん上層階級の連中のことだよ」

おれは高速を下り、アイドルヴァレー入り口までのほこりっぽい道に備えて速度を落とした。そして舗装道路に戻り、しばらくすると海風が感じられるようになった。湖の向こう端にある丘のすき間から漂ってくるのだ。高い柱の上のスプリンクラーが、巨大で滑らかな芝生の上を回転し、それが芝生をなめるにつれてシュッシュッという音をたてた。この時期には、ほとんどの裕福な人々はどこか他所に行っている。家の雨戸がしまった様子からもわかるし、庭師のトラックが進入路のど真ん中に止まっていることからそれがうかがえる。そしてウェイド邸に着き、おれは門柱の間を通り抜けてアイリーンのジャガーの後ろに車を停めた。スペンサーは車を降り、のっそりと板石を横切って家のポーチに出た。呼び鈴を鳴らすとドアがほぼ即座に開いた。キャンディがそこで白いお仕着せ姿で、色の黒いハンサムな顔と、鋭い黒い目で立っていた。万事何事もなし。

スペンサーは中に入った。キャンディはおれをちらりと見て、面前でドアを閉めかけた。そのまま待ったが何も起こらない。おれは呼び鈴によりかかり、チャイムが鳴るのを聞いた。ドアがパッと大きく開いてキャンディが歯をむき出しつつ出てきた。

「行っちまえ！とっと失せろ¹⁴¹。腹にナイフ喰らわしてやろうか？」

141 ここの Turn blue はぼくもよくわからない。青くなるまで走って消えろ、くらいの意味かなあと思う。AI くんも、そんな感じじゃないかとの意見。既訳はみんな無視している。

「ウェイド夫人に会いに来たんだ」

「奥様はあんたなんかと関わる気はない」

「どけよ、どん百姓が。こっちは用があるんだ」

「キャンディ！」彼女の声で、しかも厳しかった。

彼は改めておれを睨んでから家の中に戻った。おれは中に入ってドアを閉めた。彼女は対面式ソファの片端に立ち、スペンサーがその隣に立っていた。彼女の姿は百万ドルだった。白いスラックスのウェストがきわめて高いものを穿き、半袖の白いスポーツシャツ、ライラック色のハンカチが左乳房のうへのポケットから花開いている。

「キャンディったら最近はいささか独断的なんですよ」と彼女はスペンサーに言った。「お目にかかれて本当に嬉しい。はるばるいらしてくださって本当にありがとう。お連れさんがいるとは知りませんでしたけど」

「マーロウが車で送ってくれたんだよ。それと彼も君に用があるとか」

「あらどんなご用ですことやら」と彼女は冷ややかに言った。やっとおれを見たが、一週間会わなかったことで人生にぽっかり穴が空いてしまったという感じではなかった。「で？」

「ちょっと時間がかかる話でして」とおれ。

彼女はゆっくりすわった。おれはもう片方のソファにすわった。スペンサーは顔をしかめている。メガネを外して磨いた。それでもっと自然に顔をしかめる機会ができた。それからおれのソファの反対端にすわった。

「お昼の時間に間に合うようにいらっしゃるのはわかってましたよ」と彼女は微笑みながらスペンサーに言った。

「いや、今日はごいっしょできないんだよ」

「あら。まあお忙しいなら仕方ないわね。じゃああの原稿が見たいだけね」

「できれば」

「もちろん。キャンディ！ あら行っちゃった。ロジャーの書斎の机にあります。取ってきましょう」

スペンサーが立ち上がった。「私が取ってきていいかね？」

答を待たずに彼は部屋を横切り始めた。彼女の三メートル後ろで立ち止まり、おれのほうに緊張した視線を向けた。そしてそのまま進んだ。おれはそこにすわったまま、彼女の頭が巡らされて、その目が冷ややかでよそよそしい視線をこちらに向けるのを待った。

「お話というのはどんなご用件でしょうか？」彼女はそっけなく尋ねた。

「あれやこれやでして。あのペンダントをまたつけてらっしゃいますね」

「よくつけます。ずっとずっと昔に、とても大切な友人にもらったんです」

「ええ。そうおっしゃいましたよね。何やらイギリス軍のバッジかなんかだとか」

彼女は細い鎖につけたそれを掲げて見せた。「宝石屋さんがそれを複製したものです。オリジナルより小さくて、金とエナメル製なんですよ」

スペンサーは部屋を横切って戻ってくると、再びすわって黄色い紙の分厚い束を目の前のカクテルテーブルに置いた。それを漫然とみてから、その目をアイリーンに向けた。

「ちょっと拝見してもいいですか？」とおれは頼んだ。

彼女は鎖をぐるっと引っ張って、留め具をはずせるようにした。そしてペンダントをこちらに渡した、というかこちらの手に落とした。そして膝の上で手を組み、ただ好奇の表情を浮かべた。「なぜそんなものに興味を？ アーティストライフルズと呼ばれる部隊の記章なんです。義勇部隊でした。それをくれた男性はその後間もなく戦死しました。ノルウェーのオンダルスネスで、あの酷い年、1940年の春に」彼女は微笑んで、片手でちょっとした仕草をした。「彼はわたしに恋していました」

「アイリーンはロンドン空爆の間、ずっとロンドンにいたんだ。どこにも行けなかった」とスペンサーが虚ろな声で言った。

二人ともスペンサーを無視した。「そしてあなたも彼に恋していた」とおれ。

彼女は目を落としてから頭を掲げ、おれと視線をあわせた。「ずっと昔のことです。戦時中ですし奇妙なことも起こるでしょう」

「それよりもちょっとばかり大きな話でしたよね、ウェイドさん。彼についてどれほどいろいろ打ち明け話をしてくれたか、お忘れのようですね。『生涯一度しか訪れない、荒々しくも謎めいたあり得ない種類の愛』。あなたのことばそのままです。ある意味で、まだ彼を愛していますね。おれが彼と同じイニシャルというのは実に好都合でした。おれを選んだのもそれと何か関係あったんですかね」

「彼の名前はあなたとは全然ちがうわ。それに彼は死んでるの。死んでる、死んでる」と彼女は冷たく言った。

おれは黄金とエナメルのペンダントをスペンサーのほうに差し出した。彼は不承不承な感じでそれを受け取った。「前にも見たけどね」とつぶやく。

「おれの言うデザイン通りか見てください。幅広い短剣の絵で、それが白いエナメルで金の縁取り。その短剣は下向きで、刃の平らな部分は上に向かってカールした薄青いエナメルの翼の前を横切っている。そしてそれが巻物の後ろを横切る。その巻物には『挑む者が勝利する』と書かれていますね」

「その通りのようだが。それが何か重要なのか？」

「彼女はこれがアーティストライフル部隊、義勇部隊の記章だと言った。それがその部隊にいて、1940年春にオンダルスネスで英軍が行ったノルウェー戦役で戦死した男にもらったと言いました」

二人は注目していた。スペンサーは静かにおれを見ている。おれは漠然と話をしているのではなかったし、彼もそれは知っていた。アイリーンもそれを知っていた。その黄褐色の眉毛はいぶかるようなしなめつつらで折れ曲がっていたが、それは本当にいぶかしんでいたのかもしれない。それはまた、友好的なものではなかった。

「これは袖章です。なぜ作られたかといえば、アーティストライフル部隊は特殊空挺部隊に吸収というか転属というのか配置換えというのか、正確な軍事用語は知りませんが、そっちに帰属することになったからです。もともとは歩兵義勇部隊だったんです。このバッジは 1947 年まで存在すらしなかったんです。だから、1940 年にそれをウェイドさんにあげるのはだれであれ不可能だ。それに 1940 年には、アーティストライフル部隊はノルウェーに上陸していない。シャーウッド・フォレスター隊、レスターシャー隊なら上陸したが、アーティストライフル隊はなし。重箱の隅ですかね？」

スペンサーはペンダントをコーヒーテーブルに下ろし、それをゆっくりとアイリーンの前まで押しやった。無言だった。

「わたしがそんなことを知らないとでも？」アイリーンはバカにしたように尋ねた。

「イギリス戦争局がそんなことを知らないとでも？」おれはすぐにやりかえした。

「明らかに何かのまちがいだろう」スペンサーが穏やかに言った。

おれはキッと向き直って彼をにらみつけた。「そういう言い方もありますね」

アイリーンは氷のように言った。「別の言い方をすれば、わたしがウソつきってことね。ポール・マーストンなんていう人間はだれも知らない、彼を愛したとも愛されたこともない。部隊記章の複製をくれたこともない、戦闘で行方不明になったこともない、存在すらしていない。このバッジはわたしが自分で、ニューヨークにある輸入のイギリス奢侈品専門店で買ったもので、革製品とか、手製の靴とか、部隊や学校のネクタイやクリケットのブレザーやら、軍の記章つきのがらくたとかを売ってる店で手に入れたもの。そんな説明でご満足かしら、マーロウさん」

「後半の部分でしたらね。前半は納得できません。確かにだれかが、それがアーティストライフルズの記章だと言って、それがどんなものかは言い忘れたか、あるいは知らなかったのかもしれない。でもあなたはまちがいなくポール・マーストンを知ってますよね。彼は確かにその部隊で従軍し、ノルウェーで戦闘中に行方不明になっているのも知っていますね。でもそれが起きたのは 1940 年じゃなかったんです、ウェイドさん。1942 年です。そして彼は当時は特殊部隊にいたし、オンドルスネスじゃなくて、特殊部隊が奇襲をかけた少し沖合の小さな島でのことだったんです」

「何をそんなにむきになってるんだね」とスペンサーは重役めいた声色で言った。いまや目の前の黄色い紙の束をもてあそんでいた。おれのためにボケ役を演じてくれているのか、うんざりしているだけなのかわからなかった。彼は黄色い原稿の束を持ち上げて、片手で重さを見ていた。

「それ、目方で買うつもりなんですか？」とおれは尋ねた。

彼はハッとしたようで、それからちょっと気難しげに微笑してみせた。

「アイリーンはロンドンでかなりつらい時期を過ごしたんだ。記憶もごちゃごちゃになるだろう」

おれはポケットから畳んだ紙を取り出した。「そうでしょうとも。自分がだれと結婚したかもわからなくなりますよね。これは結婚届出証の証明つきコピーです。オリジナルは、カクストンホール結婚登記所にあります。結婚の日付は1942年8月。両者の名前はポール・エドワード・マーストンとアイリーン・ヴィクトリア・サンプセル。ある意味で、ウェイドさんの言うことは正しい。ポール・エドワード・マーストンなんて人はいない。これは偽名です。軍隊では結婚するには許可が必要だからです。この男は身元をごまかした。軍での名前は別のものでした。軍暦もすべて持っています。不思議に思えるんですが、なんでみんな聞くだけですぐわかる情報を聞こうとしないんですかね」

いまやスペンサーは黙りこくっていた。後ろにもたれて見つめていた。だがおれをじゃない。アイリーンを見つめていた。彼女は、あの半ば詫びるような、半ば誘惑するような、女性が得意とするたぐいの微笑を浮かべてスペンサーを見つめ返していた。

「でも彼は死んだのよ、ハワード。わたしがロジャーに会うとつきの昔に。そんなことどうでもいいじゃないの。ロジャーは全部知ってたわ。わたしは旧姓を使い続けました。当時の状況ではそうするしかなかった。パスポートもその名前だったし。そして彼が戦死したら——」そこで彼女は口を止め、ゆっくりと息を吸い込んで、手をゆっくりそっとひざに落とした。「すべておしまい。何もかも終わり。すべて失われた」

「ロジャーは本当に知っていたのか？」スペンサーはゆっくりと彼女に尋ねた。

「何かしらは知ってましたよ。ポール・マーストンという名前は彼にとって何か意味を持っていました。一度尋ねたら、奇妙な目つきを浮かべましたよ。でも理由は教えてくれなかった」

彼女はおれを無視してスペンサーに語りかけた。

「あらもちろんロジャーはすべて知ってたわ」いまや彼女はスペンサーに、飲み込みの悪い人だともいうように辛抱強い微笑を向けていた。女にはいろいろ小技があるもんだ。

「じゃあなぜ日付のことでウソを？」とスペンサーがドライに尋ねた。「1942年に死んだ男を、なぜ1940年に死んだと？ どうしてその人が絶対にくれたはずのないバッジを身につけて、それをもらったと言い張るんだね？」

彼女は弱々しく言った。「夢に迷っていたのかもしれないわね。あるいはもっと正確には悪夢に。爆撃で友人がたくさん死んだわ。当時は、おやすみ(グッドナイト)と言うとき、それがさよなら(グッドバイ)に聞こえないように気を配ったものよ。でもしばしばそうってしまった。そして兵士にさようならというとき——それはもっとひどかった。いつも殺されるのは、親切で優しい人たちなのよ」

彼は何も言わなかった。おれも何も言わなかった。彼女は目の前のテーブルに転がるペンダントを見下ろした。それを取り上げ、チェーンをまた首のまわりにはめると、落ち着き払って後ろにもたれた。

スペンサーがゆっくり口を開いた。「アイリーン、君を尋問する資格なんてないのはわかってる。もう忘れよう。マーロウは記章だの結婚証だのを大げさに騒ぎ立てた。どうやら私も一瞬釣られてしまったようだ」

彼女はスペンサーに静かに語った。「マーロウさんは、つまらないことを大げさに言い立てるんです。でも本当に大きなこととなると——たとえば人の命を助けるとか——湖畔に出てくだらないモーターボートを見物してるんですよ」

「そして二度とポール・マーストンには会っていない、と」

「死んでるのに会えるわけないでしょう」

「死んでるとは知らなかったでしょう。赤十字からは死亡通知はなかった。捕虜になったかもしれないじゃないですか」

彼女は突然身震いした。そしてゆっくり言った。「1942年10月に、ヒトラーは特殊部隊の囚人すべてをゲシュタポに引き渡すよう命令しました。それがどういう意味かはみんなわかるはずよ。どこかのゲシュタポの地下牢で拷問と名も無き死」彼女はまた身震いした。そして、おれをにらみつけた。

「あなたはひどい人よ。あれを反芻させるつもりなの、つまらないウソのためにわたしを罰するなんて。愛した人があの連中につかまって、その人に何が起きたか、何が起きたはずか知ってたらどうよわたしが別の記憶を作り出そうとしても仕方ないでしょう——それが偽の記憶でも」

「一杯やらないと。どうしても一杯必要だ。何かもらえるかね？」とスペンサー。

彼女が手を叩くとキャンディがいつもながら、どこからともなくあらわれた。そしてスペンサーに一礼した。

「何をお飲みになりますか、セニョール・スペンサー」

「スコッチをストレートで、大量に」とスペンサー。

キャンディは隅に行くと壁からバーを引っ張り出した。その上にボトルを載せ、グラスに並々と注いだ。戻ってそれをスペンサーの前に置いた。そして立ち去ろうとした。アイリーンが静かに言った。

「キャンディ、ひょっとしてマーロウさんも一杯ほしいんじゃない？」

彼は立ち止まって彼女のほうを見たが、その顔は暗く頑固だった。

「いらないよ。ドリンクはなしで」とおれ。

キャンディは鼻を鳴らして歩き去った。またもや沈黙。スペンサーは残り半分のドリンクを置いたタバコに火をつけた。こちらを見ずにおれに言った。

「ウェイドさんかキャンディが私をビバリーヒルズまで送ってくれると思うんだが。あるいはタクシーを呼んでもいい。君はもう言いたいことは言ったんじゃないかね」

おれは結婚許可証の証明つきコピーをたたみ直した。そしてポケットに戻した。

「あなた、本当にそれでいいんですね？」とおれは尋ねた。

「わたしに限らずみんなそれがいいと思ってる」

おれは立ち上がった。「いいでしょう。こんなやり方を試したりしたのは、たぶんバカだった。ご立派な出版者で、それに伴うだけの脳みそがあるんだから——そんなものが必要かは知らんが——おれがここまで来たのは、単に悪者役を演じるためだけじゃないと睨んだんじゃないですかね。古い歴史を蒸し返したり、自腹で事実を確認したのは、それでだれかの言葉尻をとらえて締め上げるためじゃない。ポール・マーストン調べたのは、そいつがゲシュタポに殺されたからじゃないし、ウェイドさんがまちがったバッジをつけていたり、彼女が日付をまちがえたり、あの戦時中の即席結婚でそいつと結婚したからでもない。彼の調査を始めたときには、そんなこと何一つ知らなかった。知っていたのは名前だけ。そしてなぜその名を知っていたと思います？」

「そりゃだれかに聞いたんだろ」とスペンサーはそっけなく言った。

「その通りです、スペンサーさん。戦後にそいつとニューヨークで会って、後に細君といっしょの彼を、ここのチェイセンズで見かけた人物からです」

「マーストンなんてありがちな名前だろう」とスペンサーはウィスキーをすすった。頭を横にあわして、右まぶたをほんのかすかに閉じて見せた。そこでおれは改めて腰を下ろした。「ポール・マーストンだって決して珍しくない。たとえば大ニューヨーク都市圏の電話帳には、ハワード・スペンサーが19人いる。うち四人は、ただのハワード・スペンサー、ミドルネームのイニシャルなしだ」

「そうですか。じゃあ遅延式迫撃弾で顔の片側を潰されて、その損傷を修復した整形手術の傷や跡が残ってるポール・マーストンは何人いると思います？」

スペンサーはあぐりと口を開けた。何か粗い呼吸音を立てた。ハンカチを取りだしてこめかみをそれで叩いた。

「その同じできごとのときに、メンディ・メネンデスとランディ・スターという二人のおっかないギャンブル屋たちの生命を救ったポール・マーストンが何人いるでしょうね。この二人はまだそこらにいますよ。記憶力もいい。自分たちの利益にさえなれば話しますよ。スペンサー、クサイ芝居はこころで十分でしょう¹⁴²。ポール・マーストンとテリー・レノックスは同一人物なんだ。これは一点の疑問の余地もなく証明できる」

¹⁴² Why ham it up anymore? Ham up は大げさに誇張する、演技するということ。それまでの「何人いるでしょうね」の連続みたいな、わざとらしいプレゼンはもういいでしょ、ということ。もう一歩うがった見方をすれば、こまですべてスペンサーとは示し合わせ済で、スペンサーがいちいち驚いてみせたりマーロウをいぶかってみせたりするのはお芝居だったんだけど、それはもういいでしょ、ということ。そこまで説明する必要はない。既訳では、村上春樹だけが「さあもっと偉そうなことをいったらどうです」と完全にまちがえている。

だれかが空中二メートル飛び上がって絶叫するとは思っていなかったし、確かにだれもそんなことはしなかった。だが絶叫と同じくらい声高な沈黙というものもある。いまがそれだ。それがまわり中すべてに、分厚く硬質にたれこめていた。台所の蛇口の水音が聞こえる。畳んだ新聞が進入路に落ちるパタンという鈍い音が聞こえ、そして自転車で漕ぎ去る新聞配達少年の、軽く不正確な口笛が聞こえる。

首の後ろにチクンと刺すものを感じた。飛び退いて振り向いた。キャンディが立っていてナイフを手をしている。その褐色の顔は無表情ながら、その目にはこれまで見たことのないものが浮かんでいた。彼はそつと言った。

「お疲れでしょう、アミーゴ。ドリンクお造りしましょうか、ね」

「バーボンをロックでたのむ」

「*De pronto* (ただちに)、セニョール」

彼はパチンとナイフを閉じ、それを白のお仕着せの脇ポケットに落として、そつと立ち去った。

そしておれはようやくアイリーンを見た。彼女はすわったまま前のめりとなり、手をきつく握りあわせている。顔が下に傾いているので、何か表情を浮かべていてもそれは見えなかった。そしてしゃべるときも、その声は電話の時間案内の機械的な声を持つ明晰な空虚さがあつた。それを聞き続けると—そんなことをすべき理由はないからだれもそんなことはしないが—経過する秒を永遠に教えてくれ続け、その声の抑揚はまったく変わらない。

「会ったのは一度だけなのよ、ハワード。たった一度。一言も話はしてない。向こうも何も言ってない。あの人はひどく変わっていたの。髪は白くて顔は—同じとはいえない顔。でももちろんすぐにわかったし、もちろん向こうもわたしがわかりました。顔を見合わせました。それだけ。そして彼は部屋を出て、翌日には彼女の家からも出て行ったんです。会ったのはロリング家でした。彼と—そしてあの女と。ある午後遅く。あなたもいたわ、ハワード。それにロジャーも。あなたも彼を見たはずよ」

「紹介されたよ。彼の結婚相手を知っていた」とスペンサー。

「リンダ・ロリングは、彼があっさり姿を消したと言いました。何の理由も言わず。口論もなく。そしてしばらくして、あの女が彼を離縁したんです。そしてさらに後で、またあの女が彼を発見したと聞きました。どん底暮らしだったそうです。そして二人はまた結婚した。その理由なんて知るよしもない。たぶん彼はお金がなくて、もうどうでもよくなったんでしょう。わたしがロジャーと結婚しているのは知ってました。お互い、失われた存在だったんです」

「どうして？」とスペンサーが尋ねた。

キャンディは無言でおれのドリンクを前に置いた。スペンサーのほうを見たが、スペンサーは首を振った。キャンディはすーっと去って行った。だれも彼に注意を払わなかった。中国芝居の大道具係

のようなものだ。舞台上でいろいろなものを動かしてまわすのに、役者も観客も、そいつがそこにはないかのようにふるまうのだ。

「どうしてですって？」と彼女は繰り返した。「ええ、あなたになんかわかるもんですか。二人の間にあったものは失われていたのよ。二度と取り戻せなかった。結局、あの人はゲシュタポには殺されなかった。特殊部隊についてのヒトラーの命令に従わない、まともなナチも少しはいたんでしょうねだからあの人は生き延びて戻ってきた。以前は、あの人を再び見つけられるというふりをしたこともあったわ。でもそれは昔ながらの彼、熱意に満ちて若くて純粋な彼でした。でもあの赤毛のスベタと彼が結婚してたなんて—そんなの吐き気がする。あの女とロジャーのことはとっくに知ってたわ。まちがいなくポールも知ってたでしょう。リンダ・ロリングもね。あれもちょっと売女なところはあるけど、でも完全につてわけじゃない。みんな五十歩百歩。どうしてロジャーを捨ててポールの元に戻らなかったのかって？ 彼があの子の腕に抱かれて、ロジャーもその同じ熱い腕に抱かれていたと知ったあとなのよ。そんなの御免だわ。もう少し心動かされるものがないと。ロジャーはまだ許せる。酔っ払って、自分で何をしてるかもわからなかったんだから。自分の仕事が不安で、金だけのための三文作家でしかない自分が嫌で嫌でたまらなかったし。弱い男だったのよ、自分と折り合いもつけられず、苛立つばかりで、でも気持はわかる。あれはただの夫だった。ポールは、それよりずっと大きな存在か、そうでなければ無も同然。そして結局は無のほうだった」

おれはドリンクをぐいっとあおった。スペンサーは自分のドリンクを飲み終えていた。ソファの素材をひっかいている。目の前の紙の山、完全におしまいとなった人気作家の、まだおしまいまで書いていない長編のことは忘れてしまっていた。

「無とはいえないでしょう」とおれ。

彼女は目を見開き、漠然とおれを見てからまた元に戻した。

「無ですらない」という彼女の声には、これまでにない皮肉っぽさがこめられていた。「あの女がどんなヤツか知っていながら、結婚したんです。そして、あの女が自分のわかっていた通りの女だったので、殺したんです。そして逃げ出して自殺した」

「あいつが殺したんじゃない。そしてあなたもそれを知っている」

彼女はなめらかな一動作で背筋をのぼし、おれを呆然と見つめた。スペンサーが何やら音を立てた。

「ロジャーが彼女を殺したんだ。そしてあなたもそれを知っていた」

「あの人が言ったんですか？」彼女は静かに尋ねた。

「話すまでもない。でもいくつかヒントはくれました。いずれはおれかだれかに話したでしょう。黙っていることで彼は千々に心乱れてましたから」

彼女はかすかに首を振った。「いいえ、マーロウさん。あの人の心が千々に乱れていたのは、そのせいじゃありません。ロジャーは自分が彼女を殺したとは知らなかったんです。完全に意識を失って

いたんです。何かが変だとはわかっていたし、それを心の表面に思い浮かべようとはしていましたがでもそれができなかった。ショックで記憶が失われていたんです。いずれは戻ってきたかもしれないし、人生の最後の瞬間には本当に記憶が回復したのかもしれない。でもそれまではありませんでしたそれまでは」

スペンサーはある種うなるように言った。「そんなことは、そもそも起こらないんだよ、アイリーン」

おれは言った。「いや起こりますって。そういう確立した事例を二つ知ってますよ。一つは意識喪失の酔っ払いが、バーでナンパした女性を殺した事件。派手な留め金で固定した彼女のスカーフで絞め殺したんです。お持ち帰りされて、そこで何が起きたかはわかってませんが、彼女は死んで、警察が男をつかまえたときには、その派手な留め金を自分のネクタイにつけていて、それをどこで手に入れたかまるで思い出せなかったとか」

「一度も？ それともその当時だけ？」とスペンサー。

「最後まで罪を認めなかったそうです。そしてもう質問しようにも生きてません。ガス室送りです。もう一つの事件は頭の負傷です。そいつは金持ちの変質者と暮らしていたんですよ。初版本を集めて華々しいお料理なんかして、壁板の裏にすごく高価な秘密図書室を持っているようなヤツです。二人はケンカしました。家中のあらゆる部屋でけんかして、家中がボロボロになり、やがて金持ちのほうがおだぶつになりました。殺したほうは、捕まったとき、全身に何十ものあざがあり、指も折れていました。確実に覚えているのは、頭痛がして、パサディナへ戻る道が思い出せないということだけ。同じ道をぐるぐるまわっては、同じガソリンスタンドに止まって道を何度も訊いたんです。ガソリンスタンドの男が、こいつは頭がおかしいと思って警察を呼んだ。次に巡ってきたときには警察が待っていたというわけです」

「ロジャーがそんなことになっていたとは信じられないね。私と同じくイカレてなんかいなかった」

「酔っ払うと正気を失う人ですよ」とおれ。

「わたしはそこにいました。あの人がやるのをこの目で見たんです」アイリーンが落ち着いて言った。

おれはスペンサーにニヤリとした。ニヤリの一種ではあって、たぶん嬉しそうなニヤリではなかっただろうが、自分の顔が精一杯やっているのは感じられた。

おれはスペンサーに告げた。「さあ話してくれますよ。だまって聞きましょう。話してくれる。もう止めようがない」

彼女は重々しく言った。「そう、その通り。敵についてでも話したくないことはあるし、それが自分の夫となればなおさらよ。そしてそれを公開の証言台で語らないといけないなら、あなたはたぶん楽しめないことになると思うわよ、ハワード。あなたのご立派な、才能ある、人気沸騰の儲かる作家がかなり安っぽい人間に見えてしまうから。とんでもなくセクシーだったでしょ？ 紙の上ではね。そ

してあの哀れなバカは、その評判に負けないようにそれはそれは頑張ったんです。あの女は彼にとって、ただの勲章よ。あいつらをこっそり偵察したわ。恥じ入るべきなのかもしれない。そういうのがお作法なんですよ。でもわたしは何も恥ずかしくない。あのいかがわしい場面を全部見たのよ。あの女が逢い引きに使ったゲストハウスは、独自のガレージと脇道からの入り口を別に持っていて、どん詰まりで、大きな木陰になっていて、なんともすてきな隔離された場所なのよ。やってきたのは、ロジャーみたいな人には絶対に起こることだけれど、もうあの人が満足いくお相手じゃなくなった瞬間ちょっと飲み過ぎちゃったのね。立ち去ろうとしたんだけど、あの女が金切り声をあげて素っ裸で追いかけてきて、なにやら小さな銅像をふりまわしてたわ。わたしには説明もはばかられるような、醜悪さと下劣さのきわみのような言葉を使っていた。そしてあの彫像でロジャーを殴ろうとしたのよ。お二人は男性だから、洗練されているはずの女性がドブや公衆便所のことばを使うほど男性に衝撃を与えるものはないのはご存じよね。飲んだくれていたし、いきなり暴力の発作にかられる人で、そのときにそれが出たの。彫像を彼女の手からもぎ取ったのよ。あとは言うまでもないわね」

「すごい血だったでしょうね」とおれ。

彼女は苦々しげに笑った。「血ですって？ 帰ってきたときのあの人はすごかったわよ。逃げ出すために車のほうへ走り出したとき、あの人はじっと立ってあの女を見下ろしていたの。そして身を屈めて腕の中に持ち上げて、ゲストハウスに運び込んだわ。それを見て、ショックで少し酔いがさめたのがわかった。一時間ほどして帰宅したわ。すごく静かだった。わたしが待っているのを見て衝撃を受けていたわ。でももう酔ってはいなかった。杳然としていたのよ。顔にも髪にも、上着の前面すべてに血がついていたわ。書斎のところのトイレに入れて、脱がせて、上のシャワーに入れる程度に身ぎれいにしてやったわ。そしてベッドに寝かせた。古いスーツケースを引っ張り出して、下にいて血みどろの服を集めてそのスーツケースに入れたのよ。流しと床をきれいにし、ぬれタオルを持ってきて車もしっかり拭いたの。それをガレージに入れて自分の車を出したわ。チャッツワース貯水池に車を走らせて、その血みどろの服やタオルで一杯のスーツケースをどうしたかはわかるわよね」

そこで止まった。スペンサーは左手の手のひらを搔いていた。彼女はそれをチラリと見て続けた。

「その間にあの人は起き上がってウィスキーをしこたま飲んだの。翌朝は何一つ覚えていなかった。というか、その話は一言もせず、二日酔い以外何も頭にないかのようにふるまっていたわ。わたしも何も言わなかった」

「服がないのに気がついたでしょう」とおれ。

彼女はうなずいた。「そのうち気がついたと思います——でも何も言いませんでした。そのときはすべてが一度に起きたように思えたんです。新聞はその話で持ちきりで、するとポールが姿を消して、そして彼はメキシコで死んでいた。そんなことになるなんて、わたしが知るわけもないでしょうに。ロジャーはわたしの夫です。ひどいことをしたにはちがいないけれど、あの女だってひどい女だったんですから。それに夫は自分が何をしているかわかっていなかった。するといきなり、始まったのと

同じくらい突然に、新聞に出なくなりました。リンダの父親が何か関係してるんでしょう。ロジャーはもちろん新聞を読んでいたし、たまたま関係者を知っていたような無辜の傍観者が言うようなコメントしかしませんでした」

「恐くなかったのか？」スペンサーは彼女に静かに尋ねた。

「恐くて死にそうだったわよ、ハワード。あの人が思い出したら、たぶんわたしも殺される。うまい役者だった——作家のほとんどはそうよ——だからすでにわかっている、機会をうかがっていたのかも。でも確信は持てなかった。ひょっとしたら——まさかだけれど——すべてを完全に忘れたこともあり得る。それにポールは死んでいた」

「あなたが貯水池に投げ込んだ服の話を一度もしなかったなら、何か怪しんでいた証拠だな。それとほら、先日彼がタイプライターに残して行ったもの——二階で銃をぶっばなして、あなたがそれを取り上げようとしているのをおれが見かけたときです——ロジャーは、自分のために善良な男が死んだと言った」

「あの人がそんなことを？」彼女の目は、ちょうど過不足なく見開かれた。

「そう書いたんです——タイプライターで。破棄しました。そうしろと頼まれたもんで。あなたもたぶんご覧になったんでしょう」

「あの人が書斎で書くものは決して読みません」

「ヴェリンジャーに連れ去られたときに残したメモは読んだじゃないですか。ゴミ箱の中まで漁ったでしょう」

彼女は冷ややかに言った。「あれは話がちがうでしょう。行き先のヒントを探してたんだから」

「いいでしょう」とおれは後ろにもたれた。「他に何かありますか？」

彼女はゆっくり首を振った。深い悲しみをこめて。「なさそうね。最後の最後で、自殺したあの午後に、思い出したのかもしれない。永遠にわからないわね。知りたくもないでしょう？」

スペンサーは咳払いした。「いまのそういう話の中で、マーロウはいったい何のためだったんだ？彼を雇うというのは君が言い出したことだったね。君が私を言いくるめたんだからな」

「すごく恐かったの。ロジャーが恐かったし、ロジャーのためにも恐かった。マーロウさんはポールのお友だちで、彼の知り合いで最後にいっしょだった人でしょう。ポールはマーロウさんに何か言ったかもしれない。危険は冒せなかった。この人が危険人物なら、身近に置いておきたかった。この人が真相をつきとめても、ロジャーを救う方法が他にあるかもしれないから」

いきなり、おれにわかるような理由はまったくなしに、スペンサーが強面になった。身を乗り出してあごを突き出した。

「よくわからない話だね、アイリーン。ここにいたのは、すでに警察ともめていた私立探偵だった。牢屋にぶちこまれた。ポールを—君がそう呼ぶから私もそう呼ぼう—メキシコに国外逃亡させたときれていた人物だ。もしポールが殺人者だったら、それは刑事犯罪だよ。つまり彼が真相をつきとめて己の潔白を証明できたら、彼は手をこまねいて何もしないだけだ。ロジャーを救おうとなんてするわけがない¹⁴³。君はどういうつもりだったんだ？」

「恐かったのよ、ハワード。どうしてわかってくれないの？ 殺人者と同じ家にいて、しかもそれがキチガイかもしれないのよ。しかもかなりの時間を二人きりで過ごしてた」

スペンサーは相変わらず強面だった。「それはわかる。だがマーロウはそれを引き受けず、君はまだ二人きりのままだった。そしてロジャーが拳銃を撃って、その後の一週間も二人きりだった。そしてロジャーが自殺したが、そのときだけ都合良くマーロウがいて、しかもそのときだけ彼がロジャーと二人きりだった」

「ええその通り。それが何か？ わたしにどうしようもないでしょう？」

スペンサーは言った。「そうか。あり得ないことではないと思うんだが、君はマーロウが真相を突き止めるんじゃないかと思った。そしてすでに一回拳銃が撃たれたという背景があるので、彼がさりげなくロジャーに銃を渡して、なんかこんなことを言ったと思ったんじゃないかな。『ねえ旦那さんあんたは殺人者で、おれも知ってるし奥さんも知ってるんだ。いい女だねえ。彼女はもう十分苦しんだじゃないか。それにシルヴィア・レノックスの旦那もいるだろう。あんたもやるべきことをやって引き金を引いたらどうだい。みんな単なる派手な飲み過ぎの結果だとしか思わない。さておれは湖まで散歩してタバコを吸ってくるぜ、旦那。グッドラック、さよなら。あ、これがその拳銃だ。弾も入ってるしあとはあんた次第』」

「あまりにひどすぎるわ、ハワード。わたしはそんなこと、何も考えてません」

「署の人に、マーロウがロジャーを殺したと言ったね。あれはどういうつもり？」

彼女はちょっとおれを見て、ほとんど恥じ入るようだった。「あんなことを言ったのはおおまちがいでした。自分でもわけがわからなくなっていたんです」

「君は、マーロウがロジャーを撃ったと思ったんじゃないか？」スペンサーは平然と示唆した。

彼女は目を吊り上げた。「いえちがうわよ、ハワード。なぜ？ なぜマーロウさんがそんなことを？ ひどい考えだわ」

143 ここは、既訳が三人とも、マーロウが真相を知ったら何かする (=ロジャーを突き出す) という意味にまちがえてい
る。それでもすっきりしないので、みんな余計な説明をいっぱい足してさらにまちがいを悪化させている。何もし
ない=ロジャーを救うようなことは何もしない、ということ。既訳者三人が思い思いの表現で同じまちがいを
することは、ほとんどの人も意味がわからないはず。山形も一文足して説明つけました。

スペンサーは問い詰めた。「どうして？ 何がそんなにひどい？ 警察も同じことを考えてる。そしてキャンディが動機を示唆した。ロジャーが天井に銃で穴を開けた日の夜、マーロウは君の部屋に二時間いたとキャンディは言ったんだ——ロジャーが睡眠薬で眠らされてから」

彼女は毛根まで赤面した。そして呆然と彼を見つめた。

スペンサーは容赦なかった。「そして服も着ていなかった。キャンディはそう証言した」

「でも検屍審問では——」と彼女はボロボロになったような声で言った。スペンサーがそれを遮った。

「警察はキャンディを信じなかった。だから検屍審問でも彼はその話をしなかった」

「あら」 安堵のため息。

スペンサーは冷酷に続けた。「それに、警察は君が怪しいと思っていた。いまもそうだ。あとは動機があればいい。いまなら、警察も動機をまとめられそうに思えるがね」

彼女は立ち上がった。そして怒ったように言った。「お二人とも、お帰りください。一刻もはやく」

スペンサーは平静に身動きもせず尋ねた。ただグラスに手を伸ばしたが、それが空っぽなのに気がついた。「で、やったのかやらなかったのか？」

「何をやったのかやらなかったのか、ですって？」

「ロジャーを撃ったの？」

彼女は立ち尽くしてスペンサーを見つめた。紅潮が消えた。顔は白くきつく怒りに満ちていた。

「法廷で訊かれるようなことを訊いているだけだよ」

「外出してました。鍵を忘れました。家に入るのに呼び鈴を鳴らさなきゃいけなかったんですよ。家についたときには夫は死んでました。それはすべてわかってることでしょうに。いったい全体、何を言い出すのよ？」

彼はハンカチを取りだして唇を拭いた。「アイリーン、私はこの家に二十回も滞在した。一度たりとも日中に玄関に鍵がかかっていたことはない。君が彼を撃ったとは言っていない。撃ったかと尋ねただけだ。それが不可能だとか言わないでくれ。事態の展開から見て、それは簡単にできたことだ」

「わたしが自分の夫を撃ったのが？」と彼女はゆっくり夢見るように言った。

スペンサーは同じ感情のない声で言った。「もちろん、彼が本当にあなたの夫だったらだがね。結婚したとき、君にはすでに別の夫がいたんだろう」

「たくさんよ、ハワード。もうたくさん。ロジャーの最後の本、絶筆があなたの目の前にあるわ。それを持って出て行って。そして警察を呼んで、いまのお考えを話したらいかが。私たちの友情のすばらしい終焉ね。実にすばらしい。さよなら、ハワード。とても疲れたし頭痛がするの。部屋に戻って

横になるわ。そしてマーロウさんはといえば——いまのはすべてあの方の差し金なんでしょうね——あの方が文字通りロジャーを殺してないにしても、死に追いやったのはまちがいないことよ」

彼女は振りかえって歩き去ろうとした。おれはキツイ声で言った。「ウェイドさん、ちょっと待った。話を片づけてしましましょう。いがみあってもしょうがない。みんな正しいことをしたいだけなんだ。チャッツワース貯水池にスーツケースを投げ込んだって言いましたね——重たかったですか？」

彼女はふり返っておれを見つめた。「申しあげた通り、古いものでしたから。ええ、とても重かった」

「それでどうやって、貯水池まわりの高い金網を越せたんですか？」

「え？ 金網？」彼女はどうしようもないという身ぶりをした。「緊急事態には、火事場のなんとやらで必要な力が出るんでしょう。とにかくやりとげた。それだけです」

「金網なんかないですよ」

「金網なんかない？」彼女はぼんやりと繰り返した。それに何の意味もないというように。

「ロジャーの服にも血なんかついてなかった。シルヴィア・レノックスはゲストハウスの外で殺されたんじゃない、中のベッドの上で殺された。そして血はないも同然だった、すでに死んでたんだから——銃で射殺されていたんだ——そして小さな彫像で顔をぐちゃぐちゃにされたときには、死んだ女を殴っていたんだ。そして死人というのはね、ほとんど血を流さないんだ、ウェイドさん」

彼女は軽蔑するように唇をこっちに突き出して見せた。「見てきたような言い草ね」と恨みがましく言った。

そしておれたちのところを離れた。

二人で彼女を見送った。ゆっくりと階段を上がるその動きには、落ち着いた優雅さがあつた。自室に姿を消すと、背後でドアを静かに、だがしっかり閉めた。静寂。

「あの金網の話はなんだったんだ？」とスペンサーは呆然と尋ねた。頭をしきりに振っている。紅潮して汗をかいていた。事態に果敢に立ち向かってはいたが、彼にとってはこたえる話だ。

「カマをかけたただけだよ。チャッツワース貯水池なんて、近くに行ったこともないしどんな様子かも知らない。まわりに柵はあるかも、ないかも」

彼は陰鬱に言った。「なるほど。だが重要なのは、彼女も知らなかったということか」

「知ってるわけがない。二人とも彼女が殺したんだ」

144 この章、長いので既訳にケチをつけるところもたくさんあるかと思っていたが、ほんの数カ所にとどまる。ほぼ論理的に、省略やほのめかしなしで語られるので、各人ともまちがえようがなかった模様。

[43]

そのとき何かがそっと動き、キャンディが長椅子の向こう端に立ってこっちを見ていた。手には飛び出しナイフ。ボタンを押すと刃が飛び出した。もう一度押すと刃が柄に引っ込んだ。その目には精悍なギラつきがあった。

「*Million de pardones* (本当にお詫びします)、セニョール。あなたのこと、まちがってました。あの女がボスを殺したんだ。おれ、これから―」口が止まりまた刃が飛び出した。

「やめろ」とおれは立ち上がり手を差し出した。「ナイフを寄越すんだ、キャンディ。きみはただの善良なメキシコ人ハウスポーイにすぎない。大喜びで何もかもなすりつけられるぞ。連中が嬉々としてニヤニヤするような絶好の隠れ蓑にされちまう。おれが何を言ってるのかわからないだろう。でもおれはわかる。連中はあまりにしくじりすぎて、もうやりたくても話をまっすぐに戻せない。そしてやりたいとも思ってない。きみがフルネームを言い終わらないうちに、きみの全面自白が用意されちまう。そして火曜から三週間以内に、サンクウェンティン刑務所で終身刑くらったケツですわってることになる」

「前も言ったけど、おれメキシコ人じゃないっす。チリ人で、バルパライソ近くのビニャ・デル・マール出身だよ」

「ナイフだ、キャンディ。そんなの全部わかってる。どこへでも行け。貯金はあるだろう。故郷では兄弟姉妹が八人待ってるんだろう。馬鹿なことはせず、故郷に戻れ。ここでの仕事はおしまいだ」

「仕事はたくさんある」と彼は静かに言った。そして手を伸ばし、ナイフをこちらの手に落とした。「これはあなたのためにやる」

おれはそのナイフをポケットに入れた。彼はバルコニーのほうを見やった。「*La señora* (奥様)はこれからどうしよう？」

「何もしない。まったく何も。セニョーラはとても疲れている。すごいストレスの下で暮らしてきたんだ。邪魔されたくないだろう」

「警察を呼ばないと」スペンサーが決然と言った。

「なんで？」

「なんでってマーロウ―呼ぶしかないだろうに」

「明日だ。未完の小説の山を持って、帰ろう」

「警察を呼ばないと。法ってもんがあるだろう」

「そんなことはまるでなくていい。ハエをたたけるほどの証拠もないでしょうに。法執行に連中なりの汚い仕事をやらせればいい。弁護士に説明させましょう。連中が法律を書いて、それを他の弁護士が切り刻んで、それをやるのが判事と呼ばれる別の弁護士の前で、すると他の判事が最初の判事はまちがっていたと言って、最高裁が次に二番目のやつらがまちがってると言う。法律万歳。みんな法律まみれっすよ。そいつのやることといえば、弁護士の仕事を作るだけ。弁護士どもが仕事の仕方を教えてやらなかったら、大物ギャングの親分どもだって長続きはしないんだ」

スペンサーは怒ったように言った。「関係ない話だろう。この家で人が殺されたんだ。たまたま作家で、それも売れっ子作家で重要作家ではあったが、それも何の関係もない。一人の人間で、君も私もだれが犯人か知っている。正義ってものがある」

「明日」

「このまま見すごすようなら、君も彼女と同罪じゃないか。だんだん君がわからなくなってきたぞ、マーロウ。もっと気をつけていればロジャーの命も助けられただろう。ある意味で、君は彼女が殺しをやりとげる手助けをしたことになる。ひょっとすると、この午後の大芝居の一部始終は、まさにその通りのもの——お芝居でしかなかったんじゃないか」

「その通りですよ。偽装したラブシーンってわけでござい。アイリーンがおれに首ったけなのはわかりますよねえ。ほとぼりがさめたら結婚しようかな。向こうは金もたんまりあるはずだし。おれはまだウェイド家から一銭ももらってないし、いい加減待ちくたびれちゃったんだよな」

彼はメガネを外して磨いた。目の下のくぼみから汗をぬぐい、メガネを戻して床を見下ろした。

「すまん。この午後はかなりの衝撃だったんだ。ロジャーが自殺したというだけでもひどい。だがこのもう一つのバージョンを知って、自分が薄汚れたような気分になってしまう——それを知るだけで」そしておれを見上げた。「君を信用していいんだね？」

「何をする事について？」

「正しいことをやるということだよ——それがなんであれ」彼はかがんで黄色い原稿の山を手に取り、腕にかかえた。「いや、忘れてくれ。君は何か腹づもりがあるようだな。私は結構いい出版人ではあるが、これは私には畑違いだ。まあ私は実際のところ、ただのくだらない気取りやなんだろう」

彼はおれの横を通り過ぎ、キャンディがその通り道を開けると、急いで玄関まで行ってドアを開けてやった。スペンサーは軽く会釈してその横を通り抜けた。おれも続いた。キャンディの横で足を止め、その黒い輝く目をのぞきこんだ。

「変な真似なしな、アミーゴ」

彼は静かに言った。「セニョーラはとても疲れています。彼女は自室に戻りました。お邪魔はいたしません。私は何も知りません、セニョール。 *No me acuerdo de nada* (私は何も知らない)... *A sus órdenes*, (ご指示通りに)、セニョール」

おれはナイフをポケットから出して差し出した。彼はにっこりした。

「だれもおれのことは信用しないが、おれは君を信用してるぞ、キャンディ」

「*Lo mismo* (こちらも同様)、セニョール。ムチャス・グラシアス」

スペンサーはすでに車に乗っていた。おれも乗ってエンジンをかけ、進入路をバックしてビバリーヒルズまで送り返した。ホテルの裏口で彼を下ろした。

下りしなに彼はこう言った。「道すがらずっと考えていたんだが、彼女はちょっとイカレてるにちがいない。絶対に起訴はされないだろう」

「しようもしないでしょうね。でも彼女はそんなこと知らない」

彼は腕に抱えた黄色い紙の束と格闘し、それを整えて、こっちにうなずいた。おれは彼がドアを大きく開けて中に入るのを見た。ブレーキをゆるめると、オールズモビルは白い縁石から滑り出し、ハワード・スペンサーを見たのはそれが最後となった。

* * * * *

帰り着く頃には遅くなっていて、疲れて、気が滅入っていた。空気が重く、夜の喧噪がくぐもって遠くに思える、あの手の夜だった。霧のかかった超然とした月が高く昇っていた。床を横切り、レコードを何枚かかけたが、ほとんど聞いていなかった。何やらずっとカチカチ言う音がどこかで聞こえているような気がしたが、そんな音をたてるものは家の中にはない。おれの頭の中の音だ。おれは歩く死の時計だった。

初めてアイリーン・ウェイドを見たときと、二度目と、三度目と、四度目のことを考えた。だがその後、彼女の何かがしっくりこなくなった。もはや完全に現実めいて思えなくなった。殺人者はいつも、殺人者だとわかると現実のものとは思えなくなる。憎悪や恐怖や食欲のために殺すヤツらがいる。計画殺人をして逃げおおせるつもりの巧妙な殺し屋がいる。何も考えない怒りの殺人者もいる。そして死と恋に落ちた殺し屋、殺人がもってまわった自殺の一種である殺し屋がいる。ある意味で、みんなイカレてはいるが、スペンサーの言ったような意味ではない。

やっとベッドに向かったときには、すでに夜が白み始めていた。

眠りの黒い井戸から、がなりたてる電話の音で引っ張り出された。おれはベッドの中で転がり、スリッパをごそごそ探し、自分が二時間も寝ていないのに気がついた。脂ぎった料理を出す店で喰った消化しかけの食事みたいな気分だ。まぶたはくつつき、口は乾いて砂まみれ。なんとか足でたちあがり、よたよたと居間に向かい、受話器を取って「ちょっと待ってくれ」と言った。

電話を置いて洗面所に行き、顔面に冷水を叩きつけた。窓の外で何かがチョコキチョコキという音が聞こえた。ぼんやり外を見ると、茶色い無表情な顔があった。週に一度のジャップの庭師だ。おれが「無慈悲なハリー」とあだ名したやつだ。ノウゼンカズラの茂みを刈り込んでいる——日本の庭師がノウゼンカズラを刈るあのやり方で。四回頼んでやっと「来週」と言われ、そして来るときには朝の六時にやってきて、ベッドルームの窓の外で刈り込みを始めるんだ。

顔をふいて乾かし、電話に戻った。

「もしもし」

「キャンディです、セニョール」

「おはよう、キャンディ」

「*La señora es muerta* (奥さんが死んだ)」

死んだ。どんな言語だろうと、何とも冷たく黒い混じりっけなしのことばだ。奥様が死んだ。

「君がやったんじゃないかな」

「薬だと思う。デメロールというやつ。びんの中の 40 か 50 個だと思う。空っぽ。昨日は夕食なしだった。今朝ハシゴをのぼって窓から中を見た。昨日の午後とまったく同じ服装。網戸を破って窓を開けた。*La señora es muerta* (奥さんは死んでた). *Frio como agua de nieve* (氷水のように冷たかった)」

氷水のように冷たい。「だれか呼んだか？」

「うん、ドクトル・ロリングを。ドクトルが警察を呼んだ。まだ着いてない」

「ロリング先生だって？ 手遅れでくるのに絶好の人物だ」

「ドクトルに手紙は見せなかった」とキャンディ。

「誰宛の手紙？」

「セニョール・スペンサー」

「警察に渡すんだ。ロリング先生には渡すな。警察だけだ。それともう一つ。何も隠すな。警察にウソはつかないでくれ。おれたちがそこにいた。正直に言うんだ。今回は真実、それも真実すべてだ」

ちょっと間。そしてこう言った。「うん、わかりました。アスタラビスタ、アミーゴ」そして電話を切った。

リッツ・ビバリーに電話してハワード・スペンサーにつないでもらった。

「少々お待ちください。フロントにおつなぎします」

「フロントです。ご用件は何でしょうか？」

「ハワード・スペンサーにつないでくれと言ったんだ。朝早いのはわかるが、緊急なんだ」

「スペンサー様は昨晚チェックアウトされました。八時の便でニューヨークに向かわれましたよ」

「ああすまない、それは知らなかった」

おれは台所に向かってコーヒーを淹れた——大量のコーヒーを。濃く、強く、苦く、煮立った、無慈悲な、邪悪なコーヒー。疲れた男の生き血だ。

二時間ほどたってバーニー・オールズから電話があった。

「おらおら、この青二才が。署まできてキツイ目にあってもらおうか」

[44]

前回と同じだったが、今回は昼間で、いるのはヘルナンデス警部の事務所で、保安官はサンタバーバラでフィエスタ週間のオープニングに出かけていた。ヘルナンデス警部はそこにいて、後はバーニー・オールズと検屍事務所からのだれかとロリング先生（まるで墮胎手術実施中の現行犯でつかまったような様子だ）、地区検察局の所員、ローフォードという男がいた。ローフォードは背の高いやせた無表情な男で、その兄はセントラル街地区で数当て賭博詐欺の親玉だとなんとなく噂されている人物だった。

ヘルナンデスは目の前に、手書きの紙切れを何枚か持っていた。肌色ピンクで未裁断のデッケル耳の装飾がついた紙で、緑のインクで書かれていた。

みんなが硬い椅子で精一杯落ち着いたところでヘルナンデスが言った。「これは非公式ですから。速記も録音装置もない。言いたい放題言っちゃって下さい。ワイス先生は検屍局の代表として、検屍審問が必要かどうかを決めます。ワイス先生？」

彼は太って快活で、有能そうだった。「検屍審問はなしでいいと思う。表向き見たところ、麻薬中毒のあらゆる兆候が見られます。救急車が到着したとき、この女性はまだきわめてかすかに息があり深い昏睡状態で、あらゆる反射反応は見られなかった。この段階では 100 人に 1 人も助からない。肌は冷たく呼吸も近寄らないとわからないほどだった。ハウスポーイは彼女が死んだと思った。実際に死んだのはその後約一時間たってからだ。このご婦人はときどき気管支肺炎の激しい発作に襲われたと聞いています。デメロールは緊急手段としてロリング医師に処方されたものです」

「デメロールの摂取量について、何か情報やご意見はありますか、ワイス先生？」

彼はかすかに微笑して言った。「致死量ですが、これは過去の医療経緯、獲得または生得的な耐性がわからないと、そう簡単には見極められません。自白に基づけば 2300 ミリグラムを摂取したことになります。非中毒者なら最小致死量の 4、5 倍です」と彼は問いたすようにロリング先生を見た。

「ウェイド夫人は中毒者ではありませんでした。処方量は 50 ミリグラムの錠剤 1、2 錠です。私が許容するのは最大でも 24 時間で 3、4 錠です」

ヘルナンデス警部は言った。「だがあなたはまとめて 50 錠も渡しましたねえ。そんな大量に置いておくにはかなり危険な薬だとは思いませんか？ この気管支肺炎はどのくらいひどかったんですか、先生？」

ロリング医師はバカにしたように笑った。「間歇的なものですよ、あらゆる喘息はそうですが。我々がスタタス・アストマティカス、つまりあまりにひどくて患者が窒息する危険がありそうなほどの発作に到ったことは一度もありません」

「ワイス先生、何かコメントは？」

ワイス先生はゆっくりと言った。「そうですねえ。あの書き置きがなくて、彼女がどれだけアレを摂取したか他に証拠がなかったとすれば、過失による過剰摂取かもしれません。安全マージンはあまり広くないんだ。明日には確実にわかります。まさか、あの書き置き公表を控えたりするつもりじゃなかろうね¹⁴⁵、ヘルナンデス？」

ヘルナンデスは自分の机を見下ろした。「いやあ、不思議だったもので、麻薬が肺炎の標準治療だとはついぞ知りませんでしたよ。日々これ勉強ですなあ」

ロリングは赤面した。「緊急手段と申しましたよ、警部。医者はいつでもどこにでもいるわけにはいかないんです。肺炎性の炎症はきわめて突然に発症しかねないんです」

ヘルナンデスは彼に一瞥をくれてからローフォードに向き直った。「この手紙をマスコミに渡したら、そっちの局はどうなる？」

地区検察所員は無表情におれを見やった。「ヘルナンデス。こいつがここで何してるんだい？」

「おれが来てくれと言ったんだ」

「こいつがどっかの記者に、ここでの話を全部繰り返すかもしれないじゃないか」

「そうだよねえ、こいつはホントに口が軽いもんねえ。そっちもそれはよくご存じだったよな。こないだそちらでこいつを締め上げたんだから」

ローフォードはニヤリとして咳払いした。そして慎重に言った。「あの告白書なるものは読んだ。一言たりとも信じられないね。感情的に疲れ切っていて、死別の悲しみ、ある程度の麻薬使用、爆撃下のイギリスでの戦時生活の苦勞、秘密の結婚、その男がここに戻ってきて云々という背景があるだろう。まちがいなく罪悪感が拡大して、ある種の転移で自分を清めようとしたにちがいない」

そこで口を止めて見回したが、目に入るのは無表情な顔ばかり。「検察長官がどう言うかはわからんが、私自身の印象だと、あの女が生き延びたとしても、この自白書では検屍審問を要請する根拠にはならないだろう」

「そしてすでに一つ自白書を信じちゃった以上、それを否定する別の自白書なんか信じる気にはならないというわけね」とヘルナンデスは痛烈に皮肉った。

145 You don't want to suppress the note 書き置きを握りつぶしたりはしないよね、ということ。清水俊二は正しく訳している。ところが、村上春樹と田口俊樹は(また!)「書き置きを公表するつもりじゃあるまいな/公表するつもりじゃないだろうね」と正反対のまちがった訳を揃ってしている。この2人はなんでいつもまったく同じまちがいをするんだ? ごく単純な英文で、普通に読んでまちがえるところじゃない。順番から見ても、田口が村上の訳を下敷きにしてそれを修正する形で翻訳したのでは、とつい勘ぐりたくなる。

「そう言わないでくれよ、ヘルナンデス。法執行機関の常として、世間との関係を考える必要があるだろう。新聞にあの自白書が出たら、うちは困ったことになる。それはまちがいない。そうでなくても、小うるさい改革運動のグループどもがいて、こっちを刺せるような、まさにあの手のチャンスを待ち構えてるんだ。すでに大陪審は、先週そっちの風紀課の刑事が受けた暴行のことで浮き足立ってるんだ—まだ十日しかたってない」

ヘルナンデスは言った。「じゃあ渡しちやおうかな。受領証にサインしてね」

彼はピンクのデッケル耳装飾のページをガサゴソとまとめ、ローフォードはかがんで書類にサインした。ピンクのページを取り上げて折り、胸のポケットに入れて部屋を出た。

ワイズ先生が立ち上がった。彼はタフで陽気で動じた様子もない。「ウェイド一家の前回の検屍審問は急ぎすぎたな。今回はそもそも審問をやらないことにしようか」

彼はオールズとヘルナンデスに会釈し、ロリングとはしかつめらしく握手をして出ていった。ロリングも立ち上がって去ろうとして、ためらった。

「この問題についてこれ以上の捜査はないと、さる利害関係者に告げてもよろしいってことですね？」と彼は堅苦しく言った。

「患者さんがいるのにこんなにお時間を取らせちゃって、申し訳ありませんでしたねえ、先生」

ロリングがきつい口調で言った。「私の質問に答えてないぞ。警告しておくが—」

「失せろって」とヘルナンデス。

ロリング先生はショックでよろめきかけた。そして背を向けるとふらつきつつ急いで部屋を出た。ドアが閉まり、そのままだれも口を開かず 30 秒が過ぎた。ヘルナンデスが身震いしてタバコに火をつけた。そしておれを見た。

「で？」

「で、って？」

「おまえさんも帰ったら？¹⁴⁶」

「え、これで終わりなの？ おしまい？ チャンチャン？」

「バーニーちゃん、言ってやってよ」

146 What are you waiting for? 他のみんなも帰ったんだし、お前も帰れよ、何を待ってんの、という意味。既存の訳はそのまま「何を待ってる？」「まだ何かあったかね？」と訳している。それでも読者が見当をつけることは可能だから、まちがってはいないが、山形は裏の意味を明示。

オールズが言った。「そうとも、終わっちまったんだよ、まったく¹⁴⁷。おれはもう彼女を引っ張って尋問する準備万端だったのに。ウェイドは自殺なんかしてない。アルコールが頭にまわりすぎてた。だが言った通り、動機は何だ？ あの自白書は細かいところはまちがっていても、彼女が夫を探っていたのは証明できる。エンシーノのゲストハウスの間取りも知ってたんだ。レノックスのあまは、彼女の男を二人とも奪ったんだ。ゲストハウスで起きたのはご想像通りのことだ。おまえ、スペンサーに一つ聞き忘れたことがあったぜ。ウェイドはモーゼル P.P.K.を持ってたか¹⁴⁸？ ああ、小さなモーゼル自動拳銃を持っていた。すでに電話でスペンサーとは話したよ。ウェイドは人事不省になるほど飲んでた。あのかわいそうで不幸なろくでなしは、本当に自分がシルヴィア・レノックスを殺したと思っていたのか、あるいは自分の妻が殺したのを何やら知っていたんだ。どっちにしても、いずれは吐くことになっただろうよ。そりゃもちろん、ずっと前から飲んだくれてはいたが、結婚相手は美しくても空っぽだ。あのメキシコ野郎は全部知ってる。あのチビ野郎、ほとんど何でも知ってやがるんだ。あれは夢の女だ。一部は今ここにいたが、その相当部分は昔のあそこにいたんだ。アソコを濡らすことがあっても、それは旦那に対してじゃなかった。言ってること、わかる？」

おれは答えなかった。

「おまえも、あと一步でモノにできたんだろ、え？」

同じく答なしで応じた。

オールズとヘルナンデスはどちらも苦笑いを浮かべた。オールズが言った。「おれたちだってよ、決して脳みそがないわけでもないんだぜ。彼女が服を脱いだとかいう話は、何かあるとは思ってたんだ。おまえがあいつを言いくるめ、向こうは引き下がった。傷ついていて混乱していて、ウェイドが好きだったから確かめたかったんだ。確かめ終えたらナイフを使っただろう。あいつにとっては個人的な話になってたからな。あいつは決してウェイドのことを悪く言ったりはしなかった。ウェイドの女房は言ったし、意図的に話をごまかしてウェイドを混乱させたんだ。つじつまは会う。最終的にはたぶん彼女はウェイドが恐かったんだろう。それとウェイドは彼女を階段から突き落としたりなんかしてない。あれは事故だった。彼女がつまずいて、ウェイドはそれを捕まえようとしたんだ。キャンディも見ていた」

「どれも、おれを近くに置いておきたかった理由の説明にはならない」

147 Yeah, sure it's the end. "Sure"が入っていることで、苦々しい口調になっている。ここはこの2人、尋問するつもりだったのに、お前が余計なことしやがって女が自殺しちゃったから何もできなくなったんだよ、と怒っているのだ。既訳はその苦々しい怒りのニュアンスをだれも読めていない。みんなニュートラルな「終わりましたか？ はい終わりました」だと思っている。この後も既訳すべて、探偵小説にありがちな謎解きみたいなものと解釈して、オールズが嬉々として推理を得意げに披露しているような訳だが、これは「ここまでわかってた（でもおまえが余計なことして捜査がすべて無駄になった）」という怒りのニュアンスを入れないとだめ。

148 田口は解説で、これはモーゼルではなくワルサーだと書いて、原文を訂正している。個人的には、そういうまちがいも作品のうちだし、話の展開に本質的にかかわるものでない限り、修正しないほうがいいと思う。

「理由ならいくつか思いつく。一つは昔ながらの代物だ。どんなおまわりでも何百回も出くわしてるおまえはまだ片付いていない懸案事項だったんだ¹⁴⁹。レノックスの逃亡を助け、彼の友人で、ある程度のは告白相手だったはずだ。あいつは何を知ってて、おまえにどこまで話しただろう？ 彼女を殺した銃を持っていったし、それが撃たれたのも知っていた。彼女としては、あいつが自分のためにそうしてくれたと思ったんじゃないか？ つまり自分がその拳銃を使ったのをあいつが知ってるんじゃないかと思った。あいつが自殺したんで、そっちは片付いた¹⁵⁰。だがおまえは？ おまえはまだ片付いてない。そこでおまえの口を割らせようと思ったし、色仕掛けは使えるし、おまえに近づく口実としておあつらえむきのものもあった。そして罪をなすりつける相手が必要なら、それがお前だ。あの女、罪をなすりつける相手を集めていたとさえ言える」

「彼女もそこまでは考えてないだろう¹⁵¹」とおれ。

オールズはタバコを半分に折って、片方の端をかみ始めた、残り半分は耳の後ろにはさんだ。

「別の理由としては、彼女は男を求めていたんだ。でっかい強い男、思いっきり抱きしめてくれて、再び夢を見せてくれる男を」

「彼女はおれを嫌ってた。その説はないね」

ヘルナンデスが冷淡に口をはさんだ。「そうだよなあ。おまえさん、彼女をはねつけたんだよな。でもそれくらい、彼女はいずれ何とかしただろう。そこへおまえさん、スペンサーの聞いている前で、彼女に手の内をすべてをぶちまけてくれたってわけよね」

「おまえら、精神分析医にでも見てもらったほうがいいんじゃないの？」

オールズが言った。「まったく、ご存じないございますか。最近じゃあいつら、のべつまくなしにおれたちにちょっかい出してきてるんだぜ。署員に二人飼ってるくらい。もう警察仕事じゃなくなってる

149 Loose end. 映画でしょっちゅう出てくるでしょ。生き残ってる目撃者とか、自分にとってヤバいことを知ってたり手がかりになったりしそうなのに始末のついていないもののこと。「念には念を入れて、loose end はすべてなくすんだ」とよく悪者が言って、実は何も見ていない主人公を殺しにくるのが定石。アイリーンは、自分のシルヴィア殺しを知っているかもしれないヤツを全部始末しておきたかった、とオールズは言ってるのだ。既訳は3人とも落第点。清水訳は「正体ははっきりしていなかった」といささかピントはずれ。村上春樹は「収まりのわるいほつれなんだ」という意味不明の直訳。田口俊樹はいちばんダメで、「要するに謎だ。彼女にとって謎を解いてくれるかもしれない謎の男がおまえさんだったのさ」という、これまた意味が取れていない変な訳を、変な説明でさらにわけがわからなくしている。マローウにどんな謎を解いてほしかったっていうの？

150 When he killed himself she was sure. この sure を、既訳は3人とも「確信した」つまりテリーが自分（アイリーン）のために罪を被ってくれた/自分が銃を撃ったことを確信したんだ、という訳にしているが、そうじゃない。この長い台詞はすべて loose end の始末、つまり自分が殺人犯だと知っていそうな連中で口封じがすんでいないやつの話。だから sure は、もう口を割らないことが確信できた、という意味。この次の文も、おまえはまだ生きてるから口を割らないと確信できない、という意味。みんなこの sure の意味をまちがえているので、特に田口訳は余計な説明をくわえてこじつけてさらにミスを拡大している。

151 You're imputing too much knowledge to her. 彼女にあまりに多くの知識があったことにしている、ということはつまり、彼女もそこまでわからんだろう、ということ。清水訳は「彼女は君がいうほど何もかも承知していたわけじゃない」で、まあこんなものでしょう。村上訳は「そこまでをすべて最初から仕組めるものだろうか」。仕組む、という話ではない。最後の「罪をなすりつける相手」の部分はある程度の計画性が含意されているが、誤訳とまでは言わないが正しいとも言えない。こういう改変で文脈がわかりやすくなったわけでもないし、何のために？ 田口訳は「彼女は最初からそんな計画をたてていた。そう思ってるんなら、それはいくらなんでも考えすぎだろう」と村上のちょっとずれた訳にさらに言葉を重ねて変にしている。3人の中でいちばんダメ。

のよ。医療詐欺の片棒担ぎになってきてんの。あいつらが牢屋も法廷も尋問室も出入り自由。どっかの未成年のクソガキが、酒屋に拳銃強盗しかけたり女学生を強姦したり、上級生に大麻売ったりした理由について15ページの報告書を書きやがる。十年もすればヘルナンデスやおれみたいなやつらは、懸垂や射撃の練習よりもロールシャッハテストや単語連想試験をやってるだろうよ。事件の捜査に出かけるときには、携帯嘔吐見器と自白剤の入った小さな黒かぼんを持ってくだよ。そいつをビッグ・ウィリー・マグーンにぶっかけた、おっかないサルども四人をつかまえられなくて残念無念。そいつらの精神矯正してさしあげて、母親を愛するように仕向けられたかもしれないよな」

「もうとっとと帰るよ、おれ」

「なんかご不満の点でもあるようだねえ」とヘルナンデスが、輪ゴムをパチパチ言わせた。

「不満なんかございませんよ。一件落着。彼女は死んだ。みんな死んだ。どっちをむいてもきれいで曇りもなき定型作業。あとはおうちに帰ってそんなことがあったのも忘れるだけ。はいはい、おれもそうするよ」

オールズは耳の後ろのタバコ半分に手をのばし、なぜそんなものがそこにあるのか不思議がるように見つめ、そして肩越しに投げ捨てた。

ヘルナンデスが言った。「おまえさんが何メソメソしてんだい？ あの女が飛び道具を切らしたばっかじゃなかったら、おまえさんも始末されて完全犯罪に仕立てられちゃったかもしれないよ¹⁵²」

オールズが陰気そうに言った。「それに、昨日はちゃんとおれの電話は通じたぜ」

「そうだよな。あんたは一目散に来てくれたよな。そしてそこで聞かされたのは、馬鹿げたウソいくつか以外は何も認めない、ごちゃごちゃした話だったろうよ。今朝のあんたらが手に入れたのは、たぶん全面自白なんだろう。まだ読ませてもらってないけど、ただの恋文なら地区検察局なんか呼んでこないはずだからな。レノックス事件のときに少しでもまともにきっちり調べてたら、だれかがあいつの戦時記録を掘り起こし、どこで怪我したかとか、その手のすべてがわかったはずだろう。そのどこかでウェイド家とのつながりも明るみに出たはずだ。ロジャー・ウェイドはポール・マーストンがだれか知っていた。おれが接触した別の私立探偵も知ってたんだぜ」

ヘルナンデスは認めた。「そりゃあるかもねえ。でも警察の捜査ってのはそんなふうには行かんのよ。きっぱりケリのついた事件なんかうじうじこだわらないの、そいつにふたをして忘れろっていう

152 "If she hadn't been fresh out of guns she might have made it a perfect score." 夫を殺した銃が弾切れになっていなかったら(または他の銃があれば)、彼女はマーロウも殺して(夫に自殺に先立って撃たれたことにして)完全犯罪を達成したかもしれないよ、ということ。おまえ危ないところで命拾いしてるんだからガタガタ言うな、ということ。清水は意味がわからなかったようで直訳、村上訳は「拳銃をちょうど切らせていなかったら、彼女は涼しい顔でそのまま罪を逃れていたかもしれない」と何とか意味は拾っている。

で……田口は、マーロウも殺して完全犯罪というのは読めているが、余計なことを加筆してまったく台無しにしている。「彼女はあんたとスペンサーもそれで殺して、最後に自分にも銃を使っていただろう」。自分に銃を使うんなら、そもそも他の人殺さなくていいじゃん。ウェイド「自殺」のときにはスペンサーは何も知らないしそこにいないから殺せないし殺す必要もないじゃん。話をつくりすぎでしかもつじつまもあわない。余計な説明加えたばっかりに蛇足で全部ダメにしている。

わかりにくいのは事実なので、山形は「おまえも始末されて」という説明だけ追加。

圧力がかかってなくても。おれ、殺人事件なんて何百件も捜査してきたのよ。中には全部きっちりそろった、すっきりきれいな教科書通りの事件もある。でもほとんどは、こっちは筋が通ってもあつちはつじつまがあわないってな具合。でもな、動機があつて、手段があつて、機会があつて、逃走して書き置き of 自白もあつて、その直後に自殺があれば、もうゴチャゴチャ言わないの。レノックスが殺人犯だってのに反対する唯一のものは、どっかのだれかさんが、あいつはいいやつだからあんなことするはずない、と思ったってのと、他の連中だって同じくらいやれたってことだろ。でも他の連中はトズラしなかったし、自白もしなかったし、自分の脳みそ吹っ飛ばしたりもしなかったでしょ。あいつはやった。あと、いいやつって話だけど、おれの見立てだとガス室や電気椅子送りや縄の端にぶら下がる殺し屋の六、七割は、ご近所に言わせるとフラーブラシのセールスマン並に人畜無害のヤツなのよ。ロジャー・ウェイド夫人と同じくらい、人畜無害で物静かで育ちのいい連中ばっか。彼女が手紙で何て書いたか読みたいって？ いいよ。読めば。あ、おれ何か廊下の向こうまで行く用があつたなあ」

彼は立ち上がって引き出しを開けると、机の上にフォルダを置いた。「ここに写真複製が五部あるんだけどなあ。五部だぞ、マーロウちゃん。でもおまえ、こいつを覗いてるところ見つけたら、承知しねえぞ」

彼はドアに向かい、そこで首をめぐらせてオールズに言った。「バーニーちゃん、ペショレックにいっしょに話したりする？」

オールズはうなずいて後から出ていった。オフィスに一人きりで残されると、おれはフォルダのカバーを開けて黒字に白の写真複製を見た。そして縁だけを触りながら部数を数えた。六部あつて、それぞれ数ページがクリップで綴じられている。おれは一部取って丸めてポケットにすべりこませた。そして山の次の一部を読んだ。読み終わると、すわって待った。十分ほどでヘルナンデスだけが戻ってきた。また自分のデスクにつくと、フォルダの写真複製を数えてから、ファイルを机に戻した。

そして目を上げて無表情におれを見た。「気が済んだ？」

「ローフォードはあんたがこれを持ってること知ってるの？」

「おれは言っていない。バーニーも言っていない。バーニーは自分で複写を作ったんだ。なんで？」

「一部漏れたらどうなる？」

彼は不快そうな笑みを浮かべた。「あるはずないなあ、そんなこと。だがそうなっても、保安官事務所はだれも何も知らないよなあ。地区検察局にも写真複製の装置はあるんだし」

「地区検察長官のスプリンガーがあまりお気に召さないみたいだねえ、警部？」

彼は驚いた様子をした。「おれが？ 召す召す。みんなお気に召すって。おまえだってな。さあ行った行った。こっちは仕事があるんだ」

おれは立ち上がって行こうとした。するといきなり言われた。「最近は銃を持ってるのか？」

「ときどきね」

「ビッグ・ウィリー・マグーンは二丁持ってたぞ。なんで使わなかったのかね」

「みんな十分自分に怯えてると思ったんじゃないの？」

「かもな」とヘルナンデスはさりげなく言った。輪ゴムを手にとると、親指の間で伸ばした。どんどんそれを引き伸ばした。とうとうパチンと切れた。切れた端が当たった親指を彼は揉んだ。「だれでも、やりすぎるとどっかで切れるんだぞ。どんなにタフに見えても限度ってもんはあるんだ。じゃあまたな」

おれはドアを出ると、急いで建物を離れた。カモは何度でも利用されちまう¹⁵³。

153 ここは、警察がアイリーンの自白書を盗ませたがっているのが見え見えで、マーロウはそれを知りつつ向こうの思惑にのって (そしておそらく、保安官事務所が検察局に何か嫌がらせをしたいだけだと思って) それを盗んだ。その話をしている。村上は「カモと見込まれると、どこまでもカモにされる」と正しい訳、清水は「気の弱い人間はいつも気が弱い」でぜんぜんちがう。田口は「貧乏くじをひくと何度でも貧乏くじをひく」だが、別に悪い役回りをおしつけられているわけではないから (結果的にはどうあれ)、貧乏くじをひく話ではない。いささかちがう。

[45]

カフエンガビル六階の自分の犬小屋に戻ったおれは、いつもの朝の郵便物相手のダブルプレーを繰り返した。郵便受けからデスクからゴミ箱へ。ティンカーからエヴァースへ送球、そしてチャンスへ机のてっぺんのほこりを吹いてきれいな場所を作り、その上に写真複写を広げた。しわをつけないように丸めて持ってきたのだ。

それを読み返した。詳細で理路整然としていて、先入観のない人ならだれでも納得するだろう。アイリーン・ウェイドはテリーの妻を、嫉妬の怒りの発作で殺し、後に機会が整ったところで、ロジャーを殺した。まちがいなく自分の犯行を知っていると思ったからだ。あの夜に天井に向けて銃が撃たれたのは、細工の一環だった。答がなく、そして永遠に答えられることのない疑問は、なぜロジャー・ウェイドが手をこまねいて、彼女のなすがままになっていたのか、ということだ。この結末を彼もわかっていたはずだ。つまり彼は自分で自分を処分してしまいつつ、気にも留めなかったことになる。彼はことばが商売で、ほとんどあらゆることにことばを持っていたのに、これについては無言だった。

彼女はこう書いていた。「前回の処方箋で得たデメロール錠が46錠あります。これから全部飲んで、ベッドに横になります。ドアは鍵がかかっています。もうすぐ、もはや手の施しようがなくなるでしょう。ハワード、これは理解してください。わたしが書くことは死を前にしてのものです。一言一句が真実です。後悔はありません—二人がいっしょのところを捕まえて、いっしょに殺せなかったことくらいです。テリー・レノックスと呼ばれているのをあなたが聞いた、ポールのことも後悔はありません。彼はわたしが愛し結婚した男の抜け殻になっていました。わたしには何の意味もない存在です。彼が戦争から戻ってきて、一度だけ会ったあの午後—最初は彼だとわかりませんでした。でも気がついて、向こうはすぐにこちらに気がつきました。ノルウェーの雪の中で若いまま死ぬべきだったのです、わたしが死へと差し出したあの恋人は。戻ってきた彼はギャンブル屋の友人で、金持ち売女の夫、甘やかされダメになった男、そしておそらくそれまでの人生で何やら犯罪にも手を染めたでしょう。時間はすべてを劣化させみすぼらしく歪んだものにしてしまいます。ハワード、人生の悲劇とは、美しいものの夭逝ではなく、それが老いて劣化することなのです。わたしはそうはなりません¹⁵⁴。さようなら、ハワード」

154 It will not happen to me. あたしは老いて劣化しない、だってこれから死んじゃうから、という意味。田口だけ「わたしの身にはそういうことは起こらなくなりました」って、まだ死んでないから過去形にはならないでしょ。読んでいて違和感あり。

おれは写真複写を机に入れて鍵をかけた。昼飯の時間だがそんな気分じゃなかった。事務所用ボトルを深い引き出しから取り出して一杯注ぎ、電話帳を机のフックから外して『ジャーナル』の電話番号を調べた。そこにかけて、ロニー・モーガンを呼んでくれと言った。

「モーガンさんは四時頃まで戻りません。市庁舎のマスコミ部屋におかけになってみては？」

そこにかけた。そして捕まえた。おれのことはしっかり覚えてくれていた。「ずいぶんにご多忙だったと聞いてますがね」

「君のためのモノがあるんだよ、もし欲しければね。でも、いらないかな¹⁵⁵」

「というと？ どんな？」

「殺人二つの告白書の写真複写」

「どこにいる？」

教えた。もっと詳しくという。電話じゃダメだと言った。自分は犯罪担当じゃないと向こうは言うそれでもブン屋だしロス唯一の独立系新聞の記者だろ、とおれは言った。それでも向こうはごちゃごちゃ言いたがった。

「その何やらはどこで手に入れた？ こっちが無駄足にならないという保証は？」

「地区検察局が原本を持ってる。連中は公表しない。やつらが氷漬けにして隠しといたものが、いくつか明るみになるから」

「折り返す。上と相談しないと」

電話を切った。おれはドラッグストアに行ってチキンサラダサンドを食べ、コーヒーを飲んだ。コーヒーは何度も沸かし直した代物で、サンドイッチは古シャツの切れ端みたいな豊かな味わいでいっぱいだった。アメリカ人は、トーストされて爪楊枝で固定され、横からレタス、できれば少ししおれたやつがはみ出していればなんでも喰うんだ。

三時半かそこらに、ロニー・モーガンが会いに来た。牢屋から家まで車で送ってくれたときと同じ細長く針金めいた、疲れた無表情な人間だった¹⁵⁶。気忙しそうに握手をして、くしゃくしゃのタバコのパックの中を探った¹⁵⁷。

「シャーマンさん——編集長ね——は会って君が何を持ってるか見てこいとさ」

155 そんなオイシイねたがいらんわけないので、この I don't think you want it. は反語、相手の前でエサをちらつかせるような、半分冗談。既訳はみんな、すっごいまじめに訳しすぎている。田口訳は「私としてはきみは欲しがらないんじゃないかと思っている」。他も似たり寄ったり。もうちょっと発言ニュアンスと口調に敏感になって～

156 田口訳だけ「筋肉のある体つき」なる一節がある。wiry をそう解釈したのか？ 針金っぽい、つまりガリガリということなので、ちょっと普通はない正反対の解釈で、まちがっている。

157 Rooted in a crumpled pack of cigarettes. タバコの箱の中を漁ったということ。村上と田口訳「ポケットを漁ってくしゃくしゃになった煙草の箱を取り出した」はまちがい。清水訳が正しい。なんでこう、村上と田口が毎度そろって同じまちがいをしているんだ？

「こっちの条件に応じない限りオフレコだよ」おれは机の鍵を開けて写真複写を渡した。彼は四ページを急いで読み、そしてもう一度ゆっくり読み直した。えらく興奮した様子だった――安い葬式での葬儀屋みたいな張り切り方だ。

「電話よこせ」

おれはそれを机越しに押しやった。彼はダイヤルをまわし、待って、こう言った。「モーガンだ。シャーマンさんを頼む」しばらく待って、他の女性が出て、相手のいる場所につながり、別の回線で折り返してくれと頼んだ。

彼は電話を切り、電話をひざに抱えたまま、人差し指でフックスイッチを抑え続けていた。それが鳴ると、受話器を持ち上げて耳に当てた。

「こんにちは、シャーマンさん」

それをゆっくりはつきり読み上げた。最後に間があった。それから「少々お待ちください」そして電話をおろして机越しにこっちを見た。「どうやって手に入れたか知りたがってる」

おれは机越しに手を伸ばして写真複写を取り上げた。「おれがどうやって手に入れたかはそっちの知ったことじゃないと言ってやれ。どこで手に入れたかとなると、別の話だ。ページ裏のスタンプを見ればわかる」

「シャーマンさん、明らかにロサンゼルス保安官事務所の公式文書です。本物かは簡単に確認できるはずです。それと、値段がついてます」

彼はしばらく電話に耳を傾けて言った。「はい、目の前にいます」そして電話を机越しに押しやった。「君と話したいとき」

横柄で偉そうな声がした。「マーロウさん、条件はなんだ？ それとこんなものにちょっとでも手を出そうという新聞は、ロサンゼルスでは『ジャーナル』だけだというのは留意してくださいよ」

「レノックス事件は大して扱わなかったでしょう、シャーマンさん」

「それは知ってる。だが当時は、あれはただのスキャンダルのためのスキャンダルにすぎなかった。犯人は疑問の余地がなかった。いまここにあるのは、あなたの文書が本物なら、まったくちがった話だ。そちらの条件は？」

「この告白をそのままの形で写真複製して掲載すること。そうでなければ一切掲載しない」

「確認は取る。いいですか？」

「それはどうかな、シャーマンさん。地区検察局に尋ねたら、否認するか町のあらゆる新聞にも提供するだろう。そうせざるを得ない。保安官事務所に尋ねたら、地区検察局にご注進がいくだろう」

「それは心配ご無用だ、マーロウさん。それであなたの条件は？」

「いま言った」

「え。支払いはいらないのか？」

「金ではいらない」

「ま、あなたなりに何かあるんでしょうな。モーガンを出してください」

おれは電話をロニー・モーガンに戻した。

彼は手短かに話して電話を切った。「同意した。その写真複写をいただいて、編集長がチェックする言う通りにする。半分のサイズに縮小すれば1A面の半分くらいにおさまる」

おれは写真複写を返した。彼はそれを持ち、長い鼻のてっぺんをつまんだ。「言ってもいいかな、君はどうしようもないバカだと思うぜ」

「おれもそう思う」

「まだ思い直せる」

「いや。町のバスチーユ監獄から家まで送ってくれた晩があっただろう？ おれにさよならを言うべき友人がいると言ったよね。そいつに本当のさよならを言えてないんだ。この写真複写を公表してくれたら、それがさよならだ。ずいぶんかかった—長い長い時間が」

「オッケー、旦那」彼は腹に一物あるようにニヤリとした。「それでもやはりどうしようもないバカだと思うね。理由はわざわざ言う必要ある？」

「まあ言うだけ言ってくれ」

「君が思ってるよりも、こっちは君のことをよく知ってるんだよ。ブン屋仕事のつらいところでね。実にいろんなことを知ってるのに、それが使えない。シニカルになっちまう。この自白が『ジャーナル』に掲載されたら、腹をたてる連中がたくさんいる。地区検察、検屍官、保安官周辺、ポッターとかいう影響力ある強力な民間人、メネンデスにスターというギャング二人。おそらく君は病院送りか再び牢屋だ」

「そうは思わない」

「どうとでも思えよ。こっちは自分の考えを言ってるだけだ。地区検察局は、レノックス事件をうやむやにしたから腹をたてる。レノックスの自殺と自白書で、当時はそれが正しく思えたにしても、なぜレノックスという無実の人間が自白なんかしたのか、なぜ死んだのか、本当に自殺したのか手助けがあったのか、なぜその状況について捜査がなかったのか、そしてなぜすべてがあんなにすぐ片づけられたのかを知りたがる人は多かろう。さらに、もしあの写真複写のオリジナルをあいつが持ってるなら、保安官事務所に裏切られたと思うぜ」

「裏の確認スタンプまで印刷する必要はないだろう」

「それはしない。保安官とは仲良しなんだ。あいつは曲がったところのないヤツだと思ってる。メネンデスみたいなやつを止められないからって、責めたりはしない。ギャンブルは場所次第であらゆる

ものが合法だし、どんな場所でも一部は合法なんだから、それを止められるはずもない。君はこれを保安官事務所から盗んだな。どうやってそんなことができたのやら。話したりしない？」

「やだね」

「わかった。検屍官はウェイドの検屍をしくじって自殺扱いにしてるから腹をたてる。地区検察局もそれを手伝ってる。ハーラン・ポッターは、かなり圧力かけて抑え込んだものが蒸し返されるので腹をたてる。メネンデスにスターはなんで腹をたてるかよくわからないが、君が警告を受けたのは知ってる。そしてあの連中がだれかに腹をたてると、だれかが怪我をするんだ。おそらくビッグ・ウィリー・マグーンと同じ目にあわされるぜ」

「マグーンはたぶん、仕事の割に態度がでかくなりすぎたんだろう」

モーガンは間延びした声を出した。「なぜかって？ あの連中ははじめが大事だからだよ。手をひけとわざわざあいつらが言ったら、手を引くんだ。そうしないでそれを見逃したりしたら、軟弱に思われる。商売を仕切るおっかない連中、大物たち、経営陣たちは、軟弱な連中なんか用なしだ。危険なやつらなんだ。加えてクリス・マディがいる」

「ネヴァダ州の実質支配者と聞いているが」

「その通り。マディは優しいが、ネヴァダ州にとって何が正しいかは心得てる。レノやベガスで商売してる金持ちのゴロツキどもは、マディさんのご機嫌を損ねないよう細心の注意を払うんだ。損ねようものなら、税金が激増して警察との協力も同じくすぐダメになる。すると東部のトップ連中が、見直しが必要だと決めるんだ。クリス・マディとうまくやっていけないようなやつは、まともな商売ができてないってことだ。そんなやつはさっさと追い出して、他のやつにやらせろ。追い出すってのは連中にとっては一つしかない。棺桶に入れるってことだ」

「そんな連中はおれのことなんて聞いたこともないよ」

モーガンは顔をしかめて、片腕を無意味な動作で激しく上下にふりまわした。「聞いてなくたって構わないんだよ。タホのネヴァダ州側にあるマディ地所は、ハーラン・ポッターの地所のすぐ隣なんだ。たまにはあいさつくらいするかもしれない。マディ子飼いのだれかが、ポッター子飼いのだれから、マーロウとかいうチンピラが、口出しするべきでない事柄について騒ぎすぎるとたまたま耳にはさんだりするかもしれない。たまたまその何気ない一言が伝言ゲームになり、ロスのどっかのアパートで電話が鳴って、でっかい筋肉の持ち主が、ちょっと外へ出てご友人二、三人と運動でもしようかな、なんて思いたくなるような合図を受けるかも。だれかが君を始末したりボコボコにしたりしたいと思えば、その筋肉男どもは理由なんか説明されなくてもいいんだ。そいつらにはただのいつもの作業。恨みっこなし。腕を折るからじっとしてろよ、って具合。これ、返してほしい？」

彼は写真複写を差し出した。

「おれのほしいものはわかってるだろう」

モーガンはゆっくり立ち上がり、写真複写を内ポケットに入れた。「こっちの勘違いかもね。君のほうがもっとよく知っているんだろう。ハーラン・ポッターみたいな人間が物事をどう見るかなんておれは知るよしもない」

「しかめっ面で見るとだよ。おれは会ったことがある。だがあの御仁は愚連隊なんか使わない。自分の求める生き方についてのご意見と相容れないからな」

モーガンはきっぱり言った。「おれに言わせれば、電話一本で殺人捜査を止めるのと、証人を始末することでそれを止めるのとでは、単にやり方がちがうだけだ。じゃあまたな——またがあれば」

彼は風に吹かれたように事務所をふらふらと出ていった。

[46]

ヴィクターズに車で向かい、ギムレットを飲んで夕刊が出るのを待つつもりだった。だが混雑していて、おもしろくもなかった。知り合いのバーテンが注文を取りに来たときは名指しだった。

「ちょっとビターを入れるのが好きなんですよ」

「いつもはちがう。今夜だけビターを二滴」

「お友だちを最近見かけませんね。あの緑の氷の方¹⁵⁸」

「おれも見えない」

彼は向こうにいてドリンクを持ってきた。長持ちさせるためにチビチビやった。酔いたい気分じゃなかった。泥酔するかしらふでいたい。しばらくして、おかわりした。6時ちょっとすぎに、新聞売りの小僧が酒場に入ってきた。バーテンの一人が出ていけと怒鳴ったが、ウェイターにつかまって放り出される前に、すばやく客の間を一巡して売りさばいた。おれもその客の一人だった。『ジャーナル』を開いて1A面を見た。すべてそこにあった。写真複写を反転させて黒地に白にして、縮小することで紙面の上半分におさめていた。別の面に短くそっけない社説があった。さらに別のページには段を半分使ってロニー・モーガンが署名記事を書いていた。

おれはドリンクを飲み干し、別のところへ言って夕食を食べると、車で帰った。

ロニー・モーガンの記事は、レノックス事件とロジャー・ウェイド「自殺」をめぐる、飾り気のない事実やできごとのおさらいだった—事実といっても公表版だけだが。何も加えず、何も憶測せず¹⁵⁹、だれも糾弾していない。明瞭簡潔な事実の報道だ。社説はまるでちがった。いろいろ質問を投げっていた—不祥事がばれた公職者たちに新聞が尋ねるような質問だ。

九時半頃に電話が鳴り、バーニー・オールズが帰りがけに寄るという。

「『ジャーナル』見たか？」と彼はとぼけて尋ね、返事を待たずに電話を切った。

158 The one with the green ice. むずかしいなあ。村上は「氷みたいな緑の目の方」、つまりテリー・レノックス（でも彼の目の色は実は明示的に描かれてない）のことと解釈。田口は「エメラルドをつけていたほうの方ですけど」として、リンダ・ロリングだとしている（解説 p.598 で杉江がそれをほめている）。どっちもあり得る。が、まずリンダ・ロリングとマーロウがここで飲んでからほんの3,4週間ほどのはず。「最近見かけない」というほどじゃない。しかもリンダと飲んだのは一回だけ。また52章末でテリー・レノックスの目の色が重要になるので、そのための伏線の意味もありそう。だからぼくは村上と同じく、テリー・レノックスのほうだと思う。が、田口解釈を完全に否定できる材料はない。あと、これはギムレットを指すのではという説もあり、するとテリーですな。これももっともらしくて好きだが、確定的なことは何も言えない。清水俊二は、もちろんこういう面倒なのはあっさり無視。山形は日和って直訳。わかりにくい。原文のあいまいさからしてこんなものでしょう。

159 Deduce. 既存邦訳は三人とも「はぶかれる/差し引く」と訳しているがそんな意味じゃない。演繹するということで、並べた事実から何かを推理すること。

到着した彼は階段についてグチをたれ、あればコーヒーを所望したいとのこと。淹れてやろうと言った。その間に彼は家の中をうろつき、ずいぶんくつろいだ様子だった。

「嫌われかねないヤツにしては、ずいぶん寂しい暮らしをしてるんだな。裏の丘の向こうは何だ？」

「別の道だよ。なんで？」

「別に。茂みを刈り込んだほうがいいぞ」

コーヒーを少し居間に運ぶと、彼はすわってすすった。おれのタバコに一本火をつけて、一、二分ほどふかし、消した。「だんだんこいつがどうでもよくなってきてね。テレビコマーシャルのせいかもな。ヤツらが売りつけようとするものすべてが嫌いになるよう仕向けてくる。まったく、あいつら世間が馬鹿ばっかだと思ってるんだろう。白衣着て聴診器を首にぶら下げたどっかのまぬけが、歯磨き粉だのタバコだのビールだの口腔洗浄液だのシャンプーだの、デブのレスラーがライラックまがいの匂いになるとか称するちっちゃな箱入りのなんかを売りつけようとするたびに、そんなもん絶対買わないぞと思うんだよ。ケッ、その製品が本当に気に入っていても買わないぞ。『ジャーナル』、読んだよな？」

「友人からご注進があってね。記者だ」

「おまえに友人かよ」と彼は不思議そうに言った。「どうやってこのネタを仕入れたかは言わなかったんだよな？」

「いいや。そしてこの州では、それをあんたに話す義務もない」

「スプリングーはカンカンだぜ。今朝あの遺書を受け取った地区検察署員は、それをすぐに上司に渡したと言うんだが、どうも腑に落ちない。『ジャーナル』に載ったのは、オリジナルの複製そのものに見えるんだ」

おれはコーヒーをすすり何も言わなかった。オールズは続けた。

「いい気味ではある。スプリングーはあの遺書は自分の手元で管理すべきだったんだ。個人的にはローフォードが漏らしたようには思えん。あいつも政治屋だからな」とおれを無表情に見つめた。

「何しにきたんだよ、バーニー？ おれが嫌いだろ。かつては友人だった——強面のオマワリと友人になれる限りでの話だが。でもミソがついたよな」

彼は身を乗り出してにっこりした——いささか残忍そうに。「どっかの民間人が裏で警察の仕事をやられたら、どんなオマワリだっておもしろくないんだよ。おまえがウェイドとレノックス女のつながりを教えてくれてたら、ウェイドが死ぬ前に何かできたかもしれん。ウェイド夫人とこのテリー・レノックスのつながりを教えてくれてたら、彼女も捕まえられてた——それも生きて。おまえが最初から全部話してれば、ウェイドも死なずにすんだかもしれん。言うまでもなくレノックスもな。おまえ、自分がえらく賢いサルのもりなんだろ、え？」

「どう言えってんだよ」

「何も。もう手遅れだ。小利口なやつには、実はだれもだまされたりしない。当人がだませたつもりでいるだけだ。おまえにははっきり率直に言っただろう。聞きやしねえ。いまお前としてはここを離れるほうが賢明かもしれんぞ。おまえ、みんなに嫌われてるし、なかには嫌っている相手をただじゃすませないやつらもいる。タレコミ屋から聞いたんだ」

「買いかぶらないでくれよ、バーニー。お互い齒をむき出しあうのは止めようぜ。ウェイドが死ぬまであんたはこの事件に関わってもいなかっただろう。その後も、あんたも検屍官も地区検察官もだれも、どうでもよさそうだった。おれのやったことはまちがってたかもしれん。でも真実が表に出ただろう。昨日の午後につかまえられたって—どんな口実で？」

「おまえが彼女について話したことだよ」

「おれが？ おまえの裏でやった警察仕事を理由に？」

彼はいきなり立ち上がった。顔が真っ赤だった。「そうかよ、お利口さんが。彼女は死なずにすんだはずなのに。嫌疑で拘留できた。おまえ、彼女に死んでほしかったんだろう、このくそ野郎。自分でもわかってんだろ」

「おれは単に、彼女に自分自身をよーくしっかり見つめ直してほしかっただけだ。その後何をするかは彼女次第だ。おれは無実の男の罪を晴らしたかった。そのやり方なんかクソどうでもよかったし、いまだってどうでもいい。おれをどうにかしたい気になったら、逃げも隠れもしない」

「おっかない連中が始末してくれるよ、この野郎。おれは何もしなくていい。あいつらが出てくるほど自分は重要じゃないと思ってるのか。マーロウという名の私立探偵という話なら、その通り、重要じゃないとも。手をひけと言われたのに、新聞紙面でやつらの顔にラズベリーパイをぶつけて公然と面子をつぶしたヤツとなると、話が別だ。やつらの沽券に関わる」

「そりゃ何とも哀れな話だ。考えただけで心が血を流すよ、あんた自身の表現を借りれば」

彼は部屋を横切りドアの所へ行ってそれを開いた。そこに立ってセコイアの階段を見下ろし、向かいの丘と通りの端にある斜面の木々を眺めていた。

「すてきに静かだな、ここは。ちょうどいいくらいの静けさだ」

彼はそのまま階段を下りて車に乗り、発った。警察は絶対にさようならとは言わない。いつも面通しでまたこっちにお目にかかるのを期待しているのだ。

[47]

翌日しばらくは、物事が活気づいてきたように見えた。スプリングー地区検察長官は早朝に記者会見を開き、声明を発表した。大柄で血色がよく、眉は黒いが若くして白髪交じりとなった、あの政界でいつも大成功するタイプの人間だった。

「最近自ら命を絶った、不運にして不幸な女性の告白と称する文書を読みました。その文書の真偽はさておき、もし本物であるなら明らかに錯乱した精神の産物であります。その多くの馬鹿げた部分や矛盾した部分にもかかわらず『ジャーナル』がこの文書を掲載したのは、善意に基づくことだったと信じたいところではあります。そうした問題点をいちいちあげつらって皆さんを煩わせるようなことは致しますまい。アイリーン・ウェイドがこの文言を書いたにしても、そして当局は我が尊敬すべき補佐役たるピーターセン保安官の部下諸賢と共にそうであるかを見極めることでしょうが、わたくしは彼女がそれをはっきりした精神をもって書いたのではないし、またしっかりした手をもって書いたのでもないと申しあげます。この不運な女性が、己の流した己自身血の中でもがく自分の夫を発見してから、ものの数週間なのです。これほど激しい惨事に続く、その衝撃、絶望、極度の孤独は想像に難くありません。そしていまや彼女は、つらい死の中で彼に加わったのです。死者の灰を乱すことで何が得られましょうか？ 我が友人諸君、ひどく部数を必要とする新聞を何部か売る以上に、得られるものなど何もないのです。何もです、我が友人諸君、何一つ。そこで止めておこうではありませんか不滅のウィリアム・シェイクスピアによるあの『ハムレット』という偉大な傑作劇のオフィリアのように、アイリーン・ウェイドはその悲嘆をちがう意味でまとったのです。我が政敵たちはそのちがいを誇張したがるでしょうが、我が友人や仲間の有権者諸賢はだまされないでしょう。この当局が昔から、賢明かつ成熟した法執行を支持し、慈悲で和らげられた正義に依って立ち、しっかりと安定した保守的政府を堅持してきたことをご存じなのですから。『ジャーナル』が何を堅持しているかはわたくしの知るところではありませんし、それが堅持するものなど、さして意に介するつもりもありません。聡明なる市民たちが自ら判断を下してもらおうといたしましょう」

『ジャーナル』はこの御託を早版に掲載した（二十四時間新聞なのだ）。そして編集長ヘンリー・シャーマンは、署名入りのコメントですかさずスプリングーにやり返した。

地方検察長官スプリングー氏は今朝は意気揚々たるものだった。大変立派な御仁であり、聞くだに麗しい太いバリトンの声で語る人物である。事実などで我々を退屈させたりはしない。スプリングー氏が問題の文書の正真性を証明しろと言うのであれば『ジャーナル』はいつでも大喜びで応じようではないか。スプリングー氏が、ご自身の裁可あるいはご自

身の指示によりすでに閉じられた事件捜査を再開するとは期待していない。これはスプリ
ンガー氏が市庁舎の塔の上で逆立ちすると期待しないのと同様である。スプリンガー氏が
実に見事に述べたように、死者の灰を乱すことで何が得られましょうか？あるいは
『ジャーナル』がもっと粗野に述べさせていただくように、殺害された人物がすでに死ん
でいるのに、だれが殺人を犯したかつきとめることで、何が得られましょうか？何も、だ
が正義と真実だけは得られる。

故ウィリアム・シェイクスピアになりかわり、『ジャーナル』は『ハムレット』につい
ての好意的な言及に感謝するものであり、そしてそのオフエリアへの基本的には正しいな
がら厳密とは言えない言及にも感謝したい。「あなたはちがう形の悲嘆をみにまといわな
くは」はオフエリアについてではなく、オフエリア自身が言ったせりふなのであり、それ
がズバリどういう意味か、我々が博学ならざる頭にはいささか不明ではある。だがそれは
流そう。聞こえはいいし話を混乱させるには役立つからだ。我々も、『ハムレット』なる
この公式なお墨付きを得た戯曲から引用させていただこう。これは悪人の台詞ながらもな
かなかいいことを言っているのだ。「そして罪のあるところに大斧を振り下ろせ」

昼頃にロニー・モーガンが電話を寄越し、どう思うかという。スプリンガーは気にもしないだろう
とおれは答えた。

ロニー・モーガンは言った。「インテリが騒ぐだけで、しかもインテリはすでにあいつを見捨てて
るからね。君の具合はどうかと言いたかったんだよ」

「別にどうとも。ただここにすわって、札束が横つ面をひっぱたいてくれるのを待ってるだけだ」

「そういう意味じゃないんだけどね」

「まだ健康だ。脅かすのはやめてくれ。求めるものは得られた。レノックスがまだ生きているなら、
スプリンガーにまっすぐ歩み寄って顔に唾をはきかけてやれる」

「君が代わりにやってあげたじゃないか。そしてこんどこそ、スプリンガーもそれを実感する。気に
入らないやつを陥れる手口ならいくらでも持ってる連中だぞ。なんで君がわざわざそんな手間をかけ
る価値があると思ったかわからんよ。レノックスはそんな大したヤツじゃなかっただろう」

「それがどうかしたか」

彼はしばし黙った。そして言った。「すまん、マーロウ。余計なことは言うまい。幸運を祈る」

お互いいつものさよならを言って電話を切った。

午後二時頃、リンダ・ロリングが電話してきた。「名前は出さないで。北の大きな湖から飛行機で
着いたところよ。そこにいるだれかさんが、昨夜『ジャーナル』に出た何やらについてカンカンなの。

あたしのほとんど元夫がその直撃をくらったわ。あたしが去ったときには、かわいそうに泣いてたわよ。彼が飛行機でご注進に及んだわけ」

「ほとんど元夫ってどういうこと？」

「馬鹿なこと言わないで。珍しく、父が認めたのよ。パリは静かな離婚には絶好の場所よ。だからあたしもじきにそこへ出発するわ。そしてあなたも、多少の知恵が残っているようなら、こないだ見せてくれたあの華々しい版画を多少使って、ご自身の身をどこか遠くにおいたほうがいいわよ」

「どうしておれが関係してくるんです？」

「またも馬鹿な質問ね。とぼけてみせて、だれが騙されると思ってるの、マーロウ。虎狩りのやりかたはご存じ？」

「知るはずないでしょう」

「ヤギを杭に縛り付けて、見えないところに隠れるの。ヤギにはかなりキツイはずよ。あたしはあなたが気に入ってるわ。自分でもまるで理由はわからないけど、でもそうなの。あなたがヤギになると思うとつらいのよ。あなた、正しいことをやろうとしてあんなにがんばったのに——正しいことといつても、あなただけの思ってる正しさだけだ」

「それはご親切に。首をつっこんで頑張って、その首がはねられても、自分の首にはちがいがありませんから」

彼女は鋭い声で言った。「英雄気取りはおよしなさいな、この馬鹿。あたしたちの知り合いが濡れ衣をかぶることにしたからって¹⁶⁰、あなたがその真似することなんかないでしょう」

「しばらくいるなら一杯おごりますよ」

「パリでおごってよ。秋のパリは美しいのよ」

「おれもそうしたいところですよ。春にはもっとすてきだと聞きましたよ。行ったことないので知りませんが」

「いまの調子だと、行く前に人生終わりそうね」

「さよなら、リンダ。捜し物が見つかりますように」

彼女は冷ややかに言った。「さようなら。あたし、捜し物は必ず見つけるのよ。でも見つけたら、もうほしくなくなるの」

160 Be a fall guy. 人の罪を背負う人、濡れ衣をかぶる人のこと。もちろんテリー・レノックスのことだ。さて、村上/田口訳はどちらもこれを「貧乏くじを引く」と訳している。濡れ衣をかぶるのとは意味がちがう。貧乏くじをひくのは心ならずも損な役回りを嫌々やらされる、ということで、濡れ衣をかぶるは積極的にその役を引き受けること。前者の意味だと文脈的に話が通らなくなる。あと、さらにこの二人が原文と意味を変えてまで選んだ訳語がいつしよになるというのはちょっと不思議。こういうのがこれまでもこの先も、何度も出てくる。清水訳は「おひとよし」だが、これは単純に意味がわからなかっただけだと思う。

ついでに、このあたりのリンダの口調の村上訳は気取った口ぶりにしようとするあまりやたらに陽気になってちょっと耐えがたいものがあり、しかもその過程で変なくだりを追加して意味も変えてしまい、かなりひどい。

そして電話を切った。その後は一日予定がなかった。夕食を食べて、オールズモービルは深夜修理場に置いてきてブレーキのライニングをチェックさせた。家にはタクシーで帰った。通りはいつもながら空っぽだった。木の郵便箱には無料の石けんクーポンが入っていた。ゆっくりと階段を上がる。柔らかな夜で少し霞がかっている。丘の木々はほとんど動かない。そよ風なし。おれは鍵を開けて、ドアを途中まで押し開けたところで止まった。ドアは枠から 30 センチほど開いていた。中は暗くて無音だ。だがその先の部屋が無人ではないという感じがした。スプリングがかすかにきしんだのか、部屋の向こうの白い上着の輝きが見えたのか。こんな温かく静かな夜にしては、ドアの向こうの部屋があまり暖かくなかったのかもしれない。空中に男の匂いが漂っていたのかも。あるいはおれが単にびくついていたのかも。

おれは横に踏み出してポーチから下り、地面に出ると、茂みに身を屈めた。何も起こらない。内側に光はなく、聞こえる限りどこにも動きは感じられない。左側にベルトホルスターで拳銃を持っていた。グリップを手前にした、銃身の短い警察用 38 口径。それを取り出したが、何事もなかった。静寂は続いた。ばかばかしい、気のせいかと思った。身を起こして片足を上げて玄関に戻ろうとしたところで、車が角を曲がり、丘を急スピードで登ってくると、ほぼ無音でうちの階段のふもとに停まった黒い大型セダンでキャデラックの輪郭だ。リンダ・ロリングの車かもしれないが、二つちがう部分があった。だれもドアを開けなかったこと、こちら側の窓がすべて固く閉ざされていることだ。おれは待つて聞き耳を立て、茂み脇にしゃがんだが、何も音はせず、待つても何もない。ただ黒い車がうちのセコイア階段下に窓を閉めて停まっているだけ。エンジンはかかっているのかもしれないが、聞こえない。するとでかい赤い探照灯がカチリと点灯し、そのビームが家の角から六メートルほど先を照らした。そして車がとてもゆっくりとバックし、その探照灯が車がボンネット越しに上を向いて¹⁶¹、家の正面一帯を照らし出すようにした。

警官はキャデラックなんか運転しない。赤い探照灯つきキャデラックは、大物たちのものだ。市長や警察署長、あるいは地区検察長官などだ。そしてゴロツキどもかも。

探照灯があたりを探した。おれは伏せたが結局見つかってしまった。そして照明はおれに固定された。他のものは照らさない。それでも車のドアは開かず、それでも家は静かで明かりなしだった。

するとサイレンがほんの一、二秒ほど低くうなって止まった。そしてやっと、家中の明かりがついて、白いディナージャケットの男が階段のてっぺんまで出てきて、横の壁沿いと茂みを見た。

メネンデスがクスクス笑いながら言った。「入れよ、チンピラ。お客だぜ」

161 across the hood and up. その探照灯が車のどこについていたのか書いてないけど、たぶんルーフについてたんでしょう。それが hood つまりボンネット越しに照らすわけで、階段上の家の玄関を照らすために上を向いていたわけだ。村上訳は「またその周辺をもれなく照らし出す」、田口訳は「軒とさらにその上」。周辺は hood を neighborhood の意味の hood と思ったんだろうがそういう用法ではないし、覆いふたという意味があるのでそこから強引に軒という訳を編みだしたんだろうが変すぎ。清水訳は(はいご名答) しっかり無視。

そこなら楽に撃てた。だが一步下がったのでもう手遅れになった―やれたにしても。そして車の後ろの窓が開き、開ききったドスンという音が聞こえた。そして機関銃が発射され、短い銃弾群が十メートル離れた斜面に撃ち込まれた。

メネンデスが戸口から繰り返した。「入れよ、チンピラ。逃げ場はないぜ」

そこでおれは立ち上がり、向かったが、探照灯は正確にその後を追ってきた。おれは銃をベルトのホルスターに戻した。セコイアの踊り場に上がり、ドアをくぐってすぐ中で足を止めた。部屋の奥に男がすわり、足を組んで、その太ももの銃が寝かせてある。やせたタフな感じで、その肌は日差しの強い気候の中で暮らす人々の乾ききった感じだった。焦げ茶のギャバジンらしきウィンドブレーカーを着て、そのジッパーはほとんど腰まで開いていた。おれを見ていたが、その目も銃も動かなかった月光下のアドービ壁のように平静だった。

[48]

そいつを見つめすぎていた。かすかな動きが横目に見えて、肩口に麻痺するような痛みが走った。腕丸ごと指先まで死んだ¹⁶²。そっちを向くと、巨大でおっかなそうなメキシコ人がいた。ニヤリともせず、ただおれを見ている。その茶色い手の45口径は脇に下がっていた。口ひげがあり、その頭は前からてっぺんを通して下がり垂れ下がっている黒髪でふくれている。頭の後ろに汚いソンプレロがあり、皮のあごひもが二本となり、汗臭い縫い取りのあるシャツの前にだらんと垂れ下がっていた。屈強なメキシコ人以上に屈強なものはない。優しいメキシコ人以上に優しいものがなく、正直なメキシコ人ほどに正直なものはなく、何よりも悲しいメキシコ人ほど悲しいものはないのと同じだ。こいつは強面野郎の一人だ¹⁶³。どこでもこれ以上強面のやつはいない。

おれは腕をさすった。ちょっとチリチリしたが、まだ痛むし麻痺も残っていた。いま銃を抜こうとしていたら、たぶん落としてしまっただろう。

メネンデスはおれを殴った男のほうに手を差し出した。見たそぶりもみせずにそいつは銃を投げ、メネンデスがそれをキャッチした。いまやおれの前に立ち、顔がぎらついている。「どこにくらいたい、ドチンピラ？」とその黒い目が踊った。

おれはだまってヤツを見つめた。そんな質問には答えようがない。

「聞こえないのか、チンピラ」

おれは唇を濡らし、問い返した。「アゴスティーノはどうした？ 銃を扱うのはあいつじゃなかったのか」

「チックはやわになったんだよ」とヤツは静かに言った。

「前からヤワだったもんな—飼主と同じで」

椅子の男が目をきらつかせた。ほとんど微笑しかけたが抑えた。おれの腕を麻痺させた屈強な野郎は動きもしゃべりもしなかった。息はしていた。匂いでわかった。

「腕にぶつかられてもしたか、チンピラ」

「エンチリャーダにつまづいてね¹⁶⁴」

162 最初に読んだとき、ここは刺されたのかと思い、次に拳銃が出てくるので撃たれたのかと思い、やっと最後に拳銃で殴られたのがわかる。原文は、殴るその瞬間を見ていないのでそれを明示せず、わかりにくい仕方がない。

163 One of the hard boys. 村上訳「この男は筋金入りの悪(わる)だ」は、悪いなんてことはどこにも書いていないし、内面に立ち入らず見たものだけを描写するマーロウ/チャンドラーの書きぶりを無視していて、かなりまずい訳。田口訳「そういったタフな男の一人だった」は、「そういった」がどういったものかわからなくていささか戸惑う。既訳の中では清水訳「手ごわいメキシコ人の一人だった」がいちばん素直でいいのでは。

うわの空で、ほとんどおれを見もせず、ヤツは銃身でおれの顔を張り飛ばした。

「ふざけてんじゃねえぞ、チンピラ。おふざけの時間はとっくに終わってた。あれほど言い聞かせてやったのにな、しかもていねいに。おれがわざわざ自分で出向いて、手を引けといったら—だまって手を引け。さもないとそいつが立ち直れないようになるんだぜ」

頬に血が流れ落ちるのが感じられた。頬骨に、あの一撃の麻痺するような痛みのすべてが感じられた。それが広がって頭全体が痛んだ。大した一撃ではなかったが、ずいぶん硬い物を使いやがった。まだしゃべれたし、だれもそれを止めようとはしなかった。

「どうして自分で殴ったりしてるんだい、メンディ？ そんなのビッグ・ウィリー・マグーンをボコボコにしたような連中のやる下っ端作業じゃなかったのか」

ヤツは優しく言った。「個人的にいいたいことがあったという理由からの、個人的なタッチってやつだ。マグーンの件はただの仕事だ。あいつはおれをいいようにできると思い込むようになりやがった—服も車も買ってやり、金庫を一杯にして、家のローン担保証書を買戻してやったこのおれをだ。あの手の風紀担当どもはみんな同じだ。ガキの学費までもってやったのによ。少しは感謝するかどうかだろうに。ところがあいつがどうしたかって？ おれの自宅の書斎に乗り混んできて、使用人どもの前で小突き回しやがった」

「いかなる理由からだい？」とおれは、ヤツが他のだれかに腹をたててくれないかというかすかな希望にすがって尋ねた。

「どっかの厚化粧のアバズレが、おれたちが仕込みサイコロを使ってるって告げ口したという理由からだ。どうやらこのアマ、あいつのおねえ相手の一人だったらしい。クラブは追い出してやったよ—持ち込みやがったものを全部しよわせてな」

「そいつは理解できなくもないねえ。マグーンなら、プロのギャンブル屋がイカサマなんかするわけないくらい十分にわかってるはずだもんな。そんな必要はないんだし。でもおれがいったい、あんたに何をしたね？」

ヤツは考えつつ、またおれを殴った。「面子を潰しやがった。おれの稼業じゃ、二度は言わねえんだよ。おっかねえヤツ相手でも。そいつは言われたらその通りやる、それでないと、こっちが仕切ってることにならん。仕切れないと、商売にもならん」

「なんか、それよりもうちよっと何かありそうな気がするんだがな。ハンカチを出してもいいですかね」

一枚取り出して顔の血をふく間、銃が見張っていた。

164 Tripped over. 普通に「つまづいた」で、清水訳はそうになっているが、村上/田口はわざわざ「踏んで転んだ」にしているのはなぜ？ エンチリャーダは柔らかいからつまづかない！ 上を踏んでぬるっと滑って転んだんだ！ という深慮か？ 軽口の嫌味なんだからそこまで細かいことを考える必要は無い。他にも、こういう村上訳の奇妙な部分を田口もやっている部分が結構ある。ちょっと変わった訳をするのは、その時の気まぐれでありがちだが、それがまったく同じ表現に落ち着くのは考えにくいんだが。ひょっとして田口訳、村上訳を下敷きにしてそれを修正するやり方で訳文を構築した？

メネンデスはゆっくりと言った。「やすっちい覗き屋が、メンディ・メネンデスをコケにできると思ってる。おれを笑いものにできると思ってやがる。派手におちよくれる気でいやがる—このおれ、メネンデス様を。おまえにはナイフの出番かもな、チンピラ。細切れの生肉にしてやろうか」

「レノックスはあんたの相棒だった」と言いつつヤツの目を観察した。「それが死んだ。犬みたいに埋められて、埋葬場所の土に名前も書いてもらえない。そこへおれは、あいつが無罪だったと証明するものを手に入れた。それでおまえの面子が潰れるってか？ あいつはおまえの命を救い自分は死んで、それがあんたには何の意味もないのかよ。おまえなんか、大物ぶる以外に何もどうでもいいんだ。自分のこと以外、他人のことなんか地獄のクソほども気にしちやいない。あんたは大物なんかじゃないただの大口叩きだ¹⁶⁵」

ヤツの顔が凍り付き、三度目に殴ろうと腕をふりかざした。今度は本気で殴るつもりだ。まだふりかざしている途中で、おれは半歩前に出てみぞおちを蹴りつけた。

何も考えず、計画もたてず、勝ちの見込みも、そもそも勝ち目があるのかも計算しなかった。ただヤツのご託にうんざりで、痛いし血も出ていたし、この頃には殴られて気が変になっていたのかも。

ヤツは身を折り、あえぎ、銃がその手から落ちた。それをつかもうと激しく手探りしつつ、喉でキツそうな音をたてた。その顔に膝を叩き込んだ。ヤツは悲鳴をあげた。

椅子の男が笑った。おれはひるんだ。するとそいつは立ち上がり、手の銃を向けた。そして穏やかに言った。

「殺すなよ。生き餌に使うんだから」

そして廊下の影の中で動きがあり、オールズがドアから入ってきた。目はうつろ、無表情でまったく落ち着き払っている。メネンデスを見下ろした。メネンデスは膝をついて頭を床につけていた。

「ヤワだねえ。ぼろぼろだ」とオールズ。

「ヤワじゃない。怪我してるんだ。だれでも怪我はする。ビッグ・ウィリー・マグーンもヤワだったか？」

オールズはおれを見た。もう一人もおれを見た。戸口の強面メキシコ人は無音だった。

おれはオールズに顔をしかめてみせた。「そのくそタバコを顔からどけろよ。吸うかしまうか決める。見てるだけでむかつく。おまえがむかつく。おまわりどもみんなむかつく」

彼は驚いたようだった。そしてニヤリとして嬉々として言った。

「あれは仕込みだったんだよ。痛かったでちゅかー？ いけない人たちに、お顔ちゃんを殴られちゃいまちたかー？¹⁶⁶ ふん、おれに言わせりゃ自業自得だし、殴られてくれてこっちにとっては結構毛だら

165 こころへん、既訳は三者三様に言葉を足して、自分の考えるイキがったせりふを作っている。だれが傑出しているわけでもない。

166 ここは赤ちゃんことば。田口だけはきちんとそれを訳に反映できている。

け」とメンディを見下ろした。メンディは正座の姿勢になっていた。井戸のどん底から、少しずつ這い上がってくるところだった。あえぐように息をしていた。

「なんともよくしゃべってくれたねえ。インチキ弁護士三人がついて黙秘しろと言わないから」

そう言ってオールズはメネンデスをぐいと立ち上がらせた。メンディは鼻血を出していた。ごそごそとハンカチを白いディナージャケットに当てて、鼻にあてた。無言だ。

オールズは囁んで含めるように言った。「おまえは裏切られたんだよ、甘ちゃん。おれはマグーンなんか特に悼む気もない。あいつには当然の報いだ。だがおまわりにはちがいがなかった。おまえみたいなチンピラはおまわりに手出ししちやいかんのよ——常に、永遠にな」

メネンデスはハンカチを下ろしてオールズを見た。椅子にすわっている男を見た。ゆっくりふりかえり、戸口の屈強なメキシコ人を見た。そいつらがみんなメネンデスを見た。みんな無表情だ。するとどこからともなくナイフが現れ、メンディがオールズに突進した。オールズは一步脇にどいて、片手で相手ののどをつかみ、ナイフを楽々とその手から、ほぼ平然とたたき落とした。オールズは足を開き、背をのばして少し腰を落とすと、首をつかんだ片手でメネンデスを床からあっさり持ち上げた。そしてそのまま部屋を横切ると、壁に釘付けにした。床に下ろしてやったが、くびは放さなかった。

「指一本でも触れたら殺してやる」とオールズ。「指一本でも」そして手を下ろした。

メンディは恨みがましい微笑で彼を見た。自分のハンカチを見て、血を隠そうとそれをたたみ直した。そしてまた鼻に当てた。おれを殴るのに使った銃を見下ろした。椅子の男がほんのついでのような口調で言った。「弾はないよ、つかめてもな」

メンディはオールズに言った。「裏切りだと最初に言ったな」

オールズが言った。「腕っ節の強いやつ三人を頼んだだろう。やってきたのはネヴァダ州の保安官署員¹⁶⁷三人だったんだよ。ヴェガスのだれかさんは、おまえがきちんと話を通さなかったのがお気に召さないとき。そのだれかさんが話をしたいそうだよ。その署員三人と一っしょに行ってもいいし、おれとダウンタウンに行って手錠でドアから吊してやってもいい。おまえをアップで見たい連中が何人かいるんだぜ」

「神よ、ネヴァダだ」とメンディは静かに言うと、また見回して戸口の屈強なメキシコ人を見た。そしてすばやく十字を切ると正面の玄関から出て行った。屈強なメキシコ人が続いた。そしてもう一人の、干からびた砂漠タイプのやつも、銃とナイフを拾って出ていった。そしてドアを閉めた。オールズは不動で待った。車のドアがいくつもバタンとしまり、一台が夜の中へと発車していった。

「あのゴロツキどもが本当に保安官補なのか？」とオールズに尋ねた。

おれがいて驚いたとでもいうように彼はふり返った。「星バッジ持ってただろ」と言い捨てた。

167 Deputy. 副官のことだけれど、5章あたりで拘置所の看守も deputy と呼ばれていたし、厳密に何か副官という具体的な役職というより、単にその部局の役職低めのだれか、というニュアンスが強い。署員とか所員とか訳したほうがいい。

「大した仕事だな、バーニー。いやまったく。あいつ、ベガスまで命があると思うのか、この冷血漢のくそ野郎が」

洗面所にいって水を流し、濡れタオルをズキズキする頬に当てた。自分を鏡を見た。頬はひどく腫れ上がり、青っぽくなって、銃床が頬骨に当たった衝撃でギザギザの傷ができていた。左眼の下も変色している。数日は美人にはなれないだろう。

すると鏡の中にオールズの姿が背後に見えた。火をつけていないくそタバコを唇に当ててくるくるまわしている。死にかけのネズミをネコがおもちゃにして、あと一度だけ逃げるようにし向けているかのようだ。彼はどら声で言った。

「次からは警察を出し抜こうなんてしないことだな。あの写真コピーを盗ませてやったのがただのギャグだとでも思ったか？ メンディがお前を痛めつけにくるだろうと睨んだからだよ。スターにははっきり言ってやったんだ。そのあたりでのギャンブルを止めるわけにはいかんが、儲けの取り分を懐に入れるのを十分難しくしてやることはできるんだぞ、と言ってやった。おれたちのシマで、ギャングがおまわりをぶちのめして、ただですむと思うな、そいつが腐ったおまわりでもな、と。スターは自分は何の関係もないと言い、連中もこの件についてはお冠で、メネンデスもお仕置きされると言った。おれたちはそれに納得した。だからメンディがおまえにヤキを入れようと外から腕っ節の強い連中を呼んだとき、スターが送りこんだのは配下の三人で、車も自分の車で、費用も全部自分持ちだ。スターはヴェガスの警察長官役なんだ」

おれはふり返ってオールズを見た。「砂漠のコヨーテどもは今日のご馳走だな。おめでとう。おまわり稼業はすばらしく心躍る理想主義的な仕事だよな、バーニー。おまわり稼業でよくない唯一のことは、おまわりがそこに関わってるってことだ」

彼はいきなり声に冷たい残虐性をこめた。「ご愁傷様だったな、英雄さんよ。おまえが自分のお屋敷に入ってきてぶちのめされたとき、笑わないようにするのに苦労したぜ。あれで気分が盛り上がったよ、小僧。汚い仕事だし、汚くやるしかなかったんだ。あの手の連中に口を割らせるには、自分に力があるような気にさせるしかないんだ。おまえも、ひどくはやられてないにしても、多少はあいつらの好きにさせるしかなかった」

「そこまでご心労いただき痛み入りますぜ。いやご愁傷様¹⁶⁸」

やつはその厳しい顔をこっちにつきつけた。そして荒っぽい声で言った。「ギャンブル屋は大嫌いだ。ヤクの売人が嫌いなのと同じようにな。連中は、ヤクに負けず劣らず墮落させる病気におもねってるんだ。リノやラスベガスのああいう場所は、ただの人畜無害なお楽しみのためだけにあるもんじゃねえんだ。バカな、あれは弱い連中をむしるためにあるんだ。一攫千金を目指すカモども、月給袋をポケットに入れてやってきて、週末の雑貨代金までむしられるような連中だ。金持ちのギャンブ

168 田口訳は、ここの一行を訳し漏れ。

ラーどもは4万ドルすつても、笑ってまたやってこれる。だがでっかいインチキ稼ぎは金持ちどもからくるんじゃないんだぜ、旦那。派手な盗みの儲けは、十セント、二十五セント、五十セント単位でたまに一ドルや下手すると五ドル。風呂場の水道水みたいに転がりこむ、絶対に止まらない安定した流れ。プロのギャンブル屋をパクるんなら¹⁶⁹、おれに任せろ。好きな仕事だ。だが州政府がギャンブルから税金と称して金を巻き上げるとき、その政府はギャング商売のお先棒を担いでる。床屋や美容院の子が馬に二ドル賭ける。その金はマフィア行きだ。それがホントの儲けの源なんだ。みんな正直な警察をお望みだって？ でも警察に何ができる？ ご優待カードの持ち主どもを守るだけ。この州には合法競馬があつて、年中やってる。正直に運営して州は分け前をもらうが、実際にレースに賭けられる一ドルごとに、ノミ屋では五十ドルが動いてる。一日八か九レースあつて、その半分、だれも気にしないケチなヤツでは何の苦も無く八百長が仕組める。騎手がレースに勝つ方法の一つだが、負ける方法はいくらでもあつて¹⁷⁰、8 ポールごとに監視員が見張ってても、騎手に心得があればどうしようもない。合法ギャンブルだぜ、旦那。おきれいでまっとうなビジネス、州のお墨付きだから正しいんだよな、ちがうか？ おれに言わせりゃ全然ちがうね。だってギャンブルだしギャンブラーがたかってくるし、なんだかんだで結局ギャンブルは全部同じ—まちがってる¹⁷¹」

「気はすんだか？」とおれは傷に無色のヨードチンキを塗りながら尋ねた。

「老いぼれのくたびれたポンコツおまわりだぜ。気なんてむかつくだけだ」

おれはふり返って彼を見つめた。「おまえ、いい警官だよな、バーニー。すげえよ。それでも警察の常として女々しいんだよ、おまえ。みんな筋違いなものを責める。給料をサイコロ博打でするやつがいたら、ギャンブル禁止。飲んだくれたら、酒を禁止。自動車事故でだれかが死ねば、自動車作りの禁止。ホテルで女といて捕まったら、セックス禁止。階段転げ落ちたら、家建てるの禁止とくる」

「うるせえよバーカ¹⁷²」

「けっ、ただの民間人だから大人しくだまらと思うか。いい加減にしろよ、バーニー。ギャングやマフィアややくざがいるのは、汚職政治家や、市役所や議会にいるそいつらの手先のせいじゃない。犯

169 Knock off. 村上、村上、田口は「叩きのめす/痛めつける」。ゴロツキの暴漢じゃないのでそんなことはしないでしょー。清水訳は「槍玉にあげる」。わかったようなわからないような。普通に辞書に載ってる「逮捕する」の意味で無問題。また次の「that's for me」を村上/田口は「そっちの味方につく/そっちに加勢する」と訳すが、刑事なんだから勝手に味方についたり加勢したりできるわけないでしょ。おれのための仕事だ＝そういう仕事は是非任せてくれて言ってるの！ 清水は「おれが仕事をしなくちゃならない」で、わかってんのかなあ。

170 ここ、珍しく清水訳が「ファンの虎の子の一ドルをあつというまに巻き上げる方法」と原文にない特に必然性もない説明を追加して文がダレている。

171 ここの一連の朗々たるギャンブル批判や犯罪論、田口訳はあれこれ言葉を足しすぎるきらいはあるが、老警官の苦渋と吐き出すような口調を見事に出せていて実にうまい。清水訳は口調は普通。村上訳は、意味は取れているが、直訳めいた部分とあちこちで余計な説明の追加がまじって違和感ある。断片的で思わせぶりなせりふですべてを進める村上春樹の作風では、こういう深く長い心情吐露はうまく処理できないのがわかる。

172 Aw, shut up. Aw が頭についていることで、これがどんな口調で言われているのが確実にわかる。マーロウの批判に対して、本当に怒って「黙れ」「そんなことはないぞ」と言ってるんじゃない。「そんなことはわかってんだよ、いちいち言われないでも」くらいの投げやりな感じ。村上訳は「黙れ！」でなんか本気で怒っててニュアンスがちがう感じ。田口は「うるさいんだよ」、清水は「くだらねえ！」でどちらも多少は感じが出ている。

罪は病気じゃないんだ、ただの症状なんだ。おまわりは、脳腫瘍にアスピリンを出す医者みたいなもんだ。おまわりはむしろ棍棒を使いたがるがな。おれたちはでっかい荒っぽい金持ちの暴れ者どもで犯罪ってのはその代償なんだよ。組織犯罪はそれが社会組織になってる代償なんだ。この先も当分なくなるわけがない。組織犯罪は強いドルの汚い一面でしかないんだ」

「きれいな一面ってのは何なんだよ」

「おれは見たことないね。ハーラン・ポッターなら知ってるかな。一杯やるか」

「玄関から入ってきたときのおまえ、いい顔だったぜ」とオールズ。

「メンディにナイフを向けられたときのおまえにはかなわんよ¹⁷³」

「握手」と彼は手を差し出した。

その一杯をやってから、彼は裏口から出ていった。前夜に下調べで立ち寄ったときに、家に入るためこじあけてあったのだ。裏口は外開きで、木が乾燥して縮んでいれば簡単だ。ちょうつがいのピンを抜けばあとは楽々。オールズは、丘をこえて次の通りに停めた車のところに戻る際に、ドアフレームに残したへこみを示してくれた。正面玄関だって同じくらい簡単に開けられたのだが、それだと錠前を壊してしまう。目立ちすぎる。

懐中電灯の明かりを前に彼が木々の間を上り、丘を越えて消えるのを見送った。ドアに鍵をかけて居間に戻り、すわった。時計を見下ろした。まだ早い。帰ってからずいぶんたったように思えたのは気のせいかな。

電話のところへ行って、交換手にかけてロリングの電話番号を言った。執事がこちらの名前を尋ねそしてロリング夫人がご在宅かを見に行った。ご在宅だった。

「おれは確かにヤギでしたよ。でも連中はトラを生け捕りにした。おれはちょっと怪我をしました」

「いずれ是非お話聞かせてくださいな」という彼女の声は、もうパリに到着したかのように疎遠だった¹⁷⁴。

「一杯やりながら話すのはどうです—お時間あればね」

「今夜？ あらちょうど引っ越しの荷造りをしてるところなんですよ。今夜は残念だけど無理」

「ええ、そりゃそうですね。いや、お知りになりたいかと思っただけで。警告をありがとう。あなたのお父さんとはまったく関係ありませんでした」

173 このやりとり、お互いに悪口の応酬にも読めるが、マーロウは入ってきたときはかなり覚悟を決めていて特におたについていない。またナイフを出されてオールズは顔色一つ変えていなくて、かっこよく描かれている(＝マーロウにはそう見えた)。多少なりともビビってないと、悪口にはならない。だからお互い本当にほめあい、ねぎらいあつて可能性が高い。村上、田口は、特に最初のオールズ発言は悪口だという解釈だし、マーロウの返事も多少嫌味があった訳になっているが、それはまちがっている可能性がかなりあると山形は愚考。清水は両方ほめていると解釈。それが正しいんじゃないか。断言はできないので、どっちにも取れるようにしておいた。

174 Sounded far away. 村上訳：「ずいぶん遠方から話をしているような声」田口訳「声がやけに遠くに聞こえた」。まちがいは言い切れないが、いささか直訳。この後で声が温くなったという描写があるので、これはよそよそしい疎遠な声という意味。清水訳は「とりつきにくい言い方」で、このニュアンスがまあ反映できている。

「それ、まちがいない？」

「絶対に」

「あ、ちょっとお待ちいただけます？¹⁷⁵」としばらく電話口を離れ、戻ってくるとずっと温かい声になっていた。「一杯くらいならなんとか。どこで？」

「おっしゃるところどこでも。今夜は車はないけど、タクシーをつかまえるから」

「バカおっしゃい。迎えに行くから。でも一時間かそこらかかるけど。そっちの住所は？」

それを告げると彼女は電話を切り、おれはポーチの明かりを点けて、開いたドアの内側に立って夜を吸い込んだ。ずっと涼しくなっていた。

中に戻ってロニー・モーガンに電話したが、つかまらなかった。それからものは試しでラスベガスのセラピン・クラブに電話をして、ランディ・スターと話そうとした。たぶん出てはくれないだろうが出たくれた。静かで、有能で、何でもこなせるような声をしていた。

「電話をくれてありがたいね、マーロウ。テリーの友人はすべて私の友人だよ。どんなご用だね？」

「メンディが向かっている」

「どこに向かってるって？」

「ベガスですよ、あなたが彼を追わせた三人の暴漢といっしょに、赤い探照灯とサイレンつきのでっかい黒のキャデラックで。あなたの、ですよ？」

彼は笑った。「ベガスではね、一部のブン屋が言うように、トレーラーがわりにキャデラックを使うんだよ。いったい何の話だ？」

「メンディはおれの家の中で、おっかない連中二人と待ち伏せしてたんだ。おれをぶちのめそうしてたんだ—思い知らせてやるって—ある新聞記事のせいで、あいつはそれがおれのせいだと思っていたんだ」

「君のせいだったのか？」

「おれは新聞なんか持ってませんよ、スターさん」

「私はキャデラックのおっかない連中なんか持ってませんよ、マーロウさん」

「サツですかね」

「さあねえ。他に何か？」

「メンディにはピストルで殴られました。おれはあいつの腹を蹴飛ばして膝で鼻をつぶしてやった。ご不満だったようですよ。それでも生きてベガスに着いてくれるといいんですがね」

175 前章のやりとりは、父親の名前を出さないようにするためきわめてあいまいになっていたけれど、リンダおねえさまは、新聞へのアイリーン遺書リークについて、マーロウに制裁を加えるのは自分の父親だと思っていて、前章最後もそれを警告していたわけです。今回もその話をされて責められると思っていたのでつれない対応だった。それが、父親じゃないとわかったのですっかり安心して態度を変えたのでした。

「着くでしょうよ、こっちに出発したのなら。残念ながらそろそろ話を切り上げませんとな」

「ちょっと待った、スター。オタト克蘭の一件にはあなたも囃んでたのか——それともメンディー一人でやったのか？」

「え、いま何と？」

「とぼけないでくださいよ、スター。メンディーがおれに腹を立てたのは、あいつの言ってた理由のせいじゃない——その理由では家で待ち伏せして、ビッグ・ウィリー・マグーンみたいな目にあわせるほどは怒ってなかった。それほどの動機がない。余計なことに首を突っ込まず、レノックス事件を蒸し返すなど警告されたんですよ。でもおれはそれをやった。単に事態がたまたまそういうふうに展開したからなんですがね。それでメンディーはいま話したようなことをやったわけです。だからもっとマシな理由があるんだ」

彼はゆっくり、だが相変わらず穏やかかつ静かに言った。「なるほど。テリーの死に様について、まだつじつまの合わないところがあると思うわけですか。たとえばあいつが拳銃自殺せず、他のやつに撃たれたとか？」

「たぶん細かい話が大事なんでしょう。テリーは自白書を書いたがそれはウソだった。おれに手紙を書いてそれは投函された。ホテルのウェイターかボーイがそれをこっそり持ち出して投函することになってたんですよ。あいつはホテルに缶詰にされて外に出られなかったから。手紙にはでかいお札が入っていて、ちょうどドアにノックが来たところでその手紙は終わってた。入ってきたのがだれか知りたい」

「どうして？」

「それがボーイかウェイターだったなら、テリーは手紙に一行添えてそう書いただろう。それがオマワリだったら、手紙が投函されることはなかったはず。じゃあだれだったんだろう——そしてなぜテリーはあんな自白を書いたんでしょうね？」

「さあねえ、マーロウ。見当もつかんね」

「お騒がせしてすみませんでした、スターさん」

「いやお気遣いなく。お電話もらえて光栄でしたよ。メンディーに何か知ってるかきいてみますよ」

「ええ——もしいつかまた会うことがあれば——それも生きてね。そうでなければ——それでも調べてくださいよ。さもないと他のだれかが調べる」

「君が？」その声がいまやこわばったが、それでも静かな声だった。

「いや、スターさん。深呼吸するまでもなく、あなたをベガスから吹っ飛ばせる人物ですよ。信じて下さい、スターさん。とにかく信じて。これは本当にホントなんです」

「メンディーには生きて会うよ。それは心配しなさんな、マーロウ」

「その件すべてご承知なのはわかってましたよ¹⁷⁶。おやすみなさい、スターさん」

¹⁷⁶ I figured you knew all about that. 村上訳「君はすべての事情を承知しているものと思っていたんだがな」、田口訳も実質同じ訳。つまり二人とも、スターがテリー・レノックス自殺偽装の真相を知ってると思ったが知らないんですか、という意味に解釈しているが、どちらもまちがひ。that はメネンデスと生きて会う、という部分。スターがそう言ったということはつまり、彼は自分がメネンデスの生殺与奪を握る立場にあるというのを認めたということなので、それについて「あんたがその件を仕切ってるのはわかってたよ」と言っているのがここ。清水訳は「そうだろう。あんたにはわかってるんだと思ってた」で正しい意味。

[49]

外の正面に車が止まってドアが開いたので¹⁷⁷、外に出て下に迎えに行こうとした。だが中年の黒人運転手がドアを押さえて彼女が出るのを待っていた。そして小さなお泊りかばんを持って、彼女の後から階段を上がってきた。だからそのまま待った。

階段のてっぺんについた彼女は運転手に向き直った。「マーロウさんがホテルまで送って下さるわエイモス。いろいろありがとうね。朝に電話するから」

「かしこまりました、ロリング様。マーロウ様に一つうかがいたいことがあるのですが」

「もちろんだよ、エイモス」

彼はドアの中にお泊りかばんを入れ、彼女はおれの横を通って中に入り、二人きりにしてくれた。

「『老いるだろう……老いるだろう……履くときはズボンの裾をまくろう』。これはどういう意味でしょうか、マーロウ様？」

「何の意味もないよ。単に響きがいいってだけだ」

彼はにっこりした。「これは『J・アルフレッド・プルフロックの恋歌¹⁷⁸』からです。もう一つあります。『その部屋で女たちが右往左往/ 話すのはミケランジェロウ』¹⁷⁹ 何かお感じになるところはございますでしょうか、旦那様」

「ああ—そいつは女のことなんか大して知らなかったとを感じるよ」

「まさに我が意を得たりでございます、旦那様。さはさりながら、わたくしはT・S・エリオットを非情に敬愛しております」

「『さはさりながら』と言ったな？」

「ええ、さようでございます。マーロウ様。何かまちがったことを申しましたか？」

「いいや、だが億万長者の前では言うなよ。バカにされたと思われるかもしれないからな¹⁸⁰」

177 既訳三つとも、「音が聞こえた」としているが、窓から見えてもいいのでは？ ないものを足さなくてもいいと思う。

178 細かいことだが検索すると『恋歌』が一般的なのに、既訳はすべて『愛の歌』。そういう邦訳あるの？

179 苦しいね。まあ30秒で思いついたものなので許せ。

180 教養人の読者諸賢には蛇足だろうが、ここは32章最後の伏線回収。マーロウはそこでエイモスに、チップ替わりにエリオット詩集を買ってやろうと言った。無教養扱いされたエイモスは、ここで軽い仕返しを図っている。マーロウは実はT.S.エリオットなんか読んでなくて、いまのが彼の詩だとも気づかずきいたふうな口を叩いた。エイモスは、おまえのほうこそ実はT.S.エリオット知らないじゃん、とほのめかし、マーロウをチクリとバカにしている。「我が意を得たり」はもちろん、本当に同意しているのではなく「よくもまあくだらんことを、このバーカ」の心にもない京都話法。次の「さはさりながら」はむろん、いまのはエリオットなのに（それも詩の題まで教えてやったのに）わかんなかっただろ、という種明かしの京都話法。マーロウは、まいりました、言わんといてやってやー、というのを「金持ちには言うな」という形でほのめかす。ハッハッハ、余計なお世話でしたな。

彼は悲しげに微笑した。「ゆめ考えることさえ控えます。事故にでもあわれましたか、旦那様」

「いいや、計画通りの結果だよ。おやすみ、エイモス」

「おやすみなさいませ、旦那様」

彼は階段を降り、おれは家の中に戻った。リンダ・ロリングは居間の真ん中に立ってあたりを見回していた。

「エイモスはハワード大卒なのよ。あなたあまり安全な場所に住んでないのね——ずいぶん危険な人のくせに」

「安全な場所なんかない」

「ひどい顔。だれにやられたの？」

「メンディ・メネンデス」

「その人に何したの？」

「大したことは。二、三度蹴飛ばした。そいつは罠にかかったんだ。いまはネヴァダのおっかない保安署員三、四人従えてネヴァダに向かってるところだ。どうでもいい」

彼女はソファにすわった。

「何を飲む？」そう尋ね、タバコの箱を手にして差し出した。吸いたくないという。なんでもいいから飲みたいと。

「シャンパンはどうか。アイスバケツはないが冷えてるよ。ずっと取ってあったんだ。二本。コードン・ルージュ。悪くないと思う。おれにはわからん」

「何のために取ってあったの？」

「君」

彼女は微笑んだがまだおれの顔を見つめている。「切り傷だらけ」と指先を伸ばしておれの頬に軽く触れた。「あたしのために取っておいた？ そんなはずないでしょう。初めて会ってからほんの数ヶ月よ」

「じゃあ君と出会うまで取っておいたんだ。持ってこよう」おれは彼女のお泊まりバッグを持って、部屋を横切りはじめた。

「ちょっと。それどこへ持ってく気？」彼女は気色ばんだ。

「お泊まりバッグ¹⁸¹だろ？」

これを翻訳で強いて出すなら、「我が意を得たり」をもっと大げさに明らかに嫌味な褒め方にして、ここは反語の嫌味ですよ、というのを強調するくらいだが、それだとエイモスのチクチクのさりげなさが台無しになるので、やらぬが花。既訳のお三方はみんな、もちろんこのやりとりの妙は完全に理解しておられますわよねー。

181 Overnight bag. 既訳は三人とも、旅行かばんと訳している。でっかいスーツケースでも持ってきたみたいじゃないか、それじゃ。オーバーナイト、一泊だけのやつ、お泊まりバッグ/セットよ。AV 見てればラブラブ系のやつで頻出します。

「それ置いてこっちきてよ」

そうした。彼女の目は輝いていて、同時に眠たげだった。そしてゆっくりと言った。

「これは目新しいことなの。まったく新しいこと」

「どういうふうによ」

「あたしに一切手出ししなかったわよね。口説きもなし、ほのめかしもなし、触れもせず、何もしあなたがタフで、嫌味で、意地悪くて、冷たいんだと思ってたわ」

「そうなんだろう—ときには」

「こうしてここに来たら、前置きなしに¹⁸²、シャンパンをそこそこ飲んだらベッドに押し倒すつもりね。そうなんですよ」

「正直いって、確かにそんな考えも頭を横切ったりはしたなあ」

「光栄だけど、そんなのいやと言ったら？ あなたは好きよ。とっても好き。でもだからって、ベッドインしたいことにはならない。あなた結論に飛びついてるでしょ—あたしがお泊まりセット持ってきたからってだけで」

「勘違いだったかな」とおれは立ち上がり、お泊まりバッグを取って玄関に戻した。「シャンパン取ってくる」

「あら傷つけちゃったかしら。シャンパンはもっと幸先のいいときのために取っておくほうがよろしいんじゃないかと」

「たった二本だ。本当に幸先良い機会なら一ダースは要る」

彼女はいきなり怒り出した。「あらそうでしたか。あたしなんて、もっときれいで魅力的な人がくるまでのつなぎでしかないってことね。まったく感謝感激だわよ。こんどはあたしが傷ついたわ、でも自分がここなら安全だとわかるのはありがたいことなのかもね。シャンパン一本くらいであたしが軽い女になるとおもったら、言っとくけどそんなの大まちがいですからね」

「だからそのまちがいはいもう認めただろう」

「離婚すると話したこと、お泊まりバッグを持ってエイモスにここまで送らせたことがあっても、軽く見ないでくれる？」と彼女はまだ怒って言った。

おれは怒鳴った。「お泊まりバッグがどうした！ お泊まりバッグなんかどうでもいい。もう一度持ち出したら、そいつを正面階段から投げ落としてやる。一杯やらないかと言っただけだ。台所にいつて取ってくる。それだけだ。君を酔い潰そうなんてこれっぽっちも思っていない。おれと寝たくない。

182 前置きなしに (without preamble) は、とびかかる/押し倒すにかかる。村上は「前置きみたいなものなしに」として、しかもそれがその前の「私は今ここにいる」にかかるものと解釈しているが、まちがい。また田口は「よけいなことは考えずにこう思っている」と訳し、リンダにかかるものと解釈している。これもまちがい。マーロウが、前置きなしに、彼女を押し倒すのだ。

まったく結構。寝なきゃいけない理由なんかない。それでもシャンパンを一、二杯飲むくらいはできるだろう、え？ だれがいつ、どこでシャンパンどれほどで誘惑されるとかでもめなくていいだろう」

「そんな怒らなくたっていいじゃない」と彼女は赤面した。

「ただのかけひきだよ¹⁸³。手口は50種類知ってるがどれも大嫌いだ。みんなインチキで、みんな何やら片隅に卑しい下心がある」

彼女は立ち上がってこちらに近づき、指先を優しく顔の切り傷や腫れに走らせた。「ごめんなさいね。ただのしなびた幻滅してる女よ。手加減して。だれが見ても掘り出し物の女なんかじゃないわよね¹⁸⁴」

「しなびてなんかないし、ほとんどの人よりひどく幻滅してるわけでもない。どう計算しても、本当なら妹さんと同じ、浅はかで甘やかされた尻軽なろくでなしになってるはずだ。それが何やら奇跡的にそうならなかった。ご一族の中で、正直さとかかなりの気概を持っているのは君だけだ¹⁸⁵。だれにも手加減なんかしてもらわない人間だよ」

おれは向きを変えて部屋を出ると、廊下を下りて台所に向かい、シャンパンボトルの一つを冷凍庫から出すと、コルクを飛ばして浅いゴブレットを二つすばやく見たし、片方を飲み干した。その刺すような味で涙が出たが、グラスを空けた。そしてまた注いだ。すべてをお盆にのせて居間に運んでいった。

彼女はいなかった。おれはお盆をおいて玄関を開けてみた。玄関が開く音はしなかったし、彼女は車がない。何の音も聞こえなかったのに。

すると背後で彼女の声がした。「バーカ、逃げるとでも思った？」

おれはドアを閉じてふり返った。彼女は髪をゆるめ、はだしにふかふかのスリッパを履いて、和風プリントで夕日色の絹のローブをまとっている。ゆっくりこちらに向かい、予想外の恥ずかしげな微笑を浮かべている。彼女にグラスを差し出した。彼女はそれを受取り、何口かすすると、返してよこした。

183 既訳三つとも「チェスの」をわざわざ付け加えているが、それが念頭にあるにしてもこの流れでそれを説明する必要はないし、gambitは一般的にかけひきという意味で使うので、男女のかけひきってことでいいのでは？

184 I'm a bargain to no one. もう自分はみんながすぐ買いたい/手に入れたと思う存在じゃない、ということ。この文はすべて、彼女がちよっと自虐的になって、自分はもうそんな魅力ないわよね、じらすような真似してごめんなさい、と言っている文。村上訳は「相手が誰であれ自分を安売りしたくないの」で意味がかなりちがう。田口訳は「わたしは理想の花嫁にはほど遠い女だけど」って、卑下ではあるけど、花嫁って何？ どっから出てきたの？ いいムードになってきたとき、これ言われたら「え、いきなり結婚話デスカ???」とドン引きしない？ 清水訳は「つまらない女なのよ」といつもながら端折ってもしつかり意味は捉えている。

185 You've got all the honesty and a large part of the guts in your family. 三人とも、一家の血筋に流れる正直さと根性/気の強さとか訳しているが、全然ちがう。マーロウから見たら、ポッター家の連中はみんなどうしようもない憤りも気概もないろくでなしばかり。だからその血筋なんかには何もないの。その中で、唯一リンダは正直さと気概がある人間。だからそのご一家の持つ正直さと根性を全部あわせても、そのすべて/ほとんどの持っているのはリンダだ、ということ。つまり他の連中は正直さも気概はまるでない。君だけだと言っている。

「とってもすてき」。そしてとても静かに、何のお芝居も気取りもなしに、彼女はおれの腕の中に入ってきて、口をおれのに押しつけ、唇と歯を開いた。舌先がおれのに触れる。それからずいぶんたって、彼女は頭を後ろにやったが、首に巻きつけた腕は残っていた。目がキラキラしている。

「もとからそのつもりだったの。ただ、じらさなきやと思って¹⁸⁶。どうしてかしらね。不安だったのかも。あたしはそんな軽い女じゃないのよ。哀れかしら？」

「軽い女だと思ったら、ヴィクターズのバーで初めて会ったときに口説いていたよ」

彼女はゆっくり首を振って微笑んだ。「それはどうかしら¹⁸⁷。だから今はあたしがここに来たんでしょ」

「あの晩じゃなかったかもしれないがね。あの夜は何か別のことがあった」

「酒場でも口説いたりしないの」

「あまりね。照明が暗すぎるから」

「でも口説かれたくて酒場に行く女も多いでしょ」

「朝起きたときからそうされたい女も多い」

「でもお酒は催淫性よ——ほどほどなら」

「お医者さんも大推薦です¹⁸⁸」

「だれが医者のお話なんかしてるのよ。シャンパンちょうだい」

彼女にもっとキスした。軽い快適な仕事だ。

「かわいそうなほっぺたにキスしてあげたいわ」と言って、実際にそうした。「熱くて燃えそう」

「他の部分は凍えそうだよ」

「うそおっしゃい。シャンパンちょうだい」

「なぜ」

「飲まないと気が抜けるから。それに味が好き」

186 I just had to be difficult. 容易には身を任せない、つまりじらした、ということ。村上訳「自分で自分をついむずかしくしてしまう性格なの」。あまりに直訳で意味不明。微分方程式でも解き始めそう。田口訳「どうしてもむずかしく考えちゃうのよ」。うーん、まあそう考えられなくもないかもしれないが、もってまわりすぎでは。清水訳「かんたんに抱かれたくなかったの」。うん、それでいいんじゃない？

187 I don't think so. 軽い女だと思ってたらすぐ口説いてた、というマールウに対して、ウソつけ、軽い女だろうと口説く度胸なんてなかっただろ、その後も全然口説かなかっただろ、だからあたしのほうから今夜出向かなきゃいけないかったんだろ、と言っている。「このいくじなし」ということ。村上訳は「誘いをかけなかったのなら、私はなぜ今ここにいいのかしら」。前の文とのつながりだと、実は最初のヴィクターズで誘いをかけていた、ということになってしまう。そんなニュアンスはない。田口と清水はそのままの訳。まあ伝わる人には伝わるでしょう。

188 アメリカのCMの定番で、薬や歯磨き粉の宣伝で「お医者さんも推薦してます！」というのが決まり文句になっているので、それをふざけて言っている。46章でオールズ警部がそういう医者CMに言及しているので、伏線回収ですな。村上/田口はそれを認識せず「医者はそれを推奨する/医者はそれを勧めている」と直訳。睦言の中にいきなりこれが出てきてあまりに不自然。清水訳は「医者がそういったんだね」で、まだ睦言の文脈にはおさまる。でもちょっとおふざけ感を出してほしい。

「いいよ」

「あたしのこと愛してる？ 一緒にベッドインしたら愛してくれる？」

「かもね」

「ベッドインしなくてもいいのよ。別にどうしてもってわけじゃない」

「そりゃいいね」

「シャンパンちょうだい」

「金はどのくらい持ってる？」

「全部で？ 知るもんですか。800 万ドルくらい」

「じゃあいっしょにベッドに入ることにした」

「金で動くのね」と彼女。

「シャンパン代を払ったのはおれだぜ」

「シャンパンが何よ」と彼女。

[50]

一時間後、彼女はむき出しの腕を伸ばしておれの耳をくすぐってこう言った。「結婚しない？」

「6ヶ月も保たないよ」

「まったく呆れるわね。保つかもしれないじゃない。やってみる価値はあるでしょう？ 人生に何を期待してるのよ—あらゆるリスクの可能性に全部保険がほしい？」

「もう42歳だぜ。縛られないのに慣れすぎて。君はちょっと—過度にではないが—金に慣れすぎている」

「こっちは36よ。お金を持っても恥ずかしいことはないし、お金と結婚しても恥ずかしいことなんかない。お金を持つてる人のほとんどは分不相応で、使い方もわかってない。でも長続きはしないわ。また戦争が起きて、それが終わったらだれもお金なんか持ってない—悪党と詐欺師ども以外は。みんな税金で持ってかれて文無しになるのよ、それ以外のあたしたちは」

彼女の髪をなでて、自分の指にまきつけた。「そうかもな」

「二人でパりに飛んだら、すばらしいわよ」彼女は肩肘で身体を持ち上げ、おれを見下ろした。その目の輝きは見えたが表情は読めなかった。「何か結婚に異論でも？」

「百人中2人にはすばらしいものだよ。残りの人々には難行苦行だ。二十年たって男に残されているのは、ガレージの工作台だけ。アメリカの女の子はすばらしいがね。アメリカの主婦はあまりに縄張り主張が激しすぎる。それに—」

「もっとシャンパンちょうだい」

「それに、君にはただの人生の一コマでしかない¹⁸⁹。離婚なんて、きついのは最初るときだけで、あとは経済的な問題にすぎない。君にとってはどうにでもなることだ。十年したら、町ですれちがっても、どっかで見たような記憶があると不思議に思うくらい。いやそもそも気がつきもしないか」

「この自足しきった、自己満足の、自信過剰の、自意識過剰のろくでなし。シャンパンちょうだい」

189 これは村上氏がうまいので拝借した。

「これなら忘れずにいてくれる¹⁹⁰」

「おまけにうぬぼれ屋。うぬぼれの塊。いまはちょっと怪我してるけど。あなたを忘れないですって？ 何人の男と結婚しても寝ても、自分のことだけはあたしが忘れないと思ってるの？ おめでたいわね」

「ごめん。いい気になりすぎた。シャンパンを取ってこよう」

彼女は自虐的な口調になった。「お互いほんと優しくてもものの道理がわかってるんだなあ¹⁹¹。あたしは金持ち女なのよ、ダーリン。そしてもっと無限に金持ち金が湧いてくるのよ。あなたに全世界だって買ってあげられるのよ、買う価値があればだけど。あんたは今、何を持ってるっての？ 戻ってくるのは空っぽの家、犬や猫さえいないし、狭苦しい事務所ですわって待ってるだけ。離婚することになったって、あたしは絶対にあなたをそんな生活に逆戻りさせたりしない」

「おれが逆戻りする気なら止められまい。テリー・レノックスとはちがうんだ」

「お願い、あの人のことは言わないで。それとあの金のツララ、ウェイド女のことも、あのかわいそうな飲んだくれの沈んだ旦那のことも。あたしを袖にした唯一の男になりたいの？ どうしようもないプライドね。知る限りで提供できる最高の賛辞を言ったのよ。結婚してって言ったのよ」

「それ以上の賛辞をくれたよ」

彼女は泣き始めた。「バカ、大バカよ、あなたって！」その頬が濡れていた。そこに涙が感じられた。「6ヶ月とか一年とか二年とかしか続かなくても何よ。あなたが失うものなんて何もないじゃない、事務所の机のほこりと、ブラインドの汚れと、えらく空っぽな種類の孤独が消えるくらいのものでしょうに」

「シャンパンもつという？」

「ええ」

彼女を引き寄せると、おれの肩を借りて泣き始めた。おれと恋に落ちたわけじゃないのは二人とも承知していた。おれのために泣いてるんじゃない。ただ涙を流す頃合いだったというだけだ。

190 "This way you will remember me." 一夜の美しい思い出にしておけばお互い忘れないよね、とマーロウは言っているんだが、清水訳は「こんなつきあいをしてれば、君もきつとおぼえてるよ」とまったく意味不明。村上訳は「きっとそういう文脈で思い出してもらえるかもしれない」、つまりその前の「自己満の自信過剰の云々」という文脈で思い出すんだという変な解釈。田口訳は「まあ、あとになったら、きみは私のことを今言ったように思い出すんだろうな」と、同じく「自己満云々」の話と解釈したうえ、えらく説明調に仕立てている。これ「You will remember me this way」を倒置法にしたんだと解釈したんだね。でもそんな解釈をすべき理由はまったくない。そんなむずかしいやりとりじゃないんだけどなあ。あと、remember をみんな「覚えている/思い出す」とやっているけど、リメンバー・パール・ハーバーを「真珠湾を覚えている」と訳さないように、「忘れる」など訳す方がこもスムーズ。

191 "Aren't we sweet and reasonable?" 既訳は三つとも「私たち、いい組み合わせ/そこそこお似合い/そこそこ悪くない組み合わせ」となっているが、なんでそんな訳になるのかまったく不明。「われわれはスイートでリーズナブルなカップルである」という解釈？ でもそれじゃまったく皮肉にも嫌味にもなっていないので文脈的に変。せっかく大金持ちの美人が結婚しようと言ってくれてのに、マーロウはくだらないプライドで変なツッパリをするだけで、まったく優しくもないし、道理のかけらもないことばかり言ってる。それを皮肉って、リンダは「優しくて道理にかなってる」と嫌味の反語で言ってるので、そのまま訳せばすむ話。

そして彼女は身を離し、ベッドから出ると洗面所に行って化粧を直した。おれはシャンパンを持ってきた。戻ってきた彼女は微笑んでいた。

「メソメソしてごめんなさい。6ヶ月もすればあなたの名前も覚えてないわね。それ、居間にもってきて。光が見たい」

言われた通りにした。彼女は前のようにソファにすわった。おれは彼女の前にシャンパンを置いた。彼女はグラスを見たが触ろうとしなかった。

「そのときはおれが自己紹介するよ。いっしょに飲もう」

「今夜みたいに？」

「今夜みたいなことは二度とない」

彼女はシャンパングラスを持ち上げ、ゆっくりと少量を飲むと、ソファの上で向きを変えて、残りをおれの顔にぶちまけた。そしてまた泣き始めた。おれはハンカチを出して顔を拭き、彼女の顔も拭いてやった。

「なぜあんなことしたのかしら。おまえが女だからで、女はいつだって何してるかわかってないんだとか言わないでよね」

グラスにもう少しシャンパンを注いで彼女を笑った。それをゆっくり飲むと向こうをむいて、おれの膝に倒れ込んだ。

「疲れた。こんどは運んでくれないと」

しばらくして彼女は眠った。

朝起きてコーヒーを淹れたときも彼女はまだ寝ていた。シャワーを浴びて髭を剃り、着替えた。そこで彼女が目を覚ました。いっしょに朝食を食べた。タクシーを呼び、お泊まりかばんを階段の下まで運んだ。

さよならを言った。見えなくなるまでタクシーを見送った。階段を戻ってベッドルームに入り、ベッドの寝具を全部ばらして整えなおした。枕の一つに長い黒髪が一本あった。腹にずしんと何か響くものがあつた¹⁹²。

フランス語にはそれを指す表現がある。あのクソッタレどもは何にでも表現があつて、いつも正しい。

さよならを言うのは少し死ぬことなのだ。

192 There was a lump of lead at the pit of my stomach. むずかしい一節。既訳はすべてみんな腹に鉛の塊があつた、またはそのような気分だった、と訳しているが日本語的にピンとこない。彼女が去ってしまった重みが、そのときになって改めてその後悔と「しまった」という気分がどんと腹に感じられたということ。この山形訳は、その感覚を説明したけれど、一方でチャンドラーの常に即物的な描写からは離れていてちょっと悔しい。

[51]

シューエル・エンディコットは、遅くまで仕事だから夜七時半頃にこいと言った。

角の事務室を持ち、青いじゅうたん、彫りものが角についた赤いマホガニーの机はすごく古くて明らかにとても価値のあるもので、さらにマスタード色の法律書が入ったガラス扉つき本棚、風刺画家スパイが描いた有名なイギリス判事によく見かける風刺画、南の壁にはオリヴァー・ウエンデル・ホームズ判事の大きな肖像画が単独でかかっていた。エンディコットの椅子は、黒レザーのキルト編みだった。その近くには、開いたロールトップ式の机があり、書類が詰め込まれていた。内装屋が飾り立てる機会などなかった事務室だ。

ワイシャツ姿で疲れて見えたが、もともとそういう顔つきだった。あの味気ないタバコを吸っていた。その灰がゆるめたネクタイに落ちている。抜けた黒髪がそこらじゅうに散らばっている。

おれがすわると、彼はだまってこちらを見つめた。そしてこう言った。「私が会った中でも、指折りの頑固野郎ですな、君は。まだあのぐちゃぐちゃを嗅ぎ回ってるのか」

「ちょっと気になることがあるんですよ。いまとなっては、あのブタ箱に会いに来てくれたときはハーラン・ポッター氏の代理だったと思ってよろしいでしょうかね？」

彼はうなずいた。おれは指先で顔の脇に静かに触れた。傷は治り、腫れも引いたが、パンチの一つで神経をやられたらしい。頬の一部にまだ感覚がない。気になってつい触ってしまう。いずれ治るだろう。

「そしてオタト克蘭に行かれたときには、一時的に地方検察局の職員代理を務めていたと思っていますよね？」

「ああ、だがあまりあげつらわないでくださいよ。大事なコネだったんだ。ちょっと大事にしすぎたかもしれない」

「いまも、じゃないんですか？」

彼は首を振った。「いや、もうおしまい。ポッター氏は法務を、サンフランシスコ、ニューヨークワシントンの法律事務所経由で行っている」

「おれを心底嫌ってるでしょうね—あの事件のことを考えたら」

エンディコットは微笑んだ。「不思議なことですが、彼はすべてを義理の息子ロリング医師のせいにしてますよ。ハーラン・ポッターみたいな男は、だれかのせいにするしかないんですよ。自分は絶

対まちがってないというわけです。ロリングがあの方に危険なクスリを供給していなければ、何も起きなかったはずだと思ってるんですな」

「それはまちがってる。あなた、オタクランでテリー・レノックスの死体を見たんですよね？」

「いかにも。タンス作り屋の裏手でね。まともな葬儀屋なんかありませんから。そいつが棺桶も作ってたんですよ。死体は冷たくなっていました。こめかみの傷も見ましたよ。それがテリー・レノックスだったのはまちがいない、もしその方面で疑念を抱いているのならね」

「いいえ、エンディコットさん、そんなことは思ってません。あいつの場合、そんなのはほぼ不可能ですから。でもちょっと変装はしてたでしょう？」

「顔と手は黒塗り、髪は黒く染めていました。それでも傷ははっきりわかりました。そしてもちろん指紋です。アメリカで彼が触ったものから簡単にチェックできました」

「あのあたりの警察はどんなもんですか？」

「原始的。署長は読み書きするのがやっとくらい。でも指紋のことは知っていました。暑くてね、ご存じかとおもいますが、えらく暑い」彼は顔をしかめ、タバコを口から取って、何も考えない様子で巨大な黒い玄武岩めいたゴミ箱に落とした。「ホテルから氷をもってこないといけなかった」そして付け加えた。「それも大量の氷です」そしてまたこっちを見た。「防腐処置なんかない。すばやくすませねばならなかった」

「スペイン語は話せるんですか、エンディコットさん」

「片言です。ホテル支配人が通訳しました」と彼はにっこりした。「身なりのいい人当たりのいいヤツでしたよ、あいつは。タフに見えても、えらく礼儀正しくて親切でした。すぐに片付けましたよ」

「テリーから手紙が届いたんですよ。ポッター氏なら知ってるはずですよ。娘さん、ロリング夫人に話しました。実物も見せましたよ。中にマディソンの肖像が入ってました」

「何が？」

「五千ドル札」

彼の眉が上がった。「それはそれは。まあ彼ならそれだけの資力は確かにありました。二度目の結婚で、奥さんが軽く25万ドルはくれてやったんですよ。思うに彼はどのみちメキシコに行って暮らすつもりだったんじゃないですかね——実際に起こったこととはまったく別に。金がどうなったかは知りません。私はそこには噛んでません」

「これが手紙です、エンディコットさん、お読みになりたいければ」

それを取り出して渡した。彼はそれをていねいに読んだ。弁護士が何でも読むやり方だ。それを机に置いて、後ろにもたれて宙を見つめた。そして静かに言った。

「いささか文学じみてますな。なぜそんなことをしたのかな」

「自殺のこと、自白のこと、それとも手紙を書いたこと？」

エンディコットは決めつけるように言った。「自白して自殺したことに決まってるでしょう。手紙は理解できる。少なくともあなたは、彼のためにしてやったことについて、それなりの補償を得られたわけだ——そしてそれ以後の貢献にも」

「郵便ポストがどうも気になるんですよ。窓の下の通りに郵便ポストがあって、ホテルのウェーターが投函前にその手紙を掲げて見せて、ちゃんと投函されたのをテリーがわかるようにする、という部分です」

エンディコットの目の中で、何かが興味を失ったようだった。「どうしてです？」と彼はどうでもよさそうに尋ねた。四角い箱から、フィルタつきタバコをもう一本手に取った。おれは机越しにライターを差し出した。

「オタト克蘭みたいな場所にあるはずがないんですよ」

「続けて」

「最初はわからなかった。それから、そこを調べてみたんです。ただの村だ。人口は、せいぜい1万か一万二千人。舗装路は一本、それも一部だけ。頭目の公式車両はA型フォード。郵便局は店の片隅、チャンセリアまたは肉屋の一部です。ホテルは一軒、カンティーナ二軒、まともな道はなく、小さな飛行場。まわりの山の中には狩り場がある——大量に。そのための飛行場です。たどりつくまともな方法はそれしかない」

「続けて。ハンティングのことは知っております」

「そんな場所で、通りに郵便ポストがあるって。競馬場と犬の競争場とゴルフコースとハイアライコートと色つき噴水とバンド演奏つき公園があるというに等しい話だ¹⁹³」

エンディコットは冷たく言った。「まちがえたんでしょう。何かが郵便ポストに見えたんでしょう——ゴミ箱とか」

おれは立ち上がった。手紙に手を伸ばし、たたみ直してポケットにしまった。

「ゴミ箱ね。そうでしょうとも。メキシコの色合い、緑、白、赤で塗られて、でっかくはっきりとステンシルされてる『まちをきれいに』。もちろんスペイン語でね。そしてそのまわりに野良犬七匹がゴロゴロ」

「減らず口が過ぎますね、マーロウ」

「いやあ、頭が切れすぎるもんで。もう一つランディ・スターには指摘した小さなポイント。なぜそもそもこの手紙が投函されたんでしょうね。手紙によればこの投函方法はあらかじめ示し合わせたも

193 ここと次のゴミ箱の話、どちらも反語で、マーロウは小賢しく大げさに嘲笑的にいって見せているので、そういう語調がほしいと思うんだが、村上、田口はまったくフラットに訳して反語がわかりにくい。清水訳はまあまあそれが表現できている。

のだった。だからだれかが郵便ポストの話を彼にしたんだ。つまりだれかがウソをついた。そしてだれかが、それでも五千ドル入りの手紙を投函した。おもしろいですねえ、そういませんか？」

彼は吐いた煙が漂い流れるのを見た。

「それで結論は—そしてなぜスターにそれを伝えたね？」

「スターと、メネンデスという悪党、こいつはもうここらにはいませんが、やつらはイギリス陸軍でテリーの仲間だったんですよ。二人ともある面では—いやほとんどあらゆる面でというべきか—ろくでもない連中ですが、それでも個人的なプライドとかの余地はあった。ここでは当然の理由から偽装工作が行われたんだ。そしてオタト克蘭ではまた別の偽装が、まったく別の理由で行われた」

「君の結論は？」彼は再び、ずっときつい口調で尋ねた。

「あなたのは？」

彼は答えなかった。そこで、お時間いただきどうもと礼を述べて立ち去った。

おれがドアを開けるときも、彼は顔をしかめていたが、それは本当に不思議に思って顔をしかめているのだと思った。あるいは、ホテルの外側がどんな具合で、そこに郵便ポストがあったかどうかを思い出そうとしていたのかもしれない。

それはまた別の歯車が回り始めたということだ—それだけ。それが丸一ヶ月回り続けて、ついに何かが出てきた。

そしてある金曜日の朝に、見知らぬ男がうちの事務所で待っていた。何やら身なりのいいメキシコ人かスラメリカーノだ。開いた窓ぎわにすわり、匂いのきつい茶色いタバコを吸っていた。背が高くとても細身でとてもエレガントで、きれいな黒い口ひげと黒髪を、アメリカよりもちよっと長目にしていた。そして何か粗く編んだ素材の、栗毛色のスーツを着ていた。あの緑のサングラスをかけている。礼儀正しく立ち上がった。

「セニョール・マーロウ？」

「どんなご用件ですか？」

彼は畳んだ紙をよこした。「*Un aviso de parte del Señor Starr en Las Vegas, señor. Habla Usted Español?*」(ラスベガスのセニョール・スターからの伝言です。スペイン語はおできになりますか?)

「ああ、だがあまり速いのは無理だ。英語のほうがありがたい」

「では英語で。私には同じことです」

紙を受け取って読んでみた。「友人シスコ・マヨラノスを紹介します。たぶんお役にたてるはず。S」

「中に入ろう、セニョール・マヨラノス」

おれはドアを開けて押さえた。通りすがりに彼の香水が香った。その眉毛もやたらにとんでもなく上品だった。だが一見したほど上品ではないのだろう。顔の両側にナイフ傷があったのだ。

[52]

彼は客用の椅子にすわって脚を組んだ。「セニョール・レノックスについて何か情報をお求めと聞いています」

「最後の場面だけだ」

「私はその現場にいました、セニョール。あのホテルで働いていたんです」そして肩をすくめた。
「どうでもいい仕事でももちろん臨時職です。昼のフロント係でした」英語は完璧だったが、リズムはスペイン語だった。スペイン語—つまりアメリカのスペイン語だ—は明確な抑揚があるが、それはアメリカ人の耳には意味合いと何の関係もないように思える。大海のうねりのようなのだ。

「そんな感じには見えないがな」

「物いりだったので¹⁹⁴」

「おれ宛の手紙を投函したのはだれ？」

彼はタバコの箱を差し出した。「これをどうぞ」

おれは首を振った。「おれには強すぎるよ。コロンビアのタバコは好きだ。キューバのタバコは死にそうになる」

彼はかすかに微笑し、自分でももう一本火をつけて、煙を吹き出した。この野郎はあまりにくそエレガントすぎて、だんだんカンに障ってきた。

「その手紙のことなら知っています、セニョール。ボーイは番人が立つようになってから、セニョール・レノックスの部屋に行くのを怖がりました。おっしゃるように、おまわりだか探偵だかです。だから私が自分でその手紙を郵便局^{コレオ}に持っていきました。銃声のあとです、もちろん」

「中を覗けばよかったのに。大金が入ってた」

彼は冷ややかに言った。「手紙は封がされていました。 *El honor no se mueve de lado como los congrejos*. つまり、榮譽はカニのように横にどいたりはいしないのです、セニョール」

「悪かった。謝る。続けてくれ」

「部屋に入って番人の前でドアを閉めたとき、セニョール・レノックスは部屋に左手に百ペソ札を持っていました。右手にはピストルがありました。目の前の机にあの手紙がありました。そして別の私が読まなかった紙がありました。お札は断りました」

194 "One has difficulties." 清水、田口は普通に訳しているが、村上だけ「人生には雌伏の時期もあります」という場違いな気取ったいいまわしにしている。

「金額が大きすぎたか」とおれは言ったが、そいつはその嫌味には応えなかった。

「どうしてもと言われました。だから最後にはそれを受け取って、後でボーイにやりました。手紙は前に運んだコーヒーの、トレイに乗せたナプキンの下に入れて持ち出したんです。探偵はきつい目でこちらを見ました。でも何も言わなかった。階段を下りかけたとき、銃声が聞こえた。急いで手紙を隠して上の階に駆け戻りました。探偵がドアを蹴破ろうとしていました。私が鍵を開けた。セニョール・レノックスは死んでいました」

彼は机の縁に優しく指を走らせてため息をついた。「あとはご存じでしょう」

「ホテルは満室？」

「いいえ、満室では。お客は半ダースほどでした」

「アメリカ人は？」

「アメリカーノ・デル・ノルテ（北アメリカ人）二人。ハンターです」

「本物のグリーンゴか、ただのメキシコ人移民か？」

彼はひざのうえの栗毛色の布にゆっくりと指先を走らせた。「一人はスペイン系の出身だったかもしれないと思います。国境あたりのスペイン語をしゃべりました。非常に粗野なものです」

「そいつらはレノックスの部屋にちょっとでも近づいたか？」

彼はキッと頭を持ち上げたが、緑のインチキはおれには通用しなかった。「そんなはずないでしょう、セニョール？」

おれはうなずいた。「ま、ご足労いただいて話をしてくれて感謝感激でございましたよ、セニョール・マヨラノス。ランディに、おれがすっげえ感謝していると伝えてくれよな、え？¹⁹⁵」

「ノ・アイ・デ・ケ、セニョール。何でもないことです」

「そしていずれ、お手すきの時にでも、もっとマシな話のできるヤツを寄越すように言っといてくれ」

「セニョール？」という彼の声は、穏やかながら氷のようだった。「私の言葉を疑うのですか？」

「おまえらみんな、榮譽榮譽と言いたがる。榮譽は泥棒の隠れ蓑だ——ときには。怒るなよ。すわって別の見方を話させてくれ」

彼は見下すように後ろにもたれた。

「いいか、これはただの推測だよ。まちがってるかもしれない。が、正しいかもしれない。その二人のアメリカーノたちはある目的をもってそこにいた。飛行機でやってきた。ハンターのふりをした。その一人の名前はメネンデス、博打打ちだ。偽名でチェックインしたかどうか。おれにはわからん。

195 ここ「Well, it was damn nice of you to come in here and tell me about it」で、damnが入っていることで、いきなり妙にぞんざいな言い草になっている。そしてその後もそれが続く。既訳はそれをどれも出せていない。マーロウはその直前の「通用しなかった」で相手の正体に気がついた。その直後から言葉遣いが変わる。それは出すべき。

レノックスは二人がいたのを知っていた。その理由も知っていた。あいつがあの手紙を書いたのは、良心が咎めたからだ。おれをコケにして利用したので、いいやつ過ぎてそれじゃ心穏やかじゃなかったんだ。お札―五千ドル―を手紙に入れたのは、自分は大金を持っていて、おれが文無しなのを知っていたからだ。さらにちょっとさりげないヒントを入れておいた。おれが気づくかもしれない、気づかないかもしれないようなものだった¹⁹⁶。あいつはいつも正しいことをしたいくせに、なぜか結局別のことをしてしまうやつだった。おまえ、手紙を郵便局^{コレオ}に持っていったと言ったな。なんでホテル前の箱に投函しなかったんだ？」

「箱といいますと、セニョール？」

「郵便ポスト。スペイン語でカホン・カルテーロ、だっけ¹⁹⁷」

彼はニッコリした。「オタトクランはメキシコシティとはちがうですよ、セニョール。すごく原始的な場所です。オタトクランで街頭の郵便ポスト？ 何のためのものか、わかるヤツさえいません。だれも郵便の集荷になんかこない」

「そうか。それは流してくれ。おまえはセニョール・レノックスの部屋にコーヒーなんか持っていなかったな、セニョール・マイヨラノス。用心棒の横を通って部屋になんか入らなかった。だがアメリカ人二人は本当に入っていった。用心棒は当然、買収されていた。他の連中もな。アメリカーノの一人はレノックスを後ろから殴った。そしてモーゼル拳銃を取って、弾の一つを開いて銃弾を取り出すと、カートリッジを開いて銃芯を取りだし、そのカートリッジを銃身に戻した。その銃をレノックスのこめかみにあてて引き金を引いた。ひどい傷はできるが、死にはしない。レノックスは覆いをしてしっかり隠され、担架で運び出された。そしてアメリカの弁護士が来たら、レノックスは薬漬けにされて氷詰め¹⁹⁸にされ、男が棺桶を作ってる大工屋（カルピンテリーア）の暗い片隅に置かれたんだ。アメリカ人弁護士はそこでレノックスを見た。氷の冷たさで、深い昏睡状態、こめかみには血まみれの黒ずんだ傷がある。大いに死んでるように見えた。翌日、棺桶は石を詰め込まれて埋葬された。アメリカの弁護士は指紋と、何やらインチキな文書を持って帰った。こんなところでどうだい、セニョール・マイヨラノス？」

彼は肩をすくめた。「あり得なくはないですね、セニョール。お金と影響力は必要ですが。もしこのセニョール・メネンデスが、オタトクランの要人と密接なつながりがあればできるかもしれません市長裁判官、ホテル支配人などです」

「それも十分あり得る。オタトクランみたいな僻地の小さな町を選んだ理由もわかる」

196 村上春樹訳：「それが相手にどのように受け止められるか気づきもしないままに」。わからなかったのは、相手がそのヒントに気づくかどうかということであり、気づいたときにそれがどう解釈されるか、ということではない。他の二人はまあまあ訳。

197 田口訳「郵便配達¹⁹⁸の引き出し」と呼ばれているやつ」。マーロウはスペイン語で言うただけで、別にその言葉の成り立ちを問題にしている部分ではないので、変な逐語訳を添える必要はないと思う。

彼はちょっと微笑した。「ではセニョール・レノックスはまだ生きているかもしれない、ですね？」

「そうとも。自殺は自白を裏付けるための、何やら偽装としか考えられない。地区検察官だった弁護士をだませる程度にはもっともらしくなけりゃいけないが、露見したらいまの地区検察長官はどうしようもない立場に追い込まれる。このメネンデスってヤツは、自分で思ってるほどタフじゃないが、おれが余計なことに首をつっこんだら拳銃でぶんなぐる程度にはタフだ。だからあいつだって、それなりの理由がなきゃこんなことはしない。偽装がバレたら、メネンデスは国際的な醜聞のどまんなかにはまってしまうんだし。メキシコ人だって、アメリカ人に負けず劣らず警察の汚職は嫌いなんだ」

「それはすべて可能ではありますね、セニョール。それは私もよく知っています。しかしあなた、私がウソつきだとおっしゃいましたね。私がセニョール・レノックスがいる部屋に入って手紙を持ってきたんじゃないとおっしゃいましたね」

「おまえ、元々中にいただろう、小僧——その手紙を書いていた」

彼は手を挙げてサングラスを外した。目の色はだれにも変えられない。

「ギムレットには少々早すぎるかな」とそいつ。

[53]

メキシコシティの整形外科は見事な仕事ぶりだったが、それも当然か。メキシコの医師、技師、病院、画家、建築家はアメリカと遜色ない。ときには少し優れているくらい。銃弾発射の粉末硝酸検出用パラフィンテストを考案したのはメキシコの警官だ。テリーの顔を完璧にはできなかったが、かなりのことはやった。鼻まで変えて、少し骨を削ってもっと平らにして、北欧くさを消した。傷痕すべてを消すのは無理だったから、顔の反対側にも何本か別の傷をつけた。ナイフ傷はラテン諸国ではよく見かける。

「このところの神経までつないでくれたんだ」とあいつはかつて顔のひどい側だったほうに触れた。

「おれの推理はどこまで当たってた？」

「十分すぎるほど。細かいまちがいはあったが、どうでもいい部分だよ。急場の話で、一部はその場の即興だったし、ぼく自身も何が起こるかはつきりとはわからなかったんだ。やることを指示されてはつきりした足跡を残すように言われてね。メンディは、君宛の手紙はお気に召さなかったが、それだけはぼくも頑張った。あいつは君をちょっと見くびっていた¹⁹⁸。郵便ポストの下りは気づきもしなかったよ」

「だれがシルヴィアを殺したか知ってたのか？」

あいつは直接は答えなかった。「女性を殺人で突き出すのはずいぶんつらい——自分にとって、もっとも大した意味のない女でも¹⁹⁹」

「きついもんだな、世間ってのは²⁰⁰。ハーラン・ポッターは少しでも囁んでたのか？」

あいつはまたにっこりした。「それを人に悟らせるようなやつかい？ たぶん囁んでないだろう。たぶんぼくが死んでると思ってるだろう。そうじゃないとあいつに告げられるやつなんていない——あなたが話してないなら」

198 Undersold. 田口訳だけ「きみのことは彼も理解していたようだけど」。なぜそういう解釈になるのか不明。
undersell にはそういう意味はない。

199 even if she never meant much to you. Never だから、一度も、つまり最初に結婚した頃からどうでもいい相手だったということ。ここらへんから、テリーの生来の酷薄な人間性がむきだしになるので、まちがえたくないところだが、村上、田口訳は「もはや/もう」と、かつては大事だったようなニュアンスにしている。清水訳は端折っているおかげで、逆に正しい訳になっている。

200 It's a tough world. かなりあいまいな物言いなのでいろいろ解釈の余地はあるが、これはその直前の、アイリーンに対するあまりに冷酷な物言いを受けての発言と考えるのが妥当だと思う。つまりおまえのその言い方はあまりに冷酷だ、とぼかして言っている。清水訳は(当然)無視。村上は「世界は非情だ」で、原文どおりあいまいで彼がどう解釈しているのかは不明。田口は「この世で簡単なことなど何もないよ」で、その前のアイリーンを警察に突き出す話のことにしてしまい、ぼくはまちがいだと思う。

「あの人に話せることは胸にしまっておくよ²⁰¹。メンディは最近どうしてる—そもそも生きてる？」

「元気だよ。アカプルコで。ランディのおかげでうまく逃れた。でも警察ともめるのはいい顔をされない。メンディはあなたが思うほど悪い奴じゃない。心はある」

「ヘビにだってな」

「それじゃ、懸案のギムレットでも飲もうよ²⁰²」

おれは答えずたちあがり、金庫のところに行った。ノブをまわしてマディソンの肖像とコーヒーの匂いがする百ドル札五枚が載った封筒を取り出した。それをまとめて机に投げ出し、百ドル札五枚だけ取った。

「これはもらっとく。そのほとんどは経費と調査費に使った。マディソンの肖像は遊ばせてもらったよ。おまえに返そう」

それをあいつの目の前の机の縁に広げた。あいつはそれを見たが、触らなかった。

「あなたのものだよ。ぼくはたっぷり持ってる。だまってすべて流せばよかったのに」

「そうだろうとも。旦那を殺して逃げおおせたら、彼女もその後マシなことに手を出したかもしれないもんな²⁰³。もちろんあんな旦那なんてどうでもいいヤツだったものな。血と脳みそと感情を持ったただの人間でしかなかったんだよな、おまえにとっては²⁰⁴。あの旦那も何が起きたか知っていて、それを抱えて生きようとしてあんなに頑張ったのに。本を書く人だったんだ。名前くらい聞いたことあるんじゃないか」

あいつはゆっくり言った。「だからあ、ぼくだって自分のやったことはどうしようもなかったんだって。だれも死んでほしいなんて思ってなかったよ²⁰⁵。あのままあそこにいたら、ぼくは絶対ただ

201 What I'd tell him you could fold into a blade of grass. わかりにくい原文。ぼくも厳密にはわからない。みんな、何も言わないという意味に解釈しているし、AI 君も同意見なので、そういうことにしておく。

202 翻訳とは関係ないが、ここは重要な一節。マーロウは、テリーのくだらない小細工のおかげで結果的にウェイド夫が殺され、アイリーンが自殺するはめになったことですごく怒っていて、しかも彼がそのアイリーンなんかどうでもいいと言い放ったことで、さらに怒りのどす黒さが増している。ところがテリーは、これで謎解きは全部終わった、じゃあ飲みに行こうぜ、と平然と言ってのけて、本当に軽々しい口調。テリーのサイコパス的な面がここで完全にあらわになって、ここらでマーロウは完全に相手を見切る。

203 田口訳だけ「きつと改心して、さぞ立派な慈善家にでもなっていただろうよ」。原文: she might have gone on to better things. 「慈善家」にあたるものは一切ない。なぜそんな余計な加筆をしようと思ったんだ？この次の注で、田口だけこのところをきちんと嫌味で訳せているのを誉めているので、余計にこの変な勇み足が惜しい。

204 ここのところ、マーロウはすんだことだから忘れろというテリーにもすごく怒っていて、すべてのポイントについて「おまえはそう思ってるだろうけどふざけんな」と言いたいのだ。だから精一杯反語的な嫌味調で訳さなきゃいけない。村上訳はがんばって深読みするとそうも読めなくはないが、普通に読むとまるでマーロウがテリーの見方に賛成しているかのような訳。清水訳もほぼ同様。どうもここでのやりとりがわかっていないし、したがってマーロウが何に怒っているか理解できてないんじゃないか。田口訳は、その前のアイリーンについてのところで嫌味感を出せていて、たぶんわかっているのだろうし、少しマシ。

205 I didn't want anyone to get hurt. 三人とも「傷つけれなかった」と訳しているが、傷つくというと、特に最近ばかりにされてお気持ちが傷つきましたという意味で解釈されがちなので、全然ここにあわない。これは結果としてウェイド夫妻が死んだ話なので、死んでほしくなかったと訳すべき。

じゃすまなかった。あらゆる側面をそんなすぐには計算しきれないよ。恐くなって逃げたんだ。どうすりゃよかったって言うんだよ」

「さあね」

「彼女はキチガイの気があった。どのみちあの旦那を殺してたかもしれないだろ」

「そうだろうとも」

「そうカリカリするなよ。涼しくて静かなところに飲みに行こうぜ」

「いまはそんな暇はないな、セニョール・マヨラノス」

「前はかなり仲良しだったのになあ²⁰⁶」と彼は不幸そうに言った。

「そうだったか？ 忘れっぽいたちでね。あれは別の野郎二人だった、そんなふうに思えるんだ。おまえ、ずっとメキシコに？」

「ああもちろん。いまここにいるのも合法じゃないんだ²⁰⁷。もともとそうだったんだけどね。ソルトレークシティーで生まれたと言ったね。実はモントリオール生まれなんだ。もうしばらくしたらメキシコ国民になる。腕のいい弁護士がいればすむことだ。昔からメキシコは好きだった。ヴィクターズに約束のギムレットを飲みに行っても²⁰⁸、大したリスクにはならない」

「その金はおさめてくれ、セニョール・マヨラノス。あまりに血にまみれてる」

「貧乏人のくせに」

「おまえに何がわかる」

あいつは札を拾い上げて、細い指の間でのばし、気軽に内ポケットに収めた。茶色い肌だと見られる真っ白な歯で下唇を噛んだ。

「ティファナまで車で送ってくれた朝には、あれ以上のことは話せなかったんだ。警察に電話して通報するチャンスはあげたじゃないか」

「怒るのもばからしい。おまえはそういうヤツだってだけなんだ。長いこと、おまえのことがまるでわからなかった。ふるまいも性格も丁寧だけれど、どこか変な部分があった。自分なりに基準を持ってそれを遵守はしたけれど、でもそれは自分だけのものなんだ。あらゆる倫理や良心とはまったく関係ない。いいやつだったのは、いい天性をもって生まれたからだ。だがおまえは追い剥ぎやゴロツキとでも、正直な人々が相手のときと何も変わらず、幸福につきあえてしまうんだ。そのゴロツキがそ

206 "We were pretty good friends once," 村上訳だけ「我々はかつて心を通い合わせた」という金くぎ訳。ここらはテリーの言葉の軽さが重要なんだけど。

207 I'm not here legally even. 田口訳:「法的にはいまもここにはいない」完全なまちがいでないけれど、普通の文としては legally のかかるところをまちがえている。I'm not legally here ということ。つまりいまアメリカにいるのは密入国だということ。他の二人は正しく訳せてる。

208 細かいことだが、テリーはこの章でギムレットの話をするとき必ず *that gimlet* と *that* をつける。つまりあのお別れの手紙で約束した「あの」ギムレットということ。清水と村上はその符丁としてのニュアンスにまったく無頓着、田口は最初のときにはそれを無視、ここでは「あの」を入れてなんとかそれを出している。

こそこまともな英語をしゃべり、そこそこまともなテーブルマナーをしていればね。おまえは道徳的な敗北主義者なんだよ。戦争のせいかもしれないし、生まれつきそうだったのかもとも思うが」

「わかんないなあ。いやホント。借りを返そうとしてるのに、返させてくれないんだもの。実際に話した以上のことは絶対に話せなかったんだよ。君は承知しなかっただろうから」

「そんなすてきなことを言われたのは初めてだよ」

「ぼくの何かを気に入ってくれたのはありがたいよ。ぼくはひどい状況にはまった。たまたま、酷い状況に対処する方法を知ってるたぐいの連中が知り合いだった。そいつらはずっと昔、戦争で起きたことのせいでぼくに借りがあった。おそらく人生で、正しいことをネズミみたいにすばやくやった唯一のときだろう。そして、ぼくが必要としていたときに、あいつらは応えてくれた。それも無料で。この世で値札がついてないのはあなただけじゃないんだよ、マーロウ」

あいつは机越しに身を乗り出して、おれのタバコを一本奪い取った。濃い日焼けの下で、その顔に不均等な紅潮が見られた。それを背景に傷が浮かび上がった。彼が派手なガスカートリッジ式ライターをむき出しのままポケットから取り出し、タバコに火をつけるのを眺めた。あいつの香水が匂った。

「おまえはおれを大いに買ったとも、テリー。微笑にうなずきに手の振り方に、あちこちのバーで静かなドリンク何度かでな。楽しかったよ、そのときは。じゃあな、アミーゴ。さよならは言わない。そのせりふに意味があったときに、もう言ったもんな。悲しくて寂しくて、これで最後ってときに言ったからな」

「戻ってくるのが遅すぎたか。この整形手術は時間がかかるんだ」

「こっちがあぶり出すまで、そもそも戻るつもりもなかったくせに」

いきなりあいつの目に涙が光った。あいつは暗いサングラスを急いでまたかけた。

「それはわからなかった。腹は決めてなかったんだ。君には何も言うなと言われた。ぼくはとにかく腹が決まってなかった」

「どうでもいいよ。いつも代わりにやってくれるやつがだれかしらいるんだろ」

「ぼくは特殊部隊にいたんだぜ、相棒。ただのフワフワしたやつは採用されない。ぼくはひどい怪我をして、あのナチスの医者どものやったことも決して楽しくはなかった。それでどうにかしちまったんだ」

「何を今さら。テリー、おまえはいろんな意味でずいぶん優しいやつではあるよ。いいとか悪いとか言うんじゃない。これまでもそうだ。ただ、おまえはもうここにはいないんだ。とっくにいなくなっていたんだ。すてきな洋服だの香水だのはあっても、50ドルの売春婦並のエレガンスしかない」

「そんなのは全部お芝居でしかないんだよ」と彼はほとんど必死に言った。

「それをおもしろがってるんだろ、おまえは」

あいつの口が下がって苦笑いになった。そして雄弁でエネルギッシュなラテン風の肩すくめをやってみせた。

「そうだと。残ったのはお芝居だけ。他には何も残ってない。この中——」と彼はライターで胸を叩いた——「ここには何もないんだ。昔はあったんだよ、マーロウ。ずっと昔にはあったんだ。まあ——これで話はついたってわけか」

あいつは立ち上がった。おれは立ち上がった。細い手が差し出された。おれはそれを握った。

「じゃあな、セニョール・マヨラノス。お知り合いになれてよかったよ——ほんの一瞬であれ」

「さよなら」

彼はふりむいて、フロアを横切り出ていった。おれはドアが閉まるのを見つめた。模造大理石の廊下を足音が遠ざかるのを聞いていた。やがてそれはかすかになり、そして無音になった。それでも聞き続けた。何のために？ 急に立ち止まり、ふり返って戻ってきて、何かを言ってこの気分から救い出してほしいとでも思っていたのだろうか？ とにかく、あいつはそんなことはしなかった。あいつを見たのはそれが最後だった。

その後だれひとりとして会うことはなかった——ただし警察は除く。あいつらにさよならを言う方法はまだ発明されていない。

おしまい

訳者あとがき

1. はじめに

本書は Raymond Chandler, *The Long Goodbye* (1953) の全訳だ。底本としては Project Gutenberg Canada のフリーテキストを使用²⁰⁹。このフリーテキスト自体は、Balantine books の 1971 年版 (13 刷 1984) をもとにしている。

さて、本書はハードボイルドの古典的名作として名高く、ファンも多い。そのおかげもあって、翻訳はすでに三種類以上も存在している。古典的な清水俊二の訳、文学者の思い入れあふれる村上春樹の翻訳、ミステリ翻訳の名手とされる田口俊樹の翻訳。そこにいまさら何で山形ごときが、という感られる方もいるだろう。

が、この意地の悪い訳者は、この作品そのものにそんなに思い入れがあるわけではない。むしろ、まさに複数翻訳が存在するということが本書に対する興味の元だった。本書の最新の商業翻訳、田口俊樹訳『長い別れ』（創元推理文庫）で、杉江松恋は本書のある一節について三人の訳を挙げ、「まったくちがった印象を与える」と書いているのだ (p.592)。

それはすごい。同じ文でそんなに翻訳ごとに印象がちがうのであれば、まさか誤訳じゃないだろうし、ちょっと語り口がちがうくらいではすまないくらい、すさまじく翻訳方針がちがうのだろう。それは是非ともお手並み拝見！

だが……そこに挙げられていた事例を見ると、そうした文体の相違はあまり見られなかった。むしろ訳文の意味そのものがちがっている。

何これ。大丈夫かよ、これ。同じ文でこんなに意味がちがうの？ だれが正しいの？ あるいはよっぽど意味不明の解釈しにくい原文なの？ これはちょっと調べてみないと。自分でやってみて確認しないと。

そう思ったのが 2025 年 5 月 5 日のことだった。

そして時は流れて同年 5 月 31 日。翻訳チェックのレファレンス作成として始め、文脈確認でその前の部分もやらなきゃ、といろいろやっているうちに、全訳ができてしまった。が、それは無駄ではない。翻訳の目的はもう一つあって、ハードボイルドの名作とされる本書を熟読してみることだった。この作品は大学の頃に読んだが、まったく印象に残っていない。本当にそんな傑作だったのだろうか？ 翻訳を通じて熟読することで、この作品のすごさが如実にわかるはず、と思ったんだが……

いま、ぼくは頭をかいている。いったいこれ、どこが評価されているんだろうか？ 決してつまらない話ではないのは確か。ぼくも大いに楽しんだ。が、これがそんなにすごい名作かということ、どうなんだろうか。

というわけで、翻訳の話に入る前に、作品そのものの話をしよう。

209 <https://gutenberg.ca/ebooks/chandlerr-longgoodbye/chandlerr-longgoodbye-00-h.html>

2. 『長いお別れ』は……どこがすごいんだろう？

2.1. ネタバレ超注意のあらすじ

作品そのものについて詳しい話をするには、あらすじが必要だし、ハードボイルドミステリーということつまり、ネタバレが必要だということだ。特にぼくが腑に落ちなかったのはこのラストなので、どうしてもそれについて触れざるを得ない。そういうネタバレはいやだという人は、ここは飛ばすこと。

* * * * *

ときは1950年頃。ロサンゼルスのでやしない中年探偵フィリップ・マーロウは、ある年末に出来心で高級クラブ前の泥酔青年テリー・レノックスを助ける。ハイソな金持ち社会になじめず自暴自棄となっているテリーと、マーロウはなぜか仲良くなって度々飲みに行くようになる。ところがある朝、メキシコへの国外逃亡を手伝ってくれと言われる。妻が、顔を潰されて殺され濡れ衣を着せられそうなのだという。だが飛行場で、テリーは自分が妻を殺したと告白し、姿を消す。

戻ったマーロウは、殺人容疑者の逃亡幫助で即座に連行されるが、警察の強引な取り調べに怒って一切口を閉ざす。だが数日後に釈放される。テリーが逃亡先のメキシコの田舎町で、自分が妻を殺したと自白した遺書を遺して拳銃自殺したからだという。

その後、テリーからの手紙が届く。メキシコのホテルに監禁され、自白も強制によるものと匂わせるものだ。マーロウは、テリー無実を確信するが、どうしようもない。

その直後、出版人ハワード・スペンサーから依頼が入る。奇行が目立つベストセラー作家ロジャー・ウェイドを保護しつつ、未完の作品を仕上げさせろという。マーロウはあまりにとらえどころのない依頼を断るが、翌日ウェイドの異様に美しい妻アイリーンから、夫が失踪したので探してほしいという依頼が改めて入る。マーロウはわずかな手がかりをヒントに、ロジャーを見事に連れ戻すがロジャーは相変わらずの酒浸りの自己憐憫状態。そして夫に対するアイリーンの冷淡さにマーロウは次第に不信感を抱く。

ある日、銃声がしてロジャーが死亡。自殺と断定されるが、不審に思ったマーロウは、独自の調査結果をもってスペンサーと共にアイリーンに対峙。彼女の前夫は、実は戦時中に行方不明になったテリー・レノックスで、アイリーンは彼の存命を知っていたのだ。そしてロジャーの死をめぐる不審点をつきつけられた彼女は、実は夫がシルヴィアと浮気をしていて、泥酔してシルヴィアを殺し、それを苦に泥酔し自殺したのだと固執、マーロウを雇わせたのも、その真相をテリーから聞いた可能性を怖れたからだと語る。だがマーロウはそのストーリーの穴を指摘し、彼女のウソを暴く。翌日、アイリーンはシルヴィアとロジャー殺害を自白する遺書を遺して自殺する。マーロウはその遺書を盗み出して公表させ、テリーの無実を証明する。

だがマーロウは、以前受け取ったテリーの最後の手紙が気に入り、関係者にその不審点を問いただす。すると突然、その現場に居合わせたというホテルのフロント係が訪ね、そのときの様子を証言する。だがマーロウは、その説明の矛盾を突き、そいつが実は整形して生き延びたテリー・レノックスだと看破する。マーロウはこの一連の事件についてテリーを責め、仕方なかったと言い逃れようとするテリーに愛想をつかせて、未練を残しつつも縁を切る。

さてこういうあらすじなんだが……

2.2. ミステリーとしての「長いお別れ」

本書はハードボイルドミステリーの傑作とされる。だが、全訳してみて、ぼくはミステリーとしてのこの話がよくわからなかったと言わざるを得ない。

結局、シルヴィア・レノックスを殺したのはだれなのか？ アイリーンは自白して自殺した。でもその動機は謎だ。テリーとロジャーの二人ともシルヴィアに取られて悔しかったと自白にはある。でもオールズ刑事が指摘するように、夫の浮気はしばらく前から知っていたようだし、そもそも前から夫相手にはセックスレスだったみたいだし、離婚だってできるし、急に殺すというのはいささか解せない。さらに、テリー・レノックスは飛行機に乗る前に、自分が殺したと言っている。なぜ？

また殺しとは別に、シルヴィアの顔を潰したのはだれなの？ シルヴィアが自分でやったの？ 女には無理だと言われているよね？ では彼女の罪をごまかすためにテリーがやったの？ テリーはそんな残酷なことはしない、というのがマーロウの確信だったけれど、つまりその確信が最初っからまちがっていたってこと？ そもそも何のために潰すの？ 拳銃で殺したのがばれないように？ なぜばれちゃいけないの？

そしてロジャーは、妻が犯人だと知ってたから飲んだくれてたの？ アイリーンが殺し、ロジャーがそれを見たけれど何もせず、その後始末をテリーがやったけれどロジャーはそれを知らず、というその一連の状況はちょっと釈然としない。そしてアイリーンはロジャーが知ってたのを知ってたの？ その場合、何を知ってるかさえわからないマーロウまで口封じをしようとする周到さを持っているのに最もヤバい夫を一ヶ月も放置しておいたわけ？

田口訳『長い別れ』解説で、杉江松恋はチャンドラーが、すべてが解明される名探偵謎解きミステリーのうそくさを嫌っていたという。だから本書のミステリーがすっきり解明されないのは、まさにその狙い通りということなのかもしれない。

だがそれでホントにいいの？ だってそれだと、本書の全体に関わる大きな話がまったく成り立たなくなってしまうからだ。そしてその大きな話の最大のポイントは次の通り：

なんで最後でマーロウはテリー・レノックスにあんなに怒ってるの？

2.3. なぜマーロウはテリー・レノックスに愛想をつかすのか

最終章ずっとマーロウはテリーを糾弾している。そして、その緊迫感は比類がない。変装してきたテリーの正体が明かされるのは、あっと驚きだし、それが最終章の迫力を盛り上げているのはまちがいない。そしてテリーとの対決すべてにあふれる、マーロウの悲しみと怒りが痛切に感じられる、ような気が最初にさっと読んだときにはした。でも……

よく考えると、なんで？ 読めば読むほどぼくは、マーロウがなぜテリーをあんなに責めるのかわからないのだ。結局、テリーは何をしたの、そしてどうすればよかったの？

だって額面通りによむと、テリー自身は元妻が壮絶な殺人を犯したのを見て、ものすごい手間をかけてその罪をわざわざかぶってやった。それだけだ。コネをつかって自殺を偽装したのが何かいけな

いことなのか？ 自分が疑われそうだから逃げるのはよくて、アイリーンを意図的にかばって逃げるのは悪い、ということなのか？ そもそも自殺を偽装したことで真実追究を阻害したというのが悪いことなのか？

もちろん、その間接的な影響として、ロジャー・ウェイドは殺されてしまったし、アイリーンも自殺に追いやられた。そしてそれに対してテリーはやたらに冷淡で酷薄で、いささかの同情も哀悼心のかけらも見せず、すべて水に流せるつもりでいる。それは人間的にどうよとは思ひ、情にもろいマーロウがそれに怒るのはわかる。だがロジャーの死をテリーのせいにはできないだろう。彼女が予想外のサイコで連続殺人鬼だったなんて、テリーもそこまではわからないよ。だいたいそれを責めるマーロウだって、警察に任せずアイリーンを追求して自殺に追いやったことを刑事に責められて「反省してほしかっただけで、その後の彼女の行動は知ったことじゃない」とうそぶいている。テリー・レノックスだってそうでしょう？ さらに、あんた空港でテリーが妻殺害を告白しても、だまってそれをスルーしたよね。手をこまねいていたのはあんたも同じだろ？

そんなミステリーとしての謎解きにこだわるのがバカだ、という見方もあるだろう。前出の『長い別れ』解説で杉江松恋は、本書がもともと『アイドルヴァレー』という、閉鎖的な上流階級社会の風刺と批判を意図した小説として構想されていたと語る。当時の社会像、そこに蔓延する腐敗、不正、スキャンダルを怖れて真実/真犯人を隠蔽しようというエスタブリッシュメントに対し、多少なりとも筋を通そうとするフィリップ・マーロウの孤高のやせ我慢こそがこの作品の本質なのだ、という見方がある。つまり作品全編に蔓延する。金持ちズルいとかギャングとつるんでとか、大量生産はよくないとか社会のギャンブル合法化は不正だとか、そういうかなり青臭いお説教こそが本書の本質なのだ、というわけだ。

でもそれならば最後にテリーが復活する必要はまったくない。いまのままだと、この最後のところの対決は完全な蛇足になってしまう。これが効果を発揮するには、テリーに対するマーロウの糾弾が社会全体に対する糾弾と重ならなくてはいけないはず。マーロウがテリーに惹かれたのは、金持ち社会になじめず、何やら自分なりの一線を保っているかのように見えるから、でもある。彼との決別が説得力を持つには、実はそのテリーもマーロウが憤る現代社会の不正の一部でしかなかったという曝露がないとだめだろう。彼が、結局は腐敗した金持ち世界と同じかそれ以上にひどい存在だったというのが、もっとはっきり示される必要があるんじゃないか。ギャングと戦友で、そのコネを使って元妻をかばうために自分の逃亡と死を偽装した、というのだけではあまりに足りない。たとえば、アイリーンと共謀してそれぞれの伴侶を殺すよう計画してました、とでもいうのでないと、マーロウの行動は解せない。今のままだと、マーロウはテリーが無実だと証明しようとして、無実だと証明されました。よかったね、マーロウさん。そのうえ、実際には生きていました。それだけだ。むしろ喜んでいいのでは？

さて、ぼくが気がつくくらいだから、これまでこの作品を読んできた人で、そういう疑問を抱く人はそれなりにいるだろう。それについて何か仮説を闘わせるようなウェブサイトがたくさんありそうなものなんだが……まったく見あたらない。なぜ？ 実はチャンドラーのマニアの世界ではとくにそんな問題は解決されていて、コンセンサス解釈みたいなものがどこかにあるのか？ でもあるなら、それを得意げに解説するようなウェブサイトやYouTube 動画でもあるはずだと思うんだが。

ところが検索すると、だれもそんなことを気にしていないようだ。本書の魅力として出てくるのは「フィリップ・マーロウカッコいい」みたいな話ばかり。渋いハードボイルドの真骨頂が～みたいな

ふーん。だが……そこもまた、本書を精読してぼくがまったく予想外の不意打ちをくらったところなのだ。マーロウ、全然かっこよくないの。

2.4. フィリップ・マーロウ、ハードボイルド

日本でハードボイルドというと、トレンチコートを着た寡黙な探偵が、バーでマティーニでもギムレットでも飲みつつ、美女を相手にたまに思わせぶりの台詞を吐いてみせ、ニヒルに世の中を見据えつつ、でも実は少し情にもろく、いざというときにはギャングや悪者と丁々発止で渡り合いバシッと決める、といった雰囲気だ。「男は優しくなければ生きる資格がない」とかなんとか。

ところが、本書でフィリップ・マーロウについてまっさきに感じるのは、彼がやたらに饒舌であることだ。しかもその言うことがすべて、ひねっていて青臭い。あらゆる人のどんな質問にでも、いちいち嫌味で答えずにはいられないし、聞かれもしないのに青臭い社会批判を延々とあれこれ得意げに語ってみせる。そしてその青臭い理解に基づく見当違いの推理を得々と述べて何度もバカにされている。これは最初に拘置所に引っ立てられたときの、弁護士や検察官相手の答弁を見ればわかる。

そしてもちろん何よりも顕著なこととして、あらゆる形容がやたらに大げさだ。

日本にも、まさにそういうのがある。江戸っ子の啖呵切りみたいなやつだ。「死ね」と言わず「豆腐の角に頭ぶつけて死ね」と言う。「痛い目にあいたいのか」ではなく「ケツの穴から手え突っ込んで奥歯ガタガタ言わたる」。でかい袋を持っていたではなく「大黒さんの袋に布袋さんをおまけでくっつけたような代物を抱えてやがった」とか。女性の口が小さいと言わず「ごはん粒だって縦にしたらトーンと叩いてやらなきゃ入ってかないような口」と言ってみたり。車が速かったと言わず「地平線へと突進するそいつの車は赤方偏移が目視できた」とか。フィリップ・マーロウの各種の表現は、ほぼこれに類する代物だ。

村上春樹をはじめ、13章の冒頭で初めてアイリーン・ウェイドを見たときに、ブロンド女もいろいろと列挙するところに感心している人が多い。でも話の必然性はまったくなくて、非常に唐突。自分は女の経験が豊富だということを誇示して見せたいおっさんが、聞かれもしないのにあれこれ(八割は受け売りで)得意げに語っているようにぼくには見える。というか、まさにマーロウをそういう人間として印象づけるために、あの不自然な部分をチャンドラーは敢えて残しているんだと思う。

だから訳しているうちに、ぼくのフィリップ・マーロウのイメージは、ゴルゴ13やジェームズ・ボンドまがいのものから、「男はつらいよ」のフーテンの寅さんとか、時代劇でも本当に強い助さん角さんではなく、うっかり八兵衛みたいなものになってきた。まったく年甲斐もない、口先の強がりばかりで、本当にかっこ悪いヤツなんだけど、でもその年甲斐もないまぬけな青臭さが同時に愛すべきところでもあるという人物。それは別に悪いわけではないが、どうも世間的なハードボイルドやマーロウのイメージとはずいぶんちがうように思う。みんな、何を読んでいるんだろうか？

2.5 チャンドラーの文体：その目的意識とは

このように、ぼくは『長いお別れ』のストーリーにも人物造形にも特に心酔はしなかった。だが訳している中で非常に感銘を受けたことはある。それはチャンドラーのきわめて明確な書きぶりだ。そしてそれはぼくの最初の関心だった、翻訳ときわめて密接に関連している。

まず形容詞。チャンドラーはマーロウに、大仰な必要以上に凝ったいいまわしをさせている。その一方で、彼は徹底的に簡潔さを追求しているのだ。

たとえば第一章では、女の声が冷たく鋭利だったことをステンレスに例える。ふつうは「その声はステンレスのように冷たく鋭利だった」、あるいはもっと省略して「その声はステンレスのようだった」と書くだろう。だがチャンドラーは「その声はステンレスだった」と書く。「のような」といった余計な説明をあまりつけない。そして具体的なモノにたとえたら、それが何を意味するのか——ステンレスなら冷たいのか鋭いのか——という解説はいつさいない。それは、読者にちょっと負担を強いる。「声がステンレス？ どういうこと？ ああ比喩なんだね」と自分で判断しなくてはならない。

そして、彼はあらゆる文章を、意味がわからなくなる寸前まで徹底的に省略する。冒頭二段落目の文章を見よう。

肩にかけた青いミンクの前では、そのロールス・ロイスもほとんど普通の自動車にしか見えなくなるほどだった。完全に、ではない。何をもってしてもそれは無理。

この文章の最後のところ。「完全に、ではない」。完全に何なの？ その前に「ほとんど」とあるから、それに対応するんだな、ということは少し考えないとわからない。「何をもってしてもそれは無理だ」の「それ」って何だろう？ 「ロールス・ロイスが普通の車にしか見えなくなること」だ。原文はそんなことを説明しない。”Not quite. Nothing can.” これだけ。既訳はすべてこれがどういうことなのかを言葉を費やして説明する。でも原文はそんなことをしていない。省略できるものは省略する。読者はちょっと考えないといけない。その意味ではわかりにくくなる。でもチャンドラーははっきりと、わかりやすさより簡潔さを取る、という選択をしている。

さらに今の部分に、もう一つの特徴が出てくる。女が肩にかけているのはミンクの何だろうか？ 既訳はすべてここで「ミンクのストール」「ミンクの外套」と補っている。たぶんそうなんだろう。でも、原文はそんなものはない。それは言わなくても読者にはわかる、という判断もあるだろう。だがそれ以上に、マーロウはそれがミンクであることはわかっても、ストールなのか生の毛皮なのかコートなのか風呂敷なのかはわからないからだ。だからこそ彼はそれは書かない。本書では、マーロウが実際に聞きしただけのままだけのものをしか描写されないのだ。48章の冒頭で、彼は後ろからピストルで肩を殴られるが、自分の腕が麻痺した話しかしない。おかげで何が起きたか非常にわかりにくくなっている。でもそのピストルで殴られる現場をマーロウは見ている。だからそれは書かれないのだ。

この方針は、他のところでも徹底している。マーロウは他人について「彼は喜んだ」「彼は迷っていた」などとは書かない。相手の内面はマーロウにはわからないからだ。「嬉しそうな声をあげた」「目が泳いでどうすべきか決めかねているようだった」といった書き方をする。すべては相手の物理的な行動で示される。これはときに、上の簡潔さと相容れない。単純に「喜んだ」と書く方が圧倒的に短いものね。ときには、その書きぶりは不自然にすらなる。それでも彼は、内面描写を徹底的に避けて、観察できるものだけを描く。その意味で、チャンドラーはコーマック・マッカーシーとも非常に似ている。マッカーシーに大仰な形容詞を接ぎ木すればチャンドラーになるかもしれない。

そして、この描写はマーロウの観察眼を具現化したものでもある。さっき、マーロウは、大げさな比喩を使うと書いた。だがそれと同時に、彼はあらゆるところで非常に細かい。31章でスペンサーのホテルの部屋にやってきたとき、その部屋を彼はこう描写する。

彼はホテル西側の、すてきな広いスイートを取っていた。居間には、狭い鉄柵のはまったバルコニーへと開く背の高い窓があった。家具はキャンデー・ストライプの生地が張られ、大量の花をあしらったデザインのじゅうたんとあわせて古風な雰囲気醸し出していた。ただしドリンクを置けるようなものはすべて板ガラスがてっぺんに載り、灰皿があたりに19個もある。

この部分、話の流れには一切貢献していない。灰皿が19個とかあまりに細かいので、最初この後だれかがこの灰皿で殴り殺されて一つ足りなくなるとかいう伏線なのかと思ったほど。でも二度と登場しない。他のあらゆるところでもそうだ。それでも、マーロウはそれを観察し、灰皿の数を数えて、それを記憶したのだ。それは彼の探偵としての本能でもある。彼は他人の内面について憶測しない。見えるものだけを問題にし、それを詳細に描き出すことで自分と世界の関わりを創り出す。一見すると無駄な描写は、描かれる対象よりも、それを描いているマーロウについて物語っているのだ²¹⁰。

さらにその描写は、忠実にマーロウの視線の動きをたどる。冒頭を見てみよう。

初めて見かけたとき、テリー・レノックスは泥酔しており、それを乗せたロールス・ロイス・シルバーレイスは「ザ・ダンサーズ」のテラス外に停まっていた。

人間、その様子、車、その車の停車場所、その場所が所属するクラブ。彼の視野が連続的に広がっていく様子が一文で表現される²¹¹。ある意味で、それを読みながらぼくたちはフィリップ・マーロウになる。感情移入は最も卑しい読み方だとウラジミール・ナボーコフは述べた。でもここで移入されているのは感情ではなく、行動だ。

もちろん、ここ一ヶ所だけならこれは単なる偶然かもしれない。でも読み進むうちに、こうした方針がずっと貫徹されていることがわかる。つまりチャンドラーの文には、きわめてはっきりした目的意識がある。なぜこの文がそのように書かれねばならないか、という必然性があるのだ。そしてそれが全体に、引き締まった感じ、ストイックな感じをもたらしている。多くの人が「ハードボイルド」とって感じるのは、実はこの文章にこめられた目的意識だったりする。

3. 翻訳：原文の目的意識を生かす

ならば……翻訳もその目的意識に沿ったものであることが望ましい。いまの原文のこだわりを全部反映させようではないの。そしてそれは相当部分が簡単にできる。いま、チャンドラーの文がやっていることをいろいろ説明した。それを翻訳でもやればいい。

210 村上春樹はこの本の訳者解説で、何やら内面描写がないからマーロウの内面がわからない、という主張をしている。内面などそもそもあるのか、という行動主義心理学みたいな主張をする気はないが、ぼくは行動こそが人の「内面」を示すものであり、したがって本書でマーロウの「内面」は実に雄弁に描かれていると感じる。チャンドラーもそれを意図して本書をこの詳細な描写で満たしている。それが読み取れないのは、本質的なところでチャンドラーを理解していると言えるのだろうか？

211 実際の訳文では、これとはちがう文を使っている。この訳で「それを乗せた」のところで文章が切れる感じがいま一つ好きになれずもっとスムーズな連続感がほしかったから。

まずは修飾語から「のような」はなるべく削除しよう。意味内容をきちんと伝えられている限り、短い訳文が正義だ。そのためにはわかりやすさを多少犠牲にしてもかまわないが、論理的にそれが少しの考察だけで伝わるようにする必要はある。そして、具体的に見聞きできないことを文脈からの憶測で含めてはいけない。それが、チャンドラーに忠実な翻訳ということだ。これについては、ぼくは異論は認めない。

これは最初っからビシッとわかることではない。ぼくは翻訳をするとき、必ずしも作品を全部読んで十分に理解してから翻訳をしたりはしない。むしろ何も知らずに頭からとにかく訳すほうが多い。この作品もそうだった。そして訳しながら、だんだん各種の意図や仕掛けに気がつく。だから途中であわてて検索をかけて「のような」をなるべく消したりする。

ではこれに照らすと既訳はどうだろうか。

3.1. 既訳の評価

まずはじめに言っておくと、既訳のどれも、別にそれを読んでまったく別の話になっちゃってますというようなものではない。どれも何も問題なく読める。ストーリーもわかるし、登場人物もそれぞれの翻訳で問題なくキャラ立ちしている。

なぜかといえば、もちろん翻訳者たちがそれぞれ優秀だということがある。だがそれ以上に、原文のもつ、簡潔さと具体性へのこだわりのため、そもそもまちがえる余地があまりない点が大きい。ちょっと何かまちがいがあったところで、次の文章で次の具体性に引き戻されるから、大きくずれることはない。どの翻訳も 100 点満点の 80 点は上回り A はもらえる水準だ。

ただ、文芸翻訳というのは、その残りの 20 点のところにこだわる世界でもある。誤訳は論外だけれど、意味が取れるだけではダメ、というのがこの世界だ。

そして、いまぼくが上に書いたような、チャンドラーの文の目的意識に、既訳はどれほど敏感だろうか？ 残念ながら、どれもあまり。だれも「ステンレスの声」とはしてくれない。「彼女の声はステンレス・スチールのような冷たい声」になる。その他の部分も、あまりはっきりした簡潔さへの意志がない。

もちろん一ヶ所だけでは何とも言えない。単なるぼくの主観もあるかもしれない。もっと明確な KPI がないか？ ある。チャンドラーの文章、その目的意識において、最もポイントとなるのは簡潔さだ。そして簡潔さの最も単純な指標は、文字数だ。文字数が短いほど簡潔といえる。ではまずそれを見よう。各人の全体の翻訳字数は？ それを次表に示した。

表1: チャンドラー『長いお別れ』本文翻訳字数比較

訳者	清水俊二（1972）	村上春樹（2007）	田口俊樹（2022）	山形浩生（2025）
文字数	32 万字	41 万字	42 万字	31 万字

ここの既訳の字数は完全に厳密なものではなく、いくつかページをランダムに選んで文字数の平均をとり、ページ数をかけたもの。山形訳はファイルなので文字数を厳密に数えられるが、注を選び分けるのが面倒なのでこれも概算。だがだいたいの目安にはなる²¹²。

この数字を見た瞬間、まず清水から村上の翻訳に移ったときの三割増しの文字数増にはギョッとさせられる。なんで？ なぜこんなことになるの？

これは、清水がいろんな訳を端折っているのと、村上が余計なものをいろいろ足しているのがあわさって生じた結果だ。

清水の訳がいろいろ端折っていることはあちこちで指摘されている。面倒なところ、わかりにくいところは、清水訳では実に小気味よく削除される。ただそれは「豆腐の角に頭をぶつけて死ね」を「死んじまえ」にしました、という程度のものだ。豆腐を削除してしまっている、というのは事実。でもそれをものすごく問題にすべきかどうかは、ちょっと悩むところだ。

さらにそういうブロック削除以外にも、いたるところで文章を簡略化して書き換えている。たとえば第二章半ばのこんな部分。

ふつうはそうだ。世界がちがってくる。うすい色や静かな音になれなければならない。
いままでよく知っていた人間が見れない人間に見えてくる。会うのがいやにさえなって、
向こうからもきられる。（清水俊二訳）

たいがいね。ちがう世界になる。もっと淡い色合いの世界になるし、音もすべて静か
になる。再発の可能性もある。かつてよく知っていた相手がみんな、ちょっとばかり奇妙
に思えてくる。そのほとんどはもうお気に召さなくなるだろうし、その相手もあんたのこ
とをあまり気に入ってくれなくなるだろう。（山形浩生訳）

山形訳の138字に対して清水訳は91字。えらく短い。でもそのために清水は「再発の可能性もある」を飛ばしているし、その他の部分も完全にそのまま訳すのではなく、要約のような翻訳になっていることがわかる。彼の短さは、こういうやり方で実現されている。

さて通常、これはあまりほめられないやり方だ。原文を勝手に削除したり書き換えたりしちゃいけない。だが……翻訳は必ずしも、逐語的にこれがあるとかないとかいうことだけで評価できるものではない。どこまで意図的でどこまで怪我の功名なのかはわからないけれど、清水はそれにより訳文の短さ＝簡潔さを実現できてしまっている。つまり原文の細部を捨てることで、原文の目的意識を温存できている。

これに対して、村上と田口の訳は長い。三割増し。一つには、彼らは省略しないで訳しているからだ。だが省略しないためには、清水が省いたわかりにくい部分、一瞬考えないと意味のとりにくい部分を戻す必要がある。それに際し、村上はわかりにくい部分を往々にして勝手に自分で作ってしまっている。一方田口は、いろいろ親切なつもりでかなり長い余計な解説を付け加える。そして救われないことに、二人とももとの解釈がしばしばまちがっており、そのため説明にも苦勞してさらに長くなってしまふのだ。

212 清水俊二訳『長いお別れ』（1972）は2012年7月25日 Kindle 版、村上春樹訳『ザ・ロング・グッドバイ』（2007）は2016年1月25日 Kindle 版、田口俊樹訳『長い別れ』2022年4月28日創元推理文庫版を使用。

村上春樹は、チャンドラーに影響を受けたというが、不思議なことにこの作品が持つ簡潔さへのこだわりをまったく意識していない。だから長い訳文ができています。一方の田口は、簡潔な雰囲気を出そうという配慮はある。その手段として、彼は修飾節をたたみかけるように重ねる長い文をブツブツ切る。キビキビした印象は出る。だがそうするとそのそれぞれに「なのだ。それが」みたいなものをつけてつなぐ必要が出てくるので、逆に文字数は増える。それが影響して、村上よりさらに長い訳になっている。

そしていずれも、文字数が三割も増えたらどうしても間延びする。清水訳に比べて簡潔さでは劣る結果となる。

さらに村上はあちこちで原文の解釈をまちがえている。具体的な箇所は注で指摘してある。また不思議なことに、田口は村上のやったまちがいをあちこちでそのまま踏襲してしまっている。二人の人間が独立にやるとは思えないまちがえ方を、両者が一致してあちこちでやっているのはきわめて不思議だ。結果として半世紀前の清水俊二のほうが解釈が正しい部分がやたらにある。

二人が清水のように端折らず、全部訳したのはえらい。翻訳としては大きなプラスだ。だがやたらに長くなり、原文の簡潔さという大きな目的意識を犠牲にした上、誤訳部分がかえって増えているとなると、翻訳として改善されたといえるのかどうか。ぼくの評価では、清水俊二訳が50年たったいまも既存の訳の中では総合点で最も高い。ぼくの訳を『長いお別れ』という題にしたのは、それに敬意を表してのことだ。

3.2. 村上春樹訳の文学性？

さて田口訳『長い別れ』の解説で、ある部分の翻訳比較があると述べた。そしてそれがこの翻訳のきっかけとなったことも述べた。実はぼくが見て、そこで最も頭に疑問符が湧いたのが、村上春樹の訳だった。

そしてそこから翻訳を開始して、村上訳に不満がある話をブログに書いたところ、「文学作品としての評価軸もあるのでは。翻訳書のそれとまた別に」とのコメントがついた。Amazon レビューでも、村上訳の文学性を評価するものがちらほらある。

だが……村上春樹訳に本当に「文学性」があるのか？

多くの人は、なにやら漢文を使って格調高いとか人々の台詞が自然だとか文章が流麗とか、そういうことが文学だと思っている。ウィリアム・バロウズ育ちのぼくは全然そうは思わないのだけれど、まあそういう見方もあるだろう。だが村上春樹の訳文は、ぼくにはそうは思えない。あるにしても彼の訳文は往々にして、その「文学性」のために翻訳としての本道を犠牲にしているように思う。

それが出ているのが、比較されていた部分の翻訳だ。その原文をそのまま訳すと（＝山形訳だと）次のようになる。

彼女はゆっくりと耐えるようなため息をつき、静かに語った。「他に女がいるなんて珍しくもない。しょっちゅう起こることよ。でもそんなの致命的ってわけでもないでしょうに。お互い、話の方向がずれてるんじゃないかしら？ そもそも同じことについて話してるのかどうか」

文脈がわからないと、何のことやらわからないだろう。これはアイリーン・ウェイドの台詞。その夫、ロジャー・ウェイドの奇行が問題になっている。彼はいつも泥酔していて、発砲事件を起こしたばかり。でもマーロウは、アイリーンの夫に対する冷ややかさなどから、彼女を不審に思っている。だからこの直前の発言で、旦那の奇行は酒だけが原因じゃないよね、あなたはその事情を何か知っているよね、とほのめかす。それに対するアイリーンの答がこれだ。

さてアイリーンは何をしようとしているのか？ 実は彼女はその裏の事情を知っている。というのも彼女が重要な事件の犯人だからで、ロジャーはそれを（意識的にせよ無意識にせよ）知っており苦悩しているのだ。それがロジャーの飲酒の原因なのだ。でも彼女は話をはぐらかそうとする。ロジャーは浮気をしていて、その罪悪感が彼を飲酒に走らせるのだ、と匂わせようとしている。その一方で彼女は、マーロウがそんな誘導には引っかからないのもおおむね承知している。

そこで出てくるのがこのせりふだ。マーロウは、女がいるなんていう話は一言もしていない。それをアイリーンはいきなり「ロジャーに愛人がいるのがすべての原因なのではないんでしょう？ でもそんなのよくあるし、泥酔発砲する理由にはならないわよ」と、否定するふりをして議論の焦点をそっちに振ることで、話の方向をずらそうとしているのだ。そのうえで「あなた（マーロウ）は女の話をしてたんじゃないかもしれないけど」と言うことで、あからさまに話を誘導している印象を与えないように小細工をしてみせている。ほのめかしとはぐらかしが重なって、わかりにくいところではある。でも論理的に考えれば筋が通ったせりふで、いかにもチャンドラーらしい。

さてこれを、村上春樹はどう訳しているだろうか？

「ものごとの陰には常に女あり」と彼女は静かに言った。「ちらちらとほの見える、というところかしら。それはべつに宿命的な相手である必要はありません。でも、私たちの話のポイントはどうもすれ違っているみたいですね。それとも私たちは、まったく違うものごとについて話をしているのかしら」（村上春樹訳、2007）

「ものごとの陰には常に女あり」は、アイリーンがいきなり格言オヤジになってしまい面食らうが、百歩譲って許そう。ロジャーに愛人がいるのが原因だということをこの妙に格言めいた言い方で表現したとはいえる。が、その次の「ちらちらとほの見える、というところかしら」というのは何？ ロジャーには常にではなくてもたくさん愛人はいた、という話が、まったく意味不明のふわふわした表現になっている。さらに村上春樹は原文の fatal の意味をまちがえている。ファムファタルという表現がカッコいいと思ってそれに引きずられたんだらうが、英語ではこの fatal という単語を「宿命の」という意味ではほぼ使わない。致命的な、という意味だ。ここではロジャーの自滅的な行動のことだ。それを村上はまったく歪めて、その愛人が宿命の女だ、という話にしている。宿命の女だったらどうなの？ まったく文脈的にも通らない。

ここから見えるのは、村上がチャンドラーの文の目的意識をまったく捕らえ損ねていることだ。簡潔だけれどちょっとわかりにくい、でも論理的に意味が取っている文章を、村上は理解し損ねて本質的にわからない曖昧さだと思い込んでいて、だから自分がかわりに勝手に曖昧なふわふわしたものを創作してぶちこんでいいのだと思っている。

村上春樹はしばしば、チャンドラーが自分に大きな影響を与えたと語る。だが本書の翻訳を見るとその「影響」というのはむしろ誤解に基づくのではないかと思えてくる。村上春樹作品ではしばしば漠然とした不満を抱えた人々が、何やら思わせぶりな符丁で、モノローグとも対話ともつかないものを交わす。それはチャンドラーっぽく見えるけれど、実はちがう。この引用箇所は、マーロウとアイリーンの、お互いに何を知っているとお互いに言わずに相手に探りを入れ、ミスリードをし、偽装

しようとするおっかない心理戦で、きわめて具体的で明確な戦術目的を持つ。だがその論理的な攻防を読み取れずに、ほわんとした思わせぶりな符丁の連続だと思っているのが村上訳だし、彼の小説にもその表面的な形式だけを再現したような部分が見られる。むろん、影響とは誤解も含むものだし、それによって村上春樹作品の価値が落ちるわけではない。一時、誤読だの誤配だのによる新しい展開がもてはやされたことがあったし、その一環としてむしろ高く評価すべきことなのかもしれない。でも翻訳では決してほめられたことではない。が閑話休題。

そしてそれに続く「でも、私たちの話のポイントはどうもすれ違っているみたいですね。それとも私たちは、まったく違うものごとについて話をしているのかしら」の奇妙な直訳くさはずいぶん違和感がある。ここに限らず、村上訳には非常に機械的なかたくりしい訳のままになっているところが多々ある。村上春樹はインタビューなどで、それが意図的なものであり、原文の英語っぽさを残すために敢えて逐語の直訳調にしているのだ、と語る。それはそれで一つの方針だろうが、それはむしろ村上の自己満足的なこだわりであって、作品の意図に忠実と言えるのかは、ぼくは疑問だ。

そしてこれは山形の偏見とは限らない。あるハルキストのブログ²¹³で何力所か清水訳と村上訳を比較しているものがある。おもしろいことに、そのブロガーは正直な人であり、清水訳のほうが随所で優れていることを認めざるを得ない。ハルキストですらそう思うのだ。

その人は、それを認めつつもなぜか村上春樹のほうが「高い文学性を付与された作品になった」という結論にまとめていた。当人が村上主義者を名乗っていることだから気持はわかる。あと、彼は清水の訳文に対して村上の訳文のほうがいろいろ加わっているのを見て、「ああこれは村上が文学的な処理としていろいろ描写を追加したんだな、よって文学性が高い」と判断したらしいんだが、ちがうんですよ。それはすでに述べた通り、清水訳のほうがいろいろ端折ってるだけで、村上のほうが原文ママなんですよー。

まあいずれにしても、何をもって文学的とするかはその人次第だ。ただぼくはこのチャンドラーの訳に関する限り、村上春樹が新しくオリジナルな文章を作り出せているとは思わない。つまり「文学性」を付与できているとは思わない。チャンドラーの文章が持つ目的意識にほぼ逆行する思わせぶりの曖昧さと、逐語訳的な生硬な訳文との組み合わせ、そして簡潔さへの配慮の欠如——では、これら以外の部分に存在する「文学性」というのはいったい何なのだろうか？

3.3. 口調とその変化

もう一つ、既訳を読んでいてぼくがずっとひっかかったのは、人々の話し方だ。

すでに述べた通り、本書でのマーロウはやたらに饒舌だ。そして人によって話し方を変える。これは当然のことだ。ぼくたちだって日常生活で、相手によって話し方を変える。知り合いには気安いため口を叩くし、初対面の人には普通はまず敬語で始める。でも堅苦しい関係がだんだんうちとければその口ぶりも変わるだろう。

そしてえらい人は、必ずしもえらそうな口調ではしゃべらない。本当にえらい人ほど、本性はともかく口ぶりはていねいで、あたりが柔らかなのはみんな知っていることだ。

当然、人々の話し方はその文脈でも変わる。普通に話しているときから、怒れば口調がぞんざいになる。こいつバカだな、と思ったらそれなりの口調になるし、話の途中でこいつと距離をおいたほうがいいと思ったら、距離をおいた改まった話し方になる。そして嫌味をいうときにはバカ丁寧になったり余計な間投詞がついたりする。特に本書でマーロウをはじめあらゆる人が、皮肉と嫌味と反語をやたらに使う。それをきちんと読み取り、訳し分けないと話そのものもわからなくなってくる。

213 村上主義者の雑記帳：[チャンドラーの代表作品『The Long Goodbye』：村上春樹と清水俊二の翻訳比較](https://ameblo.jp/cooper-brain/entry-12785380737.html)
<https://ameblo.jp/cooper-brain/entry-12785380737.html>

ところが既訳はどれも、人々の話し方をほとんど変えない。マーロウはほとんどあらゆる場面であらゆる相手に対して同じ口調でしゃべる。拘置所にぶちこまれているときに面会にきた弁護士に、彼はいきなりため口でしゃべる。そしてその弁護士もいきなり上から目線のえらそうなしゃべり方だ。自分のところに相談にきた依頼人候補にもいきなりため口。酒場で初対面の女性に声をかけるときもため口。そして最後で彼女とベッドインするときにもほとんど口調が変わらない。

そうした口調の変化、特に皮肉や嫌味がどんな誤訳、誤解につながっているかは注を参照してほしい。そこにも書いたけれど、それが特に顕著なのは、リンダ・ロリングとの一連のやりとりだ。マーロウにとって、彼女の位置づけは一つの章/会話の中でもコロコロ変わる。それを敏感にとらえないと、あまりいい翻訳にはならない。そして、その口調を匂わせるものは、原文にきちんと入っている。Aw と入ったり、それまで普通だったやりとりに *damn* が入ったりするだけでその台詞のニュアンスは変わる。山形訳ではそういうニュアンスの変化をなるべく強めに出したつもりではある。

4. おわりに

山形の翻訳はもちろん、あらゆる部分をきちんと訳した完全訳だ。そして圧倒的に短い。村上や田口訳より短いのは当然だが、いろいろ端折った清水俊二の訳文よりも短くなったのは、われながら驚いた。意味を正確に理解できているので、余計な説明やこじつけた弁明をつける必要がないのはこの短さに大きく貢献しているし、最初の頃から訳文の目的意識に配慮しつつ訳文を作り、簡潔さ＝短さには気をつけていたので、その翻訳方針が明確な差につながったということだ。そして注を見てもらえばわかるとおり、随所で既訳のまちがいを修正できているし、皮肉や嫌味などニュアンスが明確になっていなかったところも既訳より明確に出せていると自負している。結果として、既訳のどれよりもよい訳にしあげたつもりだ。というか、そう思わなかったら全部訳し直したりしないよ。最初は2章くらいで「おお、XX 訳はさすがだね」と思って終わりにできるつもりでいた。それが次から次へといろいろ出てくるもので、どんどん直したくなって全部やってしまった次第。

だがもちろん、それをどう思うかは読者のみなさん次第。

というわけで、翻訳開始の5月5日から月内に全訳あげました。どんなもんだい。とはいえ最初にブログでアナウンスしたら、みんな楽しみにしているとかなんとか言っていたけれど、でも実際に読んだりしないんだよね。当分宣伝もしないので、最後まで読んだ人はメールでもください。あと何かまちがいか誤変換に気づいたらご指摘くださいな。では。

2025 年 6 月 2 日 オスロにて
山形浩生 (hiyoril3@alum.mit.edu)